

B01691
2000
HG

イスラエルの政治文化とシチズンシップ

筑波大学 学位請求論文

寄	贈
奥山真知氏	平成 年 月 日

常磐大学人間科学部助教授

奥 山 真 知

01003532

目次

はじめに	5
第一章 イスラエルの政治文化の分析への視点	7
第一節 国民国家の四類型とイスラエル国家の特徴	7
第二節 シオニズムイデオロギーとイスラエル	9
第三節 先行研究の成果と残された課題	14
第四節 本研究の基本視角	27
第二章 イスラエルのシチズンシップにみられる二重基準	31
第一節 国民国家、グローバリゼーション、シチズンシップ	31
1 国民国家の変容	31
2 国家と「外国人」という視点	33
第二節 多文化主義、同化主義、相互隔離主義	35
第三節 イスラエルと「一民族一国家」イデオロギー	39
1 イスラエル建国宣言	40
2 帰還法	43
3 不在者財産法	43
4 クネセツ法	45
5 市民権法	47
6 人間の尊厳と自由に関する法	50
第四節 法の運用とイスラエル「国民」のシチズンシップ	53
1 はじめに——オスロ合意の評価	53
2 居住権の否定	55
3 国家と宗教	64
第五節 「国民国家」の形成がうみだす「外国人」	71
第三章 記憶とアイデンティティ——「シチズンシップの歪み」を支える意識	73
はじめに	73
第一節 インフォーマントの特徴と分析の視角	73
第二節 「ポスト・シオニズム」の状況下におけるシオニストの三類型——「伝統的シオニスト」・「ポスト・シオニスト」・「ネオ・シオニスト」	75

1 「伝統的シオニスト」	75
2 「ポスト・シオニスト」	77
3 「ネオ・シオニスト」	78
第三節 「伝統的シオニスト」・「ポスト・シオニスト」・「ネオ・シオニスト」の意味世界	79
1 「ユダヤ民主国家」への評価	80
2 民族と国家	87
3 アイデンティティ	88
4 反ユダヤ主義の記憶	95
5 移住の契機	98
6 パレスチナ人の帰還の権利と政治的展望	99
第四節 シオニストの行方	102
第四章 人口・教育・政治——「シチズンシップの歪み」を支える構造	106
第一節 人口動態の変化にみられる「緊張関係」	106
1 マイノリティからマジョリティへ	106
2 人口比の「拮抗」	110
3 マジョリティからマイノリティへ？	112
第二節 「ミズラヒム」の政治的帰結	114
1 「ミズラヒム」の自己認識	114
2 エスニシティと社会的格差	119
3 現体制への異議申し立ての行方	125
第三節 社会・民族教育と国家による記憶のコントロール	131
はじめに	131
1 学校教育の種類とカリキュラムの特徴	131
2 教科書の記述にみられるイスラエル教育の特徴	135
第四節 様々な政党と相互連関	150
1 主要政党の基本的性格——「左派」政党の変遷	150
2 「左派」と「右派」を分けるものとつなぐもの	158
第五章 結論	165
主要参考文献	169

図表一覧

第一章

表1-2-1 キブツの数、人口、対ユダヤ人口比、の推移（1961年以降）	12
--------------------------------------	----

第二章 イスラエルのシチズンシップにみられる二重基準

表2-3-1 1947-48 戦争前後期のアラブ人村の推定数	40
表2-4-1 イスラエル（パレスチナ）に建設されたユダヤ人入植地	56-57
表2-4-2 エルサレムのパレスチナ人からのIDカード没収の数：1994-1998年	59-60
表2-4-3 東エルサレムに住むパレスチナ人の居住権の取り消し	60
表2-4-4 1987年以降ウエストバンク及び東エルサレムでの破壊された家屋の数	62

第四章 人口・教育・政党——「シチズンシップの歪み」を支える構造

表4-1-1 イスラエル建国前のユダヤ移民の総数の推移	107
表4-1-2 19世紀-20世紀初頭のヨーロッパのユダヤ人の分布	107
表4-1-3 出生地と移住時期別にみた移民	109
表4-1-4 世界のパレスチナ人の分布	112
表4-2-1 エスニック集団別にみた北アフリカ出身者に関する否定的ステレオタイプ	115
図4-2-1 「ミズラヒム」移民の自己確認の回路	118
表4-2-2 歴代首相の出生地と移住時期	119
表4-2-3 政治部門の職級別にみたエリートとエスニック集団の分布	120
表4-2-4 移住時期別にみた各部門ごとのエリートの割合	121
表4-2-5 出生地域別にみた各部門ごとのエリートの割合	121
表4-2-6 エスニック集団別にみた最終学歴（1997年）	124
表4-2-7 職種とエスニック集団と移住時期との関連（1996年）	124
表4-2-8 ユダヤ系エスニック政党と総選挙での各得票率	129
表4-3-1 ユダヤ系イスラエル人の学校のタイプ別にみた生徒数および学校の割合	132
表4-3-2 小学校時間割配分	133
表4-3-3 日本の小学校の時間割配分	133
表4-3-4 イスラエルの中学校の週あたり時間割配分	134-135
表4-3-5 日本の中学校の時間割配分	135
表4-4-1 1981-96年までの、国会選挙における主要政党とその得票数および得票率	152

図4-4-1 「左派」勢力の系譜	153
図4-4-2 イスラエル共産党の系譜	156
図4-4-3 「右派」勢力の系譜	157
図4-4-4 政党と政治的スペクトル	159
図4-4-5 支持階層からみた諸政党の位置	160
図4-4-6 イデオロギースケール上でみた諸政党の位置	160
表4-4-2 1999年総選挙結果	161

はじめに

本研究はイスラエルの政治文化を批判的に検討し、そのことを通して、イスラエル社会および国家が陥っている問題性をより普遍的な国家と民主主義という文脈の中で分析しようとする試みである。

そもそも筆者がこうした問題関心を抱いた原点は1981年に遡る。この年の6月イスラエル空軍は、当時建設中だったイラクの原子炉施設を急襲し爆撃したが、イスラエル政府はこの行為を「イスラエルにとつての潜在的脅威に対する防衛」であるといって正当化した。さらにこの行為はイスラエルの多数の人々によって支持され、1977年から首相をつとめていたベギンの支持率はこの「事件」以後上昇し、同月末行われた第十回国会選挙ではベギンが率いるリクード党は37.1%の支持率を得て二期目のベギン政権を誕生させる遠因ともなったのである。当時現地にいた筆者はイスラエル空軍によるイラクの原子炉の爆撃は主権の侵害ではないのかと素朴に考え、その疑問をイスラエルの様々な人々に投げかけてみたが、返ってくる答えは筆者の感覚とは大きく隔たるものであった。

もっとも、イスラエルとパレスチナの関係のなかで展開されてきた強硬な外交政策や軍事的行為はそれまでもすでにいくつもの例があり、この軍事的行為が突出して珍しい事例ではないともいえるかもしれない。しかし、それまでになされてきた先例は戦争という特殊事情や、テロに対する報復措置という一定の「正当性」（「大義」）を一応認めうるのに対し、他国の一施設を、理由は何であれ、一方的に急襲し破壊するという行為は、筆者にはどうしても正当化する論理が見つからなかった。それ以来、イスラエルという国家の政治文化の性質とそれを受容しているユダヤ人の人々の政治意識に対し、それをなりたたせている構造と論理のメカニズムをどう分析ができるのかが主要な関心となった。

本研究では、イスラエルの政治文化の性質を基本的に「シチズンシップの歪み」と規定する。シチズンシップという意味は、一般に市民権、公民権、市民（国民）の権利などと訳されるが、ここでの「シチズンシップの歪み」とは、第一に、形式的なこれらの諸権利と実質的諸権利とのずれとして、第二に、市民や国民の政治的・感受性・批判意識の「歪み」として考えてみたい。

構成としては、まずはじめに第一章でこれまでの内外のイスラエル研究を概観し、先行研究に対する本研究の位置づけを明らかにする。同時にシオニズムの変容をめぐる議論についてもここで概観する。第二章では、本研究の理論的問題関心である国家と民主主義の議論の中でイスラエルの社会およびシオニズムイデオロギーに内在する「シチズンシップの歪み」を具体的に検討する。第三章と第四章では「シチズンシップの歪み」を支える人々の意識と構造に焦点をあてる。第三章では、記憶とア

イデンティティという観点から人々の政治意識を分析し、第四章では、イスラエルの社会を特徴づける、人口構成、教育、政治勢力を上記の問題との関連で整理する。最後に第五章で、第四章までの議論をふまえ国家のイデオロギーとそれを支える人々の意識の相互関連のメカニズムを明らかにする。さらに、シオニズムは変容しつつも終焉してはいないということを指摘する。

第一章

第一節 国民国家の四類型とイスラエル国家の特徴

イスラエルの政治文化を検討していくにあたり、まず確認しておくべき問題は、イスラエルという国家の成り立ちの「特異性」である。近代国家形成の歴史上イスラエルはたぐい希な経緯と背景をもって成立した。筆者は、近代以降の国家形成を以下の四類型に分類したうえで、イスラエルの国家形成をひとまず「特殊な移民国家」として位置づけるものである。

まず第一に、一定の領域性を基盤にして、主たる ネイション^{※1} が主導的な役割をはたしながら統合がなされていった「国民国家型」の統合がある。さらにこれは、統合の軸が①啓蒙主義理念による場合と②「民族性」による場合とにわけられるが、前者の典型的な例としてはフランスを、後者の典型的な例としてはドイツを考えてよいであろう。ただしヨーロッパの多くの国家は「国家 (state) がまず形成され、次にネイションがそれに実態を与えるものとして後から形成された」^{※2} ともいえるので、常にまずネイションの意識が先に存在するとはいえない。しかしこうした国家も、この第一の「国民国家型」の統合に分類しておくのが妥当である。それは、こういう場合でも、国王や特権身分集団に対抗する集団としてのネイションが存在し、このネイションが国民国家を形成する主導的役割を果たしたからである。第二に、先住民の存在はあったものの、あとから流入してきた移民によって「新しい」国家が形成された「移民国家型」の統合がある。アメリカ合衆国やオーストラリアなどがこうした例である。第三は、既存の国家から特定の民族集団が分離独立して形成される「分離主義的」な統合の原理によってできた国家である。今日の世界からこうした事例を挙げるならば、旧ソ連の分裂によって生まれた各共和国や、チェコスロバキアが「チェコ」と「スロバキア」に分離したり、旧ユーゴスラビアの分裂によって生まれた国々などがこれにあたる。このタイプは、統合の担い手である当該ネイションにとっては、民族自決として認識され正当化されることになる。そして第四に、植民地から独立して国家および国民が形成・統合されたような「独立型」国家統合を考えることができる。第二次大戦後独立した第三世界の多くの国々はこのタイプになる。以上の四つの類型は、常に単独の形であらわれるわけではなく、複数を組み合わせた形となることもある。

いうまでもなく、近代国家としての国家の形成が、この四つの類型ですべてを類型化できるという

^{※1} ここでは、国家の形成をめざす、何らかの連帯感や帰属意識をもつ人々の集合という意味で用いる。

^{※2} 阿部斉「序論」日本政治学会編、『国民国家の形成と政治文化』、岩波書店、1978年、iv頁。

わけではないし、別の類型化もなりたつであろう。また、「国民国家」としてとらえることに無理があるような王政や君主制国家も存在しており、それらはここでの類型化の対象からははずしている。しかしここで重要なのは、そうした国家をも含め、国家というものが、そもそも歴史の中で人為的に構成された政治的単位であり、国境がそこで仕切られなければならない必然性はなく、国民という範疇を先験的に規定することもできないということである。しかし、というよりもそうであるからこそ、それぞれの国家はみずからの国家の正当性を内外にむけて主張しており、また国際社会の承認を得るためにはそれを主張しなければならないともいえる。さらに、国境をめぐる攻防に国家はその正当性の論理を使い、国家の構成員についての要件を一定の規準に従って規定するのである。こうして、国家の正当性、言い換えれば、安定的な国家の維持と、領土・国民・主権に対する認知は、不可分の関係にあることになる。これらに対する認知が得られない限り、安定的な国家の維持はなりたないからである。

近代の国家形成の諸類型をこのように整理した上で、ここではイスラエルを「特殊な移民国家」と規定するわけであるが、そのことには次のような意味が含まれる。第一に、他の代表的な移民国家であるアメリカ合衆国やオーストラリアなどと異なり、その移民集団の移住という行為そのものが、「ユダヤ人であること」に対する強い特定の「民族的」アイデンティティにうらうちされていることである。19世紀末以降一世紀以上にわたって、数百万人のユダヤ人を世界各地からパレスチナあるいはイスラエルへと向かわせ続けてきた⁸³ 力、人々のこの移動のベクトルに大きな役割を果たしてきたのは、それぞれの移民に内面化された「集合的・民族的な記憶」と「集合的・民族的アイデンティティ」である。この「集合的・民族的な記憶とアイデンティティ」については、第三章で再び論ずるが、イスラエル（パレスチナ）に移住した「移民」ユダヤ人は、何らかの意味でユダヤ人としての意識を有していたからこそこの移住を決意したといえる。言い換えれば、パレスチナ（イスラエル）への移住は、「ユダヤ人アイデンティティ」の表明であったことを再度確認しておきたい。他の移民集団の場合、民族的アイデンティティを潜在的には有していたとしても、それ自体が特定の地域への「移住」という行為を決定づけるのではない。民族的アイデンティティが顕在化するとすれば、それは移住後に、移住先での社会や国家との接触のなかから生じるのと対照的である。

第二に、「国民国家」の形成の上で不可欠な要件である領土的基盤を欠いていたことである。イスラエルの建国の意味は、特定のネイション、この場合はユダヤ民族という民族性を基盤にし、それぞれが居住していた地域や国家から「分離・独立」して、新たな領域空間にユダヤ人のための「民

⁸³ 1948年のイスラエルの建国以降では、270万人の移民がイスラエルに移住した。Israel Ministry of Foreign Affairs, *Israel at 50*, <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>

族的郷土」(ナショナル・ホーム)²⁸⁴をつくりあげることであった。このことは、世界史のなかで、民族的な「アイデンティティの領土化」²⁸⁵を実現した初めての例であると考えることができる。ここで注目しなければならないのは、ある一定の領域が特定の民族のための領域であることが主張され、それが国際社会で承認された²⁸⁶ことである。領土、国民、主権の3つの要素は、当該国家がその正当性を内外から獲得するための必要条件であることは先に述べたが、イスラエルは、領土という基盤を欠いていたにも関わらず、特定の民族的アイデンティティをもって外部から流入してきた人々によって領土、国民、主権に対する主張と規定がなされることになった。これを、イスラエルという国家形成の根本に付随する「正当性の不確かさ」とここでおさえておくことにする。

第二節 シオニズムイデオロギーとイスラエル

さて、このイスラエル国家をうみだす上で大きな役割を果たしたのが、十九世紀末にヨーロッパに起こったシオニズム運動である。イスラエルの建国はこのシオニズム運動の産物でもある。ただし、一口にシオニズムやシオニズムイデオロギーといってもパレスチナへのユダヤ人国家の建設をめぐってはシオニスト内に様々な意見の対立や潮流があり、労働シオニズム、社会主義シオニズム、修正シオニズム、実践主義シオニズム、政治主義シオニズム、精神的シオニズムなどの様々な枕詞に対応した立場があり、一枚岩的な運動ではなかったことはよく知られているところである。シオニズムを総体として理解し、歴史的に「評価」するにはこれらの論争をさらに内在的に検討する必要があるが、それはここでの課題を越えるものである。ここでは本研究の中心的課題であるイスラエルの政治文化とのかかわりでのみ検討を加えることとする。また、超正統派と呼ばれるユダヤ教徒の人々は、政治的な手段によってユダヤ人国家をつくらうとする考え方にそもそも反対の立場をとったことや、ヨーロッパの同化したユダヤ人にとっては、政治的シオニズムは「寝た子を起こす」イデオロギーとして批判の対象であったことなどをみると、シオニズム運動は、当時のヨーロッパのユダヤ人から全面的

²⁸⁴ バルフォア宣言のなかでは次のように述べられている。「英国王政府は、ユダヤ民族(Jewish People)のための民族的郷土(a national home)をパレスチナに建設することに好意的であり(view with favour)、この目的の達成のために最大限の努力を惜しまないであろう。同時に、パレスチナや他の国における既存の非ユダヤ人社会(non-Jewish communities)の、市民的、宗教的諸権利の不利益になることは、何ものもなされないということを、明確に認識するものである。・・・」

²⁸⁵ Robin Cohen, *Global Diasporas*, University College London Press, London, 1997, p.6.

²⁸⁶ 1947年の国連総会での「パレスチナ分割案」の採択。もっともこの採択をもって「国際社会」の承認が得られたといえるかどうかは評価が分かれるところである。決議の票数が、賛成33票、反対13票、棄権10票という内訳であることや、当時の国連加盟国の数がまだ少ないことを考えると、これは非常に限定された承認であるとみた方がよい。さらに、この分割案でのイスラエルの「境界」やエルサレムの位置づけ(総会が決議したパレスチナ分割案では、エルサレムおよびその周辺地区は国連の管理下におかれるはずであった。)が現状と異なることにも注意が必要である。

に支持を得た運動ではなかったことも確認しておきたい。

しかし、様々な見解の相違があったとはいえ、シオニズム運動はお互いに共棲的關係にあり、立場は違っても結果的には相互補完しあう關係にあったとみるべきである。また、政治的シオニズム運動は世俗的運動であり、言い換えれば反宗教的運動であって、宗教勢力とは基本的に対立するものであったにもかかわらず、これも結果としては両者がお互いに利用し、される關係にあったこともあえて強調しておきたい。

こうした複雑に錯綜するシオニズムの諸潮流と運動のなかでイスラエル建国を導く主導権を握ったのは、実践主義シオニズム、政治主義シオニズム、労働シオニズム、社会主義シオニズムなどの立場である。これらの立場は相互に対立したり緊張關係を保ちながらも、実践主義シオニズムは入植活動を実践することでパレスチナにユダヤ人社会の基盤をつくり、政治主義シオニズムはシオニストの入植活動に対するヨーロッパ諸列強やトルコの支持をとりつけまたユダヤ人の政治的組織化をはかることでイスラエル建国を準備した。実践主義シオニズムや労働シオニズムおよび社会主義シオニズム運動を具体的に示す例は、シオニズム運動の初期からパレスチナですすめられたキブツ²⁷やモシャブ²⁸などの入植地建設にみることができるが、キブツやモシャブはその人口規模の小ささにもかかわらず、大量に流入してくる移民の吸収源、食糧・住居・労働の供給源、防衛機能、などの必要性と一致し、イスラエル建国前、パレスチナへの入植活動の中心的役割を担ってきた。その意味では、キブツは主流派のシオニズム運動の顕現でもあった。過去の9人の歴代首相のうち3人²⁹が、キブツのメンバーまたは創設者の一人としてこの入植活動に関わっていることにも、キブツの性格とイスラエルの政治との關係性が象徴されている。

つまり、キブツは直接的には実践主義シオニストや労働シオニストおよび社会主義シオニストを担い手としてすすめられた活動であったが、土地の確保、移民の組織化や資金の調達、また入植活動を国際的に認知させる上では政治主義シオニストの協力を必要としていた。さらに思想的には社会主義とシオニズムの統合という理念を内面化しており、これは建国後の労働党政権のイデオロギー的立場でもあった。たとえば、労働党最左派であるマパム党（ミフレゲット・ハ・ポアリム・ハ・メウヘ

²⁷ ロシアや東欧で社会主義シオニスト青年運動に参加していた青年たちが中心となり、パレスチナに移住して建設した共同入植村で、ヘブライ語で集団の意味。最初のキブツは1910年につくられた。

²⁸ キブツが資産を共同体で所有する形態をとったのに対し、モシャブは各世帯が農場を所有し、運営するという形態をとった。最初のモシャブは1921年に最初につくられた。

²⁹ 初代および三代目首相（1948-1953、1955-1963）のデイヴィッド・ベン・グリオン、五代目首相（1969-1974）のゴルダ・メイール、九代および十二代目首相（1984-1986、1995-1996）のシモン・ペレス。また、1999年の総選挙で十三代首相に当選したエフド・バラクは、キブツ・ミシュマル・ハ・シャロン生まれである。

の革命的政党の「前衛」と位置づけ、キブツ運動の初期に以下のような指針をあげていた。①進んだ技術水準をもつコミュニタリアン（集団主義的）共同体を国のすみずみにつくりあげるために、建設的な開拓精神の普及をはかる。②社会主義的様式を発展させ、そのメンバーに、社会主義経済運営——公平と平等の原則の実現——の準備を指導する。③労働者階級と革命的政党を支援するものとしての重要な経済像の基盤を確立する^{註10}。こうした思想的な自覚のもとに、労働、生産手段、消費、教育、「家事」や育児など生活におけるあらゆる要素を集団化・共同化し、成員は労働の成果を賃金ではうけとらないというような独特の特徴を有した。

キブツが「現代社会の問題解決に対する、到達可能なユートピア的理想の実現に捧げられた実験である」^{註11}として注目・評価された理由もここにある。そのスローガンのなかには、「各人はその能力に応じ、その必要に応じて各人へ」、「雇用労働の拒否」、「ボランタリズム」、「平等の原理」などといったような、「人間疎外」を否定し、「人間の解放」を追求しようとする意欲的な内容が盛り込まれていたことは注目に値する。しかし、非ユダヤ人であるアラブ人は、その構成員から排除されており、その意味でキブツは、まさに「ユダヤの国家的・社会的再生へのヴァンガード」^{註12}だったといえる。というのも、キブツなどの入植運動のスローガンにみられた「土地と労働の征服」というイデオロギーは、「ユダヤ人問題」の解決の具体的方策の一つとして据えられたものであった。ここでの「ユダヤ人問題」とは、ユダヤ人が自らの領土（土地）を有していないために「生産」にたずさわることができず、マージナルな就労構造が形成されていることを、ユダヤ人の問題として捉える考え方である。そして、この「正常ではない」、「逆さまの」構造を逆転させることが必要であるとされ、パレスチナへの移民は「正常」なユダヤ人社会をつくるための解決策として捉えられた。ここには入植活動を植民地化の活動と捉える視点はなく、土地と「肉体労働」を自らの手に「取り戻す」開拓事業として捉えられたのである。しかしこのプロセスは、パレスチナアラブ人労働者を労働市場から排除し彼等の土地を奪っていく植民地社会の建設でもあったことは、今日指摘されている通りである^{註13}。

今日キブツは当初の理念が衰退し、質的にも変化を遂げ、「ユダヤの国家的・社会的再生へのヴァンガード」としての役割を終えたといえることができる。人口動態上の推移をみると、キブツ人口の絶

^{註10} Harry Viteles, *A History of the Co-operative Movement in Israel*, 7 volumes, Book 2, Vallentine, Mitchell&Co.Ltd., London, 1967, p.9.

^{註11} D.ドラブキン、『もう一つの社会キブツ』、大成出版。1967年。（Haim Darin-Drabkin, *The Other Society*, V. Gollancz, London, 1962.）

^{註12} Alan Arian, *Ideological Change in Israel*, the Press of Case Western Reserve University, Cleveland, 1968, p.21.

^{註13} Gershon Shafir, *Land, Labor and the Origins of the Israeli-Palestinian Conflict*, Cambridge University Press, Cambridge, 1989. Baruch Kimmerling, *Zionism and Territory*, University of California, Berkeley, 1983a.

対数は1991年以降漸減しており、現在は約12万人で、イスラエルのユダヤ人人口の約2.6%である。キブツの数の絶対数は、1961年当時と比較すると40増加しているが、1980年代の半ば以降はほぼ横ばいの状況にある。

表1-2-1 キブツの数、人口、対ユダヤ人口比、の推移 (1961年以降)

年	数	人口 (人)	対ユダヤ人口比 (%)
1961	228	77,100	4.0
1972	233	89,700	3.3
1983	267	115,500	3.4
1985	268	124,300	3.5
1989	270	123,700	3.3
1990	270	123,800	3.1
1991	270	127,500	3.1
1992	269	125,800	3.0
1993	270	123,800	2.9
1994	269	122,400	2.8
1995	267	123,800	2.7
1996	268	122,500	2.6

出典：Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1997*, Jerusalem, 1997, pp.72-73.および、*Statistical Abstract of Israel 1995*, 1995, pp.68-69. および *Statistical Abstract of Israel 1992*, 1992, pp.64-65.

今日のキブツの質的变化は、イスラエル社会の変化とも連動している。直接的には、1985年に施行された「緊急経済安定化計画」により、イスラエル政府がより「小さな政府」を志向するようになったことである。この政策は、財政赤字やインフレをおさえ^{註14} 経済を安定させるために、国家予算の

^{註14} 1970年代の後半から1980年代の前半にかけて、イスラエルのインフレははなはだしく、消費者物価指数は次のように推移した。

1974年：	1969年の指数に対し、224.8
1975年：	313.1
1976年：	411.2
1977年：	1976年の指数に対し、134.6
1978年：	202.7
1979年：	361.4
1980年：	834.9
1981年：	1980年の指数に対し、216.8
1982年：	477.7
1983年：	1,173.5
1984年：	5,560.4

出典：Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998. p.10-7.

(*Statistical Abstract of Israel* 1998年版の頁表記は、原書の通り。

以下同じ。)

軍事費率の削減^{註15}をおこなう一方で、様々な補助金を削減した^{註16}。キブツに対する補助金もその対象であり、この政策はキブツの財政を圧迫することになった。この結果、キブツはより収益性の高い経済部門に活動をシフトすると同時に、キブツのメンバーそのものがキブツの外に雇用を求めることによって現金収入を得るという変化をもたらした。このため、キブツは、従来の農業や軽工業に加えて、観光・サービス業にも参入し、その「地の利」^{註17}をいかしながら、宿泊施設や結婚式の会場としての「ホテル業」などにも力をいれている。また、キブツのメンバーが外部で得た賃金はそのキブツに還元されるわけではなく、その収入のほとんどを自己収入として得ることも可能になってきている。さらに、キブツの創設に関わった「第一世代」を別とすれば、多くのメンバーにとっては、キブツで生活するということがイデオロギー的に特別の意味をもつものではなくなっている。さらに、イスラエルの国家が形成されて50年以上経過し、様々な政治的・軍事的既成事実と経済的実績の蓄積は、入植を通じて国家を形成することの「道徳的目標」の価値を相対的に弱めたといえ、このことも、初期のキブツが有していた理念やイデオロギー、そして特徴ある諸形態をそぎ落とす作用を加速させたといえる。

しかし、興味深いのは、このようにキブツの実態や性格が大きく変貌したにもかかわらず、今もなおイスラエルの学校で、キブツやモシャブの歴史を描いた教科書が使用されていることである。これは、先にも述べた入植活動初期のスローガンであった「土地と労働の征服」というイデオロギーが、イスラエルの建国の上では欠かせない意味と役割を担っており、今後も記憶に語り継いでいくべきものとして位置づけられていることの反映とみることができる。また、土地空間の占拠という意味では、「キブツ型入植」から占領地への「入植地の拡大」という形で受け継がれたともみることができよう。その担い手は、いわゆる「左派」から「右派」に転化し、歴史的に果たしてきた（いる）役割は両者では異なるが、注目しなければならないのは、「土地」という空間を占拠し、国家の「領土的基盤」を確保することに対する、過去と現在の連続性である。

ともあれ、こうしたキブツの変化は、先にも少し指摘した建国以降五十年余の間にイスラエル社会

^{註15} 軍事費は、対GNPで、1979年の20%から、1986-88年には、10%になり、1991-1992年には8%にまで減少した。Gershon Shafir and Yoav Peled, 'Citizenship and stratification in an ethnic democracy', in *Ethnic and Racial Studies*, special issue, Routledge, 1988, p.418. また、直接的軍事支出が国家予算に占める割合でみても、1980年の32.5%から1985年には28.7%となり、1992年には20.1%とさらに減少し、1996年には17.6%と1980年の割合に比べると約半減している。Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998, p.20-15. より。

^{註16} 農林水産部門に対する政府の補助金は、政府支出に占める割合の2.3%（1980年）から2.5%（1985年）となり、以後1.4%（1992年、1993年）、1.3%（1994年）、1.2%（1995年）、1.3%（1996年）と推移している。*Statistical Abstract of Israel 1998*, p.20-15. より。

^{註17} キブツの多くは、「国境」の周辺や、都市部から離れたところにつくられてきたという経緯がある。

にもたらされた様々な変化を象徴するものであり、その意味では建国イデオロギーであるシオニズムの行方を左右し、これとかかわる現象としてしておく必要がある。まず第一に、政治・軍事・外交面では、この間四回の戦争とレバノン侵攻を経験したがいずれも軍事的に敗北することはなく、1967年以降占領地を増やし、軍事的優位を内外にアピールした。一方エジプト、ヨルダンと国交を結び、1993年にはPLOを「承認」するに至り、イスラエルとアラブ諸国との関係が全面的な対決という性格のものではなくなってきた。しかし第二に、占領地の確保とそれに伴う兵役の任務はイスラエル軍が「防衛」のための存在を大きく逸脱していることを次第に明らかにすることにもなり、加えて1987年の12月に占領地で始まったパレスチナ人による反イスラエル闘争インティファダは、占領地を抱え続けるイスラエルの矛盾を露呈することになった。言い換えれば、イスラエルをユダヤ人国家としてなりたせようとするシオニズムが政治的、軍事的、外交的に「成功」をおさめた結果、その「成功」がもたらす諸問題にイスラエルは直面することになったのである。さらに第三に、この間イスラエル経済は大きく成長し、産業の中心が、1950年代の労働集約型産業から1970年代の技術集約型軍事産業を経て1990年代の知識集約型ハイテク産業に至る^{註18}。こうして従来の国家主導型の経済から私企業主導型への経済変容に伴って、新しいライフスタイルと文化的嗜好を持った新中間層が台頭し、労働シオニズムや社会主義シオニズムのなかにあった伝統的イデオロギーの正統性が揺るがされる状況がうまれたといえる。また第四に、イスラエルの国民を構成する人々の世代交代とその構成内容の変化がイスラエルの国家のあり方とその性質を見つめ直す状況をつくりあげてきた。

第三節 先行研究の成果と残された課題

それでは、これまでのイスラエル研究はどのような歩みを踏んできたのであろうか。シオニズム研究、ユダヤ研究、反ユダヤ主義、パレスチナ問題に関する研究などに関連をもちながら膨大な蓄積があるそれらのすべてについて検討することは不可能であるが、主としてイスラエルの研究者によって先導されてきた従来の^{註19}イスラエル研究には、その方法論および問題意識の上で、次のような共通した問題点があったことが指摘できる。第一に、近代化論的なアプローチでイスラエル社会を捉えようとしてきたこと、第二に、少数の例外的な研究者を別にすると、シオニズムイデオロギーに対す

^{註18} Uri Ram, 'The Promised Land of Business Opportunities: Liberal Post-Zionism in the Glocal Age', *The New Israel*, in ed. by Gershon Shafir and Yoav Peled, Westview Press, Boulder CO., 1999b, pp. 221-222.

^{註19} ここでいう「従来の」とは、後に述べる「新しい歴史学者」や「批判的社会学者」達が登場する以前の、1970年代以前の伝統的「正統派」イスラエル社会学者や歴史学者による研究をさす。

る批判的視点が欠如しているか希薄であり、国家の建国イデオロギーであるシオニズムを前提とした議論が展開されてきたことである。このために、イスラエルの国家的性格やシオニズムの評価に関して、科学的であるはずの「知」が国家の政策を繰り広げていく「権力」と結びつき、それを支えるという関係が維持されてきた。そして、その「知」および「権力」の担い手は、エスニック的には「ヨーロッパ出身のユダヤ人」であり、文化的には「世俗的（非宗教的）」な、そしてジェンダーは「男性」であった。

たとえば、イスラエル社会論の代表的な研究者であるアイゼンシュタットは近代化論的な立場からイスラエル社会を論じたが、その主要なテーマは「ユダヤ移民の社会的統合」であった。彼にとってイスラエルのエスニック問題は、（遅れた）「オリエンタルユダヤ移民」がイスラエル社会にどう吸収・社会化され統合されるかという問題としてとらえられ、さらに、イスラエル社会の構成員であるにもかかわらずパレスチナ人がそのなかに位置づけられることはなかった。そして、その著作の中でパレスチナ人という表現は避けられかわりに「アラブ人」という表現で分析の対象になってきた。その「アラブ人」はイスラエルの他のマイノリティであるドルーズやベドインとともに、エスニック問題とは別の文脈で言及され、イスラエル社会の変容を論じた約600頁にわたる彼の著作^{註20}のなかで、それはわずか12頁にすぎない。これはイスラエル社会論のなかの「アラブ人」やパレスチナ人の位置付けに対する彼のスタンスを物語っている。

このような「知」のあり方、言い換えれば、政治的運動であった主流のシオニズムイデオロギーから抜けきれない「知」のあり方は、社会学だけでなく、イスラエルの社会・国家の形成過程をどうみるかという歴史学にもいえたことであった。しかし、こうした従来のイスラエル社会／国家分析に対して近年新たな研究動向がみられるようになった。これは、イスラエルの社会科学の歴史上画期的なことであり、その担い手は「新しい歴史学者」あるいは「批判的社会学者」といわれる研究者達である^{註21}。そして従来の伝統的なイスラエルの歴史学や社会学の言説に批判的な問題提起をしている点で、それはシオニズムに対する「挑戦」として機能するものでもあり、今日それはポスト・シオニズム論争として注目を集めている^{註22}。これらの研究動向については、ウリ・ラム^{註23}やローレンス・シ

^{註20} S.N.Eisenstadt, *The Transformation of Israeli Society*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1985.

^{註21} 代表的な研究者としては、Ilan Pappé, Benny Morris, Anita Shapira, Gershon Shafir, Baruch Kimmerling, Uri Ram, Shlomo Swirski, Yoav Peledなどがいる。

^{註22} この新たな動向について、筆者は臼杵陽氏に多くのご教示をいただいた。

^{註23} Uri Ram, *The Changing Agenda of Israeli Sociology: Theory, Ideology, and Identity*, State University of New York Press, Albany, 1995. この著作は、戦後のイスラエル社会学者とその業績を方法論的立場から分類し、それをイスラエルの時代背景や世界の知的潮流とつなげて整理しており、知識社会学的な理解を得る上でも有益である。

ルバーシュタイン^{註24}らによって整理されているが、この論争の基本的な論点は以下の三つの領域に
関するものである。

まず第一はイスラエル—アラブの民族的対立、第二に、労働運動の社会政策とその性質、第三にシ
オニストの文化的言説の側面である。その内容を詳しく論じることは本研究の主題ではないので、こ
こでは従来の研究のどのような点がどのように見直されているかを簡単に紹介するにとどめたい。

第一の点について、「新しい歴史学者」達は、1948年の戦争でイスラエル国家はアラブ諸国との和
平に積極的な外交姿勢をとったという従来の見解を「修正」し、イスラエルはアラブ諸国との和平交
渉の機会を拒絶したこと、他方で、ウエストバンクの領土をヨルダンと分け合うという秘密協定を結
んでいたことを、新たに公開された外交文書の研究によって明らかにした。さらに、パレスチナ難民
は当時のアラブ人の指導者による退出命令によりうまれたものであるというこれまでの言説を問い直
し、難民を作り出した責任はイスラエルにもあったこと、またその後もイスラエルはパレスチナ難民
の帰還に拒否の姿勢をとったことを指摘した^{註25}。また、「批判的社会学者」達は、十九世紀末から
始まったパレスチナにおけるユダヤ人の入植地の建設が、土地の獲得、労働市場の囲いこみ、現地の
アラブ人農民の排除という性質などを考えると、イスラエルの国家建設は植民地主義的企てであった
と評価した^{註26}。これは、従来の主流のイスラエル社会学がイスラエル国家形成の「特殊事情」を強
調し、また近代化論的な社会分析の方法論を用いてアラブ人社会とユダヤ人社会を切り離した二元論
的なパレスチナ社会分析をしてきたのと対照的である。そして、イスラエル社会の分析にあたり、ユ
ダヤ・パレスチナ紛争がもたらしている影響を見逃すべきではないと主張する^{註27}。つまり「国際問
題」と「国内問題」との相互連関を分析視角にとりいれた「国際社会学」的な問題意識にたつことの
重要性を問題提起しているといえよう。この点と関連したイスラエル国家・社会の概念化としては、
バロッフ・キマリングによる「植民者-移住者社会」(settler-immigrant society^{註28})というものがあ

^{註24} Laurence J. Silberstein, *The Postzionism Debates: Knowledge and Power in Israeli Culture*, Routledge, New York and London, 1999. この著作は、シオニズムイデオロギーの言説からポスト・シオニズム論争へと至る理論的系譜の流れを理解する上で有益である。著者は、この論争の本質が知識と権力の問題であることを強調している。

^{註25} Benny Morris, *The Birth of the Palestinian Refugees Problem, 1947-1949*, Cambridge University Press, Cambridge, 1987. Ilan Pappé, *The Making of the Arab-Israeli Conflict: 1947-1951*, I.B.Tauris, London, 1992. Avi Shlaim, *Collusion across the Jordan: King Abdullah, the Zionist Movement, and the Partition of Palestine*, Columbia University Press, New York, 1988. など。

^{註26} Gershon Shafir, op. cit. Baruch Kimmerling, 1983a, op. cit. など。

^{註27} Yoav Peled & Gershon Shafir, 'The Roots of Peacemaking: The Dynamics of Citizenship in Israel, 1948-93', *International Journal of Middle East Studies*, vol.28, no.3, 1996, p.395.

^{註28} Baruch Kimmerling, 'Political subcultures and civilian militarism in a settler-immigrant society,' in ed. by Bar-Tal D., Jacobson D. and Kliemann A., *Security Concerns: Insights from the Israeli Experience*, Contemporary Studies in Sociology, vol.17, JAI Press, Stamford, Connecticut, 1998, p. 399.

る。その意味は、近隣諸国からの承認をえることができず、地理的・社会的境界にいつまでも結末をつけないことができないことから、軍事的な配慮が——「国家の安全」の名の下に——最優先されている社会である。彼は「批判的社会学者」という概念が登場する前からシオニズムに対する明確な批判的問題意識のもとにイスラエルの国家と社会の分析に取り組み、イスラエルの政治・社会・文化の性質に問題提起し続けてきている研究者の一人であるが、最近の論文でこの「植民者・移住者社会」という国家・社会の性質から導き出されてくる一般市民 (civilian) の軍国主義的政治文化——「文民」軍国主義——の形成のプロセスと構造を問題にしている^{註29}。

第二の論点である労働運動の社会政策とその性格については、伝統的な主流の社会学や歴史学が、イスラエル建国前のパレスチナ社会におけるユダヤ人労働運動の創設者達を社会主義の理想に燃えた開拓者として描いており、シオニストイデオロギーに追従するものであったのに対し、「批判的社会学者」達は、イスラエルのアラブ市民に対して行使された差別的な政策を議論の俎上にのせ、労働運動のエリート達に関する言説を脱構築することになった^{註30}。またこの視点はアラブ諸国からのユダヤ移民のイスラエル社会への「統合」と「吸収」の過程にも適用され、イスラエルへの移住後の彼等の「低発展」は資本主義的発展の労働の分業の過程で起こる階級形成と権力の不平等な分配という文脈で議論され、マバイ党に代表される労働運動は西欧出身者による支配的な階級の運動であったこと、そして彼等は労働集約的な産業化（資本主義的近代化）を進め、非西欧出身のユダヤ移民を従属的で周辺的な位置に追いやったことを問題にした^{註31}。さらに、ジェンダーの観点からも不平等であったことが指摘されている^{註32}。

第三の論点であるシオニストの文化的側面に関する議論は以下のようなものである。シオニスト運動においてはパレスチナに新しいイスラエル人アイデンティティを構築するにあたり、離散ユダヤ人を否定的なユダヤ人像として描き、それとの対比においてユダヤ・イスラエル人のアイデンティティを想定していた。言い換えれば、ユダヤ人にとって「離散」は否定されるべきものであり、ユダヤ人の歴史は紀元七十年に始まるとされるパレスチナからの離散からシオニズムによるパレスチナ（イス

^{註29} Ibid., pp.395-415.

^{註30} Yonathan Shapiro, 'The Historical Origins of Israeli Democracy', in ed. by E. Sprinzak & L. Diamond, *Israeli Democracy Under Stress*, Lynne Rienner Publishers, Boulder&London, 1993, pp.65-82. Henry Rosenfeld, 'The Class Situation of the Arab National Minority in Israel', *Comparative Studies in Society and History*, no.20, 1978, pp. 309-326. Michael Shalev, *Labor and the Political Economy of Israel*, Oxford University Press, Oxford, 1992. Oren Yiftachel, *Planning a Mixed Region in Israel: The Political Geography of Arab-Jewish Relations in the Galilee*, Avebury, Aldershot, Hants, 1992.

^{註31} Sammy Smooha, *Israel: Pluralism and Conflict*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1978. Shlomo Swirski, *Israel: The Oriental Majority*, Zed Books, London, 1989.

^{註32} Hana Herzog, 'A Forgotten Chapter in the Historiography of the Yishuv: Women's Organizations', *Cathedra*, no.70, 1994, pp.111-133.

ラエルの地)の「回復」に至る道として、単線的で連続的に描かれたが、伝統的なこれまでのイスラエルの社会学や歴史学はこうした言説の前提の上に議論をしているのが常であった。しかし、こうした言説は「新しい歴史学者」や「批判的社会学者」達によって相対化された^{註33}。また、イスラエルにおいてホロコーストの記憶が「国民的な記憶」として政治的に利用されホロコーストの悲劇からの普遍的な教訓が活かされていないことなども問題とされる議論が、イスラエルにおいてようやく生まれる状況がみられるようになっている^{註34}。

こうした新しい社会科学的な知見は、イスラエルの社会・国家形成のプロセスとその性質を根本から見直し再解釈した点で大きな貢献を果たしているといえる。これらの論者達に共通するのは、シオニスト的偏向を免れなかったイスラエルの歴史解釈や社会分析の言説を書き換える新たな主体として、これまで語りの主体にはなりえてこなかったミズラヒム^{註35}、パレスチナ人(イスラエル・アラブ人)、宗教的ユダヤ人、女性などに注目し、彼等・彼女らの視点を分析にとりこもうとする姿勢である。そしてこの新しい言説の主体はシオニズムに対する「他者」としてシオニズムを相対化する主体であり、さらにはシオニズムを変革する主体でもあるとして注目されるのである^{註36}。

こうした論者の一人であるウリ・ラムは、イスラエルの中でシオニズムは今日ネオ・シオニズムとポスト・シオニズムという二つのベクトルの方向にひっぱられながら変容を見せ始めていると論じている^{註37}。ネオ・シオニズムとは、「ユダヤ民族」と「イスラエルの地」への強いアイデンティティを持ち宗教的救済と復活を志向する、原理主義的な新しいシオニズムであり、その象徴的な例はグッシュ・エムニム^{註38}である。それに対し、ポスト・シオニズムの担い手は集団主義的価値よりも個人

^{註33} Uri Ram, op.cit.

^{註34} ed. by Robert Wistrich and David Ohana, *The Shaping of Israeli Identity: Myth, Memory and Trauma*, Frank Cass, London, 1995. また、イスラエル人研究者ではないがホロコーストの記憶とイスラエルの文化との関係およびその変化を論じたものとして、Freddie Rokem, 'Cultural Transformations of Evil and Pain: Some recent changes in the Israeli perception of the Holocaust,' in ed. by Hans-Peter Bayerdörfer, *Theatralia Judaica (II)*, Max Niemeyer Verlag GmbH & Co. KG, Tübingen, 1996, pp.217-238.

^{註35} ヘブライ語では、東(洋)系のユダヤ人(移民)という意味。スファラディム(1492年のスペインからのユダヤ人追放以前に、スペインやポルトガルに住んでいたラディノ語を話すユダヤ人の子孫というのが元来のその語義)とほぼ同義語として、非西欧系という意味でアシュケナジム(中・東欧系のユダヤ人(移民)を意味するが、一般には、ヨーロッパ系(ロシアを含む)ユダヤ人(移民)全般をさして用いられることも多い。)と対にして使われることも多い。

^{註36} Uri Ram, 1995, p.199. Uri Ram, 'The Promised Land of Business Opportunities: Liberal Post-Zionism in the Glocal Age', *The New Israel*, in ed.by Gershon Shafir and Yoav Peled, Westview Press, Boulder CO., 1999b, pp. 217-240. Silberstein, op.cit., pp.3-4. この点に関しては、臼杵も同じ議論をしている。臼杵陽、「パレスチナ／イスラエル地域研究への序章——イスラエル政治社会研究における〈他者〉の表象の諸問題——」『地域研究論集』第1巻第1号、1997年a、67-91頁。

^{註37} Uri Ram, 'The State of the Nation: Contemporary Challenges to Zionism in Israel', *Constellations*, vol.6, no.3, 1999a, pp.325-338. Uri Ram, 1999b, pp. 217-240.

^{註38} 1974年につくられた宗教的なシオニスト運動で「大イスラエル主義」を唱えて占領地への入植地の建設とそこへの移住をすすめてきた。またその運動は入植地の建設と移住にとどまらず、移民の促進、教育、情報活動などの分野にも及んでいる。

主義的価値観や市民的権利を、「遠い過去」や「遠い未来」よりも「現在」や「近未来」を重視する「新しい」階層である。彼はポスト・シオニズムをラディカル・ポスト・シオニズムとリベラル・ポスト・シオニズムの二つのカテゴリーに分け、前者の具体例としてはイエッシュ・グブル^{註39}やこれまでイスラエル社会の「周辺」に位置していた「女性」・「パレスチナアラブ人」・「ミズラヒム」・「宗教的ユダヤ人」などを、後者の例としては新しい経済的エリートおよび上位・中間階層が想定されている^{註40}。

彼の議論は、ポスト・シオニズム論争をグローバリゼーションの時代における「国民国家」の変容という議論の文脈に関連づけながらイスラエル社会の行方を問題にしている点で、筆者の問題意識に近いものである。彼が言うように、グローバリゼーションは脱産業社会化や情報社会化、新自由主義、物質文化や消費主義という帰結をもたらすかたちでイスラエル社会を変容させている。中でも、政治的安定は海外からイスラエルへの経済投資の流入を促すことから、グローバリゼーションと「平和」と「投資」（経済的利害）は相互に親和的關係にあり、オスロ合意へのプロセスを促進した主要因は、新中間層（＝リベラル・ポスト・シオニスト）のこうした経済的関心とそれを重視した政治的指導者であったことに注目を促している^{註41}。反面、グローバリゼーションは労働力に対しては現在の社会格差を拡大させる形で作用し、下層の階層はグローバリゼーションの犠牲者としてとり残され^{註42}、和平プロセスには否定的な主体として台頭する（している）と分析する。そして彼等の一部はネオ・シオニストへ、また一部はラディカル・ポスト・シオニストの担い手であるというのが含意であると思われる。

彼の議論で同意しうるのは、今日シオニズムがネオ・シオニズムとポスト・シオニズムという矛盾した二つの方向へ引き裂かれているという指摘、および、その陰の主役は世界的に進行しているグローバリゼーションの流れであるという指摘である。ただし、いくつかの検討する余地が残されている。まずこの議論はややもすると、従来のシオニズムを相対化するという意味で二つの新しいシオニズムを過剰に評価する危険性をはらんでいる。シオニズム、ネオ・シオニズム、ポスト・シオニズム

^{註39} ヘブライ語で「もう限界だ。」というニュアンスと「境界がある」というニュアンスの二つの意味がある。1982年から1985年のレバノン戦争時に形成された、予備役兵による任務拒否の運動。

^{註40} Uri Ram, 'Postnationalist Past: The Case of Israel', *Social Science History*, vol.22, no.4, 1998, p.526. Uri Ram, 1999a, pp. 333-334. Uri Ram, 1999b, p. 221.

^{註41} Uri Ram, 1999b, pp. 226-230.

^{註42} その例として、工場や生産拠点が海外に流出したり（25の主要な織物工場がより賃金の安いエジプト、ヨルダン、パレスチナ、トルコなどへと移転したこと）安い労働力が「輸入」され（1990年代以降、これまでのパレスチナ人労働力に変わる廉価な労働力として、東アジア、東欧、南アメリカから「輸入」され、その割合は労働力の10%に相当し、それはイスラエル人労働者の失業者の割合にほぼ匹敵する。）、下層労働者が打撃を受けていることを挙げている。Uri Ram, 1999b, pp. 230-235.

の関係は、後者の二つのシオニズムが前者を引き裂いた結果それを解体・消滅させてしまうとは必ずしもいえない。ネオ・シオニズムとポスト・シオニズムも対立していることも忘れられてはならず、場合によってはネオ・シオニズムがイスラエルの新たな牽引力となって政治文化という点では従来のシオニズム以上にシオニズムの性格を強化させていく可能性もないわけではない。イスラエルの昨今の社会変容には確かに著しいものがあるにしても、筆者はシオニズムはイスラエルの政治文化に強固に根をおろし受容されているように思えてならない。また、ポスト・シオニズムの下位カテゴリーとして挙げられたリベラルとラディカルという分類も、同じポスト・シオニズムの枠組みの中で議論することの妥当性に疑問が残る。これらのいくつかの概念の中で、シオニズムやその言説、その政治文化を根源的に相対化し脱構築しうるのはラディカル・ポスト・シオニストであろうが、その勢力は「批判的社会学者」達も認めるように、あまりにも少ないのである。この「少なさ」の原因、言い換えれば、国家と民主主義という課題設定にたったうで「シチズンシップの歪み」と筆者が規定したイスラエルの政治文化がなぜこれまで維持・再生産されてきているのかという問いに対しては——それは彼の問題意識の中心にはないかもしれないが——明らかにされているとは思われない。

この点では、イスラエルの「シチズンシップ」の問題を正面から分析の対象にしたいいくつかの研究がある。まず、Uri・デイヴィスが中東五カ国（厳密には四カ国とパレスチナ）の比較研究の中でこの問題を論じている^{註43}。これは上記の諸国におけるシチズンシップの現状を、「世界人権宣言や国連憲章という規範に照らして検討しようとした」^{註44}研究である。特にパレスチナ人に対する各国の処遇をシチズンシップの観点から比較している点で中東の民主化を考える上での資料を提供しているという意義が大きい。まず彼はシチズンシップを「個人と国家の関係を規定する証明書（certificate）」^{註45}と定義し、さらにそのシチズンシップを「パスポートシチズンシップ」と「民主的シチズンシップ」という概念に分類する。前者は国家への帰属をあらわす国籍＝パスポートの保持／付与とかわる視点であり、後者は「国家に対して個人に認められた諸権利（国家の諸資源——市民的資源：裁判、政治的資源：投票と選挙、社会的資源：福祉と教育、物的・経済的資源：土地と水——）に対する平等なアクセス権」という意味が与えられている^{註46}。後者の概念規定はデイヴィス自身が述べているよう

^{註43} Uri Davis, *Citizenship and the State: A Comparative Study of Citizenship Legislation in Israel, Jordan, Palestine, Syria and Lebanon*, Ithaca Press, Berkshire, UK, 1997.

^{註44} Ibid., p. xvii. さらに終章でデイヴィスは、EUをモデルにした「中東・北アフリカ諸国連合」という「新中東秩序」構想を提唱し展望している。

^{註45} Ibid., p.3.

^{註46} Ibid., pp.3-6. 彼は、この定義と分類はデイヴィス独自のものと述べている。また、「民主的シチズンシップ」の権利は常に「パスポートシチズンシップ」の権利を含んでいるが、逆は必ずしもそうではない。Ibid., p. 36.

に、マーシャルが整理したシチズンシップの三つの要素^{註47}を下敷きにしてこれに「物的・経済的資源へのアクセス権」という要素を加えたものだともいえる。この概念の分類と区別は、パレスチナ人をめぐるヨルダンとイスラエルの分析の中でその有効性を特に発揮している。つまり、シチズンシップをこれらの規準を通して点検することで、パレスチナ人が「世界人権宣言」や「国連憲章」の規範から遠い位置にある実態が浮かび上がっている。それは国家の構成員や住民でありながら国家に権利を剥奪されている人々やそもそも属する国家を持たない人々の姿であり、アレントが「いかなる国家によっても公式に代表されず保護されない、人権を失った人々」^{註48}と呼んだ人々の姿である。なおこの点については第二章で改めて論じることにした。さらに彼は、国籍剥奪の対象者の要件の一つとしてイスラエルが「イスラエル国家への忠誠を侵害する行為を犯した場合」という項目を明記している点を重視し、これは「国家の安全と平和」という観点を国籍剥奪の判断の主要な基準とするシリアやヨルダンよりも悪い、偶像崇拜的な国家崇拜であると指摘している^{註49}。

デイヴィスはそういう意味でイスラエルのシチズンシップの問題に対しても本質的な批判をしているといえるが、彼もまた、今日シオニズムがもはやイスラエル国家を方向づける唯一の支配的イデオロギーではなくなっていることを指摘し、イスラエルのパレスチナ市民の権利要求の高まり、経済的自由化やプライバタイゼーションの動き、シオニスト勢力と国家との間での利害の「乖離」などの要素が、シオニズムを浸食し変質させ、さらにそうした変化を促す闘いがこの地域全体の民主化を促す闘いと呼応していく可能性を展望している^{註50}。筆者はこの評価と展望には、同意を留保するものである。また、筆者が最初に規定した「市民や国民の政治的感受性や批判意識」という視点をシチズンシップの意味に加味させると、彼はそこまでたちいった議論をしているとはいえない。

デイヴィスとは異なった視点からではあるがベレドやシャフィールもシチズンシップに関わる議論をしている。彼等は和平プロセスを用意した背景としてイスラエルのシチズンシップの変容に注目しており、イスラエルは排外主義的な開拓社会（フロンティア社会）^{註51}からより包含的な市民社会^{註52}

^{註47} シチズンシップの三つの要素としてマーシャルがあげた、市民的権利、政治的権利、社会的権利。マーシャル T. H. / ボットモア T., 『シチズンシップと社会階級』、法律文化社、1993年。
(T.H.Marshall and Tom Bottomore, *Citizenship and Social Class*, Pluto Press, 1950/1992.)

^{註48} H. アレント、『全体主義の起源』、第二巻、みすず書房、1972年、238頁。(Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, New York, 1951.) アレントはその例として少数民族（国籍を持たぬ民族）【ママ】、無国籍者、亡命者をあげ、ユダヤ人問題をこの観点から見ようとしている。

^{註49} Uri Davis, op.cit., p.60.

^{註50} Ibid., pp. 201-202.

^{註51} 「二つの元来別個の社会の間で相互浸透がなされる領土や地帯」で、異なった形で編入される集団間での対立がみられるのが特徴である。Ibid., p. 395.

^{註52} 私的領域——主に経済的活動——が国家から自律して存在する社会であり、任意の公的活動の領域が国家と市場の両方から自律して存在する社会。Ibid., p. 395.

に移行しつつあると述べている^{註33}。そしてこの変化を分析するのに、リベラル、リパブリカン、エスノナショナリストの三つのシチズンシップに分けた上でシチズンシップを「一連の公的な諸権利」であると同時に「個人や集団が社会に編入される様式（インフォーマルな社会的実践でありそれはシチズンシップの言説として現れる。）」であると定義する^{註34}。その上で、イスラエルのシチズンシップは上記の三つの性格が混成した体系をなし局面に応じてそれらは使い分けられてきた（傍点と要約は筆者）が、今日この混成体系は「上から」と「下から」解体を迫られ、リベラルな方向へと変化し、リパブリカンシチズンシップは衰退し、植民地主義的・エスノナショナリスト的シチズンシップも浸食されていると説明するのである^{註35}。このように、イスラエル社会の形成過程と——その変化の質の、国際社会（の変容）との関係性（傍点は筆者）を重視している——イスラエル社会の構成員である四つの主体である「開拓者達」、「正統派ユダヤ教徒」、「ミズラヒム」、「二級市民のパレスチナ人」、および「非市民のパレスチナ人」との関係に注目し、80年代以降顕著になったシチズンシップの力学の変化が和平プロセスを促進した背景であるとする点では、ラムやデイビスらの主張と重なるものである。そして同様に、イスラエル社会の分析の上で、ひいてはシチズンシップの分析の上でもイスラエル—パレスチナ紛争という要素とグローバルな経済の力の影響を見落とさないことを強調している。このように「批判的社会学者」達はイスラエルのシチズンシップの問題に正しく光をあてているが、将来の展望に対しては概してシオニズムの「相対化」やリベラル・シチズンシップの台頭の可能性に対して肯定的・楽観的であるといえる。

ペレドはまた別の論文でイスラエルのシチズンシップを民主主義の議論と関わらせて論じている^{註36}。議論の中心は、「アラブ人」のシチズンシップの視点からイスラエルの政治文化（シチズンシップ）の問題点を洗い出しそこに「エスノ・レパブリカン」と彼が形容する性質を抽出していることにある。その一方で、イスラエルの政治文化の中にある「リベラル」なシチズンシップの要素がアラブ人の政治的権利の獲得を限定された形ではあれ可能にしており、そしてそれがエスニック紛争がありながらイスラエルのアラブ市民の抵抗運動が概して非暴力的、合法的な形で行われ、イスラエルの

^{註33} Yoav Peled & Gershon Shafir, 1996, op.cit., pp. 391-392.

^{註34} Ibid., pp.395-396. この議論の伏線として、イスラエルの政治文化を、①リベラリズム、②エスノナショナリズムもしくはエスニシティ、③リパブリカニズムの三つの（傍点引用者）要素から構成されていると理解するべきだという議論が1992年になされている。Yoav Peled, 'Ethnic democracy and the legal construction of citizenship: Arab citizens of the Jewish state,' *The American Political Science Review*, vol.86, 1992, p.432.

^{註35} Ibid., pp. 396-410. Gershon Shafir & Yoav Peled, 'Citizenship and stratification in an ethnic democracy,' *Ethnic and Racial Studies*, special issue: Aspects of ethnic division in contemporary Israel, vol.21, no.3 Routledge, 1998, pp.408-427.

^{註36} Yoav Peled, 1992, op. cit., pp. 432-443.

「民主的な」体制（括弧は筆者）が安定して維持できた主な要因であると結論づけている。

イスラエルの民主主義に対するこの認識は、イスラエルを「エスニック・デモクラシー」と類型化しているスムーハの議論^{註57}を踏襲したものといえる。スムーハは、早くからイスラエル国家における「アラブ人」の従属的な地位の分析に光をあて「アラブ人」のアイデンティティや社会・政治意識に関する実証的な研究も精力的におこなってきたイスラエル人社会学者の一人だが、「エスニック・デモクラシー」の意味するところは、全ての市民に市民的・政治的諸権利が与えられているが、マジョリティの民族集団に優先的な地位が与えられている国家であり、そうした国家ではマイノリティの民族集団の市民的権利は不完全なものとなる。そして、言語、文化、宗教、教育などはそれぞれの集団によって別々に維持されるためにマイノリティ集団にも集団としての権利が与えられるが、これは必ずしも彼等の自治を意味するものではなく、マイノリティの個人的な諸権利には制限が加えられる場合もある。しかしまた一方では、議会、メディアその他の合法的手段を通して、状況を変革するための闘争や抗議に訴えることがマイノリティに認められてもいるような国家である。

「民主主義」の定義の仕方によっては、こうした分類も可能であるかもしれない。しかし、その中味をたとえどのように定義したとしても、イスラエルが過去、現在、未来のいずれにおいてもユダヤ人だけによって構成される国家でない限り、「ユダヤ人国家」と「民主主義国家」の二つの用語を接合し両立させることは、範疇上の誤謬である。「ユダヤ人国家」と定義された国家^{註58}においてユダヤ人でない人々は、「国民」の地位を等しく享受することができず、制度化された差別構造のもとに置かれるからである。スムーハやペレドの議論は、イスラエルにおける非ユダヤ人の構造的な差別と従属を問題にした現状を正しく描写しながらも、現体制を結果としては肯定するものに思われる。そうでなければ、「エスニック・デモクラシー」という政治的枠組みの中で差別や従属下におかれている人々が採りうる道として、イスラエルの中にも存在している普遍的な原則、つまり「リベラル」なシチズンシップの権利を戦略として行使していく可能性を呼びかけているのであろうか？この論文

^{註57} Sammy Smooha, 'Minority status in an ethnic democracy: the status of the Arab minority in Israel', *Ethnic and Racial Studies*, vol.13, no.3, July, 1990, pp.389-413. および、Sammy Smooha, *Control and Consent as Integrative Mechanisms in Ethnic Democracies: The Case of the Arab Minority in Israel*, 34th World Congress of the International Institute of Sociology, Tel Aviv, 1999. スムーハは「エスニック・デモクラシー」も民主主義の一形態であるとし、従来の民主主義として「リベラル・デモクラシー」と「コンソシエイショナル・デモクラシー」の二類型を挙げ、それに加えて「知られていない民主主義」として「マルチカルチュラル・デモクラシー」と「エスニック・デモクラシー」の二類型を挙げている。それぞれの具体的な国としてあげられている例は、順にフランス（「リベラル・デモクラシー」）、スイス・ベルギー・カナダ（「コンソシエイショナル・デモクラシー」）、オランダ・英国・1994年以降の南ア（「マルチカルチュラル・デモクラシー」）、イスラエル・スロバキア・マレーシア・ジョージア（「エスニック・デモクラシー」）である。

^{註58} イスラエルの「建国宣言」のなかで、イスラエルをユダヤ人国家（the Jewish State）として建国すると宣言している。

からそういうメッセージを読みとることもできなくはないが、このエスニック・デモクラシーという捉え方には当然批判もあり、イフタヘルは、この概念化を否定してイスラエルの政治をエスノクラシーであるとしている^{註59}。

以上イスラエル人研究者によるイスラエル研究を中心に、筆者の問題意識と関わる限りでこれまでの先行研究を概観してきたが、ここで日本におけるイスラエル研究についても若干ふれておきたい^{註60}。日本におけるイスラエル研究は圧倒的に国際政治的な関心からのものが多く、厳密な意味での本格的な社会学的研究はまだ存在しないといつてよい。先駆的な研究としては山根常男と大岩川和正をあげたいと思うが、二人は、ほぼ同じ対象を分析しながら問題の設定がきわめて異なっていた。周知のように山根はキブツ研究を日本に紹介した社会学者の一人だが、彼の視点は家族社会学者としての視点を中心にしながらキブツという組織の全体像を系統的に明らかにしようとしたことにある^{註61}。そのことには社会学的実態調査としての意味があったといえるが、組織形態上の特徴を総花的に概説することに終わっているという印象も否めず、読者に多くの関心をよびおこす啓蒙的な役割を果たしたとはいえ、組織分析として独自の知見を深めるまでに至らずその前段階で終わってしまったといえる。そして何よりも、キブツをその他の文脈から切り離してキブツそれ自体の内在的・静態的な研究に終始したことが、今振り返るとイスラエルのいわゆるシオニスト社会学者の研究スタンスを越えていなかったのである。

それに対し大岩川は、同じくイスラエルの「入植村」^{註62}を研究対象としながらもそれをシオニズム運動およびユダヤ人の入植史の展開と関連づけ、何よりもパレスチナ地域経済史の観点から捉えようとした^{註63}。経済地理学者であった大岩川にはパレスチナの現代史研究という視点からのユダヤ人の入植史研究という課題が出発点にあり、当時の内外の社会学者の多くがキブツの持つイデオロギー

^{註59} Oren Yiftachel, 'Israeli society and Jewish-Palestinian reconciliation: "Ethnocracy" and its territorial contradictions,' *Middle East Journal*, vol.51, no.4, 1997, pp. 505-519.

^{註60} 日本における社会学的研究の動向に関する詳細は、奥山眞知、「イスラエル・パレスチナの世界社会学的研究の動向と今後の課題」奥山眞知・加納弘勝編、『地域研究入門（4）：中東・イスラム社会研究の理論と技法』、文化書房博文社、2000年、196-232頁。

^{註61} 山根常男、『キブツ—その社会的分析』、誠信書房、1965年。山根常男、「家族の本質—キブツに家族は存在するか—」『社会学評論』52号、1963年、37-55頁。

^{註62} 大岩川は、キブツと並んでモシャヴもその研究対象にしている。キブツはあらゆる分野での共同所有を原理としたのに対し、モシャヴは、土地を除くすべての資産が原則として個人所有であり、農業経営が個人ベースで行なわれた。

^{註63} 大岩川和正、「中東戦争とイスラエル（Ⅰ）」『アジア経済』、第8巻10号、1967年a、91-106頁。大岩川和正、「中東戦争とイスラエル（Ⅱ）」『アジア経済』、第8巻11号、1967年b、120-113頁。大岩川和正、「イスラエルの政治変動に関する基本的視点」『中東総合研究』、第2号、アジア経済研究所、1975年、53-60頁。および、大岩川和正、『現代イスラエルの社会経済構造—パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究』、東京大学出版会、1983年。これは、1960年代半ばから1980年までの間に書かれたイスラエル・パレスチナ研究のうちの主要論文の遺稿集である。

のうちの「社会主義的」な側面に注目しその観点から評価を下そうとするものであったのに対し、大岩川は、キブツの持つもう一つの重要な側面である「シオニズム運動」との連関という観点をみのがさず、それを重視し、イスラエルの国家の論理をキブツ（入植村）研究を通して問おうとするものであった。こうした問題意識は、それと平行して進められたイスラエルナショナリズムの研究（シオニズムの論理の分析）へと受け継がれ、イスラエル国家論の先駆的研究ともなっている。この問題意識は、白杵が指摘するように^{註64}、まさに先に概観したイスラエルの「新しい歴史学者」や「批判的社会学者」の問題提起の先駆けをなすものだったともいえる。「イスラエルが真に、ユダヤ人問題を克服する方向は、イスラエル社会がシオニズムの論理を自己否定することであり、またそれなくしてはアラブとの平和共存の主体的契機を生みだせない」^{註65}という問題提起は、今日においても決して色あせていない。

大岩川の問題意識の深部には、「現代イスラエルのネーションの主体は何か」という問いがあった。このネーションの意味を国民ととるにしても民族ととるにしても、あるいは「『自由』や『権利』を要求する想像された集合体」^{註66}と捉えるにしても、これは今日イスラエルを研究する者にとってきわめて重要な視点である。そして「歴史的な視点」を重視する立場から「現代イスラエルの固有の歴史的性格」を見落とさないことが明確に自覚されているが、こうした問題意識と問題関心は現在白杵陽に受け継がれているとみることができる。

白杵は地域研究の視角から現代イスラエル研究に関する成果を1990年代以降精力的に著してきた。またポスト・シオニズム論争および「新しい歴史学者」の業績を紹介する論文も著している^{註67}。彼の主要著書の一つである『見えざるユダヤ人』のなかで、氏はその研究の意味を「ユダヤ人のなかにある『オリエント』的な契機を通して現代イスラエルの政治・社会・文化・宗教を読み直す作業」であり、「ミズラーヒム^{註68}のありようにこだわりつつ、現代ユダヤ・イスラエル研究と現代アラブ・研究というわが国ではまったく別個に存在した二つの研究分野に橋渡しを試みる」作業であると述べ

^{註64} 白杵陽、「現代パレスチナ・イスラエル研究へのプロローグ——故大岩川和正氏の業績に寄せて——」『中東の民族と民族主義——資料と分析視角——』（所内資料）、アジア経済研究所、1995年、16頁。および22-28頁。

^{註65} 大岩川和正、1967年a、105頁。

^{註66} 佐藤成基、「ナショナリズムのダイナミックス——ドイツと日本の「ネーション」概念の形成と変容をめぐる——」『社会学評論』、第51巻、第1号、2000年、40頁。

^{註67} 白杵陽、「真剣な議論が始まったポスト・シオニズム論争」『季刊アラブ』日本アラブ協会、1998年c、14-16頁。および、白杵陽、「イスラエル建国、パレスチナ難民問題、およびアブドゥッラー国王ー1948年戦争をめぐる『修正主義』学派的議論を中心としてー」『アジア学論叢』第4号、大阪外国語大学アジア研究会、1994年、183-216頁。白杵陽、「イスラエル現代史における『修正主義』——『新しい歴史家』にとっての戦争、イスラエル建国、そしてパレスチナ人——」『歴史学研究』第712号、歴史学研究会、1998年b、17-25頁。白杵陽、1997年aなど。

^{註68} ミズラヒム（注35参照）と同じ。

ている^{註69}。白杵は大岩川の問題関心を継承しつつも、大岩川によって分析の光があてられることのなかった「東洋系ユダヤ人」^{註70}に焦点をあて、「『国民国家』イスラエルのエスニックな現実」^{註71}を捉えようとしている。この議論では、「東洋系ユダヤ人」（ミズラヒム）は「アラブ・ユダヤ人」としてとらえられ、アラブ・パレスチナ・イスラエル人の疎外状況がアラブ・ユダヤ人／教徒であるイスラエルのミズラヒムの疎外状況と繋げて論じられている。この知的作業は、従来の「ユダヤ人」概念を脱構築し、イスラエルにおいても「不可視の存在」であったモロッコ系、イラク系、イエメン系、エジプト系などのユダヤ人／教徒とその移民を「可視」化させ、「オリエント」的な要素を内なる他者として差異化してきたシオニズムの「オクシデンタル（＝ヨーロッパ的）」な性格をあぶりだすものである。さらに、白杵の問題意識のなかではイスラエルのエスニック問題の本質が、正しく市民権の問題として位置づけられている。このことは、「国民」と「民族」と「国籍」という概念の、恣意的あるいは無意識的な重なりとズレ（ズラシ）に対する問題提起であるともいえる。この論点は本研究の第二章でさらに検討していくが、現代イスラエルのかかえる根本的な矛盾であると同時に、日本社会やその他の「国民国家」にも問われている理論的・現実的課題でもある。

さらに白杵は、「新しい歴史学者」や「批判的社会学者」達の業績と問題提起にも呼応しつつ、建国理念としてのシオニズムイデオロギーが、三つの要素によって今日揺らいでいることに着目している^{註72}。その三つの要素とは、「エスニシティ」、「宗教」、「ナショナリズム」であるが、それぞれの主体は、言い換えれば、イスラエル社会にあって、「内在的他者」であるミズラヒム、「宗教的他者」である「敬虔な超正統派ユダヤ教徒」、「民族的・外在的他者」であるパレスチナ人である。これらの三つの「他者」がそれぞれの自己主張をしている（していく）ことが、シオニズムイデオロギーを相対化し、結果として、イスラエル・ユダヤ人の在り方を批判的に見直す契機になるという白杵の議論には全く同感である。ただ、その揺らぎの「震度」については、先にも述べたように、筆者はまだ過大に評価できる状況にはないと考える。エスニシティや宗教的「他者」であるミズラヒムおよび「敬虔な超正統派ユダヤ教徒」の自己主張は、従来のシオニズムイデオロギーに対してはこれを相対化し揺らぎをもたらすものであるかもしれないが、場合によっては、「従来の」シオニズムイデオロギーをゆるがし相対化した結果、外在的他者であるパレスチナ人に対しては今まで以上に排他的な新たなシオニズムイデオロギーを強化する作用に通じるものであるかもしれない。この点にこそ、

^{註69} 白杵陽、『見えざるユダヤ人——イスラエルの〈東洋〉』、平凡社、1998年a、261頁。

^{註70} oriental Jews の訳。ミズラヒム（注35参照）とほぼ同義である。

^{註71} 白杵陽、1998年a、16頁。

^{註72} 白杵陽、「パレスチナ／イスラエル地域研究への序章—イスラエル政治社会研究における〈他者〉の表象の諸問題—」『地域研究論集』第1巻第1号、1997年a、67-91頁。

今後のイスラエル社会・国家論を考えていく際の根本的問題があるといえる。

他にも論文を中心にいくつかの研究があるが^{註73}、多くの議論は個別的なテーマに限定された部分的なものに終わっているのが現状である。しかしそうした論文から改めて感じさせられるのは、イスラエルの国内の変容や動向がいかに国際政治と関わって動いているかということである。その意味で、国際関係の視点は重要である。ただ、目の前でおこる変化があまりにも多く、情勢が流動的であるために、表面的な変化の分析と解釈に迫られるという危険性もある。一定の問題意識に貫かれた腰をすえた研究が必要であると思われる。

第四節 本研究の基本視角

本論の冒頭で本研究の目的は「イスラエルの政治文化の批判的検討」であると述べたが、これまでみてきたように様々な研究者がやはり「イスラエルの政治文化」を検討の対象としてきた。この過程の中で生み出された様々な概念には学ぶべき点が多い。例えば、キマリングの「植民者—移住者社会」(settler-immigrant society)や「『文民』軍国主義」といったイスラエルおよびその政治文化の捉え方、ラムによる、ポスト・シオニズム状況の中での「ラディカル・ポスト・シオニズム」と「リベラル・ポスト・シオニズム」および「ネオ・シオニズム」の分類、デイヴィスによって指摘された、イスラエル国家がその構成員に要求する「国家への忠誠」の過剰さ、ペレドやシャフィールが概念化している「リベラリズム、エスノナショナリズム、リパブリカニズムの混成体としてのイスラエルの政治文化」あるいは「エスノ・レパブリカン」という整理、スムーハによる「エスニック・デモクラシー」という類型化などはそうした例である。これらの研究は、イスラエルの政治文化の源をシオニズム運動、狭い意味ではイスラエル建国前の労働シオニズムのイデオロギーのなかに求め、その本質をこうした概念によって照らし出したともいえる。そして、普遍的な民主主義の基準に照らしたときにイスラエルの政治文化が様々な問題を含んでいるという認識の共有に至っている。

しかしこれらの研究は、こうしたイデオロギーを提供した側、言い換えれば、シオニズム運動の指導者の側に分析の照準が当てられている。しかし、ある社会や国家において何らかの政治文化が継続的に存続しうるのは、指導者が提供するイデオロギーを「受容する」人々が存在し、またそれを支えるような社会的構造があるからである。従って、或る政治文化が形成されたのは何故かという問いへ

^{註73} 池田明史編、『現代イスラエル政治—イシューと展開』、アジア経済研究所、1988年。池田明史編、『中東和平と西岸・ガザ占領地問題の行方』、アジア経済研究所、1990年。池田明史編、『イスラエル国家の諸問題』、アジア経済研究所、1994年。など。

の説明と同時に、それが維持されるのは何故なのかという問いについても説明がなされる必要がある。今日のイスラエルの「政治文化」は「知」の提供者と受容者の相互作用の結果である。本研究では、この受容者である「普通の人々」の内的世界にもふみこんで、「政治文化」が維持されているのは何故かという問いに解釈を試みたい。「普通の人々」という概念設定は必ずしも適当とは思わないが、より適当な概念が他に見あたらないので、あえて用いることにする。その含意は、超正統派ユダヤ教徒ではない人々、政治的な指導者や政治的な意志決定の権力を持たない人々である。また議論の性質上、対象はユダヤ・イスラエル人に限定する。

ただし、「普通の人々」の内的世界や政治意識にふみこむことは困難なことでもある。本研究ではそれを探るための一つの補助的方法として、限定された形ではあるが聞き取り調査を実施した。あらかじめ聞き取り調査の主旨と基本的な質問項目を印刷した調査票を日本から事前に郵送し、記入の協力が得られていた人々に、現地に着いてから個別に面接し、質問票をもとにしながらさらに詳しい聞き取りを行った。対象者は様々な制約から友人の職場の人々に協力を依頼した。それは、エルサレムにある大蔵省の統計局職員とその家族や友人を中心とした二十二名である。当初は、高校生、兵役中の若者、ミズラヒムの移民をほぼ同数ずつ計画していたが、結果的には1) 高校生が五名、2) 兵役中の若者と接触することは時間的に困難だったため兵役を終えたばかりの若者と大学生および二十代から三十代前半の若者とで計六名、3) また移民として、モロッコからの移民四名、アルジェリア移民一名、アルゼンチン移民二名、ルーマニア移民一名、ロシアからの最近の移民三名の計十一名、合計二十二名である。従って、対象者の選定は大いに「偏った」ものになっている。まず、ほぼ全員がエルサレムおよびその近郊の住人であり、職業的には大多数が同一職場の同一職種およびその家族であり、またほぼ全員がいわゆる「中間層」に属している。ラムの概念を用いれば、ほぼ全員が「リベラル・ポスト・シオニスト」か「ラディカル・ポスト・シオニスト」あるいはその予備群にも一見みえなくもない。もしエルサレムとは違った都市や村、あるいは、異なる階層や世代の人々に対象者を選定していたらまた別の回答が得られたのかもしれない。また二十二名という数も、質的調査としてさえも決して十分とはいえないであろう。

しかし、筆者はこうした「偏り」を自覚したうえで、分析の材料に用いる有効性はあると考えている。というのは、聞き取りを進めていくうちに強められていったことであるが、一人一人の回答には全く別々のそれぞれの内的世界があるということに気づいたからである。また当然といえば当然のことであるが、一人一人の回答にはそれなりの、或る種の「代表性」というものがあり、数の多少や対象の「偏り」は本質的な欠陥ではないと思うようになった。極端に言えばたった一人の聞き取りのな

かの「個別の世界」に「普遍的世界」を読みとり、またその両者の相互作用を読みとることはできるのである。とはいえ、筆者はこの聞き取り調査をもって十分な分析にたえうと思っているわけではない。あくまでも「普通の人々」の意識を探る第一歩として用いてみたいと思う。

さらに「批判的社会学者」達は、過去の分析を通してイスラエルの政治文化の諸問題に迫ってきたが、今後のイスラエル、特にシオニズムの行方に大きな関心を寄せている。そしてすでに指摘したようにその展望は「シオニズムの相対化」という点でほぼ一致した認識をみせているといえる。筆者は、これもすでに指摘してきたように、この展望に疑問をなげかけたい。

その上で本研究は、「『抑圧される民族』から『抑圧する民族』に転化したにもかかわらず、そのような者として自己を対象化できず、さらに、『他者否定的』な意識によって人権感覚が二重基準となっていることにも無自覚であるのはなぜなのか」、さらに言い換えれば、「ホロコーストの犠牲者がホロコーストの普遍化をなしえていないのはなぜか」、という問いを課題の軸にすえ、イスラエル国家とその政治文化を批判的に考察しようとするものである。またこれは、現代社会およびイスラエルに対する筆者の以下のような問題意識とかかわっている。

第一に、イスラエル国家成立の背景を考えたとき、国家形成に至る経緯と論理の正当性ということについて、疑問を拭いきれないものがある。国家形成に至る背景には、ヨーロッパにおけるユダヤ人問題、反ユダヤ主義、シオニズム運動、ホロコースト、国際政治上の中東への英国の関与など複雑な事情が絡み合っているが、シオニズムという、主体的認識としては「ユダヤ人の民族解放」としてとらえられたナショナリズムが、現実のイスラエル建国を可能にしたという点が重要である。この論理は「民族自決」という大義にてらして正当化されてきたからである。しかし一方でパレスチナ問題というあらたな民族問題、「外国人」問題をうんだことは改めていうまでもない。パレスチナ人のデュアスポラ化が進み、同時にイスラエル支配に組み込まれるパレスチナ人が増大していくなかで、イスラエルを構成する「国民」の比率も大きく変わってきた。すなわち、ユダヤ人移民はなお継続しているものの、「イスラエル生まれのイスラエル人」が過半数になり、他方では、「アラブ系イスラエル人」の比率が少しずつ上昇し、占領地下のパレスチナ人を加えた場合、「ユダヤ系イスラエル人」は近い将来にマジョリティからマイノリティに転化するという予測もだされている^{註74}。ここにわれわれは、「ユダヤ人国家」をめざしたイスラエルが、そのようには展開していない現実と、イスラエルの

^{註74} Sergio Dellapergola, 'Demography in Perspective,' *New Outlook*, vol.34, no. 1, 1991, p.27. 今日イスラエルの支配下にあるユダヤ人对パレスチナ人の実質的な人口比は、約54%対46%であるが、パレスチナ人を最も少なく見積もった資料を用いた場合でも、その人口予測によると、ユダヤ系イスラエル人と歴史的なパレスチナに在住するパレスチナ人との割合は、2015年に等しくなり、2020年には、ユダヤ系イスラエル人は48%になるという見通しである。

抱えている矛盾をみるのである。

一方、われわれをとりまく現実の社会の変化のなかで、国民国家は様々な変貌をとげてきており、日本社会もその例外ではない。こうした変化は端的に「国民国家」の相対化としてとらえられるが、現代の国家と国家の構成員をめぐる議論や国家と市民権をめぐる議論、あるいは多文化主義をめぐる議論が盛んにもなってきた^{註75}。これらの議論は、「国民国家」のありかたを模索するうえでの理論的素材となるものである。イスラエルという特異な国民国家のありかたは、一民族一国家としての究極の国民国家をめざそうとしたにもかかわらず決してそこには到達しえない、矛盾と限界に満ちた国家として目の前にあるのであり、その諸問題の中に、われわれは上記の理論的課題のための素材を探することができるはずである。そして他方では、矛盾と問題に満ちているといっても、「イスラエル生まれのイスラエル人」が過半数を超えたイスラエルの存在は、経緯においていかに正当性への疑問が残るとしても、その存在自体を否定することは、もはや非現実的である。そうであるとすれば、国際社会の中においてはもとより、中東地域においてイスラエルがいかに周辺諸国と共存しうるのか、イスラエルがパレスチナ人をどのように承認し、またパレスチナ人によってどう承認されうるのか、ということへの展望が模索されなければならない、イスラエル・パレスチナ研究は、こうした文脈と課題のなかに位置づけられなければならないといえる。

このように、イスラエルがつきつけている問題を考察することは、イスラエル研究の蓄積に新たな蓄積を加えうるか否かという意味だけではなく、現代社会における国家と民主主義の行方を考えるうえでそこからどのような教訓をひきだすことができるかという意味とも連なるものである。

^{註75} アンダーソン、『想像の共同体』、リプロポート、1987年。(Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Verso, London, 1983.) ルナン、「国民とは何か?」『批評空間』、第九号、1993年。(Ernest Renan, 〈Qu'est-ce qu'une nation?〉, in *Euvres Complètes*, vol.1, ed. by Calmann-Lévy, 1887=1882, pp.277-310.) ルナン 他、『国民とは何か』、河出書房、1997年。バリバール／ウォーラーステイン、『人種・国民・階級』、大村書院、1995年。(Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein, *Race, nation, classe*, Editions La Découverte, 1990.) マーシャル／ボットモア、『前掲書』。井上俊ほか編、『民族・国家・エスニシティ』、岩波書店、1996年。テイラー／ハバーマス ほか、『マルチカルチュラリズム』、岩波書店、1996年。(Charles Taylor, K. Anthony Appiah, Jürgen Habermas, Steven C. Rockefeller, Michael Walzer, and Susan Wolf, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton University Press, 1994.) など。

第二章 イスラエルのシチズンシップにみられる二重基準

この章では、イスラエルの政治文化を規定する重要な要因である法的側面に焦点をあてながらそれらを具体的に検討し、さらにそれらの法律の現実的適用のいくつかの事例を紹介することで、イスラエルの政治文化がなぜシチズンシップの「歪み」と捉えうるのかを指摘していきたい。しかしその前に、基本的な認識枠組みとして国民国家、グローバリゼーション、シチズンシップの関係について整理することから始めたい。

第一節 国民国家、グローバリゼーション、シチズンシップ

1 国民国家の変容

国民国家の形成は十九世紀の後半ヨーロッパに始まり、その後非ヨーロッパ世界に伝搬しながら普遍化し、またその性格も変容してきた。なかでも、今日の社会を特徴づけている様々な領域でのグローバリゼーションの進展は、「国民国家」に対しても影響を与えずにはおかず、世界的な規模で「国民国家」を相対化することを加速してきたといえる。具体的には、国家や社会間の相互依存関係が深まっていること、また、一つの国家のなかに存在する組織や集団の多国籍化や、国家の構成員の多民族化が進んでいるという現象、また政治的、経済的、社会・文化的な人々のアイデンティティの対象が今や必ずしも国内にとどまっていないことなどを考えてみれば十分であろう。これらは、「国民国家」を直ちに解体するものではないが、政治・経済・社会・文化のどの領域も、「国民国家」を一つのいわば完結した単位としてみるものが成り立たなくなっていることを意味している。そして、人々は、容易に「国境」を越えて移動し、ネットワークをつくり、あるいは「国家の論理」や「国益」を離れた独自の自律的な動きを起こしている。この動きは、人間に限ったことではなく、資本、情報、モノについてもいえることである。こうした様々な現象は、国家に対する遠心的ベクトルとして作用するのである。

ところで、「国境を越える人の移動」という行為や現象それ自体は、もちろん特に今日的な現象というわけではない。しかし、時代と共に、その空間的な規模と人的規模は、拡大の一途をたどってきた。それには、物理的・心理的壁や障壁が次第に取り払われ、移動を促進しまた可能にする状況がつくられてきたことと同時に、人々に移動を強いるような政治的・社会的・経済的要因が現われ、増大

してきたということがかかわっている。二十世紀は、人々の移動の質と規模がそれまでの世紀とは大きく異なり、とくに、難民、および国際労働力移動という点から見て、大量の人々の移動を地球的な規模で産みだしたといえる。

日本社会の現況について考えてみても、資本、情報、モノはいうまでもなく、大量の人々の海外からの流入と又海外への流出が著しい。人の移動という点では、特に1980年代以降急増している外国人労働者、留学生、研修生、就学生が存在や、海外での日本人労働者、海外への旅行者、ワーキングホリデーなどの中期滞在者、留学生の増加ということに認められる。日本社会も多国籍・多民族化への歩みの加速度が着実に増してきている。その意味で、日本でも「国民国家」は確かに相対化しているが、反面、「内」と「外」をことさらに強調するような風潮がめだつようにもなってきた。例えば、「外国人不法就労者」の増加を犯罪の増加に安易に結びつけようとする報道の在り方や、海外での日本人を巻き込んだ犯罪を「ねらわれる日本人」「危ない外国人」という図式で捉えようとする情報や認識の在り方は、「想像の政治共同体」^{註6}にすぎない国民という概念を、「非」「国民」＝外国人と対比させることで、排他的な「日本人の同胞意識」を醸造する危険性をはらんでいる。

国際労働力移動という文脈でいうならば、日本よりも早くから外国人労働者が流入し、「多国籍・多民族化」が進んでいる西ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国などでは、外国人労働者の定住化にどのように向き合っていくかということがいよいよ緊要な課題となってきた。ネオ・ナチの台頭のように、異質集団への排他的な運動がみられる一方、民主的な在り方を模索する試みがみられることにも注意しておきたい。「ヨーロッパ市民権」や「北欧市民権」の実施にむけた取り組みや、デニズンという概念と実態への着目^{註7}、多文化主義的な政策などは、そうした現われの例である。中東産油国でも、大規模な国際労働力移動がみられるが、非アラブ諸国からの労働者の場合はアジア諸国からであることが多いが、大部分は契約労働者で非定住型であり、その割合も少ないので、西欧やアメリカほどの多民族化には至っていない。また、アラブ諸国からの労働者である場合は、この地域はかれらにとってもともとボーダレスなものとして意識されていたとも思われ、その意味では国家は初めから相対化しているといえる。しかし、近年産油国にみられる労働力の自国人化（外国人労働者の排除）は、「国家主義」的政策の一種の現われでもある。

また、1980年代末以降の東欧の民主化や旧ソ連の解体という社会変動を経て、東ヨーロッパに多くの新たな「国民国家」が誕生した。ここでの共通点は、一国内における民族的な対立が、国家から

^{註6} B.アンダーソン、『想像の共同体』、リプロポート、1987年、17頁。（Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Verso, London, 1983.）

^{註7} T.ハンマー、『永住市民と国民国家』、明石書店、1999年。（Tomas Hammar, *Democracy and the Nation State*, Aldershot, Avebury, 1990.）

の分離主義的な運動や独立の要求へと発展し（この段階では、アンチナショナル）、しかし最終的には、新たな国家的枠組みを形成しようとした（している）（ナショナルなものの追求）^{註75} ことにあ
る。

こうしてみると、国境を越える人々の移動の規模の拡大は、その必然的結果として異質な集団との接触を加速度的に進展させ、さらにこれは「国民国家」の「異質度」を高めるものとして作用してきたと捉え直すことができる。「国民国家」を相対化・形骸化していく遠心的ベクトルとして作用するこうした社会変容は、逆説的にも、「国民国家」を均質的に維持しようとする、既存の国家に対する求心的ベクトルを産み落とすことにもなった。1980年代末以降顕著に噴出しだしたナショナリズム、新人種主義、ネオ・ナチなどの動きの背景には、冷戦構造の崩壊という要素に加えて、「国民国家」内での「異質度」の高まりという要因が見落とせない。上記のような現象に共通するのは、同質集団内での結束の高まりが異質集団に極めて排他的なベクトルとなって向けられていることである。つまり、グローバリゼーションの一側面である「国民国家」の相対化現象は、「国家主義」の台頭やエスニック集団間の対立・緊張をもたらし、逆説的に、「国民国家」を新たに誕生させていくという潜在的可能性を強めているともいうことができる。

2 国家と「外国人」という視点

国境をこえる人々の移動がますます増大し、国家や社会を構成する人々の「異質度」が今後さらに高まっていくことが必須だとするならば、21世紀の国民国家の課題は、異質な集団に対する排他的な「国家主義」をどう乗り越えられるかにあるといつてよい。言い換えれば、国家の中に「外国人」をつくらないということではないだろうか。国家と「外国人」の問題は、過去の問題であると同時に、現在のさらに今後の問題として一層重要になると思われる。言い換えれば、今日すべての国家はこの問題に対する問題解決能力を迫られているのであり、その国家の民主主義の水準、排他的国家主義に陥らない国民の能力が問われているといえる。

さて、一般的に外国人という概念は、自国の国民ではない人、もしくは外国籍の人をあらわす言葉である。しかし現実には、この外国人概念ではその境遇をあらわし得ない人々が存在している。たとえば、国籍は所有しているにもかかわらず（デヴィスのいう、「パスポートシチズンシップ」はあるにもかかわらず）特定の「国民国家」内において「正統な、由緒正しい国民」とはみなされない人々、あるいは、「国民」が享受している市民的諸権利から閉めだされている（いく）人々（これも

^{註75} 馬場伸也、『アイデンティティの国際政治学』、東京大学出版会、1980年、227頁。

デヴィスの概念を借りれば、「民主的シチズンシップ」の水準が他の「国民」とは異なる人々）などがそうである。この場合、彼／彼女らは行政的にはその国の「国民」であるにもかかわらず、「外国人」であるといえる。また、国籍を持たない人も、一般的意味での外国人ではないし、もちろんどこかの「国民」でもない。いえることは、彼等は「国民」ではない人だということである。また、二重国籍や三重国籍の人々は、「国民」でもあり一般的意味での外国人でもあるが、状況によっては「外国人」と認識されることもある。

ここで、あえて「外国人」という視点を設定することが分析上どのような利点と意味をもたらすかを指摘してみたい。第一に、一般的意味での外国人は国家にとって保護の対象の外にある。そしてそのことは批判の対象にはならない。それどころか、外国人は時には国家による暴力の対象ともなってきた。戦争は外国人に対する暴力を正当化しうるのである。ということは、もし国家がある特定の集団を「外国人」と認定した瞬間に、対象者は保護の対象ではなくなり、暴力の対象にもなりうるということに通じる。これは架空のたとえ話ではない。過去の内外の歴史や現在の出来事のなかから、国家によって「外国人」にされた（されている）人々を発見することは、そう困難なことではない。従って「外国人」という視点と概念の設定は、「国家の論理」がもつ暴力性をよりみえやすくするといえる。

次にこれは、「外国人」問題がシチズンシップの問題であることを明瞭にする。従って、シチズンシップというものを、「国籍」という観点と、「諸権利の平等な保証」という観点と、その実質的な運用という観点と、さらには人々（「国民」）の意識の面から検討することを促すことに通じる。人々（「国民」）の意識の面という意味は、たとえばもし「国民」に特定の集団に対する差別や偏見がある場合、「外国人」は容易にうまれやすくなるからである。シチズンシップはこれらの四つの側面を総合して評価することで、現実特定の国家の中に居住する様々な人々の異なった様相を浮きぼらせることになる。

第三に、本研究と間接的にかわりをもつユダヤ人問題とパレスチナ問題を、筆者は一般にいわれる「民族」問題としてではなく、「外国人」問題として捉えたいと考えるからである^{註9}。「民族」問題として捉える限り、イスラエルの建国は「民族自決」の名において正当化され、パレスチナ人を「外国人」化する（している）ことに盲目になってしまう。同時に、これに対抗してでてくるパレスチナ人の抵抗の論理は対「国家の暴力」にはむかわず、「民族的」な対立を過度に自覚させる。その

^{註9} 奥山眞知、「ボーダレス社会と『外国人』問題——『ユダヤ人問題』再考とパレスチナ問題の諸相」、奥山眞知・田巻松雄編『20世紀末の諸相—資本・国家・民族と「国際化」』、八千代出版、1993年、1-33頁。

結果、自らの（パレスチナ人の）民族（国民）国家の建設を展望してしまう悪循環をたちきれないからである。つまり、「国民国家」からはじきだされたユダヤ人の問題とイスラエルが「国民国家」からパレスチナ人をはじきだしている問題が「外国人」問題として通底していることが、「民族」問題という捉え方によっては見えてこないのである。

ユダヤ人問題は、ユダヤ人と国家との関係が「非」「国民」→「国民」→「国民」からの排除→イスラエル国家建設による「国民」の地位の確立→パレスチナ人の「外国人化」という経過をたどったと捉え直すことが可能であり、この意味で、ユダヤ人は二重の意味で「外国人」問題の当事者となったといえる。一度目は「外国人」にされた側として、二度目は「外国人」をつくりだした側として。

第二節 多文化主義、同化主義、相互隔離主義

それではここで、多様な構成員をかかえる現代の国民国家が「国民」形成をはかっていく際にどのような統合の原理があるかを考えてみることにする。シチズンシップや「異質な他者」に対する寛容度という尺度から見た場合、一方の極に「多文化主義」を、他方の極に「一民族一国家」という統合政策を置いて考えることは、やや単純化しすぎているかもしれないが、全般的な議論でもないであろう。多文化主義を問題にする国家とは、一定の民主主義がすでに実現されている国家である。すなわちそうした国家では、「承認」^{注90}が行われる政治の場において、自由、平等、人権などを保障する法的整備が基本的に整っており、問題にされるのは、自由と平等の「両立」というさらに高度な課題である。今日のヨーロッパの国々やカナダ、アメリカ合衆国、オーストラリアなどは、そうした課題に向き合おうとし「異質な他者」を肯定する関係を模索しているといつてよい。

なお、筆者は、多文化主義の議論をより広い文脈で考えることが可能であり、またそれが必要であるという立場にたつものである。つまり、多文化の文化を民族的文化やエスニックな意味に限定せず、「行動の様式あるいは実践系」^{注91}もしくは「生き方の流儀」の意味にまでひろげ、広義に解釈したい。そうすると、「異質な他者」とどう向き合うかあるいは様々な「差異」との共存という課題における「異質な他者」とは、国籍上の差異、民族的差異、人種的差異はもとより、性差、階級差、年齢差、健常者—障害者という差異、その他のありとあらゆる様々な差異からみた、それぞれにとつての「他者」である。この意味で、「多文化主義」が提起している問題は、全ての国家や社会に関わ

^{注90} C. テイラー、「多文化主義、承認、ヘーゲル」『思想』、岩波書店、1996年7月号。

^{注91} 酒井直樹、「ナショナリティと母〔国〕語の政治」、酒井直樹他、『ナショナリティの脱構築』、柏書房、1996年、13頁。

りを持っているといえる。

われわれの日常生活のなかでとり結んでいる具体的な人間関係を想定した場合、たとえば一緒に生活するパートナー、同居人、ルームメイトなどの相手として一番すごしやすい関係は、相手に対する寛容さをそなえ、他者を肯定し、またその他者である相手によって自分自身も肯定されているという関係が成り立つときである。つまり、この関係にはお互いの間に「相互肯定的」な人間関係、言い換えればテイラーのいう「適切な承認」が存在しているといえる。もちろん、個人対個人の人間関係を、個人対集団や集団対集団の関係、もしくは集団と国家との関係と同じレベルで議論することには無理があるであろう。そこには多くの吟味すべき問題が残されている。しかし、テイラーが「現代の政治の多くの要素は、承認の、時にはその要求をめぐって展開している。」^{註92}というとき、今日の多くの集団間関係や集団と国家との関係が、「他者」を否定することによって自己を肯定する在り方に陥ってしまっているということが改めて確認できる。多文化主義を模索している上記の国々がこの意味で「相互肯定的」なアイデンティティの承認のありかたをすでにもう実現しているというわけではもちろんないが、少なくとも差異と平等をめぐる議論が成り立つ政治文化の土壌と社会的・法的枠組みを有しているといえることができるのである。

「多文化主義」の定義は一樣ではなく、論者によって議論の力点も異なるが、共通点を析出するとすれば、文化的な差異と社会統合の両立を志向するものとして「多文化主義」を捉えていることである。もっとも「多文化主義」の適用にも様々なジレンマがあり、「多文化主義」に対する理論的批判もないわけではなく、その評価には慎重でなければならないのはいうまでもない。そうした批判の一つに、これを「本質主義的文化主義」であるとする見方がある^{註93}。こうした批判によれば、「多文化主義」は、文化を民族やエスニック集団に過度に対応させており、同時に文化を有機的統一体とみているとされる。この批判が批判たりうるのは、以下のような意味においてであろう。つまり、文化を民族やエスニック集団に対応させその文化的差異を重視することは、「本質主義」や「差異主義的人種主義」（文化的差異に基づく人種主義）へ、一步誤れば路をあけわたす危険性をはらんでいるからである。「多文化主義」が文化の尊重という性質をもっていることは疑いがなく、その意味ではそれぞれの文化の「境界」の消滅よりは「維持」を志向していることになる。

「多文化主義」はこの「境界」の消滅の有害さを強調する「新しい人種主義」に転落してしまうのだろうか？カナダやオーストラリアなどで「多文化主義」が導入された経緯をみると、多様性を認め

^{註92} テイラー C. / ハバーマス J. ほか、『マルチカルチュラリズム』、岩波書店、1996年、37頁。
(Charles Taylor, K. Anthony Appiah, Jürgen Habermas, Steven C. Rockefeller, Michael Walzer, and Susan Wolf, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton University Press, 1994.)

^{註93} 酒井直樹、『前掲書』、46頁、および16頁。

ながら（傍点は筆者）社会統合を目指そうとする視点から、「多民族、多文化社会の政治統合の手段としてまた移民、難民、外国人労働者の増加対策あるいは周辺民族集団対策として導入されている」^{註84} といえ、「『たんに』境界の消滅の有害さだけを、生活形態や伝統の両立不可能性だけを仮定しているような（新しい）人種主義」^{註85} とは異なるという反論が成立するだろう。

さらにいえば、「多文化主義」の「出自」が何であれ、先にも述べたように、「文化」というものを民族やエスニック集団の文化に限定せず最大限広義に解釈し、そしてそれを「多文化主義」の文脈のなかにおいて考えることによって、「多文化主義」が民族やエスニック集団に特定される文化本質主義につながりかねないとする上記の批判ものりこえることが可能である。

われわれが確認しなければならないのは、現実の国民国家は「国民統合」や「社会統合」という課題をかかえており、その国家が様々な「他者」の集合体であるという明らかな事実である。この課題と事実の前で、「他者」をどう「承認」していくかという極めて今日的な課題に対し、「多文化主義」が「同化主義」や「相互隔離主義」より一步先んじているのは確かなのである。

一方、複数の文化や集団との共存を前提としない、「異質な他者」の存在そのものを否定するような、「一民族一国家」というイデオロギーによって支配されている国家や人々が存在する。今日の社会が、構成員の異質度を高め、「異質な他者」である集団との接触を増す方向に変化しつつあることを考えるとき、この理念は、現実とのずれおよび摩擦を生じざるをえない。その意味で、時代錯誤的でさえある。そして、ここで最も問題にされるべきことは、国家やそれぞれの「市民」が、「他者」のアイデンティティや文化、文化の価値や文化の価値の平等性、「他者」の市民的・政治的・社会的・物的、経済的諸権利や国籍の付与などに対して、「自己肯定・他者否定的」ともいうべき「歪められた承認」を受け入れてしまうとしたら、そうした政治文化がどのように、また何故（再）生産されてしまうのかということである。

本研究が分析の対象とするイスラエル国家は、「一民族一国家」イデオロギーを追求してきた国家の典型として捉えることができる。そしてイスラエルに特徴的なのは、「同化主義」的な統合という選択肢を徹底的に排除し、「非ユダヤ人」であるパレスチナ人に対しては、「相互隔離主義」ともいうべき政策が一貫してとられてきたことである。通常の移民国家の場合、移住者は、移住先の既存の社会や国家のなかで、一つのマイノリティグループとして（国によってはマジョリティグループの場合もあるが）先住民と出会い、多かれ少なかれ、その社会や国家への適応ないしは同化、融合、共存

^{註84} 関根政美、「国民国家と多文化主義」初瀬龍平編『エスニシティと多文化主義』、同文館、1996年、42頁。

^{註85} バリバー、^{註85}「『新人種主義』は存在するか？」、E.バリバー/I.ウォーラーステイン、『人種・国民・階級』、大村書院、1995年、38頁。

を迫られる。ただし、アメリカ合衆国の形成過程におけるインディアンと入植者の関係や、オーストラリアの国家形成過程におけるアボリジニと入植者の関係などはそうはいえない。またいうまでもなく、多くの植民地の建設も（この場合は国家形成とは異なるが）そうはいえない。イスラエル国家が植民地主義国家であるといわれる理由もここにあるのであるが、イスラエルの場合、パレスチナ人という先住民は存在したとはいえ、政治的シオニズム運動の最終的目標はユダヤ人国家の創造であり、既存のパレスチナ社会への適応や同化、融合、共存という視点は一部の「傍流の」シオニストをのぞいて存在しなかったといえる。シオニズム運動の出発点においては、「新参者」としてパレスチナ社会へ同化するという受け身の姿勢ではなく、西洋の「文明」によってパレスチナ社会を「啓蒙」し、「つくりかえて」いくという意識が主流であったのであり、ユダヤ移民の役割は、そのような「新しい」社会・国家創造の推進者として位置づけられた。

一方、そのほかの国家形成／国民統合の場合では、「同化主義」という政策がとられた例も少なくない。日本もまた、アイヌ、植民地期の朝鮮人・台湾人、沖縄（琉球）の人々に対して、同化主義を進めてきた国家であるし、ドイツも「第二帝政」期に国内の文化的に異質なマイノリティ集団に同化政策をしいた。しかしその後ドイツは同化主義を離れ、またドイツのネーション概念は変化し、「ドイツ民族強化」政策の下に「非ドイツ人」が排除されていったことは周知の通りである。また逆に、今日多文化主義の先進国の一つとして知られるオーストラリアの先住民族政策は、遡れば「放任」、「隔離」に始まり、「同化」という政策の過程を経て、今日の「自決」あるいは「自己管理政策」に至っており^{註66}、あいだに同化主義がとられている。このように、一国の政策において、国家や国民の統合原理は変化することは珍しいことではなく、また「同化主義」といっても国によってその内容は様々ではない。たとえば、1871年から1945年のあいだの日本とドイツの同化政策を比較すると、「日本政府は帝国支配秩序の維持に役立つ限りで同化政策を遂行し、同化の方針が基本的に最後まで維持され、帝国支配の必要性から次第に強化されさえしたが、ドイツではポーランド人マイノリティを「ドイツ国民」とする法的枠組みは維持されたものの、彼等をドイツ人からエスニックに異質化する政策や運動が次第に顕著になっていった。」^{註67} しかし一般に、同化主義の底流にあるのは、同化かさなければ排除か、という論理であり、「異質な他者」の存在に対して不寛容であるという点で、「相互隔離主義」と共通している。言い換えれば、同化主義も相互隔離主義も、本質においては、「異質な他者」の存在を否定し「一民族一国家」を求めようとしているという意味において通底して

^{註66} 鎌田真弓、「先住民族との『和解』：オーストラリア・ネーション創造のプロセス」、細川弘明・窪田幸子編『先住権時代のアボリジニ社会と伝統文化の動態』、国立民族学博物館共同研究会報告論集、近刊。

^{註67} 佐藤成基、『前掲書』、2000年、45頁。

いるといえる。

第三節 イスラエルと「一民族一国家」イデオロギー

この節ではイスラエルの統合原理のなかに「非ユダヤ人」の排除という本質が一貫して認められることをみていくが、イスラエルが拠って立つ国家・国民統合の基本的前提がもっとも象徴的に示されている、ベン・グリオンによる1948年の「イスラエル建国宣言」から検討したい。しかしその前に、イスラエルの建国前に、労働シオニズムを中心とするシオニズム運動によってすすめられた土地政策の基本的特徴について触れておくことが必要であると思われる。

今日イスラエル国土の90-92%は国家的・公的所有といわれている。そうした土地の大部分はイスラエル建国前に「ユダヤ民族基金」^{註88}の資金をもとに、1908年に設立されたパレスチナ土地開発会社^{註89}によって、パレスチナ・アラブ人の不在地主から購入したものであると考えられる。ここで注目すべきであるのは、ユダヤ民族憲章には、一度取得した土地は二度とアラブ人には売ることができず、そのような土地でアラブ人を雇うこともできないということがもりこまれていたことである。この基本的方針は後にみるようにイスラエルが建国されてからも受け継がれていくことになる。またこうした土地購入はパレスチナ・アラブ人の小作人の生活基盤を奪い破壊する結果をもたらすものであった。こうして「民族的」な土地所有が進められていったことに加え、1948年前後の戦時状況によってさらに新たな土地が獲得された。それは今日「新しい歴史学者」達によって再解釈され、ポスト・シオニズム論争の論点ともなっているアラブ難民の創出時に、彼等の土地を獲得（収奪）したことによるものである。

そのもっとも象徴的な事件として1948年のディール・ヤスィン村の虐殺^{註90}をあげることができる。

^{註88} 世界シオニスト機構 [「ユダヤ民族を保護することになる家の礎石を置く。」というシオニズムの目的の実現のために1897年に設立された。]に代わって、ユダヤ人の入植のための土地をパレスチナに購入する目的のために、1901年に設立された。引用は、第一回シオニスト会議でのヘルツェルの演説の表現からの抜粋。ラカー・ウォルター、『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』、第三書館、1987年、153頁。(Walter Laqueur, *A History of Zionism*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1972.)

^{註89} ルピン (Arthur Ruppin 1876-1942) によってつくられ、世界シオニスト機構執行部の意を受けてユダヤ民族基金や私企業のためにパレスチナの土地購入を行った。1947年までに、当時のユダヤ人による全所有地の約70%はこの組織を通じて購入された。

^{註90} 1948年4月9日、エルサレムの西郊外のアラブ人の村ディール・ヤスィンが、ユダヤ人の修正主義シオニスト地下組織エツェル (IZL) とレヒ (Lehi) によって襲撃され、655人の住人のうち、256—110人が虐殺された。この組織の当時の指導者は、後の第七代首相のメナヘム・ベギンである。虐殺された人々の数については必ずしも一致していないが、上記の数字はイスラエルのAIC (Alternative Information Center) の資料による。<http://www.aic.org>。他の資料では、250—120人という数字もある。ed. by Susan Hattis Rolef, *Political Dictionary of the State of Israel*, The Jerusalem Publishing House, Jerusalem, 1993, p. 75.

そこで起こったことの意味は、一つの村の痕跡そのものをなくすということであり、そのことによって一つのアラブ（パレスチナ）の村およびその人々の存在を、歴史的に存在しなかったものとして消してしまうことであった。さらに、この事件は、パレスチナのアラブ人社会に生命の恐怖をもたらし、多くのパレスチナ・アラブ人が家や村を去るきっかけともなったのである^{註91}。たとえば、表2-3-1にみられるように、1947-1948年の第一次中東戦争の直接的、間接的影響により、1949年の半ばまでに350以上のアラブ人の村が放棄された。このうち、アラブ人の村としての痕跡を消された数は284と推定されている^{註92}。

表2-3-1 1947-48 戦争前後期のアラブ人村の推定数

地域	村の数		1945-1950年の間に 放棄された村
	1945年	1950年	
ハイファ	48	6	42
アッコ	49	27	22
ナザレ	27	22	5
ツファド	73	4	69
ティベリア	21	2	19
ジェニン	8	3	5
ベイト シアン	24	1	23
トゥルカレム	33	28	5
ロッドーラマラ	58	0	58
ジャッファ	23	0	23
エルサレム（含ベツレヘム）	28	3	25
ヘブロン	15	0	15
ガザ	45	0	45
計	452	96	356

出典：Baruch Kimmerling, *Zionism and Territory*, University of California, Berkeley, 1983a, p.123.

1 イスラエル建国宣言

通常、その国家の性格を考える場合、その国の「独立宣言」や憲法を一つの目安にすることができ
る。イスラエルでは憲法がなく、その代わりとなる「基本法」が順次つくられてきた。この背景につ
いて、元法務副長官シュロモ・ガバーマンは次のように述べている。以下要約。

^{註91} パレスチナ人が、自らの家や土地をどのようにして追われたかという経緯については、Nafez Nazzari, *The Palestinian Exodus from Galilee 1948*, The Institute for Palestine Studies, Beirut, 1978. のモノグ
ラフに詳しい。

^{註92} Baruch Kimmerling, 1983a, p.123.

「イスラエル建国前に憲法制定にむけての準備も進められていたが、二つの理由から実現しなかった。一つは、建国宣言後の戦争の継続のため、憲法制定のための国民議会（国会）開催が予定された1948年10月までには開催されなかったこと、もう一つは、一方では大量の移民の流入があり他方では宗教諸党がトラ（ユダヤ教の律法）以外のいかなる憲法にも反対しており、この二つが相まって、憲法作成以外の方法を考えることが必要になったからである。というのは、大量移民が流入している最中であつては、憲法制定は時期早尚であり——イスラエルが掲げる理想を、将来の世代に対して、現存するイスラエルの人々がおしつけるべきではないから——さらなるユダヤ移民の流入をまって機が熟した時に憲法制定がなされるべきだという考えに、宗教勢力の（世俗的憲法制定に対する）反対が加わり、民主的な憲法制定を直ちに行なおうとする勢力を制したためである。その妥協として生まれたのが、将来的な憲法制定を想定しながら、（当面は）一章づつ基本法を制定していくという方法である。こうして最初のイスラエル基本法（国会法）が1958年に制定され、以後順次追加されている。」^{註93}

現在制定されている基本法は、制定の年度順に「クネセット（イスラエル国会）法」（1958年制定）、「イスラエル土地法」（1960年制定）、「国家の大統領法」（1964年制定）、「政府法」（1968年制定）、「国家経済法」（1975年制定）、「イスラエル国防軍法」（1976年制定）、「エルサレム法」（1980年制定）、「裁判法」（1984年制定）、「国家会計検査法」（1988年制定）、「人間の尊厳と自由に関する法」（1992年制定）、「職業の自由に関する法」（1994年制定）の十一の領域に渡っている。

さて、イスラエルの国家アイデンティティが凝縮されているといってもいい建国宣言は、「エレッツ・イスラエル^{註94}はハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）の発祥の地であった。」^{註95}という文で始まる。そのあと「エレッツ・イスラエルがユダヤ民族の精神的・宗教的・政治的アイデンティティが形成された場所であったこと、強いられた離散以降もユダヤ人は常に祖国の再建を望み、帰還と政治的自由の回復を願ってきたこと、ヨーロッパでの近年ユダヤ民族にふりかかった悲劇とユダヤ人国家をつくることでそうした家をもたない問題（ホームレスネス）を解決する緊急な必要性、ユダヤ民

^{註93} Shlomo Guberman, *The Development of the law in Israel: The First 50 Years*, <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp> また、マーチン・イーデルマンは、こうした要因の他に、イスラエルの政治における政党の影響力の強さ（政党政治の特徴）とそこから派生する政党間の利害対立が、憲法制定を阻んできたと指摘している。Martin Edelman, *Courts, Politics, and Culture in Israel*, University Press of Virginia, Charlottesville and London, 1994, pp.8-11.

^{註94} ヘブライ語で「イスラエルの地」という意味。古代第一、第二神殿時代のユダヤ王国であった領域を全て含むもので、ヨルダン川の東までを含む概念。

^{註95} *Basic Laws of the State of Israel*, Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il> 以下同じ。

族が自らの国家をつくることは、他の全てのアム（ネイション）が彼等自身の主権国家を持つようにユダヤ民族の歴史的な権利でありまた自然権であること」などが謳われ、「イスラエル国家としてエレッツ・イスラエルにユダヤ人国家を樹立する」ことが宣言される。さらに「イスラエル国家は在外のユダヤ人に門戸を開放する」が、同時に「（イスラエル国家は）そのすべての住民のために国の発展を促進し、イスラエルの予言者によって描かれた、自由・正義・平和に基づいて、宗教、人種、性別にかかわらず、すべての住民に対し社会的・政治的権利の完全な平等を保証し、さらに、宗教、信条、言語、教育、文化の自由を保証し、全ての宗教の聖地を守り、国連憲章の諸原則を遵守する。」と続く。

この十三番目のパラグラフの上記の部分はイスラエルが民主主義国家であるという主張の根拠としてしばしば引用される文でもあるが、全体の中でここだけが他の内容との矛盾を感じさせている部分でもある。つまり、「宗教、人種、性別にかかわらず、すべての住民への社会的・政治的権利の完全な平等の保証」や「宗教、信条、言語、教育、文化の自由の保証」という部分だけをこの「建国宣言」の全文から切り離して評価するならば、イスラエル国家はパレスチナ・アラブ人に対しても平等なシチズンシップを尊重する国家であることになるが、冒頭および全文の基調が「ハ・メディナ・ハ・イエフディット（ユダヤ人国家）」としてのイスラエルの性格を繰り返して強調するものになっているので、不統一感が否めないといえる。

そのあと、「1947年の（イスラエル国家の建設に対する）国連総会決議をイスラエルは実行に移すこと」やそのことへの支援に対する国連へのアピールと「イスラエル国家のアラブ住民」にむけて「完全で平等なシチズンシップの基盤に基づいた、国家建設への参加と平和維持」へのアピールが続く。そして最後に次のような文で締めくくられる。「われわれは、ハ・アム・ハ・イエフディ・ベ・コル・ハ・テフツォット（全てのデュアスポラのユダヤ民族）に対し、次のように呼びかける。移住をし国家建設に加わることでエレッツ・イスラエルのユダヤ人の周りに結集すること、そして、イスラエルの救済という長年の夢の実現のための闘いにおいて、かれら（エレッツ・イスラエルのユダヤ人）と共にあることを。」

この「イスラエル建国宣言」における決定的矛盾は、一方で「ユダヤ人国家」という規定を謳いながらも一方で「完全で平等なシチズンシップ」を謳っている点にある。そしてこの矛盾はこれ以降のイスラエルの様々な法体系の中に引き継がれていくのである^{註96}。

^{註96} ちなみに、国歌の歌詞の内容は次のようなものである。「われらの胸に／ユダヤの魂が脈打つ限り／ユダヤびとの目が東の彼方／シオンに注がれる限り／われらの希望は／なお失せることはない／二千年 われらは育み続けた／シオンとエルサレムの地で／自由のうちに生きる希望を」

2 帰還法

帰還法は、基本法の一つではないが、1950年に制定された重要な法であり、イスラエル国家の構成員として想定されるのは誰かということを示すものである。つまり、これは世界のユダヤ人に対する「帰還の権利」を保証した法律であり、ユダヤ人である限りにおいて、出生地に関わらず移住後のイスラエルでの市民権を保障するものである。その第一条（移住の権利）は、「全てのユダヤ人はオレ⁹⁷（移民）として本国に入国する権利を有する。」とあり、第四条（居住者および本国での出生者）では、「この法の制定前に移民したユダヤ人も」、「イスラエルで生まれたユダヤ人も」全てのユダヤ人が「この法の下にオレ（移民）として本国に入国した人と（同じように）みなされる」ことが謳われている。

なおこの法律は1970年に改正され、その対象は、「あらゆるユダヤ移民の配偶者およびその二世代にわたる子孫とその配偶者」にまで拡大されている⁹⁸。またこの時の改正では「ユダヤ人の定義」の条項が加えられ、それは次のように規定された。「第四条B：（ユダヤ人の）定義」：「ユダヤ人とは、ユダヤ人の母から生まれた子供、ユダヤ教に改宗した者、そして他の宗教の成員ではない者を意味する。」この改正の持つ重大な意味については第四節で改めて検討する。

パレスチナ人は、イスラエル（パレスチナ）生まれであっても「帰還の権利」は適用されないのに対し、帰還法の制定により、イスラエル国家という政治的空間は世界のユダヤ人に対して常に開放されるものとなり、まさにユダヤ人にとっての「ナショナル・ホーム」になったといえる。

3 不在者財産法

この法律も基本法ではないが、帰還法と同じ1950年に国会を通過した。これは、先に見たイスラエル建国前の「土地のユダヤ化」をめざそうとする土地政策の延長にあるということができ、ここでの「不在者」とは以下のように規定されている。

「1. 1947年11月29日⁹⁹と1948年5月19日¹⁰⁰の間にイスラエル内に不動産を所有、享受、保

⁹⁷ イスラエルへのユダヤ移民を意味するヘブライ語

⁹⁸ *Selected Laws*, Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il>

⁹⁹ パレスチナ国連分割案が議決された日

¹⁰⁰ 緊急国家体制が終了して行政法が発布された日

有していた者で、かつ1) 同時期にレバノン、エジプト、シリア、サウジアラビア、トランスヨルダン、イラク、イエメンの国民か市民であった者、または2) これらの国のいずれかかイスラエル外のいずれかのパレスチナの土地にいた者、または3) パレスチナ市民でパレスチナにある当該者の通常の居住地を離れた者。3) はさらに、a) 1948年9月1日以前にパレスチナ外の場所へ出ていった者、またはb) 当時イスラエル国家の建設を阻もうとする軍隊、またはイスラエルの建国後イスラエルと戦闘状態にあった軍隊によって支えられていたパレスチナ内に居を移した者とに分けられる。2. 「1」で規定された期間中、イスラエル内にある不動産を所有、享受、保有していた団体、およびその全てのメンバー、パートナー、株主、指導者、経営者も「1」で規定した意味での不在者である。あるいは、こうした不在者によって大きく統制されているような企業経営やこうした不在者の手中にある全ての資産も対象となる。」^{註101}

不在者をこのように規定した上で、その財産に対する全ての権利を無効にするのがこの法律の中身である。この法律によって、大量のパレスチナ難民、出国者、一時的に周辺諸国や現在のウエストバンクなどに身を寄せていたパレスチナ・アラブ人の土地や建物がイスラエルによって「国家的に」利用されることが可能になった。

また、この法律と連動する他の法律が様々存在するが、それらは、「不耕地開発利用のための緊急条項」（1948年10月発令）、「緊急土地徴用令」（1949年発令）、「土地収用法」および「公共の目的のための土地収用法」（1953年発令）、「時効法」（1958年発令）などである^{註102}。こうした法律が、単独で、あるいはいくつか組み合わされて適用されることによって、イスラエル内外のパレスチナ人の土地や農地の所有は大きく減少していった。これらの法律の適用によって、1948年の第一次中東戦争後から1963年までの間に、イスラエル内のアラブ人農地の65%がとりあげられたと推定されている^{註103}。また、ウエストバンクの土地の52%、ガザ地区の34%をイスラエルが国家的に所有しているといわれている^{註104}。その典型的な例は次のような手順をとって進められる。

^{註101} Uri Davis, op.cit., pp.41-42.

^{註102} Ian Lustick, *Arabs in the Jewish State*, University of Texas Press, Austin, 1980, pp.170-182. および Kimmerling, 1983a, op.cit., pp.134-146.

^{註103} Baruch Kimmerling, 1983a, op.cit., p.140. (原典は、*Haaretz*, 3/6/ 1965.)

^{註104} *Middle East Report*, no.152, 1988, p.35. なお、占領地におけるこうした土地の多くは、現在もイスラエルの直接支配下におかれている「エリアC」にあたる土地である。Atty.Usama Halibi, 'Land laws in Israel', *News from Within*, vol.XIII, no.6, 1997, p.18. 占領地の土地の分類については、以下の通り。「エリアA」：パレスチナ自治政府による完全自治区領域。「エリアB」：行政権と警察権は自治政府の管轄下、「安全保障」はイスラエルの管轄下にある領域。また、1999年に調印されたイスラエル軍の追加撤退に関する合意（新ワイ合意）が完全に実施されたとしても、パレスチナ自治政府が支配する「エリアA」と「エリアB」をあわせた土地はウエストバンクで約四割、ガザ地区でも約六割にすぎない。

「アラブ人が所有している農地が『立ち入り禁止区域』に指定される。そうすると、土地所有者はいかなる目的でもその区域内に入ることが禁止される（耕作することも許可されない）。3年経過すると、農業省は、その土地を不耕地と分類し、不耕地証明証を発行する。同時に土地所有者に対し、耕地がすぐに再開されない限りその土地は没収されることが通知される。土地所有者は、『立ち入り禁止区域』内にある自分の土地に入ることが依然として禁止されており、耕作を再び始めることができない。その土地はとりあげられ、ユダヤ人の入植のための土地の一部として確保される。その後、『立ち入り禁止区域』に入る許可がユダヤ人の農民に与えられ、『立ち入り禁止』というその区域指定は解除される。」^{註105}

さらにこうした「土地のユダヤ化」は、1960年に制定されたイスラエル土地法「1. イスラエルの土地の所有権、すなわち、イスラエル国家、開発庁、ユダヤ民族基金のいずれかが所有する土地は、売買その他の手段で所有権が移転されてはならない。2. 「1」の規定は、法律によってその目的のために決定された取り扱いや土地に関しては、その適用を受けない。3. ここでの土地は土地および家屋、建物、その他土地に永久に固定されている全てのものを意味する。」^{註106}によって補強され、こうした土地をアラブ人農民に譲渡・売却したり、一定期間であれ貸し付けたりすることを禁止する法案の制定（1967年）によって^{註107}、仕上げられていくことになる。また1961年には、政府によって決定された経済・社会発展計画のための土地整備業務や国家的・公的土地の管理一般業務にあたるための政府機関としてイスラエル土地行政局が設立されている。ここで「政府によって決定された経済・社会発展計画」とは、具体的には「人口の分散化」、「住宅供給」、「産業、農業、サービスの開発」、「安全保障上の必要」、「福祉、文化、リクレーション、環境的な要請」などが含まれている^{註108}。これらの内容は、上記の「イスラエル土地法」の規定の「2」である、「法律によるその目的」に対応しているものと思われる。

このような様々な法律の有機的適用により、「非ユダヤ人」からの土地の収奪が合法的に進められ、イスラエル国家の約九割りの土地は、「非ユダヤ人」にはアクセス不能となってしまっている。

4 クネセツト法

この基本法は、1958年に制定された後、何度も改正がなされてきている。ここで問題にするのは、

^{註105} Ian Lustick, op. cit., p.178.

^{註106} *Basic Laws of the State of Israel*, Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il>

^{註107} この背景には、キブツや他のユダヤ人の農村が、農地をアラブ人農民に貸し付けているという「由々しき現象」をイスラエル政府が憂慮したことがあるといわれている。Atty.Usama Halibi, op.cit.p.18.

^{註108} Susan Hattis Rolef, op.cit., p.189.

1985年に制定された第七条「国会議員の候補者の非該当者の条項」に関する改正である。この条項の従来の規定で、国会議員候補者の資格外者としてあげられていたのは、1) 大統領、2) 二人の首席ラビ、3) 判事（裁判の任務中の場合）、4) 宗教法廷の判事（裁判の任務中の場合）、5) 国家会計検査院長、6) イスラエル国防軍長官、7) 裁判の任務中にあるラビおよび他の宗教の聖職者、8) 法律によって規定された、特定の地位と任務にあった国家公務員退職者および退役軍人、であった^{注109}。

これが改正によって次の項目が加えられることになる。「その候補者の目的や行動が、明に暗に、次の一つを含む場合：1) ユダヤ民族の国家としてのイスラエル国家の存在の否定、2) 国家の民主的性格の否定。3) 人種主義の扇動」^{注110} ここで注目すべきなのは、第一項の「ユダヤ民族の国家としての性格」と第二項の「国家の民主的性格」との整合性、また、第一項と第三項の「人種主義」との関係である。建国宣言にみられたように、イスラエルがユダヤ人国家と民主国家との両立をはかろうとすることの矛盾がここに再びあらわれている。

またこの改正案が提案されるのには、次のような背景と経緯があったことも理解しておくことが必要である^{注111}。それは、1965年、1984年、1988年に起こった「候補者の資格」をめぐる裁判である。まず、1965年、同年行われた第六回国会選挙の選挙管理委員会にアラブ人の政党である「社会主義党」の候補者名簿が提出された。これは民族主義的アラブ知識人によるアル・アルド（「土地」の意味）という小さなグループに組織された政党だったといわれる。しかし、選管は「イスラエル国家の領土の保全と存在そのものを否定する非合法組織」であるという理由でこの候補者名簿を認めないという決定を下した。この選管の決定は最高裁にもちこまれ、結果的には「証拠不十分」で「社会主義党」が勝訴することになる。

次に1984年、やはり同年行われた第十回国会選挙に際し、アラブ・ユダヤの連合政党である「平和のための進歩党」（PLP）^{注112}と、ラビであるメイル・カハネの率いる超民族主義的政党の「カッハ」が、候補者の適性をめぐって、中央選挙管理委員会に拒否されるということがおこる。理由は、「全ての差別的な法を撤廃し、ユダヤ人に偏向した法の適用を止め、占領地からの撤退」を訴えているPLPは、「イスラエルの存在と領土の保全、およびユダヤ人国家としての特性の保全を脅かすような原則を是としている」からであり、一方「カッハ」は、「全てのアラブ人はイスラエルと占領地から追放されなければならない」ことを訴えていて、これは「人種主義的・反民主主義的な原則を是と

^{注109} *Basic Laws of the State of Israel*, Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il>

^{注110} *Basic Laws of the State of Israel*, Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il>

^{注111} この背景と経緯については、Yoav Peled, 1992, op.cit., pp.436-439.を参照。

^{注112} 党の代表は、前述の「アル・アルド」の前メンバーであった。

し」、「公然とテロ行為を支持し」、「イスラエルの様々な集団間の憎悪と敵意をあおり、・・・その目標は、イスラエルの民主的政府の基盤を否定するもの」だからであった。この問題も最高裁にもちこまれたが、結果的には選管の決定は退けられた。

しかし、この二つの裁判を契機にして、「イスラエル国家のユダヤ的な性格の否定」と「イスラエル国家の存在の否定」が同一なのか否かという問題が公の議論となり^{註113}、それが1985年の法改正の背景となったのである。また、ここで二度にわたり最高裁が結果的に（傍点筆者）選管の決定を退けたことは、イスラエルの「民主主義的」側面を確かにあらわしたともいえる。

さらに、1988年三度目の裁判がおこることになる。同年の第十二回国会選挙の前に、「カッハ」と PLP の候補者名簿人を、1985年のクネセット法第七条改正に基づき「候補資格外」とするようにという請願書が中央選挙管理委員会に提出される。選管は、「カッハ」、PLP、に加えて、モレデット^{註114}を資格審査の対象とし検討をした結果、「カッハ」は「不合格」、モレデットは「合格」という決定を下すのである。PLP については委員会内での採決では賛否が同数であり、選管の委員長であり、最高裁判事でもあった委員が「合格」を支持したことで「合格」となった。このうち、「カッハ」と PLP に関する選管の決定への異議申し立てが最高裁に持ち込まれ、最高裁はこの訴えを共に否決した（「カッハ」は全員一致で否決、PLPは三対二の多数決で否決）。

以上がクネセット法第七条の改正に関連する経緯とその後の動向である。モレデットの主張が、第七条改正後の第二項および第三項に抵触していないのかという点では、選管の決定にも問題を残している。またこの一連の動きは、イスラエルの中で「イスラエル国家のユダヤ的な性格」を本質的に問い直すこと、例えば「帰還法の廃止」を合法的に検討する可能性は、皆無に近いことを示している。

5 市民権法（国籍法）^{註115}

この法律は1952年に制定されているが、基本法ではない。イスラエル市民権法も、これまで三回の改正を経て現在は市民権（国籍）取得の方法は以下の四通りとなっている。それは「帰還法による取

^{註113} この論争中に、イスラエル共産党とPLPの国会議員によって、改正案第一項の「ユダヤ民族の国家としてのイスラエル国家」の部分で、「イスラエル国家」もしくは「ユダヤ民族とアラブ市民の国家としてのイスラエル国家」のいずれかに換えるという提案がなされたが、いずれも否決された。

^{註114} 新極右政党。「カッハ」と同じく「アラブ人の移送」を訴えているが、「カッハ」がイスラエル及び占領地のアラブ人を共にその対象とするのに対し、モレデットは「占領地内のアラブ人」に限定した「アラブ人の移送」を主張した。

^{註115} この法律のヘブライ語の表記は、「ホク・ハ・エズラフット（市民権法）」であるが、英語版のイスラエル外務省のホームページでは、Israel's Nationality Law または Acquisition of Israeli Nationality と訳されており、citizenship law とはなっていない。

得」、「居住による取得」、「出生による取得」、「帰化による取得」である^{註116}。

このうち、帰還法の内容についてはすでに述べたとおり対象がユダヤ人に限られている。ただし、「自分の意志で他の宗教に改宗したユダヤ人には帰還法は適用されない」という付記がある。このことから、改宗したユダヤ人は、本人がどう認識しようとする、母親がユダヤ人であろうと、「ユダヤ人」ではないと解釈されるといえる。

また居住による取得は、1948年のイスラエル建国から1952年の市民権法の施行までの間イスラエルに留まっていた、主として英国委任統治時代の住民のための特別規定として、1980年によりやく制定されたものである。ただしこの規定も、1949年の住民登録を基礎にしているため、戦争時に一時住居を離れていたパレスチナ人やパレスチナ難民は実質的に排除される結果になっている。

他の二つの方法は他の国々でもみられる規定であるが、「出生による取得」は「血統主義」の原則にたっており、その条項は以下の通りである。①イスラエルで生まれた、イスラエル市民の父または母の子供、②国外で生まれた、イスラエル市民権をもつ父または母の子供、③両親のどちらかが死亡後に生まれた子供で、その死亡した親が死亡の時点で①項および②項によりイスラエル市民であるような場合、④今まで他の市民権（国籍）を所有したことがない、イスラエル生まれの子供は、次の場合に市民権を取得できる。18-25歳の誕生日の間に申請し、申請時から遡って連続して五年以上イスラエルに居住しているという条件を満たしている場合。

最後に、「帰化による取得」に必要な要件は以下の通りである。①申請の提出日から遡って五年のうち三年をイスラエルに居住していること、②イスラエルでの永住権を持っていて、これまでイスラエルに住んできたもしくは（これから）住もうとする者、③以前の市民権（国籍）を放棄しているか、もしくはイスラエル市民になる時点で、外国の国民であることを止めることを証明している者。付記。内務省は以上の諸要件のいくつかを免除することができる^{註117}。

ここで注目したいのは、まず、「帰還法による取得」を別にすると「イスラエル市民」という概念を軸に要件が組まれていることである。この法律は、実質的には国籍法である。しかし、この項の最初に注で指摘したように、イスラエル外務省のホームページの英語訳は *Israel's Nationality Law* または *Acquisition of Israeli Nationality* となっているのに、ヘブライ語で使われている用語は市民権（citizenship）という意味の「エズラフット」である。「イスラエル市民」という概念を軸に要件が

^{註116} *Selected Laws*, Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il>

^{註117} Ibid. 内務省がこのいくつかの要件を免除する場合の具体的な例としては、帰化を申請している「非ユダヤ人」で、イスラエルの軍隊の任務・およびそれに準ずる任務に就いた者、またはそうした任務のために息子や娘を失った者、占領地に住むパレスチナ人の（イスラエル政府への）「協力者」などである。

組まれているということは、「ユダヤ人かどうか」ということは陰にかくれていて、表面上は一見重要な問題ではないかのようなのである。「イスラエルで生まれた、ユダヤ人の父または母の子供」ではなく、「イスラエルで生まれた、イスラエル市民の父または母の子供」と規定されていること、つまり、この市民権法は一方において明らかに二重基準をもちながら、それを貫徹しないのである。それはなぜだろうか。一つにはイスラエル市民やイスラエル国民＝ユダヤ人ではないからである。現実がそれを否定しており、貫徹しようとしてもできないということがある。しかし、この市民権法にシチズンシップの「歪み」をそもそも認識しなければ、貫徹の必要も認識することはない。「国籍」という概念が存在しなければ、「国民」という概念も存在しない。筆者にはこれはイスラエルの民主主義の自己宣言であるように思われる。つまり、国民を二重基準で差別化し「国民」のなかに「外国人」をつくりだしていても、それがイスラエルの民主主義であると自己規定することで、「ユダヤ人国家」と「民主国家」は主観的に両立してしまうのである。

そう考えると、本節で検討してきた様々な法律は全て同じ問題構造をかかえている。「ユダヤ人国家」と「民主国家」は同等の重みをもつものではなく、あくまでも前者の枠組みが許容する範囲内の「民主主義」である。スムーハはこれを「エスニック・デモクラシー」と概念化したが^{註118}、これもやはり「デモクラシー」なのだろうか？

次に、市民権（国籍）取得と市民権（国籍）剥奪との両方の要件、およびすでに本節第三項で検討した「不在者財産法」をつきあわせることによって見えてくるもう一つの問題がある。それは第一に、ユダヤ・イスラエル人で「帰還法」によってイスラエル市民権を望まない場合でも、彼／彼女はオレ（移民）として居住権は得られていることである。しかし「不在者」と規定されたパレスチナ人は、「帰還法」の対象外であり、イスラエル市民権（国籍）を望むかどうかは別にしても、居住権が保証される途は絶たれるのである。

第二に、ユダヤ・イスラエル人には二重国籍や三重国籍も存在するが、「非ユダヤ」人にはその可能性がないことである。つまりユダヤ・イスラエル人の場合、「帰還法」による市民権（国籍）取得が可能なので、「帰還法」の対象となる移民およびその家族は、移住前の市民権（国籍）を放棄することなくイスラエルの市民権（国籍）を新たに持つことが可能である。現に、アメリカ合衆国とイスラエル、アメリカ合衆国と英国とイスラエルというような複数の国籍やパスポートを有している人は少なくない^{註119}。それに対し、イスラエル市民権（国籍）を取得しようとする「非ユダヤ人」は、

^{註118} Sammy Smooha, 1990, op.cit. および, Sammy Smooha, 1999, op.cit.

^{註119} 例えば、アメリカ合衆国からのユダヤ移民やその子供などは前者の例であるし、アメリカ合衆国からのユダヤ移民を親とする子供が英国で生まれた場合などは後者の例になる。

「帰化による取得」が残された主な可能性である（「出生による取得」の可能性もないわけではない）が、この場合そのための条件として「以前の市民権（国籍）を放棄しているか、もしくはイスラエル市民になる時点で、外国の国民であることを止めることを証明している者」という規定が課されるために、イスラエルの市民権（国籍）は前の国籍の放棄と引き替えにしか取得できないことになる。パレスチナ人の場合このことは、多くのアラブ諸国との関係の切断を意味することになる。またさらに「非ユダヤ人」の「帰化による取得」の場合には、「私は、イスラエル国家の忠実な国民になることを宣言する。」という宣誓の義務も課せられている。

またイスラエル国民であっても、市民権（国籍）を剥奪される要件として、先に述べた「国家への忠誠の侵害」の他に、「レバノン、シリア、イラク、イエメンの国のいずれかに不法出国した場合やこれらの国の市民権（国籍）を取得した場合」や「イスラエル市民権（国籍）が虚偽の事実に基づいて取得されたことが証明された場合」などがあり、これらはパレスチナ人の該当者を想定していることは明らかである。

こうようにみえてくると、イスラエルの市民権法は、「ユダヤ人国家としてのイスラエルの性格」を最大限維持するために「ユダヤ人」への優遇措置と「非ユダヤ人」とくにパレスチナ人に対する高い障壁をもうけており、イスラエルの人口構成の行方に大きな関心を払っていることがうかがえる。

6 人間の尊厳と自由に関する法

それでは、「人間の尊厳と自由に関する法」という、普遍的な民主主義の基準をあらわしているといってもいい名前がつけられたこの基本法には、どのような内容がもりこまれているのだろうか。まずこの法律の第一条（目的）は次のようになっている。

「基本法：人間の尊厳と自由。第一条（目的）：この基本法の目的は、ユダヤ民主国家としての（傍点引用者）イスラエル国家の諸価値を、基本法において確立するために、人間の尊厳と自由を守ることである。」^{注120}

なおこの基本法は、1994年に一部改正されており、その内容は二つある。一つは、上述の第一条の前に、以下の文章が前文として追加された。

^{注120} Israel Ministry of Foreign Affairs, *Basic Laws*, <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp> 以下同じ。

「基本的諸原則：イスラエルにおける基本的人権は、人間の価値、人間の命の神聖さ、全ての人は自由であるという原則の承認の上に構築される。そしてこれらの諸権利は、イスラエル国家の建国宣言に述べられている諸原則の精神において確定される。」

もう一つは、第八条（権利の侵害）の後に以下の文が追加された。第八条の内容と追加された文は次の通りである。

「第八条（権利の侵害）：この基本法の下ではいかなる権利の侵害も存在しない。ただし例外として、正当な目的のために制定された、イスラエル国家の諸価値に合致する法律が要求する場合には、最低限度において権利が侵される場合もありうる。」追加文「または、そうした法律（イスラエル国家の諸価値に合致する法律）での特別な委任によって制定された規定による場合（も例外である）。」

ここで、二つのことを指摘しなければならない。この基本法の具体的項目は、「生命・人身・尊厳の保証」、「財産の保護」、「生命・人身・尊厳の保護」、「個人の自由」、「出入国」、「プライバシー」、「権利の侵害」などに関するものであり、人間の尊厳や自由、もしくは基本的人権に関するものであることは明らかである。それはまさに人間の「普遍的な価値」に関わる指針であり、テイラーのいう「真正さ」という基準から判断すべき法律であるといつてよい。にもかかわらず、その「普遍的な価値」に関わる人権の「基本法」に対し、「イスラエル国家の諸価値」や「建国宣言の諸原則の精神」という付帯条件や、「安全保障に関する留保条件」が付け加えられている。その留保条件の内容は、以下の通りである。

「人間の尊厳と自由」に関する基本法第九条（安全保障に関する留保）：イスラエル国防軍、イスラエル警察、刑務所およびその他の国家の安全保障上の組織の任務についている人々がもつ諸権利は、この基本法による制約を受けない。また、そうした諸権利は、法律もしくは法律によって施行される規則による場合を別として、その職務の性質に必要な範囲内で制約を被らない。」^{注121}

そしてこの「イスラエル国家の諸価値」や「建国宣言の諸原則の精神」の本質は、すでに見てきたように、イスラエル国家を「ユダヤ人国家」として規定することであった。その結果、法律の解釈を「イスラエル国家の諸価値」や「建国宣言の諸原則の精神」に照らしておこなうことで、「基本的人

^{注121} Ibid.,

権」はいつでも侵害されうることになり、事実、「例外」という名のもとに、ユダヤ人ではないパレスチナ人の権利は、今までも見てきたように、また次節で考察するように「十分に」侵害されてしまうということができる。

またこの基本法は、「ユダヤ人国家」という国家の自己規定と、「民主国家」であろうとする国家規定が同一文脈の同一の文の中で結びつけて明示された、初めての基本法である。その表現は、ハ・メディナ・ハ・イフディット・ハ・デモクラティット（the Jewish and Democratic State）である。そして同じ表現が、1994年に制定された「職業の自由にかんする法」の基本法の中でも用いられるようになったことにも注目すべきである。

本節で検討した基本法以外の「帰還法」、「不在者財産法」、「国籍法」が「建国宣言の諸原則の精神」にかなうものであることは明らかであるが、「憲法」の代わりと位置づけられている現存する十一の基本法全てについて、「ユダヤ人国家」と「民主国家」との間でその整合性を問題にせざるをえないと思われる部分、もしくはそのいずれかが特に明示されている部分を改めてここで整理し直してみたい。

制定の年度順に問題点を列挙してみると、以下のようになる。

1960年「イスラエル土地法」第一条「所有権の移転の禁止」：内容は本節第三項の中ですでに検討したように、イスラエル国家、開発庁、ユダヤ民族基金が所有する土地の所有権の移転を禁じているものである。これは、実質的に「非ユダヤ人」への所有権移転の禁止として機能している。

1985年「クネセツ法」第七条「国会議員の候補者の非該当者」の改正：これも、すでに検討したように、新たな非該当者として加えられた項目の中で「ユダヤ民族の国家としてのイスラエル国家」という表現と「国家の民主的性格」という表現が、この改正の文章表現の中で併記されたこと。

1992年「人間の尊厳と自由に関する法」の第一条「目的」、および第九条「安全保障に関する留保条件」：これも前述したように、第一条では「ユダヤ民主国家としてのイスラエル国家の諸価値」という表現が初めて用いられたことと、第九条では「安全保障に関する留保条件」という条項が存在すること。

1994年「人間の尊厳と自由に関する法」の第一条の改正：「イスラエル国家の建国宣言に述べられている諸原則の精神において」という内容がこの基本法の目的設定との関連で追加されたこと。

1994年「職業の自由に関する法」の第一条「基本原則」：この条項の中で、「イスラエル国家の建国宣言に示された諸原則の精神において」という表現がなされていること。また第二条（目的）：この条項の中で、「ユダヤ民主国家としてのイスラエル国家の諸価値」という

表現が存在すること。

以上と併せて考慮しておくべきことは、十一の基本法の中でイスラエル国家を表記する場合、他の箇所ではすべて「イスラエル国家」もしくは「国家」という表現になっていることである。逆に言えば、「ユダヤ民主国家」という表記や「ユダヤ民族の国家としてのイスラエル国家」という表記がなされるのは上記に指摘した箇所のみである。また興味深いのは、「イスラエル国防軍法」（1976年制定）の第一条（イスラエル国防軍の定義）が、「イスラエル国防軍は、国家（the State）の軍隊である。」と「枕詞」なしで表現されていることである。また同時に、「民主的」という表現が基本法の中で用いられているのも、上記で指摘した箇所のみである。また、上記で指摘した法制定もしくは改正がなされた時の政権をそれぞれの時期に対応させると、一件をのぞいて（1992年の「人間の尊厳と自由に関する法」の制定）すべて労働党政権の時であった。

さて、以上のことからわれわれはこのような基本法の制定および改正の展開をどのように理解すべきだろうか。イスラエルは「建国宣言」の地点からどのような方向に変化しているとみるべきだろうか。ここで強調しておきたいのは、この展開からは、少なくともポスト・シオニズムの動きはみえてこないことである。「建国宣言」の「ユダヤ人国家」であろうとする基本的立場は一貫しているといっただけではなく、1980年代後半から1990年代以降になってむしろ、「ユダヤ民主国家としてのイスラエル国家の諸価値」や「イスラエル国家の建国宣言に示された諸原則の精神」が強調されてきたように読めるのである。しかもそれは、両者とも「民主国家」であることを謳いながら強調されるのである。このことは、イスラエルがますます「ユダヤ人国家」と「民主国家」との間で自己矛盾に陥ってしまっていることを露呈しているともいえよう。

第四節 法の運用とイスラエル「国民」のシチズンシップ

前節ではシチズンシップに関わる様々な法律の内容を分析したが、本節ではそれらの実際の適用の例を見えることで、シチズンシップの実態をより明らかにしてみたい。

1 はじめに——オスロ合意の評価

本章第二節において、イスラエルの国家統合政策の論理が「同化主義」ではなく「相互隔離主義

的」な性格であったことを指摘したが、これは「ユダヤ人の空間」と「非ユダヤ人の空間」を分けるという意味に加えて、前者の空間の外へ後者の空間をつつきだし、存在自体を否定するという意味をも含むものである。これは、労働党政権か、リクード政権かを問わず、これまで一貫して貫かれてきた政策である。このことは、「存在そのもの」の「不承認」という意味で、「承認」の「歪み」が際だっており、イスラエルの政治文化が「多文化主義」から最も遠いところに位置するものであると考えられる。イスラエル政府は、「パレスチナ」という概念、「パレスチナ人」という人々のアイデンティティ、「パレスチナ」を象徴する旗や色の存在が表面化することに敏感であり、1993年の「歴史的対話」^{註122}までは、そうした動きを封じ込めることが政治的課題であった。国家形成のための領域的基盤がそもそも欠落したところから出発したイスラエル国家にとっては、パレスチナやパレスチナ人の存在を「承認」してしまうことは、自らの国家の存立の基盤と正当性が否定されることになってしまうという危機感があった。

オスロ合意^{註123}によってパレスチナ自治政府が誕生してからは、「パレスチナ」という「記号」は人々の口から語られるものとして表面化し、また旗や色によって視覚的に見えるものになった。例えば、イスラエルのテレビニュースで「パレスチナ人」という言葉をアナウンサーが使うようになったことは、「透明な存在」であったパレスチナ人の存在が、「可視的な存在」としてユダヤ・イスラエル人の潜在的・顕在的意識の中に或る種の「位置」を占める作用を及ぼしているといえる。しかし、このことは、「透明な他者」から「明確な他者」へ転換したにすぎず、対立の構図が緩和した（していく）ことを必ずしも意味してはいない。

個人的経験であるが、一つ例をあげてみたい。イスラエルを出入国する際の、空港やチェックインの場での様々な職務質問はよく知られており、「安全保障上」の理由から、「非ユダヤ人」であれば通常数十分の質問を受ける。1998年のイスラエル訪問の出国時には、一連のマニュアルに基づいた係官の質問のなかに、「パレスチナ人とは接触したか」という質問が含まれていた。オスロ合意以前はイスラエルの公的職務につく人物からは決して発せられることのなかった「パレスチナ人」という語彙を耳にして、新鮮な驚きを覚えると同時に、「パレスチナ人と接触する」ことが、「問題行動」として改めて捉えられていることが、予想されることではあったのだがもう一つの驚きであった。このことは、イスラエル政府にとって、「パレスチナ人」一般が、依然として「接触すべきではない」、

^{註122} 1993年9月、イスラエル政府は、PLOをパレスチナ人を代表する組織として認知し（PLOは、1988年12月イスラエルの生存権を承認した）、イスラエルとPLOの「相互承認」が成立した。それまで、イスラエル政府は、パレスチナ人という概念を公的に使用しておらず、また、PLOとの接触は、違法行為であった。

^{註123} 1993年9月、パレスチナの暫定自治に関する諸原則をイスラエル政府と「パレスチナ人代表チーム」が合意したこと。

「完全な他者」として、より明確に記号化されたことを意味するものである。そして、この一連の質疑応答が一通り終了するまで数十分を要したが、この時間はこれまでと比較しても特に長かったとはいえない。しかし、同行した「ユダヤ・イスラエル人」の友人は、「自分達（ユダヤ・イスラエル人）であれば、質問は形式的なもので、数分で終わる。」とその違いを述べている。ここにも、というよりこの出入国管理の空間にこそ、イスラエル社会・国家の中に浸透し、再生産されてきた、自己／他者認識が浮き彫りにされているように思われる。

1993年に締結されたオスロ合意は、ユダヤ人とパレスチナ人の関係に新しい展開をもたらすものであるかのような期待と評価がよせられたが、これは過剰な期待と評価であったといえる。確かに、イスラエルとPLOのこの「歴史的対話」は、パレスチナ問題の当事者が双方を交渉の相手として認めあったという意義がある。1993年9月、イスラエルとPLOの間に「相互承認」が成立したことは、パレスチナ人という概念を公的に使用することを否定し拒否してきたこれまでの姿勢の方向転換ではあったのだが、しかしその後の経緯は、多くのパレスチナ人が期待する「パレスチナ国家」への第一歩として展開してはいない。オスロ合意以降の「和平交渉」の推移にみられるものは、イスラエルがめざそうとするものが、「相互隔離政策」に他ならないことを示すものである。重要なのは、政権の変化というのは「和平交渉」にとって本質的に影響を及ぼしていないということ、言い換えればこれまでイスラエル政府は、「相互隔離」という対パレスチナ政策を一度も変更してはいないことである。オスロ合意の一方の当事者であった故ラビン首相は、テレビの特別番組で、「平和の実現こそがテロを克服する道である」と強調する一方で、イスラエルとパレスチナ人の間に明確な境界を設ける時であると述べ、テロ防止のためには、両者を切り離すしかないとの持論を改めて表明している^{註124}。オスロ合意以降も継続している占領地への入植地の拡大と、パレスチナ人によるテロ活動は、確かに和平交渉を行き詰まらせている要因ではある。しかし、イスラエル側の展望がパレスチナに対する「相互隔離的な自治」の保証であるのに対し、パレスチナ側の展望がエルサレムを首都とする「主権国家」にある以上、実質的な交渉の進展が望めないのは——イスラエルの「反和平勢力」の存在ももう一つの重要な要因でもあるが——当然であるともいえよう。

2 居住権の否定

^{註124} 朝日新聞、1995年1月24日。また、イスラエルの「アラブ人支配」の性格が、分割（segmentation）、経済的に従属させること、（エリート）の取り込み（cooptation）の3つの要素からなっているという分析については、Ian Lustick, op.cit.を参照。

さて、前節で検討した「イスラエル建国宣言の精神」ともいえる「土地のユダヤ化」を志向するイデオロギーが大きく作用したことによる帰結の一つが「入植地の建設」であることに疑いはない。特に、すでに指摘した「不在者財産法」とそれと連動した様々な土地に関する法律が制定された1950年前後の時期と、リクード^{註125}が労働党政権から初めて政権を奪った1977年以降に占領地への入植地は急増している。入植地建設はその時期によってその担い手とそれがイスラエルの社会・国家形成の中でもった意味が異なり、それはほぼ四つに分類できる。

まず第一期は、イスラエル建国前の1880年代から1947年までの時期であるが、これは主として労働シオニズムを担い手とし、主流のシオニズム運動の主導の下にイスラエル建国の基礎となる拠点を確保し、そこにキブツやモシャブをつくっていくという形で進められたものである。第二期は、1948年から1966年までの時期で、建国後大量に流入した移民に対する住居の供給の必要から、主としてミズラヒム（アジア・アフリカ諸国からのユダヤ移民）のための開発都市として国家事業としてすすめられていく入植地が加わる。第三期は、第三次中東戦争が終わりイスラエルが新たに占領地を獲得した1967年からリクード政権が誕生するまでの1976年までの時期で、この時期には主として軍事的な観点から占領地を中心に政府主導で（軍事的）入植地がつけられているといえる。第四期は、1977年から現在までの時期であり、リクードの掲げる「大イスラエル主義」というイスラエルの領土拡大の主張を支持し信奉する人々を中心的な担い手とする入植地が急増してくる時期である。同時にこの時期は、「エルサレムの拡大」政策に伴い、エルサレム周辺に入植地が急増してきたが、それはエルサレムの「近郊都市」として新しい「廉価」な住宅供給という意味をもってきた。なおこの時期区分とそれぞれの性格は、当該時期の主要な特徴について整理したものであり、それぞれの入植地が、それ以降その担い手と性格を失ってしまったというものではない。

表2-4-1 イスラエル（パレスチナ）に建設されたユダヤ人入植地

時期（年）	数	ガリラヤ 山間部	北部	中央部	南部	ウエスト バンク	ヨルダン 溪谷	ゴラン 高原	ガザ地区
1870以前	8	1	3	3	1	-	-	-	-
1870-1896	14	-	6	8	-	-	-	-	-
1897-1900	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1901-1906	7	-	6	1	-	-	-	-	-
1907-1912	8	-	6	2	-	-	-	-	-
1913-1924	32	-	22	10	-	-	-	-	-
1925-1930	28	-	13	15	-	-	-	-	-
1931-1936	64	1	20	43	-	-	-	-	-
1937-1947	125	7	65	36	17	-	-	-	-
1948-1950	261	27	62	130	42	-	-	-	-

^{註125} メナヘム・ベギン（1977-1983年までの首相）を党首とする「右派」政治ブロック。

1951-1955	122	4	22	51	45	-	-	-	-
1956-1960	41	6	9	11	15	-	-	-	-
1961-1963	9	1	3	1	4	-	-	-	-
1964-1966	13	5	-	5	3	-	-	-	-
1967-1971	33	-	-	4	3	4	9	12	1
1972-1976	32	-	2	2	7	6	5	9	1
1977-1982	205	64	4	6	29	62	17	14	9
1983-1988	65	13	4	1	10	28	3	2	4
1989-1992	15	2	-	-	1	9	-	1	2
1993-1997	14	1	-	7	2	3	-	1	-
総計	1096	132	247	336	179	112	34	39	17

注) 地域区分のうち、ウエストバンク、ヨルダン溪谷、ゴラン高原、ガザ地区は、イスラエルの領土外の地域であり、現在イスラエルによって併合もしくは占領されている地域である。

出典：The Settlement Division of the Zionist Organization, *Map of Settlement in Eretz Israel*, Survey of Israel, Tel Aviv, 1997.

しかし、このように様々な担い手によって入植地がその性格を変遷させてきたとはいえ、「土地のユダヤ化」という意味ではすべての入植地の原点は十九世紀末のパレスチナへの入植地形成の出発点に遡ることが可能であり、今日問題となっているハール・ホマ入植地^{註126}の建設はこうした一連の流れの延長上にあるといえる^{註127}。

ハール・ホマは1997年3月に着工された入植地建設計画で、オスロ合意以降ということもあり、国際社会の注目と非難を集めたが、この「開発」に先だち、6年前の1991年6月6日に、パレスチナ人の個人所有地であったアブー・グネイム山とその周辺地域が「公共住宅計画」のための「収用命令」によって没収されているという事実がある^{註128}。もともとこの地域は、1967年から1991年までは、イスラエル政府によって「緑地帯」と指定され建物を建てることが規制されていた地域であった。しかし没収後は「公共住宅計画」のための土地として「国家的」に利用されることが可能になった。ハール・ホマ入植地の建設は、エルサレムをさらに広域化していくこと、そのことによって、東西を統合しただけでなくこの広域化した「拡大エルサレム」を他のウエストバンクのパレスチナ人の居住地域から切り離すという意味をもっている。そして、この入植地建設計画の第一段階として、3万人のユダヤ人入植者のための6,500戸の住宅が着手されることになった。最終的には、5万から6万の入植者

^{註126} 1967年の第三次中東戦争でイスラエルが占領して拡張された東エルサレム市域の南端と、ベツレヘムの間にある、アブー・グネイム山の土地約2100ヘクタールに計画されている入植地である。

^{註127} 年代ごとの入植地の拡大状況については、表2-2の通りであるが、イスラエルの平和団体Peace Nowの調査によると、1991年段階で、ウエストバンクとガザをあわせて157の入植地があり、そこに住むユダヤ人人口は、98,500人であった。なお1996年末時点での占領地における入植地のユダヤ人人口は、14万4,900人に拡大している。Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998. p.2-19. ちなみに、リクード政権が誕生する前年の1976年には、3,176人であった。また、1991年に政府が費やした支出は、一つの入植地当たり10億ドルを超えると推定される。New Outlook, vol.35, no.2, 1992, pp.15-17.

^{註128} 『中東・パレスチナ翻訳資料集：Chun-Pon!』第4号、1997年6月10日、15頁。

に住宅を提供する予定になっている。この入植地の計画には、住宅建設はもとより、道路建設、ホテルや観光村、公園、森林地域の造成などが含まれており、この計画は、総合的な「都市開発」として位置づけられるべきものである。この入植地が完成すると、ベツレヘムに最後に残されていたパレスチナ人の発展のための土地が奪われることになり、さらに、東エルサレムのパレスチナ人居住区はイスラエルのユダヤ人入植地によって囲まれることになる。この計画の遂行に関わる主体として、政府と民間との関係などもう少し具体的に検討しなければならない点もある。しかし、国家、政府諸機関、行政、民間のいずれもが連携しながらすすめられている事業であることだけは確かだといえる。

そして、オスロ合意以降も入植地の拡大と占領地とイスラエルを縦横断するバイパス道路の建設が止んでいないということと、そうした「公共事業」の論理に特に目が向けられるべきである。それらの土地没収の「法的根拠」は、当該土地が、軍事地域、安全保障帯、自然保護地区、採石場などに設定されるかどうかにかかわっている。もしそのうちのどれかに設定された場合、それらの土地は「合法的に」イスラエルの「公共利用」のために没収されてしまうということになる。しかし、いうまでもなく、この場合の「公共利用」とは、ユダヤ人の国家であろうとする基準によって恣意的に規定されたものであるため、パレスチナ人の土地の所有権とパレスチナ社会の発展可能性を大きく阻害してきたのである。

こうしてユダヤ・イスラエル人による入植地形成が進み、居住条件がととのえられていくのと対照的に、アラブ・イスラエル人は追放・排除・隔離の対象となり、居住空間と居住条件が阻外されてきた。この「相互隔離主義」政策を補強するものとして、イスラエルの象徴的空間であるエルサレム地域を人口面でも実質的にユダヤ化するための政策もとられてきた。その結果、エルサレムの人口構成は、主としてユダヤ・イスラエル人が居住する西エルサレムだけでなく、パレスチナ人の居住地域であった東エルサレムや、拡大されたエルサレム市域内でも、ユダヤ人がパレスチナ人をうわまわるようになった。人口構成比のこの逆転現象の始まりは、東エルサレムでは1993年、拡大されたエルサレム市域内では1995年ごろからと思われる。

この背景には、入植地の増設によってユダヤ人入植者の人口が増加してきたという要因以外に次のような要因もある。それは、東エルサレムのパレスチナ人の居住権を奪うことによってパレスチナ人の人口増加をくいとめるという施策である。そもそも、エルサレムにおけるパレスチナ人の居住権は、1967年の中東戦争後イスラエルが併合した新たなエルサレム市の境界の内側にすむパレスチナ人に対しては「イスラエルにおける永住者」という資格、およびエルサレム市民として登録が行われ、居住の権利が保障されてきた。（ちなみに、東エルサレムに居住するパレスチナ人の内、イスラエル

の市民権（国籍）を所持している人々は1995年時点で約一万九千人で、東エルサレムパレスチナ人全体の13%位とみられている^{注129}。）しかし、1967年の人口調査に登録されなかった、戦火で同市を離れていたエルサレムのパレスチナ人住民や、新たに設定されたエルサレム市域から除外されたエルサレム地域の住民は、この段階ですでにこの「イスラエルにおける永住者」という資格対象外であった。

その後、1974年の入国法第11条により、七年以上海外に滞在した場合、または海外で居住権や国籍を取得した場合、上記の資格を失うことになった。さらに、1994年新たに政策が変更され、エルサレムでの永住権取得のための条件として、同市が「生活の拠点」であることを証明する書類が必要となった。この政策変更は、オスロ合意以降であり、しかも「和平推進派」とされるラビン政権下になされたことが注目されるべきである。この、「生活の拠点」という新たな基準の導入によって、7年未満の海外生活でもエルサレムでの居住権を失う可能性が生まれ、また7年という期間は過去の不在期間の「累計」で判断されるようになった。そして、上記の法律によって、1994年から東エルサレムのパレスチナ人からのIDカードの没収が行なわれている。今後、東エルサレムのパレスチナ人約17万人のうち約12万人が、この新しいイスラエルの政策のためにエルサレムに住む権利を失うかもしれないという予測もある^{注130}。1994年から1998年の間にIDカードを没収された数は表2-4-2の通りであり、没収の数は1996年以降急増していることがわかるが、これは、この間の政権の変化により、ネタニヤフを党首とするリクード政権のより強硬な姿勢が現われたものと思われる。また、1998年3月までに、1,471家族（約6,800人）がエルサレムから立ち退いたと推定されている^{注131}。ちなみに、東エルサレムの居住権を取り消されたパレスチナ人の数は、イスラエル内務省が公表している数字によると表2-4-3の通りである。

表2-4-2 エルサレムのパレスチナ人からのIDカード没収の数：1994-1998年
（イスラエルの公式データによる）

1994年	45
1995年	96

^{注129} Uri Davis, op.cit., p.52.

^{注130} 『中東・パレスチナ翻訳資料集：Chun-Pon!』第3号、パレスチナ行動委員会、1997年5月3日、8頁。原資料は、パレスチナ・ネット、B'TSELEM：The Israeli Information Center for Human Rights in the Occupied Territories, 1997.3.27付(<http://www.btselem.org/>)。なお、イスラエル内務省に対し、公式資料の情報公開を求める提訴が、イスラエルのNGO組織AIC(Alternative Information Center)によってなされたが、居住権の喪失についての情報の開示は、拒否されている。『中東・パレスチナ翻訳資料集：Chun-Pon!』第1号、1997年1月13日。

^{注131} ARTICLE 74, no. 25, BADIL Resource Center for Palestinian Residency & Refugee Rights, September 1998, p.11.

1996年	689
1997年	606
1998年（3月まで）	176（他に500件が調査中）

出典：ARTICLE 74, no. 25, BADIL Resource Center for Palestinian Residency & Refugee Rights, September 1998, p.11.

表2-4-3 東エルサレムに住むパレスチナ人の居住権の取り消し

年	居住権を取り消されたパレスチナ人の数
1999年	411
1998年	788
1997年	1067
1996年	739
1995年	91
1994年	45
1993年	32
1992年	41
1991年	20
1990年	36
1989年	32
1988年	2
1987年	23

出典：BTselem Casualty Statistics, <http://www.btselem.org/>

これと関連して、「家族の呼び寄せ」の拒否という問題があり、以下のような経緯をとって進行中である。まず、なぜ家族の「呼び寄せ」なのかといえば、エルサレムのパレスチナ住民の配偶者や子供、その他の家族のなかには、1967年戦争後の人口調査で登録から除外されてしまった人々や、ウエストバンクやガザ、あるいは海外に住んでいる配偶者や子供、その他の家族が存在するからである。様々な事例があるが、その中から一つとりあげると以下のようなものである。H.Wはエルサレムに生まれて、エルサレムのIDカードを持っている。1987年に彼女は、ウエストバンクのIDカードを持つ夫のA.Wと一緒に住むためにヘブロン^{註132}のS村に引っ越した。（夫にはエルサレムでの居住資格がないためである。）2人には5人の子供がおり、そのうちの2人はエルサレム生まれである。子供達は、一番年下の子供以外は全て夫の側のウエストバンクのIDカードで登録されており、一番年下の子供は未登録のままである。1993年彼女は、一家でエルサレムに住むために、夫と子供たちの「呼び寄せ申請」をした。彼女と子供たちは、「家族呼び寄せ」の資格を満たすためにエルサレムに移りすんだ。しかし、申請は1995年12月に拒否された。以来、彼女は、エルサレムに入る許可を手にするこ

^{註132} エルサレムの南西にある占領地内の町。「ユダヤ民族史」では古代ダビデ王の最初の首都であったとされている。パレスチナへのユダヤ移民が増えてきた1929年にはアラブ人との大きな衝突があり、ユダヤ人が多数殺された町でもある。現在の住民の大多数はアラブ人であるがユダヤ人の入植地もある。

きない夫と別々に住むことを強いられている。子供たちは健康保険に加入しておらず、子供の一人が障害者であり特別の介護が必要なため、非常に大きな問題となっている^{注133}。

1994年までイスラエル内務省は、エルサレムに住むパレスチナ人女性からの、非居住者の地位にある夫の「呼び寄せ」の申請を拒否していた。その理由は、アラブの文化的規範に従えば、妻が夫の居住地に移るべきだということである。その後、イスラエル市民権協会の訴えにより、エルサレムの境界内で生活していることを文書で証明できれば非居住者である夫を「呼び寄せる」申請への許可の可能性がひらかれた^{注134}。しかし、1996年、内務省の方針は再び硬化し、女性のエルサレム住民にも、同市に「生活の拠点」があることを証明する書類が新たに申請の要件として必要になった。さらに同年内務省は、「家族の呼び寄せ」申請中であるということだけでは、「イスラエルへの入域許可」を得る十分な理由とは見なされないと通告した。このため、「家族の呼び寄せ」申請が認められるまでは、非居住者資格の配偶者や子供は家族と離れ離れに住むか、家族全体がエルサレム市から引っ越すことを強いられることになってしまった^{注135}。内務省は、この申請に関する自由裁量権を有しており、申請がなされてから回答が出るまでの期間は長い場合には3年にもおよぶ。しかも不許可の場合の理由の明示は不要とされている。また、「安全保障上の理由」で、政治的活動歴をもつパレスチナ人の申請は不許可とされるということもおきている^{注136}。

さらに、イスラエル入国法第12条により、父親がエルサレム市の非居住者の地位にあり、母親がエルサレム市の居住者である場合、生まれた子供は、母側が書面で異議申し立てをしない限り父の法的地位に従って登録される（異議申し立てがあった場合は、子供の法的地位は内務省によって決定される）^{注137}。1982年までは、父親側がエルサレムに居住権を持たない場合でも、子供をエルサレムで登録することにはそれほど大きな困難がなかったということである。しかし1982年以降、子供の登録には父親が住民登録されていることが要件になった。人権団体の働きかけによって、1992年、父親が自らの「生活の拠点」がエルサレム市内にあることを文書で明らかにした場合には、エルサレムに居住権を持つ母親側での子供の登録を許可することに内務省は合意したが、この方針転換を広く告知することを拒否したため、この新しい措置の利点を活用している人は少ないままであるという報告がなされている^{注138}。

^{注133} 『中東・パレスチナ翻訳資料集：Chun-Pon!』第1号、1997年1月13日。13頁。

^{注134} この場合、夫の側に要求される書類は、借家、財産、職場などについての多数の書類から、税金、電気、水道、電話、子供たちのエルサレムの学校での登録などについての支払い領収書などまで、多岐にわたる。

^{注135} 『同上書』

^{注136} 『同上書』

^{注137} 『同上書』

^{注138} 『同上書』

これと併せて、パレスチナ人の家屋の建築許可をめぐる問題についても触れておかなければならない。先にも述べたように、イスラエルの法律では、「農業用地域」および「共有緑地」に指定された土地には家屋を増築したり新築したりすることが制限されている。ほとんどの場合こうした土地の所有者はパレスチナ人である。逆に言えば、ユダヤ人の「私有地」にこうした指定がかかることはないからである。しかし、家族の増加やその他の理由で、家屋を増・改築したり新築したりする必要は当然生じるわけであり、もしこうした建設がなされると、それは「違法建築」とみなされ、とりこわしの対象になるのである。この法律は占領地域にも適用され、ユダヤ人入植地が拡大していく一方で、パレスチナ人の「違法建築」家屋は、取り壊しの対象になってきた。1987年以降、ウエストバンクおよび東エルサレムで建築許可がないという理由で取り壊されたパレスチナ人の家屋数は表2-4-4のようになっている。

表2-4-4 1987年以降ウエストバンクおよび東エルサレムでの破壊された家屋（建物）の数

年	破壊された家屋数		出典
	ウエスト・バンク	東エルサレム	
1987	103	統計なし	パレスチナの諸資料
1988	393	30	パレスチナ人権情報センター (PHRIC)
1989	347		PHRIC
1990	102		PHRIC
1991	227		PHRIC
1992	148	12	PHRIC
1993	63	48	PHRIC
1994	120	29	(イスラエル) 法務長官
1995	43	25	PHRIC
1996	140	17	(イスラエル) 国防省
1997	233	16	(イスラエル) 国防省
1998	150	30	ベツェレムの調査、諸新聞記事
1999	59		ベツェレムの調査
2000 (6月末現在)	16		ベツェレムの調査

出典：B'Tselem Casualty Statistics, <http://www.btselem.org/>

東エルサレムでは、結果として、エルサレム市の地図のなかでパレスチナ人が所有しているはずの

土地の10%にしか建築したり、住んだり、使用したりできないことになってしまっている^{註139}。東エルサレムのパレスチナ人の人口は、1967年以来約6万人から約17万人に増加したが、市当局が認可する毎年約3000件の建築許可のうちパレスチナ人に与えられる許可は150件程度に過ぎず、12万人が標準以下の過密状態で暮らしているといわれる。たとえば、東エルサレムのある地区では、土地の75%が共有緑地に指定されていて、だれもそこで住居を増築はできず、長年その自分の土地に住んできた人々でさえ、自宅を増築できないのである^{註140}。

土地をユダヤ化し、パレスチナ人の居住権に高い障壁をもうけていくこうした姿勢が象徴的に現われているのは、エルサレムの将来的地位をどう決定するのかという「エルサレム問題」^{註141}をめぐる攻防においてである。エルサレムは、イスラエル建国後まもない1950年に、これを首都とする動議が国会で可決されているが、これには国際的合意が得られていない。ちなみに、この段階でのイスラエルのエルサレムの地理的領域は現在の西エルサレムのみであった。しかも、それは、国連のパレスチナ分割案では「国際管理」になるはずであった地域だが、第一次中東戦争の停戦ラインは、エルサレムをイスラエルとヨルダンで分割する形になった。その後1967年の第三次中東戦争で、パレスチナ人の居住地域であった東エルサレムを占領し、その後、エルサレムはこの東エルサレムと、主としてユダヤ人が居住する西エルサレムを統合したものになり、地理的領域も徐々に拡大していく。1980年には、「基本法」であるエルサレム恒久首都法案が国会で可決されているが、その第四条「エルサレムの発展」では「1）政府は、エルサレム市に対する特別の年間助成金を含む特別の基金を配分し、住民の福利、エルサレムの発展を促進する。2）経済その他の発展をさらに進めるために、エルサレムには国家当局の活動において特別の優先権が与えられる。3）政府はそれを実行するために、特別組織を設立する。」^{註142}と宣言されている。

ハール・ホマ入植地の建設も、東エルサレムのパレスチナ人からのIDカード没収という形をとって進められる居住権の否定も、エルサレムの最終的地位を決める今後の中東和平交渉にむけて、既成事実をできるだけつくっておこうとするイスラエルの姿勢がそこにかがえる。それはつまり、エルサ

^{註139} エルサレム市の元都市計画プランナー（1970-1980にかけて）であり、1988-1993年まではエルサレム市会議員、現在は「エルサレム情報センター」の共同代表である、サラ・カミンケルのインタビュー記事より。『豊穡な記憶』第7号、パレスチナ交流センター、1996年、8頁。原典は、*Challenge*, no.40,1996.もっとも、全ての「違法建築物」が取り壊し命令の適用を受けてはいないようである。カミンケルは、その理由として次の3点をあげている。第一に、あまりにも膨大な数の建築が許可なしに行われているため、すべての「不法建築」を取り壊すことは、抵抗の大きさを考慮すると現実には不可能であること。第二に、一部の「不法建築」を取り壊すことで、新たな「不法建築」を思いとどまらせるための十分な「抑制効果」をもつこと。第三に、イスラエルの建築検査員が賄賂を受け取っている場合があること。

^{註140} 『同上書』8-9頁。

^{註141} エルサレムの将来の地位に関する交渉のこと。

^{註142} Israel Ministry of Foreign Affairs, *Basic Laws*, <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>

レムのユダヤ人人口をできる限り増大させること、言い換えればパレスチナ人人口をできる限り減少させ、排除すること、そうすることによってイスラエルの首都として広域化したエルサレム全域をイスラエルの手中に残す、という形で最終的な地位を確定しようとする意志である。しかしその陰で、パレスチナ人のシチズンシップは、国家によっては保護されないまま、「人間の尊厳と自由」は消失している。

3 宗教と国家

イスラエルが、通常の市民法の他に宗教法が管轄する領域を有していることはよく知られている。イスラエルで宗教法の権威について「基本法」の中で正式に明記されたのは、基本法の「裁判法」が制定された1984年であるが、実態としては建国直後から市民法と宗教法との二つの領域が存在し機能してきたことはいうまでもない。またその宗教は、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教諸派、ドルーズ、バハイなどで、それぞれ一定の自立性をもち、それぞれの管轄領域を有している。これはイスラエルが、イギリスによるパレスチナ委任統治時代の宗教行政を基本的に踏襲したことによるものだが、さらに遡れば、オスマン帝国時代の行政システムを受け継いだものである。

十九世紀末からのシオニズム運動の歴史の中で、ユダヤ教宗教勢力と政治的シオニズムとの関係は非常に複雑である。そしてユダヤ教「宗教勢力」そのものにも考え方の対立もあり一枚岩ではなく、ここでそのそれぞれの内容や政治的シオニズムとの間でおこった様々な論争を詳細に述べることはできない。ただいえることは、「誰がユダヤ人か」という問題をめぐって、世俗的な民族概念だと考える政治的シオニズムの立場とあくまでも「ユダヤ教信徒」と考える宗教勢力とでの対立がその基本にあること、また世俗的な「ユダヤ人国家」を政治的に建設していくことを志向するシオニズムの立場に対し、「破滅的な偽メシア的企ての中で、最も恥ずべきもの」^{註143}として否定した（する）、反シオニストや非シオニストの正統派ユダヤ教徒や超正統派ユダヤ教徒が存在した（している）ということである。ともあれ本項では、本研究におけるシチズンシップの議論に関わる限りで、限定的に考察するものであることをあらかじめ述べておきたい。また、イスラエルでのユダヤ教以外の宗教と国家との関係については、ここでの議論には含めないものとする。

まず第一の問題は、パレスチナ人のシチズンシップを主に議論してきたこれまでの考察との一貫性を欠くが、ユダヤ・イスラエル人のシチズンシップにあらわれる問題である。ここでもう一度確認し

^{註143} ウォルター・ラカー、『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』、第三書館、1987年、579頁。
(Walter Laqueur, *A History of Zionism*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1972.)

ておく必要があるのは、イスラエルは「ユダヤ人国家」として建国が宣言され、さらに帰還法が「ユダヤ人の帰還の権利」を保証することで、「ユダヤ人国家」としての性格の維持を志向してきたのだが、肝心の「ユダヤ人とは誰か」という定義については、合意形成がなされず、またおそらく故意に定義がなされてこなかったということである。前節の第二項で指摘した1970年の帰還法の改正で新たにつけ加えられた「ユダヤ人とは、ユダヤ人の母から生まれた子供、ユダヤ教に改宗した者、そして他の宗教の成員ではない者を意味する。」という規定は、この文脈の中で大変重要な意味をもってくるのである。

この規定はまず様々な矛盾と問題を含んでいる。第一に、これは「ユダヤと人は誰か」ということについてイスラエル国会が初めて正式に明文化した「非宗教的基準」である。しかしその基準の前半の部分は、ハラハー（ユダヤ宗教法）によるユダヤ人の定義である。別の言い方をすれば、ハラハーの解釈では上記の基準の後半の部分は存在しないのである。さらにハラハー（ユダヤ宗教法）の解釈の部分についても、「ユダヤ人の母から生まれた子供」という部分については、「母」がユダヤ人であることはどのように証明されるのか不明なままであり、これではユダヤ人の「定義」としてはトロジーである。

第二に、この「非宗教的基準」は逆説的にも二つの意味で宗教的要素によって規定されているといえる。一つは、上述したように、ハラハー（ユダヤ宗教法）によるユダヤ人の定義を前半で用い、そして後半では、「他宗教の成員はユダヤ人ではない」とすることで申請者の宗教を重視していることになる。

つまりこのことは、「ユダヤ人」の解釈が、民族を宗教と切り離せないものとしてきた「宗教勢力」の立場に限りなく近い解釈となっており、世俗的（非宗教的）なユダヤ人国家をつくろうとした労働シオニズムや社会主義シオニズムの立場を「逸脱」したものになったといえる。

この問題は「ユダヤ人とは誰か」をめぐる論争として、1958年に二つの問題をめぐる大きな国会論議があり、それ以降今日まで決着のつけられていない大きな文化闘争なのである^{註144}。その一つは、

「雑婚」による子供の人口登録をどう記載するかという問題として現れた。つまり、父がユダヤ人で母がユダヤ人ではなくまたユダヤ教に改宗もしていない場合、その子供をどう登録するかという問題

^{註144} アキバ・オール、『誰がユダヤ人か』、話の特集、1984年。（Akiva Orr, *The un-Jewish State: the Politics of Jewish Identity in Israel*, Ithaca Press, London, 1983.）および、臼杵陽、『イスラエルにおける宗教、国家、そして政治—『誰がユダヤ人か』問題とその法制化をめぐる—』『国際政治』第121号、1999年a、95-107頁。市川裕「移民の私的身分とイスラエルの宗教法体系—エチオピア・ユダヤ人の事例を通して」池田明史編『イスラエル国家の諸問題』、アジア経済研究所、1994年、159-188頁。Martin Edelman, *Courts, Politics, and Culture in Israel*, University Press of Virginia, Charlottesville and London, 1994, pp.62-63.

である。ハラハー（ユダヤ宗教法）の規定では誰がユダヤ人であるかを定めるのは母の宗教であるので、それが適用されればこの場合子供はユダヤ人として登録されることは、両親が望んだとしてもできない。当時の政府は、人口登録は「民事」の問題なのでハラハー（ユダヤ宗教法）の規程を適用せず申請者の意志を尊重する立場を当初とろうとしたが、宗教シオニストの反発があまりにも大きく、当初の立場は却下された。同時にこの年、（子供に限らない）ユダヤ人一般の人口登録に関する決定がなされ、その内容は今日の帰還法の改正後の内容に近い、「誠意をもって自分をユダヤ人であると申し立て、かつ他の宗教に改宗していなければ、ユダヤ人として登録される」という内容に決定された^{註145}。つまり、従来の人口登録の規程に、「かつ他の宗教に改宗していなければ」という内容がつけ加えられたのである。

もう一つの問題は、同年、カトリックに改宗したポーランド人で、イスラエルに移住した「ユダヤ人神父」によって起こされた訴訟である。彼は移住後帰還法の権利を要求するに当たり、自らを「宗教はカトリックだがユダヤ人である」として、帰還法の権利（＝市民権取得の権利）を申請したのである。この申請は内務省によって拒否され、この問題は最高裁に持ち込まれた。ちなみに彼のユダヤ人というアイデンティティはそれなりの「実績」に裏付けられたものであり、申請のための方便ではなかったといえることができる^{註146}。しかし最高裁はこの訴えに対して四対一の多数決で、1962年に彼をユダヤ人とは認めないと裁定したのである^{註147}。

さらに最近は、こうした文化闘争にエチオピア移民の「ユダヤ人の正統性」をめぐる問題や「再改宗」問題という形での論争が加わっている。この問題はエチオピア移民の流入によって浮上してきた問題で、次のような経過をたどっている。イスラエルへのエチオピア移民は1948年以降、少数の継続した流入がみられたがその規模は小さく、1979年までの累計は473名であつたにすぎない^{註148}。しかしそれが1980年代以降になって急増する。1980年代の総計は、16,965人、1990-1997年までの総計は、34,248人であり、旧ソ連からの移民を除くと、一国からの移民では近年の最大の移民集団となったのである^{註149}。特に1980—1984年と1990—1994年には、それぞれの期間の移民総数の15%、5%であつ

^{註145} アキバ・オール、『前掲書』、58-95頁。

^{註146} 青年時代はシオニスト運動に参加、第二次大戦中はゲシュタポに捕らえられたが逃亡し、ドイツ人キリスト教徒の証明書を手入、その資格を使って多くのユダヤ人を助ける。その後正体が暴露し、投獄され死刑宣告を受けるが、逃亡し、僧院にかくまわれ、滞在中にキリスト教に改宗する。その後僧院を出てロシア人ゲリラ部隊に参加、その後今度はロシア人からスパイ容疑をかけられ死刑宣告を受けるが、彼が以前救助したユダヤ人が現れてスパイ容疑が解かれ、奇跡的に助かる。『同上書』、100頁。

^{註147} 『同上書』、96-135頁。

^{註148} Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998, p.5-6.（頁表記は原書のまま。）

^{註149} Ibid.

た¹⁵⁰。この急激な増加には、政治的関与という背景があり、それはまず1977年のベギン首相とエチオピア軍事政権との秘密交渉に端を発している。しかしこの時は、途中で交渉の事実がマスコミに漏れたことで大規模な移民集団とはならなかった。その後、1984年から1985年にかけてこの計画の実施が再度決定され、「モーセ作戦」および「シバ作戦」、1990年代以降は「ソロモン作戦」という集団移送計画がイスラエル政府によって実行されてきたのである。

ところがその後、彼等の「ユダヤ性」をめぐる、正統派ユダヤ教徒からの異議の声があがるのである。すなわちハラハー（ユダヤ宗教法）の判断基準からみると、（エチオピア移民だけでなく）エチオピア・ユダヤ人全体に対して「mamzel」¹⁵¹への疑惑が残り、完全に「ユダヤ性」を証明できないことになる。これに対し、エチオピア・ユダヤ移民自身は、現地エチオピアにおいて、イスラエルの神である唯一神を信じ、「イスラエルの家」を自称してユダヤ教に則した生活を送ってきたと認識している。両者の認識のずれは、「宗教法上の」ユダヤ人と「市民法上の」ユダヤ人概念の不一致という問題をここでも露呈し、「完全なユダヤ人」になるために「浸礼」¹⁵²が必要であると判断する正統派ラビ・ユダヤ教体制との間で裁判問題に発展していった¹⁵³。

さらに今度はその「浸礼」の儀式は正統派のラビによるものだけが正統性をもつのか、改革派や保守派によるものも認められるのかをめぐる論争や、正統派のラビ以外のもで改宗したデュアスポラのユダヤ教徒のイスラエルでの「再改宗」問題や、イスラエル内外の宗教勢力をまきこんだ「正統派」・「改革派」・「保守派」の間での「文化闘争」（「正統派」の宗教的権威の独占に対する、「改革派」・「保守派」の反発）という問題に発展している¹⁵⁴。

この問題の議論にここでこれ以上立ち入ることはできないが、イスラエルでは、「ユダヤ人とは誰か」という問題は、「世俗的シオニスト勢力」、「宗教シオニスト勢力」、「非もしくは反シオニストの宗教勢力」、「非もしくは反シオニストの世俗的勢力」、さらには「宗教勢力の中の、正統派、保守派、改革派」などのそれぞれの立場によって主張が異なり、イスラエル社会を分裂させうる最も大きな要素の一つになっている。そして上記の三つの例は、宗教権力が国家権力に介在したときにどのような問題がoccurするかということを示すものである。すなわち「ユダヤ人とは誰か」

¹⁵⁰ Ministry of Immigrant Absorption, *Immigration to Israel: 1995*, Central Bureau of Statistics Publication no.1037, Jerusalem, 1996, pp.38-39. なお、1990-1994年では、最大の移民集団は旧ソ連からで同時期の総移民数の87%である。エチオピアからの同期間の移民総数は、これに次いで高い割合となっている。

¹⁵¹ ユダヤ法が禁止している婚姻関係によって生まれた子供。例として、近親婚、離婚歴のある女性と祭司出身の男性との子供など。

¹⁵² ユダヤ教への改宗儀礼。この場合、エチオピア・ユダヤ移民は文字通り「改宗」するわけではないが、「ユダヤ性」を完全に獲得するために浸礼が必要であるという、ユダヤ教権威筋の見解にもとづいている。

¹⁵³ 市川裕、『前掲書』。および、Martin Edelman, op.cit.

¹⁵⁴ 白杵陽、1999年a。

という問題は、イスラエルでは「誰が正当な、由緒ある国民であるか」ということを含意するものであり、「宗教」と「民族」と「国籍」の一致・不一致をめぐってシチズンシップに格差が生まれ、主観的にはユダヤ人アイデンティティを持つ人であっても、「正統な、由緒ある国民」とはみなされないということが起こりうるということなのである。これは本研究の議論の文脈に引き寄せると、（アラブ・イスラエル人やパレスチナ人だけでなく）ユダヤ・イスラエル人のシチズンシップも一様ではないということを意味している。

宗教と国家という視点から見た第二の問題は、このシチズンシップの「格差」にかかわることである。つまり、イスラエル国家は宗教勢力とその権威に対して「自立的な領域」を認めたために、「国民」に等しく付与されるはずの権利・義務関係に不平等な余地を残すことになった。それが最も典型的にあらわれているのは、兵役に関する義務である。現在イスラエルで兵役の対象とならないのは、ドルーズとチェルケス^{註155}を除くアラブ・イスラエル人と一部の「ユダヤ教徒」である。ちなみに、徴兵に対する主なユダヤ教宗教勢力の立場は、シオニスト宗教政党であるマフダル（国家宗教党）はこれを受け入れている。また、非シオニスト正統派宗教政党のアグダット・イスラエルとシャス党^{註156}は拒否の立場をとるのに対し、ポアレイ・アグダット・イスラエルは受け入れる立場をとっている。また、ネトレイ・カルタの率いるグループ^{註157}のように、独自の法廷を持ち、イスラエルの全ての選挙をボイコットし、宗教学者に保証されている免除措置を利用して、徴兵も納税も拒否している人々もいる。イスラエル政府は、基本的にこうした行為を黙認している。

さて、徴兵制度を有する国家にとって兵役は国民の義務となっている。言い換えれば、兵役対象者は「国民」であることを徴兵を通して「信任」されているわけであり、その意味では兵役の対象でないということは、当該者が「国民」とみなされていないという意味でまずは「差別」である。自発的に兵役を拒否する人々を別にすると、イスラエルは上記の人々を兵役の対象外としているが、その意味は以下で述べるように、両者でもちろん異なっている。

アラブ・イスラエル人は「潜在的敵」として兵役を「除外」されているのであり、この場合は彼等を「国民」として信任することの拒否という意味がある。さらに、兵役という「国民の義務」には同時に「権利」という意味もセットになって含まれている。それは「国民であることを自ら宣言する権

^{註155} イスラエルの少数民族の一つ。18世紀までは、キリスト教徒。18世紀にイスラム教徒になったが、キリスト教徒の伝統が残っているとされる。現在最も多く存在するのはトルコであるが、シリア、ヨルダン、イスラエルにも存在している。イスラエルでは、ガリラヤ地区に二つの集落が、テル・アヴィヴのそばのシャロン地区に一つの集落がある。

^{註156} 1984年、アグダット・イスラエルから分裂して形成された、ミズラヒム系の非シオニスト宗教政党。

^{註157} 政党にはなっていない超正統派非シオニスト宗教勢力で、「ユダヤの民」の救いは神によってのみもたらされるとの立場から、イスラエル国家とその法律を拒否している。

利」であると同時に、兵役従事者に与えられる様々な「特典」への「権利」も含まれる。種々の生活物資の供与や物品税免除の特典、住宅購入時に借りられるローンの額が多いこと、奨学金、バスや映画の割引券などはその一例であるが、これらの現物支給は「国民」に対する社会福祉の機能を果たしていることを忘れるべきではない。従って、兵役対象外であるアラブ・イスラエル人は、兵役の「義務」だけでなくこうした「権利」からも排除されているといえる。

一方、宗教的なユダヤ教徒の場合には兵役の「除外」ではなく「免除」である。正統派ユダヤ教徒の女性、イエシヴァ^{註158}の学生に対する徴兵の延期（これは実質的には無期延期、すなわち免除であるといわれている）、宗教シオニストのイエシヴァの学生に対する徴兵の短縮などがこの場合である。しかし宗教的ユダヤ教徒に対しては、「兵役の免除」に代わる「奉仕活動」が用意されており^{註159}、それを実施することで「名誉挽回」の機会が与えられている。正統派ユダヤ教徒の女性の場合などがそうである。しかし、多くの場合、正統派ユダヤ教徒は軍隊という世俗的な行為をすることを「拒否」しているのであり、兵役につかないことが彼等に対する「差別」であるという認識はないといえる。言い換えれば、宗教的ユダヤ教徒に対する兵役の免除は、彼等が兵役につかないで、その代わりに「ユダヤ教を学ぶ権利を要求する」ことを容認する「逆差別」として機能していることを意味している。

宗教と国家という視点から見たイスラエルのシチズンシップの第三の問題としては、1) ユダヤ教という特定の宗教を信仰する人々のために、国家予算や補助金が特化して投与されること、2) 公的生活領域にユダヤ教の宗教的な影響が及ぼされること、3) 私的生活の問題が宗教法の規程の制約を受けること、4) イスラエルの身分証明書のあり方などを指摘することができる。

第一の点については、ユダヤ教の宗教勢力がどの位の額の予算や補助金を獲得しているかということとを具体的に明らかにすることは今はできないが、例えば、各種宗教学校（タルムード・トラール小学校、高等イエシヴァ学校）などにはこうした補助金が投入されているといえるし、「シャス党傘下の慈善事業は主に政府からの補助金でまかなわれている」^{註160}からである。また、イスラエル国会でシャス党がこの補助金の増額を要求し、非宗教勢力との争点の一つにもなっている。このことは、非宗教勢力と宗教勢力との対立ということだけでなく、ユダヤ教以外の宗教との公平性も欠いており、「宗教、人種、性別にかかわらず、すべての住民に対し社会的・政治的権利の完全な平等を保証し・・・」という「建国宣言の精神」とも矛盾するものである。

^{註158} ユダヤ教神学校。

^{註159} これはアラブ・イスラエル人には用意されていない。従って彼等には、奪われた「義務」と「権利」を挽回する機会が与えられず、「国民」の回復ができない。

^{註160} 臼杵陽、『原理主義』、岩波書店、1999年b、66頁。

第二の点の例としては、シャバット（ユダヤ教の安息日）における公共交通機関の規制（金曜の日没前から土曜の日没後までの公共交通機関の停止）、公共機関でのコシェル（ユダヤ宗教法による食事の規程）の遵守、ユダヤ暦とユダヤ教の祝祭日の施行、イスラエルの公的書類にユダヤ暦だけが併記されていること（なおこのユダヤ暦の年号の併記は、1997年に法制化された）などをあげることができる。

第三の点は、出生、婚姻、離婚、相続、埋葬などの問題が宗教法や宗教裁判所の管轄下であり、この領域では市民法の権限が及ばないことになっていることである。典型的な例としては、非ユダヤ人の女性とユダヤ人の男性の婚姻は当該女性がユダヤ教への改宗を望まない場合にはイスラエルでは成立しないということがある。しかし、現実にはそうした場合はこうしたユダヤ教の規程が及ばない外国^{註161}に一時出国し、そこで市民法にもとづく婚姻手続きをすることで対処する例も少なくないようである。ただその場合は、依然としてイスラエルでは正式な婚姻関係と認められないので、相続、埋葬などの点で、他のユダヤ人と同等の権利がえられないことになる。また子供がユダヤ人として認められないという問題も生じ、それは前述した通りである。またすべての離婚が宗教法による認可と手続きを要するという問題は、「人間の尊厳と自由」という観点から見て、世俗的ユダヤ人のシチズンシップを不完全なものにしているといえよう。

第四の点は、イスラエルの身分証明書の記載事項のなかにみられる問題である。まず身分証明書の表紙には、イスラエル国家のシンボルマークと、ヘブライ語とアラビア語の併記で、「内務省」、「身分証明書」（ヘブライ語で、テウダット・ゼフット）という文字が明記され、中は二つ折りになっていて、記載項目は順に以下の通りである。「イスラエル国家」、「身分証明書」、「内務省」、（ここまでは全員に共通した項目）、「ID番号」、「姓」、「名」、「父親の名前」、「母親の名前」、「出生年月日」（西暦とユダヤ暦の併記）、「出生地」、「ハ・レオム^{註162}」、「性別」、「発行年」（西暦とユダヤ暦の併記）。以上の項目に加えて、左上に本人の写真が張られる形式になっている。

ここに三つの問題をみることができる。一つは既に指摘した、ユダヤ暦の併記がなされていること。もう一つは「国民の総背番号」化がみられること。そして「ハ・レオム」という項目に関わる問題である。ここで特に注目したいのは三番目の点である。「注」でも触れたように、この概念は他の

^{註161} そうした国としては、キプロスなどがあげられる。

^{註162} これは翻訳が難しいヘブライ語だが、「民族性」という概念に近いともいえる。ちなみに、ヘブライ語では、民族に相当する概念としてアムという言葉もあり、たとえば「ユダヤ民族」という概念は普通「ハ・アム・ハ・イフディ」（ハは定冠詞、イフディはユダヤのという意味）という表現を用いる。

言語に翻訳することが難しい概念である。筆者はこれに相当する英語の概念は何かということは何人のイスラエル人に聞いてみたが、ある人は、英語でのnationalityであるといい、ある人はpeopleに近い概念だといい、ある人は英語には翻訳できないといいその答えは様々であった。現実にはどのようなことが書かれるかといえば、ユダヤ人は「ユダヤ（人）」、アラブ人は「アラブ（人）」、ユダヤ人でもアラブ人でもない人は、出身国によって（傍点筆者）分類される（イギリス（人）、オランダ（人）、ドイツ（人）など）^{注163}。また、イスラエル内務省はイスラエルに存在する少数民族のためのこの項目の公式リストとして、「アルメニアン」、「アッシリアン」、「ドルーズ」、「チェルケシアン」、「ヘブライ（サマリア・ユダヤ人）」という分類を用意し適用している^{注164}。ちなみに、イスラエル占領地内のパレスチナ人に対してイスラエルが発行してきた身分証明書では、「ハ・レオム」という項目はなく、それにかわって「宗教」という項目があてられている^{注165}。

この「ハ・レオム」という概念が、イギリス（人）、オランダ（人）、ドイツ（人）などと同列の意味でないことは——イスラエルでは、現にそうみなされているとしても——明らかである。イギリス人やオランダ人やドイツ人というような「民族性」が存在しているとはいえないからである。身分証明の記載事項として、なぜ占領地のパレスチナ人に対して用いた「ダト（宗教）」ではなく、また「アム（民族）」でもなく「ハ・レオム」という概念を用いるのかということに対して、筆者はまだ納得のいく答えを用意できない。現段階でいえることは、イスラエルには、（少なくともヘブライ語には）、一般的な意味での「国民」（＝その国の国籍を有している人）という概念が不在なのではないかという疑問である。

以上、三つの観点から国家に対する宗教の関わりとシチズンシップの問題についてみてきたが、これらのことから、次の二点を指摘しておきたい。一つは、国家に対する宗教の介在によって、個人の二つの「自己定義」（国民としての自己定義、および民族的自己定義）が否定されること。もう一つは、国家に対する宗教の介在によって、「国民」は様々な二重基準の適用をうけていることである。

第五節 「国民国家」の形成がうみだす「外国人」

前節までを通し、イスラエルの「基本法」やいくつかの重要な法律とその適用のあり方を検討することで、イスラエルの政治文化を、なぜ、どのような、シチズンシップの「歪み」として捉えうるの

^{注163} Uri Davis, op.cit., p.62.

^{注164} Ibid.

^{注165} Ibid.

かを考察してきた。それぞれの節や項の中でその問題点を指摘してきたが、それらを総合すると、問題の本質は、イスラエル社会・国家のなかでは、国民である構成員に本来平等に保証されるべき諸権利（シチズンシップ）が、実質的に平等に保証されているとはいえないということである。つまり、この「歪み」はイスラエルの国家アイデンティティのありかたと不可分の関係であり、「国民」はまず、「ユダヤ人」と「非ユダヤ人」とで二重基準での法の適用をうけ、次に「世俗」と「宗教」の二重基準での法の適用を受けている。その実質において「ユダヤ人国家」と「民主国家」との両立は成立しておらず、イスラエル国家の「民主国家」としての自己規定は絶えず「ユダヤ人国家の諸価値」と「ユダヤ教」によって骨抜きにされ、「土地のユダヤ化」と「人口のユダヤ化」が進んできたこととらえることができるだろう。しかも「ユダヤ人」や「ユダヤ性」とは何かということはあいまいにされたままで。

またその過程は、「国家によって保護されない国民」（＝「外国人」）が誕生してくる過程でもあった。見落とすべきでないのは、これらの「外国人」の誕生は、法律の適用によって、合法的に形成されているという点である。もしそれらが、戦争による一時的混乱や、一部の「過激な」人間の常軌を逸した行為や意識の判断の結果であるならば、問題はまた別である。しかし、そうではなく、普遍的な人権感覚をもって判断すれば正当化する論理が見つからないような一連の政策が法的に「堂々と」行使されてしまうというところに、問題の一層の根深さを感じざるをえない。そしてそうした「外国人」は、実態は圧倒的にパレスチナ人であるが、中には例外的であるとしても、「ユダヤ人」にも存在していた。

このことは、イスラエルが究極の「民族国家」として——世俗勢力と宗教勢力とでの民族概念に対する合意が存在していないとはいえ——「国民国家」の形成を追求してきたことの結果である。言い換えれば、イスラエルという極端な「一民族一国家」イデオロギーを内包する「国民国家」のあり方を通して、「国民国家」が「国民」の中に「外国人」をつくりだしているあり方をみることができる。おそらく、イスラエルの事例はこの構図がもっとも純化された形でみえているのであり、われわれの社会や国家にも、それが薄められた形での、質においては同じような構図が存在しているのではないだろうか。われわれがイスラエル国家のあり方から学ぶのは、「一民族一国家」イデオロギーや「民族自決」の矛盾と限界であり、この事例を通して自らの国家のあり方というものを自己点検していくという姿勢である。

はじめに

この章では、前章で検討した法的な「シチズンシップの歪み」と「歪められた」法の適用の実態を、これを受容する人々の意識に焦点をおいて考察をすすめていく。

「私は、帰属感 (a sense of belonging) を持ちたい。エジプト人は国をもっており、アメリカ人も国をもっている。私も国がほしい。」^{注166}

これは家を追われた一人のパレスチナ人の言葉である。われわれはこの言葉の中に、反ユダヤ主義の下で「市民的諸権利」から最も遠いところにいたユダヤ人の姿や、シオニズム生成期のユダヤ人を重ね合わせるのではないだろうか。イスラエルに現在生活するユダヤ人はこの言葉をどのように受けとめるのだろうか。それがこの章の問題意識である。というのも、多くのユダヤ・イスラエル人は前章でみてきたような「シチズンシップの歪み」を受け入れ、再生産してきたからである。シオニズムイデオロギーを「生産」してきたのがシオニズム運動の指導者でありイスラエル建国後の政治的指導層であったとするならば、それらを受容し「消費」してきた人々のなかには、このイデオロギーと響きあうどのような論理が存在しているのだろうか。多くのユダヤ・イスラエル人にとっては、少数の例外的な人々を別にすれば、イスラエルの政治文化に「シチズンシップの歪み」があるという指摘は心外であるのではないのか。このことを「内在的批判の脆弱さ」というもう一つのイスラエル政治文化の問題として考える。そして「普通の人々」の意味世界の中に、「シチズンシップの歪み」が合理化され正当性が付与される論理を探りたい。

また、本章のもう一つの目的は、ポスト・シオニズム論のなかで描かれている「ポスト・シオニズム」状況を筆者の視点で描きなおしてすることである。より限定的に言えば、シオニズムを相対化しうる新たな主体として類型化された「ネオ・シオニスト」、「ラディカル・ポスト・シオニスト」、「リベラル・ポスト・シオニスト」という捉え方を一方では意識しながら、今日のユダヤ・イスラエル人のシオニズムの受容のあり方を、上記の問題意識の文脈の中で描いてみたいと思う。

第一節 インフォーマントの特徴と分析の視角

^{注166} *New Outlook*, vol.28, no.4, 1985, p.15.

ここで分析の材料に用いるものは、聞き取り調査の二十二のサンプルであり、質的な分析としてさえも決して十分なものではなく、すでに述べたようにインフォーマントの選定も特定の職場とその人々の知人ネットワークに限定されているという「偏り」があることは認めざるをえない。その「偏り」を整理してみると、まず第一に、年齢は十六歳から五十四歳にわたるが、ここに共通するのは戦後生まれの、現在または今後のイスラエルを担う比較的若い人々である。内、半数は移民であるが、かれらの移住年は、1955年から1994年にわたっている。しかし大半は1980年代以降の新しい移民である。つまり、このインフォーマントには高齢者やイスラエル建国前の移民は含まれていない。このことは、「シチズンシップの歪み」を支えてきた意識のあり方を、一定の時期以前について分析するためには今後補われる必要がある。ただ、今回の結果から、現在および今後の方向性についての一定の分析を試みることは可能である。

第二に、すでに指摘したように、全員が社会階層においては「中間層」に属し、エルサレム在住者である。他の市町村、入植地、他の社会階層の人々にはまた異なる意味世界がみられるのかもしれない。なお、ここでの「エルサレム在住」という意味は占領地を含んだ広域エルサレムである。

第三に、このインフォーマントには、ハレディムといわれる「超正統派ユダヤ教徒」は含まれていない。これは本研究での設定が「普通の人々」の意識を探ることにあり、ハレディムの人々をその対象者から除外しているからである。ただし、結果的にはインフォーマントのなかに、ダティイム（ユダヤ教信徒）が二名存在した。彼らはハレディムとは一線を画しており、ここでいう「普通の人々」として分析の対象とする。

第四に成人のインフォーマント十七名の内、過去の総選挙でメレツに投票したことのある人が七名存在した。メレツは、労働党最左派のマバム党と市民権運動およびシヌイトで形成されたシオニスト左派の政治ブロックである。1999年の総選挙でメレツが獲得した得票率が7.6%（前回は、7.4%、前前回は、9.6%）であることを考えると、この七名という数字は総選挙での全国平均の数字をかなり上回っているといえることができる。

ともあれ、これらの一人一人の回答は紛れもなく今日のイスラエルの政治文化の担い手の意識を投影している。また、回答のなかには論理的な矛盾や事実誤認があることも少なくなかったが、それ自体も分析の対象となりうると考えられる。従ってここでは、一人一人に内面化された意味世界というものを重視しながら、いわゆるこれまでの伝統的なシオニストとの距離において各自がどのような位置にあるのかという観点からこれらの人々の意識のあり方を以下の三つの類型に分類する。それは、

「伝統的シオニスト」、「ポスト・シオニスト」、「ネオ・シオニスト」と概念化したものである。次節では、この三つの類型を、聞き取り調査でのインフォーマントの言説から合成的に描くことのできる理念型として提示し、その各類型の実質的内容については、関連する項目についてのそれぞれの言説に現れる意味世界を具体的に比較しながら第三節で考察していくことにしたい。

第二節 「ポスト・シオニズム」の状況下におけるシオニストの三類型——「伝統的シオニスト」・「ポスト・シオニスト」・「ネオ・シオニスト」

1 「伝統的シオニスト」

まず、今日シオニズムが国民統合のイデオロギーとしての正統性を失いつつあるとして指摘される時、そこに想定されている「伝統的」シオニズムは、シオニズム運動の主流をしめてきた労働シオニズムないしは社会主義シオニズムである。その具体的内容については、ポスト・シオニズム論者により様々な整理がなされているが、筆者には「中東欧のアシュケナジー系ユダヤ人が伝統的に依拠してきた寄生的生業（＝流通）の否定として自己労働による土地への執着（＝生産力主義）を核としながら、コスモポリタンの離散状態の否定としてエレッツ・イスラエルでの『ユダヤ民族』の『ナショナル』な祖国の建設、都市的生活の否定としての生産拠点の農村的生活の重視、伝統的ユダヤ教信仰体系の否定としての世俗主義、産業資本主義の否定としてのキブツ的社会主義あるいは協同組合主義、東洋的『野蛮』の否定としての西洋的『文明』への自己同一化」^{註167}という整理が、最も網羅的・本質的にまとめられていると思われる。このように「伝統的」シオニズムを規定すれば、確かにそれは今日揺らぎだし、「神話」がくずれ、あるいはまた対抗勢力の挑戦を受けているということが出来るからである。

しかし、本章の分析では「伝統的」シオニズムをもう少し広義に解釈してみたい。つまり、シオニズムの様々な枕詞をとったうえで、最大公約数として残ると思われる、「ユダヤ人国家をイスラエルに建設する」という理念に対してどのようなスタンスであるかという点と、「シチズンシップの歪み」に対して自覚的であるかどうかという点から規定する。言い換えれば、この理念を受け入れ内面化し、同時にそうしたイスラエル国家のあり方がアラブ・イスラエル人そしてパレスチナ人に対する「加害性」を帯びているという視点をもたない人々をここでは「伝統的シオニスト」と呼ぶことにする。従って、そこには、従来の呼び方という狭義の伝統的シオニストに加えていわゆる修正主義シオ

^{註167} 臼杵陽、1998年a、217-218頁。

ニストや宗教シオニストも含まれることになる。別の言い方をすれば、宗教シオニストや修正主義シオニストをその他の伝統的・支配的シオニストとはあえて区別しないということである。こうした従来の呼び方とは異なる意味を付与して「伝統的シオニスト」を上記のように再定義するのは、要するに今のユダヤ人国家としてのイスラエルのあり方を維持したいのかどうかということと、そのことの政治的含意を相対化・対象化しえているかということを重視したいからである。この点が変わるかどうか、イスラエルの「シチズンシップの歪み」の行方にかかわってくるのであり、特にシオニズムを対象化できるかどうかは決定的に重要な分岐点である。

「伝統的シオニスト」の理念型の特徴は、これまでの伝統的シオニストがそうであったように、基本的な前提として、ユダヤ教という宗教と「反ユダヤ主義」を動員することでイスラエル国家の正統性が正当化されている。つまり、「エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）はユダヤ民族の2000年前の祖国」であるという認識を持ち、イスラエルはユダヤ人／民族に帰属するものとして捉えられる。その認識のあり方は、移民、ダティイム（宗教的ユダヤ人）、イスラエル生まれのユダヤ人によってそれぞれ微妙な違いがあることも事実である。例えば現在イスラエルに移民する人々のうち少なくとも人々は移住前にシオニストの活動に参加しており、こうした信念に基づいて移住を選択し、彼／彼女らにとってイスラエルで生活することはユダヤ人にとって最も住みやすい場所であり、イスラエルはユダヤ人が住む望ましい場所として、さらに極端な場合にはユダヤ人が住むべき場所として考えられている。またこのカテゴリーに入るダティイム（宗教的ユダヤ人）の場合には、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）は出エジプト以来ユダヤ「民族」に授けられた場所であるとして捉えられる。イスラエル生まれのユダヤ人の場合には、イスラエルは文字どおり「自分の国」であるが、それは同時に「ユダヤ人の国」として同義的に捉えられている。

ここでイスラエル国家の正当性と必要性の根拠としてしばしば援用されるのが、ユダヤ人に国があったらショア（ホロコースト）は起こらなかったかもしれないという論理であり、その裏返しとして、今ユダヤ人には国があり軍隊があるから安全が保障されているという論理である。そして「又ユダヤ人に何かが起こったら・・・」という将来の「反ユダヤ主義」に対する強い潜在的恐怖感にとらわれてもいる。このことから、イスラエルが「ユダヤ人国家」であることは譲れない一線となっており、イスラエル国家のこの基本的性格を変えることについては否定的になることはいうまでもない。

「アラブ人」はできれば「いてほしくない人々」として認識される。それは、あるインフォーマントの「パレスチナ人はユダヤ人を嫌っているし、ユダヤ人はパレスチナ人が好きではない。もし一緒にいたら、爆発してしまう」という意識や「反ユダヤ主義がいつの時代もあり、世界のどこでもユダ

ヤ人をみな嫌っている」ので、ユダヤ人はユダヤ人のための場所を「国家として」持つ必要があるという言説に代表されるであろう。この認識には、国家と民族はほとんどの国において重なっているという事実誤認があり、また民族の共存に対する絶望的なまでの不信感がある。

このような論理展開のなかで「民族自決」が正当化されていくために、イスラエル建国の結果としておこった様々な帰結は、「戦争」ということに付随するどうしようもない副産物として現状が肯定され、さらにはイスラエル建国に対する「国際社会の承認」を認めなかった相手に非が帰せられる。従って、自らは「反ユダヤ主義」の被害者であるこそすれ、加害者としての側面には意識が及んでいないといえる。またアラブ・パレスチナ人は「遅れた人々」でありまた「危険な人々」であるとして「イスラエル人」との「違い」が強調されることになる。彼らの意識の中でアラブ・パレスチナ人は「イスラエル人」から排除されている。

「伝統的シオニスト」をこのように類型化すると、このカテゴリーに分類できるのは、インフォーマントの識別記号での、〈S5〉〈Y1〉〈Y3〉〈I1〉〈I2〉〈I3〉〈I4〉〈I5〉〈I8〉〈I9〉〈I10〉の十一名であった^{註168}。

2 「ポスト・シオニスト」

ここでの「ポスト・シオニスト」の定義は、第一に「ユダヤ人国家をイスラエルに建設する」ということの意味や正当性について疑問を持ち始めている人々である。言い換えれば、「ユダヤ・イスラエル人」のパレスチナ人に対する加害者としての側面を対象化できている人々でもある。この意味でこれは、ウリ・ラムによる「ラディカル・ポスト・シオニスト」概念の定義に近いものであるともいえる。

この理念型は、比較的若い世代に台頭しているとみることができる。聞き取り調査の〈S1〉〈Y2〉〈Y4〉〈Y5〉〈Y6〉〈I7〉の六名がこのカテゴリーに該当すると思われるが、〈I7〉を除くとインフォーマントは三十代以下であり、また六名のうち五名は女性であった。少ない調査結果からこれに統計的解釈を加えることは妥当であるとは必ずしもいえないが、若者が多かったということと女性が多かったということには、以下のような一定の解釈をすることが可能である。それはまず、ポスト・シオニズム論争でも指摘されているように、イスラエルの社会・政治・経済・文化変容の中で従来のイスラエルのあり方を批判的・客観的に捉えることのできる人々がこうした若い世代に育ち始めているとみられるからである。彼／彼女らは、「独立戦争後」の「戦後世代」に属し、伝統的シオ

^{註168} それぞれの具体的な言説については別冊で資料編として添付したので参照されたい。

ニズムイデオロギーから相対的に自由な人々である。彼／彼女らは、自らは「民族的なマイノリティ」としての経験がなく、被差別感や「反ユダヤ主義」は彼／彼女らにとって、個人的体験というよりはあくまでも間接的な「知識」である。また「女性」ということでいうならば、彼女らはジェンダー上のマイノリティの立場にあって、支配的シオニズムイデオロギーからは疎外されており、そのことから「マジョリティ」に対する批判的視点が獲得されている。また今日様々な「マイノリティ」による権利の復権要求の動きが世界的にみられるが、イスラエルでも例えばホモセクシュアルやレスビアン¹の存在や運動が近年可視的なものとなっている。この調査のインフォーマントにもレスビアンが存在するが、彼女たちは「結婚」し、精子提供をうけて出産した子どもと三人暮らしをしている「マイノリティ」である。彼女たちにとってイスラエルが「普通の民主国家」になることは、自らの人権を守っていく上でも重要な問題となるのである。また占領地をかかえるイスラエルでの兵役の経験は、防衛という役割を逸脱した「攻撃的な抑圧者」としてのイスラエル軍の存在を自覚させ、その視点がイスラエルの社会・国家批判の下地にもなっている。

こうした人々は、世界の他の「普通の国家」のように、イスラエルにも市民社会をつくるべきであると考え、ユダヤ人国家である以上に民主国家であることを求めようとする。しかし、自らを明確な反シオニストと規定しているわけではなく、「正しいシオニスト」や「経済的シオニスト」と自己定義していることにも注意すべきであろう。彼らは、イスラエル社会を冷静に批判し、イスラエルの抱えている諸問題が、シオニズムのイデオロギーに起因してもいることを自覚的に捉えている反面、イスラエルに愛着を示し、ユダヤ人アイデンティティを持ち、ユダヤ的伝統のいくつかを家族的行事や楽しめるイベントとして守っていこうとする志向も持ち合わせている。

ただし、「伝統的シオニスト」や「ネオ・シオニスト」と明らかに異なるのは、帰還法を人種差別的移民法としてとらえ、イスラエルをユダヤ人だけの国家にすることの問題性が反ユダヤ主義の裏返しとして認識されていることである。また「宗教国家」の拒絶ということも重要な特徴となっている。

3 「ネオ・シオニスト」

「ネオ・シオニスト」のここでの定義は、「ユダヤ・イスラエル人」のパレスチナ人に対する加害者としての側面を意識しつつも、「ユダヤ人国家」の必要性を同時に重視している人々である。その意味では、前者二つの類型の間にある意識のあり方でもある。一般的にいわれるネオ・シオニストと

は、世俗的シオニストと対抗する、宗教的・原理主義的シオニストの意味であるが、ここで「ネオ・シオニスト」と呼ぶ人々はそれとは異なっていることをあらかじめ述べておきたい。

「ネオ・シオニスト」は「伝統的シオニスト」と多くの点で認識を共有している。例えば、基本的な前提として民族が国家を持つことはやはり自明視されており、ユダヤ民族は他の民族と同様に「誰からも『出ていけ』といわれないユダヤ人のための国家を持つことが重要で必要」であると認識される。その意味で「伝統的シオニスト」と同じように、個人的経験の有無に関わらず反ユダヤ主義が強く内面化されている。従って、ユダヤ人国家としての性格をイスラエルの基本的性格とすることについては疑いをもたないか、本人の主観の中では‘過渡的’なものとして捉えられる。「いざというときのためにユダヤ人には避難所が必要だ」という恐怖感が払拭されていない。しかし、「伝統的シオニスト」と異なるのは、アラブ・パレスチナ人の不平等な疎外状況や帰還法の問題点を一定の範囲で認識できており、それを「良くないこと」として理論的には自覚している点である。特にアラブ・パレスチナ人との交流活動を授業で経験している高校生などは、パレスチナ人との「友人」さえも獲得できている。

とはいえ、その問題意識は「ポスト・シオニスト」とは異なるものである。「ポスト・シオニスト」は「ユダヤ人国家」としての性格を放棄することも辞さないのに対し、「ネオ・シオニスト」は「ユダヤ人国家」を前提とした上で「ユダヤ人国家」と「民主国家」の両立は可能であると考え。もし非ユダヤ人がそのことによって「二級市民」になっているとしたら、それは「良くない」ことではあっても、「民族が違う以上やむをえない問題」として合理化されるか、「歴史がそうさせてしまった」と問題が「歴史」に転化されるか、「その間違いをどう直せばよいのか私にはわからない」として、イスラエル国家の変革の主体に自らがなりうる可能性から退いてしまうのである。なおこの類型には、〈S2〉〈S3〉〈S4〉〈I6〉〈II1〉の五名が該当した。

今日のユダヤ・イスラエル人の意識のあり方をこの三つの類型で全て説明できると主張するつもりはもちろんだが、本節の初めに述べた二つの基準を用いるとこうした類型化が可能である。ただし、従来のユダヤ・イスラエル人の言説と特にかわった言説はみあたらないという批判もなりたつかもしれない。もしそうであるならば、まさにその点にこそ「シオニズム」の頑強さをみることができるとではないかというのがここでの主張である。

第三節 「伝統的シオニスト」・「ポスト・シオニスト」・「ネオ・シオニスト」の意味世界

この節では、前節で理念型として類型化した各「シオニスト」の意味世界をより具体的な個別的テーマに分けて比較しながら描いてみたいと思う。

1 「ユダヤ民主国家」への評価

「今までユダヤ人に国はなかった。ユダヤ人は世界のどこでも‘よそ者’だった。歴史をずっと遡ると、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）はユダヤ人のものだった。今はちょうどそれが連続している状態だ。イスラエル国家は、まず、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）の国であって、次に、平和にここで暮らそうという人々のための国である。アラブ人やキリスト教徒がイスラエル国家の法律を認める用意があるのなら、彼等もここに住むことができる。何かがおこったらユダヤ人が来ることのできる場所がいつもあるように、ショア（ホロコースト）が再びおこらないようにするために、エレッツ・イスラエルは、全てのユダヤ人のための場所である必要がある。」〈I10〉

「私が自分をシオニストと思うのは、イスラエルの建国の理念と役割というものは正しかったと考えるから。・・・（しかし）そのイデオロギーを今の現実にあうように正しく変えなければならない。私のような考えに対して『（あなたは）シオニストではない。』という人がいる。イスラエルで『おまえはシオニストではない。』と言われることは、一種の‘のろいの言葉’である。ひどい軽蔑であり、『馬鹿だ』と言われるようなものである。私達はシオニストでなければならず、そういう環境で育つ。シオニストでない人というのは、過激で、反国家的で、アム（民族）の存続に敵対的で・・・ということになる。ここではみんなが兵役に就いて国家の存続に貢献しなければならない。私は自分ではシオニストだと思っている。ただし『正しい考えでのシオニスト』という意味で。経済的シオニストと言ってもいい。」〈Y4〉

「私は、彼等がここにいなかったらよかったと思う。でももし彼等をここから追い出したら、世界は私達に『あなた達は彼等を（アラブ人を）追い出すのか？ここは彼等の国で彼等には市民権もあるというのに。あなた達がかつてヨーロッパでされたくなかったことを、あなた達はアラブ人に対してどうしてできるのか？』と言うだろう。彼等を追い出すという解決策は現実的ではない。でも個人的には、彼等がここにいなかったらよかったと思う。そうすれば問題はすべて解決する。」〈S2〉

上記の三つの引用は、順に「伝統的シオニスト」・「ポスト・シオニスト」・「ネオ・シオニスト」の論理構成の特徴がよくでている言説である。こうした認識のあり方を形成する背景をどのように探ってみることができるだろうか。また、イスラエルが自己定義している「ユダヤ民主国家」とい

う性格に対して、各「シオニスト」は、どのように評価しているともみることができるだろうか。

〈Y4〉がいみじくも指摘しているように、イスラエル社会のなかで、「確信犯的」反シオニストの立場に立つことには、強い向かい風をうけながら生きていくことが要求される。ただ、シオニストの定義は一樣ではなく、インフォーマントの言説にもそれぞれの解釈があったように、その意味は多様な幅をもっている。ここではシオニストを、ユダヤ人を「民族」としてとらえそのユダヤ民族のための国家が必要であると考えの人々、あるいはイスラエルが「ユダヤ人国家」であることの必要性を重視する人々というゆるやかな意味で用いることにしたい。ただしそうすると、「ポスト・シオニスト」はこのシオニストの定義と整合しないという問題がでてくるが、ここでの「ポスト・シオニスト」は、「伝統的シオニスト」と「ネオ・シオニスト」から区別された理念型であり、またこのタイプに分けられるインフォーマント自身が、一人をのぞき、シオニストと自己定義していることから、この理念型にこの名称を与えている。

さて、「伝統的シオニスト」がイスラエルの国家を正当化する論理構成については前節で整理をしているが、第二章で検討したように、イスラエルが「ユダヤ人国家」であろうとすることと「民主国家」であろうとすることには根本的な矛盾が存在する。その矛盾は本研究の中心的テーマであるイスラエルにおける「シチズンシップの歪み」としてあらわれているものである。しかし、「伝統的シオニスト」は、この二つの概念の接合が論理矛盾であるということについても、イスラエルが「民主国家」であるということについても基本的に疑いをもたない。彼らは「ユダヤ人とそうでない人は法的には平等であり」「アラブ人にはイスラエル人のような（ママ）権利があるし」「誰でも国会議員になれるし、裁判所でも職場でも、メディナ（国）はみんなに同じ権利を与えている」と評価し、ロシアから移住した移民は「民主主義体制という点では、我々は疑いなく、非常に民主的な国家である。すべてが自由で、近代的で、世界でも進んでいる位置にある」〈I3〉という評価や「ロシアでは全てが閉鎖的だったのと比較すると時々過剰だと思う。何でも新聞記事になるしテレビで報道される」〈I4〉という評価を与えている。

彼らがイスラエルでのユダヤ人と非ユダヤ人の違いとして指摘するのは、「アラブ人が兵役につくことができない」〈Y1〉〈I1〉ことや「予算の配分や補助金などで時々平等とはいえないこともある」〈Y3〉〈I8〉こと、「移住に関わる場合」〈Y3〉、「軍の駐留」〈Y3〉などである。しかし、徴兵されないことは「兵役につかないのだから何らかの差別があるのは仕方がない」〈I1〉という理由に転化されたり、補助金や予算の不平等な実態については「行政がアシュケナジ^{注169}の人々に与え

^{注169} 注35参照。

る補助は、スファラディ^{註170}の人々へのそれより大きい」〈I8〉というように、ユダヤ人に対しても不平等の問題があることが述べられて問題が帳消しにされる。あるいは、「それは良くないことで、納得できない。でも、（国家の）なかで市民として暮らすには、特に問題はない。二重基準があるとしたら、それはただ個人的なレベルでのこと」〈Y3〉と認識されている。帰還法の適用がユダヤ人にだけ適用されるという「移住に関わる」問題については、帰還法そのものを自明視しているために、それが「差別的な」法であることがそもそも意識されていない。「軍の駐留」は「イスラエルは要するに『戦時状態』なのであり、それは差別とは思わない」〈I1〉ととらえられることになる。

要するに、こうした言説を総合すると、「色々問題はあるにしろ、今だに戦時下にある国家である以上どうしようもない」として問題が片づけられ、イスラエルが民主国家であることには疑いを持たないまま、ユダヤ人国家であることの必要性和重要性が確信されるのである。その結果、「アラブ人に差別があるとは思わない」〈I5〉ことになり、「アラブ人やキリスト教徒がイスラエル国家の法律を認める用意があるのなら、彼等もここに住むことができる」〈I10〉、「彼等は（いるだけなら）いることができる。でも、私達に代わってというところが、だめなのだ」〈I2〉という論理によって現状が肯定されていく。さらに、「日常生活でアラブ人と会うことは『全くない』ので（彼らの状況は）わからない」〈I5〉ために、パレスチナ人の現実と実態はいつまでも対象化されることはないのである。

これとは対照的に、「ポスト・シオニスト」の場合「ユダヤ人国家」であることが「民主国家」であることと両立しがたいということがおおむね意識されている。彼らは「法律自体はあたかも平等のようだが、実際は違っている」〈Y5〉ことを見落とさないのである。その問題意識の程度は個人差があるが、もっとも鋭く問題の本質に迫る言説は〈Y4〉の語りにみられる。「この国は、シオニストの見解では実際『ユダヤ人国家』で、ユダヤ人でない人はみな、属していないかのようだ。シオニスト国家としての今の在り方は、ユダヤ人でない市民にとっては矛盾がある。シオニストの見解を現実をみて変えていく必要がある。今は、シオニストの理念は妥当性を欠いている。・・・国全体がユダヤ人の利害のためにつくられている。（帰還法のような）こういう法律がある国は世界のどこにもない。他の国々のほとんどにあるのは『移民法』だが、『帰還法』は人種主義的な『移民法』。アラブ人が海外からイスラエルにやって来て市民権を得られる状況にはない。まるで『これがこの国の前提であって、変えることは不可能だ』とやっているようなもの。この法律はかつては妥当性があつたかも知れないが、今の状況に合わない。・・・世界の各地からユダヤ人を呼び寄せて、アラブ人には最低限の権利さえ与えていない一方でユダヤ人には全面的に援助するというようなことをやるのではな

^{註170} 注35参照。

く、『市民社会』をつくっていくべきだ。・・・アラブ人にもユダヤ人と全く同じ権利が保証されるのは当然だ。しかも書類上だけでなく実質的に。アラブ人労働者は仕事を得るのが（ユダヤ人より）はるかに大変。それは明らかでありみんな知っていることで、そういうことが山ほどある。ユダヤ人とアラブ人の境遇の違いははなはだしいものだ。」

このように「ポスト・シオニスト」は民主国家であるためには「ユダヤ人国家」としての規定をとりはらっていく必要性を自覚している。そのための具体的な道筋として言及されるのが、第一に「帰還法」の廃棄であり、第二に国家／政治と宗教の分離である。このことは、現在のイスラエルのなかで実現可能性はきわめて乏しいといえるが、逆に「ポスト・シオニスト」がこうした方向に世論を変える一定の力を持ちえるとしたら、それは現在の「シチズンシップの歪み」を是正していく第一歩となることは間違いない。

一方「ネオ・シオニスト」は、イスラエルが「民主国家」であることを疑わない「伝統的シオニスト」とは違って、「権利という点で見ると、（ユダヤ人とアラブ人は）同じレベルではない」〈S2〉という認識や「法律自体は、みんなが平等でなければならないと（すでに）いっているが、現実に行き始めているのは、ユダヤ人に多くを費やしているということ。（従って、全ての市民に同じレベルで市民権を与えるという具合には）なっていない」〈S3〉、「民主主義的な国だとは言いきれない。アラブ人には十分な権利がない。宗教の押しつけもある」〈S4〉という理解を示し、その点では「ポスト・シオニスト」と認識を一部共有している。ただしロシアからの移民には「十分に民主的な国。ロシアと比較すると批判の自由がある。あそこは民主主義があまりなかった」〈I6〉というような評価もみられる。

しかしそれから先の論理の構成のされかたは、「ポスト・シオニスト」の場合はあくまでも民主的國家や市民社会の形成という方向で模索されていくのに対し、「ネオ・シオニスト」は「民主主義ということ考えたとき、『完全な民主主義』に達するということは不可能。イスラエルに民主主義体制はある。選挙はあるし、誰でも自分の意見を提起できるし、政府を動かすことができる。誰でも自分の声を表現できたり、民主的な手段であれば他にも色々なことができる。でもまだ不平等な部分もある。アラブ人には約束したすべてのことを与えていない。あるいは、超正統派のユダヤ教徒の人達は兵役についていない。実際たくさんの‘軍事的な配慮’はあるが、・・・また完全とはいえないが、民主主義はある」〈S3〉というように結局は現在の不完全な民主主義を容認してしまうか、

「（ユダヤ人とアラブ人に同じレベルで市民権を与えていないことは）問題だとしても、我々の国は他の国とは違い、我々はここに来る人みんなに市民権を与えることはできない。どうしてかという

と、ここはユダヤ人の国だから」(I11)というように、これらの言説には「ユダヤ人国家」というイスラエルの性格を変化させるという選択肢は存在しないのである。

従って、結果的にはこの認識のあり方は「ポスト・シオニスト」よりは「伝統的シオニスト」と同じ作用を持ってしまう。つまり彼らが想定する「民主主義」はあくまでも「ユダヤ人国家」という枠内でのそれであるということができる。また、最近の高校生は様々な形で同世代の「アラブ人」と交流を持つ機会が少なくない。このことは、こうした新しい世代の意識形成のうえで注目すべき動向である。この聞き取り調査の五名の高校生のうち三名がそうした試みの体験について言及しているが、このうち「ネオ・シオニスト」に分類した〈S2〉と〈S3〉の言説には興味深い内容がみられる。

まず、〈S2〉は、サドゥナというアラブ人高校生との交流授業の経験の後、「(アラブ人の状況が)それほどひどいとは知らなかった。言葉の問題¹⁷¹でも、それがどんなに彼等にとって重要な問題なのかということは知らなかった。お互いにわかったのは重要なことだと思う」と述べている反面、「ユダヤ人国家」の必要性に対しては「もちろん」と断言している。彼女は、「今はユダヤ人の国ができて、(ユダヤ人には)安全が確保されている。(将来も)ある日突然『ちょっとまて。ユダヤ人はここから出る』と言われるかもしれない。だからユダヤ人には安全を確保しておく必要がある。定義として『ユダヤ人のための国家』を持って、静かに暮らせる、誰からも『出ていけ』と言われないユダヤ人の国を」という確信を決して変化させてはいない。

同じことは〈S3〉の言説にも指摘できる。彼女もそうした授業の他にミシュラハット¹⁷²という国際交流に選抜されて、様々な中東諸国の同世代の若者との交流体験を二度も持っている。そうした経験から受けた変化として彼女は、「考え方が広くなった。今まではイスラエル側だけから見ていたが、別の見方もあるということがわかった。どうその状況を見るかという現実の捉え方が変わった。人の言っていることによく耳を傾けるようになった。自分が何か言う前に二回ぐらい考えるようになった。・・・アラブ人は(イスラエルの)独立戦争を‘大惨事’と呼んでいて、全く反対の意味で毎年その日を記念している。私はそれを知らなかった。他には、力づくで追い出してしまったたくさんのアラブの村があることも(知らなかった)。でも彼等も、ショア(ホロコースト)のことはあまり知らなかった。知ってはいたが、多くのことは知らなかった。みんながそれぞれ見る立場によって見

¹⁷¹ 「ユダヤ人がアラビア語でも理解できるように、アラビア語を学校の授業の必修にすべきで、また色々な説明事項をアラビア語でも明記すべきだ」とアラブ人高校生が主張したこと。

¹⁷² 「平和の種」体験。「40人から50人ぐらいの若者を、イスラエル、パレスチナ、ヨルダン、エジプト、他のアラブの国々から毎年アメリカに連れて行って、一ヶ月位キャンプをする。十人ずつぐらいのグループに分けて、一緒に過ごして、毎日『共存』というようなテーマについて話し合ったり、サッカーをしたりして遊んだりする。その目的というのは『敵にも顔がある』ということを知ることだと思う」と彼女は述べている。

えるものが違い、議論は長く続いた。最後の結論としては、歴史の見方は色々あって、一つの立場からだけで見ることはできないということ、‘痛み’というものを比較することはできないということ（がわかった）」と語る。しかし、彼女は「ユダヤ人国家」の必要性に対して次のように語るのである。少し長くなるが引用してみることにする。

Q あなたは、「ユダヤ人国家」というものが必要だと思いますか？

A 「イスラエル建国宣言では、国家が全てのマイノリティに平等な権利を与えることを謳っている。私は、すべての市民に平等に関係するという在り方でイスラエルがユダヤ人国家であることができると思う。つまり、全ての住民に平等なイスラエル国家という在り方が可能だと思う。」

Q 全ての住民に同じレベルで市民権を与えるということですか？でも、今はそうはなっていないのでは？

A 「なっていませんね。」

Q つまり、今の在り方や法律を変えるべきだということですか？

A 「いや、法律自体は、みんなが平等でなければならないと（すでに）いつている。現実起きているのは、ユダヤ人に多くを費やしているということだが・・・」

Q でも、もしあなたの言われるように現実を変えるためには、国家の性格を変えなければならないのではないのでしょうか？

A 「いいえ。」

Q でも、建国宣言では、ベングリオンがイスラエルがユダヤ人のための国であることを宣言しているのではないですか？

A 「宣言している。でもその後で彼はこうも言っている。『他の全てのアム（ママ。民族）を、平等な市民として受け入れる。』とも言っている。彼のいうユダヤ人国家とは、世界の全てのユダヤ人に門を開くということ。それがイスラエルという国の特別なところだ。つまり、ユダヤ人によってつくられた国家であって、実際、ヨーロッパ全土でのショアを生き延びたユダヤ人がここに来ることができるようにという目的で（つくられた）・・・でも彼は、建国宣言は、他のアムが住むことができないとは言っていない。私の考えでは、ユダヤ人のための特別の場所があるということは、とても重要なことだと思う。というのは、離散の地では反ユダヤ主義があつて、いつもユダヤ人を追いだそうとする現象があるのを見ているので。・・・もし国があれば・・・（ここに来ることができるので、国があることは）とても重要なのだ。」

Q あなたは、今もなお反ユダヤ主義が世界にあると思うのですか？

A 「はい。イスラエルの高校ではどの高校も、強制収容所見学のために生徒の代表をポーランドやドイツへ送っている。そしてそこに行って帰ってきた友達に聞くと、いまだにそこには壁に卅の落書きがあつたり、ヘブライ語で話していると大声で叫ばれたり、町を歩くのがとても危険だったと言う。」

Q あなたはつまり、どの民族も、自分達の国を持つことが必要だと思うのでしょうか？

A 「今の状況を考える限りそうですね。全てのアム・ツアルパティ（ママ。‘フランス民族’の意

味に該当する。)にはフランスという国がある。私はハ・アム・ハ・イエフディ(ユダヤ民族)には国があることが重要だと思う。というのは、世界の(イスラエル以外の)様々なところで暮らしているユダヤ人が(それぞれの国で)うまくいかないとわかったときのために、・・・」

Q アメリカのユダヤ人の場合はどうですか？

A 「そこにも反ユダヤ主義がある。・・・いやそれ以上のもの、人種主義がある。ユダヤ人にもあるし黒人にも、・・・アメリカにはたくさんのユダヤ人がいるが、依然として、全てのユダヤ人がアメリカでやっていくことはできない。・・・つまり、ハ・アム・ハ・イエフディに自分自身の場所があることが重要だと思う。別の(民族の)支配下でやっていけない時のために・・・というのは、ある人口の中には、異なる集団がいつもいるわけで、・・・同じことはパレスチナ人についても言えて、私はだからパレスチナ人に国を与えることが重要だと思う。つまりここを二つの国にすることが必要だと。私にはユダヤ国家を維持することはとても大事なことで、世界にいる全てのユダヤ人がここにきたいときに来られる(移住できる)ように、そういう国家としての性格を、国家の定義の中にもっていることが重要だと思っている。」

Q 彼等に何かが起こったときに、ここに来られるようにですか？

A 「ええ。例えばショアの時、英国はユダヤ人の入国を認めなかった。他の国々もユダヤ人を受け入れなかった。そして起こったことは、・・・ポーランドやドイツに残されたユダヤ人はみな壊滅させられた。」

Q でも今の時代はグローバリゼーションが進んでいて、人の行き来も国境を越えてさかんですし、一つの国はますます多能的になってきています。一つの国の中に様々な民族がいる国はたくさんあります。そういうことを考えると、一つの民族のための国家をつくるという考えは少し非現実的に思えるのですが、・・・

A 「国の中には他にも民族がいる。他に民族がいらないとは言っていない。例えばここには、アラブ人がいる。ユダヤ人でなければここに住んではいけないとは言っていない。誰でもここに住みたければ住むことができる。(「ユダヤ人国家」という)その意味は、この国の大多数が実際にユダヤ人である国という意味。・・・」

Q でもその考え方の根底にあるのは、ユダヤ民族のための国をつくるということではないのですか？

A 「はい。・・・ここは聖地で、・・・つまり、聖書によって約束されている‘約束の地’であって、神がアブラハムにこの地をユダヤの民に約束したという・・・そういうことが最も大事だと思える人がいる。『聖書にユダヤ人がここに住むことは約束されていて、だからここに住みたいし、我々の国がここにあり我々がここに住むのは、聖書によれば権利なのだ』と考える人々がいる。でもその他に、聖書の理由以外に重要な、最も重要な理由が他にあると思う。それは、第二次大戦中や戦後ユダヤ難民が行く場所があることがとても重要だったことだ。もしそうでなかったら、彼等は殺されたか、強制収容所から出ても死んでしまっただろう。・・・」

このようにみえてくると、彼女は自分ではアラブ人やパレスチナ人との交流や議論を通して視点を相

対化することができたと述べているにもかかわらず、「ユダヤ人国家」の必要性は相変わらず「反ユダヤ主義」やホロコーストを動員することで正当化されており、その認識のあり方は変化していないとみるべきであろう。従って、今日「アラブ人」との交流体験が授業などで試みられているとしても——もちろんその試み自体は否定されるべきものではないが——そのことがこうした新しい世代の意識を質的に変化させていくとは必ずしも楽観的に考えることはできない。

2 民族と国家

「ほとんどの国の場合、その民族は同じ民族。国がそもそも同じ場所に一緒に残っているその民族を核としてつくられている。そして他の国はもうすでに特定の民族の国家である。ドイツはアム・ゲルマニィ（ママ。ドイツ民族／国民）で、フランスはアム・ツァルパティ（ママ。フランス民族／国民）。英国は、アム・アングリィ（ママ。イギリス民族／国民）（それに対し）イスラエルが特殊なのは、世界中に（ユダヤ）民族が散らばっているということ。だから僕達はまず国に枠組みを与えて、ユダヤ人がやってこれるようにしている。」
〈Y3〉

「ウマ（≡国民）は、より地理的な概念。例えばフランス人というのはウマ。イギリス人もウマ。でもジプシーはウマではなく、アム（民族）。アム・イエフディ（ユダヤ民族）であり、ウマ・イスラエリ（イスラエル国民）である。」 〈Y2〉

「メディナ（国）ではなくアム（民族）で境界をつくっていけば、日本人の国が一つ、中国人の国が一つ、チェコスロバキア人（ママ）の国が一つ・・・こうしていくとユダヤ人にも国が必要。もし民族に国がなかったら、どこにいけばいいのか？ 散りじりになる。民族というのは結局国のルーツ。民族は国がほしいのだ。」 〈S4〉

聞き取り調査では、「アム」（民族）、「レオム」（民族・民族性）、「エズラフット」（市民権）のような概念をプレ調査票のなかで定義してもらい、さらにインタビューのなかで、これらの類似した概念に関する質問を重ねておこなった。上記は、そうした質問に対する各理念型の特徴がみられるそれぞれの言説である。そこであらためて明らかになったのは、多くのインフォーマントの言説にみられた民族概念と国民概念の混同である。もっとも、このことは日本においても同じ問題を指摘することは可能であり、英語でもネーションという概念は一義的定義が難しい概念であるということができる。

しかし、ここで強調したいのは、たとえば上記の〈Y3〉や〈S4〉の発言にみられるように、ヘブ

ライ語で「アム」というのは「民族」という概念であるのに、その概念を「国民国家」における「国民」と同義的な概念として用いていることである。従って、例えば「イギリス人」は「イギリス民族」として理解され、世界の諸国家というものがこうした「民族国家」であるにとらえられていることである。日本においても「単一民族国家」の神話は根強く存在しているが、それは日本と他の国々との違いとして日本のありかたがいわば「例外的に」とらえられるのに対し、イスラエルでは、イスラエルだけでなく全ての国家は「民族国家」である（または、あろうとしている）と理解されている場合が少なくない。言い換えれば、「民族自決」ということに対する強い肯定的な認識がある。

またこれと関連して、ユダヤ「民族」の起源は出エジプトの時代までさかのぼって理解されることも少なくない。古代のユダヤ教徒の社会と近代の「民族」概念が違和感なく結びつけられている。こうした認識のあり方には、後に第四章第三節でとりあげるように、イスラエルの公教育の影響が大きいと思われる。

上記のような民族概念が多くの人々に共有されているために、「国民」という存在を対象化することが困難となり、国民に対しては等しく与えられるはずのシチズンシップに歪みがあったとしても、そのことはほとんど自覚化されないし、また自覚されたとしても問題視されなくなる。それは自分たちの国家を持たないその民族のせいになってしまうからである。こうした意味構成は、「伝統的シオニスト」と「ネオ・シオニスト」の両者に共通してみられる特徴である。「ポスト・シオニスト」である〈S1〉と〈Y2〉はこの設問でやや異なる回答をしている。〈S1〉は自分では説明できないにしても「民族」と「国民」には違いがあることを意識し、〈Y2〉は上記に引用したように「ユダヤ民族」と「フランス人（国民）」、あるいは「ユダヤ民族」と「イスラエル国民」を概念的に弁別している。しかし、こうした概念上の区別をする事のできる人は少ないために、第二章で述べた国家がなくなりだす「外国人」が見えてこないといえる。

3 アイデンティティ

ここでもひとまず各理念型の特徴的な言説をみて、後にユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティとの関係およびその内容、またそれを生み出す契機に光をあててみることにしよう。

「ホロコースト記念日には、自分がユダヤ人であることをとても強く意識する。父の家族は

ショア（ホロコースト）で多くを失ったので、そのことは僕のユダヤ人アイデンティティに影響を与えている。ホロコースト記念日に朝起きると僕はイスラエル人ではなくまずユダヤ人。国のために闘う気持ちがあるから、その意味ではシオニストだけど、イデオロギー的に古いシオニストではない。和平の合意に達したならば、占領地を返還してもいいと思っているという意味ではシオニストとはいいいきれない。」〈Y1〉「ユダヤ人だということは、一度も忘れたことはなかった。たとえ忘れたいと思っても、（ロシアでは）忘れさせてくれなかった。忘れたいとも思わなかった。」〈I4〉

「ショアがなかったら私は自分がユダヤ人の家系だということを覚えていなかったのではない。（私のユダヤアイデンティティは）第一に祖母（ハンガリーで生まれ、アウシュビッツにいて、戦後イスラエルに移住）の記憶からのものである。」〈Y2〉「一面から見ると私は戒律を全く何もまもっていない。でも他方で、祭日には楽しい要素があり、特別の料理を食べて、家族がみんな集まる。つまり宗教的祭のなかに、家族的な祝いごとの行事のようなヒロニイ（世俗的な）の内容がある。もし私が休暇をとってどこか他の（海外の）ところにいたら、そういう祭日を祝うかどうかかわからない。でもイスラエルにいと、仕事は休みだし、みんなが祭日を話題にするし、どんな料理をつくろうとか、食事によんだりよばれたり、そういうことを意識せざるをえない。こうして、文化的、伝統的、社会的な問題として生活に組み込まれている。」〈Y4〉

「（僕のユダヤ人アイデンティティがどこからくるかというと）僕がイスラエルに住んでいるから。ここはほとんどの人がユダヤ人だから。父と母から。僕の知っていること、僕が今やっていること、これからやることは、両親がやっていることから来ているから。学校では聖書を勉強するが、それからはユダヤ・アイデンティティはでてこない。でも僕はユダヤ人だと思う以上にイスラエル人だと感じている。僕にとってヤハドット（ユダヤ主義）は伝統のようなもの。」〈S4〉

サルトルはかつて「反ユダヤ主義が、ユダヤ人を作るのである」と述べたことがある^{註173}が、これは、ヨーロッパの同化したユダヤ人については妥当しても、ヨーロッパ以外の地域や、世俗的でない、ユダヤ教を信仰するユダヤ人については妥当しないともいわなければならない。しかし、サルトルの見解は、アイデンティティというものが「対話的につくられる」ということを指摘している点においては正しいということができ、今日のユダヤ・イスラエル人のアイデンティティの吐露のしかたに、サルトルの指摘したようなユダヤ人アイデンティティ形成の姿をみることは可能である。例えば、上記で引用した〈Y1〉や〈I4〉の言説はその典型である。

^{註173} サルトル、『ユダヤ人』、岩波書店、1956年。（Jean-Paul Sartre, *Réflexions sur la Question Juive*, 1947.）

いずれにせよ、本章の分析概念になっている三つのシオニストの理念型の違いに関わりなく、イスラエルのユダヤ人にはユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティが二重に存在している。しかし多くの人々にはイスラエル人がユダヤ人としてとらえられているために、この二つのアイデンティティの違いについてはそれほど意識されず同義的アイデンティティになっていることが多い。

それではこの二つのアイデンティティの受容のされ方に、各シオニストによる違いや共通点はどのように存在するだろうか。まず、‘ユダヤ人アイデンティティを感じる時’としてあげられているのは、「伝統的シオニスト」については、ユダヤ教の祝祭日、ホロコーストや反ユダヤ主義・ホロコースト記念日、世界のユダヤ人の業績や災難・ユダヤ人に対して向けられる攻撃やテロ、ヘブライ語の言語、世界のユダヤ人や異なる民族と出会ったとき、宗教（ユダヤ教徒として）といった答えである。また彼らがどのようなユダヤ的伝統を家庭の中で守っているかという設問に対しては、シャバット（安息日）の儀式やお祈り、祝祭日の食事、割礼・パールミツバ（13歳の男子の成人式）・結婚式・葬式などの宗教的儀式などがあげられている。ユダヤ教徒である〈S5〉や〈I2〉はこれらに加えてコシエルの食事（ユダヤ教の規則に基づいた食事や料理法）をあげ、さらに〈I2〉は性生活への宗教的規則や戒律（ミツボット）による子供の教育をあげていて、単に受動的アイデンティティではない、ユダヤ教徒としてのアイデンティティが強く内面化されていることがわかる。これと対照的なのが、家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統はないと答えた〈I4〉と〈I8〉である。〈I4〉は1990年にロシアから移民したのだが、彼女はロシアでも「たまに（ユダヤ的な）食事をとったぐらい」でユダヤ的伝統は特に守っていたものはないと答えている。〈I8〉は、「ユダヤ的伝統」という言葉に宗教的ニュアンスをよみとった為か敏感な拒否感を表し、次のように語った。「伝統とは何か？それは父や祖父がしてきたこと。父も祖父もパールミツバはしてこなかった。私の家族は誰もダティ（宗教的）ではない。そしてみんなユダヤ人である。私は家族の伝統をまもっている。私が知っているのは、私はユダヤ人で、祖父はロシアのユダヤ人の町に住んでいて、そこから他のユダヤ人と一緒にアルゼンチンに来て、アルゼンチンのユダヤ人の町に来て、・・・それが私の伝統。私はペサハ（過ぎ越しの祭り）やマツァ（ペサハの時に食べる種なしパン）には興味がない。私はユダヤ人。私のユダヤ人性がラビに劣るとは思わない。宗教に関わることは私は何もしない。戒律や宗教はまもりたくない。シャバット、宗教は結構。息子の割礼はしたくはなかったが、友達や家族など周りからやらないとだめだと説得されて（やった。）・・・（私は）したくはなかった。」そして、かれは繰り返し自

分のユダヤ人性はメア・シャリム^{註174}に住むラビ以下だとは思わないと語った。彼はドアにメズザ^{註175}をつけていないとも語った。その理由として彼があげたのは「宗教に関わることは私は何もしない」という答えである。さらに「宗教に関わらないユダヤ的な伝統や文化はあると思いますか?」という問いに対してはしばらく沈思し、彼はこたえをみつけることはできなかった。ちなみに、筆者はメズザをつけていないイスラエルのユダヤ人にであったのは彼が初めてである。このように、ユダヤ人アイデンティティの受容のされ方は同じ「伝統的シオニスト」のなかでも多様な幅があるが、「伝統をまもる」という点においては肯定的に自覚されていることがうかがえる。そしてその時彼らは——ダティ（宗教的）である〈I4〉や〈I8〉を別にすると——その「伝統」から宗教的な意味を抜いた形で「伝統」を受容しているといえよう。つまりそれは家族によって代々受け継がれた行為であり、あるいは家族の行事・習慣である。例えば祝祭日は、〈Y3〉や〈I9〉が述べているように、「祭日は家族を結びつけるもので私にとってそれは大事なこと」という意識である。しかし、主観的には伝統を宗教から区別して受容しているとしても、宗教に関わらないユダヤ的な伝統や文化を探すことが困難であるという事実も重要である。つまり、本人の意識とは無関係に、客観的位相としては宗教的な行為が受け継がれていることを意味している。

「伝統的シオニスト」が「イスラエル人アイデンティティを感じる時」としてあげているのは、ニュースや新聞でのイスラエルに関する話題、レバノンでの戦争・湾岸戦争・テロ爆発が起こった時、イスラエルの安全や経済状況・教育や社会的分野との関連で、特定の分野でのイスラエルの成功、ヘブライ語を使っていることなどの答えである。少し異色の答えとしては、典型的イスラエル人と思える行動に出会うときという答えもある。その内容を具体的に聞いてみると、「例えば、車の運転の仕方・・・とても厚かましい態度・・・それに、がさつで、行儀が悪いこと・・・イスラエル人がみんなそうだとは言わないが、それはイスラエル人のステレオタイプだ。でもそれはあたっていると思う。そういう否定的ステレオタイプがあることは認めざるをえない。」〈Y3〉と答えている。つまり、彼にはユダヤ人アイデンティティとは別のイスラエル人アイデンティティが意識されている。

ここでこうしたイスラエル人のアイデンティティをユダヤ人アイデンティティの要素と比較すると、当然ではあるが、前者はイスラエルという国家的な存在や枠組みとの関わりで形成されてくる意識であるのに対し、ユダヤ人アイデンティティは民族的アイデンティティである。ただ、イスラエル

^{註174} エルサレムにある、超正統派ユダヤ教徒が住んでいる地区。

^{註175} ユダヤ人が入り口の扉の脇の柱に打ちつけるお守り。ユダヤ人の住宅や建物のドアの前にはほとんどつけてある。

の場合国家が「ユダヤ人国家」としてその性格を規定しているために、両者は接近したものになり、本項の冒頭で引用した〈Y1〉の言説のように、ユダヤ人アイデンティティはイスラエルの国家意識を高めるものに動員されやすいという可能性を含んでいる。

次に「ポスト・シオニスト」の‘ユダヤ人アイデンティティを感じる時’の内容についてみると、祝祭日、ホロコースト記念日やホロコーストの文脈・世界のユダヤ人に様々な悲劇が及ぶとき、外国にいるとき、非ユダヤ人集団と出会ったとき、海外でのユダヤ人集団との会話ということがあげられている。これは先に見た「伝統的シオニスト」の同じ設問に対する答えと特に質的に異なるとはいえない。また家庭でまもっている伝統の有無についても、全員が何らかの意味でまもっていることがわかる。その具体的内容としては祝祭日、特にペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭り）、ハヌカ（宮潔め祭）、ヨムキプール（大贖罪日）、割礼、パール・ミツバ（13歳の男子の成人式）などがある。両親が正統派ユダヤ教徒である〈Y5〉は、この他にコシエルの食事（ユダヤ教の規則に基づいた食事や料理法）や両親の家でのシャバット（安息日）の習慣をあげている。彼女は「私はとてもマソラティト（伝統的）。（伝統をまもりたいのは）それがまさに伝統だから。私の両親がしていることであり、祖父や祖母がしていたことであり、私の歴史の一部、アイデンティティの一部である。だから私にとっては重要なこと」と語っている。また1988年にルーマニアから移住した〈I7〉は、はじめ調査票では家庭でまもっている伝統はないと答えていたが、インタビューで確認すると、次のような会話となった。

Q あなたは伝統をまもることをやっていないと答えられていますが、それはやりたいと思わないからですか？

A 「・・・『伝統をまもる』とはどういう意味ですか？シャバット（安息日）に車に乗らないことですか？・・・私は、そんな‘伝統’は要りません。シャバットであろうが車にも乗ります。私は自由な人間でいたいので。」

Q 祭日は？

A 「それはやります。祭日はまた別です。でも、肉とミルクを一緒にとらないというようなことは、なぜそんなことを守る必要がありますか？それは、三千年前の話です。冷蔵庫がなかった時代の（笑）。暑くて、・・・食中毒になる危険があった。・・・今は時代が違います。もう危険ではありません。世界中どこでも、ヨーロッパでも、（何を）食べても問題ありません。少し肉を食べて・・・少し別なものを食べて・・・おいしくて・・・誰もそれで死にません。」

さらにその後のやりとりで、割礼やパール・ミツバを息子に実施したこともわかったのである。このことはおそらく、先に引用した「伝統的シオニスト」の〈I8〉と同じように、〈I7〉も「ユダヤ的伝

統」という概念を宗教的含意で理解し、自らをダティ（宗教的）ともマソラティ（伝統的）とも自覚していないために、彼らにとって祭日の行事は「伝統」ではなく、はじめは自分は「伝統をまもっている」とは意識していなかったのであろう。（I8）以外の他の「ポスト・シオニスト」も全員ユダヤ教の祝祭日には家庭のなかで何らかの行為をしているが、それは多くの「伝統的シオニスト」の場合と同様、「楽しい要素があるから家族の行事としてやっている」（Y2）のである。先に引用した（Y4）の語りはその意識を的確に説明しているといえる。彼女は、「ユダヤ・アイデンティティに対する私の定義は、宗教的なものではない」と断言しているが、このように「ポスト・シオニスト」のユダヤ人アイデンティティの言説には、それが「宗教的アイデンティティ」ではないことを強調する特徴がみられる。

また、彼らが「イスラエル人アイデンティティを感じる時」の例としてあげているのは、外国やイスラエルに属していない東エルサレムなどにいるとき、新聞を読んだりニュースを聞くと、レバノンや占領地にいるイスラエル兵士の写真をみると、イスラエルがスポーツや歌などの世界大会で勝ったとき、ホロコースト記念日・兵士記念日・独立記念日など、テロや戦争がある時、ヘブライ語を聞くとときなどであり、これも「伝統的シオニスト」の答えと類似している。

ただ、彼らには、「イスラエル人」や「ユダヤ人」が多元的に構成されている現実が見落とされていない。例えば、（Y4）の「イスラエルにいるのは全員ユダヤ人ではなく、その中にはアラブ人のアイデンティティもあればユダヤ人のアイデンティティもある。私がまず最初に意識するのはユダヤ人としてよりもイスラエル人というアイデンティティ」という語りや、（I7）の「ここイスラエルには、あらゆる種類のユダヤ人がいる。ロシア系ユダヤ人、アメリカ系ユダヤ人、イスラエル生まれのユダヤ人、アラブ諸国からきたユダヤ人もいる。それぞれが違うものをもっている。モロッコ人やフランス人やイギリス人等がいるように。英国からきたユダヤ人は、何か英国的なものをもっている。モロッコからきたユダヤ人はモロッコの。ここ（イスラエル）で生まれた人は、また別で彼らはイスラエルの。外から来た人は、彼等はユダヤ人だけれども、彼等はイスラエルのではない。私はルーマニアから来て、ルーマニア的なもの残っている。ロシアから来た人はロシア的なもの残っている。たぶん子供や孫の世代になれば「イスラエル人」になるだろう。でも、外からここにきた人は、イスラエルのではない。メンタリティーが違う。どこから来た人には、その人のいた国のメンタリティーが染み着いている。（しかし）ここでは、違ったメンタリティーがつくられている」という語りのように、あるいは（Y6）の「アム（民族）というのは同じ目的や同じ歴史を共有しているものだと思うが、私はアメリカのユダヤ人が何を考えているのかわからないし、彼等の目的が何かもわか

らない。そして、いつかは‘同じ民族である’ということにも終わりがくると思う」という語りのように、自らをユダヤ人やイスラエル人としてアイデンティファイしていても、同時に多様な「ユダヤ人」や「イスラエル人」の一部にすぎず「ユダヤ人」や「イスラエル人」を代表しているわけではないととらえている。

それでは「ネオ・シオニスト」の場合はどうであろうか。聞き取りの回答をみる限りでは‘ユダヤ人アイデンティティを感じる時’や‘家庭でまもっている伝統’についての答えも、また‘イスラエル人アイデンティティを感じる時’についての答えも、これまでみてきた二つの理念型のものと特に違いはない。そして彼らもまた、主観的な「ユダヤ的伝統」のとらえ方と客観的な意味での「ユダヤ的伝統」の実践との間にずれがあることがわかる。例えば、〈S2〉は、事前の調査票のなかでは、家庭のなかでまもっているユダヤ的な伝統があると答え、その例として「私たちは全てのイスラエルの祭日を祝う。兄弟が13の時（成人の祝いであるパール・ミツバの時であると思われる）にシナゴーグ（ユダヤ教会）に行った。毎週金曜の夜に食事の前に祈る」と答えているにも関わらず、インタビューでのやりとりのなかで「ユダヤ人アイデンティティというのは、伝統とか戒律とかそれをまもっている人達に関係が深いもの。イスラエル人というのは宗教とは関係がなくともっと普遍的な価値で、みんなに関係するもの。私達は伝統も宗教もまもっているわけではないので、私の生活はユダヤ人の生活というよりイスラエル人の生活というものだと思う」と整合しない答えを述べている。このことは、「伝統」の実践をやはり宗教的な含意でとらえる一方で、自分自身をダティ（宗教的）とは自覚していないためにこのような答えになっているからだと思われる。

ただユダヤ人アイデンティティのあり方として〈Y4〉や〈I7〉の「ポスト・シオニスト」と少し違っているのは、「全てのユダヤ人は何か共通のものを持っている。それは宗教と歴史。私達の国であるエレッツ・イスラエルで生きるとか、エルサレムで暮らすという思い。いつの時代も、世界のどこでも、全てのユダヤ民族に何か共通のものがある。聖書のあらゆる歴史から離散の中での歴史まで、ヨーロッパでの生活やショアなどそういう全て。私は、私達がみんな同じ宗教や、同じ願望や、エジプトから脱出してアレツ（イスラエル）に住みついたという聖書の歴史などの公分母をもっていると思う。ヒロニム（世俗的人々）は神を信じているわけではないが、それでも聖書に敬意を払っているし、祭日を祝うこともする。例えば、ペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）は世界のユダヤ人がすべて一緒に祝う行事」と語っている〈S3〉や、〈I11〉の「人はそれ（民族性）から逃れられない。逃れようとしても、結局はユダヤ人だ」という語りのように、民族的なアイデンティティを所与のものとしてとらえ、その「共同幻想性」に拘束された言説を示していることである。

このようにみえてくると、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティを感じる状況においては各理念型にはそれほどの相違はない。ただし、ユダヤ人やイスラエル人アイデンティティ形成との関わりで多くのインフォーマントが指摘する同じホロコーストという契機であっても、「ポスト・シオニスト」の〈Y2〉は「もしショア（ホロコースト）がなかったらヨーロッパの多くのユダヤ人のユダヤ・アイデンティティは実際消滅していたと思う。ショアがなかったら私は自分がユダヤ人の家系だということを覚えていなかったのではないかと」と淡々と語っているのに対し、「伝統的シオニスト」の〈Y1〉はすでに最初に引用したように「父の家族はショアで多くを失ったので、そのことは僕のユダヤ人アイデンティティに影響を与えている。ホロコースト記念日に朝起きると僕はイスラエル人ではなくまずユダヤ人」と語っている。これは一見同じ言説にもとれなくはないが、インタビューのなかで前者からはホロコーストがユダヤ人国家の正当性に動員されていくニュアンスを感じとれなかったのに対し、後者には全体の発言を通してそれを感じとることができた。この点に、ユダヤ人アイデンティティが個人的次元の文化的・民族的アイデンティティとしてとどまるか、あるいはそれが国家意識を強める——しばしばそれは非ユダヤ人に対する排他的・攻撃的意識として作用する——イスラエル人アイデンティティと重ねられていくかという意味で、「ポスト・シオニスト」と「伝統的シオニスト」や「ネオ・シオニスト」を分ける分岐点があるということができる。

4 反ユダヤ主義の記憶

「我々が我々の国、我々にとって確かで安心できる場所を欲しいと言う時、スイス人にはスイスがあり、彼等は800年も誰からも攻撃されていなく、彼等は何も不安なことはない。彼等が‘安全’について語る時、（実は）何について語っているかわかっていない。彼等は長い間自信を持っている。我々が‘安全’について語る時は、我々がレバノン、ガリラヤでの‘安全’について語る時、我々はドイツの強制収容所を思い出す。我々の感情は、もし我々が自分達を防衛しなかったら、我々の国を持っていなかったら、我々がドイツで攻撃されたようにレバノンで攻撃されるという感情だ。我々がイスラエル国家について『ここは我々の場所だ』と語るとき、ヤド・バ・シェム（ホロコースト記念館）に行ったらそういう我々の感情がどういうものかを理解することができると思う。」〈I8〉

「今この国は‘ホロコースト記念日’がショア（ホロコースト）のための特別な日になっている。その日は、テレビの番組もショア一色になり、学校でもショアについて特別の行事をやる。それは本当に特別の日になっている。ショアはユダヤ人だけに起こったのではなく、他にも苦しんだ人々がいる。私達はみなそれを忘れないようにしなければならない。そして

私達のなかにも時々同じことを見ることができる。私達も、ドイツ人がやったようなことをやっている自分を見いだすことができる。だから、ユダヤ・アイデンティティというだけでなく、どういう人間になるかという教育、人間を尊重する教育が大切。」〈Y4〉

「（ポーランドの強制収容所見学ツアーへの参加の動機は）私の祖父がホロコーストの生存者だということも関係している。辛いテーマだが、身近な問題でもあり、重要な、また乗り越えなければならない問題だ。」〈S2〉

ユダヤ人アイデンティティを持つ人々が、「反ユダヤ主義」やその極限的な形態であるホロコーストという歴史的事実と対峙するときの感情は、非ユダヤ人のそれとは異なるものであろうということには想像に難くない。イスラエルの中で、「反ユダヤ主義」という用語である「アンチセミウット」という言葉が登場する頻度は、普段の日常会話においても少なくなく、また第四章でも指摘するが、

「反ユダヤ主義」は歴史教育の中でも繰り返し教材となるテーマである。そして多くのインフォーマントの語りにみられるように、ショア（ホロコースト）は、彼らにユダヤ人アイデンティティを強化させる要因となっている。こうして、「反ユダヤ主義」やホロコーストに対する「民族的記憶」はイスラエルのユダヤ人に内面化されているとみることができる。またここで、「反ユダヤ主義」という概念は非常に幅の広い内容をふくんでおり、中世の主として宗教的要因と背景による「反ユダヤ主義」も、近代の主として政治的背景をもった「反ユダヤ主義」も、現代における、イスラエル以外の社会生活のなかでみられるようなユダヤ人に対する差別的な表現・偏見・ユダヤ人の墓地を掘りかえしたりするネオ・ナチのような社会運動も、「ユダヤ人世界陰謀説」の書籍の流布などの現象も、場合によってはイスラエルに対して加えられる様々な軍事的攻撃までも、すべて「反ユダヤ主義」という一般化された表現でとらえられているという傾向がみられる。

しかしながら、同じように反ユダヤ主義やホロコーストを語りながら、その内面化の仕方は、「伝統的シオニスト」や「ネオ・シオニスト」と「ポスト・シオニスト」とでは、異なっているように思われる。すでに述べたように、ここでのインフォーマントは、相対的に若い世代や移民であり、ホロコーストを直接体験した人々ではない。また、移民ではないイスラエル生まれの若い世代は、「反ユダヤ主義」を直接経験する状況下にもない。そのような人々はどのようにこの集合的記憶を内面化しているのだろうか。

「伝統的シオニスト」に分類した高校生の〈S5〉は、「世界のどこでもユダヤ人をみな嫌っていた。どこでも僕たちを嫌っていたので、ユダヤ人はアレッツに移住した。（反ユダヤ主義は）忘れても忘れても、また起こっている。」と述べているが、彼のように、「ユダヤ人嫌い」を超歴史的・普遍

的現象としてとらえている人は少なくない。〈I2〉の「政治的問題がある時には、（お互いに）恐れ、『おまえは、いらない』となる。世界のどこでも何か問題がでくるとまず最初にいらないとされるのはユダヤ人。どこでも、ここ（イスラエル）でも、彼等は我々がただユダヤ人であるという理由のために殺したいと思っている。みんなとは言わないが、そう思っている人はたくさんいる」という発言もそうした例である。このような「反ユダヤ主義」の内面化は、第一に「又ホロコーストが起こったら」という未来への不安と恐怖をつのらせ、第二にいわゆる「対抗的アイデンティティ」を形成させる。つまりこの「反ユダヤ主義」に対する集合的記憶は「他者によって否定される対象」としての記憶であるために、自らを守るための防衛と攻撃を正当化する論理に転化しやすい。このことは、「伝統的シオニスト」の回答のなかで、ポーランドのホロコースト記念館を訪問した経験のある前述の高校生の〈S5〉が、「イスラエル国旗をもって儀式をした時、民族に対して、また国を持っていることに対して誇りを感じ、『もし僕たちを殺そうとするなら、僕たちは国をまもる』と思った」と述べていることに典型的にあらわれている。こうして、自らは「反ユダヤ主義」やホロコーストとの直接のかかわりを持たない若者に、「反ユダヤ主義」の記憶が受け継がれそれを根拠にしてイスラエル国家の正当性が主張されていく論理が成立する。

これに対し、「ポスト・シオニスト」の言説として興味深いのはこの項の最初に引用した〈Y4〉の次のような語りである。「歴史をみると、ユダヤ人に対する攻撃や虐殺の出来事が幾つもあり・・・時代が変わっても、それについて語られ、共通の記憶となり、・・・いつの時代も、周りが騒がしく、過去に起こった悲劇の出来事、今の悲劇、未来の悲劇、というふうに、我々ユダヤ人に次は何が起こるんだろうという恐れがある。それで、私達はイスラエルにやってきて、イスラエルの外ではイスラエルの権利についてわかってもらおうと‘通訳’している。・・・ちょうど、一方で過去の悲劇を忘れず、共通の悲劇に‘参加’して、他方で今の場所をまもろうとしている。つまり、民族としてのユダヤ人にふりかかったあらゆる悲劇のテーマというものが、ユダヤ・アイデンティティをととても強め、維持させていると思える。私は、それが三つの時代にわたって機能していると思う。過去と現在と未来と。・・・『過去』は、かつて起こった共通のできごとについていつも考えていることだ。例えばイスラエルではショアについて常に語られているように。『現在』は、周りの脅威がそうだ。

『未来』に対しては常に恐れがある。・・・」

彼女の父方の祖父母は1950年代にモロッコから移住し、母方の祖父母は1920年代にロシアから移住している。父はモロッコ生まれだが子供時代にイスラエルに両親と共に移住し、母はイスラエル生まれで、彼女自身は祖父母や両親から反ユダヤ主義やホロコーストに関して特別話を聞いたということ

もないようである。彼女にとって反ユダヤ主義やホロコーストは、教育やメディアなどから得た間接的な民族的記憶である。ただし、その内面化のされ方は、反ユダヤ主義やホロコーストを普遍的な意味に対象化しえている。これを可能にしているのは、公平な視点というものを獲得し得ている「知性」であると思われる。他の「ポスト・シオニスト」の言説も、彼女ほど明確ではないが反ユダヤ主義やホロコーストの呪縛から相対的に自由であるといえる。

一方「ネオ・シオニスト」の内面化のされ方は、「伝統的シオニスト」のそれに近く、まだ反ユダヤ主義やホロコーストの呪縛にとらわれている。とはいえ、上記の〈S2〉のように、その呪縛を乗り越える必要性が自覚されてもいる。移民の場合は、自らの「被差別体験」が反ユダヤ主義に重ねて内面化されており、この点で「伝統的シオニスト」と同様にイスラエル国家の正当性を補強する論理に用いられやすいことになる。

5 移住の契機

移住の契機については、サンプルが少ないこともあり、各理念型に際違った差異はそれほど認められない。本章の初めに述べたように、ここでのインフォーマントは相対的に新しい移民でありイスラエル建国前の移住者は一人も含まれていない。しかし「ポスト・シオニズム」の状況での人々の意識をとらえるうえでは、建国前の移民より今日の移民の移住の契機をみる方が有効であるはずである。

彼らの移住の契機を整理してみると、しいていえば「伝統的シオニスト」は「シオニストだから」という答えや、「ユダヤ人だからいつも移住したいと思っていた」と答えている。また、自分自身や子どもの教育も主要な理由になっている。本人の場合には、高等教育を求めて、子どもに対してはユダヤ人の学校で教育を受けさせたいという思いがある場合である。その他には、移住前の居住国での政治的要素が関わってくることもある。例えば、アルゼンチンの軍事政権や1967年の第三次中東戦争がアラブ諸国にもたらす影響（「（ユダヤ人が）アラブの国にすることが怖かった」〈I9〉という意識）などである。

移民である「ポスト・シオニスト」はここでは一つの事例だけなので、一般化はできないが、このインフォーマント〈I7〉の場合は、独裁政権のルーマニアから逃れるということが大きな要因になっており、次のように述べている。「（ルーマニアでは）ほとんど選択の自由というものがなかった。あそこにはもういられないと思った。全てが沈黙していて何かとてもいたたまれないような重苦しいものを感じて、独裁政権の政治は耐えられないものだ。（それに）子供のことを考えると、（ルーマ

ニアには) 将来性が何もないと思った。全てが閉ざされていて。それで、もしいつかもっと自由を感じられ、自分を伸ばせるところにいくチャンスと可能性があればと、(それを実行しよう) 思っていた。」

「ネオ・シオニスト」の移民の事例も二つだけであるので一般化することには無理がある。二つの事例に関する限りでは、「伝統的シオニスト」の言説とほぼ同様の内容である。

ここで、こうした移住の契機のうち「シチズンシップの歪み」に対して影響をもたらしていることとして、移住前の居住国での疎外感ということに注目する必要がある。この疎外感は、すでに述べた第4項の「反ユダヤ主義の記憶」とも関連しているが、そうした国にあって、自分を「よそ者」と感じている場合が少なくない。この「よそ者」意識には少なくとも二つの異なった文脈が考えられる。一つは、自分がユダヤ人であるために疎外され不利益を受けていると感じている場合や、侮蔑的な言葉などをあびて被差別感を感じている場合である。この経験は前項ですでに指摘したように、当該者に広い意味での「反ユダヤ主義」として認識され、彼らが「ユダヤ人国家の正当性」を確信する根拠になっていく。もう一つは、モロッコで生まれフランスでの居住を経て移住した〈I2〉のように、

「(フランスは) 別に問題はなかったが私の場所ではなかった」というような意識のあり方である。彼はダティ(宗教的)であり、被差別経験からというよりは、ユダヤ教徒である自分とイスラエルとの結びつきを強く自覚していることから、フランスを「自分の場所」とは感じられないのである。後者の場合、この「よそ者」意識は、本人の主体的アイデンティティから形成されるものであるが、前者は、彼らの「よそ者」意識を形成させる要因は居住国の社会のなかに存在する。言い換えれば、居住国の社会関係のあり方いかんでは、この「よそ者」意識の形成はくい止めることができる。それができれば、彼らはイスラエルへの移住を決意する必要もないかもしれず、また「ユダヤ人国家の正当性」を確信することもないかもしれない。彼らがこれらの疎外感によって移住を決意し、ユダヤ人には国が必要だという論理を形成していくとするならば、こうした論理からもたらされるイスラエルの政治文化の「シチズンシップの歪み」に対しては、彼らを送出した国家や社会が原因の一端を有しているともいえるのである。

6 パレスチナ人の帰還の権利と政治的展望

「境界をえがくのは政治の問題があるし周りには住人もいるし難しい。ここまでがそうだと
言ったとして、もちろん私はそう言いたい、言ってみてもそうなるわけでもない。だから、『私は全部ほしい。』とはいえない。もし今の状況のなかで言うのなら、ヨルダン。そ

れが境界。ヨルダン、ゴラン、シナイ、それが境界。それが、今、希望を伴って考えられる境界。」(I2)「もしアラブ人がイスラエルを攻撃しなかったら、我々にはずっと前に平和がきて、彼等にも我々にもそれぞれの国ができていた。何の問題もなかった。我々は喜んでというわけではもちろんないにしても棒引きにしようとしていた。96年に、パレスチナ人との合意への調印の後に、二つの国家をつくる方向に早くもっていくべきだった。イスラエル国家とパレスチナ国家を。大きなテロが始まってしまい、すべては止まってしまった。もう和平の可能性はない。今は状況はずっと難しくなっている。もし当時彼等がオスロ合意に従って忠実に、正しく我々と歩んでいたら、ずっと前に二つの国家ができていたはず。(でもそれを彼等は)望まなかった。

パレスチナ人の帰還の権利には難しい問題がある。問題が難しいのは、二つの民族間に紛争が、戦争があるということ。『私達のところにどうぞ来てください』とはなかなか言えない。一人や二人が帰ってきたとしても、問題ではない。でも、みんなが帰りたいとなると問題。別の観点からみると、我々も侵害されていることが一つある。ヘブロンはユダヤ人の町で1939年までは住民はユダヤ人だった。色々なことが起こり、戦争になって、今はほとんどの住民はアラブ人。我々はそこに帰りたいたいし、我々はヘブロンは我々ユダヤ人の町だと思っている。でも、我々はヘブロンに帰ることを頼んでいない。帰ることを望んでいるユダヤ人もいないことはないが、我々が望んでいるのは、ヘブロンのは不問にして『ここにユダヤ人の国を、そこにアラブ人の国を』という考えだ。パレスチナ人が同じことを言わないのが私には納得できない。パレスチナ人も同じように『ユダヤ人はそこに、アラブ人はここに。我々はヤフォにあった家を返してくれとは言わない』と言うべきだ。我々がヘブロンにあった家を返してくれとは言わないように。

エルサレム問題は難問。私は、不問にできる。半分でいい。エルサレム問題で難しいのは、細かく混住している地区と旧市。それとオリブ山の狭い地域や、コテル（嘆きの壁）やモスクやアクサ（嘆きの壁の裏側にあるエル・アクサ寺院）なども、どちらに属させるのが決められないのでそれ以上に大問題。ユダヤ人もアラブ人も誰も譲りたくない問題だ。我々は、一度（エルサレムが）国際管理下になることを承知した。国連分割案では、エルサレムは国際管理下になるはずだった。我々は承知した。承知しなかったのはアラブ人だった。その後、状況は難しくなってしまった。」(I8)「正しい平和・望ましい平和を望む。つまり、アラブ人がユダヤ人に‘領土’‘領土’‘領土’と言ってこないこと。アラブ人が何も与えようとしなくて、多くのことを要求してくるような平和ではないこと。ガザはどうでも構わないが、（占領地の）全部を渡さないこと。エレツ・イスラエル（の土地）をまもること。ガザはアラブ人がもう住んでいるところで、ガザの中にはユダヤ人が住んでいないから、そこは彼等のものでいい。でもゴランにはユダヤ人が住んでいて、ユダヤ人の住んでいる入植地がある。ただ譲歩するだけの国にならないこと。私は正しい平和が欲しい。平和のための平和。平和をくれるなら私達も平和をあげる。平和対平和。領土を渡せば平和をよこすというのではなく、掛け値なしの、条件をつけない平和。」(I10)

「(パレスチナ人の帰還は) 難しい問題。どうしたらいいのかわからない。紛争の解決は、どこで‘後ろ向きの’ 弁明をやめるかにあると思う。つまり、今日イスラエル国家の境界内にいる人に、20年前はどうだったか、50年前はどうだったか、イスラエル国家の前はどうだったかというようなことを言っても、どういう‘正しい弁明’ができるのか私はわからない。重要なのは民族どうしが肯定しあうようになること。少なくとも居住の権利を認めることなしに真の平和を開くこと、憎悪を止めることはできない。」 〈Y4〉

「もし彼が占領地に帰ろうとするのなら、それをどうするかはパレスチナ人が考える問題。でもイスラエルの中に(家や土地が) あったのなら、第一に、彼等は(イスラエルに) 帰りたくないと思う。イスラエルの支配下には。でもパレスチナの領域内のところ(占領地内の入植地のようなところ) であれば、問題の場所はそっちにある。でもそれは不可能。彼等の家があったところには別の人がもう住んでいる。もし彼等が帰ってきたら、そこに住んでいる人がこんどは行く場所がない。だから、イスラエル国家が賠償金を払うとか、他の場所を提供するとか、何か方法を見つけなければならない。(理論的には) ハ・アム・ハ・イエフディ(ユダヤ民族) に帰還の権利があるように彼らに帰還の権利があると思う。」 〈S3〉

上記も各理念型を代表する言説の引用である。「伝統的シオニスト」については三名のインフォーマントの発言を引用した。〈I2〉は、ダティ(宗教的)のユダヤ人としてエレッツ・イスラエル(イスラエルの地)に対する宗教的解釈を示している。また〈I8〉は、パレスチナ問題の原因と責任を一貫して「アラブ人」に帰しているが、これは他の「伝統的シオニスト」の言説にもみられる特徴である。同種の言説としては、「アサドは何も妥協しそうもないが、イスラエルは合意に達するよう試みている」〈I4〉という語りや「彼等(シリア)は、本当の平和を望んではない」〈Y1〉という語り、あるいは上記で引用した〈I8〉や〈I10〉の語りにも散見される。ただ彼らは第2項でみたように、イスラエルがユダヤ人国家であることの裏返しとしてパレスチナ人が国家を作ること自体を否定していないので、「イスラエル国家とパレスチナ国家という二つの国家」をつくるのが政治的解決であり、展望となる。

問題はその場所であるが、これは「伝統的シオニスト」のあいだでも言説が分かれている。基本的には彼らは占領地の返還に同意しているが、返還の対象をガザだけに限る人々(このインフォーマントのなかでは〈S5〉, 〈I1〉, 〈I10〉など)から、ウエストバンクまでを含める人々、あるいは〈I8〉のように占領地の返還自体に賛成ではない人もおり、レバノンからの軍の撤退やゴランハイツの入植地の撤収にも否定的な人もいる。そして全員に共通した認識は、「彼等は彼等の土地に私達は私達の土地に住んで、戦争抜きで隣り合って、お互いは混じりあわず隣り合って住めばいい」という〈I9〉

の語りに象徴されているが、「彼等の土地」と「私達の土地」の解釈が上記のように主観的に解釈されているのである。こうした政治的展望のなかでパレスチナ人の帰還の権利に対するおおむね共通した認識は、「ガザにならいい」というものである。なかには、〈I10〉の「（パレスチナ人の帰還の権利ということは）考えたことがなかった。彼等は自分達がエレッツ・イスラエルの一部だとは感じていない。パレスチナの一部だと感じている。ユダヤ人を追い出そうとするのなら、彼等に帰る権利はない。彼等が自分で出ていくことを決めたのだ。もし国（イスラエル）に敵対することをしようとするなら、彼等には（帰還の）権利はない。敵対しようとしなければ、来てもいい」という語りのように、パレスチナ人の存在への想像力が希薄であり、また歴史認識やパレスチナの地理的理解についての誤解や無知が政治的展望に対する「歪み」をつくりだしているのも特徴である。

これに対して「ポスト・シオニスト」にはパレスチナ人の帰還の権利を否定する言説は見あたらない。ただし実際のイスラエル内への帰還の可能性に対しては厳しい現実をみすえて苦悩がうかがえる言説にもなっている。また、現実的な解決としては、帰還よりも賠償金で解決をはかることも展望されている。彼らのこうした言説の底流にあるのは、イスラエル国家の「加害者性」の認知である。またいうまでもなく占領地の返還には肯定的である。また「ポスト・シオニスト」の言説には「伝統的シオニスト」と「ネオ・シオニスト」の言説に頻繁にあらわれた「パレスチナ人国家とユダヤ人国家に分けること」〈Y3〉〈I8〉〈I9〉〈I10〉〈S4〉という語りや「彼等には彼等のメディナ（国）／自治を」「私達には私達の国を」〈I6〉という表現でパレスチナ問題の政治的展望を語っているものは見あたらなかった。従って彼らをそうした解決とは異なるオプションを模索している存在としてとらえることが可能である。

一方「ネオ・シオニスト」はこの点で「伝統的シオニスト」に近いといえる。彼らはパレスチナ人の帰還の権利は理論的にはあるとしても現実には承認しがたいものとしてとらえており、その結果政治的展望は、「分かれて住む」というものになっている。ただし「伝統的シオニスト」と少し異なるのは、占領地の返還にはおおむね賛成であることと、パレスチナ人への財政援助や賠償金の支払いに肯定的な語りがみられることである。

第四節 シオニストの行方

以上が三つのシオニストの類型とその言説の意味構成である。狭義の伝統的なシオニストがシオニズム運動において、イスラエル国家形成の正当性の根拠としたのは、シオニストによる「民族史観」

と反ユダヤ主義である。すなわち、イスラエル（パレスチナ）がユダヤ民族の歴史的郷土であり、そこにユダヤ人国家をつくることはユダヤ人の権利であるという論理と、事実として存在した反ユダヤ主義を世界に訴えることによって、ユダヤ人国家としてのイスラエル建国を正当化したといえる。そのように考えると、以上でみてきた多くのインフォーマントの意識の中にこの集合的記憶および集合的アイデンティティが強靱に内面化されていることがわかる。

イスラエルの政治意識や社会意識をはかるうえでこれまで用いられてきた様々な基準、すなわち「右」と「左」や、「宗教的人々」と「世俗的人々」、「ミズラヒム（スファラディム）」と「アシュケナジム」、などの区分を一度解体し、本章で設定した二つの基準でシオニストをとらえ直してみると、狭義の伝統的シオニズムはそれほど簡単に相対化されてはいかないといえることができるのである。確かに、「ポスト・シオニスト」ととらえることができる人々が現れつつあることは、この分析でも確認することができた。しかし多くの人々は依然として「伝統的シオニスト」であり「ネオ・シオニスト」である。「ネオ・シオニスト」はある意味では内在的批判をしているが、ユダヤ人国家としてイスラエルが存立する事の必要性を肯定している点において、「シチズンシップの歪み」を是正する主体とは考えにくい人々である。

この後者の二つのシオニストに共有されている問題点は、以下のように整理することができる。第一に、彼らには、民族が国家を持つということが自明視され、従って民族と国家は重なるものとして認識されている。このことは、すでに第二章でも指摘した、「国民」や「国籍」という概念の不在とも関係する問題である。彼らにとって「民族」とは「国民」を意味している。その裏返しとしてパレスチナ人もパレスチナ国家を持つことは承認されるが、共存という言葉があくまでも「別々にすむ」という意味で理解されることになる。同時に民族がそれぞれの国をもって別々に国家をつくれば問題は解決されるはずだという楽観的な信念も共有されている。ユダヤ人国家とパレスチナ（人）国家ができた時の、イスラエル内のパレスチナ人との関係をどうするかという問題については、考えが全く及んでいないといってよい。また彼らの意識の中には——全員ではないにしても——アラブ・イスラエル人は「パレスチナ国家」に住みたいはずだという信念が隠れている。

第二に、歴史的な事実に対する、誤解、誤認、無知からくる認識のずれが存在する。従ってさまざまな政治的争点や難問については、パレスチナ人に責任が帰されるか、一般的な「歴史」や「戦争」に問題が転化され、自らは責任から免れるという認識をもたらしている。さらに、日常世界の中で、ユダヤ人とアラブ・パレスチナ人との相互の接触が稀薄であるために、第二章で指摘したパレスチナ人の居住権をめぐるような現実の状況には思いが至らず、また誤解や誤認が修正されることも極めて

少なくなる。またこの点に関しては、イスラエルの公教育やメディアの中で供給されてきた「歴史的事実」が、支配的シオニズムイデオロギーを支えるものであったということも、背景として重要であることはいうまでもない。本研究では検討することができなかったが、メディアでのニュース報道のあり方がこうした誤解、誤認、無知を増幅させているということも重要である。

第三に、過去の反ユダヤ主義の呪縛があまりにも強いために、ユダヤ人として「安全」を確保することの必要性和正当性が強固な信念となっている。従ってユダヤ人以外の他者であるパレスチナ人への「想像力」が生まれず、妥協は常に他者に求められることになる。そしてそもそもパレスチナ人そのものが見えていないということもあり、これは初期のシオニズム運動にもみられた問題である。今日のユダヤ・イスラエル人も、「イスラエル人」を語るときにそこにアラブ・イスラエル人が認識されていないことが少なくない。また彼らを「遅れたアラブ人」としてとらえる視線も見えかくれしている。

なおこの第三の点は、シオニズム指導層の企てが功を奏している結果でもある。シオニスト指導層がイスラエル国家統合の有力なイデオロギー装置として「ホロコースト」の記憶を動員していく起点ともなったのが、1961年のアイヒマン裁判であることはイスラエル研究での共通理解となっている。またその前にワルシャワゲッソーの蜂起を讃え記念する「ホロコースト記念日」が1951年に制定され、1959年にはそれが国家行事として祝日に制定され、1953年には「ホロコーストの殉教者と英雄のための記念博物館」であるヤド・バ・シェムが設立されている。そして、少なくないインフォーマントの語りが示しているように、ヤド・バ・シェムは、高校、軍隊、ウルバン（ヘブライ語習得のための学校。移民はここでヘブライ語の基礎を学ぶ。）などのカリキュラムに組み込まれ、また1980年代以降は、ポーランドなどの強制収容所の見学のための修学旅行がイスラエル全土の高校生を対象に実施されているのである。こうした「知識」と「記憶」の国家によるコントロールは、そのもくろみに、人々にユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティが重複した形で形成される効果を生んでいるとみることができる。

以上にみられることの最も本質的な問題は、自らの「加害性」というものが主観的には全く意識されないまま、現実には「シチズンシップの歪み」が進行していくということである。これこそが、本研究で問題にしようとしたもう一つの「シチズンシップの歪み」である。そして今までみてきたように、シオニズム・イデオロギーは今もイスラエルの多くの人々の意識構造のなかに脈打っているといふべきであり、シオニズムは今日「伝統的シオニスト」と「ネオ・シオニスト」に支えられながら強

固に存在しているとみることができよう^{注176}。

^{注176} 宗教シオニストの存在については、また別の議論が成り立つが、本研究の主題ではないので、ここでは議論することができない。

第四章 人口・教育・政治——「シチズンシップの歪み」を支える構造

第一節 人口動態の変化にみられる「緊張関係」

1 マイノリティからマジョリティへ

この章では、これまで考察してきたイスラエル政治文化の「シチズンシップの歪み」を補強する構造的要因として、「人口構成」、「学校教育」、「様々な政党の連関のあり方」という点から検討する。この他にも軍隊組織やメディアというような要因も同じ意味で重要な観点であるが、本研究では様々な制約によりこれらを検討することはできなかった。この点については今後の課題としたい。

特殊な移民国家であるイスラエルの、人口比をめぐる先住民アラブ・パレスチナ人との関係は、それが流動的でかつ強い緊張関係にあるところにある。すなわち、イスラエル建国前はユダヤ人はマイノリティであったが建国後はマジョリティに転換した。しかし、今日再びユダヤ人はマイノリティへの逆転へという可能性の動きのなかにあり、アラブ・パレスチナ人との関係は、圧倒的マジョリティ対マイノリティという関係や一定の固定的な人口比関係にあるのではない。ここではその推移をみていくことにする。

イスラエル建国前の当該地域に人口構成上での「変動」が生まれ出すのは、シオニズム運動によって移民が組織化され始める1880年代以降である。幾度かの移民の波があり、1880代の始めに数万人だったユダヤ人人口は、徐々に増え始め、建国樹立が宣言された1948年までの間に約50万人のユダヤ移民がパレスチナに流入した。これはこの間のパレスチナのユダヤ人人口が約十倍に増加したことを意味している。出生地域別では、88%近くがヨーロッパ、とくにポーランド、ドイツ、オーストリア、ロシア（旧ソ連）、リトアニア、ラトビア、バルカン諸国からであり、他に約10%がアジア・アフリカ諸国、2%弱がアメリカ大陸からの移民であった。

ここであわせて考慮しておくべきことは、ヨーロッパからパレスチナに移住した人々は、ヨーロッパのユダヤ人のごく一部であったことである。19世紀末期以降のヨーロッパのユダヤ人の移住先としてはアメリカ合衆国が最も多く、1881—1914年の期間では全ユダヤ移民の85%がアメリカ合衆国へ（1915—1948年の期間では41%）、その他にカナダへ4%、アルゼンチンへ5%、南アフリカへ2%などとなっている。パレスチナへは、1881—1914年の期間では全ユダヤ移民の3%、1914—1948年では同期間中の全ユダヤ移民の30%が移住した。また、1900年頃の世界のユダヤ人総人口（約1060万

人) に対する1881—1914年のユダヤ人移民総数(約240万人)は、割合にすると約22.6%である^{註177}。

表4-1-1 イスラエル建国前のユダヤ移民の総数の推移

年	移民総数(人)	年	移民総数(人)
1882		1932	12,553
第一アリア	55-70,000	1933	37,337
1903	(第一アリア・	1934	45,267
1904	第二アリア計)	1935 第五アリア	66,472
第二アリア		1936	29,595
1914		1937	10,629
		1938	14,675
1919	1,806	1939	31,195
1920	8,223	1940	10,643
1921 第三アリア	8,294	1941	4,592
1922	8,685	1942	4,206
1923	8,175	1943	10,063
1924	13,892	1944	15,552
1925 第四アリア	34,386	1945	15,259
1926	13,855	1946	18,760
1927	3,034	1947	22,098
1928	2,178	1948.5.14まで	17,165
1929	5,249		
1930 第五アリア	4,944		
1931	4,075		

出典: *Encyclopedia Judaica*, Keter Publishing House Jerusalem Ltd., Jerusalem, 1972, vol.9, p.533.

表4-1-2 19世紀-20世紀初頭のヨーロッパのユダヤ人の分布

国名	1820-25年	1900年 (人)
ロシア/旧ソ連 (ポーランド、リトアニア、 ラトビア、エストニア、を含む)	1,600,000	5,190,000 (1897年)
ルーマニア	80,000	267,000
オーストリア/ハンガリー(1918年以前)	568,000	2,069,000
ユーゴスラビア(1931)	-	5,100
ギリシャ	-	5,800
ドイツ	223,000	520,000
スイス	2,000	12,500
イタリア	25,000	35,000
英国	20,000	200,000
フランス (アルザス-ロレーヌを含む)	50,000	115,000 (内アルザス-ロレーヌは、35,000)
オランダ	45,000	104,000
ベルギー	2,000	20,000
全ヨーロッパ	2,730,000	8,690,000
世界計	3,281,000	10,602,500

出典: *ENCYCLOPEDIA JUDAICA*, Keter Publishing House Jerusalem Ltd., Jerusalem, 1972, vol.13, pp.889-892.

^{註177} *ENCYCLOPEDIA JUDAICA*, vol.16, pp.1519-1520, vol.13, pp.889-892. より計算。

一方パレスチナ・アラブ人は、1947年11月29日の国連総会でパレスチナ分割案が可決される時点で、130万人を超える住民が当該地域に居住していたと思われるが、そのうち約80万人が第一次の難民として現在のイスラエルの外へ流出し、イスラエルが建国を宣言した1948年にイスラエルの領土内にとどまったパレスチナ人の数は15万6,000人であった^{註178}。

これをそれぞれの人口の変化でみると、イスラエルの建国を境に、パレスチナのアラブ人人口は約八分の一に減少したのに対し、ユダヤ人人口は約十倍の約71万7,000人に増加し（ほとんどが移民による増加。1880年以前のパレスチナのユダヤ人人口は、多くみても4万人位であったと推定される）、人口構成比を完全に逆転させた。

こうして、イスラエルはユダヤ人とアラブ人が約八対二で構成される、「ユダヤ人国家」として第一歩を踏み出すことになった。その後も、ユダヤ移民の流入は絶えることがなく、ホロコースト生存者、アラブ・アフリカのイスラム諸国からの大量な移民などを加えてユダヤ人人口は増加を続けることになる。しかし、こうした移民の流入は1980年代以降頭打ちの傾向を示した。表4-1-3からもわかるように、エチオピアからの移民が高い割合で増加したものの、年ごとの移民合計数は、1980年から1989年は年平均で約1万5000人である。単年度での移民総数で1948年以降最も少ない年は、1986年の9,505人である^{註179}。しかし、1989年末以降新たな局面をむかえる。旧ソ連の解体とそれに続く東欧諸国の「民主化」は、多くのユダヤ人をイスラエルへとむかわせ、それによって、イスラエルのユダヤ人人口は絶対数でも高い伸びをみせ、対アラブ・イスラエル人との相対比においても近年の減少傾向をくいとめる動きをみせるようになった。1990年以降旧ソ連から移住したユダヤ移民は、1997年の段階で約70万人を超えている。デラペルゴラの試算によると、年間10万人の規模の新規ユダヤ移民は、イスラエル領土と占領地をあわせた人口のなかでユダヤ人の対アラブ人口比が50%にまで減少する時間を、一年間遅らせるものである^{註180}。

旧ソ連や東欧諸国からの移民が今後どのくらい続くのか、またかれらはイスラエルに定着するかどうかという問題は、イスラエル政府およびシオニズム諸機関の大きな関心事であるが、かれらの動向は、パレスチナ問題のゆくえに対しても、大きな影響をもたらすものである。1990年以降の推移をみる限りでは、旧ソ連からの移民は年間数万人規模で今後も持続していくことが予測されるが、その他の東欧諸国については、表4-1-3をみる限りでは、今後大規模な流入はほとんど考えられない状況であ

^{註178} *Statistical Abstract of Israel 1998*, p.2-7. (頁表記は原書のママ) また、別の資料によると、1947年のパレスチナ人口は、193万3,673人で、内アラブ人とユダヤ人の割合はそれぞれ67%、33%である。New Outlook, vol.34, no.2, 1991, p.31., および Samih K. Farsoun & Christina E. Zacharia, *Palestine and the Palestinians*, Westview Press, Colorado, 1997, p.78.

^{註179} *Statistical Abstract of Israel 1998*, p.5-4.

^{註180} Sergio Dellapergola, op.cit., p.27.

表4-1-3 出生地と移住時期別にみた移民

出生地	移住年代								
	1919- 1948.5.14	1948.5.15- 1951	1952- 1960	1961- 1964	1965- 1971	1972- 1979	1980- 1989	1990- 1996	1997
合計 (人)	482,857	687,624	297,138	228,793	199,035	267,580	153,833	756,602	66,000
アジア計	40,776	237,704	37,119	19,899	36,309	19,456	14,433	33,967	9,830
イラン	3,536	21,910	15,699	8,857	10,645	9,550	8,487	-	-
アフガニスタン	-	2,303	1,106	230	286	132	57	-	-
インド	-	2,176	5,380	2,940	10,170	3,497	1,539	1,214	225
トルコ	8,277	34,547	6,871	4,793	9,280	3,118	2,088	822	147
イスラエル	-	411	868	237	784	507	288	527	55
レバノン	-	235	846	150	2,058	564	179	-	3
シリア	-	2,678	1,870	1,251	887	842	995	-	23
中国	-	504	217	40	56	43	78	132	11
イラク	-	123,371	2,989	520	1,609	939	111	-	88
イエメン	15,838	48,315	1,170	732	334	51	17	-	3
その他	13,125	1,254	103	149	200	213	594	6,455	320
旧ソ連 (アジアの共和国)	-	-	-	-	-	-	-	24,575	8,955
アフリカ計	4,033	93,282	143,485	116,671	48,214	19,273	28,664	38,846	2,850
エチオピア	-	10	59	23	75	306	16,965	32,591	1,657
南アフリカ共和国	259	666	774	1,003	2,780	5,604	3,575	2,187	307
リビア	873	30,972	2,079	318	2,148	219	66	17	9
エジプト/スーダン	-	16,024	17,521	1,233	1,730	535	352	122	20
モロッコ	-	28,263	95,945	100,354	30,153	7,780	3,809	1,567	450
アルジェリア	994	3,810	3,433	9,680	3,177	2,137	1,830	804	174
チュニジア		13,293	23,569	3,813	7,753	2,148	1,942	751	191
その他	1,907	244	105	247	398	544	125	786	42
ヨーロッパ計	377,487	332,802	106,305	80,788	81,282	183,419	70,898	659,956	49,443
オーストリア	7,748	2,632	610	297	724	595	356	244	38
イタリア	1,554	1,305	414	221	719	713	510	434	65
北欧諸国(*)	-	85	131	119	767	903	1,178	861	97
ブルガリア	7,057	37,260	1,680	460	334	118	180	2,862	403
ベルギー	-	291	394	225	887	847	788	608	101
旧ソ連 (ヨーロッパの共和国)	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ドイツ	52,350	8,163	13,743	4,646	24,730	137,134	29,754	629,933	45,604
オランダ	52,951	8,210	1,386	796	2,379	2,080	1,759	1,531	203
ハンガリー	1,208	1,077	646	353	1,117	1,170	1,239	732	80
旧ユーゴスラビア	10,342	14,324	9,819	1,115	1,486	1,100	1,005	1,713	168
ギリシャ	1,944	7,661	320	101	221	126	140	1,668	44
英国	8,767	2,131	676	166	348	326	147	85	14
スペイン	1,574	1,907	1,448	1,260	5,201	6,171	7,098	3,684	470
ポーランド	-	80	169	222	184	327	321	182	25
旧チェコスロヴァキア	170,127	106,414	39,618	4,731	9,975	6,218	2,807	2,228	189
フランス	16,794	18,788	783	905	1,849	888	462	371	46
ルーマニア	1,637	3,050	1,662	1,192	6,858	5,399	7,538	6,835	1,401
スイス	41,105	117,950	32,462	63,549	22,635	18,418	14,607	4,776	364
その他	-	131	253	218	668	634	706	685	79
アメリカ・オセアニア計	7,579	3,822	6,922	10,674	31,726	45,040	39,369	23,435	3,808
オーストラリア・ニュージーランド	72	119	120	133	700	1,275	959	748	118
ウルグアイ	-	66	425	726	1,118	2,199	2,014	435	102
中央アメリカ諸国(**)	-	17	43	18	111	104	8	53	127
アルゼンチン	238	904	2,888	5,537	6,164	13,158	10,582	6,085	1,199
アメリカ合衆国	6,635	1,711	1,553	2,102	16,569	20,963	18,904	11,330	1,573
ブラジル	-	304	763	637	1,964	1,763	1,763	1,329	220
ヴェネズエラ	-	-	-	109	188	245	180	209	42
メキシコ	-	48	168	125	611	861	993	669	95
ポルトガル	-	-	42	194	16	73	62	-	6
チリ	-	48	401	322	1,468	1,180	1,040	350	32
コロンビア	-	-	-	126	289	552	475	281	101
カナダ	316	236	276	241	1,928	2,178	1,867	1,273	150
その他	318	327	91	582	543	500	522	662	49
不詳	52,982(***)	20,014	3,307	761	1,504	394	469	398	14

原注 * フィンランド、スウェーデン、ノルウェイ、デンマーク

** ホンジュラス、ニカラグア、ガテマラ、コスタリカ、エルサルヴァドル、ハイチ、ドミニカ共和国、プエルトリコ、ジャマイカ、パナマ

*** 1919-1948年の移住時期の「不詳」移民数52,982人には、11,000人の不法移民と、19,500人の出生地と移住時期が不明でイスラエルに留まった旅行者が含まれている。

出典：Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998, pp.5- 6—5-7.

る。そして、この50年あまりの移民の動向を見渡したとき、今後のユダヤ移民の主な送出国としては、旧ソ連、西ヨーロッパ諸国（特にフランス）、エチオピア、アメリカ合衆国、アルゼンチンなどを考えてよいだろう。しかし、その規模は、旧ソ連を除くといずれも小規模になっており、ここにも、移民によってイスラエルのユダヤ人人口を増加させていく可能性は限界をむかえており、アラブ・パレスチナ人との人口構成上の緊張関係を高めているといえることができる。

また、ユダヤ・イスラエル人の移動の動向について、もう一点をあげておきたい。それは、イスラエルの外からユダヤ移民がイスラエルに流入する一方で、イスラエルから流出するユダヤ人が少なくないことである。1948年以降出国し、1993年まで帰国していないユダヤ・イスラエル人の累計は、63万8,800人であるが、そのうち、十年以上海外に在住している人は27万人をこえ、この数は、1993年のイスラエル総人口（1993年末で532万7,600人）の約5.1%にあたる^{註181}。かれらの存在、および増減は、イスラエルの国家や社会の性格およびその変化と少なからず関連をもつと思われる。つまり、この少なくない規模の流出者の存在に、イスラエルの在り方——政治・軍事・経済・社会・文化面での——に対する直接的・間接的拒否というニュアンスや伝統的なシオニズムイデオロギーへの無関心という意識を読み取ることができる。そして、先に述べた旧ソ連・東欧からの大量移民が、こうした流出者の新たな予備軍になることも十分に考えられる。

2 人口比の「拮抗」

今日イスラエル政府が発表している人口統計によると^{註182}、上記のような恒常的な移民の流入と自然増により、イスラエルのユダヤ人人口は建国時のおよそ71万7,000人から、470万2,200人（イスラエル人口の80.2%）に増加した。これに対し、アラブ・イスラエル人の人口も、15万6,000人から116万2,000人に増加した。この五十年の間に、総人口は87万3,000人から586万3,000人へと約6.7倍増加したことになる。しかしその内訳をみると明らかなように、アラブ・イスラエル人の人口の増加率は、ユダヤ・イスラエル人の人口の増加率を上まわるものであり、総人口に占める構成比で比較すると、同じ五十年の間に、ユダヤ・イスラエル人は、上記のような移民の流入と自然増があったにもかかわらず、82.1%から80.2%へと減少している。一方アラブ・イスラエル人は、1948年の17.9%から1961年には11.3%にまで落ち込んだが、その後回復し、19.8%へと増加したことがわかる。ユダヤ・イスラエ

^{註181} *Statistical Abstract of Israel 1995*, 1995, p.166. から算定。なお、1996年度以降の同統計資料には、この項目（出入国年度別にみた、居住者の出入国）の統計がなくなっているため、これ以降のデータと比較することは不可能である。

^{註182} <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>

ル人には移民増という人口増加の大きな要因があったのに対し、アラブ・イスラエル人には移民による人口増の要因がまったく望めないばかりか、排除と追放という政策の対象であったことを考慮するならば、アラブ・イスラエル人のこの人口比の維持は驚くべきことである。

以上の人口構成は、あくまでもイスラエルの領土内の数字であり、この限りではユダヤ人は依然としてマジョリティであるかにみえる。しかし、現実にはイスラエルの支配が及んでいる占領地域を含めた場合、その人口比の緊張関係は一層明らかとなる。パレスチナ中央統計局の1997年のセンサスによると、今日のウエストバンクおよびガザの人口は、それぞれ1,869,818人と1,020,813人であり、占領地区全体のパレスチナ人口は約290万人になる^{注183}。この人口に東エルサレムのパレスチナ人を加えると、307万人を超えられると思われる。

つまり、「パレスチナ自治区」を含めたユダヤ人対パレスチナ人の実質的な人口比は、約54%対46%となり、この空間の中ではユダヤ人はもはや圧倒的マジョリティとはいえない状況になりつつある。さらには、第二章でも指摘したように、この人口比が逆転することもおこりうる段階にあるのである。現在の人口比の行方は、イスラエルへのユダヤ移民が今後どのくらいの規模で継続するかというところに大きく左右されており、その規模いかんでは逆転をくい止められるかもしれないが、イスラエルが「ユダヤ人国家」であり続けようとすることは、この一点においても現実の推移と逆行するもので、ここにイスラエルのかかえる大きな矛盾がある。

もし名実ともに「ユダヤ人国家」になることがあるとしたら、それは、パレスチナ人を完全に追放し、追放しきれなかった人々の生命を剥奪したときであり、しかも、今後入国の資格審査を非ユダヤ人に対して排他的・閉鎖的にし続けていくことを意味している。そう考えると、みずからの「国民国家」を求めて政治的につくられたこの国家が「ユダヤ人国家」であることを求め続けていくことは、人口構成という点から見た場合にも、解不能の方程式を解こうとすることであるように思われる。

またこの間の注目すべき動向としてパレスチナ人の絶対数の増加とその空間的広がりについても触れておきたい。パレスチナ人の人口や実態を正確に把握することは極めて困難であるが、今日その総数は八百数十万人と推定されている。パレスチナ人全体の分布を考えると、最も多く居住する地域はヨルダンとみられてきたが、近年の占領地の人口増加により、ウエストバンクとガザの人口をあわせると、ヨルダンのパレスチナ人人口を上まわると思われる。また表4-1-4 からわかるように、パレスチナ人の過半数はかつてのパレスチナ以外の地域に生活し、空間的にますます拡大する傾向にあり、その範囲は周辺アラブ諸国をはじめ、南北アメリカやヨーロッパなどにまでおよんでいる。

^{注183} Palestinian Central Bureau of Statistics, *Census Preliminary Results - 1997*, Ramallah, 1998, p. 4.

表4-1-4 世界のパレスチナ人の分布（推定）

ウエストバンク	1,869,818	ヨルダン	2,225,000
ガザ地区	1,020,813	レバノン	350,000
パレスチナ領土計	2,890,631	シリア	340,000
		エジプト	100,000
		サウジアラビア&湾岸諸国	450,000
		リビア	25,000
イスラエル	1,106,000	イラク	40,000
		南北アメリカ	480,000
		ヨーロッパ	150,000
		その他	50,000
歴史的パレスチナ計	3,996,631	パレスチナ外計	4,210,000
総計（人） 8,206,631			

出典：Palestinian Central Bureau of Statistics (PCBS), *Census Preliminary Results - 1997*, Ramallah, 1998, p.4、および、Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs (PASSIA), *PASSIA1998*, Jerusalem, 1997, p.213.、および、Israel Ministry of foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>より作成。

上記の推定人口の数字を用いると、かつてのパレスチナ地域、つまり今日のイスラエルとその占領地域に居住するパレスチナ人はパレスチナ人全体の約49%に相当することになるが、これは、世界のユダヤ人推定人口1300万人のうち、イスラエルおよびその占領地に居住しているユダヤ人が36.2%に相当するということと比較すると、興味深い数字である。しかも、前者の比率は減少傾向に、後者の比率は上昇傾向にあることを加味すると¹⁸⁴、地球的な規模でユダヤ人とパレスチナ人の、「パレスチナ」をめぐる「領土」と「人々」の攻防が展開されているようにみえてくる。ユダヤ人は、デュアスポラ（離散）という枕詞をつけて形容されてきたが、イスラエルの建国によってもたらされたものは、まさにパレスチナ人のデュアスポラ化である。またその人口の絶対数の伸びにも注目しておくべきである。イスラエル建国前夜のパレスチナ人人口を約130万人と推定すると、今日までの約五十年間で約6.3倍に増加している。様々な困難な状況にもかかわらず、このような高い人口増がみられるのは、自然増加率がきわめて高いことによるものである¹⁸⁵。

3 マジョリティからマイノリティへ？

¹⁸⁴ 世界のユダヤ人人口に占めるイスラエル（パレスチナ）のユダヤ人人口の割合は、次のように推移している。1900年:1%→1939年:3%→1948年:6%→1955年:13%→1970年:20%→1980年:25%→1990年:30%→1996年:36%。Statistical Abstract of Israel 1998, p.2-10.

¹⁸⁵ たとえば、最も高いとされるガザでは年間5%といわれている。Amiram Goldblum, 'Peace Now: "The Real Map"', *New Outlook*, vol.36, no.1, 1993, p.24.

離散パレスチナ人の「帰還」については、イスラエルの「帰還法」の対象外であることについては第二章で述べたが、パレスチナでのユダヤ人とパレスチナ人の現実の人口構成比がこのような強い緊張関係にあることを考えると、パレスチナ人の帰還問題はイスラエルにとってはこの構成比を文字どおり逆転しかねない問題であり、帰還を承諾することは考えにくい。しかし、生まれて育った家と土地を意に反して追われ、帰ることができないパレスチナ人と、「帰還法」によって世界のどこからでも「帰ってくる」ことができるユダヤ人という図式を正当化することは困難である。

この問題に対する答えとしてよく返されるのは、「パレスチナ人には他に多くのアラブの国があるが、ユダヤ人にはイスラエルしかない」という答えや「パレスチナ人は彼等のつくるパレスチナに住めばいい」（＝イスラエルには住んでほしくない）という答えであり、他には「賠償金を払うなどの方法で解決する」という答えもあるが、「帰還の権利」を明確に認めるユダヤ・イスラエル人はまだまだ少ない。また、「パレスチナ人が祖国を奪われたことをどう思うか」という問いに対しては、

「残念だ」、「気の毒だ」という答えもあるとはいえ、「私たちユダヤ人も祖国を奪われた」という答えや「（分割案に）私達は合意したのに、彼等は合意しなかった」という答えが返される。こうしたイスラエルのなかに存在する「政治的常識」とその論理のもつ問題性については、すでに見てきた通りである。

ここで再度確認しておきたいのは、ユダヤ人という特定の民族のための国家であろうとして、国家統合の過程でパレスチナ人を同化する政策はとらず、「パレスチナ人の追放・排除・隔離」という政策を一貫して進めてきたにもかかわらず、現実の人口構成とその推移をみる限り、事態はむしろゆるやかに逆行する方向に進んでいることである。ここに、第一章で指摘したイスラエルの「国家の正当性の不確かさ」、つまり「領土的基盤の欠如」という意味での「国家の正当性の不確かさ」とは別に、もう一つの「不確かさ」があるように思われる。すなわち、ユダヤ人国家であろうとするイスラエルのなかで、ユダヤ人は圧倒的マジョリティにはなりえない（かもしれない）という意味である。

イスラエルの領土が占領地を併合して拡大したならば、人口構成は近い将来に逆転するかもしれないが、「ユダヤ人国家」であるべきイスラエル国家はむしろ「非ユダヤ化」していくという皮肉な結果に至っている。政治的シオニズムが軍事的、領土的に「成功」していけばいくほど、国家としてのイスラエルは、その存立のリスクとコストの負担をひきうけなければならない。このようなジレンマに今イスラエルは直面している。人口をめぐるこうした強い緊張関係に対する危機感が、アラブ・イスラエル人およびパレスチナ人に対する非妥協的政策をイスラエルに堅持させる背景となり、「シチズ

ンシップの歪み」を是正する可能性の阻害要因となっている。

第二節 「ミズラヒム」の政治的帰結

本節では、イスラエルの「シチズンシップの歪み」を支えてきたもう一つの構造的要因として「エスニシティ」という要因があることを論証したい。この主張は、現在のポスト・シオニズム論争における「エスニシティ」の評価とはある意味で対立する。第一章で述べたように、ポスト・シオニズム論争では「ミズラヒム」、「宗教的ユダヤ人」、「パレスチナ人」、「女性」などは従来のアシュケナジム^{註186} 男性によって主導されてきた支配的シオニズムに対する「他者」として、これを相対化していくものとして注目されるからである。筆者も「ミズラヒム」を含め、これらの主体がこれまでのシオニズムイデオロギーから疎外されてきた人々であったという評価には同意するものであるが、ここでは政治的帰結という点で、「ミズラヒム」の意識や行動のあり方が「シチズンシップの歪み」を支えてきた側面を強調したい。

1 「ミズラヒム」の自己認識

1959年にシュヴァル (J.T.Shuval) がおこなった調査^{註187} によれば、北アフリカ系のユダヤ移民に対する表4-2-1のようなステレオタイプの結果がでている。これは、このインタビュー調査の幾つかの質問項目の一つで、「どのエスニック集団をコミュニティの隣人として最も望むか／望まないか」という質問の後で、望まない集団として選ばれているエスニック集団の「望まない理由」を自由に述べてもらった内容を調査者が記録し、後に整理して分類したものである。この調査は、今から約40年前であり、現在のステレオタイプとは違うであろうことも意識しなければならないが、この調査で注目すべきことは、同一の質問に対する回答が三つのエスニック集団から得られている点である。そのことによって、「北アフリカ系」エスニック集団自身の自己認識を、当時の他のエスニック集団の視線と

^{註186} 注35参照。

^{註187} キリヤット・ガット、アシュケロン、ベエルシェヴァ、キリヤット・シュモナの移民開発センター（移民の団地）でのインタビュー調査。被調査者数は、1511人で、内719人が、1948年のイスラエルの建国以降に北アフリカからイスラエルに移住したユダヤ移民である。なお、この被調査者たちは、上記の居住地区に、それぞれの場所とアパートを（移民局から）「ランダムに」あてがわれたのであり、出身国という観点からみると上記の各コミュニティの構成員は、「多様

(heterogeneous) であると記されている。しかし、こうしたコミュニティは概してアジア・アフリカ諸国からの建国後の大量の移民の流入を「吸収」する目的で政府の「公共事業」としてつくられた経緯があり、構成員が「多様」であるといっても「ミズラヒム」の枠に偏った中での多様性であると推測される。

の比較において探ることができる。表4-2-1 からわかるように、かれらの自己認識は、ときには「ヨーロッパ系」エスニック集団以上に否定的なステレオタイプの傾向を現わしている。とくに「性格が好ましくない」という回答率は三つのエスニック集団のなかで最も高く、他にも、「攻撃的」(aggressive)や「文明化されていない」、「汚い」、「子供がうるさい」(bothersome children)^{註188}などの項目で高い割合を示している。さらに、ステレオタイプの内容が「ヨーロッパ系」や「中東系」の他のエスニック集団から得られたものと同様な傾向を示していることを加味すると、このかれらの自己否定的な自己認識は、「他者」の視線を通して自己を認識したものと考えてよい。

表4-2-1 エスニック集団別にみた北アフリカ出身者に関する否定的ステレオタイプ

隣人として北アフリカ出身者を 拒否する理由にあげられた特徴	回答者のエスニック集団		
	ヨーロッパ系	中東系	北アフリカ系
	(204)*	(122)*	(268)*
汚い	12%	18%	10%
宗教的すぎる	1%	1%	-
国家への忠誠心がない	-	1%	-
優越意識がある	2%	-	3%
文明化されていない	15%	5%	11%
共通言語がない	11%	1%	3%
子供がうるさい	9%	8%	10%
攻撃的	31%	42%	33%
性格が好ましくない	7%	14%	20%
習慣が違う	5%	2%	1%
「原始的」である	3%	2%	1%
その他	2%	5%	8%
無回答	2%	1%	-

原注(*)：回答者によっては、(「望まない理由」として)一つ以上の特徴をあげている場合もあり、それらは全て記録された。また、「望まない理由」を具体的にあげていない回答者も少数存在した。この表の合計は、あげられた特徴の総数をあらわしており、%は、この総数に基づいて計算されている。したがって、この総数は、北アフリカ出身者を隣人に望まないと言った回答者の数とは必ずしも対応していない。

出典：J.T. Shuval, 'Self-Rejection among North African Immigrants to Israel', *The Israel Annals of Psychiatry and Related Disciplines*, vol. 4, no. 1, 1966, p.105.

^{註188} この背景には、こうした移民開発センターが、低コストの移民住宅から成っているという状況を考慮する必要がある(原注)。J.T. Shuval, 'Self-Rejection among North African Immigrants to Israel', *The Israel Annals of Psychiatry and Related Disciplines*, vol. 4, no. 1, 1966, p.106.

このような「他者」の視線を通した自己の認識の仕方は、1970年代ごろにも依然として確認することができる。少し長くなるがミズラヒム移民の発言を以下で二つ引用してみよう。

「ヨーロッパの文化がほかのどの文化よりもまさっていると考えるのは、ヨーロッパ人自身だけだ。．．． イスラエルは、中東の国だ。中東がわれわれの故郷であり、出生地だ。ユダヤ人が民族としてやりとげた業績（は）すべてここでなしとげたのだ。その伝統をもっとも忠実に守ってきたのは、東洋系のユダヤ人であり、そのなかでもイエメン系のユダヤ人だ。．．． さて、ヨーロッパからも、回教諸国からもユダヤ人がこっちへやってくると、衝突がおこった。モロッコやシリア、イエメンやアデンにおいて「知識人」だった男たちは、イスラエルでは、何者でもなかった。彼らの「知識」を評価し、上流階級と見定める文化は、イスラエルには存在しないことを、彼らは発見した。．．． イエメンでは重要人物だった俺のおやじは、イスラエルでは何もすることがない。トラックの運転もできなければ、経理もできない。学校へいくことも教えることもできない。．．．（イエメンでの父の仕事は）商人だった。電話器とか船とか、そういうしゃれたものを売するような商人じゃなくて、こまかいものをあきなうような人間だった。商品をもって、四、五日旅して売って、戻ってくると、また商品をもって一週間か十日間出かけて、売って、戻ってくる、という具合の商売だった。もしヨーロッパだったら、おやじは本物の商売人だったろう。ところが、彼は東洋にいたもので、彼の商売は彼が住んでいた国に見合うものだったのだ。イスラエルに来て何ができたと思う？ 肉体労働しかなかった。同じような社会的地位をもつ男がもしドイツからきたとしたら、彼はもっとうまく出世した。はじめから有利な立場にいたからだ。．．． いずれ俺の息子は、学校で教えられることと家の様子の食い違いに気づくだろう。その日、彼は帰ってきて俺に聞かろう。『どうしてぼくたちはピアリク^{注189}やマブ^{注190}ばかり勉強していて、シャバジー^{注191}を勉強しないの？ ピアリク、チェルニコフスキー、^{注192} フィコフスキー^{注193}、いろんな「コフスキー」たちを幼稚園から勉強するのに、どうしてエフダ・ハレヴィ^{注194}をもっと勉強しないの』とね。．．．」^{注195}

「．．． イスラエルの東洋系のユダヤ人は、アラブ人に対しては、もっとも寛容を欠く人間だ。．．． アラビア語を母国語として喋るユダヤ人はアラブ人を憎んでいる。でも、それは彼らがアラブ諸国でうけた被害のせいではない。彼らの憎悪は、彼らがイスラエルで受けている被害と取り組むための手段なのだ。．．． 俺たちには、イスラエルの社会に貢献するものが何一つない、といわれる。なぜそうなのかというと、俺たちは愚劣な文化から出てきた

^{注189} 近代ヘブライ語の最大の詩人とされている。ウクライナ生まれ（1873—1934年）。

^{注190} ヘブライ語による近代小説の父。リトアニア生まれ（1808—1867年）。

^{注191} イエメンのユダヤ人の最大の詩人（17世紀）。

^{注192} ミクハイロヴカ（ロシアの村）生まれのヘブライ語詩人（1875—1943年）。

^{注193} 架空の名前。

^{注194} スペイン生まれのヘブライ語詩人（1075—1141年）。

^{注195} D.グッドマン、『イスラエル声と顔』、朝日新聞社、1979年、217—221頁。

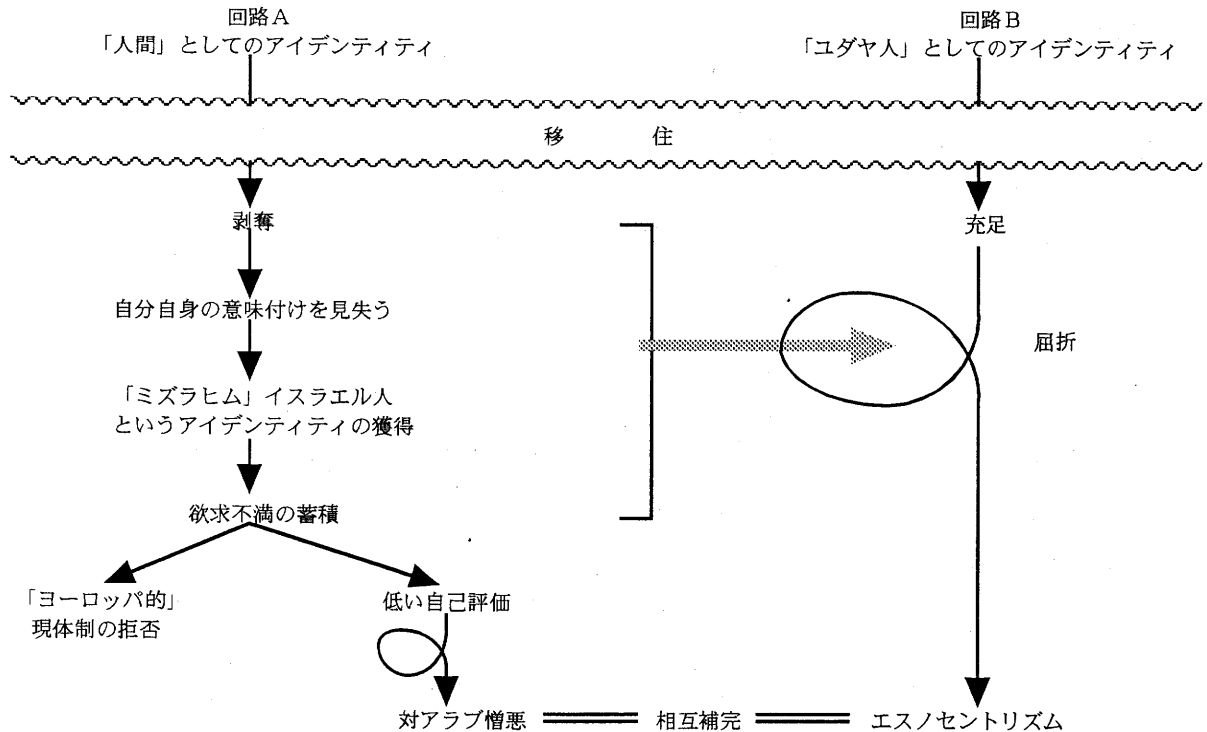
からだ。もちろんその文化はアラブ文化だって。だから自分が役立たずのできそこないだとしたら、それは愚劣なアラブ文化のせいだ、ということになる。自分が無価値な人間であると感じれば感じるほど、そういう人間にしてしまったアラブ文化が憎くなるわけだ。東洋系のユダヤ人のアラブに対する憎悪は、結局自分がイスラエルで受けている扱いと取り組む努力の結果だよ。」^{註196}

こうした発言をてがかりに、「ミズラヒム」の自己確認の回路を解釈してみたい。一人の「ミズラヒム」移民がイスラエルのなかで自らの存在証明をしようとするとき、彼は基本的に次の二つのアイデンティティの複合関係でそれを行おうとしたと思われる。一つは、一人の人間としての存在証明＝アイデンティティであり、もう一つは、自分が「ユダヤ人であること」に対する存在証明＝アイデンティティである。前者は、生きていることの基本的要因であり、後者は、イスラエルへの移住を選択・決断させた要因であるからである。ここでまず第一に、移住前に確認しえていた、人間としての基本的なアイデンティティは、イスラエル社会のなかである種の挫折を経験する（「イエメンではおやじは重要人物だった」→「イスラエルでは何者でもない。」という認識への転換）。こうして、存在証明の場を喪失し自分自身の意味づけの再構築を迫られる状況のなかで、「ミズラヒム」とあるというエスニック・アイデンティティが自覚化される。ところが彼らは、次項で述べるように、相対的な低学歴と「出自」とともなうひずみのためにイスラエル社会の中枢にのぼりつめることが困難であり、存在証明の場が閉ざされたまま欲求不満が蓄積していく（「俺たちは、イスラエル社会に貢献するものが何一つない、といわれる」→「愚劣な文化からでてきた役たたずのできそこない」という自己認識へ）。そして、この欲求不満の矛先は、一つはアシュケナジム・エスニック集団が牛耳っている体制に対して、一つは自分自身への低い自己評価としていったん帰結したあとで、「愚劣な役にたかない文化」を共有するアラブ人への憎悪として憎悪の対象をすりかえ、回路Aの一つの決着がつけられていく。

一方、「ミズラヒム」移民の民族的なアイデンティティは、移住によってそこなわれるということではなく、むしろイスラエルに移住したことによってこのアイデンティティは一層充足される。同時に彼らは、自らの「民族的純血さ」に対する自負と誇りを有してもいる（「ユダヤ人の民族としての業績はすべてここ、すなわち自分たちの『出生地』であり、ユダヤ教（徒）のルーツである中東でなされた」という自負）。しかしながら、回路Aの展開がこの「ユダヤ人」としてのアイデンティティに屈折した影響を及ぼし、その終着点はエスノセントリズムになってしまうことになる。

^{註196} D.グッドマン、『同上書』、212頁。

図4-2-1 「ミズラヒム」移民の自己確認の回路



言い換えれば、「低い自己評価」が反転した「対アラブ憎悪」とエスノセントリズムは相互に補完しあいながら、「自己肯定」が追求されていく。具体的には、イスラエル社会のなかで自己の有用性を示す機会が日常世界場で閉ざされているがゆえに、かれらはそうした状況と自己を否定し、ユダヤ人として同等の「認知」を得るために、国家に対する忠誠という行為に向かうといえる。こうして、ユダヤ人国家としての強いイスラエルに自らのアイデンティティを重ね、自己充足をはかることになる。二つのアイデンティティ回路の展開がこのような関連しあうことで、自らのアイデンティティの確立のなかに「他者を否定する」という構造がとりこまれ、「共生」という課題に対する阻害状況をつくりだしている。

ところで、回路Aのもう一つの方向性、すなわち、「ヨーロッパ的」現体制に向けられた欲求不満の行方およびその帰結についてもみておく必要があるが、その前に、かれらがこのような自己認識を持つに至る背景についてもう少しみていくことにしたい。

2 エスニシティと社会的格差

イスラエルがどの位多様なエスニシティで構成されているかということを見るためにその出身国を数えてみると、その数は68をこえている。また、1948年以降のイスラエルへのユダヤ移民総数の1%以上を構成している出身国の数は19にのぼる。ただし、このエスニシティもしくは出身国（地域）と移住時期とシオニズムの指導者層には明確な相関関係があり、これまでも指摘してきたように従来の指導者層はアシュケナジム・エスニック集団によってほぼ独占されてきた。

表4-2-2 歴代首相の出生地と移住時期

名前	誕生年	首相任期	出生地（国）	移住年	移住時年齢
D. ベングリオン	1886	1948-1953 1955-1963	ポーランド	1906	20
M. シャレット	1894	1954-1955	ウクライナ	1906	12
L. エシュコル	1895	1963-1969	ウクライナ	1913	18
G. メイール	1898	1969-1974	ウクライナ	1921	23
Y. ラビン	1922	1974-1977 1992-1995	エルサレム		
M. ベギン	1913	1977-1983	ポーランド	1943	30
Y. シャミール	1915	1983-1984 1986-1992	ポーランド	1935	20
S. ペレス	1923	1984-1986 1995-1996	ベラルーシ	1934	11
B. ネタニヤフ	1949	1996-1999	テルアヴィヴ		
E. バラク	1942	1999-	キブツ・ミシュマル・ハシャロン		

出典：Israel Ministry of Foreign Affairs, *Israel at fifty: The Prime Ministers of the State of Israel*,
<http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>

表4-2-3 政治部門の職級別にみたエリートとエスニック集団の分布

(1950年代および1960年代)

部門	上級 職位	オリエンタルズ	アシュケナジム	中級 職位	オリエンタルズ	アシュケナジム	下級 職位	オリエンタルズ	アシュケナジム
国家	大臣及び閣僚			上級公務員			公務員		
	1956年	1人	21人	1961年	3%	77%	1961年	28%	72%
	1971年	2人	25人	1969年	3%	76%	1967年	28%	50%
	国会議員			大・中都市の市長			地方自治体の長		
	1956年	9人	103人	1955年	0人	19人	1955年	11人	85人
	1970年	17人	96人	1969年	0人	19人	1969年	32人	66人
				最高裁判事			市町村会議員		
				1955年	0人	9人	1955年	154人	498人
				1969年	1人	8人	1965年	421人	530人
				少将			地方宗教議会議長		
				1965年	0人	12人	1969年	34人	45人
				1970年	0人	16人	警察幹部		
シオニスト機構*							1955年	16人	370人
							1969年	181人	547人
	「シダ」機関の幹部			「シダ」機関の支部長					
	1955-56年	0人	12人	1955-56年	0人	21人			
	1969-70年	1人	12人	1969-70年	0人	14人			
ヒスト・ルート (イスラエル労働 総同盟)	シオニスト執行委員会委員								
	1955-56年	1人	51人						
	1969-70年	4人	47人						
	中央委員会委員			ヒスト・ルート執行部上級職			11回大会の代表者		
	1956年	0人	13人	1971年	37人	197人	1969年	235人	755人
政党**	1970年	5人	13人	ヒスト・ルート工場連合の上級管理者			ヒスト・ルート工場連合の管理者		
	執行委員会委員			1970年	4%	96%	1970年	31%	69%
	1956年	8人	83人	大・中都市における労働者評議会			労働者評議会書記		
	1969年	34人	129人	書記			1957年	14人	53人
				1970年	2人	11人	1970年	30人	40人
政党**	5つの主要政党の中央執行委員			5つの主要政党の中級執行委員			5つの主要政党の下部執行委員		
	1950-59年	8人	96人	1950-59年	19人	197人	1950-59年	63人	600人
	1960-69年	21人	118人	1960-69年	83人	445人	1960-69年	188人	688人

原注：*イスラエル人の代表者（または委員）のみ

** 5つの主な政党（労働党、マバム、国家宗教党、自由党、ヘルート）の執行委員を単純に合計したもの

出典：S.Smootha&Y.Peres, 'The Dynamics of Ethnic Inequalities: The Case of Israel', in ed.by Ernest Krausz, *Studies of Israeli Society*, vol. I, Transaction, Inc., New Jersey, 1980, p.174.

表4-2-4 移住時期別にみた各部門ごとのエリートの割合

移住年代	部門						
	政治	行政	経済	学術	専門職	芸術・文化	計
-1920	3.0%	3.0%	2.3%	0.5%	0.0%	2.0%	2.0%
1921-33	36.8%	22.4%	30.3%	15.7%	24.4%	37.3%	25.8%
1934-39	25.6%	41.3%	35.6%	28.7%	29.3%	23.5%	32.4%
1940-48	15.8%	13.3%	11.4%	10.2%	22.0%	13.7%	13.2%
1949-56	6.0%	9.0%	6.8%	14.6%	14.6%	3.9%	9.4%
1957-	2.3%	4.0%	5.3%	15.7%	4.9%	7.8%	7.1%
不詳	10.5%	7.0%	8.3%	14.6%	4.8%	11.8%	10.0%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	99.9%

出典：Alex Weingrod & Michael Gurevitch, 'Who are the Israeli elites?', *Jewish Journal of Sociology*, vol.19, 1977, p.72.

表4-2-5 出生地域別にみた各部門ごとのエリートの割合

出生地域	部門						
	政治	行政	経済	学術	専門職	芸術・文化	計
イスラエル	24.4%	31.4%	27.9%	17.9%	32.8%	32.4%	26.7%
中欧・東欧	48.3%	38.9%	41.5%	28.7%	50.8%	40.5%	39.6%
西欧	11.9%	20.1%	18.0%	26.0%	6.6%	21.6%	18.9%
英語言語圏	1.7%	3.4%	5.5%	17.9%	6.6%	1.4%	6.7%
中東・北アフリカ	8.5%	2.7%	1.6%	2.2%	1.6%	0.0%	3.2%
その他（南欧・極東 ラテンアメリカを含む）	2.8%	2.7%	4.9%	4.9%	1.6%	0.0%	3.4%
不詳	2.3%	0.7%	0.6%	2.2%	0.0%	4.0%	1.5%
計	99.9%	99.9%	100.0%	99.8%	100.0%	99.9%	100.0%

原注：なお、ここでもなされている「エリート」の定義は、「各界の頂点にいる人」であり、その内容は以下の通りである。①政治エリート：第七次国会の全議員、大きな政党の中央委員会の委員、主要都市の市長など。②行政エリート：政府の各省の上級官吏、軍隊の上級官吏、など。③経済エリート：大企業、大会社、主要銀行の重役など。④学術エリート：イスラエルの諸大学の教授。⑤専門職エリート：各種の同業組合や協会の幹部。⑥芸術・文化エリート：著名な興行主、作家協会や演劇家協会の幹部、優れた有名な芸術家など。

出典：Weingrod & Gurevitch, 'Who are the Israeli elites?', *Jewish Journal of Sociology*, vol.19, 1977, p.70.

こうした社会格差の存在と問題は、アシュケナジムとスファラディム^{註197}のエスニック問題として、イスラエルの社会学の最もポピュラーなテーマの一つであった。しかしその説明のされ方は、スファラディム（≡ミズラヒム）の「後進性」と「後からやってきた」ことに原因が帰され、やがては統合され「吸収」されることで解決されるという認識のされ方も少なくなかった。これは第一章で指摘したイスラエルの伝統的シオニスト社会学にみられた分析の特徴である。

しかし、こうした認識は今日修正を迫られており、その一つに「ミズラヒム」は必ずしも「後からやってきた」移民ではなかったこと、またアシュケナジムによって担われた労働シオニズムや社会主義シオニズムイデオロギーの、ミズラヒムに対する差別的な処遇への着目がある。例えば、イスラエル建国前の入植史において、東欧やロシアからの「第一アリア」^{註198}の移住の始まりと時を同じにしたイエメンからの移民があったことである。このことは、伝統的なこれまでの「パレスチナ入植史」ではほとんど注目されてこなかったが、かれらは、イスラエル建国前の「組織的かつ大規模な、唯一の東洋系移民」^{註199}であったという特徴を有している。

この移住の時期は1881-1882年の時期であるが、同時期の東欧やロシアからの「第一アリア」が反ユダヤ主義に対する反作用として組織されたのに対し、前者の移住の契機はイエメンにおけるメシア再来運動の高揚のためであったといわれている。こうした宗教的動機によって移住した人々に加えて、20世紀の初頭には、イエメンからの「第四アリア」（1911-1914年）といわれる移民が流入する^{註200}。かれらは、パレスチナのユダヤ人社会における労働力不足を補う目的で、すなわち、社会主義シオニズムのスローガンの一つであった「土地と労働の征服」の実現のために、ユダヤ人入植地にアラブ人労働者を雇用することに反対する当時のシオニズムの指導層によって、安いアラブ人労働力を代替する廉価な労働力として組織された移民であった。かれらはユダヤ教の信仰と文化的な伝統を遵守してきた人々として一目をおかれる存在であった反面、「廉価な労働力」としての移民集団という負の記号の一面も払拭できない、複雑なエスニック・アイデンティティをもっていたといえ、この点に、白杵が指摘するように「現代イスラエル社会のユダヤ人のなかのエスニック紛争のプロトタイプ」^{註201}をみる思いがする。

^{註197} 注35参照。

^{註198} 1882-1903年の第一次移民の波。

^{註199} イスラエル建国前のイエメンからのユダヤ移民については、次を参照。白杵陽、1998年a、第四章。

^{註200} 1911年にハボエル・ハツァイール（若き労働者という意味のヘブライ語。）運動の指導者の一人であったY.ヤヴニエル（Y.Yavniel）が、ユダヤ人労働者を「輸入」するためにイエメンに派遣された。1912年には1,500人のイエメンのユダヤ人がパレスチナに連れてこられ、1918年までには、その数は自然増も含めて11,000人に達した。Baruch Kimmerling, *Zionism and Economy*, Schenkman Publishing Company, Cambridge, Mass., 1983b, p.50.

^{註201} 白杵陽、1998年a、86頁。

今日イスラエルのユダヤ人人口の内訳は六割以上がイスラエル生まれの人々になり^{註202}、また移民第一世代から数えると、今は第三・第四世代に入っており世代交替も進んでいる。もう一つ注目すべきこととして、移民二世を含めると、「アジア・アフリカ系」^{註203}のユダヤ人は「ヨーロッパ・アメリカ系」のユダヤ人に比べて数的に圧倒的に少数とはいえないことがある。「イスラエル生まれ」が過半数を超えたということから、「ヨーロッパ・アメリカ生まれ」と「アジア・アフリカ生まれ」の比率が今後さらに減少しつづけるのは確実であるが、ユダヤ・イスラエル人の「出自」を父親の出自を基準に「イスラエル系」、「アジア系」、「アフリカ系」、「ヨーロッパ・アメリカ系」と分けた場合、1996年でのそれぞれの割合は、26.0%、15.7%、18.2%、40.1%である^{註204}。

さて、このような世代交替のなかでミズラヒムの「出自」に伴う様々なひずみは解消されてきたのだろうか。学歴や職種などに関する統計資料をみると、1972年から1993年の就学年数の「平均値」をみる限りでは全体的に高学歴化が進んできていることがうかがえる^{註205}。しかし、世代間学歴移動の統計を父親の出自によって分類したエスニック集団別でみると、就学年数が「16年以上」の学歴層の割合は、全体的に上昇する傾向にあるとはいえ、「父親もイスラエル生まれ」および「アジア・アフリカ系」と、「ヨーロッパ・北アメリカ系」の間では、依然として大きな開きがあり、これらのエスニック集団の学歴格差が世代交代によって解消してはいないことがわかる^{註206}。そのヒントは表4-2-6にかいまみることができる。つまり、「職業・農業」高校に進む「ミズラヒム」の子供達は「アシュケナジム」の子供達の二倍以上であるというところに注目すべきである。このことは、彼等のその後の職業の規定要因となっているといえるのである。

表4-2-7から各エスニック集団の職業分布や失業率を比較すると、「ミズラヒム」の専門職の割合の相対的低さや失業率の高さがめだつ。またかれらの親世代と職種の分布が類似していることもうか

^{註202} 1996年の統計では、ユダヤ・イスラエル人を「イスラエル生まれ」、「アジア生まれ」、「アフリカ生まれ」、「ヨーロッパ・アメリカ生まれ」の四区分でみた人口構成比はそれぞれ、62.1%、5.4%、7.0%、25.6%である。 *Statistical Abstract of Israel 1998*, p.2-52. (頁表記は原書のママ)

^{註203} この分類は、イスラエルの政府統計の分類による。以下統計資料で用いられている表記に従っているところでは、統一性を欠くが、「ミズラヒム」という表現は用いていない。

^{註204} Ibid.

^{註205} 「ユダヤ人」は9.8年から12.1年（男性：10.0年から12.1年、女性：9.5年から12.0年）に、「アラブ人他」は5.6年から9.7年（男性：6.7年から10.2年、女性：2.1年から9.0年）に高学歴化し、それぞれの平均値が接近してきている。しかし、その内訳をみると、「ユダヤ人」と「アラブ人」の両エスニック集団の格差はそれほど縮まっているとはいえない。「ユダヤ人」の場合には、就学年数が11-12年以上の学歴層が男女共に同年齢集団の約7割を占めるのに対し、「アラブ人他」の同学歴層は、男性が約4割、女性では3割強である。大学卒に相当する就学年数が16年以上の層の差はさらに大きい。また、「アラブ人他」では、女性の高齢者を中心に「就学年数がゼロ」の割合も高い。Ministry of Education, Culture and Sport, *The Level of Education of the Population in Israel :1977-1993*, Central Bureau of Statistics Publication no.1027, Jerusalem, 1996, pp.46-49.および、p.71, p.73. ユダヤ人の内訳については本文中に記した。

^{註206} Ibid., pp.116-117.

表4-2-6 エスニック集団別にみた最終学歴（1997年）

	大学	専門学校 短大など	最終学歴 高校 普通科／職業・農業科	イエシヴァ* 小中学校	なし	計
ユダヤ人						
出生地						
イスラエル生まれ 計(%)	22.6	12.3	28.8	28.2	3.0	4.9 0.3 100.0
父もイスラエル	23.2	10.0	37.5	20.6	4.7	3.7 0.2 100.0
父がアジア/アフリカ	13.4	11.1	26.9	39.1	1.8	7.2 0.4 100.0
父が欧米	36.5	16.2	23.5	18.2	3.2	2.2 0.2 100.0
アジア・アフリカ	8.5	7.6	18.3	21.8	1.1	28.2 14.4 100.0
ヨーロッパ・アメリカ	34.0	15.9	19.1	13.8	1.6	14.5 1.1 100.0
ユダヤ人計	23.9	12.7	24.0	22.6	2.2	11.7 2.8 100.0
アラブ人他計						
男	11.2	8.4	32.1	8.9	-	35.5 3.8 100.0
女	7.6	10.1	32.8	2.7	-	35.0 11.6 100.0

注* ユダヤ教の宗教神学校

出典：Statistical Abstract of Israel 1998, 1998, p.22-14.

表4-2-7 職種とエスニック集団と移住時期との関連（1996年）

職種	アラブ人他	ユダヤ人								
		ヨーロッパ・アメリカ生まれ			アジア・アフリカ生まれ			イスラエル生まれ		
移住時期	全平均	1990以降	1989まで	計	1965以降	1964まで	計	父が欧米生	父が7・7生	父もイ 計
学術専門職	5.0	11.6	21.8	17.1	8.9	4.8	6.1	20.9	6.4	15.7 13.2
准専門・技術職	8.0	11.4	16.2	14.0	11.5	11.3	10.7	18.7	13.1	17.8 15.9
経営者	1.6	0.7	7.4	4.6	3.6	6.1	5.4	9.6	4.5	5.9 6.5
事務職	6.1	8.2	17.2	13.3	16.5	15.7	15.9	19.1	23.8	19.5 21.4
販売・サービス	13.7	16.0	13.7	14.6	23.2	21.6	21.9	14.8	20.0	19.8 18.2
熟練農業労働	2.6	0.9	1.4	1.2	2.0	1.8	1.9	2.5	1.8	3.7 2.4
工場・建設労働										
及その他の										
熟練労働	49.6	33.3	16.5	24.2	23.4	26.6	26.0	11.9	23.7	12.2
17.4										
未熟練労働	13.5	18.1	5.7	11.0	10.9	12.2	11.9	2.3	6.7	5.5 5.0
総計 (%)	100.0			100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	100.0 100.0
失業率 (%)	6.2	9.9	4.1	6.4	10.1	5.4	5.7	4.7	9.0	7.1
7.2										

↑
↑
(1974以前の移民)
↑
(1975以降の移民)

注) 総計は100.0%にはならないものも多いが、原資料のままの表記とした。

出典：Central Bureau of Statistics, Labour Force Surveys 1996, Jerusalem, 1998, pp.104-105.および、pp.226-227. から作成。

がえる。なお、「1990年以降のヨーロッパ・アメリカ生まれ」の欄については、1989年末以降急増しているロシアおよび東欧からの移民の多くがここに含まれており、大量の移民流入に労働市場が対応しきれないという特殊な事情を考慮してこの表を読むことが必要である。

以上、ここでは「ミズラヒム」の社会的格差に関わる幾つかの資料を検討したが、これでエスニシティと社会的格差の問題、特に「ミズラヒム」の社会的格差の問題を十分に論じているとはもちろん考えていない。「ミズラヒム」の社会的格差のその後の動向を全体的に把握するには、さらに多角的な資料と歴史的視点からの考察が必要である。しかしそれは本研究の中心的課題からそれてしまうので、ここでは大づかみな状況だけを指摘しておきたい。すなわち「ミズラヒム」に一定の中間層は確かに形成されつつあるとはいえ、全体としてみたときには依然として周辺に位置しているということである。また、「アラブ人ほか」のエスニック集団は、少数の例外をのぞきエリート層だけでなく中間層からも排除されていると思われることや、1990年以降のロシアや東欧からの新しい移民は厳しい就労環境にあることも指摘できよう。

3 現体制への異議申し立ての行方

イスラエルではエスニック集団が多様であるのに比して、エスニックな視点を前面にだした政治運動はそれほど多いわけではない。アラブ・イスラエル人の反イスラエル闘争を別にすれば、イスラエルの現体制への明確な「異議申し立て」という性格をもったエスニックな運動や社会現象はあまり存在しなかったのである。その点で1971年に起こったブラック・パンサーの運動は、こうした数少ないエスニック運動の例の一つである。本項ではまずこの運動の性格とその後の軌跡を以下で分析してみたい。

イスラエルのブラック・パンサーは、アメリカのブラック・パンサーの運動と関連があるわけではない。彼らは「人目を引くため」の政治的効果をねらってこの名前を選んだと言われている^{注207}。発端は^{注208} 1971年5月18日、エルサレムのスラム街に住む若い「ミズラヒム」（具体的には、モロッ

^{注207} Amos Elon, 'The Black Panthers of Israel', *The New York Times Magazine*, Sep. 12, 1971, p. 150. なお、ブラック・パンサーの運動の総括的な分析としては、次を参照。Erik Cohen, 'The Black Panthers and Israeli Society', in ed. by Ernest Krausz, *Studies of Israeli Society*, vol. 1, Transaction, Inc., New Jersey, 1980, pp. 147-163.

^{注208} 白杵は、これに先立ち、三月に街頭デモがあったことを指摘している。そのデモの発端として、当時のゴルダ・メイール首相が、前年末、ソ連からの新移民を歓迎するレセプションの席で、「イスラエル国家に忠実なユダヤ人はみなイディッシュ語を喋らなければならない。イディッシュ語を喋らないものはユダヤ人ではないからだ」と発言したことにあつたとしている。白杵陽、「差別からのドロップ・イン：イスラエルのモロッコ系ユダヤ人」栗原彬編『差別の社会学：共生の方へ』弘文堂、1997年b、119頁。

コ、アルジェリア、イラン系が中心であった) およそ三百人の街頭デモンストレーションという形で勃発し、彼らは政府に対し差別の撤廃や福祉助成金の増額などを要求した。彼らのこのようなエスニックな視点からの問題提起は、ミズラヒム・エスニック集団の社会的・経済的な不平等の是正を政府に迫るという意味を確かにもつものではあったが、「階級的」な視点が前面にあったわけではない。メンバーのなかには1967年におこった反アラブ暴動に参加した者もあり、またヘルート^{註209} 党の支持者が多かった^{註210} ということからみても、「右翼的」色彩の強いものとして出発したと考えることができる。たとえば、政府に対する彼らの要求のなかには、生活状況の改善の他に、犯罪歴のあるものも軍隊に入隊できるようにという要求も含まれている。イスラエルでは犯罪歴のあるものは徴兵の対象外であり、徴兵されない。そして、徴兵されないということは、「国民」ではないという含意をもつことになる。つまり、彼らが「平等な扱いを」というときの「平等」の意味は、社会・経済的な格差を解消して、住宅や教育や雇用などの面でアシュケナジム・イスラエル人との同等の水準を享受したいという意識や要求であると同時に、ユダヤ人として平等に「国民」であろうとする意識や要求でもあった。

このように、ブラック・パンサー運動の行為の主体は両義的な性格をそなえており、ある場合には階級的な性格が、ある場合には「右翼的」性格が前面にでてくることになる。そして、前者の性格が強調されまた他の政治的集団によってこの前者の側面が評価され共闘行動がとられていく場合には、それは文字どおりの階級的な政治勢力として機能したといえる。事実、1970年代後半に、DFPE^{註211} (平和と平等のための民主戦線=Democratic Front for Peace and Equality)という勢力と合流する動きをみせ、その意味では、彼らと同様、社会・経済的に不平等な扱いを受け「二級市民」の地位におかれているアラブ・イスラエル人と共闘しようとする方向づけが一度なされている。しかしその後この勢力がしりすばみになっていったということは、後者の性格が少なからず阻害要因となったということである。1992年の総選挙では、DFPEや共産党との共闘から分離したブラック・パンサーの指導者によってハ・ティクヴァ(希望)という運動が展開され選挙に臨んだが、0.08%の得票しか集めることができなかった^{註212}。ブラック・パンサーからハ・ティクヴァへのこの名前の変更は、エスニックなニュアンスを排除し、マイノリティの抱えているより一般的な問題と取り組もうとする意図を示すも

^{註209} 対アラブ・パレスチナ問題では「力による平和」ともいえる強硬政策をとってきたリクード連合内の最も大きな勢力。第九および第十代首相のメナヘム・ベギンは、ヘルート出身であった。

^{註210} Amos Elon, op.cit., p. 150.

^{註211} イスラエル共産党の分裂(1965年)後、アラブ人メンバーを中心とするラカハ(新共産党)の系列と、その他のアラブ独立グループおよびブラック・パンサーによって1977年に結成された。第十次国会(1981-1984)と第十一次国会(1984-1988)および第十二次国会(1988-1992)ではいずれも四議席を獲得している。1992年以降の総選挙ではイスラエル共産党との共闘はみられなかった。

^{註212} 表4-2-8 参照。

のであったが、このことは、イスラエルのユダヤ人社会全般からも、「ミズラヒム」のユダヤ人全般からも支持されなかったといえる。選挙キャンペーン中、イスラエルのユダヤ人社会からこの運動がうけた「評価」としては、「オリエンタル、テロリスト、アラブ、PLO、共産党、裏切り者」などであったからである^{註213}。

エスニックなアイデンティティに裏うちされてでてくる行為の主体というのは、原理的には、その国家にとっては分離主義的なアイデンティティであり、国家の統合という課題に対しては遠心的な作用を及ぼすものである。事実、エスニックなアイデンティティは、「イスラエルの社会統合という目標に対する分離主義的な背信行為として非難され、社会的正当性をもちえず、それ自体が目的として表出されることはなかった」^{註214}のである。ところが、イスラエルのブラック・パンサーの場合、出発点はエスニックな視点からの問題提起であったにもかかわらず、他方においては、徴兵を要求し、「国民」への参入を要求することで自らのエスニック上の不平等性を克服しようとする論理が展開することによって、このアイデンティティは国家にとって求心的な作用を及ぼすものに転化していく。言い換えれば、彼らの現状への「異議申し立て」は、一方では「反体制」的・「反政府」的なものとして、他方ではシオニズムを「補強」するものとして、その性格と行方が拡散し、有効な運動として結実しえなかったといえる。

また、集合行動としてのエスニック運動ではないが、1995年のラビン首相暗殺の行動と論理もこの文脈で解釈することが可能である。白杵は、筆者の文脈とは少し異なる意味であるが、ラビンを暗殺したイガール・アミールがイエメン系の出自であるという事実がイスラエルのマス・メディアでほとんど報道されなかったという「欠落」について、これを重視したいと述べている^{註215}。さらに彼は、アミールらの暗殺リストに、ラビンだけでなく、ラビン政権の連立内閣の重要なパートナーであったシャス党^{註216}党首や彼を陰で操るイラク出身の首席ラビも含まれていたことに注目している^{註217}。暗殺リストのこの「照準のあわせ方」に、白杵は「アミールが、『差別』される『オリエント』たるイエメン系の出自にこだわっている証左を見」、そのこだわりを「ミズラヒムへの差別構造に解消させるという戦略ではなく、ユダヤ教の論理において（傍点引用者）『反逆』の論理体系を求めた

^{註213} Hanna Herzog, 'Penetrating the System: The Politics of Collective Identities', in ed. by A. Arian and M. Shamir, *The Elections in Israel 1992*, State University of New York Press, Albany, 1995, p. 86.

^{註214} Ibid., p.85.

^{註215} それは、「ある事件の説明要因としてエスニックな出自を云々することは、『人種主義』的差別の土壌に乗った、既存の偏見を助長する議論として『公式』の言説から排除されなければならない」ということを意味するものであり、そこに「不可視の差別の現実」をみるからであると思われる。白杵陽、1998年a、255頁。

^{註216} アシュケナジムの超正統派宗教政党からミズラヒムが分離して形成された、非シオニスト超正統派宗教政党。

^{註217} 白杵陽、『同上書』、256-257頁。

こと」を重視する。つまり、「ユダヤ教のハラハー（ユダヤ宗教法）解釈の鉅脈にユダヤ教徒同胞の殺害を正当化する論理を掘り当て、なおかつそれをユダヤ教の名のもとに実行に移した」^{註218}と分析している。

この事件および「暗殺リスト」の内容は、イスラエルの「宗教勢力」や「ミズラヒム」というものを一般化して語ることの危険性を示している。そのことを自覚しつつも、本項の文脈でこの事件を読みかえるならば、これは一人のユダヤ教徒・ミズラヒムの、現存の政治的エスタブリッシュメントに対する異議申し立てであり、同時に現存の宗教エスタブリッシュメントに対する異議申し立てである。しかしその異議申し立ての行方にあるものは、より徹底したユダヤ教国家の追求であり、「シチズンシップの歪み」をさらに強めるものであることは間違いない。

それでは少し議論をもどして、「ミズラヒム」の「異議申し立て」が選挙における投票行動にどのようなあらわれているのかについてふれておきたい。イスラエルでは建国以来、国家の正当性を内外から問い直される状況が続いていることもあり、政治が日常性のなかに入り込み、政治に対する関心も一般に高いといえる。国会の総選挙を例にとると、第一回総選挙の86.9%を最高に毎回ほぼ80%の投票率があり、最低でも75.1%（1951年の第二回総選挙）である^{註219}。ちなみにこの投票率の高さは「アラブ・イスラエル人」についてもいえることであり、1949年から1992年の過去十三回の平均投票率は78.4%（最高は1955年の90%、最低は1981年の68%）であった^{註220}。

しかし、表4-2-8からもわかるように、イスラエルのエスニックな政党勢力は、国会選挙レベルでは従来小さな勢力にとどまっており、エスニックな政党を擁立し選挙に臨むという戦略は必ずしも成功してこなかった。エスニック集団の投票行動という点でこれまでのほぼ共通認識となっているのは、「ミズラヒム」がリクードの大きな票田であり、一方労働党の主な支持層はアシュケナジムであるということであった（ただし、いうまでもなくリクードが「ミズラヒム」のエスニック勢力として機能しているわけではない）。少なくとも1980年代末まではこの図式は成立しており、「ミズラヒム」の多くはエスニックな政党よりもリクードおよびその他の「右派」政党に自らの政治的アイデンティティを投影してきたといえる。このことは、リクードおよびその他の「右派」政党のタカ派的な外交政策が、第一に、ミズラヒム・エスニック集団のユダヤ人としての自己認識が屈折した形ででてきた「エスノセントリズム」や「対アラブ憎悪」と共鳴し、第二に、中東＝「われわれのもの」とい

^{註218} 白杵陽、『同上書』、257頁。

^{註219} *Statistical Abstract of Israel 1998*, p. 20-5.（頁表記は原書のママ）

^{註220} Majid Al-Haj, 'The Political Behavior of the Arabs in Israel in the 1992 Elections : Integration versus Segregation', in ed. by Asher Arian and Michal Shamir, *The Elections in Israel 1992*, State University of New York Press, Albany, 1995, p. 144.

うエスニックなアイデンティティへの誇りとも共鳴するものとなっているためであると考えられる。

表4-2-8 ユダヤ系エスニック政党と総選挙での各得票率

1949	イェム人連合	スファラディムと東洋社会			
	1%	3.5%			
1951	イェム人連合	スファラディムと東洋社会	忠実なイスラエル人		
	1.2%	1.8%	0.6%		
1955	イェム人連合	スファラディムと東洋社会	イェムの息子達	原宗教党	
	0.3%	0.8%	0.3%	0.3%	
1959	イェム人分派党	スファラディ民族党	北アフリカ移民連合	独立北アフリカ移民連合	スファラディムと東洋社会国民連合
	0.2%	0.3%	0.8%	0.1%	0.2%
1961	イェム人移民党	正義と友愛の党			
	0%	0.3%			
1965	若いイスラエル	友愛党			
	0.2%	0.9%			
1969	若いイスラエル				
	0.1%				
1973	イェム人党	ブラック・パンサーズ	ブルーホワイト・パンサーズ	社会的平等の為の運動	人民の運動
	0.2%	0.9%	0.4%	0.7%	0.5%
1977	イスラエルの家	労働者と近隣社会の連合	シオニスト・パンサーズ		
	0.5%	0.1%	0.1%		
1981	統一党	タミ 一つのイスラエル	テント運動	あなたの民族	
	0.07%	2.3%	0.19%	0.03%	0.02%
1984	シャス	タミ 若者と移民	インディアンズ	あなたの民族	
	3.1%	1.5%	0.3%	0.3%	0%
1988	シャス				
	4.7%				
1992	シャス	希望	民主主義と移民	年金者と移民	再生の為の運動
	4.9%	0.08%	0.4%	0.3%	0.05%
1996	シャス	移民党			
	8.7%	5.8%			
1999	シャス	移民党	新移民党	希望	
	13%	5.1%	2.6%	0.2%	

出典：Hanna Herzog, 'Penetrating the System: The Politics of Collective Identities', in ed. by Asher Arian and Michal Shamir, *The Elections in Israel 1992*, State University of New York Press, Albany, 1995, p.87.および、<http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>より作成。

しかし、近年のあらたな動向として、移民党やシャスなどの、エスニシティの要素を多分に内在させた政党が大躍進する傾向がみられる。また、ミズラヒム・エスニック集団の中からも、様々な「政治的エリート」が生まれてきていることにも注目すべきである^{#221}。このうち移民党は「移民」というキーワードのもとに新移民を旧移民と対比させて自覚化したロシア系のエスニック政党といえるが^{#222}、シャスは、先にも述べたように、「ミズラヒム」の宗教政党として1984年にアグダット・イスラエル党から分離した勢力によって形成されたという経緯がある。この党は第四節でも述べるように、総選挙のたびに票を伸ばし、1999年の総選挙では労働党、リクードに次いで第三党となり、17議席を獲得した。この点では、「ミズラヒム」の政治的意志決定への一定の影響力という意味で、この五十年間に質的な変化が生まれてきていることは確かである。つまり、自らが「現政権」に一部参入する形で「異議申し立て」を展開している。ただしこの「異議申し立て」もまた、「シチズンシップの歪み」を是正する主体ではなく、イスラエル国家の「ユダヤ人国家」としての性格をより補強し、強化するものとして作用しているとみることができる。

以上みてきたように、「ミズラヒム」というエスニシティの要素は、イスラエルの中にあっては、国家統合に対する分離主義的作用を必ずしももたらさない。それはまず第一に、「われわれ：ミズラヒム」vs「他者：アシュケナジム」という自己／他者認識以上に、「われわれ：ユダヤ人」vs「他者：非ユダヤ人＝アラブ人」という自己／他者認識が強固に存在していることに依るものである。ここで重要であるのは、前者の他者認識は、「アシュケナジム」によって付与された、言い換えればバルトのいう「外側」から押し付けられた境界^{#223}の裏返しという関係にある点である。「ミズラヒム」が「アシュケナジム」を「われわれ」とは区別し「他者」として認識するのは、「アシュケナジム」の視線が自らへ投影されているからでもあり、その区別の根拠は、事実として存在する彼等との格差、ヒエラーキーにおける「周辺」という現実、文化的相違などである。その文化的相違の中には、「アシュケナジム」移民に対するほとんど唯一の優越感である、自らの地理的出自・宗教的正統

^{#221} たとえば、リクードの若手リーダーとしては、イラン生まれのモシェ・カツァヴ（1984-88年の労働大臣、1988-92年の運輸大臣）、モロッコ生まれのデイヴィド・マゲン、イラク生まれのオヴァディア・エリ、労働党では、モロッコ生まれのエリ・ダヤン（アシュケロン市長のち国会議員）、アミール・ペレズ（スデロット市長のち国会議員）、シャス党のリーダーであるモロッコ生まれのアリエ・デリ（1988-92年の内務大臣）など。

^{#222} ただし、1999年5月に実施された第15回総選挙では、移民党の候補者名簿にエチオピア移民があがったのが注目される。Jerusalem Post ホームページ、<http://www.jpost.co.il/>。しかし、移民党の候補者名簿の上位十人の内、エチオピア移民は、八番目（シュロモ・ムラ）と十番目（アヴィ・ピタウ）の二名であり、比例代表制による移民党の議席は六名であったため、エチオピア移民は結果的には落選している。

^{#223} F.バルト、「エスニック集団の境界」、青柳まちこ編、『「エスニック」とは何か』、新泉社、1996年。25頁。（Frederik Barth, *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Differences*, Little Brown and Company, Boston, 1969.）

性への誇りも含まれる。

しかし第二に、「ミズラヒム」は「ユダヤ的伝統」の正統な継承者としての自信を携えて、「他者」である「アシュケナジム」の側に入りこもうとすることによって、言い換えれば、「他者」である「アシュケナジム」を「われわれ」の側に引き込むことによって、「境界」そのものの消滅を求めているといえる。さらに、この認識が後者の「他者」認識と連続した関係にあることも重要である。なぜならば、かれらはユダヤ・イスラエル人であることを強調することによって（非ユダヤ系イスラエル人との共通性を切り捨てることによって）この「境界」の消滅をはかろうとするからである。こうして、アラブ・イスラエル人やパレスチナ人との階層的な共通性や文化的・歴史的な共通点への視点は否定されるべきものとなり、後方に退いてしまうことになる。

第三節 社会・民族教育と国家による記憶のコントロール

はじめに

イスラエルの政治文化をつくりだし補強する上で大きな役割をはたしているものとして、イスラエルにおける社会科教育および民族教育のありかたについても見ておく必要がある。これまで、イスラエル教育省は「ユダヤ人意識」をもたせるための積極的介入をおこなってきた。それは、一言で言えば「迫害史観」に基づく歴史教育と国家による記憶のコントロールということができる。以下では、学校での社会科教育のありかたやその教材、カリキュラムなどについて具体的に検討してみよう。

1 学校教育の種類とカリキュラムの特徴

まず、イスラエルでは児童はどのような学校に通っているのだろうか。学校のタイプ別に、それぞれの児童数を1995/96年の統計資料からみると、表4-3-1からわかるように、小学校では普通学級の（障害児のための特殊学級を除く）当該年齢児童の67.5%が教育省の指導監督下にある世俗的小学校の生徒、21.4%が教育省の指導監督下にある宗教的小学校の生徒、11.2%が教育省の指導監督から独立した宗教的小学校の生徒である。合計すると三割をこえる生徒がいわゆる宗教的学校で初等教育を受けていることがわかる。このことは、後に指摘するカリキュラムの配分の特徴とあわせて、民族・宗教教育の政治文化への大きな影響をうかがわせるものである。中学校、および高等学校では、世俗の学校の生徒の比率は小学校より多少多いものの、ここでも二割から三割近い生徒が宗教的学校

に通っており、イスラエルの学校制度の特徴をみることができる。そして近年の傾向として、教育省の監督外にある宗教的小学校の生徒の伸びが目だつことが指摘できる^{註224}。

次に、イスラエルの小学校における各教科ごとの時間割配分をみてみることにしたい。教育省の指導監督下にあるイスラエルの学校教育のカリキュラムは、世俗的ユダヤ人学校、宗教的ユダヤ人学校、アラブ人およびドルーズ人学校^{註225}の三つのタイプに応じて、小学校教育の6年間の時間割配分は表4-3-2のように定められている。上記でみたように、教育省の指導監督から独立したカリキュラムをしいている宗教学校（タルムード・トラール小学校、中・高等イエシヴァ学校）や、徒弟制の職業学校、東エルサレムのUNRWA^{註226}の学校なども存在するが、ここでは比較の対象には入っていない。

表4-3-1 ユダヤ系イスラエル人の学校のタイプ別にみた生徒数および学校の割合

小学校		
教育省の指導監督下にある世俗的小学校数	58.2%	
同生徒数		67.5%
教育省の指導監督下にある宗教的小学校数	27.2%	
同生徒数		21.4%
教育省の指導監督から独立した宗教的小学校数	14.6%	
同生徒数		11.2%
計	100%	100%
中学校		
教育省の指導監督下にある世俗的中学校数	66.9%	
同生徒数		82.1%
教育省の指導監督下にある宗教的中学校数	31.7%	
同生徒数		17.2%
教育省の指導監督から独立した宗教的中学校数	1.4%	
同生徒数		0.7%
計	100%	100%
高等学校		
教育省の指導監督下にある世俗の高等学校数	50.8%	
同生徒数		73.5%
教育省の指導監督下にある宗教の高等学校数	28.3%	
同生徒数		18.2%
教育省の指導監督から独立した宗教の高等学校数	20.9%	
同生徒数		8.3%
計	100%	100%

出典：Ministry of Education, Culture and Sport, *Educational Institutions: Kindergartens, Primary and Secondary Schools 1955/96*, Central Bureau of Statistics, Jerusalem, 1997, pp.52-53.

^{註224} 教育省の資料による1980年と1995年の比較では、ユダヤ系の初等教育と中等教育の学校のタイプ別生徒数の割合の変化は以下のようなものである。教育省監督下の世俗的小学校生徒数が、74.2%→68.4%へ、同宗教的小学校生徒数が、20.1%→21.3%へ、同省監督外の宗教的小学校生徒数が、5.7→10.3%、同省監督下の世俗の中・高校生徒数が、74.4%→76.8%へ、同宗教的中・高校生徒数が、22.5%→18.0%へ、同省監督外の宗教的中・高校生徒数が、3.1→5.2%へ。Ministry of Education Culture & Sport, *OWL-Internet&Educational Information*, http://owl.education.gov.il/english/ind_less.htm

^{註225} ドルーズ人の地方（主としてゴラン・ハイツ）の学校には、ドルーズでない生徒も存在し、また、ドルーズの生徒はアラブ教育機関の他の学校で勉強することもある。Ministry of Education, Culture and Sport, *Educational Institutions: Kindergartens, Primary and Secondary Schools 1955/96*, Central Bureau of Statistics, 1997, p.12.

^{註226} 国連難民救済事業機関

表4-3-2 小学校時間割配分

ユダヤ人小学校（世俗的）		ユダヤ人小学校（宗教的）		アラブ人小学校		ドルーズ小学校	
語学（国語）	20%	ユダヤ研究	40%	語学	20%	30%	
算数	15%	国語・算数・外国語	30%	算数	15%	15%	
ユダヤ研究	10%	社会（歴史・公民）	10%	伝統	10%	5%	
人文・社会	10%	体育・芸術・音楽	10%	人文・社会	10%	10%	
理科・技術	10%	理科・コンピュータ	10%	理科・技術	10%	10%	
芸術	10%			芸術	10%	10%	
体育	5%			体育	5%	5%	
自由選択	20%			自由選択	20%	15%	
合計	100%	合計	100%	合計	100%	100%	

出典：Dalia Sprinzak (et al.), *Facts and Data*, The ministry of education and Culture, Jerusalem, 1998, pp.16-17.

こうした時間の配分が、国際比較をした場合どのような特徴が抽出できるかということは、興味深い問題である。ここでは、資料として得られた日本の小学校の時間割との比較を行ってみるが、その数字は表4-3-3の通りである。

表4-3-3 日本の小学校の時間割配分

学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	第六学年	全学年計	総授業時間に占める (%)
教科								
国語	306	315	280	280	210	210	1601	27.7%
社会	/	/	105	105	105	105	420	7.3%
算数	136	175	175	175	175	175	1011	17.5%
理科	/	/	105	105	105	105	420	7.3%
生活	102	105	/	/	/	/	207	3.6%
音楽	68	70	70	70	70	70	418	7.2%
図画工作	68	70	70	70	70	70	418	7.2%
家庭	/	/	/	/	70	70	140	2.4%
体育	102	105	105	105	105	105	627	10.8%
道徳	34	35	35	35	35	35	209	3.6%
特別活動	34	35	35	70	70	70	314	5.4%
総授業時間	850	910	980	1015	1015	1015	5785	100 %

出典：「学校教育法施行規則-第24条の二」法務大臣官房司法法制調査部編『現行日本法規：教育（1）』第36巻、帝国地方行政学会発行、1989年改訂版。304-305頁より作成。

表4-3-2と表4-3-3を比較してみると、各教科に細かい差異はあるにしても、時間割配分の順位とその割合は、イスラエルの世俗的ユダヤ人の小学校、アラブ人の小学校、日本の小学校はおおむね類似

しているといえる。ただ、イスラエルの小学校の場合、日本の小学校には存在しない「民族教育」（ユダヤ人の学校の「ユダヤ研究」、アラブ人およびドルーズ人の学校では「伝統教育」）があり、世俗的小学校では10%（アラブ人、ドルーズ人の学校ではそれぞれ10%、5%）を占めること、学校ごとの裁量で決められる「自由枠」が20%（ドルーズ人の学校は15%）あることである。そしてこの「民族教育」の比率は、宗教的ユダヤ人学校では、40%にのぼり、「自由枠」が代わりになくなっていく。また、日本の小学校では、イスラエルの小学校にはない「家庭科」という教科の存在と、「体育」の時間割配分の多さが特徴といえる。また、イスラエルの三つの学校のタイプ別の児童数は表4-3-1にみた通りであるが、宗教的ユダヤ人学校に通う児童数が、小学校で約3割強、中学校で約2割、高校では26.5%を占めていることにあらためて注目すべきである。

次に、中学校における同様の教科別の週あたり学習時間を学校のタイプ別に比較すると表4-3-4から表4-3-5のようになる。ここでも、宗教的ユダヤ人学校の「民族教育」の比重が突出して高い。これに対し、世俗的ユダヤ人学校はいわゆる社会系の教科が比較的時間配分が高いといえる。一方、アラブ人学校とドルーズ人学校は、ヘブライ語を含む言語教科の比重が高く、「民族教育」の比重が低いことが特徴といえよう。日本の中学校の時間配分と比較すると、小学校との比較で指摘できたことが中学校についてもいえることに加えて、日本の中学校には「第二外国語」の教科が（選択教科として採用している一部の中学校は別として）ないこと、「理科」系の教科の割合が低いことが特徴となっている。こうしてみると、初等・中等教育におけるこうした時間割配分のあり方に、民族教育や宗教教育を通してユダヤ人アイデンティティの形成を重視しようとするイスラエルの教育の特徴が反映されている。

表4-3-4 イスラエルの中学校の週あたり時間割配分

ユダヤ人中学校（世俗的）		（宗教的）	アラブ人／ドルーズ人学校	
国語	12	11	アラビア語	16
英語	11	11	英語	12
アラビア語又は仏語	9	9	ヘブライ語	12
数学	14	14	数学	14
理科・技術	18	18	理科・技術	18
ユダヤ研究	14	24-26	アラブ文化又はイスラム又はキリスト教又はドルーズの遺産	7
歴史・地理・人文学	16	12	歴史・地理・人文学	16
芸術	4	3	芸術	4
教育・公民	7	7	教育・公民	6
体育	6	3-5	体育	6
合計*	111	111	合計	111

*) 原資料では、これは週あたりの「時間数」として表記されているが、これは、時間割配分の「割合」の数字として理解すべきであると思われる。また、合計が、100（％）をこえているのは、どの教科に振り替えてもよい、特定の教科に限定しない時間が設けられていることによる。また、週十時間以上ある教科は、週一時間に限り、他の教科に変更することができる。

出典：Dalia Sprinzak (et al.), *Facts and Data*, The ministry of education and Culture, Jerusalem, 1998, pp.19-20.

表4-3-5 日本の中学校の時間割配分

学年	第一学年	第二学年	第三学年	全学年計	総授業時間に 占める（％）
教科					
国語	175	140	140	455	14.4％
社会	140	140	70-105	350-385	11.1-12.2％
数学	105	140	140	385	12.2％
理科	105	105	105-140	315-350	10.0-11.1％
音楽	70	35-70	35	140-175	4.4-5.6％
保健体育	105	105	105-140	315-350	10.0-11.1％
技術・家庭	70	70	70-105	210-245	6.7-7.8％
道徳	35	35	35	105	3.3％
特別活動	35-70	35-70	35-70	105-210	3.3-6.7％
選択	105-140	105-210	140-280	350-630	11.1-20％
総授業時間	1050	1050	1050	3150	

出典：「学校教育法施行規則-第54条」法務大臣官房司法法制調査部編『現行日本法規：教育（1）』第36巻、帝国地方行政学会発行、1989年改訂版。306-307頁より作成。

2 教科書の記述にみられるイスラエル教育の特徴

イスラエルでは、教育省の監督下にある初等／中等教育機関は、当該省の作成した教科書かその推薦をうけた教科書を用いることが求められている。イスラエルでの教育関係者からのききとりによると、イスラエルの教科書制度は「認定制度」（教育省が教科書の内容を審査し、それを通ったものは教科書推薦リストに公表され、各学校はその中から採択する）に最も近いものであると考えられる。しかし、これは法的な義務事項ではなく、理論的にはそのリストに載っていないものも教科書として使用できるが、現実には、教育省の指導管轄下にある学校のほとんどが教育省の推薦リストにある教科書を採用している。また教科にもよるが、編者や著者は審査に通るように内容について自主規制をしているのが現状である。

本項では、こうした教科書の内容を検討するが、多岐にわたる全ての教科書を検討することは本研究の範囲を越えている。そこで、議論の文脈との関係から、教育省の監督下にあるユダヤ系の小・中

学校の社会科系科目の教科書の一部に限定してその内容を検討することにしたい。社会科系の教科書は他にも存在するが、エルサレムにある教科書販売取扱店において、いままでの議論に関わりが深いと思われるもののみを入手している。このため、選んだものが偶然的要素によることも否めず、網羅的でないことは自覚しているが、本研究の分析にとって一定の有効性をもつ資料であると思われる。用いた教科書は学年順に、(1) 第三学年『壁からの脱出』1976年(宗教学校用)、(2) 第三学年『壁からの脱出』1976年(世俗的学校用)、(3) 第四学年『私たちとその隣人達』1989年(世俗的学校用)、(4) 第四学年『私達のまちエルサレム』1993年(世俗のおよび宗教学校用)、(5) 第四学年『最初の入植への旅』1992年(世俗のおよび宗教的学校用)、(6) 第四学年『キブツへの旅』1981年、(世俗のおよび宗教的学校用)、(7) 第五学年『祖国』上1997年、(8) 第六学年『祖国』下1998年、(9) 第六学年『イスラエル国家におけるユダヤ人とアラブ人』1988年(世俗的学校用)、(10) 第七／八学年『イスラエルの民主主義への旅：シチズンシップ』1994年(世俗のおよび宗教的学校用)、(11) 第八／九学年『保守主義から進歩へ』1998年(世俗的学校用)である。教科書によって出版年に二十年近い開きがあるが、(6)の教科書を除いて他は全て1998年—1999年度用教科書として販売されたものである。また、発行元は、(1)、(2)、(4)、(5)、(6)、(10)、(11)は教育省、(3)と(9)はヴァン・リール・エルサレム研究所と教育省の共同出版、(7)と(8)はイスラエル教育テレビ局と教育省の共同出版となっている。

これらの教科書は、日本の教科と対比させるならば、それぞれ「社会」「歴史」「公民」「地理」などに対応しているが、イスラエルの場合、全体を通してそのタイトルが個別具体的につけられている点が興味深い。分析をおこなううえで注目したいのは、1) イスラエルのアラブ人やアラブ社会はどのように描かれているか(その言及の有無も含めて)、2) イスラエル建国はどのように描かれているか、3) シチズンシップはどのように教えられているか、4) 歴史教育の重点はどこにおかれているか、またその内容の特徴、5) その他のイスラエルの社会科教育内容の特徴である。

①「アラブ人」とアラブ社会に対する言説

まず、(3)の教科書は、「アラブ人」を大きく取り扱っているが、それはこの編集に関わったヴァン・リール・エルサレム研究所が「ユダヤ人とアラブ人の共存」という問題意識を持って教科書編纂をしている研究所であることが関係していると思われる。ここでの「隣人」は必ずしも「アラブ人」に限定した意味ではなく、「地域社会(近所)の人」ということも含んだ意味で内容が組まれているが、「隣人」の中心概念がイスラエルのアラブ人であることは明確である。内容構成をみると、簡単な挨拶をヘブライ語とアラビア語で対比させたものや、それぞれの字体を「美しい文字」として

古文書や建築物での用いられ方を示す写真入りで紹介したもの、お互いの習慣・暮らし・祝祭日などの紹介など「価値自由的」な記述であるものもあるが、偏見の是正教育を特に意識したと思われるものもある。

その中の一章である第四章は物語り風になっており、内容は以下の様なものである。主人公のユダヤ人の少年—アヴィーが交通事故で意識不明になり、キリスト教系の病院に入院する。同室の病室にはすでにキリスト教徒のアラブ人少年—エリ阿斯—とイスラム教徒のアラブ人少年—ウダ—の二人が入院しており、彼らは退院間近である。アヴィーの意識が戻るまで彼らは親切に世話をし、やがて少年の意識がもどり三人は友達になる。そこへアヴィーの母親がやってきて、同室の少年達がアラブ人であることを知り、部屋をかえるように看護婦に申し入れるが逆にその偏見のある考えをたしなめられ、また病院の医師もアラブ人であることをつけられる。一方アヴィーは、自分達は良い友達であること、エリ阿斯とウダが親身に世話をしてくれたこと、部屋を移りたくないことを主張し、母親は息子の意を理解し沈黙する。やがて話題はクリスマスやハヌカ^{註27}などのそれぞれの祝祭日のことになり、アヴィーはハヌカのパーティを病室でやろうと提案する。母親は当惑しエリ阿斯とウダの反応をうかがう。アヴィーのやや強引な誘いにのせられ、エリ阿斯とウダも賛成し、また彼らもアヴィーが退院したらクリスマスやイード・アルアドハー^{註28}のパーティに招待したいといい出す。話が盛り上がっているところへ、ウダの両親、エリ阿斯の両親、アヴィーの父親も見舞いに現われ、一同はうちとけて会話をはずませる。そして次の日、病院の理解もえられ盛大なハヌカのパーティがウダやエリ阿斯の家族らも交えてその病室で行なわれ、次はエリ阿斯とウダの家に招待し、されることを約束しあう。三人の少年はその後もお互いの退院まで友情を育む。アヴィーは二人が退院した後彼らから受けた親切を忘れず、新しく入院してきた少年に同じように親身に世話をする。そして、彼らとの友情をずっと大切にしよう^{註29}と心に誓う。

小学校四年生の視点でこの物語りを素直によむならば、「アラブ人」の隣人の世界への興味と友好をさそう内容であり、またそれが著者や編者の意図であることが十分に理解できる。また、すでに指摘したように、イスラエルの中で「ユダヤ人」と「アラブ人」は大人も子供も日常的な交流をほとんどもたずに生活していることを考えると、この教材の内容は例外的であり、現実的事例とは言い難いともいえるが、とにかく様々な隣人の存在を認識させ、対自／対他認識を見つめさせようとする問題提起、およびこうした教材の存在そのものは大いに評価しなければならない。

^{註27} ユダヤ教の祝祭日。

^{註28} イスラム教の、「犠牲祭」の祝祭日。

^{註29} Van Leer Jerusalem Institute & Ministry of Education, *Anachnu u-Shcheneinu (We and Our Neighbors)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1989, pp.42-56.

そういう評価を別にして、この教材で注目したいのは以下の点である。まず、アラブ人の少年は二人ともヘブライ語が話せるのに対し、ユダヤ人の少年アヴィはアラビア語が話せない人物として描かれ、アラブ人少年エリアスは全員が理解できるようにとヘブライ語で話すことを提案していること、それに対しアヴィは、「アラビア語を話せないことをとても残念に思い、自分の知っているアラブ人はたいてい少しはヘブライ語が話せるのに、自分や友人や自分の知っているユダヤ人はほとんどアラビア語がわからないことに気がつく」という場面である^{註230}。また、アヴィの母親はウダの祖父がアラブ人の服装と頭巾でお見舞に現われるまでは、同室の少年達がアラブ人であることには気がついていない。事実がわかると、とたんに相手に対する印象をかえる偏見の持ち主として描かれている。そして彼女が部屋の移動を要求して看護婦に言う言葉は「彼ら（エリアスとウダ）は、アヴィに何をするかわかったもんじゃない。」というせりふである^{註231}。一方ウダの父親は、偏見のない人物として描かれ、職業は教師でヘブライ語も教えているという設定になっている。そして彼の家でこの父親がよく言っていることとして次のような文がでてくる。「この国には、様々な民族や宗教の人々がいる。だから一緒に暮らすことができるためには、お互いに知り合う必要があるし、お互いに話しができるように言葉を身につけなければ。」^{註232} また、「ハヌカのパーティでの歌を、アラブ人の家族の子供達もテレビ番組を通して知っていることにアヴィは気がつく」という設定も興味深い。

物語りの内容と上記の点をあわせると、ここに描かれているアラブ人は、危険なテロリストや信用できない「かれら」ではなく、親切で、やさしく、偏見をもたない人々であり、ヘブライ語やユダヤ教の文化にも理解のある人々である。さらには、キリスト教系の病院の病室の中で、ハヌカのパーティを盛大にやろうという「無邪気で無神経」ともいえる提案にも、快く応じる寛容さを持ってもらえる。対照的に、ユダヤ人の大人は、アラブ人を信用できない「かれら」としてとらえており、アラブ人への不信感と偏見にとらわれた人物描写になっているが、この点に関してはイスラエルの現実の状況を反映しているといつてよい。ただ、この物語りではそれが母親ということになっているが現実にはそこに性別の違いはないと思われる。いずれにせよ、ここで描かれているアラブ人をアラブ人像の一つのモデルとみるならば、それは、ユダヤ人の社会に進んで歩み寄ってくる、イスラエルにとって都合の良い人物像になっているともいえる。

(9) のテキストは同じ出版社によるものであるが、(3) の編集方針はここでも共通してみられ、ユダヤ人とアラブ人の相互理解の重要性を強調している。お互いに知り合うこと、実際に訪れて出会

^{註230} Ibid., pp.46-47.

^{註231} Ibid., p.50.

^{註232} Ibid., p.47.

い、個人的な関係をもつことの意義を繰り返し説いている。内容的には、「地理」の教科に該当すると思われるもの、たとえばそれぞれの町や村の集落の形態や特徴、それぞれの宗教の特徴などを記述的に比較描写したものも含まれる。ちなみにアラブの村の特徴としてあげられているのは、次のような点である。1) 伝統的村の中心にはたいがいモスクや教会があること、2) 家は密集して建てられていること、3) 親族が一緒に住む形態がみられること、4) 農地は息子の中で細分され（相続される）こと、5) 住民の職業はかつては農業が多かったが、今日では製造業、サービス業、建設業、流通などの部門が多いこと、6) 建築様式や建築材料が変化してきたこと、7) イスラエルの建国後、村がその周辺に拡大してきたことなどである^{註233}。また、宗教の説明の箇所では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教についての基本的な知識や、祝祭日とその行事などについて述べられている。他の章では、人々の仕事（職業）の構成と時代による変化、生活様式の変化、地域公共サービスは双方の住民にとって共通関心であることなどが、図、写真、グラフなどで比較されながら説明されている。これらの内容のなかで、特に注目したいのは以下の三点である。

まず、1954年から1986年の産業部門別の就労者を示すグラフが提示された後に、「ユダヤ人とアラブ人の就労者の間で、農業部門に最も変化がみられる（農業就労者の割合が大きく減少している）のはなぜか」という設問がある^{註234}。これは、そのグラフの後に提起された八つの設問のなかでは最も掘り下げる可能性をもった設問項目といえる。そしてその次の頁には、その変化の原因を解説した文があり、九つの要因が述べられている。その内の七つは、機械化による効率性の上昇、収益性、工業化の進展、若者の農村離れなどの一般的な理由であるが、七番目と八番目にイスラエル政府の関与に触れた次のような文がある。「⑦政府や地方自治体は、公共の必要性のために農地の一部を徴用することができる。市民は、別の土地か補償金をかわりにうけとる。この法律によって、土地が徴用され、そこに国家や公共の必要のために変更が加えられた。たとえば、工場の建設、宅地造成、道路の建設、公園の準備などである。こうしてイスラエルでは、ユダヤ人にもアラブ人にも、農業に従事する人々の数が減少するという状況が生まれた。⑧アラブ人に属していた土地の一部は、様々な目的のために、政府によって徴用された。」^{註235} 不十分ながらもこうした指摘がなされていることに対しては一定の評価ができる。しかし、「公共性」の目的の下にある政治的・軍事的戦略上の意図には触れられず、またすでに第二章で指摘したような、法律の巧みな組み合わせによってこの「徴用」が実施された経緯にも触れられていない。その点で、徹底度を欠いたものになっている。

^{註233} Van Leer Jerusalem Institute & Ministry of Education and Culture, *Yehudim va- Arabim bi-Medinat Yisrael (Jews and Arabs in the State of Israel)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1988, pp.22-24.

^{註234} Ibid., p.34.

^{註235} Ibid., p.35.

次に、生活様式やフォークロアとその変遷を扱った章で、ユダヤ人とアラブ人の服装に関する幾つかの設問がだされている。「かつては、ユダヤ人とアラブ人の服装（衣装）の違いは、大きかった／小さかった」、「今は、多くのユダヤ人やアラブ人の服装は、伝統的である／近代的である」などの文があって、設問はどちらかの答えを消すというものである^{註236}。現在と過去を比較した同様の設問が六つあげられているが、この「かつて」をいつまでさかのぼるかによって設問の意味も答えも違ってくる。ここでは、時間が特に限定されないあいまいな「かつて」という表現のために、古代まで無限にさかのぼる想像力をかきたて、結果として「古代のユダヤ人」と今日の自分自身との連続性や一体感を暗示することにもなる。また「ユダヤ人」や「アラブ人」も、どここのどのような人々をみるかによって、実は答えは多様なはずである。たとえば、今日エルサレムの町でみる「ユダヤ人」の服装も「アラブ人」の服装も実に様々である。暑い太陽の日差しのなかで、黒のシルクハットをかぶり黒の上下の礼服を着ている、一見して正統派ユダヤ教徒とわかる「ユダヤ人」、同じ様な黒の洋服でも下のズボンが六部長けのボタン付きで、平べったい毛先の長い帽子をかぶった「ユダヤ人」、タンクトップのシャツにGパンをはいた「ユダヤ人」、長けの長い清潔で質素なワンピースをきた正統派ユダヤ教徒の「ユダヤ人」、半パンとTシャツにサンダル履きの「ユダヤ人」、革靴と背広をきた「ユダヤ人」、色柄のキパを頭につけた「ユダヤ人」、「頭巾」をかぶった「アラブ人」、「スカーフ」をかぶりスカートをはいた「アラブ人」、「スカーフ」をかぶり胸に刺繍のあるワンピースをきた「アラブ人」、TシャツをきてGパンをはいている「アラブ人」、・・・これらは、視覚的に捉えられる多様性のほんの一端である。そしてこうしたそれぞれの服装に、各人の「文化」（ライフ・スタイル、信仰、生き方の流儀）が表れている。それは、「ユダヤ人」、「アラブ人」という二つの分類で分けられるものでもなければ、伝統的／近代的という分類で二分できるものでもない。設問の流れからすると、近代化によって双方の相違点が小さくなり、似通ってきた、と答えるように誘導されているようにも思えるが、この設問は、服装文化のなかに実は存在している（してきた）「ユダヤ人」のなかの多様性と「アラブ人」のなかの多様性に対して、全く無自覚である。

このテキストで最も注目すべきなのは、野外の体験学習が盛り込まれていることである。これは(3)のテキストでもみられた特徴である。すなわち、実際にアラブの村を訪れそこで人々と会い、その後教室でその体験をもとに感想を述べあうことが想定されている。(9)のテキストでは、同学年の子供と会うことを特に勧めている。そして例として、訪問前と後とでの感じ方のちがいを、学んだこと、驚いたこと、もっと知りたかったこと、大変だったこと、楽しかったことなどの観点が示唆さ

^{註236} Ibid., p.59.

れている^{註237}。このことは、これからの世代のイスラエルの社会意識を作り上げる上で、なかでも、民族的な他者認識が寛容さを備えたものとして構築されるための第一歩につながる、貴重な試みである。

(3) や (9) のテキストは、「二つの民族の共生」という問題意識をもち、アラブ人とユダヤ人の双方から著者が構成されているが、これはイスラエルでは例外的な実験であるといえる。そして確かにすでに指摘したような幾つかの注目すべき点もみられるのであるが、アラブ人やアラブ社会に対する言説は、概して記述的、静態的、「脱政治的」であり、食い込みが足りないという感が否めない。編集者や著者たちが「相互理解の重要性」を強調する際のその問題意識の奥にあるものが、実際のテキストの文からはほとんど見えてこないのが惜しまれる。

また、(3) のテキストでアヴィが「エリアスとウダはヘブライ語を知っているのに自分はアラビア語を知らない」ことを自覚する場面は重要なポイントであるが、この非対照的な関係がなぜ存在するのかという問いを同時に問題にしないかぎり、「隣人」との関係を本質的に問題にしたことにはならない。その意味で、こうした教材を使う教師の力量と、イスラエル建国史のなかに「アラブ人」という隣人との関係を位置づける視点が問われるといえる。

そこで次に、イスラエル建国が教科書のなかでどのように描かれているかをみてみたい。

②歴史教育のなかでのイスラエル建国の位置づけ

(6)は1980年代に小学校4年生の歴史教育で使われていた教科書であるが、その内容をみてみると、それは、ロシアのユダヤ人街に生活していた少年がある日パレスチナへ入植地建設のために移住することを決意する話で始まり、移住後キブツを建設しイスラエルの建国の基礎をつくったことが、当時の新聞記事や「開拓」初期の写真入りで「イスラエル建国物語」として語られる内容になっている。そのなかで、たとえばパレスチナという土地に対する認識として次のような文が載っている。

「・・・パレスチナへの入植を希望するユダヤ人は皆、トルコ政府から証明書をもらわなければなりませんでした。しかしやがて、ヘルツェルによる秘密の様々な交渉が実を結んだ暁には、エレット・イスラエルをユダヤ人に取り戻しユダヤ人の国をつくることに、そしてトルコや世界の他の国々から承認を与えることに成功するだろうと父は信じていました。・・・^{註238}」この「取り戻す」という感覚こそが、第二章と第三章でみた、パレスチナ人の居住権を脅かす法律を国家がつくり人々はそれを当然のこととして受容してしまう構造を支えているものである。

^{註237} Ibid., p.71.

^{註238} Ministry of Education and Culture, *ha-Masa el ha-Kibbutz (Journey to the Kibbutz)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1981, P.20.

この教科書はその後改訂され(5) が今日使われている。内容は変更されたとはいえ、このテキストの基本的コンセプトは変わってはいない。全体の構成は、ハンガリーとロシアに住む少女がそれぞれの家族と共にパレスチナに移住し、土地を買い、モシャブでの入植を始め、そのなかで繰り広げられる生活の様子が回想記としてつづられている。この設定は、第一章で述べた労働シオニズムのイデオロギーを体現したものであるといえよう。そこには、なれない農業に苦勞しながらも、その生活に意義と喜びをみだし懸命に働く人々、家族の絆、厳しい自然条件、最後には弟をマラリアで失うという悲しみも描かれる。ハンガリー人であった少女がなぜパレスチナに渡るのかというのは、イスラエル建国とのかかわりで重要なポイントであるが、その言説は次のようである。

ある日(主人公の)少女(ミラ)が、ハンガリーの子供たちが旗をふり歌をうたってパレード行進している光景に出会う。少女は高揚した気持ちになって「お父さん、私も旗がほしい！」とせがむが、父親はそれに対してこう答える。「何をいってるの？ミラ。おまえはああい旗がほしいの？・・あの子たちはハンガリーの旗をふってるのがわからないの？・・ハンガリーはかれらの国なんだ。ハンガリーはわれわれの国じゃない。われわれの国はエレッツ・イスラエル(イスラエルの地)だ・・」次に少女はこういう。「・・旗がだめなら、あの子たちと一緒に歌いたい。」すると父親は、「今日は一体どうしたんだい？あの子たちはハンガリーの川の歌を歌っているのが聞えないの？ハンガリーはかれらの国でわれわれの国じゃないとさっきいったはずだ。ハンガリーの歌はわれわれの歌じゃない。われわれの歌はわれわれの国の歌、エレッツ・イスラエルの歌なんだよ・・」会話はさらに「じゃあ、いつ私たちの歌をうたうの？」「もうすぐだよ、ミラ。エレッツ・イスラエルに行ったらね。」と続く。そして移住に消極的な少女の母親にむかって、父親は次のように心情を語る。「私たちは、いままでずっと『来年はエルサレムで』とお祈りをしてきたね？この神との約束を実行するときにきたんだ。ハンガリーを去って、エレッツ・イスラエルに行こう・・」^{注239}

この少女の家族は特に宗教的な家族として描かれている訳ではないので、父親のこの意識は世俗的ユダヤ人のそれとして考えてよい。「ユダヤ人はユダヤ人の国を創るためにエレッツ・イスラエルに行く(帰る)」ことは、そこでは疑問の対象ではない。この父親の言葉を通して語られる、ハンガリー人にはハンガリーの国があり、ハンガリーではユダヤ人はハンガリー人ではない、したがってユダヤ人は(も)ユダヤ人の国をつくるという三段論法のなかに、イスラエル建国を権利としてとらえるシオニズムの論理をみることができる。

さらに、パレスチナの地での移住後の生活が語られるこのテキストのなかに、アラブ人に関する叙

^{注239} Ministry of Education and Culture, *Masa ba-Moshavot ha-Rishonot (Journey to the First Settlements)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1992, pp.8-10.

述はほとんどみあたらないが、一章だけアラブ人が登場する箇所がある。それは、『自分たち自身の警備が必要だ』というタイトルがつけられた章で、内容は、アラブ人の襲撃と畑の無断使用に困ったモシャブの人々が代表者をたててトルコ政府の警察に訴えにいくが、アラブ人たちは先手をうってユダヤ人がアラブ人を襲撃にくるという逆の話にして訴えにきていたことがわかる。しかも、トルコの警察所長はそのユダヤ人の話を信じずアラブ人の訴えの方を信じている様子に、モシャブの代表者であるユダヤ人は憤慨し、彼に訴えることが無意味であると判断しモシャブに帰る。そして村人にこう呼びかける。「もしトルコの警察がわれわれを助けられないなら、自分たちで助けあおう。自分たちを守るためにたちあがろう！」そして、「村の住民は全員賛成し、すぐにその準備にとりかかった」という文でこの章は終わっている^{註240}。

ここに描かれるアラブ人は、(3)や(9)のテキストに描かれたアラブ人とは異なり、明らかに「他者」であり、苦勞して開拓した農地や作物を荒しユダヤ人に襲いかかる攻撃者、あるいは他人の土地で勝手に放牧をする盗人、すなわち「敵」である。主人公のもう一人の少女であり移住後結婚したという設定になっているサラは、かれらを農地にみつめて夫にこう叫ぶ。「アラブの村からアラブ人の集団がわたしたちの土地に上ってきた。かれらは私たちの畑で放牧をしてる。」^{註241}「私たちの土地」や「私たちの畑」という表現には、前の章に伏線があり、「土地を買った」ということが述べられている。したがって、ここではアラブ人こそが侵入者であって、移住してきたユダヤ人は決して侵入者ではないことになる。19世紀末から20世紀始めにかけての土地の所有権の移動は、アラブ人の不在地主から「購入」したことによって行なわれたことはおおむね歴史的事実である。しかし、1947年までにパレスチナ人から「購入」された土地はパレスチナ全土の7%程度であったということも、同時に指摘されている^{註242}。イスラエルの建国により、「購入」していなかった圧倒的な面積を含めてそれを「国土」として獲得することになったことは第二章で見てきたが、これはアラブ人からみれば侵入であるのだがこのテキストにはそうした視点はない。

③シチズンシップ

それでは、人間の諸権利に関することを学ぶ教科である公民教育ではどのようなことが教えられているのだろうか。1990年に教育省によって教師用に作られたガイドラインによると、七一八学年（中学一、二年）用の公民教育の教育プログラムとして四つの項目が学習内容にあげられている。それ

^{註240} Ibid., pp.202-208.

^{註241} Ibid., p.203.

^{註242} Samih K. Farsoun & Christina E. Zacharia, op.cit., p. 80. また、キマリングは、1947年までにユダヤ人がパレスチナに獲得した土地の面積の割合を、パレスチナの砂漠を除く土地の14%とみている。Baruch Kimmerling, *Zionism and Economy*, Schenkman Publishing Company, Cambridge, Mass., 1983, p.100.

は、1) 民族、市民、国家の関係、2) 民主主義的規則の価値と諸原則、3) イスラエルにおける民主主義的規則の実施、4) イスラエルの独自のトピックの議論の四つと、付録として、メディアの消費の望ましい在り方となっていて、それぞれの項目について知識と価値と技術を獲得することが目的であるとされている^{注243}。(10) のテキストでは、そうしたねらいにそった一般的な政治学上の概念や知識を解説した章に混じって、「メディナット・イスラエル（イスラエル国家）：メディナット・ハ・レオム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族国家）」という章がある。ここでは、国家の基礎的な要件である四項目（領土と国境、住民、法治主義、主権）がそれぞれ解説され、その章の始めには次のような文が載っている。

「エレッツ・イスラエルにおけるメディナ・イエフディット（ユダヤ人国家）は、（古代）王国の時代にかつて存在していた。（起源70年の）第二神殿の破壊以来今日まで、エレッツ・イスラエルにユダヤ人国家は存在しなかった。その間ユダヤ民族は、ベ・アルツォット・ハ・ガルート（異国の地）で離散していた。この状況は1948年5月14日まで続いた。この日エレッツ・イスラエルに、ユダヤ民族国家であるイスラエル国家が樹立された。これは、領土（しかし、1993年の時点では、すべての国境は最終的にまだ定まっていない「ママ」）のうえに統治され、法律を制定し、経済をおこし、離散しているユダヤ人（外国で暮らしているユダヤ人「ママ」）にとっても重要な中心である、主権国家である。」^{注244}

この章のうち、一節（領土と国境）と二節（住民）はとくに注目されるべきである。一節では、「エレッツ・イスラエルの境界（国境）や領土の確定は歴史のできごとの結果変化してきており、戦争や占領の結果そうした変化が生まれる」という説明のあとで、「たとえば、ヨシュアの占領の時代にエレッツ・イスラエルを定めた境界は、ダビデ王とシュロモ王の時代に定めたものとは異なっている。また、第一神殿の破壊とその後の離散の時代、ペルシャ時代、ハスモニア国の時代、第二神殿が破壊されエレッツ・イスラエルがローマの属州に委譲される時代では、その境界はそれぞれ異なっている」という説明が、『過去の境界』という見出しの後になされている^{注245}。そしてその後、英国のパレスチナ委任統治期から今日のイスラエルの領土と境界に至る歴史とその実際の変化の説明が地図に示されながら続き、「1993年時点でのイスラエル国家の境界」は、エジプト、レバノン、ヨルダン、シリアとの間にそれぞれ国境や停戦ラインという形で存在すること、停戦ライン内には二つの併合地

^{注243} Ministry of Education and Culture, *Tochnit ha-Limudim be-Ezrahut (Study Program in Civil Studies)*, Jerusalem, 1990, pp.7-8.,pp.10-16.

^{注244} Ministry of Education and Culture, *Masa el ha-Democratia ha-Yisraelit (Journey to the Israeli Democracy)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1994, p.65.

^{注245} Ibid., p.67.

域、東エルサレムとゴランハイツがあることが述べられ、1994年に出版されたこの教科書で、そこに載っている地図の「イスラエルの範囲」として色わけされている部分は、いわゆる拡大イスラエル（ゴランハイツ、ウエストバンク、ガザを含む）の区域である^{註246}。

こうした記述では、まず、イスラエルの領土と境界の設定に本来関わりをもたない古代期の話が「違和感なく」結び付けられるところに、イスラエルの教育の特徴がでていいるといえる。また、「国境や領土は戦争や占領の結果として（そのように）確定される」ということは確かに事実であるといえるが、このことは、戦争に勝利し占領してしまえばその既成事実は領土権の主張の根拠になりうるという論理を内在化させてもいる。国境や領土は確かに政治的産物であることには違いないが、このテキストの叙述の展開は、領土に対する強い防衛意識と（イスラエルが行なっている）占領や併合を正当化する作用をもつものとなっている。

また、二節でも、イスラエル国家の住民の増減が古代期との連続性のなかで語られている。以下はこの節の最初の文の引用である。

「アム・イスラエル（イスラエルの民）の国であるアレツ^{註247}へのかれらの入植以来、第一神殿と第二神殿の全期間にわたる千年以上、アレツには多くのユダヤ人がいた。ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）の多くがガルート（異郷の地）にあった第二神殿の破壊以降の約二千年間、アレツのユダヤ住民はまばらであった。しかしかれらはアレツでユダヤ人社会の連続性を守り続けた。そしてゴラ（異郷）のユダヤ人達は、エレツ・イスラエルを思う気持ちを決して止めることはなく、祈りと行ないのなかでそれを表わそうとした。かれらは、いつかユダヤ民族が**祖国に帰る**（太字「ママ」）ことができる日がくることを、また、そして**そこにユダヤ独立国家を建てる**（太字「ママ」）ことができる日がくることを待ち望んだ。この夢は、19世紀末以来アレツへのユダヤ移民の波が増大したことで、実現されることになった^{註248}・・・」

この後テキストでは、その後の人口構成の変化でユダヤ人がアラブ人をしのいでマジョリティになり、「アレツでのユダヤ人がマジョリティであるという存在（の状況）は、**メディナット・ハ・レオム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族国家）としての**（太字「ママ」）イスラエル国家建設の構想を表わすものである」^{註249}ことを指摘している。その後には、イスラエル国家はユダヤ民族国家であ

^{註246} Ibid., pp.68-74.

^{註247} ヘブライ語では、イスラエルのことをエレツ・イスラエル（イスラエルの地）または略してアレツと表現している。これは、宗教的伝統と歴史を強調した古代ユダヤの民の祖国という含意があるのに対し、他にメディナット・イスラエル（the State of Israel）という「中立的」表現もある。

^{註248} Ibid., p.81.

^{註249} Ibid.

ることが再度説明され、帰還法、市民権法の内容と説明があつて、「アレッツでのマイノリティの権利」と「マイノリティ市民の地位付与」という内容と説明の後に、以下の文でしめくくられている。

「この国のアラブ市民は、ユダヤ人のイスラエル市民に与えられている完全な市民の権利を享受することができる。しかし、幾つかの特定の領域についてはその限りではない。イスラエルとアラブ諸国間の交戦状態の結果から、兵役の義務は、ドルーズとチェルケス^{註250}のマイノリティだけに適用される。イスラム教徒とキリスト教徒のアラブ人は、徴兵されない。（しかし、〔このほかに〕志願兵として兵役につくアラブ人—主にベドゥイン—がいる。）アラブ人が兵役の義務につかないことは双方の意向の結果である。すなわち、イスラエル国防軍にとっては、イスラエルのアラブ人の徴兵には安全面で留保があること、そしてイスラエルのアラブ人の大多数は近隣のアラブ諸国のかれらの兄弟と交戦することには関わりたくない（はずだから）。」^{註251}

他の章では、人間の尊厳や人権、自由と平等などの、より一般的で普遍的な内容もものっているが、そのことと「ユダヤ民族国家としてのイスラエル」ということがどのように整合するのかの説明はなされていなく、不明なままである。特に、国民概念と民族概念との関係の説明が十分とはいえない。この二つの概念については、この教科書の第二章で説明がなされているが、その内容を要約すると以下のようなものである。

「社会集団は最も小さな単位である家族から血族集団である拡大家族などを経て組織化が進み、やがて部族へと発展し、そしてその後それらの集団の解体がおこり、もっと大きな社会集団が成長し、そこに言葉、宗教や伝統、文化的価値、生活様式などの面で連帯、協力、帰属感などが発展した。こうした社会はまたその構成員に適用する行動の規則をつくりあげ、そこから数百年を経てハ・アミム（アム＝民族の複数形）またはハ・レウミム（レオム＝民族の複数形）が成長した*。（原文注：アムとレオムは別の概念であるが、このテキストでは区別しないで用いる。）レオム（＝民族）は、概して、一定の地理的領域に住み一つの言葉を話す集団である**。（原文注：ベルギー、スイス、カナダなどの多言語のレウミム（＝民族）も存在する。）この集団の構成員には共通の宗教があり***、（原文注：ドイツ、アメリカ、カナダなどの多宗教のレウミム（＝民族）も存在する。）かれらは長い間、共通の生活様式、文化、習慣を担ってきている。時の経過とともに、その集団の各成員は集団への帰属意識を発達させる。もし、その集団が国家を建設しようとする構想のもとにまとまるならば、その集団にはトダア・レウミット（＝民族意識）があるという。」^{註252}

^{註250} イスラエルの少数民族。18世紀までは、キリスト教徒。18世紀にイスラム教徒になったが、キリスト教徒の伝統が残っているとされる。現在最も多く存在するのはトルコであるが、シリア、ヨルダン、イスラエルにも存在している。イスラエルでは、ガリラヤ地区に二つの集落が、テル・アヴィヴのそばのシャロン地区に一つの集落がある。

^{註251} Ibid., p.91.

^{註252} Ibid., pp.50-51.

この説明では、民族というものが近代の国民国家の形成との関わりの中で登場する概念であることも、民族と国民のずれについても、十分な注意が喚起されることはない。これに関連した本質的な問題は、ここでのレオムというヘブライ語は民族や民族性という意味の概念であるが、この文脈では明らかに「国民」と理解した方が本来はよいものである。しかし、アムというもう一つの民族概念とほぼ同義語として用いられていて、「国民」というニュアンスはヘブライ語からは伝わらない。つまり、この教科書で学ぶ生徒は、ユダヤ人も、ベルギー人も、スイス人も、カナダ人も、ドイツ人も、アメリカ人も、同列にアム（民族）またはレオム（＝民族）として理解することになるのである。この理解のあり方は、第三章で多くのインフォーマントの回答にすでにみられた通りである。

また第二に、ユダヤ教徒とユダヤ民族の概念が、こうした文脈の中で本来検討されるべきであるにもかかわらず検討されていない。上記の引用に登場した古代期の「イスラエルの民」や「ユダヤ民族」はユダヤ教徒であって、近代概念としてのユダヤ民族ではないといえるが、この点の区別に無自覚なまま二つの概念は連続もしくは一致するものとして捉えられている。

このように、「ユダヤ民族国家としてのイスラエル」という国家の自己規定は、国民に等しく与えられるべきシチズンシップという観点から見て矛盾をはらんでいるにもかかわらず、教科書では説明される必要のない自明の前提となっているといえる。

④歴史教育の重点

(11) のテキストは、『保守主義から進歩へ』という題であるが、副題は「歴史」となっており日本でいえば中学校の2－3年用の歴史のテキストである。構成をみると、ヨーロッパ近現代史とパレスチナ委任統治期からイスラエル建国に至るパレスチナ／イスラエル史が大半を占め、他の地域ではアメリカ独立戦争期から20世紀初頭のアメリカ、帝国主義時代の中国と日本が少し登場している。特筆すべきであるのは、まず第一に、全体で42章の構成のうち、ヨーロッパ近代の「反ユダヤ主義」

(anti-semitism) の叙述に三つの章が当てられていることである。それらの三つの章の内容は、近代における「反ユダヤ主義」の特徴と内容、ユダヤ人像のカリカチュア、ドイツの政治的反ユダヤ主義、フランスでの反ユダヤ主義とドレフュス事件、ロシアでの反ユダヤ主義の状況の説明などである。これらの章では、ユダヤ人が社会的・政治的攻撃の標的になり、またどのような制限や制約を課されたかというテーマがくりかえし強調され、「（ヨーロッパでのユダヤ人の）解放は、『ユダヤ人問題』を本当に解決したのだろうか？」²⁵³ という疑問を読者に与えるものになっている。

²⁵³ Ministry of Education, Culture and Sport, *mi-Shamranut le-Kidma (From Conservatism to Progress)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1998, p.186.

第二に、いわゆる「世界史」の文脈のなかに「ユダヤ人の歴史」を関連させ、その視点から「世界史」をみていくという展開が基調であり、ここにユダヤ史に重点をおいた歴史教育の特徴をみることができる。上記で指摘した「反ユダヤ主義」への注目もこの点と関わるものであるが、他にも、(II)のテキストにある「市民的平等への途」という第10章の内容はユダヤ人の解放を求める闘いとガヴリエル・リセル²⁵⁴の話である。この章にはヨーロッパでユダヤ人の解放が実現した年代が国ごとに示された地図も記載されている²⁵⁵。また、アメリカ史を扱った三つの章のうち、一つはユダヤ移民との関わりを述べたものである²⁵⁶。さらに、世界の様々な地域でのユダヤ人の社会や生活を解説した章も少なくない。第12章では19世紀東欧でのユダヤ人社会、第13章では19世紀後半の東欧のユダヤ人の文化活動、第14章では19世紀後半の様々なユダヤ人組織の紹介、第18章では19世紀におけるイスラム諸国のユダヤ人社会、第22章ではフランスのアルジェリア占領期前後のアルジェリアのユダヤ人社会、第23章では19-20世紀にかけてのヨーロッパのユダヤ人の芸術などと数多く、これらを通して読者である生徒は世界のユダヤ人社会に自らを連関させる認識枠組みを獲得することになる。

第三に、エルサレムにかかわる歴史が教材として頻繁に登場していることである。とくに、19世紀末エルサレム旧市の外にはじめてつくられたユダヤ人コミュニティの物語は、テキスト(1)、(2)、(4)、(5)、(7)、(II)のなかでそれぞれ登場している。そこに共通してでてくるのは、イギリスのユダヤ人であったモシェ・モンティフィオリがアラブ人から土地を買い、密集して劣悪だった旧市の生活環境を改善するために旧市の壁の外にユダヤ人コミュニティをつくったという話である。1860年にあったこの実話の物語を通して、1) ユダヤ人はエルサレムの旧市のなかに一貫して生活していたこと、2) 世界のユダヤ人どうしの結び付きと助けあい、3) 土地は「購入」されたことなどが伝えられていくことになる。また(4)の教科書の中では、「イスラエルの首都：聖地の都市」という章のなかで、初代首相であるベン・グリオンの演説が引用され²⁵⁷、エルサレムはイスラエルの首都であること、ユダ

²⁵⁴ Gabriel Riesser (1806-1863年)。ユダヤ系ドイツ人。ドイツ自由党のリーダーの一人。1848年に、最初のドイツ議会の議員に選出されてもいる。ユダヤ人の平等な市民権を求めてユダヤ人解放のために闘った。

²⁵⁵ Ibid., p.90.

²⁵⁶ Ibid., pp.228-236.

²⁵⁷ ベン・グリオンの最初の国会演説の引用は、以下の通り。「戦時期の混乱にあってエルサレムが包囲されていた時は、われわれは政府機関の場所をテルアヴィヴに置くことを強いられた。しかし、イスラエル国家には一つの首都しかないし、これからもずっと一つの首都—永遠のエルサレム—を持ち続ける。それは、三千年前の状況であったし、今後は永遠にそうであり続けるであろう。」Ministry of Education and Culture, *Yerushalayim Irenu (Jerusalem our city)*, Am-Oved Publishers Ltd., Tel Aviv, 1993, p.142.ただし、エルサレムをイスラエルの首都とすることについては、現在も国際社会の合意が得られていないが、そのことについては触れられていない。

や民族にとっての永遠の町であることが強調されている^{註258}。このように、歴史や地理の教材のなかでエルサレムという都市に特に重点がおかれることで、この町に対する特別の想いが作られていくことになる。

⑤まとめ：社会科教育の内容にみられる特徴

学校は、軍隊とならんで「国民形成」にとって重要な役割を果たしている。その理由は、この二つはその国家のアイデンティティを「国民」に伝達し再生産していく装置として機能するからである。中でも、歴史教育およびその教科書は、当該国家の歴史観が反映される媒体である。この歴史観をめぐっては当然論争がうまれることもあり、日本においては、1965年から1997年にわたる「家永裁判」という歴史のなかで、文部省の教科書検定の在り方を問う歴史家の粘り強い問題提起があった。また逆に1990年代後半には、「新しい歴史教科書を作る会」のような組織による、「自虐的な歴史観を見直し、誇りの持てる歴史教育をめざす」運動が新しい教科書論争をおこしている。また、学校の式典での「日の丸」「君が代」の扱いに対する文部省の行政指導が、1990年以降特に強化されている。

「学校で何をどう教えるか（教えないか）、何が強調されるべきか」という問題は、国家のゆくえを左右するだけの影響を持っているゆえんである。

イスラエル教育省による歴史教育に対するガイドラインは、この意味で大変興味深い資料である。世俗的中学・高校用の『歴史教育指導要領』によると、歴史教育の一般的目的が「知識の領域」と「モラルの領域」に分けられているが、注目すべきであるのは後者の内容である。具体的には、1) 歴史的出来事を、人間の一般的な道徳観を大切にする基準にそって判断する能力を発達させること、2) 他の人々（民族や個人）の生活様式、伝統、感情に対する理解と寛容を育むこと、3) 民族と国家に対する連帯観を育むことの三点である。さらにこの中で、3) に関する具体的指導方法の説明の中にイスラエルの特徴が強く現われている。つまり、こうした連帯観は、以下のように生徒を指導することによって獲得されるとしている。それは、①本質と運命において、イスラエルの民のユニークさを生徒が意識するように指導する。②エレッツ・イスラエルおよびデュアスポラにあって、我が民族が長い年月にわたり発達させてきた文化的伝統、および生活様式を、生徒が意識し評価するように指導する。③われわれの民族の歴史における主要な歴史上の人物を、生徒が意識し評価するように指導する。④ユダヤ民族が多様な社会のなかにあり、また広く散らばっているとしても、一体であり共通の運命にあることを生徒が意識するように指導する。⑤国家が社会生活のなかで果たしている役割を

^{註258} Ministry of Education and Culture, *Yerushalayim Irenu (Jerusalem our city)*, Am-Oved Publishers Ltd., Tel Aviv, 1993, p.142.

意識し、その運命を形成していくことに積極的に参加することに関心を持つように指導する^{注259}。

われわれが上記で検討してきた様々な教科書の内容は、こうした指導要領の原則をなんと「見事に」反映したものであろうか。イスラエルの学校教育のなかで、イスラエル人は、ユダヤ人として、反ユダヤ主義下のヨーロッパのユダヤ人と結び付けられ、同時にユダヤ教（徒）のルーツとしての聖書時代のユダヤ人と結び付けられ、さらに世界のユダヤ人コミュニティとも結び付けられて、「ユダヤ人意識」の形成が図られていくことになる。そしてその「ユダヤ人意識」の連帯感の下に民族国家としてのイスラエル国家意識をつくりあげていくことがめざされているといえよう。

第四節 様々な政党と相互連関

この節では、イスラエルの様々な政党の基本的性格を「左派」政党を中心に概観することで、イスラエルの政治においては「右派」と「左派」という分類はあまり意味をなさず、既存政党のなかで内在的な批判がほとんど機能していないということを指摘したい。

1 主要政党の基本的性格——「左派」政党の変遷

イスラエルの選挙制度は比例代表制をとっていることから、少数政党が乱立していることに加え、政党の分裂や融合が頻繁におこっており、このことが、政党の種類を一層多様で複雑なものにしている。表4-4-1は、これまでの国会選挙における主要政党とその得票率の推移をみたものである。また、図4-4-1—図4-4-3は、「左派」、「右派」、および共産党の政治勢力の系譜を図式化したものである。これらを参考にして、以下で世俗的政党を中心に政治勢力の諸関係をみていくことにする。

まず、イスラエルの諸政党は一見多様にみえるのであるが、実はみかけほど多様なものではない。それは、シオニズムという理念がイスラエル国家の「一つの」政治勢力であるのではなく、国家がこの大前提に立脚していることによる。ベングリオン初代首相は、今日の労働党の前身の一つであるマパイ党（ミフレゲット・ポアレイ・エレッツ・イスラエル＝イスラエル労働者党）の指導者であったが、このマパイ党は、1977年にリクード政権が誕生するまで、マパム党（ミフレゲット・ポアリム・メウヘデット＝統一労働者党）、アハドット・ハ・アボダ党（労働統一党）、ラフィ党（レシマツト・ポアレイ・イスラエル＝イスラエル労働者党）などと連合して「左派」政権を維持してきた中心

^{注259} Ministry of Education, Culture and Sport, *Tochnit ha-Limudim be-Historia (Study Program in History)*, Jerusalem, 1995, pp. 9-12.

的政党である。マパイ党の存在期間、イスラエル歴代の全首相、一人を除く全大統領、ヒスタドルート（イスラエル労働総同盟）の全書記長、一人を除くクネセット（イスラエル国会）の全議長が、マパイ党に所属していた^{注260}。

この政権が「左派」と性格づけられるのは、シオニズムと同時に「社会主義的」な社会・経済政策を意識してすすめてきたことに依っている。この性格はマバム党においてはさらに明確であり、「社会主義とシオニズムの統合」がめざされた。ここでは、このマバム党の性格とその変化を追いながら、イスラエルの「左派」勢力の「左派」の意味とその変遷について考察を加えたい。考察の焦点を今日の労働党およびその前身のマパイ党にではなくマバム党にあてるのは、「左派」勢力の「左派」の意味を評価するには、よりシオニスト「左派」と位置付けられるマバム党の変遷を追う方が妥当であると思われるからである。

マバム党の前身は、1890年代に東欧でおこったポアレイ・ツィオン（シオンの労働者達）という運動にまで遡る。1948年に再編されたマバム党がこの運動から受け継いだ基本的理念のなかで最も本質的なものが、「社会主義とシオニズムの統合」という理念であった。ここで、シオニズムを一つのナショナリズムと考えれば、社会主義とナショナリズムの統合という図式自体は矛盾するものではない。ところが、イスラエルの場合、これがシオニズムという特殊なナショナリズムであったことがここでの問題の本質である。この二つの理念は、以下でみていくように、相互に矛盾したものであることが次第にあきらかになっていくのである。

マバム党の指導者は、東欧で反ユダヤ主義、社会主義、マルクス主義の影響を受けており、出発点において上記の二つの理念が同等の重みをもって捉えられたのはある意味で当然である。もしマバム党がその「社会主義的」な理念をイスラエルの中でさらに追求しようとしたならば、階級意識や階級闘争をイスラエル社会でどう形成していくかという課題に応え、反帝国主義や反植民地主義という立場を明確にしなければならなかったはずである。事実、1950年代初頭には、列強諸国との非同盟を要求し、イスラエル「外」の「左派」勢力と呼応した立場をとった時期もあるが、こうした姿勢は、1956年のスエズ戦争への参戦支持の立場の表明によって事実上放棄されてしまう。つまり、これはイスラエルが軍事的・財政的・外交的に「西側」に依存した利害を一致させていることを、マバム党も否定できなかったことを意味している。また、マバム党が掲げたスローガンの一つであった「アラブ人労働者とユダヤ人労働者の共闘や共同組織」という構想は、そもそも「ユダヤ人国家」の創造を

^{注260} 池田明史、「現代イスラエル政治の動向と分析視角」、池田明史編『現代イスラエル政治』、アジア経済研究所、1988年、16頁。

表4-4-1 1981-96年までの、国会選挙における主要政党とその得票数および得票率

	国会									
	10次	11次	12次	13次	14次	10次	11次	12次	13次	14次
計	%	%	%	%	%	絶対有効得票数				
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	1,937,366	2,073,321	2,283,123	2,616,841	3,052,130
政党略号										
AMT	36.6	34.9	30.0	34.6	26.8	708,536	724,074	685,363	906,810	818,741
MAPAM	-	-	2.5	-	-	-	-	56,345	-	-
T-YAHAD-	2.2	-	-	-	-	-	46,302	-	-	-
HN	1.5	2.6	1.7	-	-	29,837	54,747	39,538	-	-
RZ	1.4	2.4	4.3	-	-	27,921	49,698	97,513	-	-
MERETZ(1)	-	-	-	9.6	7.4	-	-	-	250,667	226,275
YM(2)	0.6	-	-	-	-	11,590	-	-	-	-
B	4.9	3.5	3.9	5.0	7.9	95,232	73,530	89,720	129,663	240,271
SHAS	-	3.1	4.7	4.9	8.5	-	63,605	107,709	129,347	259,796
NJ	2.3	1.5	-	-	-	44,466	31,103	-	-	-
G(3)	3.7	1.7	4.5	3.3	3.2	72,312	36,079	102,714	86,167	98,657
D	0.9	-	-	-	-	17,090	-	-	-	-
AD	-	1.6	-	-	-	-	33,287	-	-	-
EZ	-	-	1.5	-	-	-	-	34,279	-	-
MHL(4)	37.1	31.9	31.1	24.9	25.1	718,941	661,302	709,305	651,229	767,401
JS/OMETZ	-	1.2	-	-	-	-	23,845	-	-	-
TLM	1.6	-	-	-	-	30,600	-	-	-	-
HD	-	-	-	-	3.2	-	-	-	-	96,474
KN	-	-	-	-	5.7	-	-	-	-	174,994
LA(5)	0.6	-	-	-	-	11,764	-	-	-	-
TH	2.3	4.0	3.1	1.2	-	44,700	83,037	70,730	31,957	-
TZ(6)	-	-	2.0	6.4	-	-	-	45,489	166,366	-
T-MOLEDET	-	-	1.9	2.4	2.4	-	-	44,174	62,269	72,002
KACH	0.3	1.2	-	-	-	5,128	25,907	-	-	-
S-SHELLI(7)	0.0	-	-	-	-	8,691	-	-	-	-
W(8)	3.4	3.4	3.7	2.4	4.2	64,918	69,815	84,032	62,546	129,455
P	-	1.8	1.5	0.9	-	-	38,012	33,695	24,181	-
ADP	-	-	1.2	1.6	2.9	-	-	27,012	40,788	89,514
少数諸党	0.6	-	-	-	0.5	10,900	-	-	-	16,070
PS	0.6	0.1	-	-	-	10,823	2,430	-	-	-
その他	1.2	2.7	2.4	2.9	2.0	23,917	56,548	55,505	74,851	62,480

原注1) RZ, Mapam, HNを含む。2) AMT(連合)と結び付いた少数派。3) 13次国会では、トラ-連合、アグダット・イスラエル、トラ-の旗、レ・ペレズが含まれる。4) ガル、ラム(「民族へ」の意味)、自由中央党、国家党を含む。5) 11次国会では、AMTに含まれる。6) 14次国会では、MHLに含まれる。7) SHELLI(シェリ)は、KN(ケッド)及びS(ハラム・ハベ:「この世界」の意味)を含む。8) イスラエル共産党(ラカ)、ブラック・パンサーズ、ユダヤ人とアラブ人のサークル。9次国会からは、平和と平等のための民主党という名称。

政党略号に対応する政党およびその意味

AMT:連合;イスラエル労働党。(7次-12次国会では、労働者連合党。13次国会では、レ・ンを党首とする労働党。14次国会では、労働党。) MAPAM(マハム):統一労働者党。及び非連合系労働党。T-YAHAD(ヤハッド)(共にという意味):民族連合のための運動。HN:中央党及びシメ(変化の意味)。RZ(ラツ):市民権と平和のための運動。MERETZ(メルツ):ラツ、マハム、シメ。YM:アラブ連合党。B:国家宗教党(マダール)、東洋(ミズラヒ)、東洋労働者党。SHAS(シャス):スファラディのトラ-の守護者の世界連合。NJ:イスラエル伝統運動(タミ)。G:ユダヤ教トラ-連合:アグダット・イスラエル(イスラエル連合の意味)、トラ-の旗、レ・イツハク・ペレズ。D:ボアレイ・アグダット・イスラエル(イスラエル労働者連合の意味)。AD:モラシャ(伝統の意味)、マツァット(宗教シオニスト党)、ボアレイ・アグダット・イスラエル。EZ:トラ-の旗。MHL(マハム):リカ-ド(統一の意味)、ゲ・シェル(橋の意味)、ツァメット(連結の意味)。JS:変化のための民主運動(ダツシ)。OMETZ(オメツ)(勇気の意味):経済の回復にむけて。TLM(テルム):国家新生のための運動。HD:民族的合意のための第三の道。KN:シオニズム運動の実現。移民党。LA:独立自由主義者。TH:復活。TZ:ツァメット・シオニストの再生のための運動。T-MOLEDET(モレデット):モレデット(故郷の意味)。KACH(カハ):レ・メル・カネにより創設された運動。S-SHELLI(シェリ):シェリ(イスラエル左派)。W:平和と平等のための民主勢力;イスラエル共産党(ラカ)、ブラック・パンサーズ、アラブ人とユダヤ人の左派サークル。P:平和のための進歩党。ADP:アラブ民主党。PS:発展と進歩。出典:Central Bureaus of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998, p.20-6. (頁表記ママ)

[illegible]

153

唱えるシオニズムとはあい入れず、実際問題としては非現実的なものにならざるをえなかった。たとえば、マバム党の看板の一つであったキブツ運動にしても、すでに述べたように土地そのものが「ユダヤ民族基金」を通してアラブ・パレスチナ人の不在地主から買収したものであったし、またキブツは、「防衛機能」も果たしていたことから、そこにアラブ・パレスチナ人をメンバーとして迎え入れるということは事実上不可能であり、「ユダヤ人による自力労働」を主張しアラブ・パレスチナ人の雇用に反対するシオニスト主流派に抗しきれなかった。

マバム党の性格の半分の柱であったシオニズムは、この政党のもっていたラディカルな性格の阻害要因となり、社会主義的「左派」としての性格は腐食していった。その後、この勢力は様々な少数左派政党と合流しながら、イスラエルの「良識派」といわれる世論や勢力として一定の役割を果たしてきたとはいえる。

こうしたキブツの一つであるシャアル・ハ・アマキムで1980-81年にかけて行った参与観察から、この点との関わりで若干補足しておきたい。このキブツは、旧ユーゴスラビアとルーマニアからの移民によって1938年につくられた。創設者達のキブツへの入植の動機および背景をみると、ほぼ例外なく移住前の青年シオニスト運動での教育をあげており、彼等は明確な意志と自覚のもとにキブツへの入植を自ら「選択」したのであり、移住そのものが、東欧でのシオニズム教育で培った彼等の意志を実現させるための手段でもあったと考えられる。その創設メンバーの中に、アロン・コーヘンという歴史家がおり、彼は、パレスチナ人との「複合民族国家」構想を唱えていたマルチン・ブーバー等と共に雑誌ニュー・アウトLOOKの編集にもたずさわり、パレスチナ人との共存・共生という課題にとりくみ、ヘブライ語、アラビア語を中心に多くの著作を著した^{註261}。

筆者の滞在時にはすでに死去していたが、彼の妻の「流れに抗していくことは本当に大変だった。」という言葉と表情や、彼とは「同期の友」である古参メンバーの「コーヘンの主張は極端すぎてついていけない。(なぜならば)われわれは、マルキストだがコミュニストではない(から)。」(その含意は、われわれはマルキストであって、かつシオニストである、ということである。)という言葉に、コーヘンがこのキブツでいかに「異端者」扱いをうけていたかを察することができた。またこのキブツでは、「イスラエル独立記念日」にイスラエルの国旗と赤旗を並べて掲げていたのが印象的だった。この古参メンバーの言葉、および国旗と赤旗を同時に掲揚するという行為は、まさに、キブツがイスラエルの建国イデオロギーを推進するものであったことを象徴する「断片」である。同時に、かれらが「社会主義」や「マルキスト」という言葉に託す主観的位相と客観的位相とのずれについても注目すべきである。

^{註261} 主著としては、Aharon Cohen, *Israel and the Arab World*, Funk and Wagnalls, New York, 1970.

また、もう一つのイスラエルの「左派」政党として、共産党がたどった推移をみることにしよう。イスラエル共産党は、反シオニスト（あるいは脱シオニスト）という立場を明確にし、アラブ人のメンバーも獲得することによって、イスラエル政府の中東政策に対し最も本質的な批判勢力の一つとなってきた。しかしそのために、イスラエルの政治・社会のなかでは孤立した立場にたたされてきたともいえる。1960年代になると、ユダヤ人のメンバーのあいだからこの孤立化をさけようとする姿勢がでてくるようになり、結局1965年に党は二つに分裂した。厳密に言えば、それ以前の1962年に分離した勢力があり、これがマツペン（羅針盤の意味）という組織を形成している^{注262}。

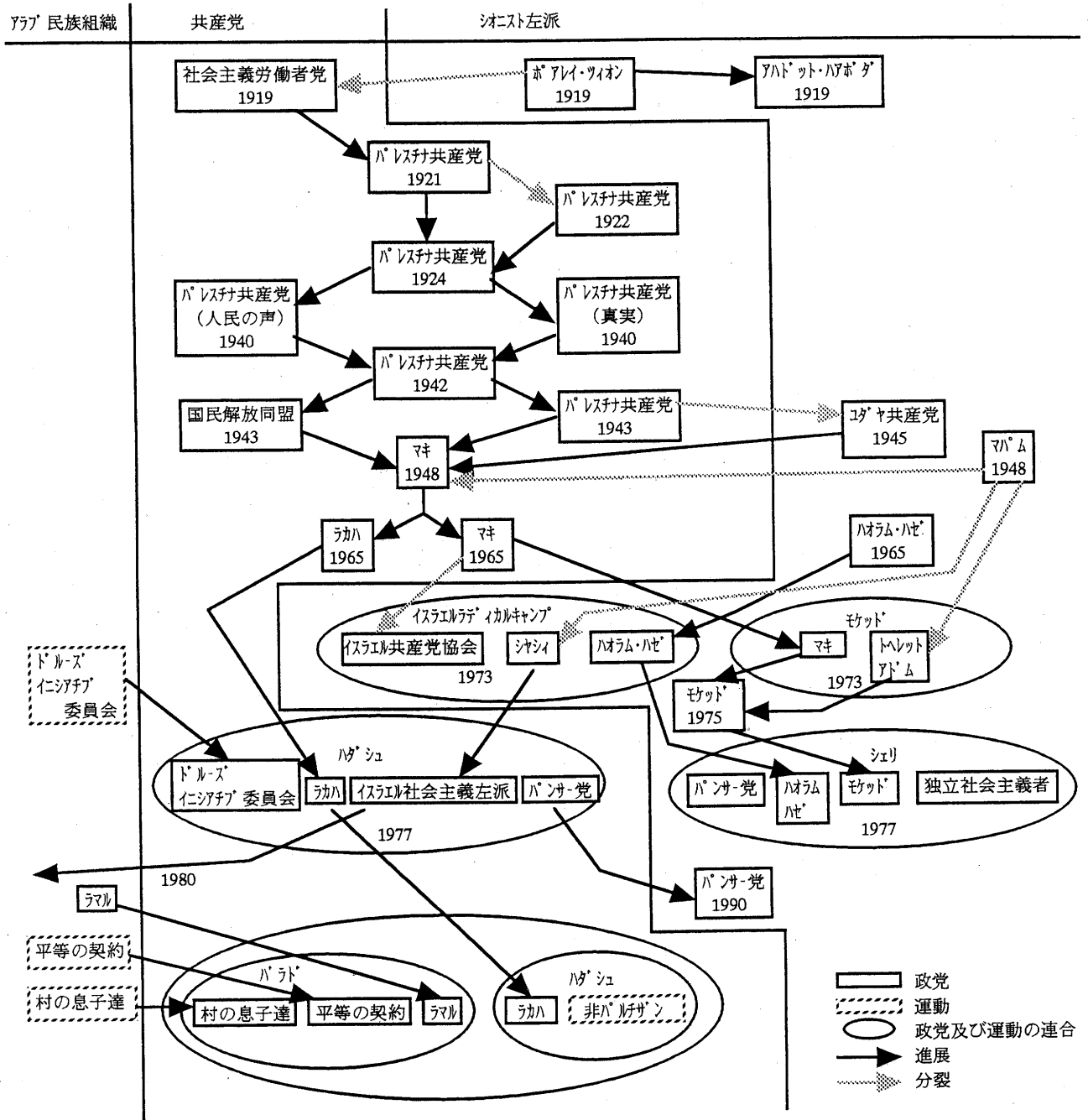
この1965年の分裂は、イスラエルにおける二つの民族の立場の違いが、イスラエル共産党のなかで克服できなかったことのあらわれと考えられる。アラブ人のメンバーからなるラカハ（レシマ・コミュニスティット・ハダシャ＝新共産党）は、ユダヤ系イスラエル人の大多数から孤立しながらも反シオニズムの立場を変えなかったのに対して、ユダヤ人メンバーからなるマキ（ミフラガ・コミュニスティット・イスラエル＝イスラエル共産党）は反シオニズムの立場をまっとうしきれなかったことが、両者の分裂をうんだからである。たとえば、1967年の第三次中東戦争への評価を比較してみると、ラカハは、この戦争を告発し、安保理決議242を中東和平の基本的方針とする立場を示したのに対し、マキは、この戦争を認め、新しい安全な境界を要求して戦争前の境界に戻ることに反対した。こうして、共産党もマパム党と同じように、政治的決断に際しシオニズムの枠組みを完全に脱することができなかったといえる。

その後マキは、シオニスト政党の枠内でいくつかの分裂と統合を重ねたが、その勢力は1970年代末に事実上消滅した。名称からも「コミュニスト」という表現が消え、ハオラム・ハゼ（「この世界」の意味）やパンサー党などと合流してシェリ（「イスラエル左派」）に再編成され、1977年の総選挙で二名の議席を獲得したのを最後に、選挙戦からは退いている。一方ラカハは、1977年以降、その他の少数左派政党や勢力と連携し、非シオニスト政党として今日ハダッシュ（平和と平等のための民主戦線）の勢力の一部を担っている。また、この間の推移の中で、メンバーは再びアラブ人とユダヤ人の双方を擁するように変化した。総選挙では、1977年にハダッシュに再編されてからの推移をみると、少ないときで有効得票の2.4%（1992年）多いときで4.6%（1977年）の得票を得ている。1999年の総選挙では、表4-4-2にみられるように有効得票の2.6%（87,022票）を集め、3名の議員を国会に送りこんだが、これは前回の1996年の結果^{注263}よりは後退している。1999年の総選挙では票の分散傾向

^{注262} 広川隆一、「パレスチナ・ゲリラとイスラエル革命：解説」『情況』、情況出版、1972年10月号、155頁。

^{注263} 1996年の総選挙では、有効得票の4.4%（129,455票）で、五名の議席を獲得している。

図4-4-2 イスラエル共産党の系譜



出典：Benyamin Neuberger, *ha-Miflagot be-Israel (Political Parties in Israel)*, Open University of Israel, Ramat-Aviv, 1997, p.186.

政治勢力の発展と分裂

左派政党 | 中道政党 | 右派政党

シオニスト労働者 1922 | 新移民 1942 | 総シオニスト A 1935 | 総シオニスト B 1935 | レビ 1939 | 修正主義者党 1925 | イツェル 1937

進歩党 1948 | 総シオニスト 1948 | 戦士党 1948 | ヘルート 1949 | ヘルート 1948

自由党 1961 | ガハル 1965 | 自由党 | ヘルート | 自由中央党 1966

独立自由党 1965 | 国家党 1969 | 自由中央党 | ヘルート | 国土回復運動 1967

ダ'ウシュ 1976 | 国家党 | 自由党 | 自由中央党 | ヘルート | 国土回復運動 | 1973

アハド'ツト | ラム | 自由党 | ヘルート | 1977

エレツ・イスラエルへの忠実な契約 1978

テレム 1981 | ラフィ/オメル 1984 | ツォメット 1983 | トビヤ 1981

ヤハッド 1984 | タミ | リクード | 1988 | トビヤ | ツォメット | 1984

シオニスト親の促進 1990 | リクード | 1992 | ツォメット 1987 | トビヤ 1987

ゲ'シエル 1995 | リクード | 1996 | ツォメット | 1996

マフダ'ル | 1992 | モレテ'ツト 1988

政党 (Solid box)
運動 (Dashed box)
政党及び運動の連合 (Oval)
進展 (Solid arrow)
分裂 (Dashed arrow)

157

が今までにもまして一層進んでいるが、その中で、ハダシュを超える得票を「アラブ連合」が獲得したことが注目される。この政党もバラド（＝アラブ民主連合）とともに非シオニスト政党であるが、シオニスト政党が多様に細分化しているように、アラブ人を基本的な支持基盤とする非シオニスト政党も細分化が進行し、ハダシュはその一つにすぎないものになったと解釈できる。

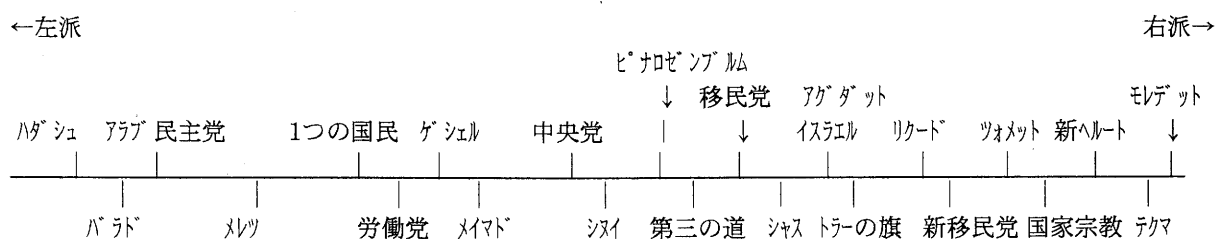
そうしたなかで、これまで少ないながらも一定の安定した支持率をハダシュが獲得し続けていることは、次のように理解することができる。それは、1977年のリクード政権の誕生およびその後のイスラエルの政治動向の「右傾化」ともいうべき状況が進展していることへの反動として、ユダヤ系イスラエル人のなかに、明確に「非シオニスト」であることを自認する人々が登場するようになったこと、言い換えれば、シオニストの枠内に止まるかあるいは「確信犯」的に非シオニストの道を選択するかが一層鮮明な分岐点となり、少数ではあっても後者を選択するユダヤ人も出現するようになったということである。その一方で、「右傾化」に問題を感じつつもシオニストの枠内に留まる道を選択するユダヤ人は、労働党を中心とする従来のシオニスト「左派」とも一線を画しながら、様々な少数政党に分派しているのが今日の状況である。しかしそのような少数政党は、勢力があまりにも小さい。今日の政党のなかではメレツがそうしたシオニスト左派の受け皿となり、比較的まとまった勢力として機能している。

2 「左派」と「右派」を分けるものとつなぐもの

第一項でみたように、イスラエルの政治文化のなかでは、シオニズムを認めるかどうかは一種の「踏み絵」的な意味をもっており、多くの政党間の違いを横断して貫いている軸である。この節の冒頭にイスラエルの様々な政党は実はそれほど多様ではないと指摘したのは、この意味である。それならば、「右派」と「左派」を分けているものは何であろうか。一般的には、「左派」とは、イデオロギー的に「社会主義」や労働運動の系譜を有し、外交や対パレスチナ政策においてはより「ハト派」的な姿勢を示し、「領土と和平の交換」を主張してきた労働党およびそれと連携した勢力を意味する。一方「右派」は、1920年代にジャボティンスキーによって組織された「修正主義」の流れをくむ勢力をさしている。この勢力は、労働シオニズムといわれるシオニズム運動の主流勢力に対抗して、労働シオニズムのかかげる「社会主義とシオニズムの統合」というイデオロギーを実行不可能なものとして拒否し、軍事力による対決の姿勢を明確にする一方、エレッツ・イスラエル全土に対し、領土的な妥協を拒否する立場をとってきた。

ここで、これまでの諸研究にみられる「右派」と「左派」の捉え方をふりかえると、おおむね初期の労働シオニズムを「左派」とすることを自明とするものであった。たとえば、ベンジャミン・ノイバーガーは、イスラエルの政党をとりまく諸変化を指摘しながらも、こうした図式を基本的に踏襲して、イスラエルの政党を図4-4-5—図4-4-6のように整理している。彼によれば、諸政党がまず第一に支持階層によって分類され、第二にイデオロギー的な側面によって分類されている。その上で、1950年代から90年代への変化の意味を次のように述べている。まず、政党と支持階層との関係は今や明確なものではなく、総じて様々な層が入り交じっていること、そしてむしろ古典的な図式とは異なり、70年代以降はリクードが労働者階級により支持され、労働党が中間層によって支持されるという「ねじれた」関係にあることを指摘している。またイデオロギー的側面のうち、「左派」を特徴づけてきたものは、社会的平等の理念、開拓者の伝統への忠誠、労働運動や労働組合への評価などであり、それに対し「右派」の特徴は私的経済活動や自由な市場および経済の自由競争の重視であったことを挙げた上で、社会全体がより「右傾化」し「左派」のイデオロギーはより周辺化して、政党全体が真ん中に近づく形でイデオロギー的隔たりが小さくなってきていることを指摘している²⁶⁴。またエルサレム・ポスト紙は、1999年の総選挙での諸政党の性格を図4-4-4のようにスケール化している。このスケールの尺度上では、宗教政党や外交政策のうえでより強硬な主張をしている政党が「右派」として位置づけられている。この捉え方はイスラエル内外の「一般的」な認識にほぼそった整理の仕方といつてよい。

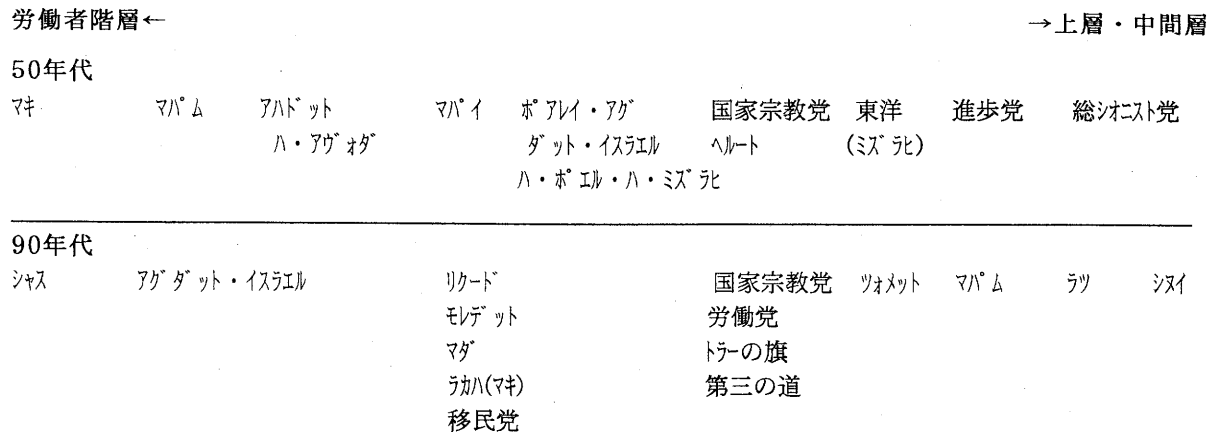
図4-4-4 政党と政治的スペクトル



出典：http://www.jpost.co.il/

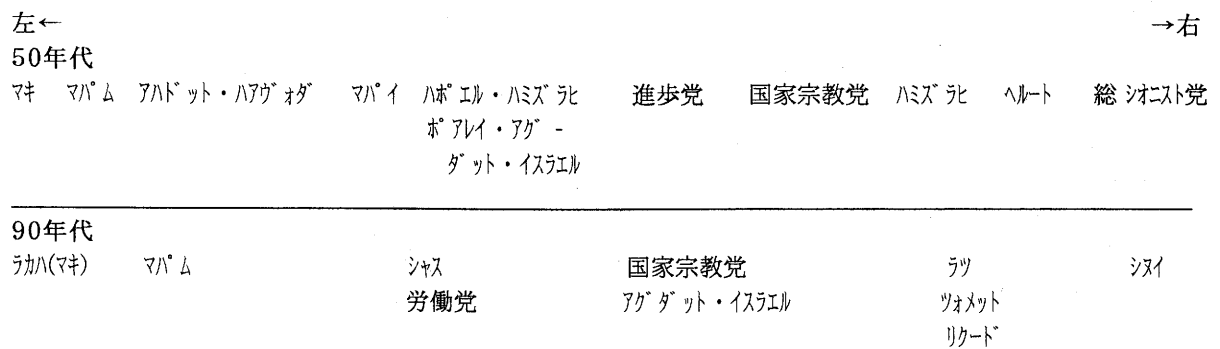
²⁶⁴ Benyamin Neuberger, *ha-Miflagot be-Israel (Political Parties in Israel)*, Open University of Israel, Ramat-Aviv, 1997, pp.203-206.

図4-4-5 支持階層からみた諸政党の位置



出典：Benyamin Neuberger, *ha-Miflagot be-Israel (Political Parties in Israel)*, Open University of Israel, Ramat-Aviv, 1997, p.205.

図4-4-6 イデオロギースケール上でみた諸政党の位置



出典：Benyamin Neuberger, *ha-Miflagot be-Israel (Political Parties in Israel)*, Open University of Israel, Ramat-Aviv, 1997, p.205.

表4-4-2 1999年総選挙結果

登録有権者数	4,285,428				
首相選挙					
総投票数	3,372,952	E.バラク	1,791,020	56.08%	
有効投票数	3,193,494	B.ネタニヤフ	1,402,474	43.92%	
無効投票数	179,458				
得票率	78.7%				
国会議員選挙					一議席以上の政党のみ
総投票数	3,373,748	政党	議席	得票数	得票率
有効投票数	3,309,416	一つのイスラエル	26	670,484	20.2%
無効投票数	64,332	(労働党)			
得票率	78.7%	リクード	19	468,103	14.1%
		シャス	17	430,676	13%
		メレツ	10	253,525	7.6%
		移民党	6	171,705	5.1%
		シヌイ	6	167,748	5%
		中央党	6	165,622	5%
		国家宗教党	5	140,307	4.2%
		トラークダヤ連合	5	125,741	3.7%
		アラブ連合	5	114,810	3.4%
		民族連合	4	100,181	3%
		ハダシュ	3	87,022	2.6%
		イスラエル・ベイツェイヌ			
		(新移民党)	4	86,153	2.6%
		バラド			
		(アラブ民主連合)	2	66,103	1.9%
		一つの国民	2	64,143	1.9%

出典：http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp

ノイバーガーの指摘は、政党間の相違が実質的に消滅する傾向に推移していることを指摘している点においては正しいが、これまでの図式で自明の前提とされてきた「右」「左」の妥当性を根本的に問い直しているとは思われない。また、エルサレム・ポスト紙の見解に代表されるような政党の性格の位置づけは、外交政策や安全保障観、あるいは対パレスチナ政策などの政治的争点を主たる基準にしている。しかし、こうした位置づけも、以下のような意味で見直される必要がある。

まず第一に、「右」「左」「中道」という表現は、その相互間の距離が等距離であるようなニュアンスを与えてしまうが、イスラエルの場合、「中道」を真ん中にして、等距離で左右対象な位置関係にあるのではないということが特に注目されるべきである。先にも述べたように、「シオニスト」という基準をそこに適用した場合、「右」「左」「中道」を決める基準点は、大きく左にシフトし、ラカハ（ハダシュ）とマパム（メレツ）の間にまできてしまうからである。

第二に、イスラエルの政治のもう一つの対抗軸として「宗教—世俗」があるが、これらの図式では、宗教的な政党を適切に位置づけることが困難である。しかも、一見「中道」勢力のような誤解も与えかねない。問題は、宗教的な政党および勢力は、その主張の内容において「右派」と重なる点が多いのであるが、宗教勢力そのものの立場の違いも少なくなく、完全に「右派」という枠組みに組みこむこともできないことにある。宗教的な政党間の最大の違いは、シオニストの宗教勢力と非シオニストの宗教勢力の違いにみられ、後者は、世俗的なシオニズムを否定する立場をとっている。しかし、非シオニストとはいっても、「左派」の非シオニストと異なることはいうまでもない。シオニスト宗教政党としてはマフダル（ミフラガ・ダティット・レウミット＝国家宗教党）があり、非シオニスト正統派宗教政党としては、アグダット・イスラエル（イスラエル連合）、ポアレイ・アグダット・イスラエル（イスラエル労働者連合）、デゲル・ハトラ（トラの旗）、シャス（シヨムレイ・トラ・スファラディム＝スファラディムのトラの番人）がある。さらに、政党にはなっていない超正統派非シオニスト宗教勢力もあり、「宗教勢力」は非常に複雑な関係になっている。

第三に、これは第一の点と関連しているが、労働党に象徴される「左派」とリクードに象徴される「右派」の間の政策上の違いは、対パレスチナ政策に限った場合、本質的にはほとんどないといえることである。たとえば入植地の建設は、第二章でみたように、リクード政権の成立後占領地に急速に増加してきたことは事実であり、この事実およびリクードの領土に対する非妥協的な態度が、この政党が「タカ派」である根拠とされてきた。しかし、「空間占拠」という意味で言えば、これも第二章でみたように、パレスチナへの入植運動の推進は、シオニズム主流派、すなわち「左派」の重要課題であったことを考えると、イスラエル建国以前から開始されたキブツなどの入植地建設運動は今日の占領地での入植地建設へと本質においてつながっており、「右派」に特徴的な政治的姿勢であるとはいえない。

また、「右派」の「軍事的対決路線」に「左派」の「和平推進路線」を対峙させる図式も誤解をうむものであり、修正される必要がある。とくに、PLOを「承認」しパレスチナ暫定自治政府との交渉にこぎつけたのが「左派」のラビン政権であったのに対し、「右派」のネタニヤフ政権に移行してから和平交渉がいきづまりオスロ合意事項が中断してしまったことが対比的に図式化されてきたが、こうした捉え方は、労働党の「和平路線」を過度に評価するものである。イスラエル政府側にとっての「パレスチナ自治政府」の意味は、将来的な国家の樹立を前提にしたうえでの、その前段階としての自治政府というよりは、イスラエル国家内での部分的な「自治権」を承認したものにすぎない。しかもこの構想は必ずしも労働党に独自なものではなく、1977年に当時のリクード党首のベギン首相に

よってパレスチナ自治構想として極秘に起草されており、さらにこのベギンの構想自体、今日の「右派」勢力の創設者ともいうべきジャボティンスキーの連邦制構想に遡ることもできる^{註265}。このようにみえてくると、シオニズムが「左派」と「右派」を容易に繋ぎうる下地として機能してきたことがわかる。

過去15回の総選挙の結果をみると、国会議員の定数である120名の構成は9—15の政党からなっており、一つの政党では政権が成立しえず、従って、第一党を中心に常に連立政権が組まれるということがイスラエルの特徴であった。そして、各連立政権の核となってきたのは上記でみてきたいわゆる「右派」と「左派」の二大政党である。これまでの連立政権のパターンは、挙国一致内閣が組まれた大連合内閣^{註266}を別にすると、第9次国会の1977年までは、マパイ党を核とした「左派」連合と宗教諸政党および少数政党との連立政権（パターンAとする）であった。しかし、1977年の総選挙でこのパターンがくずれ、リクード党を核としこれに宗教諸政党および「中道」政党を加えた「右派」連立政権（パターンBとする）が誕生する。その後は、1984—1989年の大連合政権をはさんでパターンAとパターンBが交互に成立していることは周知の通りである。

この間約五十年にみられる総選挙の動向と変化は、つぎのように捉えることができる。第一に、第一与党の勢力が相対的に低下し、政党間の勢力はより分散する傾向がさらに進んでいること、第二に、1977年を起点とし、「右派」政党が第一与党になるパターンBの政権の在り方が新たに誕生したこと、第三に、宗教的諸政党が獲得得票率の少なさに比していずれの連立にも与党として参加し、キャスティングボードとしての発言力をもってきたことは従来の特徴であったが、その傾向は上記の第一の点で指摘したことと関連してますます顕著になり、とくにシャスという「ミズラヒム」ユダヤ人の宗教党の伸長が著しいこと。第四に、「移民党」という新たな政党の参入のゆくえが今後注目されることである。

この政党の綱領によれば、全ての離散したユダヤ人をイスラエルに「結集する」ことが最重要課題と謳われている。しかし、現段階では実質はイスラエル社会への新ロシア移民の統合を目的とした政党としてみられているといってよい。外交政策としては、①「エレッツ・イスラエルに対するユダヤ民族の権利」②「ユダヤ人国家の首都としての統一エルサレム」③「パレスチナ人の自治は認めるがパ

^{註265} 森 まり子、「修正主義運動における民族観・国家観」、池田明史編『イスラエル国家の諸問題』アジア経済研究所、1994年、113頁。

^{註266} これまで、1967年6月5日-1969年3月17日(第十三次内閣)、1969年3月17日-12月15日(第十四次内閣)、1969年12月15日-1970年8月6日(第十五次内閣の一部)、1984年9月13日-1986年10月20日(第二十一回内閣)、1986年10月20日-1988年12月22日(第二十二回内閣)、1988年12月22日-1989年3月15日(第二十三回内閣の一部)の六回、大連合内閣が成立している。会期の月日については、ed.by Susan Hattis Rolef, op.cit., pp. 128-130., pp. 369-370. を参照した。

レスチナ人国家の建設には反対」④「中東の唯一の民主主義国家であるイスラエルは（傍点引用者）和平プロセスを今後も進めていくこと」を主張している^{注267}。

「移民党」形成の背景には、1990年以降の旧ソ連からの移民の急増がイスラエルの社会統合という国内問題をうみだしたことがある。移民の統合という論点はこれまでも常にイスラエルの国家的課題であったが、今この時期にそれを正面に押し出した政党が登場したことは次のように解釈できるであろう。すなわち、「イスラエル生まれ」のユダヤ人が多数をしめまた旧移民の「イスラエル人化」が進むなかで、「移民」という存在が相対的にマイノリティ化しつつあったこと。そのなかで、同一の出身国から大量の集団が流入したことは、特に言語を中心に可視的な存在であったこと。そしてこの集団の規模が大きかったことは、社会統合にとって阻害要因となり、住宅問題や失業問題をうんだこと。しかし一方では、その規模の大きさが「圧力集団」としての可能性を与え政治的に自覚化されたことなどが考えられる。この新たな文脈のなかで、明確なシオニスト政党がまた一つ誕生したといっ
てよい。ここでもまた、国内的には分裂につながる要素が、シオニズムを主張する政党として誕生することで、国家的な枠組みは一層補強されるという帰結をうんでいる。そして最後に、この間に首相選挙制度が変化し、1996年より首相が直接選挙で選ばれるようになり、従来の国会議員の総選挙とは別な「民意」の発露の場が生まれたことがあげられる。

このようにみてくると、イスラエル建国の初期にみられた「社会主義」という建国理念の一方の柱は確実に衰退しているといえる。また、「右派」と「左派」というあたかも政治的には二つの質的に対比される勢力があるかのような一般的な理解は必ずしも正しくはなく、シオニズム枠内の勢力には実質的な違いがそれほどあるわけではない。さらにシオニズム枠内の勢力は、「宗教」や「移民」という要素を加えることで複雑さを増しながら、さらにいっそう肥大化しているともいえる。

^{注267} Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il/gov>、政党の綱領による。

以上イスラエルの政治文化を「シチズンシップの歪み」という視点から検討してきたが、これまでの考察から、この「シチズンシップの歪み」の本質を「パレスチナ人の国民化の『不承認』」として概念化することができる。近代の国民国家は、いい意味でも悪い意味でも、市民権は国籍と連動し機能してきたが、イスラエルの場合、市民権を得るためには（ユダヤ人である限りにおいて）「国民」であることが条件とされず、また同じ「国民」であっても、実質的市民権の運用の基準が不統一であることが明らかにされた。そしてこのような「歪み」が受容され再生産され続けてきた構造は、以下のような幾つかのそれを支えるメカニズムによってなりたっていると整理することができる。

第一に、イスラエルは、「ユダヤ人問題」を解決するために、「民族自決」という国際的に正統性が付与された大義に基づき、「ユダヤ人国家」として建国がめざされた。しかし、それに対する「国際社会」の承認の内実は当時の国連加盟国の三十三カ国にすぎず、民族的アイデンティティをいわば一方的に領土化してしまったこの「民族自決」に対しては、これを否定するもう一つの「国際社会」が存在した。その意味で、イスラエル国家の正当性は、対外的には当初から「不確かさ」を伴っている。

しかし、たとえ三十三カ国の承認であったとしても、国連分割案の決定は、イスラエルを「ユダヤ人国家」として建設することの国際的承認という意味に機能し、建国宣言およびその他の法体系は、イスラエル国家の性格を「ユダヤ人国家」に実質化する方向に歩み出す。その中で、イスラエル人は実質的にはユダヤ人を意味するものになり、イスラエル内のマイノリティは「ユダヤ人国家」の枠内でシチズンシップが疎外されていくが、それはイスラエルが「ユダヤ人国家」として宣言され、承認されたことから問題にはならなくなってしまう。

第二に、イスラエルが「ユダヤ人国家」であり続けるためには、人口構成の上でもユダヤ人がマジョリティでありつづけることが前提となる。もしユダヤ人がマジョリティでなくなれば、「ユダヤ人国家」としてのイスラエル国家の正当性にあらたな「不確かさ」が加わることになる。しかも、現実の人口動態は絶えず流動的な緊張した関係にあることから、ユダヤ人人口が増え、パレスチナ人人口が減っていくような施策とその実施がめざされることになる。

第三に、国家の中で支配的シオニズムから疎外され周辺化されてきた人々の「体制批判」は、アラブ・パレスチナ人の批判を除くと、「体制批判」でありながらも他の国々でみられるような国家に対する分離主義的な運動や現象とはならない。それは、自らを「平等な国民」としてイスラエルの支配

的権力や権威に認知させようとする要求や運動として現れるか、または、ユダヤ人としての「正統性」を主張する運動として現れるために、結果としては、「ユダヤ人国家」としてのイスラエル国家の性格を強化するものとして作用してしまう。

第四に、イスラエルの公教育のなかで、シオニズムイデオロギーの内面化のための様々な試みがなされ、また古代から現代に至る「ユダヤ民族史」と反ユダヤ主義の強調によって、イスラエル国家の正当性が補強され、時空間を超えたユダヤ人アイデンティティの形成がめざされる。

第五に、イスラエルの既存の世俗的政党は、一部の少数の政党をのぞき、ほとんどが「ユダヤ人国家」としてのイスラエルの性格を否定しえないシオニスト政党であり、政権交替はシオニスト政党の枠内での政権交替にすぎず、イスラエルの国是（建国宣言の精神）に対する相互批判能力に欠いている。また、イスラエルの国是（建国宣言の精神）を変革する政党の編成は、第二章第三節でみたように基本法（クネセツ法＝イスラエル国会法）によって、禁じられてもいる。また宗教勢力は、シオニスト政党と非シオニスト政党に加えて、反シオニスト勢力も存在し、宗教勢力と世俗勢力の間だけでなく、宗教勢力の内部においても緊張関係が複雑であり、本研究では十分に議論できてはいない。しかし、ユダヤ教によって貫徹される国家と社会を展望しているという意味で、これらの勢力が「シチズンシップの歪み」を是正する主体とはならないのは明らかである。

第六に、アラブ人とユダヤ人の「相互隔離政策」のために、ユダヤ・イスラエル人の認識が対象化される契機がうまくいっていない。

第七に、こうした構造的なメカニズムに以下のようなユダヤ・イスラエル人の意識が関連することで、「シチズンシップの歪み」は、それが「歪み」として意識されることなく維持されていく。それは、民族が国民と重なるものであると信じて疑わない認識のあり方である。そして世界の「国民国家」は「民族国家」として認識されていることである。そのために、第三章でもすでに指摘したように、民族は国民として理解され、自民族以外の集団をその国家から排除することや国家の中の他民族がシチズンシップにおいて同等の権利をもたないことに対して、無自覚となるか、自覚したとしてもそれが問題としては自覚されないのである。

民族の共存に対するこの徹底的な不信感、ユダヤ人にふりかかった「反ユダヤ主義」とりわけホロコーストを根拠としている。ホロコーストの記憶は、生存者にとってはもちろん、戦後世代の人々や直接の当事者ではない人々によっても共有されている。また、すでにみたようにホロコーストの記憶はユダヤ人アイデンティティの強化のために、今日戦略としてますます動員されている。また、今日イスラエルに移民してくる人々は彼らの居住地での疎外感や被差別感に「反ユダヤ主義」を投影さ

せ、イスラエル国家を彼らを迎えてくれるバイト（家）であり避難所であるとして信任する。さらにイスラエル内に存在する民族的な差異はユダヤ人国家の存立にとっての「脅威」としてとらえられ、「ユダヤ人アイデンティティの領土化」に対する疑問と批判はイスラエル国家に敵対する新たな「反ユダヤ主義」と認識されて、ユダヤ人の集合的アイデンティティのための養分に転化する。

すなわち、イスラエルによるパレスチナ人の権利と要求への制限は、「他者」であるかれらへの不信と脅威の表明であるが、パレスチナ人を「外国人化」している限り、ユダヤ人は自らを「脅かされている」存在として認識する。つまり、パレスチナ人を「外国人化」することは、ユダヤ人が「脅かされている」という脅威をユダヤ人に実感させ、さらに「安全保障」の名において、「脅かしている」人々への抑圧に対する言い訳となるのである。

しかし、こうした意識とアイデンティティの在り方は、「敵対する他者」の存在を永遠に想定してしまうという意味で、根源的な自己矛盾を内包している。「反ユダヤ主義」の可能性が払拭されれば、シオニズムは説得性を失い、ユダヤ人国家としてイスラエルが存立することへの根拠も失われるからである。従って、「反ユダヤ主義」を無くすことは「民族的・国家的願い」であるにも関わらず、逆説的に、無くしてはならないものとなる。こうして、過去の「反ユダヤ主義」だけではなく、未来のいわば「想像の反ユダヤ主義」に規定されたユダヤ人アイデンティティが形成されそれがユダヤ人国家としてのイスラエル国家の正当性の根拠となる。ユダヤ人アイデンティティはイスラエル人アイデンティティに重ねられ、非ユダヤ人は、「見えない『国民』」となる。この過程のなかで、元来宗教的アイデンティティであったユダヤ人アイデンティティは、極めて他者否定的な政治的アイデンティティとして作用するものになり、「普通の人々」の人権感覚は、すでにみたように、「シチズンシップの歪み」に対して正常な判断機能を停止したものとなるのである。

エジプトやヨルダンとの国交樹立やイスラエルとPLOとの「相互承認」は、この文脈の中で考えたとき、イスラエルの生存権の認知という意味でまずは「敵対する他者」が減少したことを意味する。その限りでは、こうした「実績」の蓄積は一面ではシオニズムから説得性を奪うものである。しかし第三章の分析でみたように、人々の意識の中でめざされている「共存」は、「民族国家」と「民族国家」の棲み分けである。従ってあいかわらずそこには、「シチズンシップの歪み」を相対化する視点は埋め込まれていない。その意味で、伝統的なシオニズムイデオロギーは揺らいでいるとしても、イスラエルがユダヤ人国家として存続し続けることの自明性と正当性そのものが人々の意識の中で浸食されているとみることはできない。

ここで人々の意識の前提となっているのは、民族的「差異」と「同一性」に対する単純な絶対化で

ある。しかし、この「差異」や「同一性」は100%違っていたり、100%同じであるというような「対概念」であろうか。問題提起的にいうならば、「民族」的な差異や「エスニシティ」の差異は、「個体」差を超えるのだろうか。それは、「われわれ」と「かれら」や「私」と「あなた」とのあいだにある様々な差異や境界の「一つ」にすぎないのではないのか。民族的な差異はそれらの差異のすべてを超越した別格の位置には本来ないはずである。そう考えるならば、問題を解く鍵は、まず第一に、「かれら」のなかにある「われわれ」との同質性を自覚化していくことにある。それはまず、「われわれの国家」をつくろうとしているパレスチナ人の現在を、「われわれの国家」をつくろうとしたユダヤ人の過去として捉えることを意味する。しかし、それだけでは十分ではない。第二に、この視点は、「同質なわれわれ」という「われわれ」観を疑い、「われわれ」のなかの差異を自覚し、「民族的差異」を様々な差異の「一つにすぎないもの」として相対化していくことが重要である。「外人をいかにして組織の中にとりこみ、ないものとしてしまうか、ではなく、人みな外人としていかに共存していくか」^{注268}という視点がここに求められるのである。

われわれは、このイスラエルの国家のあり方を通して、「民族の自決」に伴う様々な問題や、「一民族一国家」イデオロギーの矛盾と限界をみることができる。それは、「国民国家」を作る過程で「国民」からはじき出されていく人々の姿であり、またこの「国民」からはじき出された人々が今日同じように自民族の国家を形成しようとしている姿である。

さて、今日の「国民国家」の変容の中で、「国籍」と「市民権」の分離ということが模索され始めている。例えばそれは、社会の構成員を「国民」ではなく「住民」に基礎をおいて考えるものであり、その背景には、「国民国家」の中に定住する外国人の増加という今日の状況がある。この「新しい市民権」には「居住性」という視点と基準が導入されているが、これは本研究でみてきたイスラエルの政治文化の議論とは違った意味と文脈において、オールタナティブな市民権の新たな方向性として注目すべきであると思われる。しかし、イスラエルのような「国籍」概念の公的不在という状況の中で、「居住」や「生活の拠点」の定義そのものが恣意的に設定される国家を前にすると、この新たな市民権の展望に現段階では全てを託すわけにはいかない。

全ての人々の「市民権」の実質的確保のためには、国家を超えた、国際的な共闘行動が不可欠であると同時に、「マイノリティ」の「市民権」が確保されているかどうかをそれぞれの「国民国家」のなかで問題にしていくことが、全ての「マジョリティ」の人々の責任である。そしてそのことは、当該国家の国家と民主主義の問題であるだけでなく、イスラエルの人々を未来の「想像の反ユダヤ主義」の呪縛から解き放つことに通じているといえよう。

^{注268} クリスティヴァ、『外国人』、法政大学出版局、1990年、5頁。

主要参考文献

日本語文献

- 池田明史編、『現代イスラエル政治—イシューと展開』、アジア経済研究所、1988年。
- 池田明史編、『中東和平と西岸・ガザ占領地問題の行方』、アジア経済研究所、1990年。
- 池田明史編、『イスラエル国家の諸問題』、アジア経済研究所、1994年。
- 井上俊ほか編、『民族・国家・エスニシティ』、岩波書店、1996年。
- 上野千鶴子・鄭暎恵対談「外国人問題とは何か—アイデンティティ解体のゲリラ戦略」『現代思想』、1993年8月号、56-83頁。
- 白杵陽、『パレスチナ人意識と離散パレスチナ人社会』加納弘勝編『中東の民衆と社会意識』、1991年a、161-210頁。
- 白杵陽、『イスラエル占領地の社会経済構造』清水学編『現代中東の構造変動』アジア経済研究所、1991年b、3-55頁。
- 白杵陽、『イスラエル建国、パレスチナ難民問題、およびアブドゥッラー国王—1948年戦争をめぐる『修正主義』学派の議論を中心として—』『アジア学論叢』第4号、大阪外国語大学アジア研究会、1994年、183-216頁。
- 白杵陽、『現代パレスチナ・イスラエル研究へのプロローグ——故大岩川和正氏の業績に寄せて——』『中東の民族と民族主義——資料と分析視角——』（所内資料）、アジア経済研究所、1995年、11-35頁。
- 白杵陽、『パレスチナ／イスラエル地域研究への序章—イスラエル政治社会研究における〈他者〉の表象の諸問題—』『地域研究論集』第1巻第1号、1997年a、67-91頁。
- 白杵陽、『差別からのドロップ・イン：イスラエルのモロッコ系ユダヤ人』栗原彬編『差別の社会学：共生の方へ』弘文堂、1997年b、109-122頁。
- 白杵陽、『見えざるユダヤ人—イスラエルの〈東洋〉』、平凡社、1998年a。
- 白杵陽、『イスラエル現代史における『修正主義』—『新しい歴史家』にとっての戦争、イスラエル建国、そしてパレスチナ人—』『歴史学研究』第712号、歴史学研究会、1998年b、17-25頁。
- 白杵陽、『真剣な議論が始まったポスト・シオニズム論争』『季刊アラブ』日本アラブ協会、1998年c、14-16頁。
- 白杵陽、『イスラエルにおける宗教、国家、そして政治—『誰がユダヤ人か』問題とその法制化をめぐって—』『国際政治』第121号、1999年a、95-107頁。
- 白杵陽、『原理主義』、岩波書店、1999年b。
- 白杵陽、『犠牲者としてのユダヤ人／パレスチナ人を超えて—ホロコースト、イスラエル、そしてパレスチナ人—』『思想』、第907号、2000年a、125-144頁。
- 白杵陽、『現代イスラエル研究における『ポスト・シオニズム』的潮流』『中東研究』、第460号、2000年b、23-29頁。
- 江口朴郎、『帝国主義と民族』、東京大学出版会、1954年。
- 大岩川和正、『中東戦争とイスラエル（Ⅰ）』『アジア経済』、第8巻10号、1967年a、91-106頁。
- 大岩川和正、『中東戦争とイスラエル（Ⅱ）』『アジア経済』、第8巻11号、1967年b、120-113頁。
- 大岩川和正、『イスラエルの政治変動に関する基本的視点』『中東総合研究』、第2号、アジア経済研究所、1975年、53-60頁。
- 大岩川和正、『現代イスラエルの社会経済構造—パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究』、東京大学出版会、1983年。
- 岡部一明、『多民族社会の到来』、御茶の水書房、1991年。
- 小熊英二、『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社、1995年。
- 小熊英二、『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、1998年。
- 奥山眞知・田巻松雄編『20世紀末の諸相—資本・国家・民族と「国際化」』、八千代出版、1993年。
- 奥山眞知・加納弘勝編、『地域研究入門（4）：中東・イスラム社会研究の理論と技法』、文化書房博文社、2000年。
- 海後宗臣・仲新・寺崎昌男、『教科書でみる近現代日本の教育』、東京書籍、1999年。

- 梶田孝道、『国際社会学のパーспекティブ』、東京大学出版会、1996年。
- 加藤節、『難民問題の歴史的文脈』、『世界』、1991年10月号、70-81頁。
- 鎌田真弓、『先住民族との『和解』：オーストラリア・ネイション創造のプロセス』、細川弘明・窪田幸子編『先住権時代のアボリジニ社会と伝統文化の動態』、国立民族学博物館共同研究会報告論集、近刊。
- 姜尚中、『オリエンタリズムの彼方へ』、岩波書店、1996年。
- 木畑洋一ほか編、『中東』、大月書店、1999年。
- 木村修三、『中東和平とイスラエル』、有斐閣、1991年。
- 木村直司・今井圭子、『民族問題の現在』、彩流社、1996年。
- 木村雅昭・廣岡正久編著、『国家と民族を問いなおす』、ミネルヴァ書房、1999年。
- 栗原彬編、『差別の社会学』、第三巻および第四巻、弘文堂、1997年。
- 小岸昭、『離散するユダヤ人』、岩波新書、1997年。
- 斎藤日出治、『国家を越える市民社会』、現代企画室、1998年。
- 桜井啓子、『革命イランの教科書メディア』、岩波書店、1999年。
- 酒井直樹他、『ナショナリティの脱構築』、柏書房、1996年。
- 佐藤成基、『ネイション・ナショナリズム・エスニシティ——歴史社会学的考察——』、『思想』、854号、1995年8月号、103-127頁。
- 佐藤成基、『ナショナリズムのダイナミックス——ドイツと日本の「ネーション」概念の形成と変容をめぐって——』、『社会学評論』、第51巻、第1号、2000年、37-53頁。
- 下村由一・南塚信吾編、『マイノリティと近代史』、彩流社、1996年。
- 新日本文学会編、『いま国家を超えて』、御茶の水書房、1991年。
- 田口富久・鈴木一人、『グローバリゼーションと国民国家』、青木書店、1997年。
- 立山良司、『揺れるユダヤ人国家——ポスト・シオニズム』、文藝春秋、2000年。
- 田中浩編、『現代世界と国民国家の将来』、御茶の水書房、1990年。
- 千葉眞、『ラディカルデモクラシーの地平』、新評論、1995年。
- 土井敏邦、『アメリカのパレスチナ人』、すずさわ書店、1991年。
- 時安邦治、『文化、アイデンティティ、承認の政治』、『年報 人間科学』大阪大学人間科学部、第18号、1997年、183-195頁。
- 富岡倍雄、『パレスチナ問題の歴史と国民国家—パレスチナ人と現代世界』、明石書店、1993年。
- 日本政治学会編、『国民国家の形成と政治文化』、岩波書店、1978年。
- 野村真理、『ウイーンのユダヤ人』、御茶の水書房、1999年。
- 蓮實重彦・山内昌之編、『いま、なぜ民族か』、東大出版会、1994年。
- 初瀬龍平編著、『エスニシティと多文化主義』、同文館、1996年。
- 花崎皋平、『アイデンティティと共生の哲学』、築摩書房、1993年。
- 馬場伸也、『アイデンティティの国際政治学』、東京大学出版会、1980年。
- 藤田進、『蘇るパレスチナ』、東大出版会、1989年。
- 村山雅人、『反ユダヤ主義』、講談社、1995年。
- 山影進、『国家と民族をとらえ直すには個の鋭敏な思考と意識が必要だ』、『国家と民族—なぜ人々は争うのか？』、学習研究社、1992年、187-194頁。
- 山根常男、『家族の本質—キブツに家族は存在するか—』、『社会学評論』52号、1963年、37—55頁。
- 山根常男、『キブツ—その社会的分析』誠信書房、1965年。
- 山内昌之、『民族と国家』、岩波書店、1993年a。
- 山内昌之編、『二十一世紀の民族と国家』、日本経済新聞社、1993年b。
- 山本敬三、『国籍』、三省堂、1984年。
- 湯浅赳男、『民族問題の史的構造』、現代評論社、1973年。
- 吉野耕作、『文化ナショナリズムの社会学』、名古屋大学出版会、1997年。
- 良知力・廣松渉編、『ユダヤ人問題』、御茶の水書房、1986年。
- 李 光一、『デニズンと国民国家』、『思想』、岩波書店、1995年8月号、47-62頁。
- 歴史学研究会編、『国民国家を問う』、青木書店、1994年。

邦訳文献

- アンダーソン B.、『想像の共同体』、リブレポート、1987年。(Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Verso, London, 1983.)
- 同『増補 想像の共同体』、NTT出版、1997年。(Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Revised Edition, Verso, London and New York, 1991.)
- アレント H.、『全体主義の起源』、全三巻、みすず書房、1972年。(Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, New York, 1951.)
- アレント H.、『エルサレムのアイヒマン』、みすず書房、1969年。(Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem*, The Viking Press, New York, 1963.)
- バリバル E./ウォーラーステイン I.、『人種・国民・階級』、大村書院、1995年。(Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein, *Race, nation, classe*, Editions La Découverte, 1990.)
- バルト F.、『エスニック集団の境界』、青柳まちこ編、『「エスニック」とは何か』、新泉社、1996年、23-71頁。(Frederik Barth, *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Differences*, Little Brown and Company, Boston, 1969.)
- カントロヴィッチ E.H.『祖国のために死ぬこと』、みすず書房、1993年。(Ernst Hartwig Kantorowicz, 'Pro Patria Mori in Medieval Political Thought', *American Historical Review*, LVI, 1951, pp.472-492. 'Mysteries of State, An Absolutist Concept and Its Late Medieval Origins', *The Harvard Theological Review*, XLVIII, 1955, pp.65-91. 'Christus-Fiscus' in *Synopsis, Festgabe für Alfred Weber*, Heidelberg, 1948, pp.223-235. 'Kingship under the Impact of Scientific Jurisprudence', in eds. by M.Clagett, G.Post, R.Reynolds, *Twelfth-Century Europe and the Foundations of Modern Society*, Madison, Wisc., 1961, pp.89-111. 'Dante's "Two Suns"', in *Semitic and Oriental Studies Presented to William Popper*, Berkeley and Los Angeles, 1951, pp.217-231. 'The Sovereignty of the Artist, A Note on Legal Maxims and Renaissance Theories of Art', in ed.by Millard Meiss, *De Artibus Opuscula XL: Essays in Honor of Erwin Panofsky*, New York, 1961, pp.267-279.)
- チョウ R.、『ディアスポラの知識人』、青土社、1998年。(Rey Chow, *Writing Diaspora*, Indiana University Press, 1993.)
- コノリー・ウィリアム E.、『アイデンティティ\差異：他者性の政治』、岩波書店、1998年。(William E. Connolly, *Identity \Difference: Democratic Negotiations of Political Paradox*, Cornell University Press, Ithaca, 1991.)
- ドラブキン D.、『もう一つの社会キブツ』、大成出版、1967年。(Haim Darin-Drabkin, *The Other Society*, V. Gollancz, London, 1962.)
- フックス・エードゥアルト、『ユダヤ人カリカチュア』、柏書房、1993年。(Eduard Fuchs, *Die Juden in der Karikatur*, Ein Beitrag zur Kulturgeschichte, München, 1921.)
- グッドマン D.、『イスラエル声と顔』、朝日新聞社、1979年。
- グレイザー N.&モイニハン D.P.編、『民族とアイデンティティ』、三嶺書房、1984年。(ed.by Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan, *Ethnicity: Theory and Experience*, Harvard University Press, 1975.)
- ゴイトイソーロ J.、『パレスチナ日記』、みすず書房、1997年。(Juan Goytisolo, *Diario Palestino*, 1996, & *Ni Guerra, Ni Paz*, 1995.)
- グロスマン D.、『ヨルダン川西岸』、昌文社、1992年。(David Grossman, *The Yellow Wind*, Jonathan Cape Ltd, London, 1988.)
- グロスマン D.、『ユダヤ国家のパレスチナ人』、昌文社、1997年。(David Grossman, *Sleeping on a Wire*, New York, 1993.)
- アルヴァックス M.、『集合的記憶』、行路社、1989年。(Halbwachs M., *La Memoire Collective*, 1950.)
- ハーバーマス J./ノルテ E.他、『過ぎ去ろうとしない過去』、人文書院、1995年。(Jürgen Habermas and Ernst Nolte, et al., *Historikerstreit*, R. Piper GmbH & Co. KG, München, 1987.)
- ハンマー T.、『永住市民と国民国家』、明石書店、1999年。(Tomas Hammar, *Democracy and the Nation State*, Aldershot, Avebury, 1990.)
- ハルカビ Y.、『イスラエル・運命の刻』第三書館、1990年。(Yehoshafat Harkabi, *Israel's Fateful Hour* (trans. by L.Schramm), Harper&Row, New York, 1988.)

- ヘルツル T.、『ユダヤ人国家』、法政大学出版局、1991年。(Theodor Herzl, *Der Judenstaat*, Leipzig und Wien, 1896.)
- ホブズボウム E.&レンジャー T. 編、『創られた伝統』、紀伊国屋書店、1992年。(ed.by Eric Hobsbawm and Terence Ranger, *The Invention of Tradition*, The Press of the University of Cambridge, 1983.)
- ジャンセン G.H.、『シオニズム』、第三書館、1982年。(Godfrey.H.Jansen, *Zionism, Israel and Asian Nationalism*, the Institute for Palestine Studies, Beirut, 1971.)
- クリステヴァ J.、『外国人』、法政大学出版局、1990年。(Julia Kristeva, *Étrangers à nous-mêmes*, Librairie Arthème Fayard, 1988.)
- ラカー・ウォルター、『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』、第三書館、1987年。(Walter Laqueur, *A History of Zionism*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1972.)
- レヴィン M.、『イスラエル建国物語』、ミルトス、1994年。(Meyer Levin, *The Story of Israel*, 1967.)
- マーシャル T. H. / ボットモア T.、『シチズンシップと社会階級』、法律文化社、1993年。(T.H.Marshall and Tom Bottomore, *Citizenship and Social Class*, Pluto Press, 1950/1992.)
- マツペン (イスラエル社会主義組織)、広川隆一訳・解説、『パレスチナ・ゲリラとイスラエル革命—シオニズムの階級構造の分析／解説』『情況』、情況出版、1972年10月号、135-158頁。
- モッセ G.L.『大衆の国民化』、柏書房、1994年。(George L.Mosse, *The Nationalization of the Masses*, Howard Fertig, 1975.)
- オール・アキバ、『誰がユダヤ人か』、話の特集、1984年。(Akiva Orr, *The un-Jewish State: the Politics of Jewish Identity in Israel*, Ithaca Press, London, 1983.)
- オズ・アモス、『イスラエルに生きる人々』、昌文社、1985年。(Amos Oz, *In the Land of Israel*, Deborah Owen Ltd., London, 1983.)
- プレスナー H.、『遅れてきた国民』、名古屋大学出版会、1991年。(Helmuth Plessner, *Die Verspätete Nation. Über die Politische Verführbarkeit bürgerlichen Geistes*, 1935/1955.)
- ラト J.、『ヨーロッパにおける外国人の地方参政権』、明石書店、1997年。(Jan Rath, 'La participation des immigrés aux élections locales aux Pays-Bas', *Revue Européenne des Migrations Internationales*, vol.4, no.3, 1988, pp.23-35., 'Voting Rights', in ed. by Z. Layton-Henry, *The Political Rights of Migrant Workers in Western Europe*, 1990, pp.127-157.)
- ルナン E.、『国民とは何か?』『批評空間』、第九号、1993年。(Ernest Renan, 'Qu'est-ce qu'une nation?', in *Euvres Complètes*, vol.1, ed.by Calmann-Lévy, 1887=1882, pp.277-310.)
- ルナン E.他、『国民とは何か』、河出書房、1997年。
- ロバートソン、『グローバリゼーション』、東大出版会、1997年。(Roland Robertson, *Globalization*, Sage, 1992.)
- サイード E.W.、『オリエンタリズム』、平凡社、1986年。(Edward W. Said, *Orientalism*, Georges Borchardt Inc., New York, 1978.)
- サイード E.W.、『パレスチナとは何か』、岩波書店、1995年。(Edward W. Said, *After the Last Sky*, Pantheon Books, New York, 1986.)
- サイード E.W.、『ペンと剣』、れんが書房新社、1998年。(Edward W. Said, *The Pen and the Sword*, Common Courage Press, Monroe, Maine, 1994.)
- サルトル、『ユダヤ人』、岩波書店、1956年。(Jean-Paul Sartre, *Réflexions sur la Question Juive*, 1947.)
- テイラー C.、『多文化主義、承認、ヘーゲル』『思想』、岩波書店、1996年7月号、4-27頁。
- テイラー C. / ハバーマス J. ほか、『マルチカルチュラリズム』、岩波書店、1996年。(Charles Taylor, K.Anthony Appiah, Jürgen Habermas, Steven C.Rockefeller, Michael Walzer, and Susan Wolf, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton University Press, 1994.)
- イエエルシャルミ Y.H.、『ユダヤ人の記憶 ユダヤ人の歴史』、昌文社、1996年。(Yerushalmi Y.H., *Zakhor: Jewish History and Jewish Memory*, the University of Washington Press, 1982.)

外国語文献

- Anderson J., 'The Personal Lives of Strong Evaluators: Identity, Pluralism, and Ontology in Charles Taylor's Value Theory', *Constellations*, vol.3, no.1, 1996, pp.17-38.
- Arian Alan, *Ideological Cange in Israel*, the Press of Case Western Reserve University, Cleveland, 1968.
- ed. by Arian Asher and Shamir Michal, *The Elections in Israel 1992*, State University of New York Press, Albany, 1995.
- Bein Alex, *The Jewish Question*, Herzl Press, New York, 1990.
- Brand Laurie A., *Palestinians in the Arab World*, Columbia University Press, New York, 1988.
- Cathala David Hall, *The Peace Movement in Israel : 1967-87*, Macmillan Press Ltd., 1990.
- ed.by Chaliand G., *Minority Peoples in the Age of Nation-States*, Pluto Press, 1989.
- Cohen Aharon, *Israel and the Arab World*, Funk and Wagnalls, New York, 1970.
- Cohen Albert Phyllis, 'Israelite and Jew: how did nineteenth-century French Jews understand assimilation?', in ed.by Jonathan Frankel & Steven J.Zipperstein, *Assimilation and Community: The Jews in Nineteenth-Century Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1992, pp.88-109.
- Cohen Robin, *Global Diasporas*, University College London Press, London, 1997.
- Davis Uri, *Citizenship and the State: A Comparative Study of Citizenship Legislation in Israel, Jordan, Palestine, Syria and Lebanon*, Ithaca Press, Berkshire, UK, 1997.
- Douglas Lawrence, 'The Memory of Judgment: The Law, the Holocaust, and Denial', *History and Memory*, Indiana University Press, vol.7, no.2, 1996, pp.100-120.
- Edelman Martin, *Courts, Politics, and Culture in Israel*, University Press of Virginia, Charlottesville and London, 1994.
- Eisenstadt S.N., *The Transformation of Israeli Society*, Weidenfeld and Nicolson, London, 1985.
- Farsoun S.K. & Zacharia C. E., *Palestine and the Palestinians*, Westview Press, Colorado, 1997.
- Fraser N., 'Multiculturalism and Gender Equity', *Constellations*, vol.3, no.1, 1996, pp.61-72.
- ed.by Goldberg D.T. & Krausz M., *Jewish Identity*, Temple University Press, 1993.
- Gottlieb Roger S., 'The Dialectics of National Identity: Left-Wing Antisemitism and the Arab-Israel Conflict', *Socialist Review*, no.47, Sep./Oct. 1979, pp.19-52.
- Gottlieb Roger S., 'The Dialectics of National Identity Revisited: A Reply to Johnson', *Socialist Review*, no.47, Sep./Oct. 1979, pp.63-69.
- Helman Sara, 'Negotiating Obligations, Creating Rights: Conscientious Objection and the Redefinition of Citizenship in Israel', *Citizenship Studies*, vol.3, no.1, 1999, pp.45-70.
- Herman Simon N., 'Ethnic Identity and Historical Time Perspective: The Impact of the Holocaust (Destruction of European Jewry) on Jewish Identity', (Paper delivered at a conference on ethnic relations held under the auspices of the International Social Science Council at Frascati, Italy, March 1972).
- Herzog Hana, 'A Forgotten Chapter in the Historiography of the Yishuv: Women's Organizations', *Cathedra*, no.70, 1994, pp.111-133.
- Hobsbawm E.J., *Nation and Nationalism Since 1780*, Cambridge University Press, Cambridge, 1990.
- Hyman Paula E., 'The social contexts of assimilation: village Jews and city Jews in Alsace', in ed. by Frankel & Zipperstein, *Assimilation and Community: The Jews in Nineteenth-Century Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1992, pp. 110-129.
- Johnson Peter, 'Ahistorical Dialectics: A Response to Roger Gottlieb', *Socialist Review*, no.47, Sep./Oct. 1979, pp.53-62.
- Kimmerling Baruch, *Zionism and Territory*, University of California, Berkeley, 1983a.
- Kimmerling Baruch, *Zionism and Economy*, Schenkman Publishing Company, Cambridge, Mass., 1983b.
- Kimmerling Baruch & Migdal Joel S., *Palestinians: The Making of a People*, Free Press, New York, 1993.
- Kimmerling Baruch, 'Political Subcultures and Civilian Militarism in a Settler-Immigrant Society', in ed. by Bar-Tal D., Jacobson D. and Kliemann A., *Security Concerns: Insights from the Israeli Experience*, Contemporary Studies in Sociology, vol.17, JAI Press, Stamford, Connecticut, 1998, pp.395-415.
- ed.by Krausz Ernest, *Studies of Israeli Society*, vol. I, Transaction, Inc., New Jersey, 1980.

- ed.by Lazar Sarah Ozacky, *Seven Roads: Theoretical Options for the Status of the Arabs in Israel*, The Institute for Peace Research, Givat Haviva, 1999.
- ed.by Levi-Faur David, Sheffer Gabriel and Vogel David, *Israel: The Dynamics of Change and Continuity*, Frank Cass, London and Portland, OR., 1999.
- ed.by Lockman Zachary & Beinin Joel, *Intifada*, South End Press, Boston, MA, 1989.
- Lustick Ian, *Arabs in the Jewish State*, University of Texas Press, Austin, 1980.
- Morris Benny, *The Birth of the Palestinian Refugees Problem, 1947-1949*, Cambridge University Press, Cambridge, 1987.
- Nicholson L., 'To be or Not to be: Charles Taylor and the Politics of Recognition', *Constellations*, vol.3, no.1,1996, pp.1-16.
- Nazzal Nafez, *The Palestinian Exodus from Galilee 1948*, The Institute for Palestine Studies, Beirut, 1978.
- Orr Akiva, *Israel Politics, Myths, and Identity Crises*, Pluto Press, London,Boulder,Colorado, 1994.
- Pappe Ilan, *The Making of the Arab-Israeli Conflict: 1947-1951*, I.B.Tauris, London, 1992.
- Pappe Ilan, 'Critique and Agenda: The Post-Zionist Scholars in Israel', *History and Memory*, special issue: Israeli Historiography Revisited, Indiana University Press, vol. 7, no.1, 1995, pp.66-90.
- ed. by Penniman H. R., *Israel at the Polls: The Knesset Elections of 1977*, American Enterprise Institute for Public Policy Research, Washington, D.C., 1979.
- Peled Yoav, 'Ethnic Democracy and the Legal Construction of Citizenship: Arab Citizens of the Jewish State,' *American Political Science Review*, vol. 86, no.2, 1992, pp.432-443.
- Peled Yoav & Shafir Gershon, 'The Roots of Peacemaking: The Dynamics of Citizenship in Israel, 1948-93,' *International Journal of Middle East Studies*, vol. 28, no.3, 1996, pp.391-413.
- Peled Yoav, 'Towards a Redefinition of Jewish Nationalism in Israel: the enigma of Shas,' *Ethnic and Racial Studies*, vol. 21, no.4, Routledge, 1998, pp.703-727.
- Peretz Don, *Palestinians, Refugees, and the Middle East Peace Process*, United States Institute of Peace Press, Washington, D.C., 1993.
- ed.by Reich B. and Kieval G. R., *Israeli Politics in the 1990s*, Greenwood Press, 1991.
- Ram Uri, *The Changing Agenda of Israeli Sociology: Theory, Ideology, and Identity*, State University of New York Press, Albany, 1995.
- Ram Uri, 'Postnationalist Pasts : The Case of Israel,' *Social Science History*, vol.22, no.4, 1998, pp.513-545.
- Ram Uri, 'The State of the Nation : Contemporary Challenges to Zionism in Israel,' *Constellations*, vol. 6, no.3, 1999a, pp.325-338.
- Ram Uri, 'The Promised Land of Business Opportunities : Liberal Post-Zionism in the Glocal Age,' *The New Israel*, in ed.by Gershon Shafir and Yoav Peled, Westview Press, Boulder CO., 1999b, pp. 217-240.
- Ravitzky Aviezer, *Religious and Secular Jews in Israel: A Kulturkampf?*, Israel Democracy Institute, Jerusalem, 1999.
- Rokem Freddie, 'Cultural Transformations of Evil and Pain: Some recent changes in the Israeli perception of the Holocaust,' in ed. by Hans-Peter Bayerdörfer, *Theatralia Judaica (II)*, Max Niemeyer Verlag GmbH & Co. KG, Tübingen, 1996, pp.217-238.
- Rosa H., 'Cultural Relativism and Social Criticism from a Taylorian Perspective,' *Constellations*, vol. 3, no.1, 1996, pp.39-60.
- Rosenfeld Henry, 'The Class Situation of the Arab National Minority in Israel,' *Comparative Studies in Society and History*, vol. 20, no. 3, 1978, pp. 374-407.
- Rouhana Nadim N., *Palestinian Citizens in an Ethnic Jewish State: Identities in Conflict*, Yale University Press, New Haven and London, 1997.
- Shalev Michael, *Labor and the Political Economy of Israel*, Oxford University Press, Oxford, 1992.
- Shapiro Yonathan, 'The Historical Origins of Israeli Democracy,' in ed. by E. Sprinzak & L. Diamond, *Israeli Democracy Under Stress*, Lynne Rienner Publishers, Boulder&London, 1993, pp. 65-82.
- Shlaim Avi, *Collusion across the Jordan: King Abdullah, the Zionist Movement, and the Partition of Palestine*, Columbia University Press, New York, 1988.
- Silberstein Laurence J., *The Postzionism Debates: Knowledge and Power in Israeli Culture*, Routledge, New

- York and London, 1999.
- Smith A.D., *National Identity*, Penguin Books, 1991.
- Shafir Gershon, ' Changing Nationalism and Israel's "Open Frontier" on the West Bank,' *Theory and Society*, vol. 13, no.6, 1984, pp. 803-827.
- Shafir Gershon, *Land , Labor and the Origins of the Israeli-Palestinian Conflict*, Cambridge University Press, Cambridge, 1989.
- Shafir Gershon & Peled Yoav, ' Citizenship and stratification in an ethnic democracy ,' *Ethnic and Racial Studies*, special issue: Aspects of ethnic division in contemporary Israel, vol. 21, no.3, Routledge, 1998, pp.408-427.
- Smootha Sammy, *Israel: Pluralism and Conflict*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1978.
- Smootha S.&Peres Y., 'The Dynamics of Ethnic Inequalities: The Case of Israel ,' in ed.by Ernest Krausz, *Studies of Israeli Society*, vol. I , Transaction, Inc., New Jersey, 1980, pp.165-181.
- Smootha Sammy, ' Minority Responses in A Plural Society: A Typology of the Arabs in Israel ,' *Sociology and Social Research*, vol. 67, no. 4, 1983, pp. 436-456.
- Smootha Sammy, *Arabs and Jews in Israel*, vol. 1, Westview Press, Boulder, CO, 1989.
- Smootha Sammy, 'Minority status in an ethnic democracy: the status of the Arab minority in Israel, ' *Ethnic and Racial Studies*, vol. 13, no. 3, 1990, pp. 389-413.
- Smootha Sammy, ' Class, Ethnic, and National Cleavages and Democracy in Israel ,' in ed. by E. Sprinzak & L. Diamond, *Israeli Democracy Under Stress*, Lynne Rienner Publishers, Boulder&London, 1993, pp.309-342.
- Smootha Sammy, *Control and Consent as Integrative Mechanisms in Ethnic Democracies: The Case of the Arab Minority in Israel*, 34th World Congress of the International Institute of Sociology, Tel Aviv, 1999.
- Sofer Sasson, *Begin: An Anatomy of Leadership*, Basil Blackwell, Oxford and New York, 1988.
- ed.by Stone R.A.& Zenner W. P., *Critical Essays on Israeli Social Issues and Scholarship*, State University of New York, 1994.
- Swirski Shlomo, *Israel: The Oriental Majority*, Zed Books, London, 1989.
- ed.by Rolef S.H., *Political Dictionary of the State of Israel*, The Jerusalem Publishing House, Jerusalem, 1993.
- Tawil Raymonda Hawa, *My home My prison*, Peretz Kidron and Adam Publishers, New York, 1979.
- Viteles Harry, *A History of the Co-operative Movement in Israel*, 7 volumes, Vallentine, Mitchell&Co.Ltd., London, 1967.
- ed. by Wistrich Robert and Ohana David, *The Shaping of Israeli Identity: Myth, Memory and Trauma*, Frank Cass, London, 1995.
- Yiftachel Oren, *Planning a Mixed Region in Israel: The Political Geography of Arab-Jewish Relations in the Galilee*, Avebury, Aldershot, Hants, 1992.
- Yiftachel Oren, ' Israeli society and Jewish-Palestinian reconciliation: "Ethnocracy" and its territorial contradictions, ' *Middle East Journal*, vol. 51, no. 4, 1997, pp. 505-519.

ヘブライ語文献

- Benyamin Neuberger, *ha-Miflagot be-Israel (Political Parties in Israel)*, Open University of Israel, Ramat-Aviv, 1997.
- Israeli Educational Television and Ministry of Education, Culture and Sport, *Eretz Moledet (Fatherland)*, part 1, 1997.
- Israeli Educational Television and Ministry of Education, Culture and Sport, *Eretz Moledet (Fatherland)*, part 2, 1998.
- Ministry of Education and Culture, *ha-Yezia meha-Homot (Going Out of the Walls)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1976. (for religious schools)
- Ministry of Education and Culture, *ha-Yezia meha-Homot (Going Out of the Walls)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1976. (for secular schools)

- Ministry of Education and Culture, *ha-Masa el ha-Kibbutz (Journey to the Kibbutz)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1981.
- Ministry of Education and Culture, *Masa ba-Moshavot ha-Rishonot (Journey to the First Settlements)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1992.
- Ministry of Education and Culture, *Yerushalayim Irenu (Jerusalem our city)*, Am-Oved Publishers Ltd., Tel Aviv, 1993.
- Ministry of Education and Culture, *Masa el ha-Democratia ha-Yisraelit (Journey to the Israeli Democracy)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1994.
- Ministry of Education, Culture and Sport, *mi-Shamranut le-Kidma (From Conservatism to Progress)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1998.
- Ministry of Education, Culture and Sport, *Tochnit ha-Limudim be-Toldot ha-Ishuv (Study Program in History of Settling in Israel)*, Jerusalem, 1989.
- Ministry of Education and Culture, *Tochnit ha-Limudim be-Ezrahut (Study Program in Civil Studies)*, Jerusalem, 1990.
- Ministry of Education, Culture and Sport, *Tochnit ha-Limudim be-Historia (Study Program in History)*, Jerusalem, 1995.
- Sprinzak Dalia (et al.), *Facts and Data*, The ministry of education and Culture, Jerusalem, 1998.
- Van Leer Jerusalem Institute & Ministry of Education and Culture, *Yehudim va- Arabim bi-Medinat Yisrael (Jews and Arabs in the State of Israel)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1988.
- Van Leer Jerusalem Institute & Ministry of Education and Culture, *Anachnu u-Shcheneinu (We and Our Neighbors)*, Maalot Publishers Ltd., Jerusalem, 1989.

日本語雑誌

- 『現代思想：浮遊する国家』、青土社、21巻9号、1993年。
- 『現代思想：ユダヤ人』、青土社、22巻8号、1994年。
- 『現代思想：戦争の記憶』、青土社、23巻1号、1995年。
- 『現代思想：想像の共同体』、青土社、24巻9号、1996年。
- 『現代思想：市民とは誰か』、青土社、27巻5号、1999年。
- 『国際関係論シリーズ：国家と民族』、学習研究社、1992年。
- 『思想』、岩波書店、1995年8月号。
- 『窓：国境とは何か』、窓社、第5号、1990年。
- 『窓：民族とは何か』、窓社、第6号、1990年。

外国語雑誌

- Ethnic and Racial Studies*, special issue: Aspects of ethnic division in contemporary Israel, vol. 21, no.3, Routledge, 1998.
- In the Dispersion*, vol. 7, 1967.
- History and Memory*, special issue: Israeli Historiography Revisited, Indiana University Press, vol.7, no.1, 1995.
- History and Memory*, Indiana University Press, vol. 7, no. 2, 1996.
- The Israel Annals of Psychiatry and Related Disciplines*, vol. 4, no. 1, 1966.
- Jewish Journal of Sociology*, vol. 19, 1977.
- MERIP Reports*, no. 49, July 1976.
- Middle East Report*, no.152, 1988.
- Middle East Report*, no.154, 1988.
- Middle East Report*, vol. 23, no.2, 1993.
- News from within*, Alternative Information Center, vol. XIII, no.6, 1997.
- News from within*, Alternative Information Center, vol. XIII, no.9, 1997.
- News from within*, Alternative Information Center, vol. XIII, no.10, 1997.
- New Outlook*, vol. 28, no. 4, 1985.

New Outlook, vol. 34, no. 1, 1991.
New Outlook, vol. 34, no. 2, 1991.
New Outlook, vol. 34, no. 3, 1991.
New Outlook, vol. 35, no. 2, 1992.
New Outlook, vol. 35, no. 3, 1992.
New Outlook, vol. 36, no. 1, 1993.
The New York Times Magazine, Sep. 12, 1971.
Plural Societies, vol. 14, no. 1-2, 1983.
Sociology and Social Research, vol. 67, no. 4, 1983.

統計資料

Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1980*, Jerusalem, 1980.
 Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1992*, Jerusalem, 1992.
 Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1995*, Jerusalem, 1995.
 Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1997*, Jerusalem, 1997.
 Central Bureau of Statistics, *Statistical Abstract of Israel 1998*, Jerusalem, 1998.
 Central Bureau of Statistics, *Demographic Characteristics of the Population in Israel 1994*, Central Bureau of Statistics Publication no.1023, Jerusalem, 1996.
 Central Bureau of Statistics, *Survey of Teaching Staff: Hebrew and Arab Education 1992/93*, Central Bureau of Statistics Publication no.1036, Jerusalem, 1996.
 Central Bureau of Statistics, *Immigration to Israel :1995*, Central Bureau of Statistics Publication no.1037, Jerusalem, 1996.
 Central Bureau of Statistics, *Immigrant Population from the Former USSR selected data 1995*, Jerusalem, 1997.
 Central Bureau of Statistics, *Immigrant Population from Former USSR 1995: Demographic Trends*, Central Bureau of Statistics Publication no.1076, Jerusalem, 1998.
 Central Bureau of Statistics, *Labour Force Surveys 1996*, Central Bureau of Statistics Publication no.1080, Jerusalem, 1998.
 Israel Central Bureau of Statistics, *Judaea, Samaria and Gaza Area Statistics*, Jerusalem, 1995.
 Ministry of Education, Culture and Sports, *The Level of Education of the Population in Israel :1977-1993*, Central Bureau of Statistics Publication no.1027, Jerusalem, 1996.
 Ministry of Education, Culture and Sports, *Educational Institutions: Kindergartens, Primary and Secondary Schools 1955/96*, Central Bureau of Statistics, Jerusalem, 1997.
 Palestinian Central Bureau of Statistics (PCBS), *Census Preliminary Results - 1997*, Ramallah, 1998.
 PCBS, *The Demographic Survey in the West Bank and Gaza Strip: Final Report*, Ramallah, 1997.
 PCBS, *Labour Force Survey Annual Report:1996*, Ramallah, 1998.
 PCBS, Ministry of Education, *Education Statistical Yearbook:1997/1998*, Ramallah, 1998.
 PCBS, *The Palestinian Expenditure and Consumption Survey -1997: Expenditure and Consumption Levels -The Annual Report*, Ramallah, 1998.
 Palestinian Economic Policy Research Institute(MAS), *MAS Economic Monitor*, no.3, 1997.
 MAS, *Social Monitor*, no.1, 1998.

ホームページ

AIC (Alternative Information Center), <http://www.aic.org>
 BTSELEM (The Israeli Information Center for Human Rights in the Occupied Territories),
<http://www.btselem.org/>
 Israel Ministry of Foreign Affairs, <http://www.israel-mfa.gov.il/mfa/home.asp>
 Jerusalem Post, <http://www.jpost.co.il/>
 Ministry of Education Culture&Sport, *OWL-Internet&Educational Information*,

http://owl.education.gov.il/english/ind__less.htm
MAS(Palestinian Economic Policy Research Institute), www.palecon.org/masdir/index.html
UNSCO (United Nations Office of the Special Coordinator in the Occupied Territories), *Second Quarterly Report*, Section I, April 1997., <http://www.arts.mcgill.ca/MEPP/unsco/unqr.html>

その他

法務大臣官房司法法制調査部編『現行日本法規：教育（1）』第36巻、帝国地方行政学会発行、1989年改訂版。

『月間イスラエル』、日本・イスラエル親善協会、1998年6月号。

『中東・パレスチナ翻訳資料集：Chun-Pon!』、パレスチナ行動委員会、第1号—7号、1997年。

『豊穡な記憶』、パレスチナ交流センター、第0号—第7号、1996年。

第8号—第9号、1997年。

ギタイ A. 監督、『エルサレムの家』、1996年。

ARTICLE 74, no. 25, BADIL Resource Center for Palestinian Residency & Refugee Rights, September 1998.

Encyclopedia Judaica, Keter Publishing House Jerusalem Ltd., Jerusalem, 1972.

International Herald Tribune, Sep.7.1988.

Israeli Mirror, no. 806, 1991.

Palestine / Israel Directory, Alternative Information Center, Jerusalem, 1996.

Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs (PASSIA), *PASSIA1998*, Jerusalem, 1997.

The Settlement Division of the Zionist Organization, *Map of Settlement in Eretz Israel*, Survey of Israel, Tel Aviv, 1997.

DB
1691
2000
HG

イスラエルの政治文化とシチズンシップ

資料編

常磐大学人間科学部助教授

奥 山 真 知

寄贈
奥山真知氏

04010973

聞き取り調査資料

付記

以下は、2000年3月30日から4月17日にエルサレムでおこなったインタビューのためのプレ調査票およびインタビューの日本語訳である。（聞き取りは、ヘブライ語でおこなった。プレ調査票の原票は順に、高校生用、若い世代用、移民用である。）

対象者は、高校生五名（S 1からS 5）、兵役を終えた若い世代六名（Y 1からY 6）、移民十一名（I 1からI 11）、計二十二名である。

訳にあたっては、回答者の語りのニュアンスがなるべく伝わるように留意した。各回答者の一頁目は、面接の前にあらかじめ依頼していた質問票の回答である。二枚目以降はその質問票をもとに様々な質問をし、自由にこたえてもらったものである。特殊な用語については各回答者ごとに初出の箇所に日本語の説明をいれた。また、ヘブライ語のニュアンスを知る上で訳さない方がいいと思われる表現については、カタカナ表記にし、訳をいれた。また、ヤハドット(Judaism)という言葉は、「ユダヤ主義」、「ユダヤ教」など、ニュアンスに応じて訳をかえることにした。ダティという言葉なども、語義は「宗教的」という意味であるが、「宗教的な人々」や「宗教的ユダヤ人」と訳した方が自然な場合にはそうした訳を用いた。オリジナルな調査票ではこの他に氏名、住所、電話番号もあるが、日本語訳ではこの項目は省略した。

שאלון (חלק ראשון)

1. שם: _____
2. תאריך לידה: _____
3. מקום הלידה. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
4. מין (נא להקיף בעיגול א או ב). א. זכר ב. נקבה
5. מקום לידת האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
6. מקום לידת האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
7. מקום לידת הסבא מצד האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
מקום לידת הסבתא מצד האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
8. מקום לידת הסבא מצד האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
מקום לידת הסבתא מצד האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
9. הכתובת הנוכחית שלך: _____

10. מספר הטלפון שלך: _____

שאלון (חלק שני)

1. האם אתה מרגיש שאתה שייך לעם היהודי? (נא להקיף בעיגול א או ב).

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, באילו מקרים או מצבים אתה מרגיש יהודי? _____

2. מתי (באילו אירועים או מצבים) אתה חש בזהות הישראלית שלך באופן יומיומי?

3. האם אתה חושב שאתה ציוני? (נא להקיף בעיגול)

א. כן

ב. לא

ג. אינני יודע/ת

4. האם לדעתך כל היהודים בעולם הם עם אחד? (נא להקיף בעיגול)

א. כן

ב. לא

ג. אינני יודע/ת

5. האם אתה שומר, במסגרת המשפחה, על מנהגים יהודיים מסורתיים כלשהם? (נא להקיף בעיגול)

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, מהם המנהגים האלה? _____

6. האם ביקרת במוזיאון "יד ושם"?

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, מתי ביקרת בו? _____

ומה היתה התרשמותך מן הביקור? _____

7. אנא הגדר/הגדיר את המונחים הבאים:

א. עם (nation): _____

ב. לאום או לאומיות (nationality): _____

ג. אזרחות (citizenship): _____

8. מהן ציפיותיך מצבא ההגנה לישראל? _____

9. מהי הערכתך על צה"ל לאור ציפיות אלה? _____

שאלון (חלק ראשון)

1. שם: _____
2. תאריך לידה: _____
3. מקום הלידה. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
4. מין (נא להקיף בעיגול א או ב). א. זכר ב. נקבה
5. מקום לידת האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
6. מקום לידת האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
7. מקום לידת הסבא מצד האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
מקום לידת הסבתא מצד האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
8. מקום לידת הסבא מצד האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
מקום לידת הסבתא מצד האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
9. הכתובת הנוכחית שלך: _____

10. מספר הטלפון שלך: _____

שאלון (חלק שני)

1. האם אתה מרגיש שאתה שייך לעם היהודי? (נא להקיף בעיגול א או ב).

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, באילו מקרים או מצבים אתה מרגיש יהודי? _____

2. מתי (באילו אירועים או מצבים) אתה חש בזהות הישראלית שלך באופן יומיומי?

3. האם אתה חושב שאתה ציוני? (נא להקיף בעיגול)

א. כן

ב. לא

ג. אינני יודע/ת

4. האם לדעתך כל היהודים בעולם הם עם אחד? (נא להקיף בעיגול)

א. כן

ב. לא

ג. אינני יודע/ת

5. האם אתה שומר, במסגרת המשפחה, על מנהגים יהודיים מסורתיים כלשהם? (נא להקיף בעיגול)

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, מהם המנהגים האלה? _____

6. האם ביקרת במוזיאון "יד ושם"?

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, מתי ביקרת בו? _____

ומה היתה התרשמותך מן הביקור? _____

7. אנא הגדר/הגדירי את המונחים הבאים:

א. עם (nation): _____

ב. לאוס או לאומיות (nationality): _____

ג. אזרחות (citizenship): _____

8. מהן ציפיותיך מצבא ההגנה לישראל? _____

9. מהי הערכתך על צה"ל לאור ציפיות אלה? _____

10. לאיזו מפלגה הצבעת בבחירות האחרונות לכנסת?

א. _____

ב. לא בחרתי

11. לאילו מפלגות הצבעת בעבר? אנא רשום באופן כרונולוגי את שמות כל המפלגות אשר בעבורן

הצבעת בבחירות קודמות: _____

שאלון (חלק ראשון)

1. שם: _____
2. תאריך לידה: _____
3. מקום הלידה. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
4. מין (נא להקיף בעיגול א או ב). א. זכר ב. נקבה
5. מקום לידת האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
6. מקום לידת האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
7. מקום לידת הסבא מצד האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
מקום לידת הסבתא מצד האב. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
8. מקום לידת הסבא מצד האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
מקום לידת הסבתא מצד האם. ארץ: _____ עיר או יישוב: _____
9. העיסוק הנוכחי שלך: _____

10. העיסוק של בן/בת זוגך: _____

11. עיסוקים שלך בעבר (באופן כרונולוגי): _____

12. תחום העיסוק של האב: _____

13. תחום העיסוק של האם: _____

14. המוסד החינוכי האחרון שסיימת: _____

15. שנת עלייתך לישראל: _____

16. בני המשפחה שעימם עלית לישראל: _____

17. המקומות שבהם התגוררת בישראל לאחר עלייתך (באופן כרונולוגי): _____

18. הכתובת הנוכחית שלך: _____

19. מספר הטלפון שלך: _____

שאלון (חלק שני)

1. האם אתה מרגיש שאתה שייך לעם היהודי? (נא להקיף בעיגול א או ב).

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, באילו מקרים או מצבים אתה מרגיש יהודי? _____

2. מתי (באילו אירועים או מצבים) אתה חש בזהות הישראלית שלך באופן יומיומי?

3. האם אתה חושב שאתה ציוני? (נא להקיף בעיגול)

א. כן

ב. לא

ג. אינני יודע/ת

4. האם לדעתך כל היהודים בעולם הם עם אחד? (נא להקיף בעיגול)

א. כן

ב. לא

ג. אינני יודע/ת

5. האם אתה שומר, במסגרת המשפחה, על מנהגים יהודיים מסורתיים כלשהם? (נא להקיף בעיגול)

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, מהם המנהגים האלה? _____

6. האם ביקרת במוזיאון "יד ושם"?

א. לא

ב. כן

אם ענית כן, מתי ביקרת בו? _____

ומה היתה התרשמותך מן הביקור? _____

7. אנא הגדר/הגדיר את המונחים הבאים:

א. עם (nation): _____

ב. לאום או לאומיות (nationality): _____

ג. אזרחות (citizenship): _____

8. מהן ציפיותיך מצבא ההגנה לישראל? _____

9. מהי הערכתך על צה"ל לאור ציפיות אלה? _____

10. לאיזו מפלגה הצבעת בבחירות האחרונות לכנסת?

א. _____

ב. לא בחרתי

11. לאילו מפלגות הצבעת בעבר? אנא רשום באופן כרונולוגי את שמות כל המפלגות אשר בעבורן

הצבעת בבחירות קודמות: _____

S 1

生年月日：1984-1-11生まれ（16歳）

出生地：イスラエル エルサレム

性別：女

父親出生地：イスラエル エルサレム

母親出生地：ポーランド ヴロツラブ

父方祖父出生地：イスラエル ツファット

父方祖母出生地：イスラエル エルサレム

母方祖父出生地：ポーランド ヴロツラブ

母方祖母出生地：ポーランド ワルシャワ

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのような時にそう感じますか？

A 「ユダヤの祭日（ペサハ／プリム／ハヌカ／スコット）／ホロコスト記念日や兵士記念日／ユダヤ人ではない若者の集団に出会った時や、自分とは異なるユダヤ人の気質をもっている若者に会った時／自分がユダヤ人の特定の気質に属しているのだと思わされるような状況での出会いの時（学校でのユダヤ人とアラブ人との出会いや、宗教的ユダヤ人と世俗的ユダヤ人との出会いの時など）／外国にいる時。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「新聞を読んだり、ニュースを聞く時／ヘブライ文学を読む時／イスラエル兵士をみかける時／ヘブライ語のスラングを使う時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「いいえ。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「わからない。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

ペサハ／ハヌカでろうそくをともしこと／兄のパールミツバのお祝い

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。中学3年の学校行事で。」

感想：強いアイデンティフィケーションを感じた。（まず第一に人間として、次にユダヤ人として）人間というものについての悲しみと恥を感じた。自分の中にナチズムに対して（これまで）あまりにも少ない怒りとあまりに多い寛大さがあったことを感じた。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム（nation）：共通の起源と共通の歴史をもち、類似した文化をもつ人々の集団。

レオム（nationality）：定義が難しい。アムとエズラフットの間にあるもの。

エズラフット（citizenship）：所与の国家に対する、法律による帰属（それぞれの国家はシチズンシップについての独自の定義をもつ）。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「ハイラーキーと官僚制が今より少なくなること。兵士の配属を決めるのに各自の適性によりかなう決め方をすること。国家とその市民を守ること。しかし悪い力の行使をしないこと。防衛のための軍であっても征服のための軍とならないこと。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「イスラエル軍は、個々の兵士の必要に答えていない。兵士をその人に合う配属にしていけない。国家と市民を守ること的成功していると思うが、良くない理由で力の行使をすることが多すぎる。」

- Q 質問票で答えていただいた答えをみると、あなたは「学校でのアラブ人との出会い」ということを書かれていますが、学校でアラブ人に会うことがあるのですか？
- A 「はい。お互いにいたりきたりする特別授業があるのです。」
- Q その授業では具体的にどういうことをするのですか？
- A 「はじめに、私達がタイベというアラブ人の村・・・ここからバスで一時間半位の所にあります。・・・にでむいて、そこにある彼等の学校に行きました。その後、何班かに分かれて、彼等の家を訪ねました。」
- Q そこでどんなことを話したのですか？
- A 「男の子と女の子のことや、お互いの祭日のこと、それから政治のことも少し・・・」
- Q 一つの班は何人位ですか？
- A 「五人から七人位。」
- Q 彼等も（あなた達のところへ）訪ねてきたのですか？
- A 「はい。まだ来ていませんが、もうすぐ来ることになっています。」
- Q あなたは今16歳ですね？その授業は何年生のころからあるのですか？
- A 「今年です。」
- Q 今年が初めてですか？
- A 「はい。」
- Q そういう授業は年に何回位あるのですか？
- A 「三回から四回位です。」
- Q その授業の前後で何か考えが変化したことがありますか？
- A 「いいえ。私は前からアラブ人を知っていましたから。」
- Q どうして知ったのですか？
- A 「アラブ人と一緒にオーケストラに入っていました。そこでは、ユダヤ人のコース（注）カルチャーセンターのようなもの）でやっている様に、社会文化活動をしていました。だからアラブ人を知っていたのです。それに最初から、彼等を悪い人とは思っていませんでした。彼等も（私達と）同じ人間だと思っていました。」
- Q そういう授業があるというあなたの学校は、特別の例外的な学校なのではないですか？
- A 「全部の学校とは思いませんが、こういう授業がある学校は今たくさんあります。」
- Q 質問票のなかで二つのアイデンティティについてお聞きしていますが、あなたのなかで、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティは、同じ重みのものですか？・・・二つはどのような関係だといえますか？
- A 「私は、イスラエル人アイデンティティをユダヤ人アイデンティティよりも意識していると思います。」
- Q あなたは、自分を「シオニストとは思わない。」と答えていますが、それは、どういう意味ですか？
- A 「・・・私はこの場所－エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）－が重要だとは思いません。・・・私は自分をイスラエル人と感じていますが、それは文化や人々のせいであって場所のせいではないからです。」
- Q 質問票での「ユダヤ人が一つの民族だと思いますか。」という問に対するあなたの答えは、「わからない。」なのですが、「わからない。」というニュアンスを少し詳しく説明してもらえますか？
- A 「ヤハドット（ユダヤ主義）の中にも、色々な考え方があって、ユダヤ人の種類も様々だし、ユダヤ人が一つにつながっているとは思いません。」
- Q あなたは、これまでの自分の考え方を形成する上で、誰からもっとも影響をうけていると思いますか？
- A 「まず家族で、次に友達だと思います。」
- Q 質問票で似たような幾つかの概念について定義してもらいましたが、それとの関連でいくつかお尋ねします。アム（民族）、ウマ（国民）、レオム（民族／民族性）、レウミユッド（≡国籍）、エズラフット（市民権）、というような概念のそれぞれの違いについてです。まず、アムとウマには違いがあると思いますか？

A「ちがいがあと思いますが、どう説明したらいいかわかりません。」

Q アムとレオムはどうですか？

A「レオムはエズラフットにより関係していると思います。」

Q ウマとレオムでは？

A「ちがいがあと思いますが、どう説明したらいいかわかりません。」

Q あなたはどのアムに属しているかと聞かれたら、何と答えますか？

A「イスラエリット・イエフディヤ（ユダヤ・イスラエル人）です。」

Q あなたはどのウマに属しているかと聞かれたら？

A「イフディット（ユダヤ人）です。」

Q 兵役に就くことになったら、あなたの希望する配属というのはどういうところですか？

A「ガレイ・ツァハル（注）軍の放送局）の音楽担当か、教育部門です。」

Q 今イスラエルは、宗教諸政党の勢力と影響力が大きくなっています。イスラエルの将来に対し、あなたは「宗教」という点でどういうことを思いますか？

A「イスラエルの法律から宗教法というものがなくなるといいと思います。・・・一方、だんだんダティイム（宗教的な人々）の人口が増えていき、彼等の望む政策にだんだんなっていくと思います。」

Q ということは、あなたの望むように進んでいかないだろうということですね。

A「ええ。」

Q そういう問題について学校で話しをしたりすることはありますか？

A「少しは」

Q どんな議論になりますか？

A「シャバット（安息日）にバスがないのは頭にくるとか・・・宗教を理由に義務を怠っているのはけしからんとか・・・ダティイムのしていることは納得できないとか・・・色々です。」

Q あなたにとって、今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A「アラブとの紛争だと思います。」

Q イスラエルの民主主義ということについて、あなたはどう評価していますか？

A「・・・建て前としてはここには民主主義がありますが、・・・色々問題もあります。・・・みんなに等しくイスラエルに入る権利を与えていないことや、みんなが自分達の声を政治に反映できるようになっていないこと、・・・それから政府には時々賄賂がおこっています。・・・」

Q アラブ・パレスチナ人に対して民主的だと思いますか？

A「いいえ、思いません。」

Q あなたは、そういうことを変えるべきだと思いますか？

A「ええ。」

Q 世界には多くのパレスチナ難民がいて、帰りたいのに帰れない人々も少なくありませんが、そういう人達のことをどう思いますか？

A「彼等が帰れるようにしなければならないと思います。」

Q もしパレスチナ人が帰って、そこにすでにユダヤ人のイスラエル人が住んでいたなら、彼等は出ていかなければならなくなります。それでもやはり、あなた自身は、パレスチナ人にその家や場所を返すべきだと思いますか？

A「はい。」

Q そういう考えの人はイスラエルでは多くないのではないのでしょうか？

A「わかっています。」

Q 多くの人はどうしてそう考えないのだと思いますか？

A「・・・彼等はこの場所が彼等の場所だと思っているからです。アラブ人よりここに住む権利があると思っているのです。」

Q どうしてそう思うのでしょうか？

A「その方が楽だし、都合がいいからだと思います。」

Q あなたは、将来またシヨアが起こるかもしれないというようなことを考えたことがありますか？

A「ユダヤ人にですか？それとも、一般論としてですか？」

Q 両方です。

A「ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）に対しては、又起こるとは思いません。他の民族に対しては、・・・ そういうことは起こらないと思いますが、可能性としてはあると思います。」

Q そうということが再びおこらないようにするためには、どうすることが大事だと思いますか？

A「・・・（まず）ショアについてもっと教えなければならないと思います。もっと認識を深めるために。・・・それから、似たような現象があったら、早い段階でそれをとめることが必要だと思います。・・・例えば、ナチの広告をインターネットに載らせないとか、・・・そういうことです。」

Q あなたは、バイト（家）という言葉から何を連想しますか？

A「私の家です。」

Q 学校の授業の一環として、ヤッド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に行ったことがありますか？

A「はい。」

Q 一度だけですか？

A「何回かあります。」

Q ヤッド・バ・シェムにいったのはそういう機会だけでですか、それともご家族と一緒にいったこともありますか？

A「家族で行ったことはありません。」

Q その訪問の前と後とでは、なにか考え方やアイデンティティに変化した点がありますか？

A「いいえ。」

Q あなたは、みんなにそこを訪れることを勧めたいですか？

A「はい。それは大事だと思います。・・・それは、世界の過去と大切なこと、・・・歴史を示してくれているところだから。」

S 2

生年月日：1983-7-2生まれ (16歳)

出生地：イスラエル エルサレム

性別：女

父親出生地：イスラエル ハイファーギブアトアダ (ハイファのそばの町)

母親出生地：イスラエル エルサレム

父方祖父出生地：イエメン NA

父方祖母出生地：イエメン NA

母方祖父出生地：ポーランド ビアラクリツ

母方祖母出生地：イスラエル ハイファ

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「すべての祭日／祭日の歌を歌う時／祭日の食事を食べる時／ユダヤ民族の全ての記念日や儀式／食事の前の祈りをする金曜の夜。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ (どんな時) ですか？

A 「学校での英語の授業にイスラエル人であることはいつもストレスを感じる。しかし、普通の日常生活のなかでは特に感じない。学校でまたは友達とこの問題を討論する時。また、ユダヤ人やイスラエル人に直接関連している聖書や歴史の授業の時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「いいえ。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。私たちは全てのイスラエル (ユダヤ) の祭日を祝う。兄弟が13の時にシナゴグに行った。毎週金曜の夜に食事の前に祈る。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。学校の行事で高校一年の時。」

感想：建物の建築に感動した。またその場所を特徴づけている民族の誇りについても強く印象に残った。というのは、その時そこで大勢の兵士が儀式をおこなっていたのを見たので。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム (nation) : 共通の歴史的文化的特徴を有する集団。

レオム (nationality) : 共通の政治的地理的特徴を有する集団。

エズラフット (citizenship) : 法律による国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国家の民主主義を攻撃しようとする人々から国家を守ること。また、外敵や民主主義に反対する『内敵』からそこに住んでいる人々を守ること。また、若者にシオニズム、国家への誇り、国を愛することなどを教育すること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

「以前は、軍は若者の教育に今よりも熱心だった。それは、若者に国を愛すること、シオニズムなどを教育した。当時それは今より簡単だった。なぜならば、シオニズムの精神が今より強かったから。しかし当時も今も、軍は国に忠誠を尽くしており、国と市民を守るためにできることのすべてをしている。」

Q 最初にユダヤ・アイデンティティについてお聞きしたいのですが、まず、なぜユダヤ・アイデンティティが歴史的に長い間消えることなく続いてきたと思うかということと、あなたの場合そのアイデンティティはどこからきていると思うかということです。この二つのことについて、あなたの考えを聞かせてください。

A 「最初の質問については、・・・ユダヤ人は歴史を通じて他の民族と違っていたということがあってあります。そして、ユダヤ人は一つの神を信じ、・・・他の民族とは混じらず、いつも（他とは）違ったこと、・・・ユダヤ人だけで一緒に住んで、ユダヤ人どうして結婚して、・・・全てがそういう具合で、まるで他の世界とは違ったような・・・そして、それはユダヤ人が望んでそうしたという側面と周りがそうしかさせてくれなかったという面と両方あると思います。・・・いつも、『あなた達はユダヤ人だ。』とか『あなたたちは違っている。我々と一緒に住めない。』と言われ、・・・こうして文化が残ったのだと思います。」

Q 例えばヨーロッパで同化が進んだ時代に、ユダヤ人はユダヤ人アイデンティティ以上にそれぞれの国民としてのアイデンティティをもって生きていた人々もいたと思いますが、それでも、その時代と場所のユダヤ人は（他と）違っていたと思いますか？

A 「はい。・・・まず第一に、ユダヤ人はだいたいにおいて（ユダヤ人であることを、忘れていても）思い出させられます。・・・まるで他の民族からの観察の対象になっていて、彼等は私達ユダヤ人を嫌っていました。というのは、ユダヤ人が大事な場所を占めていたために、・・・政府や、いい仕事や・・・人々は腹立たしかったのです。・・・『彼等はユダヤ人だ。』と何かと標的になりました。・・・」

Q ヨーロッパ以外のところ、例えばイランやイラク、北アフリカ等についてはどう思いますか？

A 「そういう地域では、ユダヤ人をとりまく社会の状況はもっとすごしやすいものだったと思いますが、（ユダヤ人アイデンティティが消えなかったのは）ユダヤ人はそこで同じ習慣をまもっていたことがあると思います。そして、いつも同じ地域にまとまって一緒に住んでいたことも。」

Q あなたのユダヤ人アイデンティティについてはどうですか？

A 「まず、私はイスラエルに住んでいることです。ここにいるほとんどの人はユダヤ人です。ここはユダヤ人の国です。私の両親も家族もみんなユダヤ人です。私達は、ダティ（宗教的な）の家庭ではないですが、祭日には特別のことをして楽しめます。・・・ヘブライ語をしゃべるし、・・・全てのユダヤ・イスラエル文化など、そういうものから私のユダヤ・アイデンティティがあると思います。・・・それに、大事にしている様々な価値、ヤハドット（ユダヤ主義）や聖書や・・・ユダヤの文化などを考えたとき、私はユダヤ人だと思います。」

Q あなたは将来自分の家庭でユダヤ的な伝統や習慣をまもっていきたいと思いますか？

A 「ええ。私達は（今）ヒロニム（世俗的な）の家庭で、将来もヒロニムの家庭であることは確かですが・・・でも、実をいうと父はダティの家庭で育ちました。大人になってからは彼自身はヒロニ（世俗的）ですが、（その影響があつて）私達は金曜日にキドゥシュ（注）祈りの儀式）をしますが、私は将来自分の家庭でそれをするとは思いません。でも、家族がみんな集まって食事をするというそういう習慣は続けると思います。」

Q その他に続けていきたい伝統や習慣はありますか？

A 「まず私は、伝統はそれほどまもっていないので、・・・戒律とかシャバット（安息日）に車にのらないというようなことより重要なことがあると思います。例えば、アレツ（国）を愛することとか、・・・戒律とは違う価値、・・・アレツ（国）を旅したり、言語（ヘブライ語）を大事にすることや、何かを知ろうとすることなど・・・ユダヤ人はいつも、知識を学ぼうとしてきました。・・・私はそういうことが伝統よりも大事だと思います。・・・」

Q ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティとでは、あなたの中で違いがありますか？

A 「・・・あるように思います。」

Q あなたにとってまず先にくるアイデンティティはどちらですか？

A 「イスラエル人アイデンティティです。」

Q どうしてそれが先なのでしょう？

A 「今言ったように、私達は伝統をまもっていないので、・・・ユダヤ人アイデンティティというのは、伝統とか戒律とかそれをまもっている人達に関係が深いものと思えます。イスラエル人というのは宗教とは関係がなくてもっと普遍的な価値で、みんなに関係するものですから、・・・私達は伝統も宗教もまもっているわけではないので、・・・私の生活はユダヤ人の生活というよりイスラエル人の生活というも

のだと思います。」

Q 質問票の中で、イスラエル人アイデンティティを感じる時の例として、「英語の授業中に、イスラエル人であることにストレスを感じる時。」という回答をされていますが、これはどういう意味ですか？

A 「英語の授業では英語だけを使います。まずそのことが普段使っている言葉と違うという意味で違和感のようなものがあります。それから、『ユダヤ人とアラブ人の関係』というようなテーマでよく議論をするのですが、そういうテーマを英語でするということ、そういう時も、何か『自分はユダヤ・イスラエル人なんだ。』と、そういう意識を持つということです。」

Q そういうテーマでの授業というのは、先生がそのテーマを与えるのですか？

A 「はい。」

Q どういう議論をするのかその内容を少し詳しく話してもらえますか？

A 「例えば、・先生が『ユダヤ人とアラブ人の関係についてどう思うか。』とか『何をすべきだと思うか。』などと聞きます。そして一人一人が自分の考えを言っていて、議論になります。みんな言いたいことをいうので、興奮して大声でいいあたり、説得しようとしたり、・・・。」

Q 最後はどうなるのですか？

A 「だいたい、先生が自分の考えを言ったり、私達が気付かなかった点を指摘したり、・・・時には、先生は自分の考えを言わずに終わることもあります。」

Q あなたは質問票の回答で「自分をシオニストと思う。」と答えておられますが、どういう意味でそう思われますか？

A 「私の考えでは、シオニストとは、もしここに大変な状況があったとしても、（例えば）アメリカに行ってしまうのではなく、ここに留まって『ここは私の場所であり私のバイト（家）だ。』と思う人だと思います。私は自分もアレツ（イスラエル）を出ていかないでここに住むと思います。それから、兵役についたりして国に貢献しようと思うし、国を助けたい。アレツが攻撃されたら、私はここに留まります。」

Q あなたは、質問票で「世界のユダヤ人は一つの民族だとは思わない。」と答えていますが、これはどういう意味でそう答えられたのか説明してもらえますか？

A 「はい。世界には大勢のユダヤ人がいます。彼等はまず第一に国（イスラエル）と関係がありません。そして、彼等は（ユダヤの）祭日とも関係していません。彼等が祭日を私達がしているように祝っているかどうか分かりませんし、・・・そういう人もいるかもしれませんが、・・・彼等がユダヤ人なのは、ただ彼等のお母さんがユダヤ人だからです。彼等はユダヤ民族というものにそれほど感情的な思い入れはなく、ただユダヤ人に生まれたというだけです。彼等はユダヤ人と結婚するということでもないし、ユダヤの祭日を祝うわけでもないし、そういうことは何もなく、何も関係ないからです。」

Q あなたは、世界のユダヤ人がみんなイスラエルに移住したほうがよい、またはすべきだと思いますか？

A 「思いません。」

Q どうしてですか？

A 「まず第一に、世界の全てのユダヤ人が住めるほどの場所がないと思います（笑）。世界にはたくさんのユダヤ人がいて、彼等はたしかにイスラエルを助けています。例えば、アメリカやヨーロッパにいるユダヤ人は、政治的影響力という点で・あるいは、国に（イスラエルに）寄付をしたり、ユダヤ民族の形成という点で、イスラエル国家を助けています。だからそういう人達がそこに（イスラエルの外に）いてくれるのは良いことです。彼らを望んでもいないのに無理にこさせる必要はないと思います。」

Q イスラエルは自らを「ユダヤ人国家」と定義しているわけですが、そのことについてあなたはどのように思いますか？言い換えれば、ユダヤ民族は、「ユダヤ人のための国家」というものが必要だと思いますか？

A 「もちろん。」

Q どうしてですか？

A 「今までの歴史を通して、ユダヤ人は追放され続けてきました。ユダヤ人は住んでいる場所で静かに住ませてもらえませんでした。・・・殺されたり、・・・権利を与えられず、権利をとりあげられ、・・・

ユダヤ人は一度もその国の住人として認められませんでした。ユダヤ人はどこにいても、その国のみんなが得ているような権利をもったことはありませんでした。・・・やっとなんていう時代がきたと思うと、すぐそれは終わるというものでした。ユダヤ人はいつもユダヤ人だということを意識させられてきました。・・・力を握ってるとか、（他と）違っていると、別だとか、外の人間だとか言われて。・・・」

Q 確かに今までそういうことがあったとしても、第二次大戦後、人類が教訓を得たとしたら、今までの歴史とは違うかもしれないとは思いませんか？

A 「でも、イスラエル国家ができたのは、ユダヤ人が静かに生活していくことを（周りが）拒んだから、国をどうしてもつくらなければならなかったのです。今は国があるので、そのことは意識から遠のいているかもしれません。今はユダヤ人の国ができて、（ユダヤ人には）安全が確保されていますから。でも、戦後人間は教訓を得たと言っても、ある日突然『ちょっとまって。ユダヤ人はここから出ろ。』と言われるかもしれない。だからユダヤ人には安全を確保しておく必要があるのです。定義として『ユダヤ人のための国家』を持って、静かに暮らせる、誰からも『出ていけ。』と言われないユダヤ人の国を。・・・」

Q でも、定義では「ユダヤ人のための国家」に、現実にはアラブ人もいるわけですが、そのことについてはどう思いますか？

A 「まず、このアラブ人は、・・・みんなではありませんが、・・・イスラエル国家に住んでいるアラブ人は、彼等はこの国の市民です。彼等はここにいたのですから。彼等を追い出すことはできません。ちょうどどこかのユダヤ人が、望まないのにその国から追い出されてはいけないうに。彼等はここに長年住んでいて、この国の市民です。・・・それについてはどうしようもありません。・・・定義で『ユダヤ人国家』となっているその意味は、ユダヤ人は誰でもここに住むことができるということであって、世界のどこからでもユダヤ人なら誰でも来ることができるということです。でも、そうでない人の場合は、今は、すぐに市民権を得ることができません。条件があります。例えば、二人が（イスラエルに）来たとして、一人はユダヤ人でもう一人はそうでないとします。ユダヤ人はすぐに市民権を得ますが、もう一人はすぐには市民権が得られません。その人には条件があります（一定の条件を満たさないと市民権はもらえません）。・・・アラブ人がここ（イスラエル）にいるのは確かで、それはもっと問題です。でも仕方ありません。彼等はここにいますのですから。でもやっぱり（定義が実態とかけ離れているといっても）この国は『ユダヤ人国家』なのです。ユダヤ人の新聞があって、ユダヤ人の軍隊があり、ここにいるほとんどの人はユダヤ人です。アラブ人は実際ユダヤ人ほど権利を持たないと思います。・・・でもやっぱり（定義が実態とかけ離れているといっても）この国は『ユダヤ人国家』なのです。」

Q こういう定義と実態にずれのある状況は問題だと思いますか？

A 「ええ。」

Q どうなったらいいと思いますか？

A 「私は、彼等がここにいなかったらよかったと思います。でも、もし彼等をここから追い出したら、世界は私達に『あなた達は彼等を（アラブ人を）追い出すのか？ここは彼等の国で彼等には市民権もあるというのに。あなた達がかつてヨーロッパでされたくなかったことを、あなた達はアラブ人に対してどうしてできるのか？』と言うでしょう。・・・彼等を追い出すという解決策は現実的ではありません。・・・でも個人的には、彼等がここにいなかったらよかったと思います。そうすれば問題はすべて解決するので。でも、・・・どうしようもありません。・・・問題を解決するために何か法律を変えとか、彼等と一緒に暮らしていく道を探さなくてはならないと思います。彼等をここから追い出すのではなく。」

Q あなたはイスラエルがユダヤ人とアラブ人に同じレベルで市民権を与えていると思いますか？

A 「定義からすれば、彼等は市民です。権利という点で見ると、同じレベルではありません。」

Q あなたはそれでいいと思いますか？

A 「いいえ。・・・私は、市民であるアラブ人は、ユダヤ人が得ている全ての権利をもって当然だと思います。でも、問題もあります。・・・例えば、アラブ人は兵役にはつきません。彼等は国に貢献していません。でも、そうはいってもこの国の市民です。・・・そして彼等はここで少数であるために、彼等はそういう問題を国に要求していく力がありません。・・・私はサドゥナ（注）学校の授業の一環として、ユダヤ人とアラブ人の若者がそれぞれの学校に行って対話をする試み）に参加したのですが、そこで彼等は、何故兵役につかないかということについてこう言いました。彼等は自分たちの兄弟とシリアやレバノンなどで戦うことになるからだと言いました。民族に対する戦いになる。だから兵役にはつくことはできないのだと。そして、でもユダヤ人も彼等を軍隊に入れたくないのだとも言いました。（ユダヤ人

は) 彼等を信用していなくて、怖がっており、ユダヤ人に敵対的なことをすると思っていると。だから、彼等も軍に入りたくないし私達も彼等が入ることを望んでいない。・・・彼等はこのようにも言いました。私達はハレディム(超正統派ユダヤ教徒)に多額のお金を与えている。・・・その一部を彼等に与えることもできるのにそうしていないので、彼等は状況が改善されず、彼等には村を住み良くするお金がなく、便所もなかったり、貧しい人も多い。それに言葉の問題もある。彼等はヘブライ語を学ぶことを強いられ、何時間も勉強する。それに対して私達はアラビア語を学ぶことは強いられない。彼等にとってはヘブライ語は難しい。ユダヤ人の中にはさまっていることは難しい・・・等々・・・。」

Q そういうときはヘブライ語で話をするのですか？

A 「訳をしてくれます。・・・彼等は私達のアラビア語よりはるかにヘブライ語ができますが、話の内容としては政治的な問題が多くなるので、彼等にとってはアラビア語の方が言いたいことを言いたいように言えるからです。でも、私達はヘブライ語で話すのですがそれをアラビア語に訳すということはありません。彼等はアラビア語で話し、それを(誰かがヘブライ語で)説明してくれます。でも私達がヘブライ語で話したことは、彼等はわかるのです。」

Q そういう授業はどのくらいの頻度であるのですか？

A 「高校二年の時に一度あるだけです。」

Q どのくらいの時間やるのですか？

A 「二日間です。」

Q どこでですか？

A 「ギヴァト・ハヴィヴァというところで。アラブ人とユダヤ人が半々ずつのグループになって—私達はアラブ人15人とユダヤ人15人の30人でした。—まずミーティングをしてから自己紹介をして、どういうことが好きかとか、そうしてうちとけてきて、・・・夜にはダンスなどを一緒にして楽しんでその夜は寝ました。次の日の朝は、もっと政治的な問題を話し合いました。その時はお互いにかかなり険悪な雰囲気になりました。・・・例えば、彼等は大学ではアラビア語でも授業をすべきだと言いました。彼等が言うには、アラビア語を学ぶのにそれを英語で教えている、それは問題だと。みんながアラビア語でも理解するようにする必要があると。私達がアラビア語でも理解できるようにアラビア語を必修にすべきだし、色々な説明をアラビア語でも明記すべきだ・・・というようなことです。私達は『冗談でしょう?!』といって同意しませんでした。大げさに言わないでほしい、ここは結局は『ユダヤ人国家』なんだから。私達はすでにマジョリティで、私達はここに政府を持ってるんだ、私達はアラビア語の勉強を強いられる必要はない・・・ということになって。・・・私のクラスにはアラビア語を勉強している人もいますが、その人たちはそれを自分が選んでいるからやっているのです。でも、みんなにアラビア語の勉強を強制する必要はありません。ここで生活するのに私達はアラビア語を知る必要はありません。彼等は必要です。彼等はヘブライ語を(も)わかります。彼等はユダヤ人がマジョリティの国にいるのだからここで生活するには知る必要があります。ちょうど、アメリカにいるユダヤ人が—彼等はみんながヘブライ語ができるわけではありません—英語を学ぶのと同じことです。・・・(議論がそのように展開していった) 彼等は非常に腹を立てました。・・・そして軍隊の問題に発展し、・・・険悪でした。」

Q 最後はどうなったのですか？

A 「最後は、・・・指導員が花を真ん中に置いて、そこから一本の花をユダヤ人からアラブ人へアラブ人からユダヤ人へと仲直りする気持ちで順番に渡していくようにと言われました。そういうことをして、最後はいい雰囲気で終わりました。私は知らなかったことをたくさん学んだと思います。今は彼等のことを理解したと思います。私にとってはとてもいい体験でした。雰囲気も最後はとてもよかったと思います。」

Q 楽しかったということですか？

A 「楽しかったというのとは違いますが、とても大事な体験だったと思います。」

Q どういう点で新しい意識が生まれたと思いますか？

A 「・・・まず第一にそれほど状況がひどいとは知りませんでした。そこに参加する前、先生は私達にアラブ人に関する様々なことを教えてくれていました。たくさん勉強して準備していました。でも、例えば言葉の問題でも、それがどんなに彼等にとって重要な問題なのかということは知りませんでした。・・・それから、彼等は私達ユダヤ人が彼等のことを『アラブ人はバスを爆破する、とか、テロを起こす。』と言うけれども、それは彼等のここでの生活が大変だということと繋がっていることなのだと思います。そこで私達は『でも、人を殺さなくとも、話し合えばいいじゃないか。』と言ったのですが、彼等は『そうだ。アラブ人の皆が皆テロをおこしているわけではない。テロをおこすのは彼等のア

ラブ人ではない。アラブ人にも色々な人がいるんだ。』と言いました。・・・私の知らなかったことが色々ありました。彼等も、私達と会う前は私達は彼等を嫌っていて、感じが悪く、アラブ人に敵対的なんだろうと思っていたと言いました。でも最後に彼等は、ユダヤ人がみんなそういう人達ではないとわかったと言いました。ユダヤ人にもアラブ人をわかろうとしている人がいることがわかったと。そういうことがお互いにわかったのは重要なことだと思います。」

Q あなたは、こういう試みは相互理解を深め、関係を変えていくうえで有効だと思いますか？

A 「・・・私は、アラブ人はより閉鎖的だと思います。彼等は、自分たちは傷ついていて私達はその解決策を提供しなければならないと考えてやってきていたように思います。私達には解決策はありません。まず私達は結局は子供であって、首相ではありません。何かを決める力はありません。・・・彼等は問題を解決するのは私達だと考えています。私達は『なぜ彼等がそうなのか』ということをより説明しようと思いました。私達はアラブ人に敵対的なのではなく、アラブ人自身の問題—テロをおこしたりというような—を問題にしているということを説明しようと思いました。彼等は私達がアラブ人を一まとめにして見ているといったので、私達はそうではないことを説明しました。そうすると彼等は私達が間違っ

Q 質問票でヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）のことについてお聞きしていますが、ここを訪れたのは去年が初めてですか？

A 「いいえ。その前にも二回位行きました。」

Q その時は誰と行ったのですか？

A 「一回は小学校の遠足でいって、二回目は家族とだったと思います。」

Q 訪問の前と後とで、ユダヤ人アイデンティティの点で変化したことはありますか？」

A 「・・・そこに展示してある、ものすごくたくさんの（殺された）人の名前やろうそくをみてとてもショックでした。中に入って突然そのたくさんの名前と、ろうそく、花、真っ暗な中でそれらをみることは、・・・ぞっとくる怖さを感じました。そしてそこで説明を聞いて話しをしました。・・・そこから帰ってから何日かは、ずっとそのことについて考えていました。・・・でも、ユダヤ人アイデンティティという点では特に変化はおこらなかったと思います。・・・この八月に私はホロコストの生存者と一緒にドイツに行くことになっています。私の友達は去年そのツアーに参加したのですが、その友達はドイツとポーランドのショアの強制収容所を見学して、ヤド・バ・シェム以上のショックと影響を受けたと言いました。・・・涙がとまらなくて、・・・灰とか靴とか本物の遺品をみて、・・・比較にならない位影響されたと言っていました。・・・ヤド・バ・シェムはただ「記憶」だけなので。・・・」

Q どういう高校生がそうしたツアーに行くのですか？選ばれるのですか？

A 「まず第一に、本人が行くことを希望していることが前提ですが、その後面接と試験があって、それに受かった人です。」

Q あなたのクラスでは今回何人ぐらい行きますか？

A 「五人です。」

Q 費用はどうなるのですか？

A 「ただではありません。むこうではドイツの（非ユダヤ人の）若者と会って、彼等の家に泊まり一緒に旅行もします。彼等は来年こちらに来て同じように私達の家に泊まり、一緒に旅行することになっています。だから旅行の費用として自分で払うのは実際にかかる費用の半分ぐらいです。」

Q どうしてそのツアーに参加しようと思ったのですか？

A 「友達が去年行って、とても良い経験だったと言っていたからです。（このテーマを）乗り越えなければならないと。私の祖父がホロコストの生存者だということも関係していると思います。・・・そのテーマは私にとって辛いテーマですが、身近な問題でもあり、・・・重要な、また乗り越えなければならない問題だと思ったからです。」

Q 学校全体では何人ぐらい行くのですか？

A 「二十人です。」

Q あなたは、アメリカにも今年学校代表で行くことになっていると聞きましたが、それはどういう計画なのですか？

A 「イスラエル全体からやはり二十人が行くのですが、アメリカでむこうのユダヤ人の高校生と会うこと

になっています。この研修の目的は、アメリカに住んでいるユダヤ人の若者を知ること、彼等と議論をしたり旅行をしたりします。彼等もこちらにやってくるになっています。」

Q どのくらいの期間ですか？

A 「二週間です。」

Q 場所はどこへ？

A 「ニューヨークとワシントンです。」

Q ポーランドとドイツの研修の方は？

A 「やはり二週間です。」

Q アメリカの方の費用はどうなっていますか？

A 「（代表で選抜されたので）全額だしてもらっています。」

Q では次の質問ですが、あなたにとって今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A 「・・・たくさんあります。・・・まず、ダティーム（宗教的な人々）とヒロニム（世俗的な人々）の問題、それからユダヤ人とアラブ人の問題です。」

Q ダティームとヒロニムの問題はというふうに問題だと思いますか？

A 「ダティームは、政府に影響を持っています。イスラエルは国家から宗教を分離していないので、今ダティームは政権に参加しています。・・・彼等は彼等の地区に（他の世界と）分離して、閉鎖的に暮らしていて、・・・彼等が問題にしている宗教の問題は2000年の現代とはずれてしまっているのに、彼等は原始的で、何か信ずるものを必要としていて、お祈りをし、そうすれば救われると信じていますが、今は西暦2000年です。・・・そして彼等の行為はただ破壊的なだけです。なぜなら、ラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）が何か言うと、彼等は皆何も考えずにその通りに行動するからです。だからラビは大きな影響力をもっていて、ラビ自体の数は少ないのに、相対的に大きな集団を左右しています。しかも今そういう勢力が拡大しています。だんだん力を増してきています。・・・」

Q ユダヤ人とアラブ人の問題についてはどうですか？

A 「先ほど話したように、ここには二つの異なるアム（民族）がいます。二つの異なるレウミム（民族）がいます。お互いがお互いを怖がっていることでたくさん問題があります。例えば、アラブ人は『アラブ人がバスに乗ると、ユダヤ人は皆アラブ人を危険人物としてみている。』と言います。また、アラブ人が運転している車は何度も検問で止められて中を調べられ、アラブ人は皆危険だと思われています。（ユダヤ人は）アラブ人を、怖がっています。・・・私達は彼等を怖がっていて、彼等も私達を怖がっていて、でも私達には一応力があります。・・・テロ活動・・・これは国内のアラブ人の側の問題です。・・・そしてアラブ人は私達の隣人で、シリアやレバノンも隣の国々です。こういうことが全部難しい問題です。」

Q イスラエルがそういう問題を解決していくために、今欠けているものは何だと思いますか？

A 「ダティームの問題については、まず、彼等を兵役につかせなければならぬと思います。もし彼等がそれを望まないなら、何か違う形で国に貢献する活動をやらせるべきです。それから、国家から宗教を分離して、政府の中に宗教的な政党が入らないようにすることです。・・・アラブ人との問題はもっと複雑です。・・・できることがあるとすれば、それは若者や子供を教育していくことだと思います。アラブ人と一緒にいる機会をもっとたくさんつくって、・・・高校生の時に一回というのではなく、・・・私が思うには、ダティームに与えているお金を全部そういう出会いの機会をつくるために使ったり、トラー（注）ユダヤ教の律法）の勉強のためのお金の一部でもアラブ人に与えれば、アラブ人は私達がアラブ人を援助しようとしていることがわかり、私達は彼等に敵対的なのではないというふうに感じると思います。・・・」

Q 今までのあなたの答えを聞いていると、とてもしっかりした自分の意見を持っていることに驚かされますが、あなたのそういう考え方はどのようにして形成されたと思いますか？

A 「私達の国はあまりにも色々な問題があり、いつもそういうことが話題となっています。学校でも、テレビでも、いつもいつも、・・・色々なニュースでも・・・それでイスラエルの若者は（も）、政治的な問題について深く関わらざるをえないのです。それに、議論をよくするので、そこで考え方が鍛えられると思います。」

Q 激しい議論の後で、友達の関係が壊れるということはありませんか？

A「ないです。それは結局は考え方の違いであって、その人に敵対しているわけではありません。『私はそうは考えない。』というだけの問題ですから。その人の人間性をどうこういっているわけではないのですから。・私何回も経験があります。ある時『アメリカにいるユダヤ人（注）イスラエルからアメリカに流出したユダヤ人のこと）に選挙の投票権を与えるべきかどうか。』ということで大議論になりました。私は最初ある考えだったのですが、議論の後で（自分の考えに）問題があることがわかり、考えを変えることにしました。」

Q どう考えが変わったのですか？

A「はじめは、与える必要はないと思っていました。ここにいないのだし、住んでいないし、彼等はそっちにいるからです。彼等に決める権利はないと思ったのです。・・・でもその後で考えが変わりました。というのは、留学のためにアメリカに行って何年後かに帰ってくるユダヤ人もたくさんいることに気がつきました。例えば、医学や法学を勉強する人で、・・・むこうで何年か住んで帰ってきて、その人たちは国に貢献しています。帰ってこないとしても、私達をお金の面で援助したり、政治的影響力という点で国に貢献することもあります。だから、外国にいてもイスラエルを援助しているユダヤ人もたくさんいると思って、考えを変えたのです。」

S 3

生年月日：1983-7-13生まれ（16歳）

出生地：イスラエル エルサレム

性別：女

父親出生地：イスラエル NA

母親出生地：イスラエル NA

父方祖父出生地：リビア NA

父方祖母出生地：リビア NA

母方祖父出生地：NA

母方祖母出生地：NA

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのような時にそう感じますか？

A 「いつも。ユダヤ人アイデンティティは、個人的アイデンティティの一部である。そしてそれは私の人格の重要な一部である。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

「いつも。何をしても。町を歩いている時も、バスにのっている時も、テレビをみている時も。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「わからない。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。祭事。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。1998年／学校の行事で。」

感想：ヤド・バ・シェムは、信じ難い、とても心の痛む、恐ろしい場所である。それはそれのみ
る人全てに大きな苦しみと悲しみを与える。そこを訪れたことで、わたしは深く心を動かされ
、同時にユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティが強くなったと思う。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム (nation)：共通の文化、歴史、宗教、言語をもつ人々の集団。

レオム (nationality)：特定の民族や特定の地域への人の帰属。

エズラフット (citizenship)：その人が住んでいる場所（地域）への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「イスラエルの市民を守ること。イスラエルの国益を守ること。モラルにかなった行動をすること。よく組織され、全ての人に安全を与えること。さらに、兵士が無事に帰れるように考慮すること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「たいいてい私の期待を満たしているが、時々住人にとっても兵士にとっても危険と思われるやりかたを感じる。また、時にモラルにかなっていない行為をしていると思う。」

- Q 質問票のお答えをみますと、お父さん方のお祖父さんとお祖母さんはリビアから移住されているというのですが、なぜ移住されたのかということについて何かお聞きになっていますか？
- A 「シヨアの後です。・・・46年頃だと思いますが、よくわかりません。・・・（移住の原因は）シヨアだと思います。・・・彼等は強制収容所にいたのです。」
- Q リビアにもあったのですか？
- A 「ええ。・・・北アフリカにもありました。ほとんどの人は知りませんが、・・・リビアだけでなく・・・北アフリカの国にはあったのです。」
- Q その収容所にはユダヤ人だけがいたのですか？それとも他の人もいたのでしょうか？
- A 「私が知っているのはユダヤ人がいたということです。・・・祖母はそこにいたのです。」
- Q お祖父さんもいたのですか？
- A 「それは確かじゃありません。お祖母さんがいたことは確かです。・・・戦争（第二次大戦）が終わったのでそこを出て、船でアレツ（イスラエル）に移住しました。最初は南にあるキャンプのようなところに住んで、それからキリヤット・ガズに住んだようです。」
- Q そのころおいくつぐらいだったのでしょうか？
- A 「20歳か、もっと若かったかもしれません。」
- Q お母さん方のお祖父さんとお祖母さんはどうですか？
- A 「母方の祖母は、ポーランドで生まれました。祖父はドイツです。・・・祖父の家族は戦争中ドイツからアレツに移住して、キブツに住みました。・・・38、9年頃だと思います。」
- Q 質問票の中でアイデンティティについてお聞きしましたが、あなたは、ユダヤ・アイデンティティが何千年の間消えることなく続いているのは何故だと思いますか？
- A 「ええ・・・私の考えでは、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）はいつも集団で一緒に住んで、自分達でかたまっていて、宗教との結びつきがあり、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）への思いを熱くしていて、・・・エルサレムに対しても・・・そういうことをゴラ（離散）のなかでいつも保っていました。・・・いつも同化したユダヤ人はいましたが・・・たとえばドイツなど、・・・でもポーランドではいつもユダヤ人は閉鎖的コミュニティで生活していました。・・・」
- Q どうしてそういった生活を続けたのでしょうか？
- A 「宗教と歴史がそうさせたと思います。・・・ユダヤの宗教は、なんといっても非常に特殊な宗教ですから。・・・」
- Q どのように特殊ですか？
- A 「本当にダティ（宗教的）であろうとすれば、色々な戒律があって、それらをまもることが要求されます。・・・例えば、シャバット（安息日）には車に乗らないとか、コシエル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事の規則とか、・・・」
- Q ダティイム（宗教的な人々）にはそういう理由があるとして、ヒロニム（世俗的な人々）についてはどうですか？
- A 「ヒロニムのユダヤ・アイデンティティというのは、・・・もっと伝統をまもるということと関係したものだと思います。・・・例えばシオニストユダヤ人は、いつもエレッツ・イスラエルに来ることを望んでいて・・・」
- Q でも、政治的なシオニズムの歴史は19世紀の終わりから始まるわけですね？その前はどうか？
- A 「その前は・・・『エレッツ・イスラエルに帰ろう。』というのはいつの時代もありました。・・・いつもそれを語り、・・・エルサレムやエレッツ・イスラエルについての物語を語っていました。・・・」
- Q ヒロニムもですか？
- A 「ええ。・・・聖書にも、・・・ダティイムは聖書を読みますから、そのつながりはいつもとても深いものでした。・・・こうして彼等は他との違いをまもってきたと思います。」
- Q あなたの場合、ユダヤ・アイデンティティはどこから来ていると思いますか？
- A 「宗教はあまり関係ありません。伝統と歴史からだと思います。・・・ハ・アム・ハ・イエフディの歴史から。・・・ユダヤ人というのは、宗教でもあり、レオム（民族）であり・・・ナショナリティ（ママ）でもあります。・・・私の場合は宗教よりはレオムからきています。・・・」
- Q 質問票の回答によると、あなたのお家では伝統をまもっておられるということですね？・・・

- A 「祭日は祝っています。祖母は、父方の祖母は伝統をもっとまもっています。・・・シャバットにろうそくをともしたり、コシエルの食事をももっています。でも、私達はまもっていません。・・・」
- Q 私達とは？
- A 「近い親戚です。・・・私達は祭日を祝うぐらいです。」
- Q どうして祭日を祝うことはまもっていると思いますか？
- A 「それは伝統ですから。・・・それは、・・・結局、ハ・アム・ハ・イエフディを他と区別するものです。」
- Q あなたは、今あなたのお家でやられているように、将来もそうした伝統を是非まもっていきたいですか？
- A 「はい。」
- Q それは大事なことですか？
- A 「はい。・・・2000年のハ・アム・ハ・イエフディ（の歴史）を保っていくことは、（大事なことです）・・・」
- Q ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティはあなたの中でどのような関係でしょうか？
- A 「だいたい同じ比重ですが、・・・ユダヤ人ということを考えずにイスラエル人であることもできるし、その逆もありえます。・・・でも私の場合は同じことです。ユダヤ人というのはレオムのようなものですから。パスポートや身分証明書にはレオムの記載はありますが、イスラエル人とは書かれていません。ユダヤ人と書かれています。・・・（書かれているのは）イスラエル国だということとユダヤ人ということです。・・・私にとっては同じことです。どっちが近いとか、そういうことは特に感じません。・・・でも、エレッツ・イスラエルへのつながりかユダヤの宗教へのつながりか、ということ言えば、ユダヤの宗教へのつながりの方により強い結びつきを感じます。」
- Q ということは、まずユダヤ人アイデンティティで次にイスラエル人アイデンティティだということですか？
- A 「いえ、アイデンティティは同じことですが、・・・二つはつながっているということです。」
- Q 質問票で、あなたは「シオニストかどうか分からない。」と答えていますが、これはどういう意味でそう思われるのか聞かせてください。
- A 「それは、私はそもそもシオニストという人々が今もまだ存在するのかわからないからです。・・・シオニズムの目的はエレッツ・イスラエルに移住することでした。エレッツ・イスラエルをつくった後では、シオニズムはかつてあったものとは違います。・・・誰がシオニストか考えると、・・・キブツに住んでいる人は（今も）シオニストかもしれませんが、あるいは砂漠に行ってそこを開拓する人とか、・・・そういう人はシオニストかもしれませんが、・・・そう考えると、私は自分がシオニストかどうか分からないのです。」
- Q 次の質問では、「世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思う。」と答えていますが、これについてはどうでしょうか？
- A 「私は、全てのユダヤ人は何か共通のものを持っていると思います。・・・それは宗教です。・・・宗教と、私達の国であるエレッツ・イスラエルで生きるとか、エルサレムで暮らすという思いです。何か共通のものがあるのです。いつの時代も、世界のどこでも、全てのユダヤ民族に共通したものが。」
- Q それは何でしょうか？
- A 「歴史です。・・・聖書のあらゆる歴史から離散の中での歴史まで、・・・ヨーロッパでの生活やショアなど・・・そういう全てです。」
- Q でも、例えば、アルゼンチンでの（ユダヤ人の）歴史と、チュニジアやポーランドでの歴史は同じでしょうか？
- A 「いえ、違います。でも、宗教は同じ宗教です。・・・物語や・・・聖書は同じ聖書です。・・・言い換えると、例えば、イスラエルにはあらゆる種類のユダヤ人がいます。ダティイム、ヒロニム、・・・でもひとたびなにか大変なことが起こると、戦争とか、オーストリアでのハイデル（注）自由党党首）などのような動きが世界で起きると、（ユダヤ人は）みんな団結します。・・・私は、私達がみんな同じ宗教や、同じ願望や、聖書の歴史・・・エジプトから脱出してアレッツに住みついたという・・・などの公分母をもっていると思います。」

- Q ヒロニムについてもそう思いますか？
- A 「ヒロニムは神を信じているわけではありませんが、それでも、聖書に敬意を払っていますし、祭日を祝うこともします。・・・例えば、ペサハ（注）出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）は世界のユダヤ人がすべて一緒に祝う行事です。」
- Q 私にはイスラム教徒に改宗したドイツ生まれのユダヤ人の友達がいるのですが、あなたから見ればその人はユダヤ人でしょうか？
- A 「ハラハ（注）ユダヤ教の慣例法規）からみれば、彼女はユダヤ人です。ユダヤ人として生まれたので。・・・でも、彼女がモスレミット（イスラム教徒）と感じるのなら、・・・ハ・アム・ハ・イエフディやユダヤ人の歴史とのつながりを何も感じないのであれば、モスレミットでしょうね。」
- Q もしも、彼女が自分がユダヤ人だと言ったとしたら、あなたは認めますか？
- A 「法的には、ユダヤ人として生まれた人は、ユダヤ人であることが残ります。・・・」
- Q つまり認めるということですか？
- A 「ええ。・・・ユダヤ人であるということは、出自がそうだけというだけでなく、ユダヤ人であると感じることです。・・・でも、・・・彼女が歴史とのつながりを感じるのなら、ユダヤ人だと思います。」
- Q 次の質問ですが、あなたはヤド・バ・シエム（ホロコスト記念館）に何回か行かれていますか？
- A 「何回も行っています。・・・一年半前にも学校で行きました。今高校でショアについて勉強しているので。・・・その前にも何回も行っています。・・・学校でも行ったし、家族とも、ミシュラハットでも行きました。」
- Q ミシュラハット？
- A 「『平和の種』という組織があって、40人から50人ぐらいの若者を、イスラエル、パレスチナ、ヨルダン、エジプト、他のアラブの国々から毎年アメリカに連れていって、一ヶ月位キャンプをします。十人ずつぐらいのグループに分けて、一緒に過ごして、毎日『共存』というようなテーマについて話し合ったり、サッカーをしたりして遊んだりするのです。・・・それに参加する前に、その準備の日程の中にヤド・バ・シエムに行くことも入っていて行きました。アメリカの日程でも、ホロコスト記念館に連れて行かれました。」
- Q ヤド・バ・シエムへの訪問の前と後とで、意識の上で何か変化がありましたか？
- A 「いいえ。でも、実際に起こったことがとても現実的に思えました。写真や、様々な証言の映画や、・・・道具や、服や、・・・それらを見るのは、本物なのずっと現実的です。・・・変化したことといえばそういうことです。・・・ショアそのものについては、私達は小さいときから習っているのです・・・」
- Q ユダヤ人アイデンティティの上では何か変化しましたか？強まったとか、そういうことで・・・
- A 「お互いが近い関係にあるような、そういう気持ちはずっと強まります。・・・私達のお祖父さんやお祖母さんの世代で世界に生存しているユダヤ人と自分が近い関係にあるような、・・・・私達がここ（イスラエル）で生きていることの価値を教えられるというか・・・」
- Q あなたは、そこに行くことをみんなに勧めたいですか？
- A 「はい。・・・それを見るのが耐え難い人もいますが、・・・例えば、ホロコストの生存者の人などは・・・でも、私はとても大事だと思います。・・・ユダヤ人だけでなく、そういうことが他の民族にも二度と起こらないようにするために、みんなにとって（そこに行くことは）大事なことです。」
- Q 「平和の種」という、先ほどいわれた活動について、もう少し話していただけますか？
- A 「・・・私達は一ヶ月ほどアメリカにいたのですが、・・・言葉は英語だけを使いました。・・・その目的というのはたぶん『敵にも顔がある。』ということを知ることだと思います。・・・‘敵’と会うことで・・・私達にとってはそれがアラブ人であり、彼等にとってはイスラエル人（ママ）ですが、それは、実際に‘人々’です。・・・そこでは何もかも一緒にやって、・・・食事とか、サッカーをしたり、・・・一日中アラブ人と一緒にいて、とてもいい友達ができました。・・・」
- Q いつ行ったのですか？
- A 「98年の夏と、この夏（99年の夏）です。」
- Q あなたが自分で参加することを望んだのですか？
- A 「はい。」
- Q どうして参加したいと思ったのですか？
- A 「とても重要なことだと思ったからです。・・・今、和平交渉は行き詰まっています。・・・私は、平和と

いうのは首相と首相の関係の問題ではないと思います。人と人との関係です。ですから、他の人と会って、彼等が実際何を考えているのかを知るのはとても大事だと思ったのです。テレビで見るものは、いつも真実だとは言えません。・・・」

Q 何人ぐらい参加したのですか？

A 「私達は、43人でした。」

Q みんなでですか？

A 「参加者全員でですか？・・・150人です。・・・43人はイスラエルから初めて参加した人で、他に（イスラエルからは）二回目の人がもう10人位いました。」

Q イスラエルからの参加者はユダヤ人だけですか？

A 「アラブ・イスラエル人もいました。」

Q それに参加するまでは、あなたにはアラブ人の友達がい了吗か？

A 「いいえ。」

Q 今はどうですか？

A 「今はたくさんいます。・・・まず、ヨルダンにとってもいい友達があります。去年のペサハの時には、友達と二人で彼のところに遊びに行きました。・・・今年のペサハにも家族で行くことにしています。・・・それから、ガザにも、とてもいい友達があります。」

Q どういう風にして連絡しあっているのですか？

A 「電話とか、・・・それからギブアット・ツァルパティ（注）東エルサレムにある地名）に仲介をしてくれる事務所があって、ここからむこうに連れていってくれたり向こうからこっちへ連れてきてくれたり、証明書をだしてくれるとか、・・・そういう面倒を色々みしてくれるのです。」

Q その活動に参加するようになって、どういうことが一番変わったと思いますか？

A 「考え方が広くなりました。・・・例えば歴史ですが、今まではイスラエル側だけから見ていました。でも、別の見方もあるということがわかったし、・・・変わったのは、現実の捉え方です。どうその状況を見るかということ、・・・それに人の言っていることによく耳を傾けるようになりました。・・・自分が何か言う前に二回ぐらい考えるようになりました。・・・そういう変化があります。」

Q 参加するまで知らなかったことが何かありましたか？

A 「はい。・・・例えば、アラブ人は（イスラエルの）独立戦争を‘大惨事’と呼んでいて、全く反対の意味で毎年その日を記念しています。私はそれを知りませんでした。・・・他には、・・・力づくで追い出してしまったたくさんのアラブの村があることとか、・・・ありとあらゆるそういうことです。・・・でも彼等も、ショアのことはあまり知りませんでした。・・・知ってはいましたが、多くのことは知らなかったです。ですから、説明しなければならませんでした。・・・」

Q つまり、そういうことは学校では習わなかったということですね。

A 「はい。」

Q その活動では、討論もあったのでしたね？そこでの議論は激しいものでしたか？

A 「とても。・・・特に、エレッツ（イスラエル）は誰に属しているのかという問題になったときは・・・」

Q どんな議論になったのですか？

A 「例えば、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）のことを私達はメディナット・イスラエル（イスラエル国家）と言いますが、彼等はパレスチナと言います。彼等がパレスチナという時は、その意味はイスラエル全土をさしています。・・・私達はパレスチナ国家というのは存在していないという、すごい議論になりました。・・・彼等は、『（アラファト）議長はいるし、評議会もあるし、領土（ママ）もある。』と言い、国を望んでいて、その時期が来たんだと言いました。・・・それに他にも色々・・・テロリストのこととか、・・・彼等は彼等（テロリスト）を‘自由の戦士’と呼びます。・・・誰かが『罪のない人を殺すのは良くない。』と言うと、・・・彼等はそれを理解しました。でも、国を勝ち取るためには他に方法がないということも言いました。・・・他方彼等の方は、・・・彼等にとってイスラエル軍というのは、理由もなく銃をむける人達だと言いました。・・・理由もなく子供を撃つてくると。・・・私達は反論しました。・・・つまり、みんながそれぞれ見る立場によって見えるものが違い、議論は長く続きました。・・・最後の結論としては、歴史の見方は色々あって、一つの立場からだけで見ることはできないということでした。それに‘痛み’というものを比較することはできないということ。・・・」

Q そういう大きな議論の後で、けんか別れにはならなかったのですか？

A 「はい（なりません）。部屋に戻ってそのあとも色々なことを話しました。」

- Q 質問票の中で、あなたはイスラエルの「国益」という表現を使われていますが、あなたはイスラエルの「国益」として、どういうことを考えているのでしょうか？
- A 「・・・えー、・・・戦略ということでしょうか、テロリストにテロを止めさせることです。それから、住民を守ること・・・」
- Q イスラエルは「ユダヤ人国家」として自己を定義していますが、現実にはアラブ人の人達があります。この定義と現実の違いについて、あなたはどのように思いますか？
- A 「その違いは主として、アラブ人の人口に関することです。・・・第一に、彼等は自分達をイスラエル人と見ていません。・・・例えば、イスラエルの国歌ですが、彼等はそれを認めていません。国歌はハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）にしかふれていないので、彼等は自分達がこの国の一部だとは思っていることができません。・・・それに国家の予算もアラブの町や村や教育には少ないので、現実にも、彼等の状況はよくありません。また、東エルサレムのようなところのアラブ人の中には、イスラエルの市民権を得ずに、自分達をパレスチナ人と思っている人もいます。・・・彼等は自分達が（イスラエル）市民とは思っていないのです。」
- Q あなたは、「ユダヤ人国家」というものが必要だと思いますか？
- A 「イスラエル建国宣言では、国家が全てのマイノリティに平等な権利を与えることを謳っています。ですから私は、イスラエルがユダヤ人国家であることができると思います。でも、すべての市民に平等に関係するという在り方ですが。・・・つまり、全ての住民に平等なイスラエル国家という在り方が可能だと思います。」
- Q 全ての住民に同じレベルで市民権を与えるということですか？でも、今はそうはなっていないのでは？
- A 「なっていませんね。」
- Q つまり、今の在り方や法律を変えるべきだということですか？
- A 「いや、法律自体は、みんなが平等でなければならないと（すでに）いっています。現実には起きているのは、ユダヤ人に多くを費やしているということです。・・・」
- Q でも、もしあなたの言われるように現実を変えるためには、国家の性格を変えなければならないのではないのでしょうか？
- A 「いいえ。」
- Q でも、建国宣言では、ベングリオンがイスラエルがユダヤ人のための国であることを宣言しているのではないですか？
- A 「宣言しています。でもその後で彼はこうも言っています。・・・『他の全てのアム（ママ。民族）を、平等な市民として受け入れる。』とも言っています。・・・彼のいうユダヤ人国家とは、世界の全てのユダヤ人に門を開くということです。・・・それがイスラエルという国の特別なところ。・・・つまり、ユダヤ人によってつくられた国家であって、実際、ヨーロッパ全土でのショアを生き延びたユダヤ人がここに来ることができるようにという目的で（つくられました）・・・でも彼は、建国宣言は、他のアムが住むことができないとは言っていない。・・・私の考えでは、ユダヤ人のための特別の場所があるということは、とても重要なことだと思います。というのは、離散の地では反ユダヤ主義があつて、いつもユダヤ人を追いだそうとする現象があるのを見ていますから。・・・もし国があれば・・・（ここに来ることができるので、国があることは）とても重要なことです。」
- Q あなたは、今もなお反ユダヤ主義が世界にあると思うのですか？
- A 「はい。イスラエルの高校ではどの高校も、強制収容所見学のために生徒の代表をポーランドやドイツへ送っています。そしてそこに行って帰ってきた友達に聞くと、いまだにそこには壁に卍の落書きがあつたり、ヘブライ語で話していると大声で叫ばれたり、町を歩くのがとても危険だったと言います。」
- Q あなたはつまり、どの民族も、自分達の国を持つことが必要だと思うのでしょうか？
- A 「今の状況を考える限りそうですね。全てのアム・ツァルパティ（ママ。注）訳としては、‘フランス民族’の意味に該当する。）にはフランスという国があります。・・・私はハ・アム・ハ・イエフディには国があることが重要だと思います。というのは、世界の（イスラエル以外の）様々なところで暮らしているユダヤ人が（それぞれの国で）うまくいかないとわかったときのために、・・・」
- Q アメリカのユダヤ人の場合はどうですか？
- A 「そこにも反ユダヤ主義があります。・・・いやそれ以上のもの、人種主義があります。ユダヤ人にもあ

るし黒人にも、・・・アメリカにはたくさんのユダヤ人がいますが、・・・依然として、全てのユダヤ人がアメリカでやっていくことはできません。・・・つまり、ハ・アム・ハ・イエフディに自分自身の場所があることが重要だと思います。・・・つまり、別の（民族の）支配下でやっていけない時のために、・・・というのは、ある人口の中には、異なる集団がいつもいるわけで、・・・同じことはパレスチナ人についても言えて、私はだからパレスチナ人に国を与えることが重要だと思います。・・・つまりここを二つの国にすることが必要だと。私にはユダヤ国家を維持することはとても大事なことで、世界にいる全てのユダヤ人がここにきたいときに来られる（移住できる）ように、そういう国家としての性格を、国家の定義の中にもっていることが重要だと思っています。」

Q 彼等に何かが起こったときに、ここに来られるようにですか？

A 「はい。例えばショアの時、英国はユダヤ人の入国を認めませんでした。他の国々もユダヤ人を受け入れませんでした。そして起こったことは、・・・ポーランドやドイツに残されたユダヤ人はみな壊滅させられました。」

Q でも今の時代はグローバリゼーションが進んでいて、人の行き来も国境を越えてさかんですし、一つの国はますます多元的になってきています。一つの国の中に様々な民族がいる国もたくさんあります。そういうことを考えると、一つの民族のための国家をつくるという考えは少し非現実的に思えるのですが。・・・

A 「国の中には他にも民族がいます。他に民族がいないとは言っていない。例えばここには、アラブ人がいます。・・・ユダヤ人でなければここに住んではいけないとは言っていない。だれでもここに住みたければ住むことができます。（「ユダヤ人国家」という）その意味は、この国の大多数が実際にユダヤ人である国という意味です。・・・」

Q でもその考え方の根底にあるのは、ユダヤ民族のための国をつくるということではないのですか？

A 「はい。いつも宗教に対する・・・（聞き取り不可）があります。ここは聖地で、・・・つまり、聖書によって約束されている‘約束の地’であって、神がアブラハムにこの地をユダヤの民に約束したという・・・そういうことが最も大事だと考える人がいます。『聖書にユダヤ人がここに住むことは約束されていて、だからここに住みたいし、我々の国がここにあり我々がここに住むのは、聖書によれば権利なのだ。』と考える人々がいます。・・・でもその他に、聖書の理由以外に重要な、最も重要な理由が他にあって、それは、第二次大戦中や戦後ユダヤ難民が行く場所があることがとても重要だったことです。もしそうでなかったら、彼等は殺されたか、強制収容所から出て死んでしまったでしょう。・・・お金も何もなかったのですから。・・・」

Q 次の質問ですが、あなたは今のイスラエルの民主主義をどのように評価しますか？

A 「・・・民主主義ということを考えたとき、『完全な民主主義』に達するということは不可能だと思います。そうはいっても、民主主義体制というのはあると思います。・・・つまり、誰でも自分の声を表現できたり、民主的な手段であれば他にも色々なことができるというような。・・・でもまだ不平等な部分があります。例えば、アラブ人とは実際一緒に暮らせるのですが、彼等には約束したすべてのことを与えていません。あるいは、超正統派のユダヤ教徒の人達は兵役についていません。・・・でも、アム（民族）の支配ということ言えば、（イスラエルに）民主主義はあります。選挙はあるし、誰でも自分の意見を提起できるし、政府を動かすことができます。・・・民主的でなかったのは、イツハク・ラビンが去ったときのことで（注）彼が暗殺されたこと）。・・・そういうこともあります。そういうことを除けば民主主義があると思います。実際、たくさんの‘軍事的な配慮’はありますが。・・・完全とはいえないけれど民主主義はあります。」

Q 今イスラエルの人口のうち、20%近くはアラブ人で約80%がユダヤ人ですが・・・

A 「私は知りません。・・・」

Q 調べてみるとそういう数字になっています。・・・あと仮に、・・・百年後に、人口が半々になったとして、イスラエルの（人口からみた）性格はずいぶん変わるようになりますよね？

A 「私はそうは進まないと思います。」

Q どうしてですか？

A 「イスラエルのアラブ人は彼等自身の国を望んでいます。彼等はパレスチナ国家に住むことを望んでいます。・・・だから、人口が半々になる前に、彼等の国をつくることを決意すると思います。」

Q でも、イスラエルのアラブ人は、（全員が）（将来のパレスチナ国家に想定されている）ウエスト・バンクやガザに移り住むことを望んでいるわけではないのではないですか？

- A 「いいえ。彼等は占領地がパレスチナになることを望んでいて、その時はそこに移りたいと思っている人は少なくないです。」
- Q つまりこの問題に関するあなたの展望は、二つの民族にそれぞれの二つの国家と言うことですか？
- A 「はい。」
- Q あなたにとって、今イスラエルの最大の問題は何ですか？
- A 「・・・最大の問題ですか？・・・二つあります。一つは、ユダヤ民族内の問題で、とても分裂しているということです。例えば、入植者、ダティーム（宗教的な人々）、ヒロニム（世俗的な人々）、・・・など色々な集団がお互いに憎みあっているのはとても深刻な問題だと思います。二つ目の問題は、いつ平和が来るのかという問題です。近隣のアラブ諸国との関係の問題やイスラエル内のアラブ人の問題、・・・もちろん経済等の問題もありますが・・・。」
- Q イスラエルにあった家を追われて帰ることのできないパレスチナ人のことをどう思いますか？
- A 「そのことについては今までも考えたことがあります。・・・もし彼が占領地に帰ろうとするのなら、それをどうするかはパレスチナ人が考える問題です。でも、イスラエルの中にあったのなら、・・・まず第一に、彼等は（イスラエルに）帰りたいと思います。イスラエルの支配下には、・・・でもパレスチナの領域内のところ（注）占領地内の入植地のようなところ）であれば、問題の場所はそっちにあります。でもそれは不可能です。彼等の家があったところには別の人がもう住んでいるので。・・・問題なのは、もし彼等が帰ってきたら、そこに住んでいる人がこんどは行く場所がありません。・・・ですから、イスラエル国家が賠償金を払うとか、他の場所を提供するとか、何か方法を見つけなければならぬと思います。・・・。」
- Q あなたは、理論的には彼等に帰還の権利があると思いますか？
- A 「はい。・・・ハ・アム・ハ・イエフディに帰還の権利があるように・・・。」
- Q あなたは徴兵を拒否している高校生のことについて聞いたことがありますか？
- A 「はい。人を殺したくないとか、宗教的な理由をいって、兵役につかない人はいます。私は彼等のいうことをもっともだと思います。でも、私にとっては兵役につくことは重要です。なぜなら、国を守ることは私にとって大切だし、ここにいる人々をまもることも大切です。」
- Q 軍隊でついでみたい仕事はありますか？
- A 「はい。対空ロケットの部隊につきたいです。」
- Q そこではどういうことをするのですか？
- A 「詳しくは知りませんが、主にロケットに関係していて、敵の航空機を撃墜させるための部隊です。」
- Q どうしてその部隊につきたいのですか？
- A 「一般的には女性には兵器を扱うような部隊にはつかせず、通信・情報関係や‘お茶汲み’のようなところにしか配置されません。私は、できるだけ‘貢献’できるところで何かしたいと思っています。その部隊は、女性も入れるし、戦闘部隊なのでそこでやりたいのです。」
- Q 将来就きたい職業などは考えていますか？
- A 「全く考えていません。」
- Q 質問票でもお聞きしているのですが、アム（民族）という概念についての定義のなかであなたは「共通の歴史」という表現を使われていますが、ユダヤ民族の「共通の歴史」とは何だと思えますか？
- A 「聖書からの歴史です。・・・つまり、もし出エジプトからヨシュアの時代まででいうと、神殿の建立とか、エルサレムに関する物語とか、・・・そういう様々なことです。・・・歴史という点ではそういう共通のものがあると思います。」
- Q そういう物語がこれほど長い間受け継がれてきたのは、特別なことに思えますが・・・
- A 「はい。・・・エルサレムやイスラエルに関する物語はどれも、・・・例えばペサハ（注）出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）ですが、セデル（注）ペサハの祭の儀式）の最後に『来年は再建されたエルサレムで。』というせりふがあります。・・・他にも『もしエルサレムを忘れたなら、それは私の右手を忘れたと同じだ。』というような、こういう様々な表現があります。・・・』
- Q あなたはしっかりと自分の意見をもっておられますが、こういうことはよく学校での話題となるのですか？

- A 「時々は。・私の場合は主に、アメリカの例のキャンプにいった体験も影響しています。・でも、学校でも時々こういうことについて話しています。例えば、独立記念日とかホロコースト記念日とか、歴史の授業の時とか・・・」
- Q 他の友達はどうなことを言っていますか？
- A 「テーマにもよりますが、私には入植者の家の友達がいる、彼女は、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）はユダヤ人だけのものだと思っています。エレッツ・イスラエル全土がユダヤ人のものでなければならぬと言っています。・・・」
- Q そういう意見の違いはどこから来ていると思いますか？まず家庭ですかね？
- A 「教育と家庭、家庭の歴史などだと思います。・・・例えば、家のなかで、『アラブ人は皆殺さなければならぬ。』というようなことを言ったら、『そんなことを言うもんじゃない。』とすぐ言われれば、考え直します。それに対して、入植地の家で育って『エレッツ・イスラエルは全部我々のものだ。』というようなことをいつも親から聞かされ、聖書に書いてあることをいっぱい教えられ、家に帰る途中にアラブ人から石を投げられるようなめにあっていれば、その子供の考え方は違ってきます。・・・」
- Q 今のイスラエルが、社会的・政治的にみてどういう方向に進んでいると思いますか？
- A 「政治的には、和平合意の方向に進んでいると思います。まずパレスチナ人と、その後で、シリアやレバノンとも合意に至ると思います。社会的には、・・・分裂の方向に行っていると思います。・・・でも、和平が本当に実現すれば経済もずっと良くなると思うので、そうしたらだんだん国内の分裂もおさまってくるのではと思います。」

S 4

生年月日：1982-8-30生まれ (17歳)

出生地：イスラエル エルサレム

性別：男

父親出生地：モロッコ カサブランカ

母親出生地：モロッコ カサブランカ

父方祖父出生地：モロッコ NA

父方祖母出生地：モロッコ NA

母方祖父出生地：モロッコ NA

母方祖母出生地：モロッコ NA

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「ショア記念日／世界のユダヤ人がどこかで傷つけられる時／ユダヤ人であることを理由に誰かが傷つけようとする時。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「新聞を読んだり、ニュースを聞く時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。安息日の夜の祈り／祭日の祝／コシエルの食事（これらはすべて両親によってなされる）」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。1999年。」

感想：そこで見たものの大部分はすでに知っていたので、それまでと特に違うことは感じなかった。
こんなにひどいことをなぜ人間に対してできるのか理解できない。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム (nation) : 共通の要素をもつ人々の集団。出自／言語／文化など

レオム (nationality) : 共通の要素をもつ人々の集団（出自／言語／文化など）で、自己決定を望んでいる人々。

エズラフット (citizenship) : 特定の国家に対する忠誠の表現。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国益を考慮し、イスラエルの住民を最大限守ること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「満足している。もちろん、防衛のためではなく攻撃を目的とした行為をしているときには、私の期待を逸脱していることもある。」

- Q あなたは、ユダヤ人アイデンティティが世界中で長い間消えることなく受け継がれてきたのはなぜだと思いますか？
- A 「それはユダヤ人だけにいえる特別のことではないと思います。そういう例はたくさんあると思います。レオム（民族／民族性）についていうならば、フランス人もそうだし、日本人もそうだと思うし、ユダヤ人に特別いえることではありません。」
- Q でもやはり、こんなに長い歴史を通じて何世代も受け継がれていいる例はあまりないのではないですか？
- A 「たぶんそれはユダヤ人がいつも踏みつけられてきたからだと思います。例えば、第二次大戦中のショアとか・・・僕にユダヤ人アイデンティティがある理由は、僕がイスラエルに住んでいるからです。ここはほとんどの人がユダヤ人ですから。でも僕は、ユダヤ人だと思っ以上イスラエル人だと感じています。僕にとってヤハドット（ユダヤ主義）は伝統のようなものです。父と母がいて・・・でも僕はそんなにユダヤ人のしきたりを実行しているわけではないけど。・・・」
- Q ご両親はどうですか？
- A 「祭日とかは・・・（しています）」
- Q お祖父さんとお祖母さんは？
- A 「二人ともダティム（宗教的）でした。」
- Q あなたのご両親は、お祖父さんやお祖母さんがやられていたほどには（伝統やしきたりを）やられていないということでしょうか？
- A 「はい。」
- Q あなたは今ご両親と住んでいるので、ご両親と同じように、ご両親がやられるのと同じ程度に（伝統を）まもっているのでしょうかね。
- A 「そうでもありません。例えばヨム・キプール（注）贖罪の日）に父は断食をしますが、僕はしません。・・・ペサハ（注）出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）の時も父はパンを食べません。僕は家では食べないけど外では食べます。」
- Q もしあなたが自分の家族を将来持ったとしたら、今やっている伝統のなかのどういうことをやめてしまうと思いますか、あるいは続けると思いますか？
- A 「誰と結婚するかによります（笑）。・・・例えば、祭日での様々な食事はちょっとやりすぎのような気がします。・・・ハヌカのお祝いはやめないと思います。・・・」
- Q あなたはパール・ミツバ（注）13歳男子の成人の祝いの儀式）をやりましたか？
- A 「正式にはないですが・・・（やりました）」
- Q どういうことですか？
- A 「普通はシャバット（安息日）の日にシナゴグ（ユダヤ教会）に行ってやるのですが、今は月曜日や木曜日にもやっています。僕は、シャバットにではなく、別な日の方でやりました。」
- Q 儀式を終えてどんな気持ちでしたか？
- A 「・・・13歳になったということ。・・・でも、そもそもやりたいのかどうかもそんなに考えなかったし、・・・別に深い意味は感じなかったです。」
- Q それは、あなたがやりたいと思ってやったのですか、それともご両親の勧めで？
- A 「両親もそんなに望んでいたわけではありません。だからシャバットの日に（正式に）やったわけでもないし、・・・（それでもやったのは）例えば父の親戚などから（色々言われたからだと思います。）・・・」
- Q あなた自身はどのくらいやりたい気持ちがありましたか？
- A 「僕はやりたくはなかったです。でも、両親から言われたり、周りの友達もやっているの、やることにしました。・・・別にやっても構わないと思ったし・・・」
- Q 当日までに、どのくらいラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）のところで勉強しましたか？
- A 「三週間。・・・八回です。」
- Q 儀式が終わって少し大人の仲間入りをしたような感じがしましたか？
- A 「いいえ。・・・まだ子供でした（笑）。」
- Q あなたは自分に息子ができたら、パール・ミツバをさせたいですか？
- A 「はい。そんなに大々的にではなく・・・」
- Q もし彼がやりたくないと言ったらどうしますか？

A「やりたくなければやらなくてもいいです。」

Qやらなくとも構いませんか？

A「別に。」

Qあなたのユダヤ人アイデンティティがどこから来ているのかと聞かれたら、何と答えますか？

A「父と母からです。」

Qどのようにですか？

A「僕の知っていること、僕が今やっていること、これからやることは、両親がやっていることから来ているからです。・・・学校では聖書を勉強しますが、それからはユダヤ・アイデンティティはできません。」

Qあなたにとって、ユダヤ・アイデンティティは大切なものですか？

A「・・・えー、今は（大切です）。こういう国にいと、・・・ユダヤ人とアラブ人の議論のなかでは、ユダヤ人であることは重要です。」

Qどうして重要なのですか？

A「もしユダヤ・アイデンティティがなかったら、この国は他の国々と同じになってしまうからです。」

Qあなたは、自分が古代アブラハムの子孫であり息子であるというような意識がありますか？

A「・・・アブラハムとのつながりというより、アダムとイヴを考えます。・・・アブラハムはあんまり考えないかな・・・」

Qではあなたは、ユダヤ民族の祖先がこの地から始まっているという意識を持っていますか？

A「はい。でも僕は、イスラエル国家がベルギーだったとしても構いません。」

Qどういう意味ですか？

A「この国がヨーロッパのベルギーにあったとしても構わないのです。僕にとって場所は重要ではありません。・・・今国がここにあるのでここは重要ですが、場所自体は重要ではありません。最初ユダヤ人に国をつくろうとしたヘルツェルはイスラエルがだめならウガンダにつくることも考えていました。・・・（僕も）場所はどこでも構いません。」

Qでも、とにかくあなたはユダヤ人国家としての場所があることが大切だと思いますか？

A「はい。・・・宗教的な意味で（必要か）はわかりませんが、文化的、伝統的には。・・・ユダヤ人に国がないとユダヤ・アイデンティティもなくなります。だから国があることは必要だと思います。」

Qもしイスラエルがユダヤ人の国としての性格を変えてしまったら、あなたはどう思いますか？

A「たぶんちょっと困るかも・・・考えたことがなかったけど、・・・仮にここに色々な人がやってきて大多数がユダヤ人でなくなったら・・・ちょっと困ります。何故かはわからないけど。」

Qイスラエルが「ユダヤ人国家」として自己を規定している一面、現実には多くのアラブ人もいるわけですが、このずれについてはあなたはどう思いますか？

A「でも『ユダヤ人国家』とは何かということについては誰もきちんと定義していません。『ユダヤ人だけの国』と考える人もいれば、『ユダヤ人が多数である国』とも考えられるし、『ユダヤ宗教国家』とも考えられ、・・・その意味は規定されていません。」

Qそれはそうですが、メディナ・イフディット（「ユダヤ人国家」）という言葉は、私には「一つの民族のための国家」という響きに聞こえますが。・・・

A「・・・今年僕達はそうした問題について『市民権』の時間に勉強しました。・・・ヘルツェルが考えたのは、『ユダヤ人が多数である国』ということでした。」

Qでもとにかくユダヤ人のための国をつくろうとしたわけで、ベングリオン建国宣言にもユダヤ人国家として国の性格が規定されています。そういう規定をしている国は他にはないのではないのでしょうか？

A「僕は『ユダヤ人国家』とはユダヤ民族の国家だと思います。つまり、・・・この国の役割は、世界のユダヤ人の中心であって、世界のユダヤ人集団とのつながりを持ち続けて避難所としての機能をはたすことにあります。」

Qあなたは今言われたことをどう思っていますか？

A「それが僕が思っていることで、そのように国をみています。」

Qあなたはそういう国を望みますか？

A「すでにそういう国家です。」

Qあなたはそういう今の国の性格を維持していくことが大事だと思いますか？

A 「はい。大事です。でもまず国家の性格を決めることが大切です。今は、その意味がはっきりしていません。『ユダヤ人国家』とは何かということで議論があります。・・僕が思うのは、・・そうであるべきだと思う『ユダヤ人国家』とは、『世界の全てのユダヤ民族の国家』ということです。・・ですから、そういう性格を維持することは大切です。」

Q どうして大切だと思うのですか？

A 「・・それは、・・この国は・・ユダヤ人のための国だからです。」

Q ユダヤ人のための場所が必要だと思いますか？

A 「・・・・・とてもいやらしく聞こえると思いますが、必要だと思います。・・どの民族も国を持っています。・・すべてとはいいいませんが、ほとんどの民族には国があります。日本もそうでしょう？イスラエルのように、（日本も）民族国家ですよね？・・問題は、・・ユダヤ人、日本人、ベルギー人、ということで国境をつくっていくことに問題はありません。そういうふうにしていくと、ユダヤ人にも国が必要です。・・メディナ（国）ではなくアム（民族）で境界をつくっていけば・・・・・つまり、世界は一つのメディナ（国家）ではありません。日本人の国が一つ、中国人の国が一つ、チェコスロバキア人（マ）の国が一つ・・・・・こうしていくとユダヤ人にも国が必要です。」

Q でも、日本も中国も国家のなかには様々な民族がいるし、国家として特定の民族のための国家であると規定してはいません。

A 「日本は民族国家ではないのですか？」

Q 違います。それに特定の民族のための国家であるという定義もありません。でも、イスラエルはそうではないですよね。あなたは特定の民族のための国家として、つまりユダヤ人の国としてイスラエルが存在することが大切だと思っておられますが、ある国家が特定の民族のための国家でないとうまくないのですか？

A 「そうでないと、ユダヤ人がユダヤ人でいられないからです。・・・・・もし民族に国がなかったら、どこにいけばいいのでしょうか？散りじりになります。・・民族というのは結局国のルーツです。民族は国がほしいのです。」

Q 質問を変えますが、あなたはイスラエルがユダヤ人とアラブ人に同じ市民権を与えていると思いますか？

A 「平等かどうかということですか？市民権は同じだと思います。・・・・・あ、でも『帰還法』があります。アラブ人は『帰還法』の対象ではないので、それは一つ違う点です。」

Q そのことについて、あなたはどのように思いますか？

A 「よくないと思います。」

Q どうしてよくないのですか？

A 「それは人種主義です。・・・・・でも、・・・・・一面ではそう（人種主義）なのですが、・・・・・別の面で見ると、さっき言ったようにここは『ユダヤ人国家』なので、・・・・・ユダヤ人が・・・・・その法律自体よくないと思います。どうしてかという、例えば誰かの祖父がユダヤ人ならその祖父も本人も移住できます。でもその人の母がキリスト教徒だとすると彼女も移住できますが実はユダヤ人ではありません。だから、『帰還法』を適用していくと、（結果として）たくさんのユダヤ人ではない人が移民してくることになります。・・・・・だからよくないと思います。」

Q 今イスラエルは市民法のほかに宗教法も持っていますが、あなたはそのことについてどう考えていますか？

A 「国家から宗教を分離しなければならないと思います。」

Q あなたは今のありかたを変えたいと思うのですか？

A 「ええ。」

Q 今のありかたで、どういう点があなたにとって問題ですか？

A 「そういう法律（宗教法）は凝り固まっているからです。例えば、ヒロニム（世俗的な人々）はシャバットでも働きたいかもしれませんが、でも（宗教法のために）シャバットや祭日には働きません。僕の父は歯科医ですが、シャバットに仕事をしなくてもそれは禁止されています。・・それにシャバットには通りのあちこちが車が通れないように閉鎖されます。・・・・・そういう法律がどうしても必要なのか・・・・・」

- Q 質問票のなかで、あなたはご自分を「シオニストと思う。」と答えておられますが、これはどういう意味ででしょうか？
- A 「僕はイスラエル国家で暮らしているからです。」
- Q 別の言葉でももう少し詳しく説明してもらえますか？
- A 「・・・ずっと僕はここで暮らすと思うのです。・・・つまり、他の国に移り住むことはないと思います。」
- Q それだけの理由でシオニストといえるのでしょうか？
- A 「シオニストとは、シオンやエルサレムやイスラエルのことを考える人のことから・・・」
- Q 確かにシオニストには色々な定義がありうるのでそうかもしれませんが、あなたはどう定義するのですか？
- A 「・・・シオニストとは・・・かつてアレツ（パレスチナ／イスラエル）に移住しました。シオニストとは、アレツが大切だと思う人だと思います。・・・いやアレツではなく、メディナ（国家）が大切だと考える人のことです。」
- Q その場合、アレツとメディナの違いは何ですか？
- A 「アレツはシェタハ（領域）、アダマ（土地）で、メディナは国家です。」
- Q 先ほどあなたは、（イスラエル国家の）場所はどこであったとしても構わないと言ったと思うのですが・・・
- A 「僕が言ったのはアレツはどこでもいいという意味でいったのです。メディナは大切です。」
- Q そのメディナはどこにあっても、ウガンダでもベルギーでも構わないということですか？
- A 「そうです。」
- Q そうすると、シオニストの今の定義とは矛盾しないのでしょうか？
- A 「そうですね。シオニストにはアレツ（場所がどこかということ）が重要です。僕にはメディナ（国家）が重要です。いや、間違えました。アレツはカントリー（国）です。・・・シオニストにとって大事なのは、シェタハ（領域）、場所、土地です。」
- Q ますますわかりません。メディナを英語であなたはどう訳しますか？
- A 「ステイトです。」
- Q アレツは？
- A 「カントリーです。ランドかもしれない。」
- Q シオニストにとってはどちらが大事なのですか？
- A 「アレツです。」
- Q あなたにとってはメディナがより大事ということですが、あなたはシオニストだと自分を思っているわけで、矛盾してませんか？
- A 「はい。それは、メディナがここにあるからです。僕にとってはメディナが大事ですが、それは今ここにあります。だから僕もシオニストなのです。」
- Q では次に、あなたは質問票の中で「世界のユダヤ民族は一つの民族だと思う。」と答えられています。それはどういう意味でそう思われるのか少し詳しく聞かせて下さい。
- A 「・・・何て言ったらいいのか・・・えー、・・・僕がニューヨークにいるユダヤ人について何かを聞く時とスコットランドの誰かのことについて何かを聞くのでは、感じ方が違うのです。何故かはわからないけど・・・」
- Q それはより親近感を感じるということですか？顔も見たこともないかも知れないのに「親近感」を感じるのはどうしてだと思いますか？
- A 「最初にも言ったかもしれないけど、たぶんユダヤ人はいつも追放されたり、殺されたりしてきたからだと思います。」
- Q あなたはイスラエル人的なメンタリティというものがあると思いますか？
- A 「いいえ。・・・どこの国でも同じだと思います。ただここはヘブライ語をしゃべっているということは違うかも知れません。・・・（ここには）ユダヤ人の要素というものはあるかも知れないけど、メンタリティが違うことはないと思います。何か特別違う行動様式というのがあるとは思えません。」
- Q 外国に行ったことはありますか？
- A 「ええ。」

Q どこですか？

A 「フランス、アメリカ、イギリス、・・・」

Q そういう国で何か違ったメンタリティを特に感じなかったということですね？

A 「ええ。みんなは『イスラエル人は押しが強いとか、感じがよくない。』とか言いますが、僕が行った国でも全く同じでした。」

Q 彼等も押しが強く、感じがよくなかったのですか？

A 「みんなではないけど、・・・でもここでもみんながそうではありません。」

Q つまり、特にメンタリティの違いを感じなかったということですね？

A 「それはどこでも何か少し違っていることはあるけど・・・『イスラエル人は行儀が悪い。』と言われることには納得できません。」

Q あなたは、ユダヤ・イスラエル人とアラブ・イスラエル人との間に何かメンタリティの違いというものを感じますか？

A 「はい。・・・アラブ人は少し遅れていると思います。」

Q それは、メンタリティに関することですか？

A 「テクノロジーが遅れていると、考え方や行動様式も遅れると思います。・・・僕には彼等の行動様式は30年前のように思えます。」

Q どういうことですか？例を挙げて説明してもらえますか？

A 「・・・例えば文化ですが、アラブ人の生活には芝居とか演劇とかがほとんどありません。・・・」

Q でも芝居とか演劇は、人々のメンタリティというより建物のあるなしに左右されることでもありませんか？メンタリティそのものの違いがあるかどうかということについてはどうですか？

A 「・・・僕は、ごみ捨て場をあさっているユダヤ人は見たことがないけど、アラブ人はやっています。」

Q でもそれは、何も持っていないとかの生活状況の違いからくるのではないですか？

A 「ユダヤ人にも貧乏で金のない人がいますが、彼等はそういうことはしません。・・・少なくとも僕は（ユダヤ人には）見たことがない。」

Q 他に何か例がありますか？

A 「いいえ。・・・わかりません。もう少し考えれば何かでてくるかも知れません。」

Q とにかく、あなたは、何かメンタリティが違うと思うのですよね？

A 「ええ。」

Q では次に、ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）についてお聞きします。あなたは去年行かれているようですが、それは初めての訪問ですか？

A 「いいえ。三回行ったことがあります。」

Q 最初に行ったのはいつですか？

A 「四年か五年前です。」

Q 誰と行ったのですか？

A 「学校（の授業）で行きました。」

Q 今まで行ったのはいつも学校の授業でですか？

A 「ええ。」

Q ほとんど毎年行っているわけですが、学校はどうして何回も連れていくのだと思いますか？

A 「大切だからだと思います。」

Q 行った後で、そのことについて授業で話し合ったりするのですか？

A 「ええ。その場所ではなく。・・・『ショア記念日』にはいつも話し合います。」

Q 訪問の前と後で、ユダヤ・アイデンティティの点で何か変化したことがありますか？

A 「いいえ。そこで見たことは知っていましたから。」

Q あなたは、そこを訪れることをみんなに勧めますか？

A 「はい。ユダヤ人にといいではなく、人間にとって大事だと思います。」

Q 「イスラエルのユダヤ人は『抑圧された人々』から『抑圧する人々』に変わってしまった」という評価がありますが、あなたはそういう意見をどう思いますか？

A 「だいたいあっていると思います。」

Q あなた自身は、そのことをどう思いますか？

A 「よくないですね。」

Q どうしてよくないのですか？

A 「人種主義だから。・・・ユダヤ人がされたのと同じことです。」

Q さきほど、最近学校で「市民権」について勉強したと言われましたが、最近習ったことで何か覚えていることがありますか？

A 「メディナ・イエフディット（ユダヤ人国家）の定義について習いました。それからこの前は、民主主義について（習いました）。」

Q あなたは民主主義という点でイスラエルをどう評価しますか？

A 「民主主義的な国だとは言いきれないと思います。」

Q どうしてですか？

A 「例えばアラブ人には十分な権利がありません。それに、宗教の押しつけもあります。・・・」

Q あなたは質問票のアム（民族）の定義に、「共通の要素を持つ人々の集団」と書いていますが、ユダヤ民族の場合どのような「共通の要素」があると思いますか？

A 「出自。みんなアブラハムの子孫であること。言葉、宗教。」

Q 言葉は今は（ユダヤ民族全体で）共有されているとは言えないのではないですか？

A 「・・・でも、ずっとユダヤ人はアブラハムの子孫だったし、宗教も、・・・程度は色々ですが、ユダヤ人はユダヤ人とわかっていました。・・・」

Q ヒロニムの場合はどうですか？

A 「ヒロニムでも、やはりユダヤ教に属していることになるのです。」

Q 言葉は？

A 「言葉？・・・言葉はそうは（共有しているとは）言えません。・・・」

Q どうしてですか？

A 「ヘブライ語を喋らない人もいるから。・・・でも多くのユダヤ人はヘブライ語を意識しています。喋っていないけど・・・でも聖書はヘブライ語で書かれているし・・・」

Q あなたは時々聖書を読みますか？

A 「いいえ。・・・学校の授業では習うけど（自分では）読みません。」

Q 家では読んだことはないですか？

A 「一度もないです。」

Q でも一度ぐらいはあるのでは？

A 「一度も聖書は読んだことがありません。」

Q どうして？興味がないのですか？

A 「興味ないです。」

Q 他の本は読みますか？

A 「ええ。」

Q 例えばどんな本を最近読みましたか？

A 「いろいろ。・・・」

Q 小説などですか？

A 「ええ。」

Q 聖書は読んでみたら面白いかも知れないのに残念ですね。

A 「興味ないです。教室で習うので十分です。」

Q 今あなたにとってイスラエルの最大の問題は何ですか？

A 「平和。」

Q あなたはその問題で、どういう方向に今後イスラエルが進むことを望みますか？

A 「パレスチナ人国家とユダヤ人国家に分けることです。」

Q 占領地の返還に反対の人々もいますが、あなたはそうではないわけですね？

A 「はい。」

Q どうしてですか？

A 「彼等（パレスチナ人）にも国家があつて当然だから。」

Q イスラエルの中のアラブ人との関係についてはどう考えていますか？

A 「どういうことですか？」

Q 例えば、パレスチナ国家ができたとして、彼等がそこに移り住むのではなく彼等も自分達の国家をほしいということも考えられますし、あるいは、そう言わないにしても、名実共に平等な市民として暮らしていける在り方をイスラエルに求めてくることも考えられます。そういうことについてはどう思いますか？

A 「問題は彼等の（権利だけではなく）義務をどうするかです。ユダヤ人は軍隊に行っていて・・・」

Q あなたは彼等が兵役に就いてもいいと思っていますか？

A 「兵役はだめです。・・高齢者を介護したりする国の福祉活動などだったらいいと思います。」

Q 軍隊に行く代わりに別のことをするということですか？

A 「はい。」

Q 軍隊に就くことには反対ということですね？

A 「それはちょっと妙な感じです。・・もし兄弟がここに住んでいたりしたら、・・戦争では問題です。・・」

Q 今イスラエルにいてあなたが最もいいと思うことは何ですか？

A 「最もいいこと？・・・・・わかりません。」

Q この国のどんなところが好きですか？

A 「・・・・・さっきイスラエル人のメンタリティに他と違うところがあるかどうかということを知りましたが、イスラエルにはこういうことがあると思います。他の国にもあるかどうかかわからないけど・・・・・それは、例えば戦争とかテロとかが起ると、みんなが一体になって・・・・・団結するところです。」

Q 家を追われて帰りたくとも帰れないパレスチナ人のことをどう思いますか？

A 「残念です。」

Q 彼等に共感しますか？

A 「気の毒だと思います。」

Q 彼等に帰還する権利があると思いますか？

A 「・・・・・えー・・・・・まあ。」

Q でもそこにもう別の人が住んでいたら？

A 「国内の別な場所に住めばいいと思います。・・帰ってくる権利はあると思う。」

Q 18歳になって選挙権があるようになったら、どういう政党に投票するか考えていますか？

A 「メレツです。」

Q もう決めているのですか？

A 「はい。」

Q どうしてですか？

A 「宗教に対する考え方が僕と一致しているからです。・・それから占領地から撤退することに積極的でし平和を進めようとしているから。」

Q 毎日新聞を読んでいるのですか？

A 「ええ。」

Q 政治的な問題に関心があるの？

A 「はい。」

Q だからどういう政党を支持するかももうわかるのですね？

A 「ええ。」

Q あなたの周りの友達も、みんなあなたの様によく新聞を読んだり政治問題に関心がありますか？

A 「みんなというわけではないです。」

Q 学校で政治問題について友達とよく話しますか？

A 「ええ。でも、教室で友達とする会話はあまり政治的なことではありません。」

Q ふだん会話でよく話題になるのはどういうことですか？

A 「世界の若者が興味を持っていること。・・女の子のこととか、パーティのこととか。・・」

Q 将来どんな職業をしたいと思っていますか？

A 「わかりません。」

Q やってみたい仕事などは？

A 「わかりません。・・・どういう道に行くのか全くわかりません。」

S 5

生年月日：1982-6-17生まれ（17歳）

出生地：イスラエル エルサレム

性別：男

父親出生地：イスラエル エルサレム

母親出生地：イスラエル エルサレム

父方祖父出生地：イスラエル エルサレム

父方祖母出生地：イスラエル エルサレム

母方祖父出生地：チェコ ウジャホロド

母方祖母出生地：ハンガリー ブタペスト

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「祭日。多くの移民がやってくる時。」

Q2 日常の生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「テロがある時。レバノンで戦争がある時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「わからない。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。私はグディです。シャバット（安息日）／祭日のコシエルの食事／祈り」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。半年位前。（代表でポーランドに行く前。）」

感想：過去を忘れてはいけないと感じた。そしてホロコストを人々が経験したということは想像を絶する。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム(nation)：共通の過去（歴史）を持ち、共通の文化と言葉を持ち、同じ旗の下にある集団として自らを定義する人々の集団。

レオム(nationality)：必ずしも同じ社会集団の中に生活している必要はないが、共通の歴史を強調すること。

エズラフット(citizenship)：特定の国家へ帰属し、その国の権利と義務を担うこと。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「外敵からイスラエルを守ること。また、平時時には、平和への脅威に対して威嚇する存在であること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？」

A 「ツァハルは今日までイスラエルを守っている。将来どの位威嚇できるかはわからない。」

- Q 質問票を拝見するとお母さん方のお祖父さんとお祖母さんはそれぞれチェコとハンガリーで生まれて移住されているようですが、いつごろ移住されたのでしょうか？
- A 「何年かということですか？母に聞いてきます。・・・祖父は1939年で祖母は1948年だそうです。」
- Q お二人は今もお元気ですか？
- A 「祖父は亡くなり、祖母は元気です。」
- Q お祖父さんはいつ亡くなったのですか？
- A 「5年ぐらい前です。」
- Q どうしてイスラエルに移住したのかということについて何か話してもらったことがありますか？
- A 「祖母はショアの後に移住しました。祖父はどうして移住したのかよくわかりません。話してくれたこともありません。」
- Q あなたも何も聞いたことがないのですか？
- A 「わかりません。祖父のことは何も知りません。聞いたこともありません。」
- Q お祖父さんはそのことに触れたがらなかったのですか？
- A 「そうじゃなくて、単に祖父とあまり話をする機会がなかっただけです。」
- Q お祖母さんは何歳ですか？
- A 「80歳です。」
- Q (お祖父さんやお祖母さんとは) あまり話をしないのですか？
- A 「祖母とはしてます。・・・祖父ともしなかったわけではないけど・・・それに僕たち(孫たち)は小さかったし・・・」
- Q 質問票でアイデンティティについてのことをお聞きしましたが、あなたは、ユダヤ・アイデンティティがこんなに長い歴史を通じて消えないで続いてきたのはどうしてだと思いますか？
- A 「ユダヤ人の‘ものの見方’があるからだと思います。」
- Q それはどこからくるのですか？
- A 「僕はダティ(宗教的)だから・・・神からくるといっていると思います。」
- Q ダティではない人でもユダヤ・アイデンティティはあるわけですが、一人一人は違っていてもユダヤ人としての民族的なアイデンティティが世界で共有されているのは何故だと思いますか？
- A 「何故かという、世界のどこでもユダヤ人をみな嫌っていたからです。」
- Q どうしてそう言いきれれるのですか？
- A 「世界の多くのところでショアがあったり、その前も、いつも反ユダヤ主義がありましたから。・・・どこでも僕たちを嫌っていたので、ユダヤ人はアレッツに移住しました。選択の余地はなかった。その前は、ドイツやヨーロッパで同化しようとした人達もたくさんいました。19世紀はそういうユダヤ人がいっぱいいた。でもそれはうまくいきませんでした。民族(の違い)が残り、・・・ユダヤ人は受け入れられませんでした。」
- Q あなたにとってユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティはどういう関係にありますか？どちらがまず先にあるといえますか？
- A 「・・・僕は・・・僕は・・・わかりません。」
- Q 二つは切り離せないものですか？
- A 「・・・ええ、互いに絡み合っているし・・・ユダヤ人アイデンティティの一部はエレッツ・イスラエル(イスラエルの地)にいるということだし、ユダヤ人としてイスラエルにいます。だから・・・ユダヤ人であることはエレッツ・イスラエルにいます。・・・そう考えると僕はイスラエル人である以上にユダヤ人だと感じているのかな。・・・」
- Q あなたは、イスラエル人のメンタリティというのが何かあると思いますか？
- A 「ええ、もちろん。」
- Q あなたはそれがどんな特徴のものだと思いますか？
- A 「・・・他の民族にもそれぞれの特徴があるように・・・つまり、それは気候にも関係があるし、イスラエルにはテロがあるとか、そういうことは人を‘熱く’していると思います。・・・この生活にはいつも‘緊張’があるので、・・・テロとかレバノンの問題とか・・・人々は感情をより表に出しがちだと思います。・・・特徴を描くとしたら、‘熱く’て、おこりっぽくて、・・・道路ではしょっちゅうクラクションをならしているのがそのいい例です。」

- Q イスラエル人のメンタリティということを使うときに、アラブ・イスラエル人とユダヤ・イスラエル人のそれぞれの共通点や違いについてはどういうことが言えますか？
- A 「共通していることも少しあるけれど、違いもあります。共通しているのは、共に‘熱い’民族であること。でも違うのはアラブ人は文化の面であり発達していないことです。・・・生活様式が何もかも古くさいし、・・・例えば、テクノロジーがありません。アラブの芸術は（僕たちのとは）違っています。つまり、・・・西洋の芸術にあまり近くありません。」
- Q そういう違いはメンタリティの違いでしょうか？
- A 「アレツ（イスラエル）には喫茶店があり、人々（ユダヤ人）は夜喫茶店に行って時間を過ごします。・・・アラブ人は、ホモス（注）ひよこ豆でつくったペースト。ピタというパンにつけて食べる。）を食べに出かける。・・・ここは西洋の国みたいだけど、彼等はそうではありません。・・・仕事にしても、イスラエルの（ユダヤ人の）仕事はテクノロジーを使ったものだけど、アラブ諸国の方は建築現場の労働者です（ママ）。・・・」
- Q そういう違いはどこからくるのでしょうか？
- A 「それは、・・・彼等はテクノロジーが発達していない地域に住んできたからです。それに対して、ヨーロッパからきたユダヤ人はアメリカにあったテクノロジーと結びついていて、移住したときにそういうメンタリティを一緒に持ち込んだからです。」
- Q でもユダヤ人の移民は西洋からだけではなく‘東洋’からもたくさん来たのではないですか？
- A 「彼等は西洋から影響を受けました。・・・」
- Q 質問票の中であなたはご自分を「シオニストだと思う。」と答えていますが、これはどういう意味ででしょうか？
- A 「ヤハドット（ユダヤ主義）でのシオニストの意味は、『僕たちは初めからここにいた。』ということです。その後二千年の間ユダヤ人は世界中に離散して、ここに戻ってきたのだと。ですから、シオニストであるということには、『僕たちはいつもここに戻ってこなくてはならない。』言い換えると『いつも祈り続け、いつ戻ってくるのかをいつも分かっていた。』という意味があると言えます。」
- Q あなたはたくさんのユダヤ人が世界の各地からここに移住してくれればいいと思いますか？
- A 「はい。・・・押しつける気はないけど、来たい人は来ればいいと思います。」
- Q たくさんのユダヤ人がイスラエルに移住することはあなたにとって嬉しいことですか？
- A 「ええ、もちろん。」
- Q 質問票の中の「世界のユダヤ人は一つの民族だと思いますか。」の問いには、「わからない。」と答えておられますが、これはどういう意味ででしょうか？
- A 「僕は他の人を規定することはできないからです。」
- Q どの民族に属するかという意識は主観的な問題だということですか？
- A 「そうです。問題はその人がどう感じているかということですから・・・」
- Q あなたはシャバット（安息日）の伝統をまもっていると答えておられますが、具体的にはどのようにまもっているのでしょうか？
- A 「まず、電気の明かりをつけません。テレビも見ないし、車で外出することをやりません。それから火を使わないことや、シナゴーグ（ユダヤ教会）に行ってお祈りをすることや、・・・家族がみんな集まって特別の夕食をします。」
- Q コシエル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事もまもっているのですか？
- A 「はい。」
- Q 食器などももちろん分けているのでしょうか？
- A 「はい。（肉用と乳製品用に）二種類の食器が準備してあります。」
- Q あなたの家でだけでなく、外に行ってもまもっているのですか？
- A 「はい。」
- Q 外国に行ったときはどうするのですか？
- A 「えー、僕は菜食者のレストランに行きます。そこには肉はありませんから問題ありません。」
- Q でも外国では食器の問題はどうしますか？
- A 「僕たちはイスラエルからプラスチックの食器を持参します。」
- Q あなたの家族は全員そういう伝統をまもっているのですか？

A「はい。」

Q その伝統のまもり方の程度ですが、お祖父さんやお祖母さんの世代とあなたの両親やあなたの世代とで違いがありますか？

A「全く同じです。・・・一般的なことについてはきまりがあるので。・・・例えば肉を食べたら、ミルクを飲むまで三時間待たなければならないとか・・・そういうきまりがあるので、（まもり方の程度というの）誰でも同じなのです。」

Q あなたはどうしてそういう伝統をまもっていると思いますか？

A「まもりたいから。・・・僕はこの家に住んでいて、家でやっていることをやりたいと思うので・・・」

Q でもあなた自身もまもりたいと思っているのでしょうか？

A「・・・自身がないけど、たぶんそうだと思います。・・・僕にはヒロニム（世俗的ユダヤ人）の友達もいて彼等は伝統も宗教も気にしていません。・・・とても‘誘惑され’ます。シャバットにディスコに行ったりするのは楽しそうです。」

Q 今のところはあなたはダティでも将来はわからないということですか？

A「将来的にもダティだと思います。」

Q あなたは、将来自分自身の家族を持ったときも、あなたの両親がやってきたように伝統をまもっていきたいと思いますか？

A「全く同じにとはいかなくとも、それに近いことを続けていくと思います。」

Q もしダティヤ（宗教的ユダヤ人）ではない人を好きになったらどうしますか？

A「問題です。」

Q でもそれは起こりうると思いますか？それともあなたは最初からダティヤの人だけを選びますか？

A「おこりえます。オランダの女の子からでも選ぶかも知れないし。」

Q 彼女がダティヤでなくとも構いませんか？

A「いいえ。」

Q どうして？

A「もし僕が好きなら・・・（ダティヤでなくとも）嬉しいことです。だから構いません。」

Q もし彼女が、あなたがまもってきた伝統をやめようといったら、同意しますか？

A「彼女はやらなくていいけど、僕はやるでしょう。」

Q でも同じ家族の中で意見が分かれていると難しいのでは？

A「難しいでしょうね。でもやっている人もいます。・・・お互いできることを妥協すればいい。」

Q でも一人が車で出かけようと言って、一人が出かけないとなると、どうなるのでしょうか？

A「そういう場合は外出はとりやめです。・・・確かに難しいからどうなるかわからないけど、・・・そうになったらどうしようもないですね。」

Q あなた自身はとにかく伝統をまもっていききたいということですね？

A「ええ。」

Q 今後その考えはかわるかも知れないと思いますか？

A「変わらないとは言いきれません。・・・でも僕にとって宗教はとてもとても強いものです。何千年もの歴史があり、何故それが正しいのか何故それが真実かという様々な価値について色々な本に書いてあります。・・・それは何か‘確かなもの’なのです。・・・でももう一方では・・・ユダヤ人は『神が我々を選んだ。』と思っていますが、そのことについて考えてみると、『あなたは選ばれず、僕は選ばれた。』とはどういうことなのだろうと思って、少しおかしな気もします。・・・だからもう一方では、もしかしたら全部ばかげたことなのかも知れないという風にも思うのです。」

Q つまりあなたは、例えば結婚相手を考えるとき、今のところ宗教の要素の方がより重要だということですか？

A「今のところはそうです。・・・それは選挙で政党を選ぶときのようなものです。或る政党がいいと思っていてそれを選んでも、何年か経ってもっといい政党があれば次の選挙ではそちらに変えるかもしれないのと同じことです。」

Q 宗教は今のあなたにとってどういう意味で大切なのかをもう一度お聞きしたいのですが。・・・

A「それは僕たちの信仰だからです。・・・それがあから僕が生まれたのだと思っています。神が言ったことを（僕が）やるために。・・・」

- Q 次にヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）についてうかがいますが、あなたは何回ぐらい訪れたことがありますか？
- A 「三回か四回。」
- Q いつも学校で行ったのですか？
- A 「学校で行ったり家族で行ったり色々です。」
- Q あなたは学校代表の修学旅行でポーランド（のホロコスト記念館）にも行かれているようですが、いつ行ったのですか？
- A 「半年前です。」
- Q 何人ぐらいで行ったのですか？何日ぐらい？
- A 「二十人ぐらいです。・・・八日間の期間で・・・」
- Q そのときのことを少し詳しく話してもらえますか？
- A 「・・・僕の祖母がアウシュビッツにいたということもあって、とても重たいものでした。祖母は僕が旅行に行く前に色々話をしてくれたのですが、・・・突然話に聞いていた収容所が当時のまま目の前に立っていて、線路とか監視塔とか全部目の前にあって・・・そしてガイドの人がずっと説明してくれて、・・・ユダヤ人墓地にも行きました。シナゴグ跡にも行きました。今はそこにはユダヤ人はいません。彼等はショアで殺されて死んだか、イスラエルに来たかのどちらかです。・・・とても重たい気持ちでした。・・・重たい経験でした。」
- Q ガイドの人はイスラエルから行ったのですか？
- A 「はい。」
- Q その訪問の前と後とでどういう新しい気持ちが生まれましたか？
- A 「・・・そこに行って自分の目で見たことで、何がそこで起こったのかがよくわかりました。人間を焼くということを想像するのは難しいけれど、人間を置いた‘かまど’を実際に見ると、それはずっと具体的に現実的なものになります。・・・何と言っていいか言葉がないですが・・・ずっとはっきりしたものです。・・・」
- Q 訪問の後、ユダヤ・アイデンティティが強まったということはあるですか？
- A 「訪問のなかで感じました。訪問中にそこでイスラエル国旗をもって儀式をしたのですが、その時に、民族に対して・・・国を持っていることに誇りを感じました。『もし僕たちを殺そうとするなら、僕たちは国をまもる。』と思いました。」
- Q あなたは、ヤド・バ・シェムやそういうところを訪ねることは大切だと思いますか？
- A 「はい。・・・そうでないと（人は）忘れてしまうから・・・」
- Q イスラエルはその国家の性格を「ユダヤ人国家」と規定していますが、現実にはユダヤ人でない人もたくさん存在しています。そのずれについてあなたはどう思いますか？
- A 「イスラエルは『民主的なユダヤ人国家』だと思います。少なくとも民主的なわけなので、ユダヤ人でない人がいても、彼等はここに居続けることができると思います。それは彼等の権利ですから。」
- Q でも、‘民主国家’であることと‘ユダヤ国家’であることに矛盾はありませんか？
- A 「あると思います。」
- Q あると思うのですか？
- A 「あると思います。」
- Q あるとしたら・・・
- A 「問題だけど、・・・妥協していくしかありません。・・・どうしようもないです。・・・ヒロニム（世俗的な人々）とダティイム（宗教的な人々）の問題も同じです。ヒロニムは民主的な町を望む一方で、・・・ヤハドット（ユダヤ主義）だけでやっていくユダヤ人の町にしたいと思っている人々もいます。妥協を探すしかありません。ここには色々な人がいるのですから仕方ないのです。」
- Q 「ユダヤ人国家」という性格をはずして、「民主国家」だけではだめですか？
- A 「・・・えー、・・・あの、聞いて下さい。・・・ユダヤ民族は・・・歴史上例のない民族です。つまり、散りじりになって・・・散りじりになった民族はたくさんありましたが、そういう民族は民族として残らなかった。彼等は、同じ国に住もうとその後戻ってくることもありませんでした。二千年後となるとなおさらです。・・・二千年後ユダヤ民族はここに帰ってきました。・・・歴史のなかで実際ユダヤ民族を絶滅させようとしたことがあったわけで、人々はここに移住してきました。僕は、ユダヤ人であればそれを忘れてしまうことは少し・・・（聞き取り不可）ではないと思います。今僕たちはここにやっと居場所

- を見いだしたということなので・・・」
- Q つまり、ユダヤ人のための場所が必要だということですか？
- A 「はい。それに、歴史的に見てもそれは（ユダヤ人のための場所が必要だということは）明らかです。・・・反ユダヤ主義がいつの時代もあるので、ユダヤ人の場所がないと大変です。」
- Q あなたは今どんなところに反ユダヤ主義を感じますか？
- A 「ネオナチの組織があるし、・・・それは明らかな例ですが、・・・どこかの国をたまたま歩いていると、典型的なユダヤ人の容姿の人は・・・ぼくはそうではないですが・・・じろじろ見られたりします。」
- Q でも今は、そういうネオナチのような組織がでてきても、さらに多くの人々がそういう勢力に批判的で、反ユダヤ主義が大きくなるように行動しているのではないのでしょうか？ですから特定の民族に攻撃的な態度をとる人というのはほんの一部の人ではないですか？
- A 「そうは思いません。例えば、ドイツには今トルコ人がたくさんいますが、50年前にユダヤ人が嫌われたように今彼等（トルコ人）は嫌われています。彼等（ドイツ人）はザリム（‘よそ者’）が嫌いなのです。誰かというのは問題ではありません。それは（‘よそ者’を嫌うのは）彼等の民族性です。もしユダヤ人がもう大丈夫だと考えて『二度と前に起こったようなことは起こらないだろう。』と思っても、また同じことは起こると思います。実際起こっているのです。500年前のスペインからの追放を考えればわかります。・・・パール・コフバの戦い（注）132-135年の、ローマ人に対するユダヤ人の反乱）にしてもそうだし、・・・そういう例は一度だけではありません。忘れても忘れても、また起こっています。・・・」
- Q そういうことが起こったときに、ユダヤ人が‘避難してくる場所’が必要だということですか？
- A 「‘避難してくる場所’というより、国である必要があります。国でない限り（実際に）助けることはできませんから。」
- Q 質問票のなかで幾つかの概念を定義してもらいましたが、あなたはアム（民族）の定義として「共通の過去（歴史）や共通の文化と言葉をもつ」ということを指摘していますが、ユダヤ民族の場合どのような「共通の文化」を持っていると思いますか？
- A 「ユダヤ民族には、文化よりも歴史がより共通していると思います。」
- Q どういう歴史が共通していますか？
- A 「共通の歴史は、聖書です。・・・そこには、ユダヤ民族がエジプトを脱出してアレッツ（イスラエル）にたどり着いて国を持ったことが書かれています。」
- Q ヒロニムにとっても、聖書はユダヤ民族の共通の歴史として捉えられていますか？
- A ダティイムでない人も、ヒロニムも聖書が重要だと考えていることにかわりありません。彼等は別な形で、つまり文化的・伝統的な形で捉えているという違いがあります。」
- Q あなたはご自分がアブラハムの子孫だと思いますか？
- A 「はい。」
- Q あなたにとって今イスラエルの最大の問題は何でしょうか？
- A 「シリアとの平和交渉です。」
- Q あなたにとって、どういう点が問題ですか？
- A 「ゴランを（彼等は）要求していることです。僕たちのエレッツ（注）イスラエルの‘地’）をけずられてしまうこと。」
- Q あなたはゴランの返還に反対なのですね。それはどうしてですか？
- A 「また戦争をしかけてきかねないからです。」
- Q もし戦争が起これば返還してもいいですか？
- A 「・・・（返還して）戦争が起これないのだったら、（ゴランが）僕たちのところにあってもやはり戦争は起こりません。・・・シリアとの平和な関係はゴランとは関係ありません。平和を望むかどうかという人々の意志によるものです。ゴランはシリア全体の0.3%にすぎない小さな面積です。」
- Q ウエスト・バンクとガザについてはどう考えますか？
- A 「それは与えなければ（ママ）なりません。」
- Q （返還を）承知するのですか？
- A 「そうしたいです。」

Q 返還したいということですね。「返還」というニュアンスですか？「与える」ですか？

A 「‘与える’です。・・・いや‘返す’かな？‘返す’も‘与える’も似たようなものですね・・・」

Q (シリアの) ゴランと、ウエスト・バンクやガザとは、どうして(返還すべきかどうかということでの) 違いがあるのですか？

A 「どうしてかという、シリアには(ゴランには) ユダヤ人が住んでいます。あそこには(ゴランには) シリア人は住んでいません。ユダヤ人と、ドルーズ人(注) イスラエル北部やシリアに住むマイノリティ集団) が少し住んでいるだけです。でもアラブ人の町は、・・・例えばガザにはアラブ人しか住んでいません。もし彼等が自分達の国をつくりたいなら(そこで) つくれば良いと思います。」

Q ウエスト・バンクについてはどうですか？

A 「・・・(シリアとは) 反対です。」

Q あそこには今ユダヤ人が住んでいますか？

A 「ええ。でもそれは又別の問題です。あそこにいるユダヤ人はあえて‘真ん中’にいることを選んでいる人達です。僕は賛成できません。」

Q あそこの入植地についてはどう考えますか？

A 「・・・ただ問題をこじらせているだけだと思います。・・・だから占領地をアラブ人に明け渡すことができないのです。あそこにはユダヤ人がいるから。」

Q ちょっと待って下さい。・・・あなたは結局どう思っているのですか？

A 「明け渡さなくてはなりません。」

Q 入植地はどうしますか？

A 「入植地の数はそんなに多いわけではありません。・・・ユダヤ人のいる僕らのところにとどまるかユダヤ人のいないところに(ママ) 行くようにすればいいのです。・・・不可能なところについては、そこからユダヤ人を追いだしてここに戻さなければなりません。」

Q それでは、今イスラエルにいてあなたが最もいいと思うことは何ですか？

A 「・・・えー、・・・いろんな種類の人々がいることです。・・・みんな個人個人が独立していて、・・・」

Q 家を追われて帰りたくとも帰れないパレスチナ人の人々のことをどう思いますか？

A 「どこに帰る人のことですか？」

Q 例えば、・・・イスラエル内のいろいろなところですか？

A 「どこにそういうパレスチナ人の帰れないところがありますか？」

Q ハイファにもエルサレムにもあると思いますが・・・

A 「エルサレムにはアラブ人もたくさん住んでいます。」

Q でも特に東エルサレムには、かつてのパレスチナ人の家に別な人が住んでいる例も少なくありませんね。

A 「ええ。東エルサレムは(そうですね)。・・・僕は、アラブ人から家や土地をとりあげて彼等が住めなくなっているところはそんなに多いとは思いません。むしろ反対の方が多いと思います。・・・ユダヤ人が住んでいた家をとられてしまったということの方が。・・・1948年まで遡ると、僕らの土地だったところに彼等がやってきて僕らを攻撃しました。それで僕らは引き揚げました。そういう状況は全て、彼等が攻撃してきたことで生まれたのです。もし戦争にならなかったら、半分半分が残ったのです。・・・今の状況は彼等が望んだ結果です。今更何ができますか？・・・」

Q 占領地に帰れないパレスチナ人についてはどうですか？

A 「調べてみないとわかりません。そのことについては僕はよく知らないのです。・・・」

Q 土地や家の問題以外にも、「帰還法」の対象がユダヤ人だけで、パレスチナ人は適用の対象にならないことについてはどう思いますか？

A 「ユダヤ人の支配による国家というものがあります。・・・つまりそれは、ユダヤ人の人々が始めた国家です。・・・スペインという国を考えると、・・・彼等は特定のアム(民族)の国家をつくりました。・・・色々な人々がそこに来て、・・・フランスからも・・・そこに住みたいと言うとします。・・・だからといって誰でも来たい人がやって来てるのでしょうか？・・・そうならないように一定の境界が定められています。・・・さて今パレスチナ人は、彼等のアム(民族)のパレスチナ国家をつくろうとしています。・・・イスラエル人、ユダヤ人、パレスチナ人という三つの種類があります。イスラエル人にはユ

ダヤ・イスラエル人とアラブ・イスラエル人がいます。・・パレスチナ人は彼等のつくるパレスチナ（国家）に住めばいいと思います。」

Q パレスチナ人の中には、今のイスラエルの中に家があった人もいると思いますが・・・

A 「僕たちも、家を追われたユダヤ人をここに受け入れたのです。ヘブロンがいい例です。僕たちは最後にあそこに住んでいたユダヤ人を見つけてここに呼び寄せました。僕たちもそうしたのだから彼等もそうすべきです。」

Q 賠償金を払うという考えについてはどう思いますか？

A 「戦争で家を奪われてしまった人は、土地のかわりに賠償金を払うのはいいと思います。これは、（パレスチナ人だけでなく）占領地にいるユダヤ人についてもそうしたらいいと思います。」

Q もうすぐあなたは有権者になるわけですが、選挙でどの政党に入れるかということを考えていますか？

A 「どの政党もよくないと思っています。・・腐敗しています。・・賄賂をとったり、払ったり・・・」

Q でも投票にいくと思いますか？

A 「ええ。・・僕は‘左’です。つまり、・・労働党を支持しています。」

Q もうそれははっきりしているのですか？

A 「ええ、はっきりしています。少なくともリクードではないし、・・・」

Q どうして‘左’を支持するのですか？

A 「‘左’は、より社会主義的な政党だし、社会を発展させることを信じているから。」

Q どういう点をいいと思うのですか？

A 「信じるということは国にとって必要なことです。・・それに、平和の問題は今イスラエルの中心的な問題ですが、彼等は和平推進の立場をとっていますから。」

Q あなたはダティなのに、宗教的な政党には投票しないのですか？

A 「ええ。ダティにも色々ありますから。色々な種類があります。僕は、彼等は（宗教政党は）・・・‘馬鹿’だと思っています。」

Q 面白いですね。宗教諸政党には投票しないと言いきれるのですか？

A 「はい。100%確実です。」

Q 大変面白いです。

A 「ええ。僕たちは‘変わり者’ですから。・・ほんとに。」

Q あなたは、イスラエルには市民法だけでなく宗教法が存在していることをどう思いますか？

A 「アレツ（イスラエル）に宗教法はありません。・・もしそういう法律があったらヒロニムを全員殺さなければなりません。・・トラー（注）ユダヤ教の律法）にそう書いてあります（笑）。・・・」

Q 冗談はおいておいて・・・

A 「聖書には、（安息日に）火をつける人は殺さなければならないと書いてあります。石をぶつけろと（笑）。・・・」

Q 離婚や結婚はラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）の承認を必要としますよね？・・そういう意味で宗教法がありますよね？

A 「それは大きな問題です。・・それは最大の問題といってもいいです。・・・例えばダティイムは、ユダヤ人でない人と結婚できません。・・もし・・（聞き取り不可）その人はユダヤ人でない人と結婚できます。そうするとその子供はユダヤ人ではなくなります。僕はダティなので、僕が子供を欲しいと思ったら、相手がユダヤ人かどうかを聞く必要がでできます。・・そうしないところ（イスラエル）に、二つの民族が存在することになってしまいますから。一つは宗教的な民族と、そうでないもう一つの民族と。・・そのために、民族が分裂しないで存続できるように、この法律は機能しています。」

Q そういう法律があることをどう思いますか？なくすべきですか、それともまもるべきですか？

A 「何と云ったらいいかわかりません。難しい問題です。一方では、それは公正ではありません。人を縛り付けるものです。民主的とは言えません。でも他方では、そうしないと、今言ったように二つの民族に分かれてバラバラになってしまいます。・・・僕たちはこんなに小さく閉鎖している社会なので、今のままでやっていくのがいいのではないかと思います。・・・黒い服を着たハレディム（超正統派ユダヤ教徒）は、自分達のコミュニティに住んで、選挙にも行かず、税金も払わず、軍隊にも行かず、何もしないで自分達の世界に生きていますが、僕はそういう生き方はしたくありません。」

Q どうしてですか？

A 「正しい生き方だと思わないからです。・・閉鎖的で、頭に壁をつくっています。聴く耳を持っていません。・・・」

- Q 今宗教諸政党は政府に大きな影響力を持つようになってきていますが、そのことについてはどう思いますか？
- A 「どの政党ですか？シャス党ですか？」
- Q 例えばシャス党ですね。
- A 「彼等が求めているのは、まず自分達の子供達の教育にいかにお金をとってくるかということです。・・・でも彼等はそんなに力がありません。彼等は政権に入って、お金を得ているだけです。・・・」
- Q 国家宗教党についてはどう思っていますか？
- A 「シャス党よりはまだましという感じかな。・・・」
- Q イスラエルに宗教的な法廷があるということについてどう思いますか？
- A 「ありませんよ。結婚と埋葬に関するきまりがあるだけです。」
- Q でも、シャバットに店を開かないのも、交通機関が止まるのも、宗教的な権威が管轄しているからではないのですか？
- A 「それはそうですね。店の場合は町にもありますが・・・でも店だって、コシエルでなければ（シャバットに）レストランを開くことはできます。」
- Q レストランだけでなく（普通の）店はどうですか？
- A 「たしかに（普通の）店は、シャバットには開くことが禁じられています。でも全部の町ではありません。エルサレムでは禁止ですけどテルアビブやハイファではずっと開いています。」
- Q でも少なくとも、‘禁じられている’町があるということが宗教的な権威が管轄する領域があるということを示しているのでしょうか？
- A 「僕自身は、そういうことをする必要はないと思っています。」
- Q あなたはダティなわけですが、そういう在り方は止めるべきだと思うのですね？それはどうしてですか？
- A 「それが・・・（聞き取り不可）とは思わないからです。店を開きたい人は開けばいいと思います。他の人がとやかく言うべき問題ではありません。」
- Q つまり、宗教は個人的な問題にとどめるべきで、公共の領域に持ち込むべきではないということですか？
- A 「ええ。ただし、結婚の問題以外は。・・・それは特別な問題がありますから。」
- Q 結婚の問題以外は、宗教は個人的な問題であって、公共の市民生活に影響を及ぼすべきでないというのがあなたの考えですか？
- A 「その通りです。」

Y 1

生年月日：1978 -6-21生まれ (21歳)

出生地：イスラエル エルサレム

性別：男

父親出生地：ロシア オシュトバ

母親出生地：イスラエル エルサレム

父方祖父出生地：ポーランド ビルゴルド

父方祖母出生地：ポーランド ビルゴルド

母方祖父出生地：イスラエル エルサレム

母方祖母出生地：イスラエル エルサレム

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「家での全ての祭事／毎日。」

Q2 日常の生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ (どんな時) ですか？

A NA

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「いいえ。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「いいえ。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。パール・ミツバ／祭日の食事」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。2年前。」

感想：情緒的 (感情的に) 強い印象をもったと同時に、我々は、独立した強い民族でいる必要があると思うので、その観点から見て非常に意義があったと思う。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム (nation) : 同じ国家内で同じ統治の下に一緒に生活している人々の集団。

レオム (nationality) : 住んでいる場所。

エズラフット (citizenship) : あなたがその下で統治されていること。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「強く断固たる軍隊でい続けること、そしてイスラエルの国境を守ること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「残念ながら、イスラエル軍はだんだんその価値を弱めてきている。もはや兵士は、強さと国を守ることを示すことがいかに大切かをわかっていない。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A シヌイ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A それまでは、選挙権がなかった。

Q イスラエル人アイデンティティを感じるのはどんな時ですか？

A 「朝起きてヘブライ語をしゃべるというようなことが、そういうことかな。」

Q ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティとは違いがありますか？

A 「まず第一に、すべてのユダヤ人がイスラエル人であるわけではありません。アメリカに住んでいるユダヤ人もいますが彼等はイスラエル人ではありません。そしてイスラエル人が全てユダヤ人であるわけでもありません。例えば、イスラエル市民であるたくさんのアラブ人がいますが、彼等はモスLEMやキリスト教徒であって、ユダヤ人ではありません。次に、宗教に関係した点の問題があります。ユダヤ人のなかのダティ（宗教的ユダヤ人）は、朝起きるとトフィリン（注）祈りの時につける小箱）をつけ、一日に3回お祈りをし、コシェル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）を守っていますが、自分はそういうことを何もやっていません。私にとってのヤハドット（ユダヤ性）は、せいぜい年に一度ヨム・キプール（贖罪の日）にクネセット（ユダヤ教会）に行くことくらいです。他には、ホロコスト記念日には、自分がユダヤ人であることをとても強く意識します。イスラエル人としての自分とは、私は何かということ、私の文化、私の言葉など・・・シオニストといってもいいです。とにかく、まず第一に自分はイスラエル人です。」

Q 二つのアイデンティティは、あなたのなかでどのような関係にありますか。どちらかがより重要なのか、それとも二つは同じレベルなのですか。

A 「イスラエル人であることがユダヤ人であること以上に重要です。」

Q あなたは、「自分がシオニストとは思わない」と答えていますが、それはどういう意味ででしょうか？

A 「まず、この国で生活して、軍隊に行く人は、十分にシオニストです。私はこの国で生活して、兵役にも就きました。その点では、私はシオニストです。今日イスラエルで起こっていることで、今だに土地が重要であるといっているシオニストもいます。私は、国のために闘う気持ちがあるから、その意味ではシオニストだけど、イデオロギー的に古いシオニストではないし、和平の合意に達したならば、占領地を返還してもいいと思っているという意味ではシオニストとはいいきれないと思います。」

Q ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に行ったことがあると答えていますが、それは一回ですか。

A 「ヤド・バ・シェムには何回も行ったことがあります。最初は両親と一緒にいったと思います。最後は軍隊の兵役中で、軍の行事で行きました。」

Q 訪問の前と後とで、ユダヤ人アイデンティティやイスラエル人アイデンティティの点で変化したことがありますか。

A 「特にありません。僕の父の家族はショアで多くを失ったので、そのことは、僕のユダヤ人アイデンティティに影響を与えています。確かに、ホロコスト記念日に朝起きると、僕はイスラエル人ではなくまずユダヤ人です。でも、ヤド・バ・シェムに行ったこと自体からは、アイデンティティに大きな変化はおきませんでした。今僕たちには僕たちのメディナ（国）であるイスラエルがあるために、自分がゴラ（異教徒の地）で生きなくてよいから、イスラエル人であってよかったと感じます。私は、自分を受け入れてくれる自分の国をもっていますから。」

Q あなたが質問票で使われている「国境」とはどの境界のことですか？

A 「2000年前の境界ではなく（占領地を入れた境界ではなく）、今の境界のことです。」

Q 軍隊では、どのような任務に就きましたか？

A 「3ヵ月はまず訓練で、そのあとレバノンの境界およびレバノンで4ヵ月、それから訓練、レバノン、その後は、占領地に2ヵ月、また訓練、レバノン、訓練、占領地、レバノン、と繰り返し、レバノンへは合計一年位いました。」

Q 兵役後、意識の上で変化したことはありますか？

A 「あります。まず第一に、両親から離れて、常に他の兵士といえるということ、18歳の子供が突然全く違う環境におかれ、武器を渡され、『おまえは戦争とむきあっている』と言われる。これは、厳しいことだし、望むと望まないにかかわらず責任が課されます。・・・そういうことが好きな人もいるけど、

僕は好きじゃありませんでした。他にも僕に影響を与えたことはたくさんあります。例えば友達について。三年間一緒に夜寝、朝一緒に起きて、全てを彼等と行動を共にしました。落ち込んでいるときはいつも励ましてくれました。いい友達とはどういうことかということを学んだと思います。あるいは、生きるということを違った角度からみるようにもなりました。かつては、レバノンに送られるということやテロということは、子供の目からみるとものすごく深刻な（恐ろしい）問題でした。でも兵士としてそれを見ると、また違ってきます。例えばレバノンで兵士の誰かが撃たれて負傷したり、死んだとします。それは、自分から5-60メートルの距離で起こるかもしれないし、実践のなかでは、銃をもってできるだけ早く行動をしなければなりません。こういう経験は、ものの見方をかえます。自分がやることは、全てのテロを防ぐことであり、防げなかったらそれは自分が悪いということです。それにまた帰属意識にも影響を与えたと思います。自分は軍という集団の一員であり、そこに属しているということ、軍を代表する一人として恥じない存在でなければという意識を持ちました。」

Q レバノンでは現地の住民に会うことはありましたか？

A 「なかったです。レバノンに入るとレバノンの村を通りすぎます。警備をしながらその家を見ていても、人の顔をみることはありませんでした。軍のキャンプに入るとそこは、立ち入り禁止区域になっていますが、イスラエル軍と一緒に行動しているレバノン軍とは、会いましたし、一諸に任務もしました。」

Q 質問票に書かれている「軍への期待／評価」のところの答えは、兵役後にそう思うようになったのですか？

A 「兵役後です。兵役前は、まったくそうは考えませんでした。」

Q なぜ、兵役後考えがそのように変化したのでしょうか？イスラエル軍は十分に強い軍隊だと思いますが。

A 「軍それ自体は強いです。・・・でも兵士は変わってしまいました。例えば、今日レバノンにいる兵士。ラジオの報道によると、ここにいたくない、なぜそこで軍の任務に就かなければならないのか確信がもてない、というような意識の変化が起こりだしています。かつて僕らの親が兵士だった頃は、『もし我々がいなければ、国は手にできない。』という意識がありました。今の子供は、もう国があり、それは‘事実’です。すでに存在している国に生まれてきていますから。でも親の世代には、国はなかった。僕の父の両親は、ロシアで生まれ、シオアから逃げてきました。僕の父は、『私は、国のために戦わなければならない。そうでないと、またシオアが起こったら自分は追い出される。』と考えたと思います。彼等には戦う大きな動機がありました。今の兵士は、戦うことに自信が持てません。動機が欠けているのです。」

Q あなたは、徴兵の任務が終わった後も、軍に残ろうとは思わなかったのですか？

A 「思いませんでした。軍は多くのことを与えてくれますが、軍にいたら自分のやりたいことはできません。人間関係や社会生活も制約されます。そういう生活はしたいと思いませんでした。今僕は自分のやりたいことを学んでいます。」

Q 将来はどういう職業につきたいのですか？

A 「フランス料理のシェフになりたい。今は肉屋に勤めて修行中です。」

Q イスラエルは社会的にメルティング・ポットには至らず、分化が進行しているという見方がありますが、どう思いますか？今のイスラエル社会をどう見ていますか？

A 「かつてイスラエルは、一体となっていなければなりません。そうでなかったら、シリア、エジプト、ヨルダン、パレスチナ人などが侵入したかもしれません。でも今はエジプトやヨルダンやパレスチナ人と和平合意を結ぶようになり、シリアともそうなるかもしれません。そういう状況のなかで、イスラエルの人々は、国家の安全保障よりも経済のことを考えるようになってきています。この変化は要するに人間自身の変化です。全体のことを最初に考えるかわりにまず自分自身のことを考える。自分にとってなにが良いことかと考える。こういう考え方が18歳ぐらいの若い世代で始まっています。『自分は今ピアノを勉強したいから軍にはいけない。』という風に。こういう人達が多い。他にも、例えばかつては多くの人々が信念をもってキブツにいて働きました。キブツのすべての理念は大きな意味をもっていました。今日、人々にとって大事なものは、例えばコンピュータの仕事について、たくさん儲けること、妻や子供と過ごすことです。こういうことが、イスラエルに起こっている大きな変化です。」

Q あなたはイスラエルの将来がどうなるかということは、大事な問題ですか、それとも自分の問題や将来のことがまず大事な問題なのでしょうか？

A 「もし誰かがコンピュータを勉強しハイテク産業の道に進むとします。これは、国家の問題を考えることとは直接結び付かないかもしれませんが。しかし、イスラエル国家、安全保障の問題は今日イスラエルの抱える問題の全てではなく、経済や文化なども国家の建設と関わっています。だから、自分がコンピュータに才能があるとすれば、その領域で軍でとは違った貢献ができることになります。自分にむいた道に進むことで（結果として）国に貢献できるということです。」

Q 政治的な点では、どういう方向にイスラエルが進むことを望みますか？

A 「まずもちろん平和の方向に進むこと。でも、ここまでは妥協できるがここからは譲れないという線を引いてそれを言うことが必要です。例えば、今問題となっているシリアに対し『結構。もう話し合う余地はない。』という断固とした態度を示すこと。もし彼等が我々の水を欲しいというなら、交渉が決別しても構いません。彼等は、本当の平和を望んではいません。彼等が望んでいるのは、僕たちがエジプトと持ったような平和であって、それは‘冷たい平和’です。ヨルダンとは別です。ヨルダンとは‘温かい平和’があります。僕たちはヨルダンに行って彼等を訪ねるし、彼等も我々を訪れます。とても友好的です。エジプトは、僕たちは確かに訪れるけれど、その関係はヨルダンとは違います。シリアが‘冷たい平和’を望み、真に友好的な関係を望まないなら、シリアと和平に至る必要はありません。・・・レバノンとの間にも問題があることは事実ですが、レバノンの場合はまた別の解決の方法があると思います。僕たちは、快適に暮らすために、周辺地域と友好的にお互いに行き来ができるような平和を望みます。もし、ゴランを返還したとしても、僕はそこにいつでもまた訪れることができるような関係を望みます。でも、もしシリアが『我々はゴランが欲しい。ヨルダンの一部も欲しい。』というようなことを言うのなら、・・・それが彼等のいう平和なら、『有難う、もはやこれまで。』ということです。

Q イスラエル内のパレスチナ人との関係では、どういう解決を望みますか？

A 「パレスチナ人との解決策はありません。時間だけです。彼等に時間を与えることが必要です。彼等は今僕たちを嫌っています。彼等とは‘温かい平和’があり、僕たちは合意に至ることを望んでいます。でも、その‘温かい平和’の中で、子供達は石を投げてくるのです。それに対して、僕は（兵役中）ゴム銃を撃ちましたが、これはどうしようもないことです。」

Q どうしてパレスチナ人があなたがたを嫌っているとわかるのですか？

A 「とにかく僕がわかるのは、彼等は今僕たちを嫌っているということです。彼等もまだ、（和解の）段階にきていないし、僕たちもまだその段階にきていません。僕が例えばベツレヘムに行っただとすると、自分が支配的な立場にいる強い人間であることを意識します。自分はあたかも力があるように感じます。彼等は僕を、『あなたはイスラエル人だ。』とみています。時間がもっとたてば、彼等ともっといい関係になれると思います。でも今はまだその段階にありません。」

Q 時間は重要な要素ですが、その間にイスラエルがどういう政策や態度で臨むかということが、まさにパレスチナ人の意識と行動に影響を与えるのではありませんか？今イスラエルがやっていることが、イスラエル内および占領地のパレスチナ人にどう影響を与えていると思いますか？

A 「僕たちを信用しない方向に影響を与え、僕たちを常に疑いの目でみる結果をもたらしています。それは残念なことです。しかし、入植者がいるために行き詰まっているにしろ、占領地を返還することなど、和平への前進の機運もないわけではありません。とにかく（問題の解決には）時間がかかるということです。」

Q 占領地の返還には賛成ですか？

A 「賛成です。やはりこの問題にも毅然とした交渉で臨むべきですが、基本的には占領地返還に賛成です。アラファトのいうパレスチナ国家の建設に賛成です。・・・労働者には仕事がありません。彼等は、僕たちが彼等を必要とする以上に、僕たちを必要としています。僕たちにも確かに彼等が必要だけども・・・」

Q でも今イスラエルでは、パレスチナ人に代わる労働力をフィリピンやタイ、ロシアなどから受け入れているようですが、これはパレスチナ人の労働力を排除しているということではないでしょうか？

A 「それはまた別の問題です。パレスチナ人に『もうここ（イスラエル）にはあなたたちの仕事が無くなったからそっち（占領地）にいったら探しなさい。』ということはできません。・・・彼等は、7人か8人

の子供をかかえる大家族で、家族を養うお金もなく、やることもなく、ただぶらぶらと一日を過ごすしかないとしたら・・・事実学校に行っていない子供もたくさんいます。・・・そして、『自分達でなんとかしなさい。』と言ったとしたら、それまでです。そういうことはできません。彼等には今もイスラエルでの仕事があるし、彼等はイスラエルで金が稼げます。彼等が食べることができなくなれば、また闘いが始まります。彼等に仕事を与えなければ、テロなどが起こります。・・・でも、これも今の間はということです。これもまた、時間の問題です。あと何年かして（パレスチナが）発展していろいろ学びだし、自分達の自立した経済を持てるようになれば、境界をきちんと定めたいと、『ここは我々の国、そっちはあなた達の国で、私達はあなたたちが大好きで、あなた達のところへも行きたいし、あなた達も私達の所へ来てください。』と言えるようになると思います。二つの国家の‘温かい関係’です。でも今は、何かできる可能性のあることからやるしかありません。」

Q イスラエル内のパレスチナ人との関係については、どういう展望をもっていますか？

A 「イスラエル内のパレスチナ人とは？イスラエル内にパレスチナ人はいません。彼等は、アラブ人、アラブ・イスラエル人です。彼等（の境遇）は、我々と全く同じです。」

Q しかし、イスラエルにはアラブ人に対して構造化された差別があるという見方もありますが・・・彼等が差別されているとしたら、それはイスラエルに対する彼等の反発をうむことにはなりませんか？

A 「それはそうですが、でも正確には差別ということではありません。言えるのは、（イスラエルには）二つの違った文化があるということです。イスラエルの文化とアラブの文化という。・・・差別はあります。それは明らかです。でも、それは少しは自分達に原因があるというのが僕の考えです。彼等は発展しようとしていないし、西洋の経済の道を探ろうとしません。ハイ・テクやコンピュータ産業もないし、女性に学歴をつけようとしていません。大学に行くのはごく少数です。だから、差別といっても、・・・僕たちは彼等に『大学に行ってはいけない。』とは言っていない。その反対です。僕たちは『入学できるんだから、大学に行こう。行って勉強しよう。大学を受けて合格しよう。』と言っています。問題は差別というよりその前の問題です。例えば、大学に受かるのはとても難しいので、そのためには勉強して、いい成績をとらなくてはなりません。でも彼等は随分早い段階で学校を中退し働きにでてしまい、そもそも大学の入学資格に至らないのです。」

Q それでは、あなたはイスラエルの民主主義ということについてどう評価していますか？

A 「イスラエルは、結局の所民主主義国家だと言えます。平等があるし、他にもすべてがあります。イスラエルの問題は、民主主義の問題があるとしたら、それはその存続の問題です。二つのイスラエルであるためには（ママ）時にその‘民主主義’を変えなければなりません。例えば、アラブ人は兵役に就くことができません。それは差別かもしれない。しかしそれは、（彼等にとって）悪いともいえますが、良いことともいえます。・・・問題はあります。・・・でもどうしようもありません。」

Q イスラエルはユダヤ人の国家であることを宣言していますが、このようなイスラエルの国家の性格について どう思いますか？このようなイスラエル国家の定義はあなたにとって重要ですか？

A 「重要です。・・・イスラエルは西洋の国家にいかにか属することができるかを模索していて、今のところまだ（世界の）全ての市民が入国できない国で、そういう問題をかかえています。そして今だに戦時下にある国家です。それに対して、例えばアメリカですが、そこでは国家の存立を守るために軍に行く人はいません。アメリカではお金のために軍に志願するか、あるいはそれが仕事だからそれを行っているのです。僕はお金のために兵役に就いたわけではありません。イスラエルの兵士の給料はとても少ないです。今の状況の中では・・・少なくとも今は・・・ユダヤ人の国家であることが必要です。」

Q では、将来は国家の性格を変えてもいいということですか？

A 「‘将来’は遠いですね。少なくとも50年先です。それに周りの状況や世界の状況にもよります。今の様な状況が続く限り、国家の性格を変える必要はありません。」

Q イスラエル人という概念にはユダヤ人もアラブ人も含まれますが、同じ国家の中で、アラブ人にとっての市民権の意味はユダヤ人にとってのそれと違ってきます。他の国では市民権は国民に等しく与えられている訳ですが、イスラエルではそうになっていませんね。

A 「ええ。それは問題です。でも、将来はともかく、それを今やめてしまうことはできません。」

Q それは、一種の二重基準ですね。

A 「ええ。」

Q 二重基準は、アラブ人に良くない影響を与えることにはなりませんか？

A 「アラブ人に良くない影響を与えます。でも、今はそうするより仕方ありません。」

Q あなたにとって宗教は大切な問題ですか？

A 「いいえ。僕は神を信じていませんから。」

Q 宗教勢力は今大きな勢力となってきましたが、そのことについてどう思いますか？

A 「ダティイム（宗教的な人々）の問題は、今イスラエルの大きな問題です。僕は彼等の邪魔をする気はありません。彼等が彼等の住む地区でシャバット（安息日）に車にのらないことも、豚肉を売らないことも、構いません。そのかわり、僕にも僕が生きたいようにさせてほしい。ダティイムはダティイムだけの地区に住んでいます。彼等は彼等で好きなようにやればいいし、僕も僕のやりたいようにやります。『僕はあなた達を邪魔しないから、僕にも好きにやらせてくれ。』これが彼等には通じません。最後には、対立が爆発して大変なことになるような気がします。例えばエルサレムはもう数年もすればすごい宗教的になるでしょう。もうその兆候は始まっています。‘ユダヤ教徒の町エルサレム’というようになるかも知れません。・・・大部分はダティ（宗教的）ではないのに。」

Q 今イスラエルのシオニズムが弱体化しているという見方がありますが、どう思いますか？

A 「イスラエルは様々な集団に分けることができます。ダティイム、ヒロニム（世俗的な人々）、そしてダティイムの中も様々な分かれまます。全然シオニストではないダティイムもいるし、国の為に闘おうという意志をもって軍に行くダティイムもいます。全ての入植者は、兵役に就いていて、最もシオニストです。」

Q 去年の国会選挙でシヌイを投票したと答えていますが、なぜこの政党に投票したのですか？

A 「国会で今ダティイムは大きな力を持っています。ダティイムはその力を抵当に彼等の望む法律を要求しています。シヌイは、反宗教の立場を掲げているので、シヌイの勢力が伸びて、宗教諸政党の力を弱められればと思ったからです。僕にとって政党を選ぶ一番のポイントは‘反宗教’ということです。」

Q あなたのご両親も同じ様な考えですか。

A 「僕の両親？話したことがないからわかりません。」

Q ご両親もシヌイに投票したと思いますか？

A 「父は違うと思います。母はそうかもしれません。・・・いややっぱり違うかな。よくわからないけど、二人ともメレツかもしれません。でもメレツも反宗教の政党です。」

Q 家では政治の話をあまりしないのですか？

A 「つい最近まで軍隊にいたので、家にはいませんでしたから。」

Q 軍ではよく政治の話をしましたか？

A 「それほどでもありません。選挙の時には少しは話しました。でも軍では自由にしゃべれない雰囲気があるのです。」

Y 2

生年月日：1974-9-11生まれ (25歳)

出生地：イスラエル ハイファ

性別：女

父親出生地：イスラエル ハイファ

母親出生地：イスラエル ハイファ

父方祖父出生地：チェコ NA

父方祖母出生地：ポーランド NA

母方祖父出生地：イスラエル NA

母方祖母出生地：ハンガリー NA

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「時々。特に海外でのユダヤ人集団との会話でのアイデンティフィケーションの文脈で（例えばアメリカ）。あるいは、ホロコストの話題の文脈で。この文脈の中で私は、迫害ということと、私の世代にまでにふりかかっている災難を感じる。」

Q2 日常生活の中で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「イスラエルに属していない場所にいる時（例えば東エルサレム）。またはニュースを聞いている時、イスラエルで起こったことにとても興味をひかれる時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「いいえ。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

ハヌカのろうそくをともし／ペサハ

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。高校生時代。」

感想：とても辛い気持ちだった。そしてそこに印された悪夢と哀悼にととてもつながりを感じた。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム(nation)：集団としての存在に影響を与える、共通の歴史を持つ人々の集団。

レオム(nationality)：民族と国家への人の帰属、または民族と領域への帰属に対する定義。

エズラフット(citizenship)：国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「兵役後それは変化した。軍隊はイスラエルの社会の発展を阻害している主要因である。それは、マッチョイズム（男性中心社会）の価値観を保ち（維持し）、社会階層、出自、男女間の隔たりやハイラーキーを維持し、強めている。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「状況の変化、中でも社会の変化に対応する能力が低い、古くさい組織。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 一つのイスラエル（労働党）

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A 一つのイスラエル（1999年）

メレツ（1996年）

- Q あなたは、ユダヤ・アイデンティティが長い歴史を通して消滅することなく続いてきたのはなぜだと思いますか？
- A 「ユダヤ人はマイノリティだったので、自己防衛をせざるをえなかったということがあり、自分たちを他から分離させ、強く区別してきたので、そのことがアイデンティティを強めることになったと思います。ちょうどアメリカの黒人のように。彼等もマイノリティであるために、黒人というアイデンティティはまだ長く続くと思います。ユダヤ人のアイデンティティも同じです。ユダヤ人のあらゆる行動様式はユダヤ人コミュニティでつくられたもので、マイノリティとして生きていく‘手だて’がありました。彼等はいずれなくなってしまうマイノリティではなく‘強い’マイノリティとして存続することができたのです。
- Q でも、単にマイノリティというだけでは、こんなに長い間アイデンティティが続いていることの理由としては十分ではないと思いますが・・・
- A 「・・・ヤハドット（ユダヤ主義）には、まさにマイノリティとして自分たちを維持していく‘手だて’が与えられています。・・・ヤハドットではお互いに助け合うという理念がよくできます。厳密なことは詳しく知りませんが、ユダヤの宗教は、一人の人間と神との関係だけでなく、一人の人間と集団との関係についての問題でもあります。・・・つまりユダヤ教は、一人一人がそれぞれに信仰するという意味での宗教だけでなく、一緒に戒律をまもることで社会の中での集団生活を結びつけるものでもあります。・・・ダティ（宗教的な）の人は祈りなどの神との契約でなければならないことの他に、ユダヤ教を信じようとする人は、集団に対しても戒律があるのです。社会での（まもるべき）教えがあります。・・・」
- Q ダティム（宗教的な人々）についてはそういう説明が成り立つと思いますが、ダティムではないもっと多くの人についてはどうでしょうか？
- A 「私は、もしショアがなかったら、・・・ヨーロッパの多くのユダヤ人のユダヤ・アイデンティティは実際消滅していたと思います。・・・例えば私の祖父の家族はチェコでヒロニ（世俗的な）の社会主義者でした。ショアというものがなかったら私は自分がユダヤ人の家系だということを覚えていなかったのではないかと思います。そのアイデンティティは消滅していたでしょう。」
- Q お祖父さんはイスラエルに移住したのですか？
- A 「はい。1935年に。」
- Q 移住された時、お祖父さんはおいくつでしたか？
- A 「17歳ぐらいだと思います。」
- Q 当時のことについて、お祖父さんから何か話を聞いていますか？
- A 「はい。チェコでのことを。・・・彼等はすでに‘チェコ人’となっていて、工場か何かを経営してチェコでいい暮らしをしていたようです。チェコの文化にとけこみ、食事でもコシエル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事ではありませんでした。・・・祖父がイスラエルに移住したのは、戦争を恐れてのことで、もし何も起こらなかったらそこに居続けて（ユダヤ）アイデンティティは消えていたと思います。」
- Q お祖母さんも、同じように言えるのでしょうか？
- A 「・・・ええ。ただ祖母の家庭はシオニストで、（祖父よりも）もっと早く、まだ子供の時に、・・・1930年代にイスラエルに移住しています。移住の理由はまさにシオニストとしての理由のようです。」
- Q お母さんの側のお祖母さんについてはどうですか？
- A 「彼女はショアの後に移住しました。ハンガリーに生まれ住んでいましたが、戦争中ポーランドのアウシュビッツにいて、戦後イスラエルに来ました。」
- Q あなたご自身のユダヤ・アイデンティティはどこからきていると思いますか？
- A 「一番強いのは、祖母の記憶からきていると思います。・・・」
- Q あなたご自身はここで、マイノリティでも、ダティヤ（宗教的）でもなく、いってみればお祖母さんからお聞きになった歴史から、ユダヤ人としての意識を持たれているということでしょうか？
- A 「・・・それとこれとは違います。私は彼女の痛みと同じように痛みを感じますが、一方で私は外国にいるとき自分がマイノリティだとは感じません。その二つはつながりを持ちません。」
- Q あなたにとって、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティは同じレベルのアイデンティティでしょうか？それとも、どちらかにより比重が傾いていますか？
- A 「イスラエル人であることの方がずっと重要です。・・・言葉がヘブライ語ということもあるし・・・『ア ラブ人と共存する』ということ考えたときに、私はユダヤ人としてよりイスラエル人として胸

が痛いです。・・言い換えると、私はイスラエル人として（彼等に）近いものを感じ、感情移入があるということです。」

Q あなたは、質問票での回答で「自分がシオニストとは思わない。」と答えておられますが、これはどういう意味でそう答えられたのかお聞きしたいのですが。

A 「私はそれほど愛国心が強くありません（苦笑）。・・私はここに住むことができますが、日本やアメリカにも住むことができますと思います。そもそも現代は、人と国家との結びつきは必然的ではなく、人は自分が選んだ場所に移動しています。・・」

Q 「シオニストではない」ということには、「非シオニスト」と「反シオニスト」と二つの意味があると思いますが、あなたはどちらの意味で「シオニストではない」と思われるのですか？

A 「非シオニストの方です。反シオニストではありません。」

Q イスラエルには、少数ですが反シオニストの人もいるわけですが、そういう立場についてはどう思われますか？

A 「私は彼等がなぜそういう考えに至ったのか理解できます。」

Q 反シオニストの人々は、現在のイスラエル国家の性格を「ユダヤ国家」から一般的な国家に、つまりすべての市民に開かれた国家に変革することを望んでいると私は理解していますが・・・

A 「・・そうですね。・・・そうすると私も反シオニストかもしれません（笑）。その考えはとても理解できるので・・」

Q 反シオニストは変革することへの志向と意識が非シオニストより強いのではないかと思いますか？

A 「・・そうすると私はやはり非シオニストだと思います。というのは、この国は今革命をひきうけることはできないと思うからです。今私達はとても不安定な状況なので、私はあまり急激な変化をおこさない方がいいと思うのです。」

Q あなたはユダヤ的な伝統の一部をまもっておられ、その例としてハヌカやペサハ（注）出エジプトを記念する過ぎ越しの祭り）をあげておられますが、なぜそれらを続けておられるか聞かせてください。

A 「家族の行事としてやっています。私の家族では、誕生日に家に集まってみんなが‘皿にのった甘いもの’をもらう習慣があります。単なる家族の習慣ですが、ハヌカやペサハもそれと同じことです。・・ただ家族が集まるという。・・ちなみに今年はペサハはしません。今勉強で忙しいので、（家族のところへ）行く時間がないからです。（ハヌカやペサハは）私にとってそれほど重要なものではありません。」

Q もし将来あなたご自身の家庭をもたれたら、そういう祭日の伝統を続けると思えますか？

A 「もしそれが楽しいなら（笑）。・・ハヌカは確かに歌を歌ったりして楽しい要素があります。・・スコット（仮おいの祭り）やプリムも楽しめますね。・・それにまた、それらは生活の中に入り込んでいるとも言えます。」

Q 次の質問ですが、あなたはこれまでヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に何回位行かれたか？

A 「二回行ったかもしれませんが、覚えているのは一回です。」

Q 訪問の前と後で何か意識の上で変化がおこったことはありますか？

A 「・・・とても心が揺さぶられる思いでしたが、変化したというのはありません。はじめからわかっていたことなので。」

Q あなたはみんなにそこに行くことを勧めたいですか？

A 「いいえ。でも、ヨーロッパの強制収容所は機会があったら行った方がいいと思います。私自身は行ったことがないのですが、そこはまさにものの見方をかえる衝撃的なところだと聞きます。それにそこはヤハドットに関係しているわけではなく、命や人間性ということを理解することに関係しています。・・・人にはみな‘悪魔’の要素があるということ、それは私達にもあるということ、・・・そういうことを考えることは重要だと思います。」

Q 質問票で類似した幾つかの概念についてお聞きしましたが、それに関連した質問なのですが、ユダヤ

- 人はどのような‘共通の歴史’を持っていると思いますか？
- A「古代には、・・・神殿や聖書の時代には・・・どこにいてもユダヤ人はマイノリティだったということがあると思います。・・・ショア（の経験）は、（ユダヤ人の‘共通の歴史’の）ほんの一部です。・・・迫害ということも。・・・」
- Q ヨーロッパ以外の場所ではどうですか？
- A「イエメンでも南アフリカでもありました。・・・時代がかわっても、どこか又別の場所で、マイノリティとして迫害を受けてきたといえると思います。」
- Q アム（民族）とウマ（国民）の二つの概念には違いがあると思いますか？
- A「ええ。ウマはより地理的な概念だと思います。・・・うまく言えませんが、ウマは場所に関係しています。例えばフランス人というのはウマです。イギリス人もウマです。でも、ジプシーはウマではなく、アムです。そういう違いがあると思う。・・・そしてアム・イエフディ（ユダヤ民族）であり、ウマ・イスラエリ（イスラエル国民）です。」
- Q イスラエルは「‘ユダヤ人国家’として建国された」と建国宣言の中で国家の性格が定義されているわけですが、そのことについてあなたはどのように思いますか？
- A「最悪です（苦笑）。・・・私達を時代遅れにする定義です。・・・多くの人は、‘ユダヤ人国家’ということの意味を‘ユダヤ宗教国家’と解釈します。・・・」
- Q 宗教国家でなければ、・・・つまり世俗的な‘ユダヤ人国家’ならいいと思いますか？
- A「・・・まだ可能性があります。」
- Q 質問を違う言い方でお聞きしますと、あなたは、世俗的な意味でのユダヤ人のための国が世界のどこかに必要だと思いますか？
- A「・・・ええ、必要だと思います。・・・なぜなら、・・・それは民族なので。自分をユダヤ人と定義する人々がいます。そして私はヘブライ国家としての定義ならいいと思います。自分が聖書の民に属していると感じ、・・・ユダヤ人と自分を思っている人々がここにきて一緒に住むのであれば、・・・でも宗教国家にするのは反対です。・・・」
- Q でも世界には、一つの国家に様々な民族がいるという形態が少なくなく、むしろ世界のグローバリゼーションはそうした方向を加速させてもいます。でも、イスラエルは一つの国家に一つの民族をということを求めているわけですが、あなたはそういう（イスラエルの）在り方が、必要だと思うのでしょうか？
- A「・・・わかりません（笑）。・・・今本当に必要なことは、人々がマイノリティとどう向き合うかを学ぶことだと思います。でも、それはあまり期待できそうにもありません。だから、最善の方法は分離して住むということではないかと・・・わかりませんが、・・・ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）は今も‘避難所’を必要としていると思います。わかりませんが、・・・（あなたが質問したようなことは）今まで一度も考えたことがありませんでした。・・・今ユダヤ人が世界にユダヤ人の国を必要としているのかどうか・・・わからないですね。・・・」
- Q もし、どの国もマイノリティの存在をきちんと意識すれば、・・・「一民族一国家」という理念は有効性を失うことになり、またそもそも現実の動きが、民族もエスニシティもどんどん複合的な国家や社会になっていっていますから、「一民族一国家」という考え方は非現実的でもあります。イスラエルだけが「ユダヤ人国家」を望んでも、それは現実の動きとは逆行した時代錯誤的理念に思えるのですが・・・
- A「そうですね。・・・そうです。・・・今まで考えたことがありませんでした。あなたの言うことはもっともに思えます。」
- Q でもこの人々はそうは考えていないように思います。・・・
- A「確かに。・・・あなたの言っていることはもっともです。・・・実際、時代錯誤的ですね。・・・この国の半分は‘中東’です。中東そのものが時代錯誤的なのかも。・・・でも別にそれは驚くべきことでもありません。・・・何でもここではものごとがゆっくりと進むのだと思えば・・・」
- Q さきほどの質問ですが、人々はなぜそう思わないのでしょうか（「一民族一国家」を求めるのでしょうか）？
- A「被害妄想です（苦笑）。・・・彼等は今もまだ迫害の可能性を感じているのです。」
- Q 今は、人口の過半数はイスラエルで生まれた人々ですね？

A「でもこの国には、（ユダヤ人は）追放されたり迫害されたという‘神話’があります。政府も、公教育も、『私達は敵に囲まれた一つの国だ。』『私達には自分達しかいない。』と思うように教え続けています。彼等は（今も）マイノリティのように行動し続けています。」

Q あなたご自身が学校教育を受けていたとき、そういうことを感じていましたか？

A「いいえ。・・・こういうふうに関心始めたのは16歳か17歳位になってからです。突然、考え方がひっくり返って、・・・というの（徴兵の時期がきて）軍隊に行かなければならなくなり、ボーイ・フレンドも徴兵されることになり、私は殺されたくなかったし（笑）、・・・全ての点で考えが変わり始めました。」

Q その時期に考え方の変化がおこったことの原因は何だと思えますか？

A「・・・まず言えるのは個人的な理由です。その頃、私のものの考え方は批判的になりました。・・・次の理由は、・・・その年代はもうすぐ徴兵される年代だということです。・・・それからたぶん、今まで正しいと思ってきたことがだんだん色あせて、物事に疑問がでてきたことがあると思います。」

Q あなたは質問票の回答で、軍への期待が「変化した」と書かれていますが、徴兵前は軍に対してどのように思っていたのでしょうか？

A「私は子供の頃は、人よりも幼稚だったと思います。そして大学に入って、色々な考え方を学んだと思っています。・・・徴兵前は、（軍隊について）人々が高校について考えるようなことを思っていました。・・・（そこは）行くべきところで、良いところで、（そこに行ったら）成功して・・・というよう。又個人的挑戦の場でもあると。・・・そして兵役が終わってそこを去り、色々考え始めてからは、・・・軍隊というのは、・・・ひどい高校のようなところだと思いました。人間を悪くするところだと。・・・全てがとても攻撃的で、競いあい、・・・」

Q それは訓練中のことですか？

A「訓練中ですが、それは日常生活にも尾を引くのです。・・・例えば、軍でお互いにしゃべるときの調子が、（兵役後）例えば、普通の秘書に話しかけるときの調子にまで影響してしまい、とても攻撃的な話し方になります。それはなかなか消えません。・・・すべてのしゃべり方が、・・・とても乱暴です。・・・私が思うのは、軍隊での経験を通して、イスラエル人は皆少しずつ攻撃的になるということです。・・・私の友達が変わらないかもしれません。でも、何故変わらないかといえば、そのお父さんがすでに軍隊の体験をしていて同じ様に攻撃的になっていて、彼等の家でそれが普通になっているからです。・・・例えば、私達がバスに乗ると運転手とどなりあっている光景によく会いますが、そういうのも私は軍の影響があると思います。・・・個人的な特徴というより、社会的な性格とでもいうか・・・例えば、日曜日から木曜日まで、占領地において人に暴行を加えたり家々を捜査しなければならない少年が、家に帰ってきて前と同じように優しくはふるまえません。より乱暴になり、攻撃的になります。・・・」

Q 質問票で、軍の評価を「古くさい組織である」と回答されているのはどういう意味ですか？

A「イスラエルの社会では、軍隊でどういう部署にいたかということが、その人を一特に男性の場合一評価したり判断する時の基準になっています。例えば士官やパイロットなら、その人が有能だということです。これが第一の問題です。・・・次の問題は、女性には低い地位しか与えられないことです。軍は女性にチャンスを与えません。もし与えられたとしても、こんどはそれはフェミニン（女性的）ではいられなくなります。・・・‘男性’になってやらなければなりません。成功しようとしたら、‘男性的’であることが要求されます。」

Q あなたにとって、今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A「・・・何と言っていいかわかりませんが、・・・教育が良くないと思います。」

Q どのようにですか？

A「・・・人々は攻撃的に育ち、お互いの意見に耳を傾けず、違うものを認めようとしません。そういう点でここで暮らすことはとてもいやに思うときがあります。道を車で走っていると、人々は、怒鳴ったり、叫んだり、・・・あまりにも色々な人がいるために頭がおかしくなっているのか・・・何と言っていいかわかりませんが・・・」

Q あなたは民主主義という点でイスラエルをどう評価していますか？

A「かなり高い水準にあると思います。・・・なぜなら、・・・思っていることは何でも表現することが許されているし、望むなら戦うこともできます。・・・民主主義の運用という点では洗練されていない面

もあるかもしれませんが、（民主主義は）実施されていると思います。」

Q あなたは、イスラエルがユダヤ人とアラブ人に同じ市民権を与えていると思いますか？

A 「・・・ええ。」

Q ユダヤ人には「帰還法」がある一方で、パレスチナ人はイスラエルに帰還できないわけですが、このことについてはどう思われますか？

A 「私はその法律は好きではありません。・・・私はここが移民に対して開かれた場所であるのはいいと思いますが、ユダヤ人の移民にだけ開かれているのはよくないと思います。」

Q これからイスラエルはどのような方向に進んでいくことを望まれますか？

A 「・・・もっとヒロニイ（世俗的）になること、もっとリベラルになること、・・・もっと平等な、多元的な国になることです。」

Q あなたは、アシュケナジムとスファラディム／ミズラヒムの社会格差が依然として存在していると思いますか、それともそれは消滅しつつあると思いますか？

A 「ずっと前は、アシュケナジムが確かに全てを支配していました。でもその格差は消え始め、状況は変わりつつあります。お互いに混じり合ってみんなが帰属感をもつ場所ができたと言えます。でも、シャス党のような運動がでてきて、スファラディムに失望感を感じるように扇動するようなことをしています。・・・かつては確かに彼等は失望していました。しかし80年代の動向は、アシュケナジムとスファラディムは混じり合う方向に推移していたのです。でもここ数年で、（そうした動きは）全部壊れてしまいました。」

Y 3

生年月日：1978-4-13生まれ (21歳)

出生地：エルサレム

性別：男

父親出生地：イスラエル エルサレム

母親出生地：ソ連 マロリタ

父方祖父出生地：イスラエル エルサレム

父方祖母出生地：イスラエル エルサレム

母方祖父出生地：ソ連 マロリタ

母方祖母出生地：ソ連 ヴィテブスク

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「世界のユダヤ人の業績が話題になる時。世界の反ユダヤ主義のことが話題になる時。ホロコストとの関連で。」

Q2 日常の生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「『典型的イスラエル人』と思える行動に出会う時。ニュースで、イスラエルの話題が世界の様々な文脈のなかで出てくる時。」

Q3 あなたは、自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

祭日での家の食事（宗教的戒律ではないが伝統を守っている）／金曜の夜のキドシュの祈り（厳密な意味での宗教的なものではない儀式）／パール・ミツバ、結婚式、葬式などの宗教的儀式

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。／学校の行事、軍の行事で。」

感想：もっと何かを感じるかと思ったが、特別なものはなかった。特に新しく学んだことはない。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム(nation)：その民族のなかでお互いにつながりを感じていると自覚しており、共通の習慣を持つ人々の集団。

レオム(nationality)：アムと同じ。レオムという言葉は共通の目的という意味をより帯びており、アムより極端な言葉である。

エズラフット(citizenship)：法律用語。国家の文脈の中での、完全な権利と義務。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「イスラエルへのいかなる外の脅威に直面した時も威嚇できること。また、いかなる物理的脅威に直面しても十分に対処できること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「私の期待を満たしている。（イスラエルを脅かしている他の国の軍隊は、イスラエル軍より劣っているのです。）」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 放棄した。

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A 労働党（1996年）

- Q あなたは今何を勉強しているのですか？
A 「映画です。」
Q そうしますと、将来は・・・
A 「映画監督になりたいのです。」
Q では、すでに書いていただいた質問票のことからうかがいますが、あなたのお母さんの方のお祖父さんとお祖母さんは、旧ソ連から移住されているようですが、その動機などについて何か聞かれていますか？
A 「特別の理由はないようですが、祖父は、ここがユダヤ人の国だからとは言っていました。」
Q お祖母さんはどうですか？
A 「祖母からは何も聞いていません。・・・僕も聞いたことがないし・・・」
Q 今お幾つですか？
A 「祖父は76歳で、祖母は・・・同じぐらいですが覚えていません。」
Q お父さん方のお祖父さんとお祖母さんは？
A 「80代です。」
Q お母さん方のお祖父さんにとって、旧ソ連はご自分のすむ場所ではないということだったのでしょうか？
A 「祖父の家族は全員ショアで死にました。・・・今はロシアになっていますが前はポーランドだったところですよ。・・・祖母の方もそうです。全員死んで家族は誰もいなくなりました。・・・それが（移住の）理由の一つだと思えます。生活そのものは問題なかったと思います。貧しかったというわけではないようで・・・」
Q そこ（旧ソ連）では何をされていたのですか？
A 「祖父はレストランのマネージャーで、祖母は歯科医でした。」
Q 移住されたのはいつごろですか？
A 「1965年です。」
Q どんなふうな経路で来られたのですか？
A 「旧ソ連からポーランドに行って、そこに何年か住んで、ポーランドからは移住できたので、そこから移住したようです。」
Q なぜもっと早く移住されずに、その時期（1965年）だったのでしょうか？
A 「わかりません。」
Q そのときのお母さんの年齢は？
A 「12歳でした。」
- Q 質問票でアイデンティティについてお聞きしていますが、あなたは、ユダヤ人が長い間ユダヤ・アイデンティティを消滅させることなく受け継いできたのは何故だと思いますか？
A 「非常に特別の習慣を持っていたからではないでしょうか。・・・閉じられたユダヤ人社会のなかで宗教とか習慣でつながっており、ユダヤ人社会のなかで結婚し、・・・そうして長く続いてきたのだと思います。・・・そして、少なくとも最近までのことについていうなら、エレッツ（イスラエルの地）ではなく宗教に関係していると思います。宗教は世界中で父から子へと続いています。・・・こうして・・・ゼフット・レウミット（民族的なアイデンティティ）は、19世紀に始まったといえます。ドイツでは、ドイツ人であると同時にユダヤ人でもあるという意識だったのです。・・・ともあれ、宗教というもののために、アイデンティティが残ったと思います。そして反ユダヤ主義があつて、いつも『おまえ達は違っている。』と言われてきたために、ゼフット・レウミットが発達し、『私達も、宗教（集団）だけではなく、レオム（民族）なんだ』という意識、『一つの民族であつて一つの国に住まなければならない。』ということになったと・・・」
Q ヨーロッパ以外の他の地域についてはどうですか？
A 「アラブ諸国でも‘ユダヤ人嫌い’は違う形であつたと思います。僕が習ったことによると、色々な違いがありましたが、それは20世紀に始まったといえます。」
Q 20世紀以前にアラブ諸国で反ユダヤ主義があつたと思いますか？
A 「そうは思えません。」
Q あなたは今も世界に反ユダヤ主義があると思いますか？

- A「はい。」
- Q どんなふうですか？
- A「世界はリベラルな方向に進んでいるので、随分少なくなっていると思います。でも、まだ過激な集団がいて、ユダヤ人墓道を掘りかえしたりユダヤ人組織の建物を攻撃したりしています。・・・そういう、小さいけれども過激な集団がいます。彼等は、ユダヤ人は世界を征服しようと陰謀を企てているというようなことを言っています。・・・勢力としてはずっと小さなものだと思いますが・・・今日、世界はリベラルになっていますから。・・・」
- Q あなたのなかでは、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティはどのような関係なのでしょう？
- A「えー、・・・ユダヤ人の国にいるイスラエル人という感じでしょうか。ユダヤ人は世界のどこにでもいるわけですが、イスラエル人はユダヤ人でもあり、ユダヤ人の国にいる人ということでもあります。」
- Q どちらが先に来るのですか？
- A「まずユダヤ人で、その後にイスラエル人という意識です。」
- Q 迷わずそう言いきれるといえることですか？
- A「そうですよ。・・・二つは対立しているものではないですから。」
- Q というのは、二つは同じぐらいの重みで分けられないという人や、どちらかにより比重が片寄っている人もいるようなので。・・・あなたの場合はどうなのかをお聞きしたいのですが。
- A「僕はまずユダヤ人だと思います。・・・イスラエルにはもちろんアラブ・イスラエル人やドルーズのイスラエル人もいますけれども、・・・イスラエル人という意識はヤハドット（ユダヤ主義）のなかからくるものですから。・・・」
- Q つまり、あなたの場合は、二つのアイデンティティは切り離せないものだけでも、まずユダヤ人ということが先にあるということですか？
- A「ええ。」
- Q あなたはパール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）をしましたか？
- A「はい。」
- Q それは、あなたが望んだのですか、それともご両親の勧めで？
- A「両方です。」
- Q あなたは、どうしてしたいと思ったのですか？
- A「みんながしている儀式だからです。僕と同年齢の友達は、僕の知る限りみんなやっていたので僕もしようと思って。・・・」
- Q 儀式のあとはどんな気持ちでしたか？
- A「誕生日のようなものです。家族がみんな集まって、パーティをして、・・・お祝いして・・・」
- Q たった13歳なのに大勢の前で儀式を無事やれるかどうかというような、何か大きなプレッシャーなどありましたか？
- A「興奮はしたけど、別にプレッシャーとかそういうものはなかったです。」
- Q もう大人になったというような得意な気持ちなどありましたか？
- A「いいえ。・・・13歳までは子供だったのに今日からは大人だというような気持ちは別に感じませんでした。・・・（聖書の一節を）詠じたり、読んだり、すべてが自分を中心にした大きな儀式だということは感じましたが、終わってしまえばいつもの13歳の自分です。」
- Q （パール・ミツバの準備のために）ラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）のところへはどのくらい通ったのですか？
- A「二か月です。・・・週に一回、一回に一時間くらい・・・」
- Q それだけですか？
- A「ええ。どう詠じたらよいか練習するのに、彼はカセットもくれましたし・・・練習帳もくれました。」
- Q パール・ミツバはあなたが聖書に関係することをやった初めての体験ですか？それまでは何もやったことがなかったのでしょうか？
- A「（それまでは）何もありません。パール・ミツバは宗教的な儀式ですが、僕はダティ（宗教的）ではないので、前にも後にもこれだけです。」

- Q 質問票であなたはご自分を「シオニストと思う。」と答えられていますが、どういう意味でそう思われるのかお聞きしたいのですが。
- A 「シオニストとは、ユダヤ人の場所はイスラエル国家だと思っているユダヤ人のことだと思います。ユダヤ人はイスラエルで生きなければならず、イスラエルは彼等のバイト（家）であり、まもってくれるところであり、イスラエル国家の意味はハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）のためにあると思っている人。・・・僕は、・・・ユダヤ人である僕は、ユダヤ人のバイト（家）はイスラエル国家だと思っています。ここに来たいユダヤ人はだれでもここに来ることができる。ここが彼の（ユダヤ人の）バイトなのですから。・・・」
- Q あなたは、世界のユダヤ人がみんなここに来たらいいと思いますか？
- A 「はい。」
- Q 世界中のユダヤ人がやってくることは、あなたにとって嬉しいことですか？
- A 「はい。」
- Q もしみんなやってきたらイスラエル人口はたいへんな数になりますが・・・
- A 「1948年には、40万人ぐらいだったと思います。・・・今は数百万人ですが、それは別に問題ではありません。」
- Q 次に、やはり質問票のなかで、「世界のユダヤ人は一つの民族だと思う」と答えられていますが、これはどういう意味ででしょうか？
- A 「僕は世界のユダヤ人はみんなお互いにつながりを感じていると思います。例えば、どこかの通りで偶然ユダヤ人だという人に会ったとすると、その人につながりを感じ、他の人よりも自分に近いと感じます。彼は自分の友達ではないかもしれないし、嫌いかもしれないけど、でも互いにつながっているという感じです。・・・僕は世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思います。そしてそこに共通しているのは、宗教です。たとえヒロニム（世俗的な人々）でもダティイム（宗教的な人々）の習慣があります。だから、アイデンティティはユダヤ人なのです。もしヒロニムがその習慣をやめてしまったら、二代か三代もすれば忘れてしまいます。でも、望めばまた戻ってくることもできます。・・・もしそういう習慣を忘れてしまった家族でも、依然として自分をユダヤ人だと定義することができます。もし、彼（彼女）が自分をユダヤ人だと言い、ユダヤ人の家族に生まれているのなら、その人がユダヤ人であることに変わりありません。・・・僕にとっては、ユダヤ人とは、ユダヤ人に生まれ、自分をユダヤ人だと思っている人です。・・・例えばアルゼンチンで、ユダヤ人に生まれ、もうユダヤ人の習慣や伝統を何一つしていないとしても、・・・パール・ミツバも、コシェル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事も、・・・何もかも・・・、でももし自分をユダヤ人だというのなら、僕にとっては、彼はユダヤ人です。」
- Q 私には、ユダヤ人に生まれ、でもその後色々なことがあって、自分の意志でイスラム教に改宗した友人在るのですが、その人をあなたはユダヤ人だと思いますか？
- A 「いいえ。もし彼女がイスラム教徒だというなら、ユダヤ人ではありません。」
- Q 宗教だけがイスラム教徒で、自分はユダヤ人と言ったら？
- A 「だめです。」
- Q どうしてですか？
- A 「なぜなら、ハ・レオム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）は、・・・ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）は、宗教と結び付いていますから。・・・どうしようもありません。・・・レオム（民族／民族性）と宗教は一体です。」
- Q すると、たとえユダヤ人に生まれても、別の宗教に改宗したらもうユダヤ人ではありえないのですか？自分がユダヤ人だと言っても？
- A 「だめですね。・・・ダティイムの習慣をとっていないなければならないということはないけれども、ユダヤの宗教に属しているという意識はなければなりません。・・・『私は宗教はまるで信じていない。』ということもよくあることですが、それはそれでいいのです。でも、別の宗教に属しているということになると、もう「一線を越えた」のです。」
- Q 質問票への答えのなかに「典型的イスラエル人と思える行動—普通は否定的意味で（ママ）—に出会うとき」という文がありますが、具体的にどのような例が考えられますか？

A「例えば、車の運転の仕方です。・・・とても厚かましい態度。・・・それに、がさつで、行儀が悪いこと。・・・イスラエル人がみんなそうだとは言いませんが、それはイスラエル人のステレオタイプです。でもそれはあたっていると思います。そういう否定的ステレオタイプがあることは認めざるをえません。」

Q　そういう傾向がイスラエル人にみられるのはどうしてだと思いますか？

A「それがイスラエルの文化だと思います。・・・無作法で・・・（聞き取り不可）な文化。」

Q　いつからそうなのですか？

A「そうですね。・・・ユダヤ人がここに来るようになった二十世紀から。・・・どうしてかはわかりませんが、そのように発達したということです。・・・とはいっても、無作法で行儀が悪いからといって人間としてひどい悪人ということではなく、いい人かも知れません。でも、・・・それがステレオタイプです。イスラエル人がいつも行儀が悪いということではありません。」

Q　それはイスラエル人に対してのステレオタイプということですよ。ユダヤ人に対してではなく。・・・？

A「ええ。ユダヤ人ではなく、イスラエル人に対してのものです。」

Q　あなたは、ご自分がそういうステレオタイプにあてはまると思えますか？

A「いいえ。僕は違うと思います（笑）。・・・僕は自分は大丈夫だと思います。」

Q　あなたは、今指摘されたようなイスラエル人の特徴が、（人々が）軍隊に（行くことと）関係があると思いますか？

A「・・・えー、・・・いえ、そうは思いません。イスラエル軍は（今のよう）にそう行動しています。でも、イスラエル軍がそのように行動するのは、彼等がイスラエル人だからです。」

Q　でも、軍隊の文化というものがイスラエルの人々のメンタリティに影響を与えるということはないのでしょうか？

A「僕はそうは思いません。」

Q　次に伝統についてうかがいます。あなたの家ではユダヤ的な伝統を幾つかまもられているということですが、ご両親やお祖父さん、お祖母さんの世代とあなたの世代では、まもる程度が変化していますか？

A「同じ程度だと思います。」

Q　あなたはどのようにそうした伝統をまもっていると思いますか？

A「・・・えー、・・・それが伝統だから。・・・家族と一緒にする習慣というか・・・」

Q　つまり、あなたにとってそういうことをするのは楽しみなことですか？

A「それは家族の行事なのです。家族と一緒に受け継いできたもの・・・家族や親戚がみんなやってきて、叔父さんや叔母さんに会って、・・・金曜日には家族全員で一緒に食事をして、・・・家族を保持するものです。」

Q　ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）についてお聞きしますが、今まで何回ぐらい行かれていますか？

A「二回です。高校のときに一度と、軍隊のときに一度。」

Q　訪問の前と後とで、意識の上で何か変化はありましたか？

A「いいえ。」

Q　ユダヤ人アイデンティティが強まったというようなことはありますか？

A「ショアについてはそうです。でも、ヤド・バ・シェムの記念館そのものからは特に影響はありません。僕は、行く前にショアが何かということは知っていましたし、ショアについて自分がどう感じているかもわかっていました。そして、（ヤド・バ・シェムから）出てきたとき、ショアが何かを自分は知っていると感じそれを確認しただけです。見た後で自分が何か変わったとは思いません。・・・」

Q　あなたは、そこに行くことをみんなに勧めたいですか？

A「えー、行くべきだと思います。人々が、（行く前には）知らなかったことを学ぶことができるから。教育という点で（行くことは）とても重要だと思います。僕は知っていましたが、知らない若者もたくさんいますから。だから教育という点で重要です。・・・ショアは何かということはみんな知っていますが、十分に知らない人もいるかもしれない。（十分に知らないため）私が感じたようなことを感じていないかもしれません。そういう人もとらえるためにはみんなを連れていくことが重要です。」

Q みんなというのは、ユダヤ人ではない人達もということですか？

A 「えー、はい。・・・ハ・アム・ハ・イエフディは何かということを知りたい人は、そこに行くことが重要です。・・・それはヤハドットを定義する一片です。ショアは、ユダヤ人は一つの民族だということを当時まで知らなかった人に、ユダヤ人が一緒にいなければならないということを最も極端な形で示していると思います。・・・ドイツにはユダヤ人がいましたが、彼等は完全なドイツ人ではなかった。彼等はユダヤ人だったから。・・・そういうことが世界の各地での実情だと思っています。ですから、ハ・アム・ハ・イエフディは一つの民族なのです。いつもそうでした。・・・ショアの例を通してそれがはっきりとわかります。その前は、自分はユダヤ・ドイツ人だとか、ユダヤ・フランス人だとか、ユダヤ・アメリカ人だと言うことができました。でもショアの後には、『僕たちは、・・・ハ・アム・ハ・イエフディはやっぱり違う。』といつも言っているのです。」

Q 誰が言うのですか？

A 「ユダヤ人です。」

Q 「やっぱり違う」という意味は？

A 「えー、・・・ユダヤ・フランス人は、カトリックのフランス人のようではありません。キリスト教徒のフランス人とは違う。・・・フランスではショアはなかったけど、でも、起こりうることです。」

Q あなたは将来の可能性のことを言っているのですか？

A 「あってほしくはないですが、・・・ユダヤ人嫌いは、いつも、どこでもあります。」

Q ユダヤ人嫌いとは？

A 「反ユダヤ主義です。・・・（始めは）小さいもののだとしても、それはいつも大きくなる可能性があります。ショアはその一例です。」

Q イスラエルは国家の性格を「ユダヤ人国家」と定義していますが、あなたはそれは重要なことだと思いますか？

A 「はい。」

Q どうして重要ですか？

A 「・・・ハ・アム・ハ・イエフディはレオムですが、バイト（家）がありませんでした。属すべきメディナ（国）がなかった。イスラエル国家は、このバイトの必要性のためにつくられたのです。（ユダヤ人に）一定のバイトが必要なのだという。・・・ですから、（イスラエルは）ハ・アム・ハ・イエフディの国であることが重要なのです。それ（イスラエル）は単なる国家ではありません。」

Q しかし現実のイスラエルに住んでいるのはユダヤ人だけではないですよ。定義とはずれがありますが、このことについてはどう思いますか？

A 「それは民主主義です（ママ）。・・・ハ・アム・ハ・イエフディという定義は、外にいるユダヤ人に対してのものです。ユダヤ人とそうでない人に違いがあるのは、ここに来るのに助けがいる場合だけです。イスラエルの内部では平等です。平等でなければいけない。・・・時々平等だとはいえないこともあります。予算の配分とか、・・・それは僕は良くないと思っています。納得できません。・・・でも、（国家の）なかで市民として暮らすには、特に問題はありません。法的には平等です。・・・移住に関わる場合だけ、ユダヤ人かどうかで差があるということです。」

Q パレスチナ人が家を追われ、帰れない人もいることについては、どう思いますか？

A 「・・・1948年が一つの区切りです。僕は彼等に帰らせる必要はないと思います。」

Q 理論的にも彼等に帰還の権利はないと思うのですか？

A 「はい。」

Q どうしてないのですか？

A 「えー、1948年が一つの区切りで、そのときにイスラエルの権利とパレスチナの権利に分けられたのです。・・・そう決められたのです。それは力づくでやったもので、よくなかったことかもしれない。でもそうってしまったのです。・・・今となっては後戻りはできません。」

Q 後戻りができないとすると、彼等は要求が満たされず、イスラエルに対する敵意を増幅させることになるのではないのでしょうか？それについてはどう思われますか？

A 「・・・人生は厳しいです。・・・一つの国があって、みんながそれを自分ののだと言え、・・・争奪戦です。・・・理論的には、パレスチナ人にもユダヤ人にも平等な一つの国という解決があると思います。でも僕は、それが可能だとは思いません。」

Q どうしてですか？

- A 「パレスチナ人はユダヤ人を嫌っているし、ユダヤ人はパレスチナ人が好きではありません。もし一緒にいたら、爆発してしまいます。・・・今模索している解決は、二つの国家という考えです。イスラエル国家とパレスチナ国家と。僕はそれは正しい解決だと思います。・・・」
- Q 今の世界の情勢をみていると、グローバリゼーションが進み、国境をこえて様々なものが行き来しています。同じ国家に複数の民族がいるという国も全然珍しいことではないですね？・・・
- A 「えー、・・・ほとんどの国の場合、その民族は同じ民族だと思います。あなたの言っていることには納得できません。世界のほとんどの国は、そこにいる民族によってつくられています。アメリカやカナダには様々な人がいます。ベルギーは二つの民族です。そういう国以外のほとんどの国は、そこにいる民族によってつくられています。」
- Q でも、イスラエルはあくまでも特定の民族のための国家であることを公言しています。他の国はそうではありません。・・・
- A 「それは他の国がすでに特定の民族のための国家であるからだだと思います。・・・国がそもそもその民族を核としてつくられていて、その民族は同じ場所に一緒に残っているのです。・・・他の国は、すでに特定の民族の国家であるのです。ドイツはアム・ゲルマニイ（ママ。ドイツ民族／国民）だし、フランスはアム・ツァルパティ（ママ。フランス民族／国民）です。」
- Q でも、そういう国は、特定の民族のための国家として国の性格を定義していません。
- A 「そう規定していないのは、それが彼等にとって明らかだからです。・・・英国は、アム・アングリイ（ママ。イギリス民族／国民）だということは、定義として明記する必要はありません。それは明らかなのですから。」
- Q アメリカ合衆国はどうですか？
- A 「アメリカは特殊な例です。それは人のいないところにできた国ですから。インディアンはいましたが、それは又別な話です。・・・（アメリカは）誰でも外からやってきて『私はアメリカ人です。』と言える国です。・・・でも他の伝統的な国のほとんどは、或る民族を核としています。・・・（それに対し）イスラエルが特殊なのは、世界中にどれだけ（ユダヤ）民族が散らばっているかということです。だから僕達はまず国に枠組みを与えて、（ユダヤ）人がやってこれるようにしています。・・・」
- Q あなたはイスラエルが民族の違いによって二重基準であるとは思いませんか？
- A 「もし二重基準があるとしたら、それはただ個人的なレベルでのことだと思います。・・・どこかの窓口にいる人間が、ユダヤ人かアラブ人かで差別的に扱うということはあるかもしれませんが。それは問題だと思います。・・・」
- Q では次に、ウマ（国民）、レオム（民族／民族性）、レウミユット（≒国籍？）の三つの概念の使い方の例を文章の中であげてみていただけますか？
- A 「はい。『ハ・ウマ・デニット（デンマーク人）は、イスラエルの学校建設にお金を寄付することを決めた。』『私は自分のレオムが、ユダヤ・イスラエル人であると思っている。』『ユダヤ民族のレウミユットの感情は、とても強い。』」
- Q 今あなたにとって、イスラエルの最大の問題は何ですか？
- A 「・・・とても難しい問題があると思います。・・・敵意の問題というか、・・・」
- Q 誰と誰の間ですか？
- A 「ユダヤ人・・・イスラエル人とアラブ人の間でです。・・・イスラエルをとりまく環境・・・今は（和平の）日程が変わりました。・・・エジプトとヨルダンとは和平が成立していて、やがて、レバノンやシリアやパレスチナとも和平が成立するかもしれません。それが一番の問題です。・・・今は解決の途中にあると思います。」
- Q どのような和平を望みますか？
- A 「完全な平和。・・・国家間で貿易があって、国家間を旅行者が行き来できるような、そういう平和がきて安全になれば、軍隊を最小限に縮小できます。・・・本当の平和、・・・ユダヤ人とアラブ人の間に憎悪のない。・・・イスラエルとエジプト間は今平和がありますが、少なくともアム・ミツリイ（ママ。エジプト民族／国民）には、まだイスラエルに対する大きな憎悪があります。・・・（エジプトとは）平和があり、貿易があり、旅行者もいますが、でも依然として憎悪の感情があります。」
- Q あなたはそう感じるのですか？

- A 「私が感じているというより、新聞やテレビの情報からそういえるということです。」
- Q あなたは、エジプトとの和平が実現した後、エジプトに行ったことがありますか？
- A 「一度もないです。」
- Q 行きたくないからですか？
- A 「別にそういうわけではないです。」
- Q 将来は行くかもしれないですか？
- A 「ええ。たぶん。」
- Q ヨルダンはどうですか？
- A 「同じことです。」
- Q もし行くとしたらどこを訪れたいですか？
- A 「エジプトだったら、シナイの海でのダイビング。ヨルダンならペトラのあたり。・・・旅行者みたいに。」
- Q パレスチナ問題に対するあなたの展望は、先ほどイスラエル国家とパレスチナ国家に分けると言われたのでしたか？
- A 「はい。・・・今考えられる解決策としては、占領地をアム・パレスチナイ（ママ。パレスチナ民族／人）に与え、イスラエルにはユダヤ人および今イスラエルに住んでいるパレスチナ人が住むようにすればいい。イスラエルのアラブ人を追い出す必要はありません。まだそこは彼等のバイト（家）なのですから。・・・外にいる（パレスチナ）難民は、・・・もし彼等が望むのなら、（将来の）パレスチナ国家に帰ってくることができると思います。」
- Q パレスチナ難民が帰ってくるのは構わないが、「イスラエルにではなく」ということですか？
- A 「ええ。」
- Q あなたはバイトという言葉から何を連想しますか？
- A 「家族かな。」
- Q 「国家」を連想しませんか？
- A 「いいえ。国家とは連想しませんね。」
- Q 選挙で政党を選ぶときは、どういう点を重視しますか？
- A 「えー、・・・‘安全’、‘安全保障と軍隊’、‘経済’、‘リベラルかどうか’、・・・それから、‘文化に対する投資’という点です。私は映画をやっているので・・・」
- Q 前回の国会選挙では労働党でしたね？その前は棄権されていますが、これはどうしてですか？
- A 「その時は、何か月かニューヨークに行っていたので。」

Y 4

生年月日：1970-1-6生まれ（30歳）

出生地：イスラエル ハイファ

性別：女

父親出生地：モロッコ メクネス

母親出生地：イスラエル ハイファ

父方祖父出生地：モロッコ メクネス

父方祖母出生地：モロッコ メクネス

母方祖父出生地：ロシア NA

母方祖母出生地：ロシア NA

職業：エコノミスト

夫の職業：弁護士

職歴：知能テストの審査員

父の職業：弁護士

母の職業：教員

最終学歴：ヘブライ大学

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「主に祭日の時、または世界のユダヤ人に様々な悲劇が降りかかる時。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「イスラエルがスポーツや歌などの世界大会で勝った時。海外に旅行をする時。メディアでレバノンや 占領地にいるイスラエルの兵士の写真を見る時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界のすべてのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統はありますか？

A 「はい。」

家で行う主な祭日の祝。

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。学校で。」

感想：ショックと恐ろしさ

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム(nation)：共通の伝統と歴史を持つ人々の集団。

レオム(nationality)：民族又は共通の出自を持つ人々の集団への忠誠。

エズラフット(citizenship)：その国家の中で与えられる権利と義務の資格。（国が与える権利と義務についての資格）

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「強く、また洗練された軍隊になること。脅威を感じさせる軍になること。非政治的であること。攻撃ではなく、防衛に専念するモラルにかなった軍。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「強い軍であり、相対的に非政治的だと思う（評価する）。モラルの点では、占領地において確かに悪い影響を与えている。女性に対する軍の態度は良くないので、この点での評価は低い。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A メレッツ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A ラツ、メレッツ

- Q 質問票を拝見すると、あなたのお祖父さんとお祖母さんは、お母さんの方もお父さんの方も、どちらもモロッコやロシアから移住されていますが、いつごろ移住されたかご存じですか？
- A 「・・・何年かというのは正確にわかりませんが、1920年代、25年ぐらいだと思います。それは母方の祖父母です。父方のほうは、1950年代です。父方の祖父母はすでに結婚していて子供と一緒に移住しました。父はモロッコ生まれです。」
- Q あなたは、移住に関わる話を何か聞いていますか？
- A 「祖父や祖母がモロッコから移住したときは、・・・当時（モロッコ）でいい暮らしをしていたようです。お金もたくさんあって、名家の家で、・・・イスラエルに来て、・・・やはりいいところにいたようです。・・・いい家を持って住むことができて、・・・彼等は‘ずっと’イスラエル社会に入り込めたようですね。」
- Q どこに住んだのですか？
- A 「ハイファのそばのキリアット・ピアリク（注）ハイファの東10キロメートル位のところにある地名。）クライヨットというところ。・・・一軒家の大きな家に住んで、子供達はみんな大学まで行きました。・・・私の父も、父の兄弟もみんな、一父には大勢兄弟がいますが一、エンジニアとか弁護士になるための専門を学びました。相対的にいい暮らしをしていたと思います。・・・概して、モロッコから移住した人の多くは仮設住宅に住んで、暮らしはとても大変でしたから。・・・彼等の移住やイスラエルでの移住後の生活は順調だったと言っていました。・・・」
- Q モロッコにあった家は移住のときどうしたのですか？そのまま残して移住したのでしょうか、それとも売ったのですか？
- A 「わからないけど、たぶん売ったのだと思います。・・・彼等は逃げてきたのではないことは確かです。段取りされた方法で、イスラエル入国の斡旋にお金を払い、入国許可証を買って、・・・何かそういう組織があったようなのですが、・・・でもそういう方法でイスラエルに移住するというのは、モロッコからの移住者にはめったになかったことです。」
- Q お父さんの方のお祖父さんは何の仕事をしていたのですか？
- A 「貿易に関わる仕事だと思います。」
- Q お母さんの方のお祖父さんやお祖母さんのほうの状況はどうだったのでしょうか？
- A 「えー、彼等はここイスラエルで知り合っているの。・・・あまりよくは知りません。・・・彼等は、周りの社会とユダヤ人との関係がよくなかったので、そこ（ロシア）を去ったのだと思います。・・・そしてイスラエルに来て、知り合って、・・・祖父はここで、建築労働者でした。・・・」
- Q ロシアでシオニスト運動に参加していたと思いますか？
- A 「ええ。そう思います。」
- Q 第三アリアで来られたのでしょうか？
- A 「・・・そうかもしれませんね。・・・知らないというのは恥ずかしいですが（笑）・・・」
- Q 1950年代のモロッコでのユダヤ人とアラブ人の関係については何か聞いたことはありますか？
- A 「問題はなかったと思います。」
- Q 何が（モロッコからの）移住の最大の動機だったのでしょうか？
- A 「シオニストだったからです。全てのユダヤ人はエレッツ・イスラエルでみんな一緒に暮らさなければという考えがあったと思います。・・・彼等の暮らしはそこでは良かったわけで。社会的にはともかく、経済的には。」
- Q モロッコにもシオニストの組織があったのでしょうか？
- A 「わかりません。」
- Q 聞いたことはないのですか？
- A 「ええ。」
- Q では次に、質問票のアイデンティティの質問に関連したことをお聞きしますが、あなたは、ユダヤ・アイデンティティがこんなに長い間消えることなく世界中で続いているのは何故だと思いますか？
- A 「・・・面白い質問ですね（笑）。・・・えー、・・・周りのユダヤ人以外の社会がユダヤ人に敵対的だったので、それがユダヤ人を団結させて、アイデンティティを形成させ、ヤハドット（ユダヤ主義）を強くまもることにつながったと思います。それが、どこのユダヤ人にも共通していることだと思います。歴史をみると、ユダヤ人に対する攻撃や虐殺の出来事が幾つもあり、・・・時代が変わっても、それについて語られ、共通の記憶となり、・・・いつの時代も、周りが騒がしく、過去に起こった悲劇

の出来事、今の悲劇、未来の悲劇、というふうに、我々ユダヤ人に次は何が起こるんだろうという恐れがあります。それで、私達はイスラエルにやってきて、イスラエルの外ではイスラエルの権利についてわかってもらおうと‘通訳’しています。・・・ちょうど、一方で過去の悲劇を忘れず、共通の悲劇に‘参加’して、他方で今の場所をまもろうとしている。つまり、民族としてのユダヤ人にふりかかったあらゆる悲劇のテーマというものが、ユダヤ・アイデンティティをととても強め、維持させていると思います。私は、それが三つの時代にわたって機能していると思います。過去と現在と未来と。・・・『過去』は、かつて起こった共通のできごとについていつも考えていることです。例えばイスラエルではショアについて常に語られているように。『現在』は、周りの脅威がそうです。『未来』に対しては常に恐れがあります。・・・」

Q あなたご自身のユダヤ・アイデンティティはどこからきていると思いますか？

A 「宗教の伝統からだと思います。祭日にも宗教に関係することが色々あるし、・・・」

Q つまり、お家で様々な伝統や習慣をまもってこられたということからですか？

A 「一面から見ると、私は戒律を全く何もまもっていません。でも他方で、祭日は、宗教的に本格的なこととはしていないのですが、楽しい要素があります。特別の料理を食べて、家族がみんな集まり、・・・つまり、宗教的祭のなかに、ヒロニイ（世俗的な）の内容があるのです。ヒロニイの内容とは、家族的な祝いごとの行事のような。・・・でも依然として、或る特定の祭日の時には一ペサハ（注）出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）のときにマツォット（注）ペサハに食べる種なしパン）を食べるように一伝統に従った特別の食事ややり方があって、宗教を守るというのとは違った意味で伝統をまもっているといえます。」

Q あなたはご両親の代と比べて、同じ程度に伝統をまもっていると思いますか？

A 「ええ。・・・父が子供だった時はもっとまもっていました。でも母は何もやりません。その違いは、どういう家で育ったかにあると思います。ダティ（宗教的）の要素が多い家か、よりヒロニイの、でもユダヤの家なのかという。父の子供時代は彼の家族はもっとダティでした。私の両親の家は、つまり私が育った家は、全くヒロニイでした。・・・もし私が休暇をとってどこか他の（海外の）ところにいたら、そういう祭日を祝うかどうかわかりません。でもイスラエルにいと、仕事は休みだし、みんなが祭日を話題にするし、どんな料理をつくらうとか、・・・食事によんだりよばれたり、・・・そういうことを意識せざるをえません。・・・こうして、文化的、伝統的、社会的な問題として生活に組み込まれているのです。」

Q そういう伝統的な習慣のうちで、お父さんが家でやられていたことであなたがもうやらなくなってしまったものはありますか？

A 「いいえ。・・・父は、父の両親がやっていたほどはやっていませんでした。でも私は、父がやっていたと同じ程度にやっています。それは、私のパートナー（注）インフォーマントは女性同士のカップルである。）がダティの家庭出身だということも関係しています。もし違う相手と暮らしているのだったら、私はもっとヒロニイの生活をしていると思います。」

Q 彼女（パートナー）はダティヤ（宗教的）なのですか？

A 「いいえ。」

Q あなたのなかで、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人としてのアイデンティティはどのような関係にありますか？

A 「二つは共通点が色々ありますが、でも違うものです。・・・どちらが先かといわれれば、私はまずイスラエル人です。・・・ユダヤ・アイデンティティに対する私の定義は、宗教的なものでは全くありません。・・・もっとずっと文化的なものに関係していて、それはイスラエル人アイデンティティととても似たものです。・・・イスラエル人の定義はもっとはっきりした意味のものだと思います。・・・イスラエルにいるのは全員ユダヤ人であるわけではなく、私達は、様々な人々からなっていて・・・みんなイスラエル人です。その中には、アラブ人のアイデンティティもあればユダヤ人のアイデンティティもあります。・・・とにかく、私がまず最初に意識するのはユダヤ人としてよりもイスラエル人というアイデンティティですね。」

Q あなたは、何か典型的な‘イスラエル人のメンタリティ’というものがあると思いますか？

A 「・・・えー、・・・そうですね。・・・イスラエル人の行動様式に対しては悪い評判があると思っています。」

Q 誰の評判ですか？

A 「だいたい、外国からやってくる人です。・・・よく言われるのは、無作法とか、騒々しいとか、・・・厚かましいとか・・・」

Q そういう「評判」に対してどう思いますか？

A 「あたっているところがあると思います。・・・一面では、とても開放的で、言いたいことは何でも口にだして言うし、・・・他人のことを考えないことも多いし、・・・例えばイギリス人のようでは全くないわけで、・・・」

Q もしそういう傾向があるとして、それはどういうことが影響していると思いますか？

A 「・・・えー、・・・言われているのは、まず、この地域のメンタリティだということです。イスラエル人だけでなく、私達の隣人のアラブ人もそうだし、・・・地中海地域の国々も、・・・この地域のアミーム（民族）のメンタリティに共通するものだという。・・・他には、横柄さというものがあるというか・・・、あたかも自分達は特別だというような・・・それがどこから来ているかというところ・・・ここアレツは特別なところで・・・シオニストのあらゆる理念、『我々は周りを全部敵に囲まれた国にいるのだ。』という、・・・にもかかわらず自分達はよく頑張っているという意識・・・そういう感情があわさって、自分達はとても強くて、賢くてという態度になるのかも知れません。そういうところが、他の人から軽蔑されるのだと思います。」

Q あなたは質問票で自分を「シオニストだと思う。」と答えておられますが、どういう意味でそう思うのでしょうか？

A 「えー、・・・えー、・・・私が自分をシオニストと思うのは、イスラエルの建国の理念と役割というものには正しかったと考えるからです。でも私は、そのイデオロギーを今の現実にあうように正しく変えなければならないと思っています。・・・すでに終わったことを『もしこうだったら』と仮定することはできませんが、・・・特定の歴史状況があったのだし、ショアが起り、・・・シオニズムの理念が生まれて、ここに来て国をつくりました。・・・その後、国の歴史が発展し、世界のものの考え方も進歩して、人権に関わる問題はとても進歩しました。こういう事に対して、シオニストは（考えることを）拒絶しています。この国は、シオニストの見解では実際「ユダヤ人国家」で、・・・ユダヤ人でない人はみな、属していないかのようです。シオニスト国家としての今の在り方は、ユダヤ人でない市民にとっては矛盾があります。それが現実なのであって、この現実を知らなければならないと思います。そして、シオニストの見解を現実をみて変えていく必要があります。例えば今日、ユダヤ人であれば世界のどこからでもイスラエルにいくことができ、すぐに市民権を得ることができます。今イスラエルにやってくる人の多くは、シオニストだからというよりも、経済的な理由でやってくるのです。それが今の世界の価値観の流れであり、人々はあまりイデオロギー的でなく、もっと物質主義的です。・・・

だから今は、（シオニストの理念は）妥当性を欠いています。50年前は、その理念は妥当なものでした。ユダヤ人は「避難所」を必要としていたので、・・・部分的に見れば、シオニズムには妥当な点があります。でも、一般論としていうと、（今は）国家を利用しているだけの移民もいるのです。みんなとは言いませんが、例えば、ユダヤ人だからということでロシアからイスラエルにやってきて、・・・お金や助成金やウルパン（移民のためのヘブライ語学校）などの、ここで得られる限りの恩恵や援助を受けています。・・・イスラエルに來たいと思わない人も経済的なことを考えてイスラエルにやってくる。何年かしてもらえものを全部もらってから、別な国に行くことも考えられます。そういうことは実際に起きています。・・・それに私は、今は、シオニズムの理念は価値を失っていると思います。今世界を見渡したときに、どこにも行くところがなくてイスラエルが引き受けなければならないユダヤ人の状況というのはありません。世界のユダヤ人にイスラエルへの移住を奨励するということは、今日の状況にあっていません。今やってくる人は、シオニストだからではなく、経済的理由です。だから、シオニズムは変わらなければなりません。かつては、ここにユダヤ人の数をできるだけ増やしアラブ人や他の民族の数を超えさせようと、ここに全てのユダヤ人を移住させるべきだと考えました。そういう考えは、私は（今の状況では）間違っていると思います。私達は（今）、他の普通の国家の姿になったのです。もうかつてのような考えを説く国家であってはだめです。・・・世界中から（ユダヤ）人を集めて、どのように世界中からユダヤ人をここに連れてくるか、・・・そういうことはすべて幻想です。50年たって今考えるべきことは、どうやってやっていくか、相手を尊重しながらどう平和にやっていくかを学ぶことです。・・・

世界の情勢をみると、世界のヤハドットは今日やや妥当性をなくしていると思います。私にはあまり妥当性があるとは思えません。つまり、今日私が考えるシオニストとは、世界からユダヤ人をイスラエ

ルに移住させようと奔走する人ではなく、様々なユダヤ人がいるユダヤ人の多いこの国でユダヤ人に色々な可能性を与える国にするということです。でも、現実にあった国にしていくことも大事であって、・・・今イスラエルにいるのはユダヤ人とアラブ人です。アラブ人にもユダヤ人と全く同じ権利が保証されるのは当然です。しかも、もちろん書類上だけでなく、実質的に。というのは、書類上は、『宗教を問わず、誰にも等しく仕事を与えなければならない。』と書かれているかもしれませんが。でも、実際はそうになっていません。アラブ人労働者は、仕事を得るのが（ユダヤ人より）ずっとはるかに大変です。それは明らかであり、みんな知っていることです。そういうことが山ほどあります。・・・ユダヤ人とアラブ人の境遇の違いははなはだしいものです。」

Q そのことについてはどう思いますか？

A 「そういうことばかりです。・・・国全体がユダヤ人の利害のためにつくられています。社会がそうつくられていて・・・今言ったの仕事の例は、全てにあてはまることです。テレビをつければ、あるのはほとんどヘブライ語でのもので、アラビア語での手配は（イスラエル発の番組には）ありません。」

Q あなたは、それが納得いかないということでしょうか？

A 「ええ。ここには二つの民族の生活があるのです。一方の民族が極端に違うというのは・・・」

Q 今までのお話はよくわかりましたが、そうすると、それでもあなたがご自分を「シオニストと思う」とこたえられていることがわからなくなったのですが・・・

A 「かつてのシオニストは、世界中からここにユダヤ人を移住させるという考えをもっていました。私の考えでは今のシオニストとは、イスラエルにいて、助けを必要としているユダヤ人に可能性を与えることだと思うのです。すべてのユダヤ人をここに呼び寄せるというようなより踏み込んだ考えは、もはや妥当な考えとはいえません。・・・」

Q では次に、あなたは、「世界のユダヤ人は一つの民族だと思う」と答えておられることについては、どうでしょうか（どういう意味でそう答えられたのでしょうか）？

A 「このことも、理論的に頭で考えてというよりも情緒的、感覚的なものです。・・・誰かがユダヤ人だと言われれば何か自分に近い感情を覚えます。同時にそれは、伝統とかルーツとか、共通の習慣などにも関係していると思います。」

Q 宗教はもちろん伝統や習慣からも離れているユダヤ人も、民族として一つの集団に属すると思いますか？

A 「私はヤハドットの定義というのは、主観的なものだと思います。つまり、もし誰かが自分をユダヤ人だと規定するなら、それで十分だと思います。・・・でももし私が外国に行って、自分をユダヤ人だという人であって、もしその人がユダヤの習慣や私の知っている祭日を何も知らないとしたら、私の親近感はずっと低いと思います。・・・私が質問票でそう答えたのは、私達は共通の世界観を持ち、共通の習慣を持っていると思うからで、突然そういう共通のものが何もない人に会って、自分はユダヤ人だと言われても、私はその人に『あなたはユダヤ人ではない。』とは言えません。・・・でも・・・『世界には一つの民族であるユダヤ人がいる。』とは言いましたが、そういう人（ユダヤの習慣や祭日を何も知らない人）に対しては親近感は感じません。」

Q では次にヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）のことについてうかがいますが、今まで何回位行かれていますか？

A 「中学校のころ一度です。」

Q その後もう一度行こうとは思いませんでしたか？

A 「いいえ。又行きたいとは全く思いませんでした。」

Q 訪問の前と後で、意識の上で何か変化がありましたか？特に、ユダヤ人アイデンティティというものに何か影響がありましたか？

A 「・・・そこに行ったこと自体からはありません。・・・今この国は‘ホロコスト記念日’がショアのための特別な日になっています。その日は、テレビの番組もショア一色になり、学校でもショアについて特別の行事をやります。それは本当に特別の日になっています。・・・当時子供だった人でその頃を覚えている人にとっては、その日はとても辛い日だと思います。・・・とても辛い日です。特に子供時代にそれを体験した場合は、・・・ものすごく恐ろしい思い出なので、・・・何度もそれを思いだし、光景がうかび、・・・その感情を現すとしたら、・・・まるで自分が苛立たしくなるとでもいうか・・・ヤド・バ・シェムの中に入った時、凄まじい気がしました。一挙に色々なものがそこにあったので。・・・で

も、それに関する写真や証言や儀式をこれでもかというくらい何度も何度も見せつけられた後では、ヤド・バ・シェムの見学自体から何か私に新しい意識の変化が生まれたとは言えません。新しい体験ではありません。でも、ショアに関わる全てのことは、ユダヤ人アイデンティティと結びついています。つまりユダヤ人アイデンティティを強めるものです。」

Q あなたはもう行きたくないということですが、それでも他の人には行くことを勧めたいですか？

A 「ええ。・・・でも、子供にショアに関する全てのことがらを見せるのは控えるべきです。まだ小さな子供に全部を見せる必要はありません。大人ならそういうことを受けとめることができても、子供がそういう写真やユダヤ人がされたことを見るのはひどすぎます。私が子供だったとき、ショア記念日の夜はものすごく怖いものでした。その日は朝から色々特別な行事や番組があって、またこの日が始まると思うといつも怖くてたまらない気持ちになり、色々想像して夢にうなされて。・・・今の世代（の子供）はどうなのかわかりませんが。・・・でも私達の世代は、ちょうど国の土台に立っているようなもので、国をつくっているというか・・・イスラエル国家があるのはショアがあったことの結果だというような気持。・・・（ですから）みんながそこ（ヤド・バ・シェム）に行くべきだと思います。歴史の一部としてもとても重要な部分です。ユダヤ人の歴史だけでなく、人間性ということについても教えてくれるものがあります。人間性がどこまで行きうるものなのかということ・・・それにショアはユダヤ人だけに起こったのではなく、他にも苦しんだ人々がいます。私達はみなそれを忘れないようにしなければなりません。そして私達のなかにも時々同じことを見ることができます。・・・私達も、ドイツ人がやったようなことをやっている自分を見いだすことができる。だから、ユダヤ・アイデンティティというだけでなく、どういう人間になるかという教育、人間を尊重する教育が大切です。・・・」

Q 質問票の中のアム（民族）の定義のところ、「共通の歴史・・・」ということを書かれていますが、ユダヤ人にはどのような共通の歴史があると思われますか？

A 「先ほど言ったように、まず、習慣や祭日。他には、世界で起こった様々なユダヤ人の転変、ショアの出来事や‘スペインでの改宗’のようなこれまでに起こった災い、・・・ユダヤ人の歴史を振り返るとこういうことが顕著にみられます。」

Q では次に、次にあげる類似した概念を使って何か例文を作っていただきたいのですが。・・・まず、「アム」（民族）という概念からお願いします。

A 「・・・『ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）は、あと二週間すると世界の各地でベサハの祭りを祝います。』」

Q では、「ウマ」（国民）ではどうでしょうか？

A 「・・・ウマ？・・・何があるかな？・・・」

Q 「ウマ」という言葉は使いませんか？

A 「全然。一度も使ったことがありませんね。」

Q ではあなたの定義の中では「アム」と「ウマ」に違いがありますか？

A 「・・・ウモット（注）ウマの複数形）は・・・国家に関係している言葉だと思います。・・・イスラエルではウマという言葉を使うのかどうか私はわかりません。」

Q 英語ではどのような言葉に置き換えられますか？

A 「二つともnationだと思います。」

Q では、「レオム」（民族／民族性）はどうでしょうか？

A 「・・・ほとんどの国では、・・・例えば身分証明書の中で、レオムは市民のアイデンティティです。・・・例えばベルギーでは、レオムはベルギー（人）です。オランダに住んでいればオランダ人です。・・・イスラエルでは、レオムは実際のところ宗教です。身分証明書での意味としては、・・・実質的には宗教をきいているのに、宗教という項目ではなくレオムという項目になっています。そこにはユダヤ人とかアラブ人とか書くわけですが・・・だから、混乱してしまうというか、紛らわしい言葉遣いだと思います。」

Q 或る特定の国に、市民権を伴って定住している人全員を表すような（国民というような）言葉はないのでしょうか？

A 「・・・レオムといえば、そこにはユダヤ人とか何だとかという意味が入ってくるし、・・・エズラフット（市民権）は宗教などには関係しない市民としての権利であり、国家の市民（ママ）ということにな

るし・・・・・・そういう言葉はないと思います。」

Q イスラエルは自らの国家を「ユダヤ人国家」と定義していますが、そのことについてはどう思いますか？

A 「最初にも言ったように、・・一面から見るとこの国は、住民の大多数はユダヤ人で、イデオロギーを見ても、現実の機能の仕方を見ても、実際まず『ユダヤ人国家』と言えます。でも私は、こういう姿である必要はないと思っています。違う姿でなければならないと。・・」

Q あなたご自身は、今のようなイスラエル国家の性格を変えるべきだと思っているのですか？

A 「はい。」

Q あなたにとっては、ユダヤ人だけのための国家である必要はないと？・・・・

A 「そういうことです。」

Q でも、そう思っている人は少ないのではないですか？

A 「ええ。多くの人は、50年前と同じように考えています。ここはユダヤ人の場所で、世界中からユダヤ人をここに呼び寄せるべきだと、そしてアラブ人は少ないほどいいのだと、そしてユダヤ人だけの国が必要で・・・・意志決定は多数であるユダヤ人によってなされるべきで・・・・とまあこういう調子で。・・・・」

Q あなたのような考えはイスラエルでは少数派だと思いますが、なぜ多くの人はそういう考えではないのだと思いますか？

A 「・・私のような考えに対して『（あなたは）シオニストではない。』という人がいます。イスラエルで『お前はシオニストではない。』と言われることは、一種の‘のろいの言葉’です。・・ひどい軽蔑であり、『馬鹿だ。』と言われるようなものです。・・私達はシオニストでなければならない、そういう環境で私達は育ちます。シオニストでない人というのは、過激で、反国家的で、アム（民族）の存続に敵対的で・・・・ということになります。ここではみんなが兵役に就いて国家の存続に貢献しなければなりません。・・私が今まで言ったようなことは、『シオニストではない。』と考える人がいますが、私は自分ではシオニストだと思っています。ただし、『正しい考えでのシオニスト』という意味です。経済的シオニストと言ってもいいです。・・世界からユダヤ人を呼び寄せることに妥当性があった時代もありました。でも今は違います。今私達は人間として生きなければならない時代に生きています。・・例えば今この国には『帰還法』というのがあります。この法律によれば、世界のユダヤ人は誰でもここに来ることを望めば市民権などを得られます。でもこういう法律がある国は世界のどこにもありません。他の国々のほとんどにあるのは『移民法』ですが、イスラエル国家の『帰還法』は、人種主義的な『移民法』です。アラブ人が海外からイスラエルにやって来て市民権を得られる状況にはありません。・・」

Q あなたはそれはよくないと思うのですか？

A 「この法律は、まるで『これがこの国の前提であって、変えることは不可能だ。』といっているようなものです。・・私は、この法律は今の状況にあわないと思っています。かつては妥当性があったかも知れませんが。・・私達は今日もうすでに国家の形をとっていて、人口も多数をかかえています。私達は市民社会に結びついた伝統をすでに持っていると言えます。つまり、歴史のルーツだけでなく、ここに住んでいる人に結びついた伝統です。・・私達はここにすでに50年間アラブ人とユダヤ人が隣り合って住んでいるのです。私達にも共通のものはありますが、すでにこの国で共通の産物をたくさん作り出してきています。それが私達の目の前にある現実です。・・世界の各地からユダヤ人を呼び寄せて、アラブ人には最低限の権利さえ与えていない一方でユダヤ人には全面的に援助するというようなことをやるのではなく、『市民社会』をつくっていくべきです。確かに私達は、そういう（世界の）ユダヤ人とつながっています。私はそのつながりを否定しません。でも、ユダヤ人アイデンティティというだけでなく・・ユダヤ・アイデンティティはあるにしても、それに加えて、（私達には）人間としてのアイデンティティやイスラエル人としてのアイデンティティもあるはずで、イスラエル人としてのアイデンティティとは、彼もイスラエル人で私もイスラエル人で、私達は一緒に暮らし、たくさんのかたちを一緒に分かち合い、・・私達は現実の・・（聞き取り不可）を学ばなければなりません。」

Q つまりあなたは、パレスチナ人に帰還する権利があると思っておられるのでしょうか？

A 「難しい問題です。・・どうしたらいいのかわかりません。・・私が思うに、紛争の解決は、どこで‘後ろ向き’の弁明をやめるかにあると思います。つまり、今日イスラエル国家の境界内にいる人に、20年前はどうだったか、50年前はどうだったか、イスラエル国家の前はどうだったか、というよう

なことを言っているけど・・・どういふ‘正しい弁明’ができるのか私はわかりません。とても重要なのは、民族どうしが肯定しあうようになることです。・・・少なくとも居住の権利を認めることなしに真の平和を開くことはできません。憎悪を止めることはできません。・・・」

Q 民主主義という点では、あなたはイスラエルをどのように評価しますか？

A 「・・・えー、・・・まずまずだと思います。」

Q イスラエルは、ユダヤ人とアラブ人に同じ水準の市民権を与えていると思いますか？

A 「（首を振って否定。）・・・まだ大きな違いがあります。大きな・・・」

Q それは良くないですか？

A 「良くないです。」

Q どうして良くないと思いますか？

A 「・・・どうして私達は・・・（聞き取り不可）なのか？・・・（聞き取り不可）」

Q 今あなたにとって、イスラエルの最大の重要な問題は何ですか？

A 「・・・社会問題だと思います。・・・社会がありとあらゆる集団からなっていて、・・・まずイスラエル国家内にユダヤ人とアラブ人の集団があって、次にユダヤ人社会の中はヒロニム（世俗的な人々）、ダティイム（宗教的な人々）に分かれていて、ダティイムは今どんどん勢力を伸ばし始めています。それから、ユダヤ人の‘東方の’エスニック集団の中でもダティイムが増えてきています。さらに、‘左’と‘右’との対立もあります。・・・面白いのは、それぞれが、‘この部分ではこの集団’、‘違う部分では別の集団’に属しているので、例えば二人の人間が出会ったとすると、何か共通点があるということです。例えば仮に二人がヒロニムである場合、二人ともダティイムには批判的である、でも別の面では、一人は『右』で一人は『左』というように。・・・つまり一人の人間が様々なアイデンティティからなっているわけで、・・・そう考えると実際根底には共同（の可能性）があるのです。・・・でも、私はそれが今最も深刻なことだと思います。特にラビン元首相が暗殺されてからこのことがより深刻になっていると思います。それ以来、それ（イスラエルのユダヤ人社会内の分裂）は、単にありうる話ではなく、現実のものとなりました。・・・‘左’と‘右’、ヒロニムとダティイムなどの様々の集団の分裂が現に起こっています。・・・私達は、（ユダヤ人社会の内部でも）災禍が起こりうるんだということを、（ラビンの暗殺で）突然実感したのです。」

Q あなたは選挙で政党を選ぶとき、どういう点を重視されますか？

A 「・・・まず人権という点です。これは私達の生活の仕方（注）レスピアンのカップル）という問題にも関係していますから。それがまず第一に考える点です。・・・次に、私達の隣りの国々との紛争に対する政治的解決の在り方を考えますが、左派政党の方が占領地からの撤退には積極的です。私は平和を推進したいので、それも選ぶときのポイントになります。経済的な方法論の問題はあまり重視していません。私は仕事の上では経済に関わったことをやっていますが、・・・アレツ（イスラエル）では、政党間に経済政策の面での実質的な違いはないと思っています。」

Q あなたは、政治的・経済的・社会的にイスラエルが今どのように進んでいると思いますか？

A 「社会的には、いい方向とは思いません。・・・だんだん社会の中での相違点が明確になってきていると思います。政治的には、・・・バラクが首相に当選したときは、近い将来に平和がくるかと、・・・レバノンとも・・・（問題が解決するかと）思いましたが、・・・そうであってほしいと思っていますが、期待したようには進んでいません。経済的には・・・難しいですね。・・・」

Y 5

生年月日：1966-5-31生まれ（33歳）

出生地：イスラエル エルサレム

性別：女

父親出生地：ドイツ ベルリン

母親出生地：イスラエル エルサレム

父方祖父出生地：ロシア ビアリストク

父方祖母出生地：ロシア ベルディチェフ

母方祖父出生地：イスラエル ハイファ

母方祖母出生地：イスラエル エルサレム

職業：弁護士

夫の職業：銀行の金融コンサルタント

職歴：NA

父の職業：ファイナンシャルアドバイザー

母の職業：エスノグラファー

最終学歴：ヘブライ大学

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「海外にいる時。祭日。」

Q2 日常生活でイスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「海外にいる時。ショア記念日。独立記念日。兵士記念日。テロや戦争がある時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「わからない。」

Q4 あなたは、世界の全てのイスラエル人は一つの民族だと思いますか？

A 「わからない。」

Q5 家庭の中で守っているユダヤ的な伝統はありますか？

A 「はい。コシエルの食事。／ヨム・キプールにシナゴークに行く。／ペサハにマツァを食べる。／両親の家でのシャバットの習慣。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。何年も前。」

感想：とてもショックを受け、ショアの出来事にひどい恐怖を覚えたのを覚えている。当時は学校の生徒だったと思う。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム(nation)：共通の歴史や、共通の出自、共通の習慣、一つの神etc.を持つ人々の集団。

レオム(nationality)：民族の起源に関する民族への帰属。（他の民族との対比において共通の運命や歴史を持った民族）

エズラフット(citizenahip)：国家に公的に属すること。（そこで生まれたことにより、あるいは他の法的資格を満たすことで）

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国家を防衛し、安全を保障すること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「防衛よりも攻撃に重きを置いている。かつては、我々の小さな国を守ろうとする勇敢な兵士による小さな軍だった。しかし今は誇大妄想のコマンドたちからなる大きな軍の話をしている。我々の小さな国の防衛は、もはや真の目的ではなくなっている。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A メレッツ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A メレッツ、労働党

Q 質問票を拝見すると、お父さんはドイツ出身でおられるようですが、・・・

A 「父はドイツで生まれたのですが、父の両親はロシアで生まれました。」

Q いつイスラエルに移住されたのですか？

A 「1954年だと思います。・・・彼は1933年生まれで、・・・そうすると・・・移住は1955年です。彼はそのとき22歳だったと思います。」

Q お父さんの移住の最大の動機は何だったと思いますか？

A 「一つは、移住する一年か二年前にここを訪問していて、とてもここに心を動かされ、(ここに) 帰りたい(ママ) になったようです。何か社会的な理由だったと思います。そして一度イギリスに帰り、・・・実は彼はイギリスで育っているのです。・・・1938年に家族でドイツから逃げて、イギリスで育ちました。そして、38年にドイツを去って、40年にイギリスに着いて、それからずっとイギリスで育ちました。それから、1953年か1952年にここを訪問して、ここに心を動かされ、勉強を終えるためにイギリスに帰って、その後アレツ(イスラエル)に移住しました。父の動機は、社会的なものだったと思いますが、シオニストからの誘いもあったと思います。それは何かというのは私はよくわかりませんが、とにかく、(住む場所は) 他の場所ではなくアレツでなければならないという思いがあったようです。」

Q お父さんは何かシオニスト運動に参加していたのですか？

A 「彼はキブツにいました。」

Q いつのことですか？

A 「移住してすぐキブツに入りました。」

Q お父さんのご両親はどうされたのですか？

A 「父の両親は年をとってから(イスラエルに) 移住しました。私が12歳のときです。」

Q 彼等はキブツには住まなかったのですか？

A 「いいえ。・・・彼等は1978年に移住して、もう年をとっていました。体も健康ではなかったようです。」

Q お父さんのご家族がドイツからイギリスに移られたときは、ドイツでの家はこうされたのですか？

A 「全てを捨てて逃げたのです。・・・何も持たずに。・・・祖父はダイヤモンド商人だったのでダイヤモンドを持っていました。それで偽造パスポートを買うために賄賂を払い、・・・それはガテマラのパスポートだったようですが、・・・祖父はドイツに大きな家や資産がありました。最近、5年前ぐらいに、東ドイツに残してきたその家に対しての賠償金を、ドイツ政府から父がもらいました。」

Q イギリスではお祖父さんの仕事は変わったのですか？

A 「いいえ。同じ仕事を続けました。」

Q どのように仕事を始められたのでしょうか？

A 「彼等は難民でした。彼等はいつてみればドイツ人だったので、最初は収容所に入れられました。・・・戦争中だったので、ドイツから来た人達はとても大変でした。でも、詳しくは知りませんが、少しずつ‘居場所’を見つけていったようです。・・・ドイツを出て、彼等はまずベルギーに行き、そこに二年いて、それからイギリスに行ったのです。」

Q ドイツでは、お祖父さん達はドイツ語を喋っていたのですよね？

A 「最後までドイツ語(だけ) でした。イギリスでも、イスラエルに来てからもいつもドイツ語でした。父と祖父母はいつもドイツ語で喋っていました。」

Q では次に、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティについてうかがいますが、あなたのユダヤ人アイデンティティはどこから来ていると思いますか？

A 「わかりません。それがあことは明らかですが、どこから来ているのかはわかりません。・・・何か伝統というか、私を生んでいる家族、両親、家族の系譜・・・というようなものに関係しているのだと思います。うまく説明することができません。ユダヤ人アイデンティティを持っているということは間違いないんですけれども。」

Q あなたにとって、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティはほとんど同じものですか？

A 「うまく説明できません。・・・えー、・・・ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティは同じものなのかな？・・・わかりません。・・・いや、やっぱりね、それは違いますね。もし私が

ここに（イスラエルに）いないとしても、・・私がイスラエル人ではないとしても、ユダヤ人アイデンティティはやっぱりありますから。」

Q あなたにとってはどちらのアイデンティティが先ですか？

A 「まずイスラエル人です。」

Q どうしてそちらが先なのですか？

A 「より具体的に知覚できるからです。・・私は、イスラエル人の言葉を喋っているし、イスラエル人の国に暮らしているし、・・・イスラエル人のメンタリティを持っているし、・・だから、まず第一に自分をイスラエル人だと思うということです。」

Q イスラエルは、「ユダヤ人国家」として自己定義している国ですが、現実には、国の中にアラブ人もいるわけで、定義と現実にはずれがありますが、あなたはこのずれについてどう思っていますか？

A 「定義と現実には大きなずれがあります。そのことは、多くの難しい問題をもたらしています。・・実際、『ユダヤ人国家』という国家の規定は、ユダヤ人ではない人々にだけでなく、ダティーム（宗教的）ではない人々にも悪い影響を及ぼしています。・・大変問題だと思います。」

Q あなたは、そういう問題があったとしても、ユダヤ人のための国というものが世界に必要なと思いますか？

A 「・・今その問題について考えることは難しいといえます。なぜなら、もしそれがなかったらどうだったかというようなことは、考えられないからです。・・だから、何と答えていいかわかりません。・・・その考えの妥当性は今は薄れていると思います。私達の生活の実感からはかけ離れています。・・今は50年前の、ユダヤ人が団結して国をつくることが重要だと言っていた時代とは違います。・・・私達はこの場所に長年暮らしているわけで、・・・それは（ユダヤ人のための国というものが世界に必要なという考えは）あまり重要なこととは思えません。」

Q あなたは弁護士という職業がら、そういう問題についてはよく考えますか？

A 「何度も考えています。仕事上というだけでなく、・・・ええ、確かに仕事も関わっていますから、それもありますね。」

Q あなたは、イスラエルがユダヤ人とアラブ人に同じ市民権を与えていると思いますか？

A 「いいえ。」

Q 例えばどういう点が違うと思いますか？

A 「アラブ人はこの国で平等な市民ではありません。ありとあらゆる理由があります。・・・同じ権利を得ていません。・・・社会的な点でも、・・・つまり法律自体はあたかも平等のようですが、実際は違います。」

Q そういう問題について、あなたはどのように思いますか？

A 「残念なことです。とても問題だと思いますね。・・・」

Q 質問票で、あなたはご自分を「シオニストかどうかわからない。」と答えておられますが、これはどういう意味でそう答えられたのでしょうか？

A 「まず、シオニストという言葉の意味が実際自分でわからないのです。一面ではそうだと思います。私はアレツ（イスラエル）で生まれて、母方の方で言えばここに住んで8代目です。この場所と私はつながっています。でも、私が自分をシオニストだから何があってもここに住みたいとか何があっても土地の一片でも渡さないと言うかといえば、そういうことでもないのです。・・また、ここはひどいからここには住みたくないというユダヤ人もいますが、私はそういうことでもありません。・・・ですから、私はシオニストということの意味がわかりません。」

Q もしシオニストを定義するとしたら、あなたはどのように定義しますか？

A 「シオニストとは、アレツに対しイデオロギーからくる結び付きを持っている人のことだと思います。・・・私にも結び付きはありますよ。ここで私は暮らしていて、ここは私のパイト（家）です。でも、シオニストというのは、何かこうウマニット（民族的）な結び付きを持っている人で、・・ユダヤ人に国があることが大切だと考えている、そしてそれはエレツ・イスラエル（イスラエルの地）だと考えている人だと思います。もっと極端になると、そのためにはどんな代償を払ってもいいと考えていると思います。」

Q 世界のユダヤ人が一つの民族だと思うかどうかという質問についても、「わからない。」と答えておられますが、これはどういう意味ででしょうか？

A「・・・私は自分でも実際よくわからないのです。・・・私は自分に何かシオニスト的なものがあると思っています。・・・でも、そう言いきれるかどうかわかりません。というのは、シオニストのイデオロギーのせいでここで起こっている様々なことに対して、批判したいこともいっぱいあるからです。・・・例えば、レバノンです。それに、ダティイムの問題にしていること・・・つまり、宗教上の問題を、国家から切り離すことは、私にとってとても重要なことです。今この国家は宗教国家ですから。・・・例えば離婚をしたい人はラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）のところに行かなければなりません（ラビの承諾を得なければ離婚もできません）。そういうことはおかしいと思うのです。近代国家とは言えません。・・・」

Q 次に「伝統」のことについてうかがいますが・・・

A「私はとてもマソラティト（伝統的）です。」

Q あなたが（ユダヤ的な）伝統を守りたいと思うのはどうしてなのでしょう？

A「それがまさに伝統だからです。私の両親がしていることであり、祖父や祖母がしていたことであり・・・私の歴史の一部なのです。だから私にとっては重要なことです。」

Q そのまもる「程度」は、あなたとご両親やお祖父さんやお祖母さんとは変わってきていますか？

A「私の両親はまさに正統派のダティイムです。私は単にマソラティトであるだけです。以前は正統派（のダティヤ＝宗教的ユダヤ人）でしたが今は違います。私はただ基本的なこと、例えば食器を（肉と乳製品で）分けるというようなことを守っているだけです。」

Q お祖父さんやお祖母さんはどうでしたか？

A「ものすごくダティイムでした。」

Q ご両親やお祖父さんお祖母さんがやっていた（いる）ことで、あなたがやらなくなってしまったことにはどんなことがありますか？

A「シャバット（安息日）に車で出かけないこと。・・・前はこれをまもっていましたが、今はこれはまもっていません。・・・それから、以前は祭日にはもっとシナゴーグ（ユダヤ教会）に行っていました、今はほとんど行きません。・・・そういうことをやめてしまいましたが、でもそれ以上でもありません。というのは、私のパートナーの両親は伝統を守っているし、私の両親もそうで今もシャバットには車で外出しないし、火もつけませんから。・・・」

Q あなたはコシエル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事はまもっていますか？

A「ここ（家）ではまもっています。あなたもここでコシエルの食事がしたければできますよ（笑）。」

Q 外国に行ってもまもっているのですか？

A「いやいや、アレツ（イスラエル）でも、家以外ではまもりません。家でだけまもっているということで、・・・食器は別に用意してあるということで、私が食べるのはコシエルの食事ではありません。」

Q どういうことですか？

A「コシエルの食事をまもるためには、肉と乳製品とで食器を分けなくてはいけないことは知ってますよね？それで私は、もしこの家にダティイムの人を訪ねてきた時それに対応できるように、食器や道具を分けて用意しているのです。でも私個人は、コシエルの食事を普段しているわけではありません。」

Q どうして家でだけまもって、他は構わないのですか？

A「ここには両親や叔母が訪ねてくるので、彼等が心配しないで食事ができるようにしています。・・・それはわが家の伝統でもあるので・・・」

Q でももしあなたが望むなら、家の外でもまもることもできるのでは？

A「それは難しいですね。やろうと思えばできますが。・・・私の両親は海外でもそうしています。でも私は、・・・前はコシエルの食事をしていたこともありますが・・・今は別にコシエルかどうかは気にしません。」

Q でも、そういうこととはまた別に、色々なユダヤ的な伝統をまもることを意識しているということでしょうか？そこのところを少し説明してもらえますか？

A「ええ。・・・それ（伝統）は私の一部なので重要なことです。・・・私のアイデンティティの一部であり、私の歴史の一部です。『自分は誰か』ということの一部です。」

Q あなたは、ずっとずっと前の時代にここで起こった歴史とのつながりを感じるのですか？

A「そうだと思います。」

Q きのうアルゼンチンから移住した若者と話していたとき、彼は『僕はアブラハムの子孫のように自分を感じている。』ということを行いました。あなたもそういう気持ちを感じますか？

A 「いいえ。そんなふうには感じません。でも何か『帰属意識』は感じているとはいええます。……私の家族はもう150年ここで続いています。だから何の理由もなくただ『帰属意識』を感じているのではないのです。エルサレムを歩けばそこには祖母が生まれた通りがあり、……そういうふうに、かつてここで起こったことに帰属感を感じるのです。」

Q その「かつて」という過去の解釈は、200年前かもしれないし、2000年前かもしれない、色々な可能性を含むと思いますが。……

A 「そういう古い時代のことにも私は帰属意識を感じるといえます。……」

Q ずっと昔の古代にもですか？

A 「はい。」

Q どうしてそう思うのでしょうか？そういう意識はどこで最もつくられたと思いますか？家庭での教育でしょうか、学校での教育でしょうか、それとも他の何か……

A 「まず家庭の教育の影響が大きかったことは確かです。学校の教育も少しは。……でも主として、家庭の環境ですね。」

Q 次に、ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）についてうかがいますが、何度ぐらいあそこに行かれていますか？

A 「そんなに多くはありません。数回だけ、あまり覚えてもいないぐらいです。一度は学校の課外授業で行ったと思います。」

Q その訪問の前と後とでは、ユダヤ人アイデンティティの上で何か変化がありましたか？

A 「あったとは思いません。ショアについては、学校でもたくさんのことを教わるし、映画も色々あって見ているし、『ホロコスト記念日』にはショアに関する様々なことを目にするし、……確かにあそこに行ったことは自分に何か影響を与えたことは覚えています、ユダヤ人意識を特に強めたとは思いません。」

Q あなたは、あそこに行くことをみんなに勧めたいですか？

A 「そう思います。」

Q それは何故ですか？

A 「あそこは、私達みんなに、何があったかを思い出させるところだから。……記憶という点で、とても大事だと思います。」

Q あなたは、ウマ（国民）とアム（民族）の違いをどう定義されますか？

A 「ウマとアムですか？……私は違いがあるのかどうかわかりません。」

Q レオム（民族／民族性）との違いは？

A 「全て同じに思えます。」

Q あなたは質問票で、「イスラエル軍が今や防衛という役割を大きく越えてしまっている。」と指摘されていますが、このことを批判的に見ておられるわけですね？

A 「とても残念なことです。残念という以上に、ぞっとすることです。（レバノンや占領地に兵士を送りこむことは）子供を死に送りこむようなものです。」

Q 選挙で投票するときに、政党を選ぶ基準として重視することはどういう点ですか？

A 「主に今は社会的な点を重視します。私の家族のことを考えたとき（注）同姓どうしで結婚し、精子だけもらって生んだ子供が現在一人いる、三人家族。）、どの政党がこの問題に最も理解があるかということです。それから、政治的な世界の問題に関する点。例えば、平和を推進しようとしているのかということなどです。……」

Q あなたにとって、今イスラエルでの最大の問題は何ですか？

A 「ダティーム（宗教的な人々）とヒロニム（世俗的な人々）の問題です。」

Q 家を追われて帰りたくとも帰れないパレスチナ人の人々のことについて、あなたはどのように思いますか？

A 「それは、……とても複雑な問題です。……この私の家の目と鼻の先にはアラブ人の家がありますが、そこには彼等がかつて住んでいて、48年にそこを出ていきました。そういうことがあちこちで起こ

りました。それら一つ一つを識別するのは難しいことです。結局、全ては移り変わるということですから。・・・難しい問題です。私達ユダヤ人もそのようにして家を（追われ）出ていき、彼等も（追われて）出て行って・・・」

Q あなたは彼等に帰還の権利があると思いますか？

A 「帰還の‘権利’があると思います。何か解決を見つけなければなりません。」

Q 「（イスラエルをつくった）ユダヤ人は、『抑圧された人々』から『抑圧する人々』に変わってしまった」という批判がありますが、あなたはそれについてどう思いますか？

A 「その通りだと思います。」

Q 今イスラエルであなたが最もいいと思うことは何ですか？

A 「・・・イスラエルで最もいいことですか？・・・どういう意味でかによりますね。色々な意味がありますからね。漠然とした質問ですね・・・」

Q 厳密でなくとも、直観的に思うことでもいいのですが。・・・

A 「私にとってイスラエルで一番いいと思うのは、これが私のバイト（家）だということです。・・・他には、ここには様々な気候があることや、美しい国だとか、人々があつたかいことや、・・・とげとげしいけど、結局は親切だとか、・・・そんなところでしょうか。・・・よくわかりません。」

Q あなたはイスラエル人のメンタリティというものが何かあると思いますか？

A 「はい。」

Q 例えばどういうことですか？

A 「まず、とても直接的だということ。それは、肯定的意味も含みます。そして、・・・少し我慢強さに欠け、あまり行儀がいいとはいえません。・・・みんながみんなそうではありませんが、イスラエル人のメンタリティは、『自分がそうされるのは当然。』と人に要求していく姿勢があります。みんなではないのですが、でも何かそういう共通したものがあると思います。」

Q イスラエル人のメンタリティという時に、あなたはアラブ・イスラエル人にもそういうものがあると思いますか？

A 「（私が今言ったことは）ユダヤ人についてだけ言っています。」

Q あなたは、ユダヤ・イスラエル人とアラブ・イスラエル人のメンタリティに違いがあると思いますか？

A 「そういうことではなくて、私はアラブ人のメンタリティについては考えなかったということです。・・・それに、実はアラブ人のメンタリティをそれほど私は知りません。・・・ミズラヒ（‘東方’から来た人々）のメンタリティということなら、言えるかもしれません。それはアラブ人とユダヤ人とで一つあって、他にヨーロッパのメンタリティがあります。こちらにはいるのは、ヨーロッパの教育を受けてきたアラブ人とユダヤ人です。その違いということなら言えると思います。」

Q 今イスラエルでは宗教勢力の力が増大していますが、あなたはその原因をどのように見ておられますか？

A 「それは、心理的なことから来ていると思います。・・・うまく説明できませんが、昔はみんなダティームでした。それからシオニズムが起りましたがそれも一種の宗教だと言えます。・・・私には、このテーマで博士論文を書いた‘いとこ’がいますが、彼は『シオニズムはヒロニムによる宗教である。』と書いています。つまり、今日人々は何か新しいことを探しているのです。そして宗教は、たとえばシャス党は、あたかも理想の世界を提示しています。・・・人々は何か人生に意味を求めている、そういう政党について行っているのだと思います。」

Q 今イスラエルでは宗教法が存在するわけですが、そのことの今後の展望について、どう思っていますか？

A 「今の様な姿ではなくなることをとても望んでいます。でも、そう変化する見込みはとても低いと見ています。・・・それどころか、今はもっと（宗教の力が）強まっています。まるで、『もし宗教と国家を分離したら、私達のユダヤ・アイデンティティを失ってしまう。』と考えているのです。みんながラビのところで結婚し、ラビのところで離婚をすれば、私達の‘ユダヤ性’は保たれると。・・・そして、『マムゼル（注）ユダヤ教の法規に違反した婚姻関係）の子供は撲滅されるべきだ。』というような、色々な宗教上の法律があります。宗教をまもることで私達を守るといわんばかりに。・・・（宗教的な）人々はそう思っていて、それを変えることは、全てをひっくりがえすことです。・・・それが人々の感じていることです。私はそれがいつか変わるとは思えません。ずっとこうではないかと思っています。」

ずっと宗教と国家がここでは一体なままではないかと。」

Q でも一面ではヒロニムの教育も発達していくのではないですか？

A 「ええ。でも、ダティイムに対する教育予算の方に国はずっと多く配分しています。・・・」

Q それは、絶対額そのものがですか、それとも相対的にということですか？

A 「ダティイムの数を考えたときに、ダティイムの教育機関は国からずっと多くの予算を得ているのです。」

Q つまり、絶対額というより、相対的にということですね。

A 「詳しくはわかりませんが、実際彼等はとても多くを得ているのです。・・というのは、ダティイムは何もしようとしていないのでまずお金を稼ぐことができません。例えば、どこかの自治体の委員会があるとします。そこの15人の委員の内、10人はダティイムで、彼等はまず彼等の機関にお金を与えられない限り一步も動こうとしません。国はこのように（ダティイムに）あやつられています。」

Y 6

生年月日：1974-8-10生まれ（25歳）

出生地：イスラエル ナハリヤ

性別：女

父親出生地：ルーマニア NA

母親出生地：イスラエル ハイファ

父方祖父出生地：ルーマニア NA

父方祖母出生地：ルーマニア NA

母方祖父出生地：ルーマニア NA

母方祖母出生地：ポーランド NA

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると思いますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「ユダヤ人の祭日、ホロコスト記念日。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「ヘブライ語の言葉を聞く時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのイスラエル人は一つの民族だと思いますか？

A 「わからない。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

ユダヤの祭日（ペサハ、ヨム・キプールの断食）

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。6年位前。」

感想：深いショック。ユダヤ人がイスラエルに住むべきだという信念を強くした。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム(nation)：共通の過去、共通の歴史を持ち、運命を共にし、共通の土地に住む人々。

レオム(natiionality)：アムと似ている。共通の宗教、言葉、歴史を持つ人々の集団。

エズラフット(citizenship)：その国に居住することから発生する権利。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国家の防衛、社会的メルティングポット。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「時に人権が損なわれることがあるが、それ以外はまた、防衛よりは攻撃と思われる行為をする時以外はおおむね高く評価している。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A メレッツ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A エメト（労働党）

- Q 質問票を拝見するとお祖父さんとお祖母さんはイスラエルに移民されているようですが移住の時期はわかりますか？
- A 「1945年です。」
- Q お父さん方もお母さん方もですか？
- A 「ええ。」
- Q 1945年頃ですね？
- A 「1945年です。」
- Q その時のことを何か聞いておられますか？
- A 「彼等は逃げてきたのです。・・・それにアレツ（イスラエル）に移住したがっていました。」
- Q 当地ではシオニスト運動に参加していたのでしょうか？
- A 「わかりません。」
- Q お父さんはその時子供だったのでしょうか？
- A 「ええ。一歳にもならない赤ちゃんでした。父は1945年生まれです。・・・彼が生まれて、（父の家族は）移住してきたのです。」
- Q その時第二次大戦はもう終わっていたのでしょうか？それともまだ戦争中だったのでしょうか？
- A 「もう終わっていました。彼等は難民でした。」
- Q （ルーマニアの）家はどうなったのですか？
- A 「父の家は商売をしていて、色々店を持っていました。」
- Q どういうものを売っていたのですか？
- A 「布とか・・・よくわかりません。」
- Q そういう店や家は（戦後）どうしたのでしょうか？
- A 「捨てて、移住してきました。」
- Q 質問票でユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティについてお聞きしていますが、この二つのアイデンティティはあなたの中でどういう関係にありますか？二つは同じ位意味を持つものでしょうか？
- A 「同じではありません。」
- Q どちらがまず先にありますか？
- A 「まずイスラエル人です。・・・イスラエル人というのは毎日感じることですが、ユダヤ人というのは祭日やユダヤ人の特別の日にしか意識しません。」
- Q あなたは、ユダヤ人のアイデンティティは何からきていると思いますか？
- A 「えー・・・家族から・・・えー・・・結局家族からだと思います。・・・私達はユダヤ人の祭日を祝いますがそれは家族でやることですから。でもそれは私達がダティ（宗教的）だということではなく、ただ・・・」
- Q あなたはイスラエル生まれですが、もしあなたが外国で生まれていてもユダヤ人としてのアイデンティティがあったと思いますか？
- A 「はい。それは家族と関係していることで、・・・身分証明書にもイフディヤ（ユダヤ人）と書かれています。」
- Q もし身分証明書にそういう記載の欄がないとしてもあなたはユダヤ人だと感じるのでしょうか？
- A 「感じます。」
- Q あなたは質問票でご自分を「シオニストだと思う。」と答えておられますが、それはどういう意味でしょうか？
- A 「私はアレツで暮らしていて、・・・イスラエルは私達の（ユダヤ人の）場所だと思っていて、・・・他には・・・たぶんここは他の国より大変なところだとは思っても、でもやはりここはイスラエルなんだと（ユダヤ人の場所なんだと）思う・・・そういう意味です。」
- Q 世界からたくさんのユダヤ人がここに移住してくることは大切なことだと思いますか？
- A 「えー・・・。」
- Q そういうことはあなたにとってどうでもいいことですか？
- A 「（そういうことは）あまり考えたことがありません。」
- Q （そういうことは）関心がないということですか？
- A 「いや、私はシオニストです。私はアレツに住んでいますから。・・・問題は、何故彼等が移住するのか

というその目的です。・・移住というのは何か大きな運動ではなくもっと個人的なことです。・・・みんながみんなここに来てシオニストになる必要はありません。」

Q 次に、質問票の中であなたは「世界のユダヤ人が一つの民族だと思いますか。」という質問で「わからない。」と答えておられますが、これはどういう意味ででしょうか？

A 「アム（民族）というのは同じ目的や同じ歴史を共有しているものだと思うのですが、私はアメリカのユダヤ人が何を考えているのかわからないし、彼等の目的が何かもわかりません。・・・そして、いつかは‘同じ民族である’ということにも終わりがくると思っています。今は私達はみなユダヤ人ですが、アムという定義の中でヤハドット（ユダヤ教）が占めている部分はほんのわずかです。私達は今はただユダヤ人だということだけです。今のところは（ユダヤ人だということは）或る程度大きな部分を占めていますが、だんだんそれも小さくなると思います。・・・」

Q あなたがもし外国でユダヤ人に会ったとしたら、ユダヤ人でない人よりその人に、より‘つながり’を感じると思いますか？

A 「えー・・・わかりません。・・・ええ感じると思います。感じるでしょうね。似ているところがあるし、私達は、同じ物語や同じ歴史などを知っているから。・・・今はそうです。でも、あと二十年もしたら変わってくると思います。私達は彼等とは別の歴史を持つことになりますから。・・・ここイスラエルの歴史を。・・・」

Q 質問票の中で色々な概念の定義をしてもらいましたが、あなたはアムの定義に「共通の過去や共通の歴史を持つ・・・」ということを指摘しています。ユダヤ民族の場合どのような共通の過去と歴史があると思いますか？

A 「今の状況でいうと、ショアや、聖書に書いてある様々な物語です。でもあと二十年もしたら、イスラエルの戦争や、‘ラビンの暗殺’のような今私達がここで記念していることなどになっていくと思います。・・・言い換えると、今はイスラエル建国から五十年しか経っていないので、ユダヤ人は皆同じ歴史を持っています。でも後何年かしてイスラエル独自の歴史が蓄積してきたら、私とアメリカのユダヤ人が‘同じ歴史’を共有しているとは言えなくなると思います。」

Q 今までは「同じ歴史」を共有しているのですか？

A 「今はそうです。独自の歴史を生むほどまだ時間が経っていませんから。」

Q でも、どのような「共通の過去や歴史」が、アメリカのユダヤ人とイスラエルのユダヤ人とアルゼンチンのユダヤ人の間にあるのでしょうか？

A 「言っていることはわかります。・・・でもやはりお互いをつないでいるものがあるのです。まだ宗教は重要（な要素）です。・・・今はまだ重要です。でも、もう少ししたらそれも変わると思います。・・・少なくとも私や私の友達や家族をみる限り、宗教（の要素）はあまり意味をもたなくなると思います。・・・」

Q あなたの言われることはわかりますが、「共通の」という場合、例えばどういうことをいうのでしょうか？宗教というのは先ほど言われたのでわかりましたが・・・

A 「宗教と・・・ショア・・・伝統や祭日。でもそれは実際は宗教ですね。・・・」

Q 伝統についてうかがいます。あなたは伝統の一部をまもっていると書かれていますが、・・・そうですね？

A 「少しです。」

Q ペサハ（注）出エジプトを記念する過ぎ越しの祭り）やヨム・キプール（贖罪の日）の断食はまもっているのですよね。どうしてそういう伝統をまもっていると思いますか？

A 「それは家族で一緒にすることだからです。それらはダティイム（宗教的な人々）の普通の祭日ではありません。例えばペサハは、みんなで一緒に夕食のごちそうを食べるので家族の行事のようなものです。私はシナゴーグ（ユダヤ教会）に行くわけではないし、シャバット（安息日）に車にも乗るし、・・・でもペサハのような行事はみんなで一緒にするし続けていくのが難しくないので、それに楽しいことでもあります。」

Q あなたのご両親はあなたよりももっと伝統をまもっていますか？

A 「いいえ、同じ程度です。・・・でも祖父と祖母はもっとまもっていました。」

Q あなたは兄弟がいますか？

A 「ええ。弟が一人。」

Q 何歳ですか？

A 「18歳です。」

Q 彼はパール・ミツバ（注）13歳の男子の成人の祝いの儀式）をしましたか？

A 「はい。」

Q 弟さんがやりたいと言ったのですか、それともご両親が望んだのですか？

A 「両親が望みました。でも家族がみんなそろろうようにということでやったので、パール・ミツバというより家でお祝いをしたという感じです。みんな私達の家に来ました。」

Q 次にヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）についてうかがいますが、あなたはそこに一度だけ行ったのでしょうか、それとも何度か行っていますか？

A 「何回か行きました。」

Q どういう機会に行ったのでしょうか？学校の授業でですか、あるいは一人で？

A 「学校でも行ったし軍隊でも行きました。・・・」

Q あなたはそこに行くことをみんなに勧めたいですか？

A 「・・・えー、大事なことです。歴史の一部ですから。・・・・（あそこにあることは）今世界で起こっていることを考える上でも先例になっていると思います。・・・それは、‘憎悪’というものが何をなするかということの実例だと思います。・・・」

Q ポーランドの強制収容所の跡を高校生が訪れる修学旅行があるようですが、あなたは参加しましたか？

A 「私は、ポーランドではなくドイツに行きました。」

Q それはいつですか？

A 「・・・十年前になりますね。」

Q 高校の時ですか？

A 「そうです。」

Q あなたが望んだのですか、それとも選ばれて行ったのですか？

A 「両方です。」

Q 何日ぐらい行っていたのですか？

A 「二週間。・・・でもその内、強制収容所を訪れたのは一日だけです。」

Q 他の日は何をしたのですか？

A 「ドイツの高校生と一緒に旅行したり、彼等の学校を訪問したり、強制収容所の見学はあまり重要ではなくて一日か二日使っただけでした。同じ世代の若者との文化交流という意味の方が大きかったと思います。」

Q ポーランドに同じ様なプログラムで行った高校生に聞いたところでは、その時はホロコストの生存者の人が一緒に引率者として行ったと言っていました、あなたの旅行でもそうでしたか？

A 「いいえ。私達の旅行はショアというテーマではなかったの。」

Q あなたは軍隊でどういう部署にいたのですか？

A 「空軍です。」

Q 空軍では何を？

A 「女性は、・・・今は違いますが・・・私達の時は飛行機には乗れなかったの、空軍といっても何か特別のことをやっていたわけではありません。」

Q どの辺の基地にいたのですか？

A 「真ん中では。・・・レホボットのそばの。」

Q 占領地には行ってないのですか？

A 「いいえ。」

Q 一度も？

A 「いいえ。（行っていません。）」

Q 女性は占領地には行かないのですか？

A 「そうなのです。」

Q 選挙で政党を選ぶ時あなたはどのような点を重視しますか？

- A「・・・何を進めようとしているか、何が彼等の目的か、というようなことです。」
- Q あなたにとっては何が大事なのでしょうか？
- A「平等です。‘平等’という問題はとても大事です。」
- Q どういう平等ですか？
- A「女と男の平等や、ユダヤ人とアラブ人の平等や・・・今のところそれ（平等）が私にとっては最も大事な点です。・・・ヒロニム（世俗的な人々）とダティイム（宗教的な人々）がみんな同じ負担をするように。今ダティイムは、兵役に就いていません。・・・簡単にそれが認められています。そういうことは止めるべきです。・・・平等は大事な問題です。それから・・・社会的目的。・・・」
- Q あなたはもうすぐ司法試験だと聞いていますが、弁護士になるのですか？
- A「はい。・・・あと二週間後に試験です。」
- Q どうして弁護士になろうと思ったのでしょうか？
- A「わかりません。・・・今は間違いじゃなかったかと思っています（笑）。」
- Q イスラエルはまず国家の性格を「ユダヤ人国家」と規定しているわけですが、現実にはイスラエルの中にはユダヤ人でない人も大勢住んでいますよね。
- A「そうですね。」
- Q あなたはそのずれについてどう思っていますか？
- A「・・・私は、国家はまず第一に民主的でなければならないと思っています。ユダヤ人国家である前に民主国家でなければなりません。・・・そしてユダヤ的であるという事実は、民主主義に影響を与えるものでなければならないと思います。というのは、ヤハドット（ユダヤ主義）には、平等や正直や公正などの良い価値観が色々含まれていると言われているからです。私は、そういうヤハドットのいい部分が民主主義に影響を与えるべきだと思うのです。私は、この国の定義の中にあるイエフディット（ユダヤ人の）という言葉はなくていいと思います。」
- Q 定義し直すということですか？
- A「定義し直すことになるのかどうかわかりませんが、今はあまりにもこの部分が影響を与えすぎています。もっと民主的な方向に影響を与えるようにするべきです。・・・今のままでは軋轢が多すぎます。」
- Q 今の定義にある「ユダヤ人国家」であってかつ「民主国家」であることは矛盾しないのでしょうか？
- A「矛盾します。宗教が邪魔をして誰もが望むことをできません。・・・モスレムのアラブ人は平等ではないし・・・」
- Q そうすると、・・・あなたはイスラエルが民主国家になる必要があるといわれましたが、そのためにはイスラエルの国家規定を変えることが必要になると思いますが。・・・
- A「変えることが必要です。」
- Q あなたは変えなければならないと思うのですか？
- A「・・・えー・・・はい。・・・でも‘実効性’がある限りでということですが・・・（今のままで）特定の価値を盛り込めば可能だとも思います。・・・民主主義的になるように機能しないのであれば（規定だけかえても）意味がありません。・・・宗教と国家を切り離すことも必要です。今日宗教団体は国家からお金をもらっています。それをやめなければなりません。」
- Q しかし選挙の結果などをみると宗教諸政党は大きな力を持つようになってきていますが、これはそういう政党を支持する人々が太勢いることを示しているわけですよね。
- A「たくさんいますね。」
- Q しかもその数は伸びているとさえ言えると思います。
- A「毎年伸びています。」
- Q どうしてそうなっていると思いますか？
- A「そういう宗教諸政党は、もし経済的な問題があれば援助しようとするのですが、あくまでも特定の人々だけを向いています。・・・それは他の政党も問題にしなければならないようなこと、例えば援助を必要とする家族などの問題をどう解決するかというようなことがあります。宗教諸政党はそういう人々に様々な解決を与えるので人々は票を入れるのです。例えば、安い教育、色々な援助・・・などで。彼等は‘平和’や‘平等’というようなことはどうでもよくて、そういう家族を（ママ）‘今’どう援助するかということを考えています。だから彼等はどんどん勢力を伸ばしているのです。・・・人につけこんで利用しています。・・・」
- Q そういう方向を変える可能性はありますか？
- A「他の政党もそうした問題に取り組めば変わるかも知れません。・・・今宗教政党を支持する人々が増え

てきているのは、宗教（政党）がお金をばらまいて問題を解決することに一役かっているからです。
・・ですから、まず経済問題を解決すれば、相対的に他の政党の勢力が大きくなると思います。」

Q あなたにとって今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A 「えー・・・今ですか？・・・アム（ユダヤ民族）内での‘戦争’です。ダティイムとヒロニムの中の・・・イスラエル社会の中の矛盾です。」

Q どういう時にそれを感じますか？

A 「・・・例えば今・・・政府にはいつも‘賄賂’の問題がありますが、いつも同じ様な背景で起こっています。宗教諸政党は彼等の数の力を‘ゆすり’に使っています。・・・連合政権が成り立つためには彼等（宗教政党）の数が必要なので、彼等はずっともっとと要求します。・・・そして彼等の目的は、・・・最近の例で言うとしたお金がほしいだけです。・・・」

Q 何のためにお金を要求しているのですか？

A 「彼等は自分達の教育に使うと言っています。（文部省の管轄外の）独自の学校教育のために。」

Q 実際そのように使われるのでしょうか？

A 「わかりません。たぶんそうだと思いますが。でも・・・（実際の）問題は失業などの経済問題です。それは解決しなければなりません時間がかることです。・・・」

Q では逆の質問ですが、イスラエルにいて‘いい’と思うことは何ですか？

A 「何がいいか？・・・気候かな。・・・何がいいか？・・・私達は進歩していると思います。社会が発展する方向に進んでいます。・・・色々な新しい建物を建て、文化も発展しつつあるし、・・・文化ですね。文化が進んでいると思います。少なくともヘブラ・ヒロニット（世俗的な社会）です。世界の他の国々に近づいていると思います。」

Q 家を追われて帰れないパレスチナ人の人々のことをどう思いますか？

A 「・・・えー・・・問題です。・・・でも、彼等を家に帰すことが解決だとは思いません。多くのところは、もう長年別の人達が住んでいますから。解決はたぶん、賠償金を払うという形になると思います。賠償しなければならぬのは当然です。・・・何からの解決に至らなければなりません。・・・たぶんお金という形で。・・・」

Q ユダヤ人はかつて「国を追いだされた人々」だったのに今パレスチナ人を「国から追いだしている」という見方について、どう思いますか？

A 「・・・そうだと思います。」

Q あなた自身はパレスチナ人に共感を感じますか？

A 「はい。」

Q パレスチナ問題に対するあなたの将来の展望はどのようなものでしょうか？悲観的ですか、楽観的なものですか？

A 「えー・・・楽観的といっておきましょう。なぜなら、・・・他の道はないからです。どう楽観的に考えるかといったら・・・私達は彼等の要求するものに耳を傾け、それを与え、助ける必要があります。今のままではどうにもなりません。・・・」

生年月日：1962-4-28生まれ（37歳）
 出生地：フランス パリ
 性別：男
 移住年：1994-5-19 （移住時年齢32歳）
 一緒に移住した家族：妻／二人の息子
 父親出生地：モロッコ ラバト
 母親出生地：モロッコ ラバト
 父方祖父出生地：モロッコ ラバト
 父方祖母出生地：モロッコ ラバト
 母方祖父出生地：モロッコ ラバト
 母方祖母出生地：モロッコ ラバト
 職業：コンピュータープログラマー
 妻の職業：学校の事務員／美術の教師
 職歴：コンピュータープログラマー
 父の職業：建築家
 母の職業：主婦
 最終学歴：コンピュータの学校（高校のあと、1年）
 これまでの居住市町村：エルサレム→イシュブ・トコア（占領地内）

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「自然に、あたりまえのこととして。いつも。常に。」

Q2 日常の生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「いつでも、イスラエル人と感じている。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。1982年。」

感想：胸が痛んだ。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム (nation) : 共通の習慣（伝統）と共通の運命がある人々の集団。

レオム (nationality) : 宗教と習慣（伝統）に関係するもの。

エズラフット (citizenship) : 市民になる（帰化する）ことを選ぶ時に、その国の法律を引き受ける（受け入れる）時、に与えられる資格。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「祖国を守ること。民族を守ること。その市民を守ること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「私の考えでは、ツァハル（イスラエルの軍隊）は、よくやっている。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A リケード

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A リケード

- Q あなた自身、また両親がイスラエルに移住したのは、どういう動機からですか？
- A 「ずうっといつも、何をしたらいいかわかりませんでした。子供が生まれたとき・・・二人はフランスで生まれ三人目はイスラエルで生まれたのですが・・・（子供にとって）フランスはいい場所じゃないと思いました。彼等に確定した場所を与えたかった。私のように、フランスがいいのか、イスラエルがいいのか、何度も自問自答するようなことをさせたくなかったのです。」
- Q フランスはあなたにとって、どこが良くなかったのでしょうか？
- A 「私たちは、どちらかというともソラティム（伝統的ユダヤ人）です。子供達にはユダヤ人の学校で勉強してほしかった。でも、いつも遠いところにあり、バスを使って毎日一時間も通学しなければならなかった。それは、とても大変だったこと、それが一つの理由です。他には、私の家族がここ（イスラエル）に（すでに）いたし、私の両親も、妻の家族もここにいました。あそこ（フランス）にいたのは、何といったらいいのか・・・」
- Q あなたのご家族がモロッコからフランスに移住したのは、どうしてだと思いますか？
- A 「モロッコではやる事があまりなかったということがあると思います。父の職業は建築家ですが、モロッコはその仕事をやるのにあまり適していません。父はモロッコで生まれたけれど、フランスで学びました。」
- Q おじいさんのモロッコでの仕事は何でしたか？
- A 「彼は銀行で働いていました。」
- Q ご家族がモロッコから移住したあと、モロッコを再び訪れていますか？
- A 「いいえ。祖父と祖母がモロッコを去ったのは、1970年ですが、それからモロッコへは訪れていません。」
- Q あなたがフランスからイスラエルに移住したのは、31歳の時ですね。そのときすでにフランスで働いていたと思いますが、同じ職業ですか？
- A 「32歳のときです。ええ、フランスでも同じ職業でした。」
- Q 最終学歴はコンピュータの専門学校とありますが、これはどこで、どのぐらいの期間でしょうか？
- A 「フランスの高校を卒業した後、一年間です。」
- Q その後フランスで仕事をみつけるのは、難しくありませんでしたか？
- A 「難しくはなかったです。」
- Q すでにあなたは、フランスの市民権があったと思いますが、・・・
- A 「はい。どちらかの親がフランス人であれば、子供は自動的に市民権が得られますから。（ママ）」
- Q あなた方がフランスからイスラエルに移住したとき、フランスの国籍はどうしたのですか？
- A 「そのまま残っています。」
- Q イスラエルに移住してすぐは、どこに住んだのでしょうか？
- A 「エルサレムの両親の家に9カ月位一緒に住んで、その後は、家を買いました。でもその家のことでちょっと問題がありました。売主にお金をごまかされ、裁判になった。・・・裁判で問題が解決して、そこに今も住んでいます。」
- Q あなたの家は占領地のなかにあるわけですが、家を決めるとき、そういう場所の問題については考えませんでしたか？
- A 「考えました。・・・でも、あまり考えなかった。その場所が気に入ったので、そこに決めました。」
- Q 気に入ったというのは？
- A 「その場所や、風景や人々など。」
- Q ヘブライ語はフランスでも学んでいたのですか？
- A 「ええ。学校で。ユダヤ人の学校にいましたから。」
- Q では、イスラエルに移住したときには、言葉の問題はほとんどなかったのでしょうか？
- A 「ほとんどありません。」

Q あなたにとって、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティは同じぐらいの重みを

- 持っていますか、それとも、どちらかにより重きがありますか？
- A「二つは同じ比重です。」
- Q あなたは、ダティ（宗教的ユダヤ人）ですか？
- A「えー、私は、いつも自問自答するのですが、私はマソラティ（伝統的ユダヤ人）です。でも、私は、シャバット（安息日）をまもり、ユダヤの祭日をまもります。人は私をダティといますが、私は自分ではマソラティだと思います。」
- Q あなたの両親と比べて、あなたはよりマソラティですか、それとも両親の方がマソラティですか？
- A「同じです。」
- Q どういう伝統をまもっているのですか？
- A「すべて。シャバット、祭日、コシエル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事、・・・私たちは極端な方ではないけど、・・・まもっています。私は（ダティとヒロニム（世俗的ユダヤ人）の）中間ぐらいのところがいいと思うので。」
- Q あなたの奥さんも同じ様な考えですか？
- A「妻はそれほどでもありません。」
- Q あなたは、世界の全てのユダヤ人はイスラエルに移住したほうがよい、あるいはすべきだと思いますか？
- A「そう思います。」
- Q あなたは、お祈りするとき何を思うのでしょうか？
- A「祈りに集中するようにしていますが、自分に起こっている問題について考えるときもあります。」
- Q ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に行ったのは一度ですかそれとも、何回か行きましたか？
- A「1982年に一度行っただけです。でも実際、また行かなければならないと思っています。」
- Q だれと行ったのですか？
- A「友達と。彼女はユダヤ人ではないですが、『イスラエルにおいで』とここによんで、彼女がフランスから旅行で来たときに、一緒に行きました。」
- Q ヤド・バ・シェムでそのときに感じたことを少し詳しく聞かせてもらえますか？
- A「何か新しい気持ちでした。・・・それから、そこで殺された人々に自分が重なる気持ち。そこに行く前は、怖さというのではないけど、そういう場所があるのはよくないというような気持ち・・・思い出さなくていいものを思い出させるという意味で・・・がありました。行った後は、そういう場所があるのはいいことだと思うようになりました。でも・・・決していい気持ちではありません。・・・6歳の時に、アンネ・フランクの映画をみたのを覚えています。その映画から、・・・それは、私にショアとは何かということを教えました。それはずっと前のことだけど、覚えています。すごく怖かった。小さい子供には恐ろしい話でした。」
- Q あなたは、全ての人にヤド・バ・シェムに行くことを勧めたいですか？
- A「はい。あのような恐ろしいことがかつてあったということを忘れないため、またあのようなことが起こらないためにもそこにいくのは重要だから。」
- Q あなたはどのアム（民族）に属していると思っていますか？
- A「ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）です。」
- Q では、どのウマ（国民）に属していると思っていますか？
- A「ウマ・イスラエリ（イスラエル国民）ではないかと・・・」
- Q ウマをどう定義しますか。
- A「バイト（家）のようなもの。たとえば、私はここにいて、自分の家にいると感じる、自分が住んでいる、生きている場所。」
- Q イスラエルは社会統合に成功していないという見方についてどう思いますか？
- A「成功していると思う。たとえば、90年以降ロシアから（も）たくさん移民がやってきているけど、彼等を受け入れて、短い時間によく統合していると思います。」
- Q ただ、ヒロニムやダティイム（宗教的ユダヤ人）、様々のエスニック集団、また、政治的にも実に多様な立場の人々がいて、一枚岩ではないと思いますが・・・

A「確かに、私もそれは感じるし、そういうことも聞くけれど、でも、・・・それがイスラエル社会です。どうしようもない。・・・やれることもあるけれど・・・」

Q ブラックパンサーの運動については知っていますか？

A「はい。」

Q この運動の背景には、当時、イスラエルのエスタブリッシュメントに対するミズラヒムの不満があったと言われていますが・・・

A「私は、その時期イスラエルにはいませんでした。おじがここに（当時）いて、少しその話しをしてくれました。当時は、（ミズラヒムとアシュケナジムに）差があったかもしれないけど、・・・今は・・・（ミズラヒムは）社会に統合して、前進したと思います。」

Q 今までイスラエルは長い間マパイ党の政権の時期がありましたね。イスラエルを引っばってきた支配的なイデオロギーである、社会主義とシオニズムの統合という理念は、今日衰退しているといわれていますが、そう思いますか？

A「色々なことがすべて変わってきていると思います。かつては、‘ハルツィム’（開拓者）の時期がありました。彼等はまさに、国をつくったといえます。彼等は自分たちがアレツ（イスラエル）を建国したと感じていたと思います。今は・・・もう国はすべてできあがったという感じです。・・・かつてはあらゆることを戦って勝ち取らなければなりません。今は・・・それは大きな問題ではありません。・・・今は・・・今の人はどうでもいいと思っています。・・・聞きたくないような問題があります。・・・例えば・・・領土問題でも、・・・どうでもいいという・・・静けささえ得られれば、全て与えてもいい（ママ）というような。・・・」

Q イエシュ・グブルという運動について聞いたことがありますか？

A「いいえ。それは何ですか」

Q 82年のレバノン戦争の後、予備役兵の間で始まった、一種の兵役拒否の運動です。かれらは、兵士としてレバノンで任務に就くことを拒否していますが、それについてどう思いますか？

A「・・・そこ（レバノン）には、問題があります。兵士がそこで負傷したり戦死したりするのを聞くのはつらいです。何のために戦死するのかと考えます。でも、・・・わからないけど、・・・私は‘結末’を引き受ける用意があります。もし、レバノンから撤退したとして、・・・何が起きるか・・・事態はもっと悪くなると思います。ヒズボラが北イスラエルの集住地区を攻撃してくることを恐れます。確かに、レバノンで何をするのか、何のために、というのもあるけど、・・・私は‘結末’を引き受ける用意があります。それは・・・安全保障のために・・・レバノンから撤退したら（相手は）それだけ近づいてくるから、そうならないために（軍の駐留は）必要なことだと思います。」

Q イスラエルの民主主義はユダヤ人のための民主主義で、イスラエルには、構造的な差別があるという見解があります。また、「安全保障」がその差別を維持するための口実になっているという見解もありますが、あなたは、そのことについて、どう思いますか？

A「こういえると思います。・・・差別があるとは思いません。アラブ人には、イスラエル人のような権利があるし、・・・たとえば、彼等は投票もできるし、クネセツ（国会）に代表者（国会議員）もいる。イスラエル人と同じ権利があります。・・・それに、兵役に就いていません。・・・占領地は・・・そこにいるのはアラブ・イスラエル人ではなく、パレスチナ人です。・・・私たちは彼等に石は投げません。でも彼等は・・・私の車には（窓に）プラスチックがつけてあります。石を投げられても割れないように。・・・占領地ではそういう車でないと走れません。・・・わかりますか？・・・我々は彼等に石を投げない。彼等は我々に石を投げてきます。・・・もしそれ（軍の駐留）が差別というなら・・・たぶんそうかも知れない。・・・わかりません。・・・でもそれは軍の管轄の問題です。・・・軍の駐留はあります。取り締まろうとしていますから。・・・でも、私はそれが差別とは思いません。・・・それは、・・・イスラエルは・・・目には見えないけど・・・要するに戦争だと、戦時状態だということです。・・・全ての店で（入るときに）鞆を調べなければならないこと、・・・そういうことだらけで、・・・何でも調べなくてはならないこと・・・まるで・・・テロとかそういうことを恐れて・・・」

Q あなたにとって今イスラエルの最大の問題は何だだと思いますか？

A「個人的には・・・イスラエル人のメンタリティに慣れるのが大変だということ。・・・ヨーロッパからきた者にとっては、(ここの)メンタリティは少し違います。そこ(ヨーロッパ)では個人的な問題には人はあまり立ち入ろうとしません。ここはそうではない。人のことに好奇心を示します。それに慣れることが必要になります。一般的には、まとまりがないこと。・・・人がお互いにいがみあっていること。・・・たとえば、ヒロニムとダティム・・・そういう問題がなかったら、外観がもっとよくなります。」

Q イスラエルにいて反ユダヤ主義を感じますか？

A「いいえ。・・・(笑)・・・フランスではたぶん。・・・でもイスラエルでは感じません。」

Q フランスでは感じたのですか？なにか例をあげてもらえますか？

A「ええ少し感じました。・・・14歳ぐらいの頃、誰かに『イエフディム メルフラッハ(ママ：汚いユダヤ人)』といわれた。それは、仲のいい友達でした。」

Q 彼はそれを、冗談で言ったのですか？

A「いや、冗談ではなかったです。・・・あるいは、『おまえは、ユダヤ人のように食べる。』とか『一人だけで食べている。』これは、『誰にも分け与えない』というニュアンスの表現ですが・・・というような言葉を投げつけられます。フランスにはこういう(差別的な)表現がたくさんあります。」

Q あなたは、ホロコストがまた起こるかもしれないということを考えたことがありますか？

A「起こらないことを願います。でも、・・・ヨーロッパをみると、たとえばフランスやオーストリアで過激な連中の運動が起きています。・・・だから起こりうるかもしれません。彼等がこれ以上大きな勢力にならないように、注意していなければなりません。」

Q そのためには、どうすることが重要だと思いますか？

A「ええ・・・国が連携してそういう行為を非難することが大切だと思います。」

Q それだけでは、十分とは言えないのでは？

A「十分ではないかもしれないけど、・・・一番いいのは、みんながアレツ(イスラエル)に移住すればいい(笑)。」

Q 十分に場所はありますか(笑)？

A「十分あると思いますよ。」

Q 祖国をおわれたパレスチナ人をどう思いますか？

A「いつの？」

Q これまでの、そういうパレスチナ人全部のことです。

A「でも、いつのですか？」

Q では、まず第一に、1948年の前に祖国を追われた人々について・・・

A「でも、でも、・・・でも、・・・では、説明します。私はこう思います。48年。これは、イスラエルができた年ですね。48年ですよ。・・・48年以前、・・・(領土を)分割した。いってみれば、みんなそれに合意したんです。『あなた達はそこ、私達はここ、平和にくらそう。』というふうに。彼等はそれに合意しなかった。・・・戦争になった。・・・戦争が始まった。・・・その後、様々な戦争が起こり、67年・・・そして・・・わかりますか？今彼等が望んでいるのは・・・今は難しい。・・・(国際社会の)合意があったのに、戦争があって、人が殺されて、・・・」

Q 世界中に多くのパレスチナ難民がいるわけですが、もし彼等がイスラエルやウエストバンクに帰ることを望んだとしたら、あなたはどう思いますか？

A「・・・今は状況が変わりました。状況は変わった。彼等のところに帰るのなら・・・大賛成とはいえないけど、でも、もし彼等がガザに帰りたいとかいうことなら(構いません)・・・」

Q エルサレムに家があった人もいたわけですが、・・・

A「ええ。でも、でも、・・・確かにそうだけど、・・・でも、戦争なんです。戦争があれば、状況はかわります。戦時中では。・・・フランスの東にアルザスロレーヌという地域があります。ここでは、ドイツ語が喋られています、フランスに属しています。フランスは一度もそこを返還しなかった。戦争とはそういうものです。・・・」

Q あなたは、バイト(家)という言葉から何を連想しますか？

A「バイト？・・・ええ、バイト・・・祖国かな。」

- Q 去年のクネセットの選挙ではリクードに投票したと答えられていますが、それはどうしてでしょうか？
- A 「わかりません。いつもリクードなので。フランスにいたときも、（リクードを支持していました。）たぶん、トヌアット・ノアル（青年運動）に参加していたからかな。」
- Q 何歳ぐらいから何年ぐらい参加していたのですか？
- A 「12歳から16歳ぐらいまでの3-4年です。」
- Q それは、珍しくないことなのですか。
- A 「いえ。そんなにみんなが参加するわけではありません。」
- Q その運動の影響があるのですか？
- A 「たぶん、・・・わからないけど。・・・でも、いつもベギン（注）1977-1983年の首相）のシンパでした。（ベギンが死んでから）リクードは随分変わったけど・・・」
- Q ベギンのどこが良かったのですか？
- A 「よくわからないけど、ベギンは私にとって独立の象徴のような存在でした。・・・私にとってベギンは、最も強い象徴で、・・・反英闘争や独立戦争の象徴です。もし、今最も重要な人物は誰かといわれれば、それはベギンだと思う。ベギンは私にとって最もカリスマ性のある人なのです。」
- Q では、ベギンにふさわしいキーワードは何だと思いますか？
- A 「カリスマ、・・・雄弁、・・・断固たる自信のある人・・・」
- Q 選挙のときは、誰に投票するか夫婦で話し合いますか？
- A 「はい。・・・でも、（投票する政党は）結局同じです。」
- Q これからも、ずっとリクードに投票すると思いますか？
- A 「・・・えー・・・私は、・・・ええ。・・・場合によりますが・・・何ともいえない。でもたぶんそうですね。」

I 2

生年月日：1954 -12-11生まれ (45歳)

出生地：アルジェリア コンスタンティン

性別：男

移住年：1983年 (移住時年齢29歳)

一緒に移住した家族：妻／息子

父親出生地：アルジェリア コンスタンティン

母親出生地：アルジェリア コンスタンティン

父方祖父出生地：チュニジア チュニス

父方祖母出生地：アルジェリア コンスタンティン

母方祖父出生地：アルジェリア コンスタンティン

母方祖母出生地：アルジェリア コンスタンティン

職業：システム アナライザー

妻の職業：保母

職歴：学生→教師→コンピュータ関連

父の職業：警察官

母の職業：主婦

最終学歴：短大 (技術系 2年)

これまでの居住市町村：エルサレム→エフラト (占領地内)

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「毎日ユダヤ人であることを感じている。私は、ダティ (宗教的ユダヤ人) であり、いつも私は民族のために祈っている。しかし、爆発 (テロ) があるときや反ユダヤ主義的な出来事がある時は、ユダヤ人への帰属意識はより大きくなる。」

Q2 日常の生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ (どんな時) ですか？

A NA

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

安息日の遵守／祭日／コシェル／性生活への宗教的規則／戒律 (ミツボット) による子供の教育

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。5年前。」

感想：行くたびに胸がいたむ。このようなひどいことを彼等がなぜできたのか理解しがたい。また、なぜ誰も止められなかったのか、理解し難い。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム (nation) : 同一の価値を持ち、将来にむけてその価値を守ることを望む人々の集団。

レオム (nationality) : 同じ国家に属する人々。

エズラフット (citizenship) : 国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「イスラエル国家における (イスラエル内および境界内の) 国家の全ての市民を守ること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A NA

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A モレデット

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A NA

- Q あなたは、29歳のときイスラエルに移住したわけですが、最初の職歴を学生と書かれていますが、これは、イスラエルに移住後のことですか？
- A 「こういうことです。私はアルジェリアで生まれ、7歳か8歳のころ、戦争があつて、私たち（家族）はみなフランスへ移住しました。私たちは、放り出された。何も持たずに、逃げたのです。鞆だけもつて。大変だった。戦争だったから。・・・脱出したのです。鞆だけもつて。私たちはフランスへ渡りました。マルセイユに。そこで新たな生活が始まった。何もかも新しい・・・1962年のことです。1962年から、私はフランスに両親らと住んでいたのです。」
- Q フランスでは何を学びましたか？
- A 「おお。・・・（笑）たくさんのこと。まず、電子工学、それから、医学の勉強もやり始め・・・これは大学で・・・そして、美術を独学で学んで、その後、美術教師になりました。」
- Q 医学の勉強は途中で止めたのですか？
- A 「はい。その後ここに来たのです。」
- Q どうして？
- A 「良くなかった。面白くなかったのです。・・・私にとっては、良くなかった。あまりうまくいかなかった。それで、アレツ（イスラエル）に来ることに決めました。最初に来たのは、1976年です。その後、また帰って、・・・ここアレツで勉強をして、また、行ったり来たり、（イスラエルに）帰って、勉強して・・・、（そういうことを）3回繰り返しました。最初に来たときは、キブツで働こうと思ってここに来たのです。宗教キブツで、ロッドのそばのベエロト・イツハクです。」
- Q そこでの生活はどうでしたか？
- A 「良かった。・・・最高。」
- Q どのぐらいの間、いたのですか？
- A 「半年。」
- Q どうしてそこを離れたのですか？
- A 「フランスに帰らなくてはならなかったから。それで、（フランスに）帰って、一年ちょっとしてから、78年に（イスラエルに）帰りました。そして、ヤハドット（ユダヤ教）の学校で一年勉強しました。その後、もう一度フランスに帰り、・・・家族の問題で帰らなくてはならなかったから・・・、そこで妻と知りあい、一緒に働きました。彼女も教師でした。3-4年同じ小学校で働いて、その後、アレツ（イスラエル）に来ることを決めました。それが、83年です。83年に、子供一人と（妻と）アレツに来たのです。」
- Q あなたのお父さんの職業は警察官とありますが、これはフランスでのことですか？
- A 「フランスでもそうですが、アルジェリアでも警察官でした。」
- Q フランスでは、どのようにして、フランスで職を探したのですか？
- A 「探したのではありません。彼は、アルジェリアでも警察官でした。アルジェリアは戦争のときフランスの植民地でした。それで、彼がフランスに移住した時点で、自動的にその仕事を得られたのです。」
- Q そのときのお父さんの年齢は？
- A 「・・・36歳か37歳です。」
- Q ご兄弟はおられますか？
- A 「いました。5人兄弟でした。2人は亡くなりました。兄が一人いたのですが、20年前、30歳の時に病気で死にました。姉もいましたが、40歳のときやはり病気で亡くなりました。今は3人です。私はここ（イスラエル）ですが、他の皆はそこ（フランス）にいます。ただ両親は、アレツに移住した移民でもあって、今は（フランスとイスラエルの）半々の生活です。」
- Q あなたはどうしてイスラエルに移住したのですか？
- A 「私はユダヤ人だから。ずっといつも移住したいと思ってきました。・・・でも、家族の問題などでなかなかできなかったのです。・・・バカロレアの前は。・・・両親はそこ（フランス）に留まっていて、彼等にはそこに住んでいる家族がいて、・・・私は、18歳になって、もうバカロレア試験が終わったので、移住したいと思いました。色々なことを始めたけど、うまくいきませんでした。76年に最初に（イスラエルに）来たのです。問題は色々ありましたが、ずっと移住したい気持ちがありました。そして、83年に妻と移住したのです。」
- Q （住む場所として）フランスではだめだったのですか？

A「良かったですよ。・・別に問題はなかった。でも、私の場所ではなかった。」

Q 両親は移住を望まなかったのですか？

A「彼等も望んでいました。彼等は今新しい移民になったところです。今イスラエルにいます。」

Q でも、（ご両親は）フランスにも住んでいるのでしょうか？

A「兄弟や姉妹がいますからね。彼等にも会いたいの、フランスにも残りたい・・。」

Q あなたのご兄弟は移住しないのですか？

A「いいえ。」

Q 彼等はフランスにいる方がいいと思っているのですか？

A「あのですね。・・彼等は、ここを知らない。旅行者としてしかここを知りません。でも、アレツで生活するということは、それだけではすみません。それに、彼等はそこ（フランス）に家族がいます。そういう状況のなかで、今移住するということはできません。今移住しようとはしていませんが、年金生活後を待っているという状況です。」

Q あなたは、世界の全てのユダヤ人はイスラエルに移住すべきだと、あるいは、移住することが望ましいと思いますか？

A「移住すべきです。」

Q どうしてですか？

A「どうしてかを説明しましょう。・・2000年間私たちはそこで生活してきました。」

Q そことは？

A「世界中の国々です。今我々は、我々の国で生きるチャンスがあるのです。・・例をあげてみましょう。誰かが世界のあちこちを旅したとします。長い間旅をして、・・彼は自分の場所が恋しくなる、・・・・・そうでしょう？それと同じことです。我々は外にいる時間がとても長かった。随分旅をしました。随分殺されもした。・・その時期が来たのです。ここで、家族を持ち、我々の子供を育て、・・我々のルーツ、我々の文化、・・やらなければならないことがたくさんあります。ですから、私は、みんながここにやってくるべき時期が来たと思うのです。」

Q 今、世界には多くのユダヤ人がいますが、みんながダティ（宗教的）という訳ではありませんね。むしろ多数はヒロニム（世俗的）です。もし、全てのユダヤ人がイスラエルに移住したら、ヒロニムの人口比が増えることになります。あなたご自身はダティですが、ヒロニムがそのように増えていくことはあなたにとって望ましいとは言えないのではないですか？

A「いいえ。そうではない。そういうことにはなりません。なぜか説明しましょう。・・物事を見る時には、『今あるもの』を見るのではなく、『その前にあるもの』と『後ろにあるもの』をみる訳です。それは、より広いものの見方です。・・まず第一に、ユダヤ民族は、常に、或る割合はヒロニムで、或る割合はダティでした。」

Q でも、古代はみんながダティだったとは思いませんか？

A「いいえ。皆がダティだったということは、一度としてなかった。トラー（注）ユダヤ教の律法）に、・・・・・我々の歴史にそう書いてあります。戒律をまもる人もいるが、まもらない人もいます。それで、何が起こったのでしょうか？それは、（古代のその人々が）ユダヤ人ではなかったという問題ではありません。ユダヤ人でした。ユダヤ民族のルーツである信仰をもっていました。ユダヤ人は、ダティイムでない人も、みんな同じ家族です。みんな同じことです。」

みんなユダヤ人。ダティイムもヒロニムもみんな同じ家族なのです。違いはない。ですから、みんながここにくる必要があるのです。さらに・・・・・今日イスラエルに移住してくる人はだんだんダティイムが増えてきています。ユダヤ人は以前よりダティイムになっています。今はそういう時代だといえます。フランスの知っている例でいうと、今日、次第にヤハドット（ユダヤ主義）に回帰する傾向がみられます。たんにユダヤ主義をとりいれるのではなく、やっていることを理解して、信じることを求めています。でも、狭い見ではなく、全てをみたいと思っている。数学や・・・・・物理も勉強して、女性の権利とか、・・・・・いろいろなことを学んで、・・・・・でもトラー（注）ユダヤ教の律法）も同時に学んでいる。・・・・・だんだんそうになっている。私は、ダティとして、ヒロニムがいることは構いません。どうしてか？・・・・・（彼等は）ユダヤ人だから。私は、ユダヤ人を求めるし、来て欲しい。どうしてなのか説明しましょう。それは大事な問題ですから。・・・・・外国に留まっていたユダヤ人は、一定の年月がたつて、ヤハドット（ユダヤ教の信仰）を失ってしまった。彼はユダヤ人として生きるのをやめ、ゴイ

(異教徒) や他の人々と結婚しユダヤ人として生きるのをやめてしまった。私にとって、それはよくないことです。私はユダヤ人が(ここにたくさん) いてほしい。たとえ、ヒロニムでも、ここにきてほしい。」

Q ユダヤ人でない人がイスラエルに来たいといったら、どうですか？

A 「・・・どうしてだめといえますか？私はアパルトヘイトをする気はない。・・・」

Q パレスチナ人ならどうですか？

A 「パレスチナ人は別です。状況が違う。パレスチナ人でも権利がある人は、いいです。アラブ人、彼等には権利があります。でも、ここには、全く別の問題があります。ここからは政治の問題です。私はアラブ人については言っていない。アラブ人にもここに権利があり、ユダヤ人にもここに権利があるのです。問題はまた別です。パレスチナ人がきて、我々の土地がほしいと言う。我々の宗教ではなく、土地がほしいと。我々にかわってここに居たいと。わかりますか？これは、別の問題です。政治の問題。

・・・彼等は(いるだけなら) いることができる。問題はありません。でも、私達に代わってというところが、だめなのです。私は、自分自身と共にありたい。私はアルジェリアからやってきました。アルジェリアでは、アラブ人と住んでいました。私は彼等を知っています。」

Q それは、いい関係でしたか？

A 「関係はありました。」

Q いい関係ではないと？

A 「いや。はじめは良かったです。アルジェリアのアラブ人は、ここと同じように、ずうっと問題はありませんでした。長い間一緒に生活することができていました。一緒に食べ、飲んで、遊んで、・・・私が小さかった頃は、一緒に遊んでいました。一緒に生活して問題はなかった。フランスにも(アラブ人は) たくさんいます。でも、政治的問題がある時には、(お互いに) 恐れ、『あなたは、いない。』となる。世界のどこでもそうです。何か問題がでてくると、まず最初にいないとされるのはユダヤ人です。」

Q 今の点については、また後で詳しくうかがいたいと思います。

ところで、あなたは、ヤド・バ・シェム(ホロコスト記念館)に5年ぐらい前に行かれています、
・・・

A 「ええ。何度かそこに行っています。それは、最後にいった時で、初めて行ったのは・・・25年位前で
す。」

Q そのときは誰と行ったのですか？

A 「友達と。まだ結婚前です。」

Q あなたは、そこを訪れることを人に勧めたいですか？

A 「行かなければなりません。誰でも。誰かということは重要じゃない。ダティイム、ヒロニム、ユダヤ人、ユダヤ人でない人、みんな行かなければなりません。それは、歴史の‘一頁’だから。・・・何が起こったのかを人が知る意味で重要なことです。」

Q 何のアム(民族)に属しているかときかれたら、あなたは(今までのお話しからして当然)ハ・アム・ハ・イエフディ(ユダヤ民族)と答えますよね・・・

A 「ええ。もちろん。」

Q では、どのウマ(国民)に属しているかと聞かれたら、どうですか？

A 「ええと・・・あなたの質問はいい質問ですが、ハ・アム・ハ・イエフディ(ユダヤ民族)に対する質問ではありません。こういうことです。ハ・アム・ハ・イエフディとハ・ウマ・ハ・イエフディは同じなのです。我々にとっては同じことです。あなた達がウマと呼んでいるものは、・・・例をあげましょう・・・アメリカでは、・・・アメリカには、アメリカがあります(ママ)。それがウマ・アルツォット・ハブリット(アメリカ国民)です。その中に、色々なところから人が来ています。日本から来ても、ポルトガルから来ても、イタリアからでも、やって来て、中に入って、アメリカ国民になろうとすれば、アメリカ人です。そして、そこで何世代かすれば、自分がイタリア人だったか、日本人だったかはもう忘れてしまう。でも、ハ・アム・ハ・イエフディはそうではないのです。アムと我々の意味・我々の文化の間は結びついていて、その関係は止みません。」

Q それでは、あなたはウマという概念をどう定義しますか？

A 「一般的には、同一のメディナ（国）に住む人々の集合でしょうか。・・・さて、我々にとっては、ウマとアムはほとんど同じことです。ユダヤ人の歴史では、ダティムであるかヒロニムであるかは関係ないのです。ユダヤ人の歴史では、・・・歴史ではね。ユダヤ人の歴史では、アムはイエフディ（ユダヤ）です。いつアムになったかといえば、出エジプトの時です。そのときからアムなのです。その前はそうではなかった。」

Q その前は何だったのですか？

A 「その前は・・・ヘブライ人。家族。・・・アブラハム、イツハク、ヤコブ、・・・家族です。・・・エジプトを脱出した後、アムになった。それは、単に家族というだけでなく、ずっとそれ以上のものです。そして、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）に入り、彼等はアムだったからこそエレッツ・イスラエルを授かった。つまりその時、アムのためのエレッツ（地）になったのです。」

Q そのエレッツの範囲（境界）はどこですか？

A 「・・・境界をえがくのは難しい。・・・2000年前の境界は、今の境界とは違います。・・・ここまでがそうだとしたとして、・・・もちろん私はそう言いたいけど、言ってみてもそうなるわけでもありません。政治の問題があるし、周りには住人もいるし、シリアやレバノンやたくさん問題があります。だから、『私は全部ほしい。』とはいえない。そういうことはありえません。それはユートピアです。」

Q もしそういう制約が何もないとしたら、境界はどこでしょうか？

A 「言うのは難しい。今日の状況では、言うのは難しい。・・・もし今の状況のなかで言うのなら、ヨルダン。それが境界です。・・・ヨルダン、ゴラン、シナイ、それが境界。それが、今、希望を伴って考えられる境界です。・・・（質問が）政治の話になってきましたね。政治のことは止めにして、続けましょう。・・・（笑）」

Q では・・・あなたはヘブライ語をどこで学んだのですか？

A 「最初は・・・私はダティなので、・・・フランスにいたときからヘブライ語を読んでいました。・・・ユダヤ人は、たいいてい、言葉をまもってきました。私たちは家では（ヘブライ語を）喋っていなかったけれど、勉強はしました。タルムード（注）ユダヤ人の宗教、生活、道徳に関する律法の集大成）の学校や家で、ヘブライ語を読む勉強をします。フランスには、・・・他の国でも、・・・今は、ヘブライ語を勉強するユダヤ人学校があります。でも、以前はユダヤ人学校はありませんでした。あったのは、補習校のような学校です。例えば、日曜日や木曜日は普通の勉強の他にヘブライ語も勉強し、他の日は、ゴイ（異教徒）の学校にいくというふうに。そうやって、ヘブライ語の読み方を勉強しました。トララーなどを読む勉強。3歳か4歳の時からです。その後、ここアレッツ（イスラエル）に来たとき、日常のヘブライ語を学びました。ウルパン（移民のためのヘブライ語学校）やキブツで。」

Q では、移住したときには、言葉の問題はそれほどなかったですか？

A 「問題はありました。私が学んだのは、本やトララーからでしたから、それらは、必ずしも日常のヘブライ語と同じではないからです。でも、理解することはできました。」

Q 質問表の質問8の「市民」というのは誰のことをさしていると思えばいいのでしょうか？

A 「あなたは、私が、アラブ人をいれていないと思っているのですか？・・・ここにも書いたように、軍の任務は、イスラエルの全ての市民をまもることなので、イスラエルに住んでいる全ての人のことで、当然アラブ人も入ります。アラブ人かドルーズかモスレムかということは関係ありません。ここに住みたい人は誰でも、まもらなければなりません。私は、軍がユダヤ人だけをまもりアラブ人をまもらなくていいなどとはいっていない。とんでもない。軍は国の中の全ての人をまもるものです。・・・国内の、境界内の（全ての人を）。テロリストや・・・境界内のそういう連中から・・・境界内つまり、ゴラン、ヨルダン・・・。」

Q 軍の評価のところは、答えられていませんが、これは答えたくないということでしょうか？

A 「何を聞こうとしたのですか。・・・軍は私の望むことを与えてくれているかということですか？」

Q だいたいそういうことです。

A 「今のことですか？・・・それほどでもない。・・・いや、やはりおおむねそうだと思います。私は政治

には満足していませんが、軍には満足しています。」

Q 政治にはどうして満足していないのですか？

A 「自分の望む方向に進んでいないからです。私は、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）に属しているものをまもることが大事なのです（が、政治はそう動いていません）。」

Q 昨年のクネセット（国会）選挙でモレデットを選んだ理由は何でしょうか？

A 「彼等は、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）に属しているものをまもらなければならないと考えているからです。」

Q でも、同じ様なことを考えている政党は他にもあると思いますが・・・

A 「ええ。・・・いや、失礼。いいえ。・・・ない。ありません。」

Q ないですか？

A 「あのですね・・・イスラエルには多くの政党があります。・・・私がそこからさがすのは、自分の考えに近い政党です。モレデットは、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）に属しているものは明け渡さないという点で私の考えに最も近いのです。土地や文化・・・なぜそれらが私にとって重要だかわかりますか？なぜかという、2000年私達は世界をさまよいました。今、私達はアダマ（土地）があります。もし今私がそれを失ったら、私は後戻りすることになる。それは、良くない。だから大事なのです。それに宗教的な理由もあります。・・・宗教的な理由もあります。」

Q モレデットは宗教政党ではないのに、宗教をまもる政党よりモレデットの方がいいということですか？

A 「ええ、まあそういうことです。」

Q 選挙のときに、ご夫婦で誰に投票するかについて話し合われますか？

A 「いいえ。妻は自分がいたい人に投票しますよ。女性の権利があるでしょ（笑）。」

Q でも、二人とも（結果として）同じような政党にいられていると思いますか。

A 「だいたいそうです。」

Q やはり、モレデットですか？

A 「そうかもしれない。・・・前前は国家宗教党だったみたいです。」

Q あなたにとって、ユダヤ・アイデンティティとイスラエル人アイデンティティの二つの関係はどのようなものでしょうか？どちらかが、どちらかより重要というようなことはありますか？

A 「私にとって二つは分けられません。でも、私はユダヤ人であり、ハ・アム・ハ・イエフディに属しているということが私にとってはより重要です。でも、我々の書物のなかでは、・・・ヤハドットの中では、アレツとトラーとアムを分けることはできません。三つは一緒なのです。分けることはできません。」

Q お祈りをするとき、あなたは何を考えますか？

A 「たくさんのこと。・・・祈りのときは、概して、何かについて考えるということは（ユダヤ教では）禁じられています。」

Q そう本で読みました。

A 「祈りのときには、私は（例えば）仕事のことについて考えることはできません。それは良くないことです。集中して、私と神との関係のことを思わなければなりません。その関係を。」

Q でも、そのとき、頭のなかに浮かんでくるものはどういうものですか。祈りのときに頭のなかに何を思うのか、とても興味があります。

【録音を中断し（本人の希望）、インタビュー数分続行】

Q イスラエルは社会統合に成功していないという分析がありますが、そのことについてどう思いますか？

A 「私の考えでは、それは間違いです。説明しますと、・・・私は、世界にこれほど様々に異なる人々の種類がいる国を他に知りません。この異なった全ての種類の人々が住んでいる状況を考えると、（相対的にみて）まず成功している類にはいると思います。（これは）難しいことです。文化は、・・・ユダヤ人は世界中からきていて、彼等は世界のいろいろなところにいたので、彼等には（その）文化があり

ました。ロシアからの文化、日本からの文化、インド、アメリカ、フランスからの文化、これらを全部統合し、みんな一緒にこれら全部と生活することは、簡単ではありません。でも、私達は、成功しています。まだやらなければならないことはあるけれども・・・まだやらなければならないことはありますが、でも成功しています。」

Q あなたからみて、今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A 「国の存続です。・・・説明するとういうことです。アレツは私にとって・・・私はダティなので・・・私にとってアレツは、ハ・アム・ハ・イエフディに帰属しているものです。もし、もし、・・・（そういう状況が）そこなわれるとすると、それは私にとって辛い。・・・だから、（そういう状況を）維持していかなければなりません。ここアレツで、・・・我々の文化、我々のヤハドット、われわれのアムをまもり維持していかなければならない。・・・私は外国からやってきました。だから、そこ（外国）がどういうものか知っています。私は、ここがそこ（外国）のようになってほしくない。なぜか。なぜなら、もしここがそこのようになれば、ハ・アム・ハ・イエフディは消滅するからです。それは、私にとって辛いことです。アムの価値をまもることは、大事なことです。（イスラエルに）他に問題がないということではないですが、あとの問題は、何とかなる問題です。」

Q では、イスラエルがこれから政治的な点でどのような方向に進むことを望みますか？

A 「みんなと同じように、平和がくること。私は平和がほしい。私は平和がほしい。でも、あくまでも代償を払わない形で。・・・私は平和がほしい。でも、私のための平和、私の子供達のための平和、そして私のアレツのための平和がほしい。私は、（別に誰かを嫌っているわけではなく）誰とも問題はありません。誰でも、人は人と一緒に生活することはできます。しかし、我々は我々がユダヤ人だという問題があります。ここアレツで、我々が忘れていることがあります。それは、今日まで、彼等は我々がただユダヤ人であるという理由のために殺したいと思っていることです。」

Q それは、どこの話ですか。

A 「どこでも。・・・ここ（イスラエル）でもです。」

Q ここでもですか？

A 「ただユダヤ人であるという理由のためにね。・・・問題は、・・・パレスチナ人とイスラエル人（それ自体）には問題はありません。問題が最初からあるわけではないのです。誰でも、人は人と一緒に生活することはできますが、一つだけ条件があります。もし、彼等が私を殺したいと思っていないならという条件です。」

Q あなたは、彼等（パレスチナ人）があなたを殺したいと思っていると思うのですか？

A 「みんなとは言わない。一般化はしていません。でも、そう思っている人はたくさんいます。・・・例をあげましょう。私は、ダティです。ユダヤ人の生活をしている。ダティイムであって、ヒロニムではない。ヒロニムには私は興味がありません。・・・学校で、我々は、我々の子供達にアラブ人を殺すことを教えていません。・・・教えていない。一方彼等は、彼等の子供達に我々を殺すことを教えているのです。」

Q 本当ですか？ どうしてそれがわかるのですか？

A 「もちろん本当です。どうしてそれがわかるかを説明しましょう。私は知っているからです。私がなぜ知っているかというと、・・・私の妻は学校で教えています。ユダヤ人の学校ではなく、ゴイ（異教徒）の学校、パレスチナ人の学校で教えているのです。彼女はパレスチナ人に教えています。」

Q パレスチナ人に教えている？

A 「ええ。」

Q あなたの奥さんが？

A 「はい。」

【録音を中断し（本人の希望）、インタビュー数分続行】

Q あなたは、将来またショアが起こるかもしれないと思いますか？

A 「起こらないことを願う。・・・それについては考えたくないです。起こらないことを願います。・・・だって、もし起こったなら、・・・いや・・・起こることはないでしょう。・・・残念なことです（から）」

I 3

生年月日：1945 -5-8生まれ（54歳）
出生地：モロッコ マズガン
性別：男
移住年：1955（移住時年齢10歳）
一緒に移住した家族：父／母／兄弟／姉妹
父親出生地：モロッコ アズィムール
母親出生地：モロッコ マズガン
父方祖父出生地：モロッコ NA
父方祖母出生地：モロッコ NA
母方祖父出生地：モロッコ マルケシュ
母方祖母出生地：モロッコ NA
職業：大蔵省会計局員
妻の職業：主婦
職歴：兵士
父の職業：自営業
母の職業：主婦
最終学歴：技術専門学校（2年？）
これまでの居住市町村：エルサレム

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「ヘブライ語の言語から。ユダヤ人と歴史的なつながりのある場所と出会う時。また伝統を守っている自分の存在から。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「（イスラエルの）安全、経済状況、毎日の出来事が気になるという事実から。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「わからない。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

トフィリン（祈りのときに使う小箱）を身につける／シャバット（安息日）や祭日の祈り／全ての伝統

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。5年前。」

感想：とても辛かった。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム（nation）：特定の領土・国家と結び付き、同一の言語を話し、同一の政府の下にある人々または集団。

レオム（nationality）：同一の民族（アム）への帰属。（同一の国民（ウマ）の人々の一部）

エズラフット（citizenship）：国家によって与えられる義務を果たさなくてはならず、また国家によって与えられる権利を持つ人。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国家の安全を守り、それを保障すること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「政府の政策に従い、国家の安全保障と国境を守ることに成功していることは疑いが無い。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 一つのイスラエル（労働党）

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A その前は、外国にいたので覚えていない。

Q あなたのお父さんのモロッコでのお仕事は自営業だったとありますが、どのようなことをされていたのでしょうか？

A 「小さな店をやっていて、・・・ボタン糸などを売っていました。」

Q あなたは、ご両親と一緒に（イスラエルに）移住したのですか？

A 「はい。」

Q 移住後、お父さんの仕事は変わりましたか？

A 「もちろん。・・・移住後は、エルサレム市の清掃局の仕事をして働きました。」

Q ずっとですか。

A 「はい。」

Q あなたのご家族がイスラエルに移住することに決めた理由や動機を聞かせていただけますか？

A 「シオニストだからです。」

Q あなたは、そのとき9歳か10歳でしたね？モロッコにいたころのことは覚えておられますか？

A 「少し。学校のことなど。・・・」

Q ご両親が移住を決意されたのはいつごろですか？

A 「シオニスト機関からの勧めがあり、イスラエルから派遣された人が来てそこで移住の段どりが進められたようです。彼等は、移住を人に説得されるまでもなかったようです。」

Q モロッコには、今も少なくないユダヤ人の人が住んでいますね？

A 「相対的にみたら、少ないです。・・・たぶん・・・カサブランカに7-8000人ぐらいだと思います。」

Q イスラエルに移住後は、ずっとエルサレムに住んでいるのですか？

A 「何か月間かは、仮設住宅にいました。50年代は、メディナ（イスラエル）は豊かではありませんでした。貧しかったです。・・・町も小さかった。・・・そこに何か月かいて、・・・私の両親は、（モロッコから持参した）あらゆる宝石類やじゅうたんなどを売って、エルサレムに二部屋を買いました。・・・それだけです。・・・とてもつつましい生活でした。」

Q あなたは、ご自分をシオニストと言われますが、それはどういう意味でそう思うのですか？

A 「まず第一に、私は伝統をまもろうとする人間です。そして、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）と私との関係は、ヤハドット（ユダヤ主義）の道のなかで伝統をまもっているということです。私は、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）は、私が生きなければならない場所として、自然な場所であり、国であると思っています。それが、私の（ここの）つながりであり、それはまたハ・アム・ハ・イエフディの歴史です。」

Q そういう意識をご両親と比較してみると、あなたとご両親ではどちらがそれが強いのでしょうか、あるいは同じぐらいなのでしょう。

A 「私の両親の場合は、（イスラエルとのつながりが）宗教的なところからきているといえます。私はここ（イスラエル）ですでに40年過ごしてきたので、（両親とは違う）たくさんことがあります。・・・私はここで、軍隊にも行っただけで、わたしのつながりは、ずっと深いものです。私には、ヤハドットや伝統の中からのつながり、生活の文化、教育のつながりが加わっています。40年の影響は大きいです。」

Q よくわかりませんが、つまり、あなたの方がご両親よりも強いということですか？

A 「もちろん。・・・もちろん。」

Q 宗教、いや、伝統をまもるという点で。・・・

A 「いや、・・・私達がここに家族で移住した原因は、（両親が）シオニストだったからなわけですが、・・・イデオロギーを信じて・・・今日、我々子供の（イスラエルとの）つながりは、ずっとずっと強いということです。40年ここに住んで、いろいろなことをしてきた後では。」

Q ご両親自身もまた、移住をのぞんだわけですね。

A 「もちろん、もちろんです。もちろん。両親から始まったのです。・・・（彼等は）信じて、・・・シオニストで・・・イデオロギー（を持っていた）・・・エレッツ・イスラエル・・・『来年はエルサレムで。』・・・」

Q あなたは、ヘブライ語を最初にどこで勉強したのですか？

- A「アリアンスで少し勉強しました。外国で。セフェル・アリアンスという学校です。」
- Q それは、どういう学校ですか？
- A「『全てのイスラエルの友』という学校です。」
- Q どこにあるのですか？
- A「モロッコに。・・（他にも）世界の色々なところにあります。そこで、少しヘブライ語を学び始めました。」
- Q 何歳ぐらいのときから始めたのですか？
- A「・・まず、外国での学校の後、さっき言ったアリアンスというユダヤ人の学校にいて、ヘブライ語を勉強しました。また、我々は、外国では放課後4時からユダヤ神学校で、トラー（注）ユダヤ教の律法）や戒律をラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）から教えてもらうのです。ですから、ヘブライ語は、流暢に話せるとまではいかないにしても、未知の言葉ではないのです。・・そして、ここに来て、・・小さい子供だったので、身につくのが早かった。」
- Q ということは、移住される前にもうわかっていたということですね。
- A「もちろん。ある程度わかっていました。」
- Q 質問票のなかで、二つのアイデンティティについて伺っていますが、あなたの中でのこの二つの関係についてお聞きしたいのですが。
- A「ユダヤ人アイデンティティはイスラエル人アイデンティティの中にあるものであり、二つは切り離せないものです。」
- Q ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に行かれたのは、5年前と書かれている一度だけですか？
- A「これは、一番最後に行ったときで、今まで少なくとも三回ぐらい行きました。5年前最後に行ったのは、そのときフランスから親戚がきていて、彼等を連れて行ったのです。」
- Q 最初に行かれたとき、その訪問のあと何か考え方に変化があったことはありますか？
- A「何が起こったかという歴史は、もちろん知っていたし、学んでもいました。そこを訪れたことは、聞いていたことに形を与えるものでした。実際に写真で、目でみたということは、子供のときにショアについて聞いていたことを強烈にしました。・・もし当時我々に国があったら、ショアは起こらなかったかもしれないという思いを強くしました。・・つまり言い換えると、今日我々が安全だと思えるのは、我々は国があり、軍隊があるからで、だから、誰も我々をかつてのように攻撃できないのだと思いました。今、国や軍隊があつて本当に良かったという思いを強くしました。ああいう場所（ヤド・バ・シェムのような）から出てくると、そういう思いが強くなるものです。・・つい一年ぐらい前に、私の末の娘がポーランドに行きました。それは、当地の強制収容所跡を訪ねるという教育目的の、学校の研修旅行で行ったのですが、彼女もとても辛い印象を受けてきたようです。」
- Q 娘さんは何歳ですか？
- A「今は軍隊ですが、ポーランドに行ったのは、一年半ぐらい前です。そのときは高校生でした。彼女は（旅行から帰ってその様子を）話してくれて、ずっと泣いていました。」
- Q あなたは、ヤド・バ・シェムを訪れることを人に勧めたいですか？
- A「おお。・・それはもちろん。『百聞は一見にしかず。』です。・・もちろんです。」
- Q みんなにですか？
- A「すべての若者というには無理かもしれないが、ああいう場所を多くの若者が訪れるべきです。起こったことを忘れないために。」
- Q あなたにとって、アム（民族）とウマ（国民）という二つの言葉には違いがありますか？
- A「・・・・・もちろんあります。時々、我々の場合、もし、ハ・アム・ハ・イエフディの帰属ということとを、伝統、シオニズム、イデオロギー、今まで読んだものすべてのの中から考えてみるならば、・・アムとは、我々が持つ言語、同一の政府、領土などの中にあることで、レオムとは（注）質問ではウマとの違いを聞いている）、ユダヤ人でない人も来ることができるし、・・レオム（民族）に属するということは、市民と言ってもいい。イスラエル市民はユダヤ人とは限りません。・・イスラエル国の市民は、その人の帰属はシオニストのものからではないとしても、来ることができます。・・ここに住むことが気にいるのであれば、彼はアレツ（イスラエル）にいる権利と義務を得ます。ちょうど、他の国で市民として住んでいるユダヤ人がいるように。」

Q あなたはダティ（宗教的ユダヤ人）ですか？

A 「マソラティ（伝統的ユダヤ人）です。」

Q あなたにとって、いや、イスラエルにとって、宗教は大きな問題ですか？

A 「もし、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）について語るなら、ヤハドット（ユダヤ教）は、世界の全てのユダヤ人をアム（民族）としてつなぎ、維持させているものです。2000年の間エレッツ・イスラエルはなかったですけども。・・・つまり、世界のあらゆるところにユダヤ人は住んでいましたが、彼等をつないできたものがヤハドットであり、宗教、伝統、アム・ハ・イエフディの歴史です。もちろん、それは、エレッツ・イスラエルにみんなが住むようになった時に、もっと強いものになります。だから、つながりがあります。それは、ユダヤ人でないとエレッツ・イスラエルの市民になれないということではありません。（ユダヤ人でなくとも）イスラエル市民です。・・・アメリカのように。ユダヤ人市民はアメリカの市民ですから。フランスのユダヤ人はフランス市民です。彼らは宗教をまもっていて・・・でもフランス市民です。」

Q イスラエルの社会的統合の問題について、これまでの社会学の色々な分析がありますが、あなたは、このことについてどう思いますか？

A 「かつて言われた、スファラディムとアシュケナジムの間の統合の問題のことですか？」

Q はい。それに、ヒロニム（世俗の人々）とダティイム（宗教的人々）の問題についても・・・

A 「イスラエルは世界のあらゆるところから来た人々でできている国だということを忘れないでください。発展した国から来た人もいれば、そうでない人もいます。メンタリティも文化も言葉も様々です。シオニストだからきたという、イデオロギーで来た人もいれば、ここに住むのがいいという理由でくる人もいます。すべてが混ざっている。・・・でも、50年たち、・・・今日、イスラエル人としてのアイデンティティのようなものが育ち始めています。・・・子供達は教育や軍隊などで・・・まだ（統合は）終わってはいませんが、でも期待がもてます。あと一、二世代もたてば、（この問題を）忘れる時がくると思います。・・・私は、いずれ（こういう 様々な背景の人々が）溶けあうと思っています。でも、イスラエルが様々な人々で成り立っているという状況はずっと変わらないでしょう。大切なのは、ヒロニムとダティイムのバランスを保たなければならないということです。（バランスを）見つけなくてはなりません。つまり、法律の文脈で。・・・それは、我々が民主国家を守ろうとする時、とても大切なことです。誰でも自分のやりたいことを・・・あくまでも法にかなったやり方ですが・・・やるときは、それをやる前に、他の人に問題を起こさないということです。」

Q ミズラヒムの人々は、アシュケナジムによって支配されてきたこれまでのイスラエルの在り方に不満をもっているという分析がありますが、あなたはそれに同意されますか？

A 「今はそれは少ないと思いますが、まだあるともいえます。・・・でも時間がたてば、だんだんバランスがとれていくと思います。」

Q それほど深刻な問題ではないということですか？

A 「100%完全にとはいきません。・・・でも、改善がみられることも確かです。・・・ずいぶん状況は良くなっています。個別にみればまだ問題もあるかもしれません。・・・でもこれも、時間がたてば、20年か25年もすれば解決されていくでしょう。」

Q では次に、イスラエルの民主主義ということについて、あなたはどう評価されますか？

A 「民主主義体制という点では、我々は、疑いなく、非常に民主的な国家です。疑いなく、・・・すべてが自由で、近代的で、・・・世界でも進んでいる位置にあると思います。」

Q しかし、失礼ですが、イスラエルの民主主義はユダヤ人にとっての民主主義であって制度に構造化された差別があるという意見がありますが、そのことには同意されますか？

A 「宗教に関することでは、民主主義体制がそれほどうまくいっていないということは、あるかもしれません。たとえば、ダティイムの人々の間では、その法や規則において民主主義が一般的とはいえません。だから、イスラエルでは長い間新しい憲法をつくるべきかどうかという論議があるのです。まだできていませんが。」

Q あなたは憲法をイスラエルでも制定すべきだと思いますか？

【本人の希望により、録音中断のままインタビュー続行（数分）】

Q あなたにとって、今イスラエルで最も大きな問題は何ですか？

A 「最も大きな問題は、この、ヒロニムとダティイムの問題です。それから、豊かな人と貧しい人との差がひろがっていることです。」

Q その差はいつからひろがっていると思いますか。

A 「イスラエルの生活レベルの程度が上がってから、その差はひろがっています。」

Q その差を縮めるにはどうすればよいのでしょうか？

A 「豊かな人と貧しい人との差がひろがらないような経済のバランスを見つけなければなりません。」

Q どのようにしてですか？

A 「経済政策が必要です。私は、経済政策の専門家ではないが、そういう政策はあると思います。」

Q パレスチナ問題におけるイスラエルの政治的展望について、どう思っておられますか？

A 「妥協に至ることが必要です。人生は妥協です。妥協して、平和に至ることです。」

Q それは領土のことをいっているのですか？

A 「それもあります。・・・おそらく・・・」

Q 領土だけではないということですか？

A 「・・・できることを何か。でも、あくまでも国の安全が保障されて、ということがあってのことです
が・・・」

Q イスラエルとシリアやヨルダンなど周辺国との関係についてはどうですか？

A 「開かれた関係が必要です。ヨーロッパのような。・・・開かれていて、平和で、良き隣人というよう
な。あちらからも入ってきて、こちらからも入って行って、お互いに行き来のある、・・・そういう関係
にしなければなりません。」

Q そういう関係をつくる上で、今欠けているものは何だと思いますか？

A 「欠けているもの？」

Q はい。

A 「平和が欠けている。」

Q どうして平和が欠けていると思いますか？

A 「平和が欠けている理由？」

Q はい。

A 「なぜ平和が欠けているかはわかりません。言えるのは、平和になるよう努力することです。」

Q なぜあなたは紛争がこう・・・

A 「紛争は、・・・あなたはアラブ人とユダヤ人は‘いとこどうし’だということを知ってますよね。結
局土地をめぐる紛争なんです。彼等は『我々のものだ。』と言い、我々も『我々のものだ。』と言っ
ている。だから、妥協しなければなりません。」

Q 『我々のものだ。』といっているアラブ人の中には、実際にここに彼等の家があった人達もいるわけ
ですが、そういう人々のことについてはどう思いますか？

A 「解決を見つけなければなりません。みんなにあった解決を見つけることです。」

Q ここに家があったパレスチナ難民がもとの彼等の家に帰りたいと望んだとしたら、どうでしょうか？

A 「・・・・・・私は、調和のとれた形が必要だとは思いません。・・・解決を見つけなければならま
せん。適当なバランスを見つけることです。」

Q 解決を見つけなければならぬのは明らかですが、どうやってですか？

A 「もしエレッツ・イスラエルを大きくできるなら、それはいいことだったでしょう。でもそれは不可能で
す。今あるものしかないのですから。・・・どういう解決？・・・解決は・・・妥協することです。」

Q 理論的にはそうですが、土地は土地であり、・・・妥協といっても難しいのでは？・・・

A 「そうです。・・・難しい。」

Q あなたはバイト（家）という言葉から何を連想しますか？

A 「そうですね・・・・・・もしバイトという言葉を読むのなら、アラブ諸国にいたたくさんのユダヤ人もエ
レッツ・イスラエルに移住しました。彼等のバイト（家）をそこに残して。その家には今誰が住んでいま
すか？

アラブ人です。・・我々は、全てを残してここに來たのです。」

Q 将来シヨアの可能性がまたあるかと思いますが？

A 「そのことは考えたくありません。・・そのことは考えたくないです。・・・・・そうということが起こらないために、我々は我々の国を、小さな国を、たった一つの・・我々には他に（国は）ないのですから・・まもらなくてはならないといえるのです。・・そしてその国は強くなくてはなりません。・・強い軍隊で、そうということが二度と起こらないように。・・そのことは考えたくないです。それは災禍です。起こってはいけないことです。ユダヤ人だけでなくどの人々にも。・・ユダヤ人だけでなく、世界の他のどの民族にも起こってはいけないことです。それは、とても辛いことです。・・・・・我々の担保は、エレッツ・イスラエルだけであり、それが、生きていて、存在していて、とても強いので、だから、ハ・アム・ハ・イエフディに対してかつて起こったことが、もうこれからは起こらないということなのです。もう二度とそういうことは起こしてはいけません。そして、全ての子供たちは、シヨアの歴史を学び、知り、忘れないように覚えていなければなりません。」

Q 選挙の時にはどういう観点から政党を選んでいきますか？

A 「平和、経済などの面で、新しい良い期待が持てる政党です。」

Q 調査票のなかで、今までに投票した政党のことを『覚えていない。』と書かれていますが、これは・・・？

A 「そのときは、たまたま旅行に出ていたときです。」

Q あなたは、だいたい「一つのイスラエル」（労働党）を支持してきたのですか？

A 「私の家族はみんな「一つのイスラエル」を選んでいきます。」

Q いつもですか？

A 「時々違うときもあったけど、だいたいそうです。」

Q （外国に旅行している時は別にすると）イスラエルにいる時は、だいたい選挙に行きますか？

A 「もちろんです。でも、次にどの政党を選ぶかは、彼等がその間何をしたかによって決まります。」

Q その結果次第だということですね。

A 「もちろん。経済状況が良くなったか、貧しい人と豊かな人との格差はどうなったか、平和のチャンスに近づいているか・・そういうことの結果として選ぶのです。」

I 4

生年月日：1955-7-24生まれ（44歳）

出生地：ロシア カザン

性別：女

移住年：1990年（移住時年齢34歳）

一緒に移住した家族：夫、息子、娘、母、父、夫の母

父親出生地：白ロシア ゴメル

母親出生地：ウクライナ キエフ

父方祖父出生地：白ロシア ゴメル

父方祖母出生地：白ロシア ゴメル

母方祖父出生地：ウクライナ ラドモシュ

母方祖母出生地：ウクライナ ジトミュール

職業：コンピュータプログラマー

夫の職業：アルミ工場のシフトマネージャー（ロシアでは自動車工場の技師）

職歴：コンピュータプログラマーのための養成学校の教師（12年間）→コンピュータプログラマー

父の職業：ラジオ技師

母の職業：エコノミスト

最終学歴：カザン大学

これまでの居住市町村：ギブアト・ゼエブ（占領地）（1年弱）→アシュケロン（2年）→エルサレム（7年）

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのような時にそう感じますか？

A 「いつも。特に、外国のユダヤ人と話す機会の時。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どのような時）ですか？

A 「外国にいる時、テロ爆弾のおこった後、湾岸戦争の時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「いいえ。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「いいえ。それを見るのが恐ろしいので。」

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム（nation）：共通の歴史と共通の願望を持つ人々の集団。

レオム（nationality）：同じ。

エズラフット（citizenship）：国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「イスラエルの国の防衛。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「目的を果たしていると思う。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 一つのイスラエル（労働党）

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A 労働党

- Q イスラエルに移住された最大の動機は何ですか？
- A 「シオニストだからではありません。ただイスラエルに来たかった。とにかくロシアを出たかったのです。もし、私が夢にみるほどイスラエルに来たかったと言われれば、そうではありません。」
- Q ロシアは良くなかったのですか？
- A 「良くなかったというわけではないですが、何か良くないことが起こるとあそこではいつもユダヤ人のせいにされていました。・・・それで（ロシアを）去らなくてはという気になりました。そしてイスラエルに来たのです。」
- Q 何かそのための組織的な手配はありましたか？
- A 「イスラエル領事館にでむいて、・・・ロシアにも（出国移住のための）機関があるのですが、そこに書類をだして出国許可をもらうのに半年以上待ちました。それほど簡単には事は進みませんでした。1989年から手続きを始めて、イスラエルの親戚に招聘状を送ってくれるよう依頼し、それを受け取るまで一年位かかり、それから出国許可証をもらって、それから、チケットを手配して・・・今はもっと速く進むようですが、・・・当時は出国許可がでるのに半年待って、そしてヴィザをとって・・・時間がかかりました。」
- Q 移住前にここに親戚や知人がおられたのですか？
- A 「いところがいました。ギブアット・ゼエブに。」
- Q 彼女はいつ移住したのですか？
- A 「私達の17年前だと思います。70年代です。彼等はシオニストでした。」
- Q 移住されるときは、そういう親戚がおられたのですね。
- A 「はい。（移住時には）色々助けてくれました。」
- Q その他には知人や親類の方は？
- A 「一人もいませんでした。」
- Q 一人もですか？
- A 「一人もです。でも、みんな私達によくしてくれました。色々と助けてくれて。・・・」
- Q ギブアット・ゼエブは移民の人達のための場所ですか？
- A 「ギブアット・ゼエブがですか？。いえ。冗談じゃない。すごく（値段の）高いところで、素敵なおところですよ。瀟洒なアパートが立ち並ぶ素敵なおところです。エルサレムから車で二十分位のところです。・・・彼女（いそこ）はそこにあるアパートを貸してくれて、・・・国から援助金もありました。私達は大家族だったので、・・・」
- Q （ご家族の中で）移住を一番望んだのは誰ですか？
- A 「夫です。夫が一番望みました。ロシアを出てイスラエルに行かなければと。・・・そのうち私も影響されて・・・」
- Q ご両親は？
- A 「・・・同意した、というところですよ。」
- Q ご両親には、年齢的に考えても新しい場所で新しい生活を始めることは少し大変だったからということでしょうか？
- A 「ええ、まあそういうことですが、・・・私の母は、（この決意を）実行しなければという考えで、『あなた達がそうしたいなら、私達もそうしたい。』と言いました。」
- Q あなたは、ヘブライ語を移住の後に始めたのですか？
- A 「はい。・・・（でも）A,B,Cは、ロシアで学びました。でも（イスラエルに来た当時は）何もわかりませんでした。」
- Q ヘブライ語を教える学校がロシアにあるのですか？
- A 「今はあります。当時はほとんどありませんでした。ただ、偶然ロシア語で説明してあるヘブライ語の本を見つけたので、その本を使って自分で勉強しました。・・・今は当時と状況が違うので今ロシアから来る人は、ヘブライ語がよくできます。」
- Q どのくらい経って言葉の問題がなくなりましたか？
- A 「ヘブライ語で冗談をいえるようになったころです。」
- Q それは、どのくらい経ってからですか？
- A 「場合によります。イスラエルに来て半年か七カ月くらいしたころ、ここで仕事を始めました。始めは、人が何を言っているのか、何を言われているのかなかなか判らなくて大変でした。でも、みんな辛抱強く、私が文を言い終わるまで待ってくれました。そうこうしているうちに、私のヘブライ語はどんど

ん上達しました。というのも、ここ（イスラエル）にはウルパン（注）移民のためのヘブライ語学校）があるので、仕事をしながら週一回そこに通ってそれはとても役に立ちました。その他にも、よくヘブライ語で人と話しをしたので、それも役に立ちました。・・・そういうわけで、一年もするとほとんど会話では問題がなくなりました。でも、新聞を読んだり、テレビをみたりするのにはもう少し時間がかかりました。今はもう新聞もテレビのニュースをきくのも何の問題もありません。」

Q 今、家ではヘブライ語を使われているのですか？

A 「誰と話すかによります。夫とは、ロシア語だけです。彼は私ほどヘブライ語ができません。というのも、彼の職場は、人との会話がそもそもあまりないところですから。その他に、その労働者は多くはアラブ人なので、彼等のヘブライ語は間違っていたりするからです。」

Q その場所はエルサレムですか？

A 「エルサレムのそばです。・・・マアレイ・アドミム（注）入植地）のそば。（エルサレムから）車で二十分位のところ。・・・ですから、夫とはロシア語で、息子とは一息子はヘブライ語がよくできますがーロシア語で話すことが多いです。息子は11歳で移住したので彼はロシア語もよくできるのです。実際、彼は二つの言葉がほとんど同じ位良くできます。加えて、英語もよくできます。彼は今テクニオン（イスラエルの工科大学）で学んでいます。・・・娘とは、・・・娘はヘブライ語しかできません。娘が移住したのは二歳半の時だったので、彼女はヘブライ語だけで話そうとしました。私は彼女がロシア語を忘れないでほしいと思いました。・・・私がロシア語で話しかけても、彼女はヘブライ語で答えるという風でした。彼女はロシア語が（会話は）少しわかりますが、少しはしゃべれますが書くことは全くできません。読むことは少しはできますが、彼女には難しいし興味もないらしく、使おうとはしません。（ロシア語もできればいいのに）残念なことです。」

Q ご両親とはロシア語ですか？

A 「父はなくなりました。母とはロシア語です。母は少しはヘブライ語ができ、郵便局や病院などの用事はできますが。・・・」

Q 質問票の中の、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティについてですが、この二つのアイデンティティはあなたの中でお互いにどのような関係にあるのでしょうか？

A 「ユダヤ人だということは、いつも感じていました。ロシアで。・・・イスラエルについてはあまり考えたことはありませんでした。でも、ユダヤ人だということは、一度も忘れたことはなかったです。・・・たとえ忘れたいと思っても、（ロシアでは）忘れさせてくれませんでした。・・・それに忘れたいとも思いませんでした。」

Q あなたはダティヤ（宗教的ユダヤ人）ではないですね？

A 「全くダティヤではありません。」

Q あなたのユダヤ人アイデンティティはどこからくるものでしょうか？

A 「まず第一に、私の考えは、イスラエルに来てから全く変わりました。ユダヤ人のヤハドット（ユダヤ主義）に関して。ここで私がみるものは、私が描いていたユダヤ人像と全く異なるものです。あそこ（ロシア）のユダヤ人は、イディシュの文化であって、ヘブライ文化ではありません。私の母方の祖母は、イディシュ語をしゃべりました。・・・彼女は私を育ててくれ、・・・もう亡くなりましたが。・・・彼女は、ロシア語もできましたが、同世代の人とはイディシュ語だけをしゃべっていました。だから、私にとってヤハドットは、イディシュと関わるものであって、イディシュの文化で、イディシュの歌や詩だと言えます。ユダヤ人とは、・・・私の頭のなかでは、・・・ロシアでは、・・・疑うまでもなく、ユダヤ人といえば、賢いアム（民族）、良く勉強するアム（民族）だとされていました。ロシアのユダヤ人は教養が高い人が多く、・・・他の民族よりもそういう割合が多かったですから。

ここ（イスラエル）で私がみるものは、・・・まず第一に、それはイディシュの文化ではなく、ヘブライの文化であり、それは、・・・何とさえいっても、・・・いつも自信があって、断固としているようにみえます。・・・あそこ（ロシア）では、例えばユダヤ人のことで冗談を言われたとしたら、『自分はユダヤ人だ。そういう冗談はやめて。』と言う勇気がいります。・・・つまり、常に勇気がいります。あそこでは。いつも、『どうして？私はユダヤ人よ。』と言わなければなりません。ここでは、状況がまったく違います。」

Q そこ（ロシア）には、他の民族がいたからですか？

A 「ええ。・・・でも、・・・カザンではそういうことを感じたことはなかったです。ほとんど。・・・結婚してウクライナに移り、キエフに住み始めてから、そこでは反ユダヤ主義がひどかったのです。・・・そこ

では、『私がユダヤ人だということを忘れないで。そういうことを言うのは止めてほしい。気分が悪い。』というようなことを言わなければなりません。ここは全く状況が違い、・・・何とっていいかわかりませんが、・・・

最初イスラエルに着いたばかりのころ、通りで、『サラ!』『ハイム!』（注）両方とも人の名前。典型的なユダヤ人の名前でもある。）と人々が大声で呼びあっているのを聞いて面喰らいました。あそこでは、まず、人の名前を大声で叫ぶということがありません。最初は面喰らいました。・・・最初は変な気がしたけれど、そのうち、（そういう光景も）いいと思うようになりました。・・・何と説明していいかわかりませんが、ここのユダヤ人は、あそこで住んでいたときのユダヤ人とは別に思えます。もっと快活で、自信があって、開放的で、・・・時々ずうずうしいと思うこともあります（笑）・・・私は、ここの状況のほうが好きです。」

Q 文化的な点で、ロシアに居られたときもユダヤ人アイデンティティを感じておられたというのは、どういうふうにでしょうか？

A 「ええ。でもそれは、宗教と関係したものではありません。」

Q 言葉などですか？

A 「それは、説明するのがとても難しいです。私はイディッシュ語を話しませんでした。ヘブライ語は全然です。イディッシュ語は少しはわかりましたが、しゃべっていたわけではありません。でも、・・・そういう文化のすべてに興味がありました。何とっていいかわかりませんが、・・・」

Q 質問票で、伝統を家でまもっているかどうかについて、お聞きしていますが・・・これはロシアで（も）まもってこられたということでしょうか？

A 「いいえ。・・・いや、ペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）の時のマツァ（種なしパン）はまもっていました。それは、手に入りましたから。・・・でも、ペサハそのものはやりませんでした。・・・マツァは父がモスクワまで行ってわざわざ手にいれたものです。カザンではそういうものは手に入りませんでした。それ（をやっていたということ）は、ヤハドットの一片です。それは、特別伝統をまもったというほどのことではありません。・・・ロシアでは、・・・たまに（ユダヤ的な）食事をとったことぐらいです。」

Q ご家族の男の子の割礼はされていますか？

A 「（ロシアでは）していません。ここでは、しました。・・・父は（ロシアで）しました。・・・でも、カザンでは、私の息子にはしていません。」

Q それは、ラビ（注）ユダヤ教信徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）がいなかったとか、・・・その他の理由からですか？

A 「単に、そういうことをやる可能性が何もなかったから。・・・そういう広報もなかったし・・・あそこでは割礼もバール・ミツバ（注）13歳男子の成人式）も何もありません。・・・ここでは、・・・息子はここ（アシュケロン）で13歳を迎えたので、何人かの新しく来た移民の家族と一緒にバール・ミツバをして、盛大にパーティをやりました。」

Q ロシアでは、シャバット（安息日）に何も特別なことはされていなかったのですね？

A 「していません。」

Q イスラエルでは、シャバットの日には何か特別なことをされていますか？

A 「・・・イスラエルに来た当初は、シャバットを意識したことを少しやっていました。・・・今は、あまりやらなくなりました。・・・ロシュ・ハ・シャナ（新年の祝）とかはやりますが。・・・祭日もやっています。でもシャバットはもう特に何もしていません。・・・息子ももう一緒に住んでいないし・・・」

Q あなたは、ご自分をシオニストだと思つておられますが、それはどういう意味ででしょうか？

A 「はい。ここがユダヤ人が住むのには最もいい場所だと思うので。・・・移住した当時は、シオニストではなかったのですが、今は考えが変わり、そう思います。」

Q あなたは、世界中からユダヤ人がここにきたらいいと思いませんか？

A 「・・・えー、もし彼等がそれを望むのなら。・・・私は、ユダヤ機関が時々やっているように、出向いていつて移住を確信させるようなことはやる必要はないと思います。・・・誰でも自分のことは自分で決めることが必要です。『来い。来い。』という必要はありません。移住したとしても、楽なことばかりではないからです。大変なことも知らせるべきです。『とにかく来い。』ということはいくべきではな

く、自分のことは自分で決めるべきです。」

Q 選挙で政党を選ぶときは、どういうことをめやすにしますか？

A 「今まで三回選挙がありました。三回とも同じ政党（労働党）に投票してきました。それは、・・・他の（政党の）統治ではうまくいかないと思うからです。・・・もし私達がガザにいたとしたら、それはイスラエル人にとって良いことだとは思いません。・・・パレスチナ人にとって何がよいことかについては、おいておくとして・・・ユダヤ人のイスラエル人にとって何がよいことかについて言っているのですが、・・・私は、我々にとってそこ（ガザ）にいることがよいことだとは思いません。私はそこ（ガザ）から出て嬉しいと思います。」

Q でも、あなたはそこにはいたことがないのでは？

A 「軍隊の時にはいました。・・・私はアラブ人だけが住んでいるところを（イスラエルが）支配できるとは思いません。私達は彼等にどうすべきかを言わなければなりません。（そこを支配することは）私達にとっていいことではありません。・・・（政党を選ぶ基準は）経済的なことよりも、政治的な問題をまず考えます。」

Q 他にも政党が色々ありますが・・・

A 「他にもロシアの政党（注）移民党のこと）などもありますが、一度も投票したことはありません。」

Q 言おうとしたのは、そのことではなくて、政治的に同様の綱領をもつ政党もあるのではと思うのですが・・・

A 「メレツですか？・・・私にとって、（メレツは）ちょっとやりすぎという感じです。・・・先ほど私が言ったことは、イスラエルのユダヤ人にとっていいことは（アラブ人だけが住んでいるところを）支配しない方がいいということであって、メレツは、パレスチナ人にとって何がよいかという志向性がより強いといえます。私には、それは少しやりすぎのように思えます。・・・私はもちろん平和に賛成ですし、（占領地からの）撤退に賛成ですが、・・・でも、メレツの主張しているようにではなく・・・メレツは、私には、‘左’すぎます。」

Q あなたはつまり、・・・イスラエルの将来を政治的に展望したとき、ユダヤ人の国家とパレスチナ人の国家の二つに分けるということですか？

A 「ええ。・・・ただ、私は、イスラエル人だけの国家とは言っていません。ここにはアラブ人もいます。アラブ人のイスラエル人がいますから、・・・でも大多数はユダヤ人なので、・・・私達は、イスラエルの市民権を全てのパレスチナ人に与えることはできません。彼等（パレスチナ人）に彼等のための国ができれば、・・・私達は良い隣人で、正常な関係になることが重要です。」

Q イスラエルの社会統合はうまくいっていないという分析について、どう思いますか？

A 「移民の社会統合のことをいっているのですか？それは、正しいと思います。・・・ある年齢に達している人にとって、ここに移住してきて急に社会に入っていくことは難しいことです。言葉や文化、すべての人生はむこうにあったのですから。・・・だからといって、力づくで統合するようなことが必要だとは思いません。・・・統合に強制は必要ありません。必要なのは、その人達が持ち込んだ文化などを活かす分野を与えることです。たとえば、ロシア語や・・・また、ヘブライの文化つまりイスラエルの文化の中に入っていけるように、できる限り手助けすることです。私は、自分がそれができたと思っています。私達は、（イスラエルの）芝居を見に行くのが好きだし、ヘブライ語の芝居にもよく行きます。」

Q そうですね。仕事も順調にみつけられて・・・

A 「ええ。それは全ての始まりです。職場は。・・・」

Q 最初は大変だったのですか？

A 「いえ。」

Q この仕事は、どのようにしてみつけられたのですか？人の紹介ですか？

A 「はい。まず、・・・一人の女性が電話をかけてきて・・・その頃はヘブライ語がまだ全然できなくて、『こんにちは。』も言えなかったのです。英語は今よりもっとできました。今は英語のところにヘブライ語が入って、英語はほとんど忘れてしまいましたが。今は、英語で何か言おうとすると、ヘブライ語がでてきてしまいます。（この間）外国に行ったとき『どうぞ』というところで『ベバカシャ』と言っていました（笑）。・・・息子がその当時ギブアト・ゼエブの学校に行っていて、その女の人が、英語で、『私の息子も同じ学校の同じクラスで学んでいるのだけど、何かできることはないですか？』と言ってくれました。そして彼女は訪ねて来てくれて、色々助けてくれました。彼女を通して、ここの職

場に求人があることを知ったので、ここに履歴書を出して、その後、適性検査があって、それにうかって、面接があって、・・そしてそれに通ったというわけです。」

Q みんながそんなに順調にはいかないのでしょうかね。

A 「みんながこうではありません。私の場合はとても順調に進んだと思います。・・結局のところ、職場というのは、とても重要です。それは、統合にも影響します。・・たとえば、新しい移民だけの職場というのもあって、そういうところでは、統合といっても難しい問題です。ロシア語でだけしゃべっている職場で、どういう統合があるのでしょうか。・・・」

Q 民主主義という点では、あなたは、イスラエルをどう評価していますか？

A 「高い水準だと思います。・・時々過剰だと思うぐらいです。新聞とか、報道などでは。・・あまりにも開放的だとも思います。何でも新聞記事になるし、テレビで報道されます。・・時には、すぐに報道すべきではないこともあると思います。ここでは、新聞記者やテレビ関係者には、何でも報道してよいという意識があるようです。・・ロシアでは全てが閉鎖的でした。すべてが禁じられていました。」

Q あなたは、それがいやだったのでは？

A 「いやでした。私はこちらの方がいいですが、・・」

Q あちらでは、そのことにプレッシャーや緊張を感じていましたか？

A 「・・えー、・・・・・わかりません。なんて言ったら言いが難しい。・・・・・今ふりかえてみると、そうとも言えます。でも当時は、そのことについては考えませんでした。」

Q それが普通のことだったからですか？

A 「ええ。・・今はそう思います。プレッシャーや緊張を感じていたのだと思います。」

Q アラブ人に対しての民主主義という点ではどうでしょうか？

A 「・・・・・それは・・・・・わかりません。・・・・・私には比べる基準もないですし・・・・・私の理解では、いつも民主主義だったとはいえないかもしれないけど、・・今はずっと良くなっていると思います。始めは、全部が彼等を開かれているわけではなくて、民主的とは言えないことをやったといえるかもしれません。・・確かに（イスラエルは）いつも民主主義だったとはいえないかもしれません。」

Q ここに家があったパレスチナ人で帰ることが出来ない人がいるわけですが、その人達についてどう思われますか？

A 「えー、・・そうですね。でも、それは違うと思います。・・・・・もしそういう人がみんな帰ってきたら、ユダヤ人の場所がどこもなくなります。・・・・・かつてのロシアの例を見ても、（ロシアは戦争で奪ったものを）何も返そうという気はありません。奪ったものは奪ったもの。もう忘れろと。・・・・・イスラエルの関係はまた別です。今イスラエルがしていることは正しいと思います。・・合意に達するように試みています。アサドとも。彼は何も譲る気がなさそうですが、（イスラエルは）合意の道を模索しています。アサドは、何も妥協しそうなものないけど・・・・・でも、・・私はいずれ何らかの合意に達することをとても期待しています。」

Q あなたにとって、今イスラエル社会の最大の問題は何ですか？

A 「・・・・・まず、教育だと思います。」

Q どういうふうに問題なのですか？

A 「まず第一に、もっと教育に投資すべきだと思います。・・もっと文化水準をあげるために投資が必要です。それはとても大事なことです。・・ある人にはあるのですが。・・とても文化的な人もいます。・・文化の水準はとても高いともいえますが、時に、（人々の）態度がどうかと思うようなことがあります。・・子供に対する関係をみると、子供は何をしてもいいような感じです。先生との関係はとても自由で友達のようなです。それはある面良いことです。・・それはロシアの状況とはちょうど正反対です。・・ロシアでは度が過ぎてはいますが。・・（ロシアでは）先生はとても威厳のある存在ですから。・・（イスラエルの現状は）別な面からみると、あまりにも子供に自由を与えすぎています。許されることとやってはいけないこととに、もう少し方向づけを与えるべきです。・・バスの椅子に足をのせてはいけないというような、基本的なことを。」

Q あなたは、バイト（家）という言葉から何を連想しますか？

A「私の家は、エルサレムにあります。・・・私達の家は、エルサレムにあるのです。・・・つまり、我々に生得権があるということです。頭のなかにそれ以外のことは浮かびません。我々の家は、エルサレムにある。それは、疑う余地のないことです。」

Q それは、エルサレムが特別だという意味ですか？

A「ええ。・・・私達はエルサレムを愛しています。・・・私達のバイト（家）、私達のアパート、私達のシュホナ（町）・・・」

I 5

生年月日：1960-3-28生まれ（40歳）

出生地：ロシア モスクワ

性別：女

移住年：1990年（移住時年齢30歳）

一緒に移住した家族：父、母、夫、娘

父親出生地：ウクライナ ドニプロペトロフスク

母親出生地：ロシア モスクワ

父方祖父出生地：リトアニア ヴィッツ

父方祖母出生地：ベラルーシ スモズヨン

母方祖父出生地：ポーランド ワルシャワ

母方祖母出生地：ベラルーシ ポブルイスク

職業：コンピュータプログラマー

夫の職業：ロシアでは医者、今は看護夫

父の職業：電気技師

職歴：今と同じ（モスクワではプラスチック工場研究所のためのプログラマー）

母の職業：建築技師

最終学歴：高等教育研究所（モスクワ）

これまでの居住市町村：エルサレム

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「いつも。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A NA

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。ロシュ・ハ・シャナ（新年）／ペサハ（過ぎ越しの祭）」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「いいえ。」

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム（nation）：同一地域に住んでいる（住んでいた）人々で同じ言葉を話す人々。

レオム（nationality）：同じ歴史に自己同一化させ、伝統を守っている（守ってきた）人々。

エズラフット(citizenship)：国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国境と市民を守る軍。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「100%。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A イスラエル・バ・アリヤ（移民党）

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A ツォメット／イスラエル・バ・アリヤ

- Q ご両親やおじいさん、おばあさんは、それぞれ全然違う国や町でお生まれですが、どのようにしてお互いに出会われたのですか？
- A 「父と母、母方の祖父、祖母らは、それぞれモスクワに出て行ったので、そこで出会ったのだと思います。父方の祖父、祖母の生まれた町はお互いにそう遠くないところにあります。そしてこの二人もモスクワに出て行って、そこで知り合いました。」
- Q どうしてモスクワに出て行ったのですか？
- A 「革命前、ユダヤ人は大きな都市に住むことを禁じられていました。それで、全てのユダヤ人は、こういう小さな町、村のようなところに住んでいました。革命後、ユダヤ人もどこに住んでもいいようになったので、モスクワに移ったのです。・・・彼等は коммуニストでした（笑）。・・・」
- Q あなたは、約十年前にご家族とイスラエルに移住されたわけですが、誰が一番移住を望んだのですか？
- A 「夫です。」
- Q それはどうしてだと思いますか？
- A 「・・・わかりません。」
- Q わからない？・・・話し合いはなかったのですか？
- A 「いや。・・・モスクワで、彼はヘブライ語を勉強し始めていました。・・・そのことから、彼はイスラエルに移住したいのだろうと思っていました。」
- Q いつごろからヘブライ語を勉強し始めたのですか？
- A 「移住の一年位前です。」
- Q ゴルバチョフ政権時代、ソ連のその後の政治的変化を予感していましたか？
- A 「何かが変わっているとは感じていました。でも、それが良い変化なのかどうかはわからなかった。・・・それに、経済状況はさらに悪くなりました。経済状況が悪くなるといつも、反ユダヤ主義がでてきて・・・」
- Q 反ユダヤ主義がありましたか？
- A 「はい。」
- Q 少し例をだしていただけますか？
- A 「・・・この場合の反ユダヤ主義は、政府が何かしてくるというのではないですが、・・・通りの人々などから・・・なんて言えばいいか、・・・」
- Q 何かよくない言葉を言われたりするのですか？
- A 「ええ。はい。そうです。・・・私自身はそれを恐れていたわけではありません。でも娘のことが心配でした。娘は四歳で、小さく、・・・娘に何かされるのではないかとということが心配でした。」
- Q 何か娘さんにされるかもしれない、ということがありうるのですか？
- A 「ないかもしれません。」
- Q でも、何かそういう例があったのですか？
- A 「・・・いいえ。・・・でも、何か起きたらと思うと心配だったのです。・・・何かといわれてもわからないけど・・・」
- Q 子供を誘拐して、後でお金を要求するとか？
- A 「いや、いや、・・・そういうこととは違います。・・・私達にはそんなお金はなかったですから（笑）・・・」
- Q では、どういうことが起こるかもしれないということですか？
- A 「・・・彼女に何か良くない言葉をあびせられるとか、・・・彼女が傷つくような、・・・わからないけど、・・・そういう（人を傷つけるような）あらゆることです。」
- Q そういうことが、いまだにあるのですか？
- A 「はい。・・・はい。・・・あります。」
- Q あなたご自身も、移住を望まれたのですか？
- A 「最初はそうでもなかったですが、・・・最終的には望みました。」
- Q （ロシアに留まるよりも）こちらに移住することの方がよかったということですか？
- A 「ええ。」
- Q ご両親も同じ考えでしたか？
- A 「両親は、私が移住したから、（後から）自分達も移住したと思います。」
- Q 移住前、イスラエルに誰か知人や親戚はおられましたか？

- A「・・・いました。それほど近い親戚ではないですが。・・・」
 Q そのご親戚とは（手紙などでの）つながりがあったのですか？
 A「まあそうです。いちおう。」
 Q その方達からも移住の誘いがあったのでしょうか？
 A「・・・えー、はい。」
 Q 移住した当初は、生活は大変でしたか？
 A「・・・それほど大変でもなかったです。・・・食べるだけなら十分だとわかっていました。・・・私達は高望みするということもなかったし、・・・食べるには十分な生活でした。・・・まずまずやってきたというところですよ。」
 Q 言葉についてはどうでしたか？
 A「言葉は大変でした。最初は何もわからなかった。」
 Q 一年ぐらいで大丈夫になりましたか？
 A「いいえ（笑）。今もまだできません（笑）。」
 Q 新聞はヘブライ語で読みますか？
 A「いいえ。（ヘブライ語で）読むのは大変なので、いやなんです。」
 Q ニュースは（ヘブライ語で）聞き取れますか？
 A「わかります。」
 Q 新聞は、ロシア語の新聞を買うのですか？
 A「そうです。」
 Q そういう新聞はたくさんありますか？
 A「たくさんあります。」
- Q 移住後は、ずうっとエルサレムの同じ場所に住んでこられたのでしょうか？
 A「だいたいそうです。同じ地区です。」
 Q 移住直後は、どこにおられたのでしょうか？
 A「ほとんどそうです。」
 Q ほとんどとは？
 A「アパートは何度か変わりましたが、同じ地区に住んでいました。」
 Q 何度か引っ越されたのは、どうしてですか？
 A「賃貸アパートだったからです。」
- Q 仕事を探すという点では大変でしたか？
 A「いいえ。」
 Q どうして（今の仕事を）見つけたのですか？
 A「ただ運がよかったのです（笑）。・・・移住して半年後にこの仕事を見つけて、今までずっとここで働いています。」
 Q どういうルートで見つけたのですか？
 A「友達を通じて。」
 Q どういう友達ですか？・・・ロシアからきた友達、それともイスラエル生まれの友達？
 A「ロシアからきて、一緒にコース（注）日本でいう、カルチュアセンターのようなもの。）で学んでいた友達です。」
 Q 移民の人の間では、そのように、移民の人どうしが、仕事を紹介しあったり、情報を提供しあったりして仕事を探すのを助けあうことがよくあるのですか？
 A「はい。（移民どうしだと）言葉も、説明も簡単だし、何を探しているかとか、仕事のこととかも話しやすいからです。」
 Q でも、移住は家族単位でこれ、組織されてまとまってこられたわけではないのに、どうしてお互い知り合うのですか？
 A「ウルバン（注）移民のためのヘブライ語学校）とか。・・・コースとか。・・・ウルバンの後はコースに行ったりするので、そこでも知り合います。移住したばかりの人が来ていますから。」
 Q そこにきている人は、皆移住したばかりの移民なのですか？
 A「ええ。」

- Q そうすると、みんなにとって、状況は同じですから、仕事を探すうえでは競争もあるのではないですか？
- A 「たとえば、近所の人・・・誰にでも近所の人がいるわけで、・・・あとは、もう長年ここにいる親戚とか、（そういう人々からも）情報が入ります。」
- Q あなたの夫の仕事を見つけるときはどうでしたか？
- A 「夫は仕事を探すのが、私よりずっと大変でした。ロシアでは医師でしたから。ここにきて、医師の国家試験に受かりませんでした。・・・ここで医師になるには、（この）試験に通らなければなりません。かれにとっては、厳しいことだったと思います。・・・今彼は看護師をしています。医師ではなく。」
- Q 彼はそれに満足していないのでは？
- A 「満足していません。・・・辛いです。」
- Q また、試験をうけるのですか？
- A 「いえ。いえ。」
- Q もうあきらめたということですか？
- A 「ええ。・・・彼は・・・辛いけど・・・彼は・・・この国家試験のやり方は、ロシアでのやり方と違っていています。選択肢を選んでいくこの試験方式に通るのは、彼には難しいようです。ロシアでは、たいいてい口述試験なのです。口述試験の場合は、完全に正確に答えないとしても、正解だということがあります。でも、この試験は、選択肢がとても似ていて紛らわしいような場合が多いので、完全に正確に知っていなければならず、彼にはそれが大変なようです。」
- Q 移住の前には、そういう問題については考えなかったのですか？
- A 「考えました。でも、これほど大変で彼が受からないかもしれない、とまでは思いませんでした。・・・（彼が試験に受からないというようなことは）考えなかった。」
- Q どうして、あなたの夫はイスラエルへの移住を強く望まれたのでしょうか？
- A 「・・・・・・わかりません。・・・当時ロシアには、『良いことが何も起こりそうもないので国をでていかなくては。』というような雰囲気がありました。『何かしなければ。』というような。」
- Q 次に、アイデンティティについてうかがいますが、あなたのユダヤ人アイデンティティはどこからきていると思いますか？
- A 「・・・家族から？かな？・・・家族から。」
- Q ご家庭では、どのような（ユダヤ的な）ことをされていましたか？
- A 「何もしていませんでした。伝統的な事は何もしていませんでした。」
- Q 全く何もですか？
- A 「いいえ。・・・先ほど言ったように、祖父と祖母はコミュニストでしたので、ユダヤ的伝統とそれ（コミュニスト）は相容れなかったのだと思います（笑）。」
- Q では、パール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）とか割礼とかはやっていなかったのですか？
- A 「何も。・・・何もしていませんでした。」
- Q それなのに、あなたは、ユダヤ人アイデンティティが家族からきていると言われるわけですが、それは何でしょうか？
- A 「・・・・何でしょう・・・他の人達と違うという意識とでもいうか・・・」
- Q そういうふうに、あちら（ロシア）で感じていたのですか？
- A 「ええ。」
- Q 例えばどういうときにですか？
- A 「・・・・よくわからないけど・・・学校でさえも・・・例えば、行きたい大学を決めなければならないときに、受け入れられる大学もありますが、ユダヤ人は受け入れないという大学もあるのです。」
- Q 何かそういう定員枠があるのですか？
- A 「いや。・・・『ここは大丈夫だけど、ここはだめ。』というような、暗黙の了解のようなものがあるのです。私の兄は、ユダヤ人を受け入れないといわれていたところ（大学）をうけたのですが、（やはり）彼は受け入れられず、それ以来、彼の全人生は外れた方向にいつてしまいました。」
- Q ロシアの身分証明書では、ユダヤ人かどうかということがわかるようになっているのですか？
- A 「ええ。その記載があります。」
- Q 他にはどういう項目がありますか？

- A「氏名、父の名前、・・・それから、・・・宗教ではなく・・・どのアム（民族）かということ、・・・私はユダヤ人ですが、・・・たとえば、ロシア人とか、日本人とか、・・・です。」
- Q あなたは、今イスラエルにいて、これからユダヤ的な伝統をまもっていきたいと思いますか？
- A「私は・・・そうしたいけど・・・あくまで伝統をであって・・・宗教をまもりたいというのではありません。」
- Q なぜ、「やっぱり伝統をまもりたい」と思うのでしょうか？
- A「それは、私の子供達にそれが欠けていると感じるからです。」
- Q それが欠けていることは問題ですか？
- A「いいえ。・・・でも・・・私達の家族でも・・・祭日を祝って・・・そういうことを感じる必要があると思うし、重要だと思います。・・・ロシアでは、祭日といえば、国の行事で、メイ・デイとか、・・・革命記念日などでした。・・・それが祭日でした。私は、家族のなかで、ペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）やロシュ・ハ・シャナ（新年の祝い）のような祭日の気分を味わいたいのです。・・・それは、机の周りにみんながすわって、・・・（まさに）お祭りの気持ちです。私にとってそれは大切なことです。」
- Q ロシアでは、そういう伝統的なことをされてこなかったということですが、それについて（ロシアで）考えたり、学んだりしたことはあるのでしょうか？
- A「いいえ。」
- Q では、どうしてペサハやロシュ・ハ・シャナなどの伝統行事について知っているのですか？
- A「多くはここで学びました。ここに着いた当初は、教えてくれる人もいませんでした。」
- Q でも、ペサハは何かということは知っていたのですね。
- A「ええ。」
- Q 何から知ったのでしょうか？
- A「・・・何からかな？・・・友達からかな・・・」
- Q（ロシアでは）学校では学ばないし、家のなかでそういう話題もないわけですね？
- A「ないです。」
- Q では、どうして知るのでしょうか？
- A「友達からだと思います。」
- Q 友達も似たような状況ではないのですか？
- A「いえ。いえ。みんながそうではありません。友達のおじいさんやおばあさんが皆コミュニストという訳ではないですから。なかには、伝統をまもっている家の友達もいるのです。」
- Q あなたの中では、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティとは同じものですか、それとも二つには違いがありますか？
- A「・・・違うと思います。」
- Q どちらが先にありますか？
- A「ユダヤ人（アイデンティティ）です。」
- Q イスラエル人アイデンティティはその後ですか？
- A「はい。」
- Q（二つは）違うのですね。
- A「ええ。ロシアでも私はユダヤ人でしたから。」
- Q あなたは、ご自分をシオニストだと思いと答えておられますが、それはどういう意味ででしょうか？
- A「・・・わかりませんが、・・・自分の生まれた国を去って、（ユダヤ人と）何の関係もない国に移住することは望まず、・・・ユダヤ人の国が必要だと思う・・・そういうことでしょうか・・・」
- Q あなたは、世界の全てのユダヤ人がイスラエルに移住すべき、あるいはそれが望ましいと思いますか？
- A「わかりません。・・・難しい（質問）です。」
- Q ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）には行かれていないと答えられていますが、それは、行きたくないという気持ちからですか？
- A「はい。恐ろしいのです。・・・」

- Q あなたは、去年の国会選挙で、移民党を投票されていますが、この政党を選んだ最大の理由は何ですか？
- A 「・・・移民の中には、・・・皆が私のようにではなく、・・・私の両親のように、ここ（イスラエル）でやっていくことがとても大変な人達があります。・・・お金も（十分）なく、アパートもなく、とても大変です。そういう人達の助けになる政党があればいいと思ったのです。私はやطيعけるけど、皆が私のようにではありません。」
- Q ご両親は年金がイスラエルから出ないのでしょうか？
- A 「出ます。」
- Q それは十分でないということですか？
- A 「十分ではありません。・・・食べることと着るものにはまにあいます。でも、芝居を見に行ったり、余暇をすごすのには十分といえませんが。」
- Q 年齢はおいくつぐらいですか？
- A 「二人とも70代です。」
- Q お二人は、イスラエルで、今毎日どんなふうに過ごしておられるのですか？
- A 「少し働いています。・・・お金のためというより、なにかしていた方がいいからということで・・・」
- Q 同居されているのですか？
- A 「いいえ。彼等は賃貸アパートに住んでいます。私達は、私達のアパートを買いました。」
- Q アパート代はお二人が払っているのですか？
- A 「ええ。国から援助金はありますが、十分ではありません。」
- Q 援助金はアパート代の半分以上ですか？
- A 「半分以上ありますが、十分ではありません。」
- Q ご両親はお家でロシア語で話されると思うのですが、あなたのお家では何語で話されていますか？
- A 「私達もロシア語です。」
- Q お子さんとも？
- A 「ええ。」
- Q その方が簡単だからですか？
- A 「その方が自然だから。」
- Q お子さんは何歳ですか？
- A 「三人いて、二人はここで生まれました。・・・14歳、9歳、3歳半の三人です。」
- Q お子さんどうしてヘブライ語で話すのでしょうか？
- A 「はい。」
- Q イスラエルは社会統合がうまくいっていないという分析がありますが、それについて、あなたの考えはどうでしょうか？・・・あなたはそれに同意されますか？
- A 「・・・ええ。・・・そう思います。・・・それはでも場合にもよるといえるか・・・もし、頭がよくて教養もある人であれば、そういうことはあまり感じないと思います。」
- Q ロシアでは英語は学びましたか？
- A 「ええ。でも、それほど勉強したわけではありません。」
- Q ロシアでは、どういう外国語を勉強するのですか？
- A 「英語も勉強します。・・・でも、・・・ロシアでは、映画やテレビなどで英語を聞くことはありません。ロシア語でしゃべって、訳がでてきます。ロシアでは英語を耳で聞くということはほとんどありません。読むことはありますが。・・・」
- Q では次に、イスラエルの民主主義についてお聞きしたいのですが、あなたは、イスラエルの民主主義をどのように評価されますか？
- A 「・・・ふー。・・・わかりません。・・・」
- Q 『イスラエルには民主主義はあるが、それはユダヤ人のための民主主義でしかない。』という意見があるのですが、あなたはそれに同意されますか？

A「・・・わかりません。・・・まったくわからない（笑）。・・・」

Q あなたは、毎日の日常生活のなかで、アラブ人の人に会うことはありますか？

A「いえ、ありません。」

Q 全然ないですか？

A「全くありません。」

Q だから、わからないということでしょうか？

A「夫はアラブ人とも働いているので、（アラブ人のことを何も）知らないというわけではありません。

・・・わからないけど、・・・仕事ではユダヤ人と同じ様な昇進を受けているのではないかしら・・・わかりませんが・・・私は、アラブ人に差別があるとは・・・思いません。・・・夫からはそういう差が職場であると聞いたことはありません。」

Q あなたにとって、今イスラエルのかかえる最大の問題は何ですか？

A「・・・えー、・・・安全保障です。」

Q これから、とくにパレスチナ問題の解決にむけて、イスラエルが政治的にどのような方向に進んだらいいと思いますか？

A「・・・わかりません。・・・私にはそういうことを考えるのがむいていないの（笑）・・・」

Q そういうことは考えませんか？

A「考えないことはないけど、・・・なんと言ったらいいのかわからないのです。・・・」

I 6

生年月日：1963-4-28生まれ（36歳）

出生地：ロシア カザン

性別：女

移住年：1990年9月29日（移住時年齢26歳）

一緒に移住した家族：妹、父、母、息子、おば、めい

父親出生地：ウクライナ ヴィニツァ

母親出生地：ウクライナ ヴィニツァ

父方祖父出生地：ウクライナ NA

父方祖母出生地：ウクライナ NA

母方祖父出生地：ウクライナ NA

母方祖母出生地：ウクライナ NA

職業：コンピュータプログラマー

夫の職業：工場長

職歴：コンピュータプログラマー

父の職業：年金

母の職業：年金

最終学歴：カザン大学

これまでの居住市町村：ナベイ・ヤアコブ（占領地内）→ギロ（占領地内）→ギブアト・メスア

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「いつでも。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「銀行や内務省に行った時／選挙の時。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「わからない。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「わからない。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。イスラエルの祭日」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。1991年。」

感想：とても心が痛んだ。特に” ショアの子供たち” の写真から。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム (nation) : 同一の習慣や伝統を持つ人々の集団。

レオム (nationality) : NA

エズラフット (citizenship) : 権利と義務を伴った、特定の領域への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「安全保障。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「軍に行っていないので、よく評価できない。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 一つのイスラエル (労働党)

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A 労働党

- Q あなたのご家族は約十年前に移住されているわけですが、調査票に書かれた「一緒に移住した家族」は、ご家族全員ですか？
- A 「兄以外の家族全員です。」
- Q お兄さんは今どこに住んでいるのですか？
- A 「（彼も）三年前にイスラエルに移住しました。」
- Q どうして、あなた方と一緒に来られなかったのですか？
- A 「家族があったから。」
- Q 結婚されていたのですか？
- A 「ええ。」
- Q 今彼は、ご家族とご一緒ですか？
- A 「いいえ。一人です。妻はウクライナに残り、彼だけ来ました。今は、離婚しました。」
- Q お子さんは？
- A 「ウクライナにいます。・・私も離婚しました。（前の）夫はロシアにいます。彼は（再婚して）新しい家族がいます。」
- Q それは、あなたがイスラエルに移住したからですか？
- A 「私達が移住することに決めたとき、夫も来るかと思ったのですが、彼は残ることを決めました。彼は新しい家族がいます。私も（移住後）再婚しました。」
- Q 移住は、あなたにとって大きな決断でしたか？
- A 「私は、両親や息子、おば等と一緒に、イスラエルに移住することを決めました。そして、夫に、『あなたはどうか、自分で決めて。』と言いました。・・彼はユダヤ人ではなく、ロシア人です。・・彼は коммуニストでした。・・彼は『君達は移住して。僕もどうか決めるから。』と言いました。そして結局、彼は残ることに決めたのです。」
- Q あなたにとっては、移住は・・
- A 「決意するのに迷いはありませんでした。」
- Q 移住することをずっと長い間考えて（ロシアで）生活してこられたのですか？
- A 「いいえ。・・でも、両親はずっと望んでいました。特に父が。」
- Q それはどうしてだと思えますか？
- A 「わかるのです。・・彼等（両親）は、70年代にすでに移住することを望んでいました。でも、当時はできませんでした。・・そして90年になって、それが可能になったのです。」
- Q お母さんも移住したがっていましたか？
- A 「父ほどではないですが、望んでいました。」
- Q あなたも移住したかったのですか？
- A 「はい。」
- Q おばさんも？
- A 「ええ。」
- Q 何が移住の最も大きな動機だったのでしょうか？
- A 「私達の場所というものがほしかったのです。‘よそ者’と感じないでもよい所が。」
- Q ロシアでは感じたのですか？
- A 「ええ。あそこでは、私達がみんなと違う、ということがわかっていました。」
- Q 少し詳しく例をだして説明していただけますか？
- A 「例えば、・・・妹はユダヤ人だったため仕事がもらえませんでした。・・或るところで。・・彼女は場所を移されました。・・他には、・・私のいとこがハンガリーに行こうとしたのですが、許可がでませんでした。」
- Q それは、その方がユダヤ人だったからですか？
- A 「私はそう思っています。・・・そういう小さい問題があります。・・・感じの悪い雰囲気があるので。侮辱もありました。・・・外を歩くことは危ないことでした。・・・」
- Q 外を歩くことが危ないのは、誰にとってもではないのですか？
- A 「そうです。それは皆にとってそうでした。ただ、私達には出国する可能性があったので、・・ロシア人にはそういう可能性がありません。・・ですから移住を決めたのです。・・ただ本当に危なかった・・・」
- Q 移住の前には仕事はもうされていたのですか？

- A「修士の学生でした。」
 Q 何をしていたのですか？
 A「今と同じことです。」
 Q ロシアでは前の配偶者は何をされていましたが？
 A「工場で働いていました。」
 Q ご両親は？
 A「技師です。・・・父はガスの技師で、母は建築技師です。」
 Q 移住された時は、ご両親はもう年金生活でしたか？
 A「はい。そうですが、今父は年金をもらいながら働いてもあります。鉄道博物館の警備員をしています。」
 Q そこで働くようになってからどの位になりますか？
 A「三年位でしょうか・・・」
 Q 移住して最初のころは働いていなかったのですか？
 A「最初は働いていませんでした。ウルパン（移民のためのヘブライ語学校）でヘブライ語を勉強して、
 ・・・その後で働き始めたのです。」
 Q お母さんは、働いていないのでしょうか？
 A「母は働いていません。私に小さい子供がいるので、その子をみてくれたりして助けてくれてます。」
 Q ご両親はおいくつぐらいですか？
 A「1932年と1934年生まれです。」
 Q 戦争中のことは何か聞かれていますか？
 A「彼等（両親）は当時は子供でした。・・・父方の祖父は戦死しました。母方の祖父母は大丈夫でした。彼等はウクライナに住んでいて、第二次大戦中はそこを離れ、戦後戻ったようです。」
- Q あなたは、ヘブライ語を移住してから学んだのですか？
 A「ええ。移住後ウルパンで。」
 Q その前は、ロシアでは何もやっていなかったのでしょうか？
 A「いいえ。」
 Q 全然ですか？
 A「何も。・・・いや、本はありました。・・・でも、それを開いて、文字をみて、・・・閉じるという具合で・・・」
 Q どういう本ですか？
 A「初心者用の本です。」
 Q それは、あなたが買ったのでしょうか？
 A「父からもらいました。・・・父も友達からもらったもののようです。」
- Q 質問票でユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティについてお聞きしていますが、この二つのアイデンティティはあなたの中で違いがありますか？
 A「・・・そうは思いません。・・・」
 Q あなたの中では、二つは同じだということですか？
 A「・・・はい。同じことです。・・・違いは何ですか？」
 Q ユダヤ人アイデンティティは、民族と関係するアイデンティティだと私は理解するのですが、・・・それに対して、イスラエル人アイデンティティは、国家や市民権というものの関係で存在するものだと思いますが。・・・
 A「でも、・・・（その二つは）何が違うのでしょうか？」
 Q 例えば、誰かにイスラエル人アイデンティティがあるとして、その人がアラブ人であれば、その人にはユダヤ人アイデンティティはないと思います。
 A「なるほど。」
 Q だから、二つは少し違うのではないのでしょうか？（笑）・・・でも、あなたの中では同じことだというわけですね？
 A「やはり、違いがあります。あなたの言うことは正しいです。イスラエル人とユダヤ人には違いがあり

- ます。イスラエル人は、ここに住んでいるアム（民族）です。ユダヤ人は世界中にいます。だから違いがあります。」
- Q あなたにとって、どちらのアイデンティティがより重要ですか？
- A 「イスラエル人であることの方がより重要です。」
- Q ユダヤ人アイデンティティではなく？
- A 「私にとっては、イスラエル人が先で、ユダヤ人はその後です。」
- Q どうして、イスラエル人が先で、ユダヤ人はその後なのですか？
- A 「どうしてかという、私達はユダヤ人で（として）ロシアに住んでいました。・・・（ロシアでは）私達の（ユダヤの）祭日を全部祝うことはありませんでした。そういうこともあって、私はロシアでは自分がユダヤ人だと年中感じていたわけではありません。自分がユダヤ人であることは自覚していましたが、ロシアの祭日も祝っていました。・・・そこに住んでいたの。・・・今、ここにやってきて、（ロシアではやっていなかった）色々な祭日を祝えることをとても嬉しく思います。自分がこの民族に属しているのだと思って。自分が自分でいられる気持ちというか・・・」
- Q あなたはダティ（宗教的ユダヤ人）ではないのでしたね？
- A 「いいえ。」
- Q では、あなたのユダヤ人アイデンティティはどこからきていると思いますか？
- A 「・・・（どこからというのではなく）ユダヤ人だと、そうわかっているのです。・・・私の両親はウクライナ出身ですが、ウクライナではイディッシュ語を喋ります。両親は今もイディッシュ語を喋ります。祖父母も完璧にイディッシュ語を喋っていました。両親はここでもイディッシュ語を喋ろうとします。彼等にはヘブライ語よりイディッシュ語の方が簡単なのです。・・・」
- Q ご両親はお家のなかでイディッシュ語で話されるのですか？
- A 「いえ。私達とはなく、彼等の両親と話すときです。・・・私達とはもうイディッシュ語では喋りません。・・・私は、いつも、私達はユダヤ人だとわかっていました。・・・（ペサハの時には）マツァを食べたりしていましたから・・・私達にはロシアの祭日とはまた別の祭日がありました。私は、私達には別の違う祭日があることがわかっていました。」
- Q ロシアでは、ユダヤの祭日を祝うようなことを何かされていましたが？
- A 「ペサハ。・・・ここでやるようなことはしていませんでしたが、ペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）やマツァ（ペサハに食べる種なしパン）のことは知っていました。」
- Q ペサハには、お家で何かしていたのですか？
- A 「ええ。・・・それからロシュ・ハ・シャナ（新年の祝い）のことも知っていました。」
- Q ロシュ・ハ・シャナにも何かしていたのですか？
- A 「いいえ。ただそういう日があることを知っていたということです。」
- Q 調査票の中で、あなたは祭日などの伝統をまもっていると答えられていますが、ここ（イスラエル）で、あなたはそういうものをまもっていきたいということですか？
- A 「ええ。そういう祭日を全部祝って、そのことを感じたいと思います。」
- Q どうして、そういう伝統をまもることがあなたにとって大事なのですか？
- A 「それがアム（民族）の行為だと思うからです。・・・習慣・・・というか・・・」
- Q 祭日以外に、どのような伝統をまもっていくことが大事だと思いますか？
- A 「・・・言葉。私は、皆がここにきてヘブライ語でしゃべるようになればいいと思います。・・・言葉がなければお互いに知り合うことはできませんから。・・・」
- Q 食事の規則などは？
- A 「食事の規則ですか？・・・アシュケナジの食事の規則もあれば、ミズラヒの食事もあります。・・・食事の規則は（私には）どうでもいいです。」
- Q 割礼とかパール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）などは？
- A 「それは私のいう祭日の中に入ります。・・・私には13歳になる息子がいますが、先日彼のパール・ミツバをしました。・・・割礼も。もう一人下の息子がいますが、彼が生まれたとき割礼をしました。」
- Q それは、イスラエルでですね？
- A 「ええ。ここです。」
- Q ロシアでは（ご長男の時は）しなかったのでしょうか？
- A 「いいえ。あそこではしませんでした。」
- Q ロシアでしなかったのは・・・？

- A「あそこでは、やらない方が普通でした。・・隠れてそつとするということではできましたが。・・でも何のために？・・移住してきて、長男にここで割礼をしました。」
- Q 移住されてから、最初どのようにして仕事を探されましたか？
- A「最初ウルバンで言葉を習って、・・その後で、・・履歴書を書いて色々なところに送りました。新聞にも。・・この仕事は、移民センターにいてその掲示板で見つけ、連絡をとってみつけました。・・妹の場合は、もっと時間がかかりました。彼女はまず靴屋で働いて、次に裁判所で働いて、それからようやく彼女にあった仕事をみつけました。」
- Q 妹さんは（ロシアで）何を勉強されていたのですか？
- A「電子工学です。」
- Q 今はそれに関連する仕事をされているのですか？
- A「ええ。」
- Q 再婚された相手の方はイスラエル生まれの人ですか、ロシアからの移民の人ですか？
- A「イスラエル生まれです。」
- Q 90年代以降たくさんの移民がロシアからこられていますが、お互いに何か移民の人達どうしのつながりがありますか？
- A「いいえ。この職場で働いている人達の間ではつながりがありますが、他には特にありません。・・・ウルバンで一緒だった人達とは少しありますが、でもだんだんその人達とのつながりも消えていきます。・・」
- Q ロシアを懐かしく思うことはありますか？
- A「懐かしいです。ロシアに行きたいです。」
- Q それは理論的には可能ですよね？
- A「可能です。・・でも今はとても費用が高いです。」
- Q （ロシアの）パスポートはまだあるのですか？
- A「ありません。とりあげられました。・・（行くには）ヴィザが必要です。」
- Q ヴィザをとるのは大変ですか？
- A「時間とお金がかかります。」
- Q お金も？
- A「たくさん。」
- Q 航空運賃ではなく、ヴィザにもそんなにお金がかかるのですか？
- A「ええ。」
- Q どのくらい？
- A「100ドル位かな？・・よくわからないけど。」
- Q どういう点で、ロシアが懐かしいですか？
- A「ロシアそれ自体ではなく、友達のことです。・・それから、私の住んでいた町がどうなっているかも興味があります。・・風景や建物や・・そういうもの全部。」
- Q ロシアには親友がいたのですか？
- A「ええ。まだその友達とはつながりがあります。彼女は、ここにもう二度も訪れましたし、・・」
- Q 彼女はユダヤ人ですか？
- A「いいえ。モスLEMです。・・彼女はモスLEMで、彼女の夫はロシア人です。」
- Q そういうカップルはよくあることですか？
- A「はい。」
- Q そのモスLEMの人達の顔などの外見は、イスラエルにいるモスLEMの人達の様ですか？
- A「いいえ。」
- Q 顔だけを見て、その人がどの宗教に属しているかわかりますか？
- A「はい。ロシアではわかります。ロシア人でないか、ユダヤ人でないか、それは見てわかります。・・みんなとは言いませんが。・・たとえば、私のことは、一度も誰も私をユダヤ人とは言いません（思いません）でした。でも私の（ユダヤ人の）友達、いつもそう見られていました。」
- Q 宗教ごとに居住地域が分かれているということはあるですか、それとも混ざって（住んで）いるのですか？

- A「私達の住んでいたカザンではとても混ざっていました。」
 Q たいていは、混ざっているのでしょうか？
 A「ええ。」
 Q エルサレムでは地域やアパートなどがはっきり分かれていますが、そうではないということですね？
 A「ええ、違います。」
- Q あなたは、移住されてから、ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に行かれていますか、これは・・・
 A「ウルパン（の行事）で行きました。・・・もう二度と行かないと思います。」
 Q もう十分だと？
 A「はい。」
 Q あなたは、人にあそこを訪れることを勧めたいですか？
 A「・・・ええ。」
 Q どうして勧めたいですか？
 A「・・・私達の歴史を知るために。私の親友が私を訪ねて（ロシアから）来たとき、一緒にヤド・バ・シェムに行きました。」
- Q では次に、民主主義という点であなたはイスラエルをどう評価しますか？
 A「十分に民主的な国だと思います。批判の自由があるし、・・・ロシアと比較すると、あそこは民主主義があまりなかったし、・・・」
 Q 『イスラエルは民主的な国家かもしれないが、それはユダヤ人にとってだけである。』という意見についてはどう思いますか？
 A「それは事実のある部分をついていると思います。・・・イスラエルのアラブ人は選挙の時投票することはできます。でも、彼等は少数集団で、・・・イスラエルの中でアラブ人は『二級市民』になっていると思います。」
 Q それはよくないことだと思いますか？
 A「良くないと思います。・・・でも、歴史が・・・そうさせてしまったのです。」
 Q そういう関係を変えるべきだと思いますか？
 A「ええ。でも、そういう関係を変えるような方向性は私には見えません。理論的には変えるべきだと思うけど。」
 Q 何が障害になっていると思いますか？
 A「・・・・・・建築現場ではアラブ人が一生懸命働いています。・・・ユダヤ人はそういうところでは働いていません。あらゆるアボドット・シュホロット（3K労働）はアラブ人によってなされています。それは良くないことです。・・・」
 Q イスラエルは社会の統合に成功していないという分析がありますが、あなたはどのように思いますか？
 A「・・・ハレディム（超正統派ユダヤ教徒）の主張が大きくなりすぎていると思うので、それが気になります。私は、彼等の勢力が大きくなることを望みません。・・・でも、アシケナジとスファラディの格差とか、お互いがうまくいっていないとかそういうことは感じません。」
 Q 移民とそうでない人達との関係についてはどうですか？
 A「初めは（違いを）感じました。・・・でも、それはどの社会でもそうだと思います。すでに存在しているところに誰かやってきたら、社会は全面的には受け入れません。でもだんだん受け入れられていきます。・・・少なくとも私の場合はそうでした。今の新しい移民の人達のことはよくわかりませんが、・・・いつでも、受け入れられる人もいれば、受け入れられない人もいます。」
- Q あなたにとって、イスラエルの今最大の問題は何ですか？
 A「アラブとの戦争です。・・・その次は・・・ハレディム（超正統派ユダヤ教徒）の問題です。」
 Q どういう方向に、今後イスラエルが進むといいと思いますか？
 A「アラブ人との問題では、できるかどうかはわかりませんが、『彼等には彼等のメディナ（国）／自治を』、『私達には私達の国を』ということです。・・・（聞き取り不可）が二度と起こらないように。ハレディムとの問題では、やはり同じように、彼等は彼等でやればいいのであって、私にその主張を押し付けないでほしいということです。彼等の勢力が弱くなればいいと思います。」

- Q 世界の様々な国の中から二つの極端な国の例をとって考えてみたいのですが、・・・一つはイスラエルで一つはアメリカです。アメリカでは同じ国民の中に様々な民族がいます。イスラエルでは・・・
- A 「同じことです。」
- Q 同じとおっしゃいますが、イスラエルをつくった人々はイスラエルを「ユダヤ人国家」にしようとしていました。その目的は非常に明確でした。彼等は、ユダヤ人のための国家をつくろうとしました。でも、現実には、イスラエルの中にはユダヤ人以外の人々もいます。建国理念と現実には違いがありますね。あなたは、イスラエルも、例えばアメリカのように（色々な民族を含んで同じように国民にしてい）っていくことはできないと思いますか？
- A 「できないと思います。・・・ここにやってくる人は皆、ここが私達の国だからやってくるのです。アメリカは、また別です。・・・アメリカにくるトルコ人は（トルコでは）実際トルコ人でした。ここにくる人は、ユダヤ人だからくるのです。大部分の人は（ユダヤ人の）一つの国を求めています。・・・もう何世代かして、ロシア系とかモロッコ系というような違いの意味がなくなれば、一つのアムになると思います。」
- Q アラブ人のことはどうするのですか？
- A 「アラブ人は彼等の国をもてばいいと思うので。」
- Q アラブ人と紛争なしで共存することはできませんか？
- A 「出来ないと思う。・・・不可能です。」
- Q 何が問題なのでしょう？ どうして出来ないと思いますか？
- A 「問題は、私達と彼等は全く違うからです。・・・私達は（彼等と）違うのです。・・・（それに）領土問題があります。彼等もここに住みたいし、私達もここが欲しい。・・・二つのアム（民族）が共存するのは不可能です。」
- Q では二つではなく、三つとか四つとか複数だったらどうでしょう？
- A 「だめです。」
- Q でも、世界には・・・
- A 「ユーゴスラビアで起こったことを考えれば、不可能だといわざるを得ません。」
- Q 確かに、ユーゴスラビアは（共存に失敗した）好例だと思いますが、共存している国もあるのではないのでしょうか？
- A 「・・・たぶん、そういうところは面積の大きな国だと思います。それも時間の問題です。・・・たとえばロシアですが、みんな一緒に生活していましたが、そのあと分裂しました。・・・ですから、私は（民族の共存は）無理だと思います。」
- Q あなたは、ここに家がなかったのに帰れないパレスチナ人についてどう思われますか？
- A 「最初の時期は、・・・私達が、彼等を追い出したのだと思います。それは良くないことです。それはフェアではありません。でも、そういう人達全員に今帰還を認めることは不可能です。もうそこには他の人達が住んでいます。私は、最初に私達が大きな間違いをしたと思います。でも、その間違いをどう直せばよいのか、私にはわかりません。」
- Q あなたは、彼等にシンパシーを感じるのですか？
- A 「ええ。」
- Q あなたはバイト（家）という言葉から何を連想しますか？
- A 「アパート、家、場所、などです。」
- Q あなたはショアが又将来起こるかもしれないということを考えたことがありますか？
- A 「・・・いいえ。・・・」
- Q あなたは、選挙で政党を選ぶときに、どういう点を重視しますか？
- A 「宗教政党ではないこと。極端な政党でないこと。・・・正常で穏健な政党という点でしょうか・・・」
- Q ‘極端’というのはたとえばどういう意味ですか？
- A 「たとえば、メレツです。」
- Q メレツはどうして極端なのですか？
- A 「非常に反宗教の立場をとっていて、・・・あまりにも‘アラブ人より’だと思います。・・・それは私には極端すぎると思え、もっと穏健な政党がいいのです。」

Q 誰に投票するかということで、ご家族では話しあわれますか？

A 「夫とは話します。」

Q ご両親はどの政党に投票していると思いますか？

A 「反アラブの政党です。・・・彼等は（私より）もっと極端です。」

Q ご両親も宗教政党は選択肢からはずしていますか？

A 「はい。」

Q それは、ご両親にも大事な点なのでしょうか？

A 「はい。大事です。」

Q 質問票の中で類似した概念についていろいろお聞きしていますが、・・・

A 「その質問はよくわかりませんでした。・・・レオムとは何ですか？」

Q ウマ（国民）という言葉は使われますか？

A 「使いません。」

Q レオム（民族、民族性）という言葉はどうですか？

A 「レウミなら知ってますが、レオムは知りません。」

Q レウミユット（国籍）は？

A 「それは少し知っています。アムに関わる、言葉だと思います。」

Q もし、あなたがどのアムに属しているかと聞かれたら、何と答えますか？

A 「イスラエル。」

Q どのウマに属しているかと聞かれたら？

A 「私には同じことです（笑）。」

I 7

生年月日：1948-3-24生まれ（52歳）

出生地：ルーマニア ジイジイン

性別：男

移住年：1988年（移住時年齢40歳）

一緒に移住した家族：妻、息子、妻の母

父親出生地：ルーマニア ジイジイン

母親出生地：ルーマニア ジイジイン

父方祖父出生地：ルーマニア ジイジイン

父方祖母出生地：ルーマニア ジイジイン

母方祖父出生地：ルーマニア ジイジイン

母方祖母出生地：ルーマニア ジイジイン

職業：コンピュータプログラマー

妻の職業：アカウンタント

職歴：コンピュータプログラマー

父の職業：職人

母の職業：主婦

最終学歴：大学

これまでの居住市町村：移民センター（東エルサレム）→エルサレムの分譲マンション

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「祭日。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「外国にいる時。」

Q3 あなたは、自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「いいえ。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「いいえ。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。ウルバンで学んでいた時。」

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム (nation) : 共通の祖先。

レオム (nationality) : NA

エズラフット (citizenship) : 特定の国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「国を守ること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエル軍隊をどう評価していますか？

A 「やってくれるだろう。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 一つのイスラエル (労働党)

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A 労働党、メレッツ

- Q 移住された時一緒にこられたご家族は、あなたのご家族全員ですか？それとも、どなたかむこう（ルーマニア）に残った方もいらっしゃいますか？
- A 「父は残りました。」
- Q お父さんは移住を望まれなかったのですか？
- A 「父は残りました。」
- Q 残ることを望まれたのですか？
- A 「ええ。」
- Q ご家族で移住を最も望まれたのはどなたですか？
- A 「妻だと思います。」
- Q あなたは？
- A 「（妻の気持ちを知った後）話しあいしました。息子とも。」
- Q 息子さんは当時おいくつだったのですか？
- A 「16歳です。」
- Q 彼は移住に対してどういう意見でしたか？
- A 「移住を承知しました。・・・でも、彼にはガール・フレンドがいたので、辛かったようです。ここに来てしばらくは、辛そうでした。でも、それは乗り越えて、・・・今は新しいガール・フレンドができたようです（笑）。」
- Q あなたの奥さんはどうして移住を望まれたと思いますか？
- A 「・・・なぜかというのを説明するのは難しいですが、彼女は強く望んでいました。私達は話し合っ
て、同じ結論に達しました。・・・移住しよう。」
- Q ルーマニアでは、移住することをずうっと考えて来られたのですか？
- A 「ずうっとというわけではないですが、・・・彼女が話しをだす数年前に、・・・それほど・・・（移住は）私達には大変でした。もうそう若くない年齢になっていましたから。」
- Q 当時はおいくつ位だったのですか？
- A 「40代です。・・・大変だと思いました。新しい言葉から始めなくてはならないのですから、大変です。」
- Q ルーマニアでは全然やっていなかったのですか？
- A 「いや、そこ（ルーマニア）でも始めていました。でも、（イスラエルで）仕事を見つけて、ゼロから始めるということは、・・・ルーマニアから移住するということは、・・・ルーマニアからは何も持ち出すことができないのです。・・・私達は、ここに来た時は何もなかった。・・・すべてはここでやらなければなりません。・・・私達はあそこ（ルーマニア）でアパートを売り、車を売って、すべてを売って・・・追い出されたのです。手元にあったお金は、全部あわせてもドルでいえば百ドル位でした。」
- Q お金を持ってくることはできないのですか？
- A 「お金は持ち出せません。禁じられていました。・・・一文なしで来ました。ベングリオン空港に着いたとき、150シェケル（注）彼の移住年である1988年当時の年度平均レートで約92ドル。）をもらったのですが、それが私達のすべてのお金でした。・・・大変でした。本当に大変だった。まったくゼロからの出発でした。冷蔵庫を買い、オープン、テレビを買い・・・何もかも。」
- Q 当時のルーマニアは政変以前ですよね？
- A 「政変の一年前の、チャウシェスク時代です。」
- Q あなたにとって、移住の最大の動機は何だったのですか？
- A 「・・・動機を答えるのは難しいです。・・・（ルーマニアでは）ほとんど選択の自由というものがなかった。・・・私は、あそこにはもういられないと思いました。・・・全てが沈黙していて・・・何かとてもいたたまれないような重苦しいものを感じて、・・・独裁政権の政治は耐えられないものです。・・・できません・・・」
- Q それは、ユダヤ人の人にとってだけの問題ではなかったと思いますが・・・
- A 「みんな出たがっていました。でも、可能性がなかった。・・・国境をこえようとした人もいます。彼等はつかまって、その後刑務所に送られました。・・・大変でした。」
- Q そういうことが少なくとも動機の一つになっていると考えてよろしいですか？
- A 「子供のことを考えると、（ルーマニアには）将来性が何もないと思いました。全てが閉ざされていて。・・・それで、もしいつかもっと自由を感じられ、自分を伸ばせるところにいくチャンスと可能性があればと、・・・（それを実行しようと）思っていました。」

Q あなた方に出国許可がおおりるまで、どのくらいかかったのですか？

A 「一年半です。」

Q 移住の時の航空会社はどこでしたか？

A 「ルーマニアの会社です。」

Q イスラエルールーマニア間を飛んでいる飛行機があるのですか？

A 「ええ。毎日飛んでいます。」

Q 一日一便ですか？

A 「何便かあるようです。」

Q ルーマニアーイスラエル間でそんなにたくさんの人の行き来があるのですか？

A 「はい。たくさんの労働者がルーマニアから働きに来ています。」

Q 短期の労働者ですか？

A 「たいていはそうです。」

Q 彼等はユダヤ人ですか？

A 「いいえ。」

Q それは契約労働なのですね。

A 「ええ。」

Q わかりました。

Q ヘブライ語は（ルーマニアで）学び始めたのですか？

A 「ルーマニアで学び始めていました。」

Q 勉強することのできる場所は（ルーマニアの）どこにあるのですか？

A 「そういう学校のようなところはありません。・・・たまたま教えてくれる人が見つかったのです。その人は高齢のユダヤ人で、いい先生でした。私達はお金を払って、その人のところに行って教えてもらいました。」

Q 奥さんもですか？

A 「はい。息子もです。」

Q どの位の間ですか？

A 「一年位です。」

Q 全く最初から習ったのですか？

A 「全く最初から。」

Q 移住して来られた時は、ヘブライ語がある程度わかりましたか？

A 「少しは。・・・あそこで学ぶことは、それだけのことで、ここにくると、それは又別のことです。」

Q ウルバン（移民のためのヘブライ語学校）ではどの位ヘブライ語をやりましたか？

A 「半年です。」

Q その後はウルバンには行かなかったのですか？

A 「その後は、・・・妻は働き始めて、・・・私はコース（注）日本のカルチャーセンターのようなものだが、ここでは職業訓練所のようなものとして考えた方がよいと思われる。）をもう一つやって、またウルバンに行って、それから働き始めました。」

Q 仕事をみつけることは大変でしたか？

A 「とても大変でした。」

Q どんなふうにしてみつけたのですか？

A 「新聞や友達やいろいろな可能性にあたって、・・・最後に・・・或る会社のことを聞いて、・・・そこは新しい移民が大勢働いているところで、そこにいて、社長と話しをしました。それで、雇われることになって、そこで働き始めました。・・・今の職場ではありません。その会社は日本とも連携した大きな輸送のプロジェクトをやっていて、日本語も少し習い始め、・・・何人かは日本で働くことになった人もいましたが、そうこうするうちに、日本の社長が急に亡くなり、・・・すべては終わってしまいました。このように、この社会はいつ破綻するかわかりません。それで、別の仕事を見つけなければならなくなりました。・・・やはり、私企業をみつけたのですが、有望な会社かどうか不安だったので、・・・私の年齢ではころころと転職をくりかえすことになるようなことは危険でもあり、公務員の仕事を探し始めました。・・・そしてこの職場にたどりついたというわけです。」

Q ここにこられて何年ぐらいになりますか？

A「92年からですから、ほとんど8年になります。」

Q あなたはダティ（宗教的）ではないとお見受けしますが、あなたのユダヤ人アイデンティティはどこからきていると思いますか？

A「それは伝統にかかわる問題で、そして伝統はだいたい祭日を通して維持されてきたと思います。」

Q ルーマニアでは、あなたはそうしたユダヤ的伝統をまもっておられましたか？

A「本格的にはないですが、ある程度は。・・・これも今言ったように、祭日が関係してきます。祭日というのはヤハドット（ユダヤ主義）を示すもので、祭日というのをのぞけば・・・（ヤハドットを示すものは）あまりないと思います。・・・ダティの人であれば、・・・お祈りをし、シナゴグ（ユダヤ教会）にも行くし、・・・そういうことをします。ダティでない人の場合は、ペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）やロシュ・ハ・シャナ（新年の祝い）やスコット（仮りおいの祭）などの祭日から（ユダヤ人であることを）感じると思います。」

Q でもルーマニアでは、ユダヤの祭日を祝うということはなかったのではないですか？

A「ルーマニアでは、あらゆる宗教的な祭日をーキリスト教であろうとヤハドット（ユダヤ教）であろうとー祝うことは禁じられていました。」

Q キリスト教のクリスマスもなかったのですか？

A「なかった。今はありますが、当時は・・・今とは違うので。・・・そういう状況のなかで、みんながそれぞれに何とかやっていたのです。」

Q たとえば、メズザ（注）ユダヤ人が入り口の扉の脇の柱に打ちつけるお守り。ユダヤ人の住宅や建物のドアの前にはほとんどつけてある。）をつけることはできましたか？

A「（首を振って否定）」

Q それも禁止されていたと？

A「ええ。・・・キリスト教徒が十字架を身につけることを禁止されていたのと同じ様に・・・」

Q ルーマニアの身分証明書にはアム（民族）の記載項目はあったのですか？

A「一律ルーマニア人となっていたと思います。」

Q 宗教は？

A「そんな項目はありません。」

Q アム（民族）の項目もないのですね？

A「・・・民族が何かというのは記載されていません。・・・でも、・・・いや、・・・やはり記載はありません。」

Q 国籍だけですか？

A「はい。」

Q では、ルーマニアで民族的な帰属を意識するのはどういう状況ででしょうか？

A「・・・さっき言ったように、祭日です。」

Q でも、祭日を祝うのは禁止されているのですよね？

A「建て前はそうです。・・・でも、各自それぞれ家庭のなかで祝うのです。それぞれやれる範囲のなかで。・・・」

Q あなたにとって、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティは同じですか、それとも二つは違うものですか？

A「違います。」

Q その違いについて、少し説明していただけますか？

A「・・・ここイスラエルには、あらゆる種類のユダヤ人がいます。・・・ロシア系のユダヤ人、アメリカ系のユダヤ人、イスラエル生まれのユダヤ人という具合に。アラブ諸国からきたユダヤ人もいます。それぞれが違うものをもっています。・・・モロッコ人やフランス人やイギリス人・・・等がいるように。・・・私の理解では、英国からきたユダヤ人は、何か英国的なものをもっている。モロッコからきたユダヤ人はモロッコのです。・・・そして、ここ（イスラエル）で生まれた人は、また別の種類です。彼等はイスラエルのです。外から来た人は、彼等はユダヤ人だけれども、彼等はイスラエルのではありません。私はルーマニアから来て、ルーマニア的なものが残っています。ロシアから来た人はロシア的なもの残っている。たぶん子供や孫の世代になれば‘イスラエル人’になるでしょう。でも、外からここにきた人は、イスラエルのではありません。メンタリティーが違います。・・・どこから来た人には、

その人のいた国のメンタリティーが染み着いています。（しかし）ここでは、違ったメンタリティーがつくられています。」

Q あなたは質問票で、ご自分をシオニストだと思おうと答えられています、どういう意味でそう思われるのか、説明していただけますか？

A 「・・・難しいですね。・・・色々な考え方があると思います。・・・たとえば（一般論で言えば）、自分がアムに属している、この場所に属していると感じることもシオニストだということだし、あるいはこの場所に住みたいと思うこと、それもシオニストです。・・・色々なシオニストの理解の仕方がある。・・・すごく極端なところでは、『この場所は我々の場所なので、アラブ人やパレスチナ人は海に放りこむのがいい。』と言っているような連中もいるが、私はそれをシオニストとは考えません。」

Q あなたは、「世界のユダヤ人は一つの民族であると思うか。」という問いに、「思わない。」と答えられています、それについて少し詳しく説明していただけますか？

A 「私の理解では、一つの民族であろうとすることには、良い面と悪い面の両面があると思います。・・・ですから私はみんなが一つの民族ではないと言っているのです。その理由は、たとえば、ブルックリンから来るユダヤ人は、（こことは）別の場所にすんで、彼等の生活を楽しんでいます。（しかし、）そこにも「戦争」があり、ここにも戦争があります。でも、彼等はここの我々の生活、政治のやり方に対して干渉してくる。例えば、彼等は選挙の時に投票しにやってきて、彼等の支持する政党に投票し、彼等がその政党に投票するために後で我々が苦しまなければならないようになります。そういうことはやって欲しくないのです。彼等は、ここに属していないのですから。彼等はあそこに住んでいるのです。『そこでやってくれ。』と思います。彼等はユダヤ人ですが、あそこのユダヤ人です。彼等はここのハ・アム・ハ・イエフ・デイ（ユダヤ民族）の苦しみに参加してはいません。それは（ここのユダヤ人は）苦しんでいる民族です。ここには色々な問題があります。ここには戦争があり、・・・様々なことがある・・・彼等はあそこにおいて、・・・彼等の生活を送っています。我々はここにおいて、・・・状況が全然違うのです。・・・ここに住んでいない人に、（この国がどう進むかを）選ぶ権利はないと私は思います。」

Q あなたは伝統をまもることをやっていないと答えられています、それはやりたいと思わないからですか？

A 「・・・『伝統をまもる。』とはどういう意味ですか？シャバット（安息日）に車に乗らないことですか？・・・私は、そんな「伝統」は要りません。シャバットであろうが車にも乗ります。私は自由な人間でいたいので。」

Q 祭日は？

A 「それはやります。祭日はまた別です。でも、肉とミルクを一緒にとらないというようなことは、なぜそんなことを守る必要がありますか？それは、三千年前の話です。冷蔵庫がなかった時代の（笑）。暑くて、・・・食中毒になる危険があった。・・・今は時代が違います。もう危険ではありません。世界中どこでも、ヨーロッパでも、（何を）食べても問題ありません。少し肉を食べて、・・・少し別なものを食べて・・・おいしくて・・・誰もそれで死にません。」

Q 割礼とかパール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）はどうですか？

A 「随分前に終わったことです。もうそういう年齢ではありません。・・・（笑）もう年ですから（笑）。」

Q あなたは、息子さんに子供ができれば、割礼やパール・ミツバをしたいですか？

A 「私が決めることはありません。」

Q あなた自身にとって、どうするかということは重要なことですか、それともどうでもいいことでしょうか？

A 「私の考えですか？割礼についての？」

Q まず割礼のことから。

A 「反対です。」

Q ではパール・ミツバは？

- A「パール・ミツバはまた別です。・・・でも、割礼は野蛮な行為です。・・・（笑）」
- Q 息子さんには（ルーマニアで）パール・ミツバをしましたか？
- A「はい。・・・割礼もしました。・・・でも（割礼には）反対です。」
- Q でも実際は、されたわけですね。・・・
- Q あなたにとってアム（民族）とウマ（国民）には、概念上違いがありますか？
- A「よくわかりません。」
- Q ほとんど同じように思えますか？
- A「・・・」
- Q ウマという言葉を使われますか？
- A「（首を振って否定）」
- Q レオム（民族／民族性）という言葉はどうですか？
- A「（首を振って否定）」
- Q アムは使いますか？
- A「はい。」
- Q レウミユット（国籍）は？
- A「（首を振って否定）」
- Q エズラフット（市民権）は？
- A「はい。・・・エズラフットは、より普遍的な概念だと思います。たとえば、私はルーマニアのエズラフットとイスラエルのエズラフットを持っているというような。・・・私は二つパスポートを持っています。」
- Q ルーマニアはパスポートの返還を要求しなかったのですか？
- A「いいえ（しませんでした）。」
- Q あなたにとって今のイスラエルの最大の問題は何ですか？
- A「二つ問題があります。・・・多額のお金が戦争とダティイム（宗教的な人々）にいつていることです。・・・そういうお金は全く無駄です。お金は平和のためにもっと使うべきで、それからダティイムも働くようにすべきです。」
- Q そういふ点で、将来、イスラエルはどういう方向に進んだらいいと思いますか？
- A「私が何を望んだとしても事態は変わりません。進む方向はわかっています（笑）。・・・例をあげてみましょう。ここに、34歳の女性がいます。」
- Q それは冗談ですか、それとも実際のことですか？
- A「事実です。・・・彼女は7人子供がいて、今8人目の子供を妊娠しています。・・・問題は、ダティイムは子供をたくさんつくることです。10人、20人。ヒロニムは1人か2人です。これから三、四十年もすれば、ここ（イスラエル）の人口の大部分はダティイムになるでしょう。彼等は、働かず、軍隊にもいきません。・・・そして、ここに戦争が起こったら終わりです。・・・私が思うに、アレツ（イスラエル）に将来はありません（笑）。・・・おかしく聞こえるかもしれませんが、非常に、非常に、非常に起こりうることです。」
- Q 政治的な点ではどうですか？
- A「それは政治的問題の一部です。今、宗教政党は、あろうことか、採決のときの投票と引き換えにお金を要求しています。・・・賛成／反対票をいれるから、お金をよこせと・・・深刻な問題です。和平案を採決しようという時、もしお金を払わなければ、彼等は‘戦争’に投票しかねない。・・・めっちゃくちゃです。」
- Q とても悲観的な展望に思えますが・・・
- A「大変現実的です。」
- Q ユダヤ人とパレスチナ人の関係についてはどのような展望をお持ちですか？
- A「私は少なくとも月に一度旧市にでかけます。・・・（一方）旧市に行くことを怖がって、インティファダが始まった87年以降いついていない人がいます。・・・私は、人間というのは単純なものだと思います。もしビジネスをして、お金があり、食べるものがあれば、その人は問題を起こしません。もしアラブ人が、旧市に彼の店を持っていて、私が買い物すれば、彼は嬉しい。生活がなりたてば私を殺すことはしません。・・・色々紛争で問題を起こしている人はこれとはまた次元が違いますが、市場や通りを

歩く人間はパレスチナ人と平和にやっていけると感じています。ここには、長い間一緒にやってきた伝統があります。何も起こらなかったのです。今、突然、・・・問題が起きている。平和に至ることはできるのに、極端な連中が多すぎます。・・・頭が凝り固まった連中です。・・・イスラエルの政治は・・・もったときちんと立て直さなくてはなりません。でも、それはとても難しいことです。・・・もし（宗教政党が）今の状況を‘利用’しようとするのだったら、宗教諸政党を政治から放逐すべきです。というのは、私が思うには、先ほども言ったように、選挙権というのは、ここに住んでいて兵役についている人だけが行使すべきだからです。（軍隊の経験の中で）何が平和で何が戦争かということがわかっている人が。・・・人生の全てを祈りにかけている人は、祈っていただければいいのです。それが悪いとは言いません。でも、政治の問題に干渉してきてあれこれいってほしくありません。・・・兵役を果たしている人は、この国がどうなるべきかについて言う権利があるけれど。・・・」

Q では、今同じように兵役についていないアラブ人については、どうなりますか？

A 「ええ、もちろん、アラブ人には兵役を与えていません。軍隊は‘反アラブ’で戦っているのですから。アラブ人に戦争の状況の中で『アラブ人を殺せ。』と言うことはできません。それは、限定しておかなければなりません。でも、・・・いいですよ。・・・いつか合意に至り、軍隊が志願制になって選択できるのであれば、選択しないアラブ人には選挙権がないかもしれませんが、・・・その方がすっきりします。」

Q あなたはユダヤ人にとっての国や領土というものが重要だと思いますか？

A 「もちろんです。もちろん重要です。」

Q というのは、（世界には）一つの国の中に複数の民族がいるという国があります。一方イスラエルは、ユダヤ人のための国家としてつくられました。あなたは、イスラエルも複数の民族からなる国としてなりたつことはできないと思いますか？

A 「できると思います。」

Q 私の質問の意味がわかりますか？

A 「わかりますよ。・・・たとえば、ユダヤ人ではないからここに住む権利はないと言ったとします。たとえば、何世代も何世代も、ここに、この土地に住んできたパレスチナ人に、『ここに住む権利はない』と、『あなたは、ここからでていかななくてはならない。』と言ったとする。そしたら、私はこう聞きます。・・・『ユダヤ人がいる世界で何が起きているか。』と。たとえばアメリカやドイツやフランスで、もし『ユダヤ人はみな出ていけ。』と言われたら・・・それは何故？・・・それは何？・・・反ユダヤ主義じゃないかと。・・・もしこのアラブ人に『おまえ達は、出でいけ』と言ったとしたら、同じことではないですか？・・・ユダヤ人に世界のどこにでも住む権利があるように、他の人々にもここに住む権利があります。」

Q でも、（イスラエルの）ほとんどの人は、あなたの様には考えていないですよ？

A 「ええ。」

Q それが問題だと私は思います。

A 「ええ。・・・問題です。・・・問題です。」

Q あなたは、家を追われここに帰れないパレスチナ人のことをどう思いますか？

A 「それは問題です。・・・二つの可能性があると思う。全員に帰還を認めるか、倍賞金を払うかです。・・・もし誰かが何かをとりあげようとしているとします。そうしたら、相手は、『待ってくれ。それを返してくれ。・・・そうでなければお金を払ってくれ。』というでしょう。誰かの家を取りあげる権利が誰にありますか？彼が何ををしたというのか？どうしてとりあげるのです？買うのならいいですよ。・・・」

Q 私もあなたのおっしゃることには全く同意見ですが、ここでそう考える人はとても少ないように感じます。

A 「そういうことに同意する人は、とても少ないです。・・・だから何の解決にも至ることができないのです。」

Q そういう考えを広げるにはなにが今欠けていると思いますか？

A 「私の様に考える人々です（笑）。・・・」

Q どうして他の人々はあなたの様に考えないのでしょうか？

A 「ここには‘憎悪／敵意’があります。‘憎悪／敵意’があるから、道理にあった考えが生まれてこないのです。」

Q 何が先かをいうのは、にわとりと卵の関係のように難しい問題だと思いますが、少なくとも100年前は今のような紛争はなかったわけです。パレスチナ人の‘憎悪／敵意’は、ここに（外から）やってきた人々によってつくられたとはいえないでしょうか？

A 「そうかもしれません。・・・そうかもしれない。・・・とにかく、‘憎悪／敵意’が問題です。ユダヤ人からもアラブ人からも、あらゆる方向からの‘憎悪／敵意’がある。問題を終わらせるうえで何にもならないものです。・・・子供の教育や学校で何かを始めなければなりません。」

Q 選挙の投票の時に、あなたはどのような点を重視して投票する党を決められますか？

A 「・・・私は自分の様に考えている人々に投票します。・・・それは、左派です。」

Q 労働党を支持したり、メレツを支持されたりと、変えられているようですが・・・

A 「私はその時（メレツにいた時）は、メレツがいいと思っていました。メレツは、シャバットの交通規制をはずす、ダティイムの権利をもっと少なくする、シャバットにも店を開く、・・・というようなことを主張していて、（考えが）進んでいます。・・・でも、彼等は（実際）何もしないということがわかりました。それで、次の選挙では、左派で、もっと大きな政党にしたのです。その政党の勢力がもっと大きくなればよいと思って。連合政権での力を大きくするために。」

生年月日：1956-5-1生まれ（43歳）
 出生地：アルゼンチン コルドバ
 性別：男
 移住年：1976年（移住時年齢23歳）
 一緒に移住した家族：父、母、兄、姉
 父親出生地：アルゼンチン モイセスビル
 母親出生地：アルゼンチン コルドバ
 父方祖父出生地：ルーマニア NA
 父方祖母出生地：ロシア NA
 母方祖父出生地：ルーマニア NA
 母方祖母出生地：リトアニア NA
 職業：コンピュータプログラマー
 妻の職業：グラフィックデザイナー
 職歴：なし
 父の職業：臨床士
 母の職業：なし
 最終学歴：ヘブライ大学
 これまでの居住市町村：エルサレム

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「違う民族と会う時。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A NA

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「いいえ。」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。1978年。」

感想：覚えていない。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム (nation)：他の集団と区別される共通の過去を持つ人々の集団。

レオム (nationality)：近代的政治的実体への帰属。

エズラフット (citizenship)：国家による権利を得ること。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「我々への攻撃があった時の防衛。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「とても良い。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A メレッツ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A シェリ、メレッツ

- Q あなたのご家族が移住を決意された最大の動機は何ですか？
- A 「一つは、両親も私も、シオニスト運動に参加していました。両親は若い時に、私も13歳からです。そういう訳で、アルゼンチンでのユダヤ人社会といつもつながりがあって、移住することを望んでいたのです。・・・そしていよいよ移住することになったのは、アルゼンチンの政治がきっかけです。（その頃）軍事政権になり、・・・父は左翼に属していたので、とても危険でした。・・・」
- Q シオニスト運動ではどういうことをされていたのですか？
- A 「まずは、人々（ユダヤ人）の集まる場所で、・・・子供達の活動の場合だとパーティをしたりサッカーをしたりという風です。でも、いつも中心的な活動が一つあって、エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）とつながりをもつ活動をしていました。・・・たとえば、キブツの生活とは何かを学んだり、他にもイスラエルに関する講義を聴いたり、議論をしたり、エレッツ・イスラエルの絵を描いたり・・・」
- Q 移住する前に、すでにイスラエルに知り合いの方はいましたか？
- A 「ええ。たくさん。まず、おばが48年に移住していましたし、他にも友達や知人がたくさんいました。」
- Q 移住してからは、ずっとエルサレムに住んでいるのですか？
- A 「はい。」
- Q 同じ場所に？
- A 「はい。・・・両親は同じ場所にです。最初の数カ月はベール・シェバの移民センターにいましたが、そこからエルサレムに移ってからは同じ場所です。」
- Q お父さんの職業という点で、移住の前と後では変化がありましたか？
- A 「はい。同じ分野ですが職業は違います。アルゼンチンでは、精神科医で、彼は自分の診療所がありましたが、ここでは臨床士として病院で働き始めました。・・・仕事は全く違いますが、同じ分野です。」
- Q あなたは移住された時は、まだ働いていなかったのでしょうか？
- A 「仕事にはついていませんでした。・・・大学に入って、数学と物理を専攻し、それからコンピュータを少しやって、今の仕事を見つけました。それ以来ずっとここで働いています。」
- Q ヘブライ語はどこで勉強したのですか？
- A 「アレッツ（イスラエル）です。」
- Q まったく最初からですか？
- A 「ええ。」
- Q ご両親は？
- A 「父は少しアルゼンチンでもやっていました。でも、ほとんどは移住後に、移民センターで学びました。」
- Q お父さんが移住されたときはおいくつ位でしたか？
- A 「父は50歳です。」
- Q ご両親とは何語で話すのでしょうか？
- A 「父は亡くなりました。母とはスペイン語で話します。（母は）ヘブライ語もできますが私とはスペイン語です。」
- Q 質問票で、ユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティについてお聞きしていますが、ユダヤ人であることとイスラエル人であることの、あなたの中での関係はどのようなものでしょうか？
- A 「二つには違いがあります。・・・私にはユダヤ人であるということが何なのかという事は難しいです。イスラエル人であることが何なのかということも。・・・そして、二つのアイデンティティは分けられないものでもあります。しいていえば、ユダヤ人アイデンティティを先に感じるといえるかもしれません。アルゼンチンでも私はユダヤ人でしたが、イスラエル人というのはここに来てからですから。」
- Q あなたのユダヤ人アイデンティティはどこからきていると思いますか？
- A 「・・・どこからきているか？・・・どこからくるのかと聞かれても、それは難しいです。・・・小さいときから自分はユダヤ人だといわれてきました。まず、両親からといえますが、それだけではありません。近所の人々や友達などみんな、私達の地区はユダヤ人の地区だとわかっているし、学校もそうだし、みんなわかっていることです。」
- Q どうしてわかるのですか？顔をみただけではわからないのではないですか？
- A 「顔だけではわかりません。・・・もし隠そうとすればそれも可能です。・・・年をとっている人は、ロシ

アからアルゼンチンに移住した人などはロシア語のなまりが消えていないので隠せませんが、我々位の年代なら、名前をかえたりすれば、隠すことはできます。」

Q 名前をかえたりしている人はいるのですか？

A 「ほとんどいません。」

Q ユダヤ人のアイデンティティというのは何千年も消えずに続いているわけですが、あなたはどうして、それが消えずに続いてきたと思いますか？一般論としての問題とあなた個人の場合についてどう思うかを聞かせてください。

A 「一般論としては、我々はそれが消えることを望まなかったといえます。我々は・・・我々のヤハドット（ユダヤ性）に満足していてそれが気に入っています。・・・たとえば、ヨーロッパに行ったとすると、そこでアルゼンチンやイタリアや色々なところから来ている集団に出会います。すると、いつもアルゼンチンやロシアやアメリカや色々なところから来ているユダヤ人は集団をつくっています。・・・なぜかといわれてもわかりません。我々はユダヤ人が他の人達と違うということを感じるのです。・・・歴史のアイデンティティとでもいうのでしょうか・・・どこからくるものかはわかりません。

個人的には、・・・人間は誰でも、帰属する集団が必要です。人というのは帰属する対象を求めています。・・・それはハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）だけでなく、すべての民族がそうです。帰属するものを探しています。・・・時としてそれは正しくないこともあります。例えばアルゼンチンでは、インディアン達の生活の歴史のルーツを探しています。・・・アルゼンチンの住民は・・・もしインディアンの子孫でないとしても（子孫であってもなくとも）（ルーツを探しています）。・・・彼等はもう死んでいるのに。・・・でも、彼等は自分達の過去としてインディアンを考えています。誰に属しているかを探しているのです。ユダヤ人も同じことで、彼等は祖父はここから来たとか、・・・その変遷を思い出しています。・・・」

Q どこかの国に（国民として）帰属するというだけでは不十分ですか？

A 「不十分です。特に今の時代は。・・・今は、国に属しているだけでは（不十分です）。・・・誰もが国を越えて移動しています。・・・今の時代は、アルゼンチンに住むのと、英国に住むのと、イスラエルに住むことは同じことです。私の兄は、アルゼンチン人でしたが、その後イスラエル人になって、今はロンドンに住んでいます。・・・どこかの国に属して、その所属を次はここ、次はここと変えて、・・・仕事に就いて、選挙権を得て、・・・それは運次第です。・・・国への帰属という事に関しては。・・・」

Q お兄さんはご一緒に移住されて、それから（ここを）去られたのですか？

A 「はい。」

Q むこう（英国）で住むことを選んだのですか？

A 「ええ。」

Q それはどうしてだと思えますか？

A 「・・・彼にとってここでの生活はとても大変でした。・・・彼も医者で、精神科医としてやっていたとしていました。・・・まず第一に、毎年兵役に就かなければならないことは、彼にとって大変でした。・・・次に、ここでの精神科医での研修が、彼にとってとても大変でした。どうしてかはわかりませんが、大変だった。・・・若い医者はここではものすごく働いています。給料は少ないのに、夜勤が多く、・・・大変な生活です。・・・そのうちに、英国でいい仕事が見つかり、むこうに行ってしまったのです。」

Q 前の質問にもどりますが、なぜどこかの国に（国民として）帰属するというだけでは不十分だと思われるのか、少し詳しく説明していただけますか？

A 「・・・さっきも言ったように、国に帰属することは、・・・まず第一に、国の中には様々な集団がいます。私にとっては、アメリカのユダヤ人と話しをする方が、ガリラヤ（イスラエル北部地方）のチェルケス人（イスラエル内のマイノリティ集団）と話しをするよりも簡単です。（自分に）近いもの、属しているものを求めている（から）。・・・だからといって、私はイスラエルにアラブ人がいることがいやだと言っている訳ではありません。それは全然かまいません。・・・」

Q 「ユダヤ人の国」として自己定義しているイスラエルの国の性格については、あなたはどのように思われますか？

A 「・・・我々は、『ユダヤ人国家』です。・・・でも、今日『ユダヤ人国家とは何か』という大きな議論があります。私は自分がユダヤ人だと思っているし、100%ユダヤ人だと思ふし、メア・

シャリム（注）エルサレムにある、超正統派ユダヤ教徒が住んでいる地区）に住むラビ（注）ユダヤ教徒の集会や儀式、その共同体の生活全般に関する権威者）以下だとは思いません。・・・我々のヤハドットの基礎をなしている原因が何かというのは、・・・難しい質問です。・・・イシャヤウ・ベルリンという人の本を以前読んだのですが、その中にこういうことが書かれています。フランス人には、フランス人とは何かという問いは問わない。なぜフランス人かとも問わない。イギリス人にも、なぜイギリス人なのかとは問わない。・・・我々にはいつもメディナ（国）のヤハドットは何だったのかという問いがある。そういうようなことです。そんなことはわからない。・・・ここが我々の国で、我々はここにいたいと思っていて、我々はここが我々の国で、我々の国が欲しいと言っています。

・・・『ユダヤ人国家』が私に何をしてくれるのか私にはわかりません。わかりません。多くのユダヤ人がやってくる、私にはそれで十分です。・・・なぜイスラエルが『ユダヤ人国家』なのか、わかりません。ここにたくさんのユダヤ人がいるからなのか？それもあるでしょう。・・・過去の多くの住人は・・・この過去や歴史はユダヤ人の過去であり歴史です。それが我々がユダヤ人国家である証しです。・・・宗教やシンボルなどは後からの二次的なものです。・・・我々はユダヤ人であること、我々は・・・ここに多くのユダヤ人であること、・・・そのことがこの国がユダヤ人国家である証しです。」

Q 要するに、あなたは世界に「ユダヤ人国家」というものが必要だという考えですか？

A 「はい。」

Q ではあなたは、ここを追われ、帰りたくても帰れないパレスチナ人の人々について、どう思われますか？

A 「イスラエルに帰りたいという人のことですか？」

Q イスラエルに帰りたい人とウエスト・バンクに帰りたい人とでは違いがあるのですか？

A 「難しい問題があります。・・・難しい問題が。・・・問題が難しいのは、・・・二つの民族間に紛争が、戦争があるということ。・・・『私達のところにどうぞ来てください。』とはなかなか言えません。・・・一人や二人が帰ってきたとしても、問題ではありません。一人一人には問題はない。でも、おかしいことですが、みんなが帰りたいとなると問題です。・・・別の観点からみると、・・・政治的に、・・・我々も侵害されていることが一つあります。・・・ヘブロンにはユダヤ人が住んでいました。ヘブロンはユダヤ人の町だった。1939年までは住民はユダヤ人でした。・・・そして色々なことが起こり、戦争になって、今はほとんどの住民はアラブ人です。・・・我々はそこに帰りたいし、我々はヘブロンは我々の町、ユダヤ人の町だと思っています。・・・でも、我々は『ユダヤ人はここで、アラブ人はそこ。ユダヤ人の国とアラブ人の国』ということがわかっているし、それを望んでもいます。でも我々は、ヘブロンに帰ることを頼んでいません。帰ることを望んでいるユダヤ人もいないことはないですが。・・・でも、我々が望んでいるのは、ヘブロンは不問にして、『ここにユダヤ人の国を、そこにアラブ人の国を』という考えです。パレスチナ人が同じことを言わないのが私には納得できません。・・・個人的にはそれが納得いきません。・・・パレスチナ人も同じように『ユダヤ人はそこに、アラブ人はここに。・・・我々はヤフォにあった家を返してくれとは言わない。』と言うべきです。我々がヘブロンにあった家を返してくれとは言わないように。・・・ヘブロンには、コーヘンという（ユダヤ人の）名前の家があり、そこで生まれ、育ち、住んでいたことが、わかる人にはわかる。・・・だから、そこに住んでいたユダヤ人がいるように、そしてそこに帰りたいように、ヤフォやエルサレムに住んでいたアラブ人で帰りたいと思う人もいるでしょう。・・・もし別々に住むことを望むなら、ヘブロンを不問にしているようにヤフォは不問にすることが必要です。」

Q エルサレムも半分半分にするのはですか？

A 「・・・難しい。・・・エルサレム問題は難問です。・・・私は、不問にできます。半分でいいです。半分とは何か？・・・エルサレムにはユダヤ人地区とアラブ人地区があります。その現状を維持するのはです。ユダヤ人地区にはユダヤ人が残り、・・・ショアパット（注）ラマラのそばの北エルサレム）地区にはアラブ人が残る。こういう場合は問題なく分けることができます。アラブ人はここがユダヤ人の地区でユダヤ人はここがアラブ人地区とわかっていて、お互いに邪魔することはありません。エルサレム問題で難しいのは、細かく混住している地区と旧市です。・・・旧市もそうだし、オリーブ山の狭い地域や、コテル（注）嘆きの壁）やモスクやアクサ（注）嘆きの壁の裏側にあるエル・アクサ寺院）なども、それ以上に大問題です。どちらに属させるのかが決められないので。・・・ユダヤ人もアラブ人も誰も譲りたくない問題です。譲りたくないのです。・・・我々は、一度（エルサレムが）国際

管理下になることを承知しました。国連分割案では、エルサレムは国際管理下になるはずでした。・・・我々は承知した。承知しなかったのはアラブ人でした。・・・その後、状況は難しくなっていました。

我々はもう現状を譲ることはできないと思っています。理由は幾つかあります。一つは、もし（今）アラブ人が（その場所を）持っていたら、それを分けることは不可能です。家を真ん中で分けることはできません。そして、アラブ人のところに行く心の準備もありません。そこに行くことは難しい。逆のことは、・・・ユダヤ人のところへはアラブ人は常に来ることができます。今日、（アラブ人は）彼等の家族に会いに来たり、十万人位が行き来しています。我々には、（逆のことは）問題です。我々は自分達の手の上に問題をのせておきたいと思っています。・・・難しい問題で、・・・最後まで我々の手の上にのせておきたい・・・とにかく力で居座ること（苦笑）・・・」

Q あなたはユダヤ的な伝統をまもりたいと思っていますか？

A 「ユダヤ的な伝統とは何ですか？」

Q いろいろな意味でお聞きしているのですが。・・・

A 「戒律や宗教はまもりたくありません。シャバット（安息日）、宗教はノーです。」

Q たとえば、息子さんがいたとして、彼にパール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）をしたいですか？

A 「したくないです。」

Q 息子さんはおられますか？

A 「います。」

Q 彼にパール・ミツバをしましたか？

A 「その年齢になっていません。」

Q その年齢になったらすると思いますか？

A 「する必要はないと思います。」

Q 割礼はどうですか？

A 「割礼はしました。」

Q どうしてされたのでしょうか？

A 「・・・わかりません。・・・したくはなかったのですが、友達や家族など周りからやらないとだめだと説得されて。（私は）したくはなかった。」

Q 質問票の回答を拝見する限りでは、あなたにとって、ユダヤ的な伝統はそれほど重要な問題ではないと理解したのですが・・・

A 「それは誤解です。・・・私は、自分がユダヤ人だと言っています。私のすることは、ユダヤ人の伝統なのです。」

Q たとえばどんなことですか？

A 「・・・伝統とは何か？父や祖父がしてきたことです。そうでしょう？父も祖父もパール・ミツバはしてきませんでした。私の家族は誰もダティ（宗教的）ではありません。そしてみんなユダヤ人です。・・・私は家族の伝統をまもっています。私が知っているのは、私はユダヤ人で、祖父はロシアのユダヤ人の町に住んでいて、そこから他のユダヤ人と一緒にアルゼンチンに来て、アルゼンチンのユダヤ人の町に来て、・・・それが私の伝統です。・・・我々をユダヤ人にする他の要素もあります。世界の人々は、ユダヤ人はいつも質問ばかりするということをみんな知っています。・・・知っているんです。・・・だから私もそうしています。我々をユダヤ人にする様々の要素がありますが、それは宗教ではないし、ペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）を祝ったりマツァ（ペサハに食べる種なしパン）を食べることではありません。私は、ペサハやマツァには興味ありません。・・・私はユダヤ人です。私のユダヤ人性がラビに劣るとは思いません。」

Q あなたは、メズザ（注）ユダヤ人が入り口の扉の脇の柱に打ちつけるお守り。ユダヤ人の住宅や建物のドアの前にはほとんどつけてある。）をドアにつけていますか？

A 「つけていません。」

Q （イスラエルで）つけていないというのは（ユダヤ人には）例外的なぐらい珍しいのではないですか？

「そうですね。」

Q あなたの家ではつけていないのですね。

- A「つけていません。宗教に関わることは私は何もしません。」
- Q メズザをドアにつけることは宗教に関わることですか？
- A「ええ。」
- Q 宗教に関わらないユダヤ的な伝統や文化はあると思いますか？
- A「・・・・・・・・・・・・・・・・」
- Q 私も（何があるだろうと）考えているのですが・・・
- A「私も考えています（笑）。・・・わかりません。」
- Q つまり、あなたにとって、ユダヤ人であるという意識は自然で自明なことだということですか？
- A「ええ。」
- Q では次に、質問票で市民権について定義してもらいましたが、あなたは、イスラエルがイスラエル内のユダヤ人とアラブ人に同じレベルで市民権を与えていると思いますか？
- A「はい。」
- Q 疑う余地はなく、ですか？
- A「疑う余地はありません。・・・問題はあります。・・・メディナ（国）がどのように異なる人口を援助しているかという点では、・・・我々は、ユダヤ人がアラブ人より多い補助金を得ているということを知っています。それは疑う余地のないことです。行政がエルサレムの町に与える補助は、（たとえば）タイベのアラブ人の町へのそれより大きい。それはよく知られています。・・・でも、・・・またこうも言えます。行政がアシュケナジの人々に与える補助は、スファラディの人々へのそれより大きい。それも差別です。・・・でも、権利という点では、イスラエルの法律はアラブ人の権利とユダヤ人の権利との間に差をつけてはいないと思います。・・・誰でも国会議員になれるし、裁判所でも職場でも、・・・メディナ（国）はみんなに同じ権利を与えていると思います。・・・（アラブ人だからといって）選挙権のない市民だということではないし、特定の仕事にしかつけないというのでもありません。」
- Q あなたがヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）を訪れたのは1978年ということですが、それは一人で行かれたのですか、それともどなたかと行かれたのですか？
- A「グループで行きました。」
- Q どんなグループですか？
- A「キブツにいたとき、・・・キブツのウルパン（移民のためのヘブライ語学校）でヘブライ語を勉強していたとき、ヤド・バ・シェムにいく行事があったのです。」
- Q そのときの感想の回答は答えられていませんが、これは答えたくないということでしょうか？
- A「覚えていないのです。」
- Q 訪問の前と後で、特にユダヤ人アイデンティティという点で何か変化がありましたか？
- A「・・・・いいえ。（そこに展示されていることは）知っていましたから。・・・私が見たものは、もう前に感じていたことでした。・・・私が覚えているのは、そこにある写真をみて怒りの気持ちが湧いたということです。」
- Q その怒りはまず誰に対してのものでしたか？
- A「ドイツ人に対してとても怒りを覚えました。・・・私がそこにいたら自分は何をしたらろうと深く考えました。・・・それはユダヤ人としての憎悪感というのではなく、・・・私がそこにいたら自分は何をしたらろうと。・・・地下組織に加わったのだろうかとか・・・」
- Q あなたは、ヤド・バ・シェムを訪れることをみんなに勧めたいですか？
- A「ええ。」
- Q そこを訪れることは重要なことですか？
- A「・・・・我々を知るために、・・・訪れるのは重要だと思います。」
- Q 「我々を知る」とは？
- A「ユダヤ人を。・・・過去に起こったこと、それが我々の歴史だということ、・・・我々が我々の国を欲しいと言う時、我々にとって確かである場所が欲しいと・・・・スイス人にはスイスがあり、彼等は800年も誰からも攻撃されていなく、彼等は何も不安なことはありません。彼等が‘安全’について語る時、（実は）何について語っているかわかっていません。彼等はもう長い間自信を持っていま

す。我々が‘安全’について語る時は、・・・我々がレバノンでの、ガリラヤでの‘安全’について語る時、我々はドイツの強制収容所を思い出します。我々の感情は、もし我々が自分達を防衛しなかったら、我々の国を持っていなかったら、我々がドイツで攻撃されたようにレバノンで攻撃されるという感情です。・・・我々が理解していることは、・・・我々の感情は、・・・我々がイスラエル国家について『ここは我々の場所だ。』と語るとき、・・・ヤド・バ・シェムに行ったらそういう我々の感情がどういうものかを理解することができると思います。」

Q あなたにとって、今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A 「イスラエルで？・・・今イスラエルの最大の問題は、・・・人々の考え方の分極化です。・・・特に政治の問題で。戦争と平和、占領地を返還すべきか否か、宗教と非宗教などの問題で、人々は語ることを止め、お互いに攻撃しあっています。・・・常にいがみあっている。・・・今は、‘左’と‘右’とがテーブルについて話し合うことが難しくなっています。・・・一方は相手を敵とみなし、その相手の方も相手を敵とみなしています。・・・今はアレツ（イスラエル）はとても難しい。・・・」

Q あなたが望むような方向にイスラエルが進むうえで、欠けているものは何だと思いますか？

A 「・・・わかりません。・・・今は、とても難しい。・・・（イスラエルの外の）アラブ人は助けてくれないし・・・」

Q 誰をですか？

A 「我々を、・・・アラブ人をも。・・・もし・・・もしアラブ人がイスラエルを攻撃しなかったら、我々にはずっと前に平和がきて、彼等にも我々にもそれぞれの国ができていました。何の問題もなかったのです。我々は、棒引きにしようとしていました。・・・喜んでというわけではもちろんないにしても。・・・例えば、・・・96年に、・・・パレスチナ人との合意への調印の後に、二つの国家をつくる方向に早くもっていくべきでした。イスラエル国家とパレスチナ国家を。・・・そうしたら、大きなテロが始まってしまい、・・・すべては止まってしまいました。・・・もう和平の可能性はありません。96年、リクードが政権をとり、・・・すべて止まってしまったのです。・・・今は（和平合意を）続けることはできますが、状況はずっと難しくなっています。・・・もし当時彼等がオスロ合意に従って忠実に、正しく我々と歩んでいたら、・・・もうずっと前に二つの国家ができていたはずで。・・・（でもそれを彼等は）望まなかった。・・・」

Q イスラエル人にも望まなかった人々がいるのでは？

A 「ええ。イスラエル人にも望まなかった人はたくさんいます。でも、イスラエル人で望まなかった人々は、『（イスラエルは）民主国家で、問題はない。なんとかしよう。』と言っています。我々が感じていることは（こうです。）・・・アラファトやPLOは『我々はテロリストではない。テロリストはハマスだ。』と言っています。ここには、二つの問題があります。一つは、イスラエルにもユダヤ人のテロリストはいるということ。でも、イスラエルはそれをやめさせようとしています。（しかし）アラファトは、ハマスのテロをやめさせようとしているようには感じません。むしろ逆だと思えます。我々が感じるのは・・・ハマスがバスを爆破するとアラブ人は喜んでいるということです。・・・アラブ人はそれをとても喜んでいることを我々は知っています。」

Q どうして喜んでいるとわかるのですか？

A 「・・・テレビでみると、（爆破事件の後彼等は）お祭り騒ぎをしています。・・・とても心が痛みます。・・・ユダヤ人がテロを起こしたら、我々は怒りますよ。怒って・・・」

Q ユダヤ人にも（ユダヤ人のテロに）喜ぶ人があるかもしれませんよ。

A 「います。ユダヤ人にも（ユダヤ人のテロに）喜ぶ人はいます。でも、我々は公式に怒りを表わし、反対のデモをしますが、アラブ人の間には、自然にわきおこる非難や反対のデモのようなそれを防ぐための行動はありません。・・・今日このアラブ人とユダヤ人には信頼が欠如しています。・・・今は、合意に至ることがとても難しい状況になっています。」

Q あなたは（イスラエルの）将来に対して悲観的ですか？

A 「・・・私は、常に楽観主義者です。・・・今は状況は難しい。・・・『決断する時がきたら、正しく決断しよう。』とよくいうではないですか。・・・でも『その時がくる。』ことはとても難しい。・・・ゴランの問題でも、もしシリアと合意に至ったら、大半のユダヤ人はそれを支持すると思います。・・・でも合意に至るまでが難しい。・・・我々のところ（イスラエル）では、そのことで政府をあげて二分する考え方を競わなければなりません。」

- Q あなたが先ほどいわれた、イスラエル国家とパレスチナ国家という将来の展望は、そう近い将来に実現するとは思わないのですが、もしかりに実際にそうなったとして、イスラエル内のアラブ人ももっと権利を獲得し、政治的勢力や運動が大きくなって、自分達もパレスチナ国家とは別な国がほしいと言うようになるかもしれないと、あなたは思われますか？
- A 「・・・・・・それは難しい。・・・・・・ありえると言えるでしょう。・・・・でも、それはとても難しい状況です。今日アラブ・イスラエル人は、・・・・ユダヤ人とは別々に、イスラエルのあちこちに分散して住んでいます。・・・・二つの国家に分けるのはとても難しい。・・・・とても難しい。・・・・それをどう解決できるのかわかりません。」

I 9

生年月日：1953 -2-22生まれ（47歳）

出生地：モロッコ カサブランカ

性別：女

移住年：1969（移住時年齢16歳）

一緒に移住した家族：兄

父親出生地：モロッコ カサブランカ

母親出生地：モロッコ ラバト

父方祖父出生地：モロッコ NA

父方祖母出生地：モロッコ NA

母方祖父出生地：モロッコ NA

母方祖母出生地：モロッコ NA

職業：システム アナライザー

夫の職業：歯科医

職歴：NA

父の職業：商人

母の職業：裁縫業

最終学歴：短大（3年）

これまでの居住市町村：エルサレム→ナザレ→ナタニヤ→テルアビブ→エルサレム

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「祭日／世界のどこかでユダヤ人に関する（敵対的&友好的）ことが起こったとき／シヨア記念日」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「この国では、毎日政治的に何かが起こっている。教育の分野や社会的な分野で私はこの国の一部であると感じている。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。（おおむね）」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。祭日やシャバット（金曜）の夜を大事にしている／パール・ミツバ／割礼」

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。何年前」

感想：悲しく、恐ろしかった。

Q7 次の概念を定義して下さい。

アム（nation）：共通の範囲（伝統や文化）をもち、同一地域に住む人々の集団で同一の政府の下で統合されている。

レオム（nationality）：同一の政府の下で統合された特定の同一の集団への帰属。

エズラフット（citizenship）：特定の国家に対する忠誠（をもつことで）、国家が与える政治的・その他の権利を享受することのできる人。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「我々が安全を感じられるように我々を守ること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「満足している。我々は強くて賢明な軍隊をもっている。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A 一つのイスラエル（労働党）

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A マアラッハ（労働党）

- Q あなたのご家族が移住を決意された最大の動機は何ですか？
- A 「私はアラブの国からきました。私が小さかったときから、私の家族はいつもイスラエルに移住することについて話し合ってきました。当時のモロッコの情勢も関係しているのですが、いつかは移住しようといつも言っていました。でも、そういう続けながらも何年も過ぎていき、・・・六日戦争の後、・・・69年にイスラエルに来ました。六日戦争の後、（モロッコにいることが）私は実は少し怖かった。実際何も起こらないとしても、・・・私はユダヤ人だし、・・・私達はイスラエルのニュースを窓やドアを全部閉めて息をこらして聴いていました。誰からも聴かれないように、私達がユダヤ人だと悟られないように。・・・何も起こらないようにと。・・・ただ（ユダヤ人が）アラブの国にいることが怖かったのです。私は当時16歳でしたが、移住を決めたのは私よりも実は両親でした。ついに移住する時がきたという感じでした。そして、まず私と兄が両親より数ヵ月先に移住しました。こうして二人だけでやってきたのですが、大変でした（苦笑）。」
- Q どういうところが大変でしたか？
- A 「知らない国で一人ぼっちだということ。・・・学校には行っていましたが、そこにはモロッコやフランスから来ていた子供達もたくさんいましたが、家族から離れていたのも・・・」
- Q 移住されたときはここに親戚や知り合いの方は誰もいなかったのですか？
- A 「遠い親戚はいましたけれど、身近な家族は一緒ではありませんでした。兄と一緒に来たといっても、彼も学校だし私も学校なので、いつも一緒にいたわけではありません。一ヵ月か二ヵ月に一度会うぐらいで。・・・16歳の子供にとっては一人ぼっちで淋しかった・・・」
- Q モロッコではユダヤ人とアラブ人との関係はどのようなものでしたか？
- A 「アラブ人とはずいぶんつながりがありました。・・・」
- Q 誰がユダヤ人で誰がアラブ人かはわかるのですか？
- A 「わかります。・・・アラブ人とユダヤ人はそれぞれ違った地区に分かれて住んでいるので、例えばユダヤ人の家にお手伝いにくるアラブ人はユダヤ人のところに来ていることが分かるわけです。私達は彼等と良い関係だったと思います。でも、常に、恐怖はありました。・・・例えば夜一人で外を歩くことは一度も（親は）私達にさせませんでした。一度も。・・・夜は一人で出歩かないで家にいなければならなかった。・・・恐怖があるために心から楽しむことができることは何もないような感じというか、・・・といっても一度も攻撃されたことはないのですがずっと前にはあったかもしれませんが・・・とにかく恐怖感がありました。」
- Q アラブ人の友達というのはいなかったのですか？
- A 「いいえ。いませんでした。いたのは、キリスト教徒かユダヤ人でした。」
- Q 学校の生徒はどういう・・・
- A 「キリスト教徒、ユダヤ人。・・・アラブ人はいましたが少しです。・・・まあクラスに一人か二人位。・・・だから学校ではほとんど（アラブ人との）つながりはなかったといえます。友達ということになると、（アラブ人は）全くいなかったといえます。」
- Q 先ほどいわれたような、モロッコのなかでの恐怖感というかそういう雰囲気が、ご家族が移住を決意された大きな動機なのでしょうか？
- A 「全くその通りです。それに、‘教育’という点からの動機もあります。モロッコには大学があるにはあっても、そうたくさんあるわけではなく、子供が大学に行く年齢になると、親は（モロッコに）残って子供だけフランスにいかせることが多いのです。そういうことも私達が移住を決めた理由の一つです。私の両親は子供と別れることを望まなかったのです。ここに来れば、勉強もできるし家族も一緒にいられるということで・・・」
- Q ヘブライ語は移住の前に習っていたのですか？
- A 「全く何もやっていませんでした。」
- Q ご両親もですか？
- A 「父はトフィロット（注）祈祷の書）を読むので、ヘブライ語の読み書きはできました。話すことはできませんでしたが、読んだり書いたり。男性はパール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）をしたりするので、だいたいはヘブライ語を習うのです。私はヘブライ文字の一つも知りませんでした。」
- Q モロッコでは家で何語で話していたのですか？
- A 「フランス語です。」

- Q お父さんの職業は移住の前と後では変化がありましたか？
- A 「同じではありません。同じではありません。モロッコでは父は商売をしていました。（あそこでは）ユダヤ人はみな商人です。・・・売りにいって、買って・・・移住してきて、この生活は大変で・・・縫製工場を開き、母もそこで一緒に働きました。・・・父はその頃50歳を過ぎていて母も40歳を過ぎていたので、新しい国で新しい生活を始めるのは大変でした。言葉もわからなかったし。・・・」
- Q 経済的には移住前のほうが良かったのですか？
- A 「ずっと良かったです。疑いなくずっと良かったです。」
- Q 移住の後住んで来られたところは、それぞれの位の期間そこに住まれたのでしょうか？
- A 「まず、エルサレムに一年いました。その後、ナザレに一年、ナタニアに一年いて、テルアビブにも一年いて、それからエルサレムにきてあとはずっとエルサレムです。」
- Q どうしてこのように色々な場所に移られたのですか？
- A 「説明しますと、・・・ここに移住した時は、もうある程度の年齢でした。一人でしたし、・・・両親はテルアビブにいました。・・・私は、高校の卒業資格試験をフランス語で受けることのできるカリキュラムで勉強していました。すべてをヘブライ語で始めなくてはならないのは大変だったので。・・・そのために、卒業資格試験が終わるまでエルサレム、ナザレ、ナタニアと一年ずつ住むことになりました。その後、テルアビブの両親のところに戻って、それから勉強のためにエルサレムにでてきて、そのままここに残っているというわけです。」
- Q 質問票でユダヤ人アイデンティティについてお聞きしていますが、あなたのユダヤ人アイデンティティはどこからくるものだと思いますか？
- A 「・・・まず第一に、私はある程度マソラティ（伝統的）な家庭の中で育ちました。私の父はかなりのダティ（宗教的）です。私はそういう家庭で育ったのですが、一人で住みだしてから、私自身は宗教的なことはすべて捨ててしまいました。『もう宗教はいい。』と思って。・・・でも、何かが残っているのです。家で遊んだ色々なこととか・・・その後結婚して子供ができ、・・・今は家で私も祭日を祝います。」
- Q それはあなたがそれを（やはり）まもりたいという意識なのですか？
- A 「はい。」
- Q その意識をもう少し詳しく説明していただけますか？
- A 「はい。・・・宗教には、あまりいいと思えないこともたくさんあります。でも祭日は、家族を結びつけるもので、私にとってそれは大事なことです。私の子供にもそういう雰囲気を感じさせたいと思うのです。宗教の中の私の嫌いな部分を抜いて少しでも好きなところはとりいれて、家でやることにしているのです。つまりはっきりいえば、私がユダヤ人と感じ子供達にもユダヤ人であることを感じて欲しいということです。」
- Q あなたにとってユダヤ人アイデンティティとイスラエル人アイデンティティは同じレベルのものですか？
- A 「いいえ。全然違います。」
- Q どちらが先ですか？
- A 「まず私はイスラエル人です。・・・そのことに疑いの余地はありません。二つが密接に関連していることは確かですが、・・・ダティム（宗教的人々）のせいで今ここで何が起きているかと考えざるをえません。・・・彼等は全てを独占していると思っています。宗教は彼等のものだと思っています。彼等は全ての人々が自分達のようにすることを望んでいます。私はそれはいやです。自分が選んでもいないことをするのはたまりません。・・・だから私はダティムや宗教というものに反対なのです。イスラエル人というアイデンティティがまず先にくるのはそのためです。」
- Q 質問票であなたはご自分をシオニストと思うと回答されていますが、これはどういう意味でそう思われますか？
- A 「・・・まず第一に、これは私の国で、他のどの場所にも住みたくないからです。私はここに住んでいて、それがどんなに大変でまた危険かということも知っています。兄は戦死しましたし、今息子が二人軍隊に行っています。でも私はここを去ろうとは思いません。これは私の国で、ここにいたいのです。ここで私は貢献したいし、・・・そういう意味で私は自分がシオニストだと思っています。」
- Q イスラエルは自らを「ユダヤ人国家」と定義していますが、あなたは、世界にユダヤ人のための国家が必要だと思いますか？

- A「はい。第二次大戦で起こったことが二度と起こらないようにするために。」
- Q どこかの国民に属しているというだけでは不十分ですか？
- A「いいえ（不十分です）。第二次大戦で何が起こったかをみたでしょう？ユダヤ人に国がなかったから・・・ああいうことが起こったのです。」
- Q つまり、あなたは民族には国が必要だということですか？
- A「はい。すべての民族にいえるかどうかわかりません。でも、ユダヤ人にはまちがいなく必要です。」
- Q あなたは、イスラエルがここのユダヤ人とアラブ人に同じ市民権を与えていると思いますか？
- A「いいえ。同じ市民権を与えているとは思いません。ユダヤ人に対しても、問題があると思います。」
- Q どのようにですか？
- A「例えば、ロシアからたくさんの人々がきていますが、かれらにとっても市民権を与えることはそれほど簡単ではありません。ユダヤ人かどうかとか（調べられて）・・・簡単ではありません。今の様なそういうやりかたには賛成できません。私が思うに、ここの人口の大半はユダヤ人であるべきです。でも・・・ここにきて住みたい人には、・・・ここは大変ですが（笑）、（ユダヤ人でなくとも）受け入れるべきだと思います。・・・ここにきて住みたい人達なんです。住むことがそれほど楽じゃない国に来たいという必要を感じている人にどうして厳しいことをいうのかと思います。」
- Q あなたご自身はアラブ人にも同じ市民権を与えることに賛成なのですね？
- A「はい。・・・私は、ユダヤ人とアラブ人とが共存できるように試みなければならないと思います。平和が必要ですし、お互いに一緒に住むことを始めなければなりません。・・・一緒に住むことを始めるためには彼等にも市民権が必要です。」
- Q イスラエルがユダヤ人の国であろうとする一方で、パレスチナ人も国をつくろうとしているわけですが、この問題に対するあなたの展望はどのようなものですか？
- A「みんなが私のように考えていないかもしれませんが、結局は、（イスラエルが）67年に彼等から占領地を奪ったのです。彼等はそれを返してほしい。彼等はそれを返してほしいのです。（あたりまえです。）彼等から奪ったのですから。私は、返さなければならないと思う。彼等は彼等の土地に住んで、私達は私達の土地に住んで・・・隣り合って、お互いは混じりあわず隣り合って、戦争抜きで・・・わかりますか？私はそう考えています。」
- Q 質問票でヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に行かれたかどうかをお聞きしていますが、あなたは、ヤド・バ・シェムに行くことをみんなに勧めたいですか？
- A「はい。もちろん。あそこは、行かなければならないところです。行かなければなりません。辛いところですが、・・・でも行かなければならないところです。」
- Q 訪問された前と後で、あなたの考え方やアイデンティティに何か変化がありましたか？
- A「変化というのはありません。もう知っていたことですから。でも、そこにあったのはあまりにも有名なましいいものでした。私は、あそこに行ってその展示を見ることはユダヤ人の義務だと思います。」
- Q ユダヤ人以外の人もですか？
- A「はい。でもまずユダヤ人が。他の人も行かなければなりません、ユダヤ人は少なくとも一度は行かなければなりません。」
- Q あなたは何度か行かれたのですか？
- A「何回か行きました。もう何年か行っていませんが。」
- Q 誰と行かれたのですか？
- A「家族とも行きましたし、学校で行ったこともあります。それぞれいつも違う形で。・・・」
- Q あなたにとって、今イスラエルの最大の問題は何だと思いますか？
- A「どういう点ですか？」
- Q 一般論としてです。
- A「安全と平和です。・・・それが私達の一番の問題です。・・・まず、平和と安全。平和がきたら、・・・来るといいのですが（苦笑）・・・その後でイスラエルの中の諸問題にとりかかることができるでしょう。でも、まず第一に、私達の全ての隣国と和平をもたなくてはなりません。内部の問題はその後です。」

Q 安全と和平にとっての障害になっているのは何だと思いますか？

A 「さっきも言いましたが、彼等に占領地を与えなければ（ママ）なりません。・・そこにある入植地を。私はそれで全ての問題が解決するとは言いません。別の問題がでてくることは確かです。そうしたらその新しい問題に取り組まなくてはなりません。でもまずは、彼等に占領地を、そこにある入植地を与えなければ（ママ）なりません。一緒に生活の道を決めればいい。それがまず最初の一步です。その後で問題が新たに生まれるかもしれないけど、少なくともその方向に歩いてみることです。」

Q 入植地問題は どうしますか？

A 「入植者を追い出すことです。」

Q 彼等は承知するのでしょうか？

A 「しないでしょう（笑）。それは難しいです。その問題に解決策があるとは言っていない。でも、私はそうしなければ（入植者は追い出さなければ）ならないと思います。」

Q あなたは選挙で投票する政党を選ぶとき、どういう点を重視されますか？

A 「まず、平和と安全という点です。それがまず第一で、その点で私の考えと近い党ということを最も重視します。そして次に、大きい政党ということ。私は、小さい政党には入れません。・・つまり、私の声を小さい政党に託してもそれが無駄になってしまうかもしれないのはいやですから。」

Q そういう観点からみて、労働党があなたの考えにもっとも近いということですね？

A 「はい。」

Q イスラエルの政治の方向はあなたの望むように進んでいますか？

A 「・・・あまり私の思うようにはいっていません。・・・主に、他の諸政党の行動がです。他の諸政党がまるで圧力団体になっていて・・・特に宗教諸政党が・・・（労働党は他の政党に）妥協しています。・・・政権に残るために、他の政党の要求を満たして自分達の考えを取り下げようとしています。それにはがっかりです。私はエフード・バラクになったら彼は何かするだろうと思ったけど、そうではないからです。」

Q あなた方が移住された後の70年代にブラック・パンサーという運動が生まれて政治的な活動をしたのをご存じですか？

A 「はい。もちろん。」

Q その運動についてどう思っていましたか？

A 「この問題でも、みんなが私のように考えているとは思いませんが、私は、人々が自分はモロッコからきているから差別されていると考えて、だから成功できないんだといつもそういうふうを考えそれを理由にして権利の主張に利用するようなことが好きではありません。・・・かつてはそういうこと（差別）があったかも知れませんが。でも今はスファラディがアシュケナジよりチャンスがないとかそういうことはないと思います。人々は今だにそれを口実に使っていますが、私はそういうことに腹がたちます。今はそうではないのですから。昔はそうでした。でもそれは昔のことです。」

生年月日：1967-1-14生まれ（33歳）

出生地：モロッコ カサブランカ

性別：女

移住年：1988年（移住時年齢21歳）

一緒に移住した家族：なし

父親出生地：モロッコ カサブランカ

母親出生地：モロッコ カサブランカ

父方祖父出生地：モロッコ カサブランカ

父方祖母出生地：モロッコ カサブランカ

母方祖父出生地：モロッコ カサブランカ

母方祖母出生地：モロッコ カサブランカ

職業：プログラミングチームのチーフ

夫の職業：情報システムの副長

職歴：会計士→プログラミングチームのチーフ

父の職業：保険会社

母の職業：縫い子

最終学歴：ハダサ短大（2年）

これまでの居住市町村：エルサレム→ギブオンハハダシャ（占領地内）

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「ユダヤ人の歴史について話す時／祭日の雰囲気から／反ユダヤ主義についてやイスラエル国家について話す時。」

Q2 日常生活の中で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「ヘブライ語を使っていること／ラジオを聴く時（ニュース、音楽）／新聞を読む時／特定の分野でのイスラエルの成功（科学、政治）」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ民は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

シャバットの夜の祈り／ペサハ／祭日（新年、スコット）／ヨム・キプール

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。1989年、1995年。」

感想：ショアで虐殺された全ての人に起こったことに心が痛んだ。悲しい気持ち。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム（nation）：共通のアイデンティティが共有された人々の集団（情緒的、合理的な結びつき）。

レオム（nationality）：特定の民族への帰属。

エズラフット（citizenship）：特定の国家への帰属。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「イスラエル国家を守ること、境界内での秩序と法を維持すること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「イスラエル軍は、その任務（＝国家とその市民を守ること）をよくやっている。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A ハイフッド・ハレウミ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A ツォメット、リクード

- Q あなたが移住を決意された最大の動機は何ですか？
- A 「最も大きな動機は、シオニストだったからです。」
- Q (モロッコでは) 何をされていたのですか？
- A 「まず、私の兄と姉は、それぞれ一人で私より先に移住しました。その後で、私はここにいる姉のところに訪ねてきて、少しアレツ (イスラエル) を旅行しました。それは17歳の時ですが、その後又20歳の時に訪れて大学入学の手続きをして、モロッコに帰り、その後移住したというわけです。・・・私の後に両親も移住しました。・・・両親と一緒に移住しなかったのは、当時祖母が高齢で、その後亡くなったのですが、祖母の葬式とかいろいろなことが終わるのを待ってそれから来ることにしたからです。」
- Q もう一度うかがいますが、モロッコではシオニストとしての活動を何かされていたのですか？
- A 「何もしていません。・・・ユダヤ人コミュニティでイスラエルのことを色々話し合っていたことぐらいです。・・・あそこ (モロッコ) では、ユダヤ人はイスラエルかフランスかカナダに行く人が多いのです。・・・」
- Q あなたのご家族はモロッコのお家で何語で話していましたか？
- A 「フランス語です。」
- Q ヘブライ語はいつ、どこで勉強しましたか？
- A 「モロッコの学校です。・・・私はユダヤ人学校に行っていたので、第二言語としてヘブライ語を最初から勉強しました。・・・(その学校では) 第一言語はフランス語で、第二言語としてヘブライ語、英語、アラビア語がありました。」
- Q モロッコのユダヤ人の人はたいいユダヤ人学校に行くのですか？
- A 「はい。」
- Q その生徒は全員ユダヤ人ですか？
- A 「はい。・・・いや、アラブ人もいます。・・・ユダヤ人学校なのですが、私達と一緒に勉強するアラブ人の子供もいるのです。ユダヤ人だけの学校もありますが、私が行っていたのは、ユダヤ人もアラブ人もいる学校でした。」
- Q アラブ人だけの学校もあるのですね？
- A 「はい。そういう学校は、第一言語がアラビア語だけです。」
- Q あなたご自身はいつ頃移住を決意したのですか？
- A 「17歳のころです。」
- Q その理由は何だったのでしょうか？
- A 「高校の卒業試験の後は、モロッコにはフランス語で勉強できる大学がありません。だから、高校を卒業して勉強を続けようと思えば、フランスかイスラエルかカナダに行く道しかないのです。」
- Q あなたのお兄さんやお姉さんも同じ (理由で移住されたの) ですか？
- A 「姉は18歳でここに来て、兄はここ (イスラエル) の高校に入るために15歳の時に移住しました。」
- Q あなたのご両親が移住された時はそれぞれおいくつ位でしたか？
- A 「母は55歳で父は65歳位だったと思います。」
- Q 移住されてからはご両親は仕事はされなかったのでしょうか？
- A 「はい。父も母も働きませんでした。すでにモロッコで退職していました。」
- Q 質問票の答えによりますと、あなたの現在のお住まいは占領地の中にあるようですが・・・
- A 「・・・えー、そう言うこともできますね。」
- Q お住まいを決められるとき、占領地の中にあるという点は考慮されなかったのでしょうか？
- A 「考えませんでした。そこを見に行って、いい場所で気に入ったので子供にもいい環境だと思って買うことに決めたというだけのことです。・・・占領地だからそこに住もうというような意識からではありません。」
- Q いつ頃からここにお住まいですか？
- A 「約一年半前からです。」
- Q それ以前はずっとエルサレムですか？
- A 「はい。・・・まず大学の寮に入って、それからアパートに住んで、その後今の家を買ったのです。」
- Q 大学では何を専攻したのですか？
- A 「まず最初の一年は外国から来た学生のためのコースをとって、教育学を専攻しましたが、途中でやめて、その後短大に移り、コンピュータを勉強しました。」
- Q 教育学は面白くなかったのですか？

- A「いいえ。ヘブライ語での授業が難しかったのです。大学では・・そこは‘大きな世界’で、ヘブライ語で本をどんどん読まなければならなくて、・・大学で学ぶのは、一年目は大変でした。・・短大は規模が小さかったし、わからないことがあれば先生に質問もしやすいし、私には短大の方がいいと思いました。」
- Q 何年勉強したのですか？
- A「大学で二年、短大で二年です。」
- Q その後すぐにここでの仕事を見つけられたのですか？
- A「はい。」
- Q どのようにして仕事を見つけたのですか？
- A「私達の短大には求人が来ます。・・私の場合は、私の知人がここで働いていて、人を探していると聞いたので、試験を受けて、それに通ってここで働くことになりました。」
- Q あなたはここでずっと働き続けると思いますか？
- A「そうではないことを望みます（笑）。」
- Q 望まないのですか？ どうしてですか？
- A「他のことも見てみたいですから。・・この仕事はいつも同じ様なことです。」
- Q 今真剣に転職を考えているのですか？
- A「今はできません。子供が小さいので、その点ではこの仕事は都合がいいからです。もう何年かしたら（転職を）考えようと思っています。」
- Q では次の質問ですが、質問票でも関連する質問をしましたが、ユダヤ・アイデンティティはこんなに長い間何故消えずに続いていると思いますか？
- A「残すことを望んでいるからだと思います。・・親から子供へと歴史が伝えられ、・・それに祭日を祝ったり。・・宗教も関係しています。」
- Q ダティーム（宗教的人々）やマソラティーム（伝統的人々）の人の場合はわかるのですが、そうでない人の場合はどうでしょうか？
- A「強いコミュニティであるということも理由だと思います。ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）は外国でもここでも、いつも彼等を強く結びつけるつながりがあります。・・わかりませんが私はそう感じます。・・私が外国にいたときには、・・モロッコでは、まるでそのコミュニティ全体がユダヤ人でした。そしていつもお互いに助け合っていました。・・」
- Q でも、ユダヤ人でない人とも毎日会うことはあるわけですよね？
- A「はい。コミュニティの中ではみんながお互いに知り合いですから（知らない人はすぐわかりますから）。」
- Q 日常生活の中でユダヤ人とアラブ人の関係はどのようでしたか？
- A「いい関係です。・・近所にはアラブ人もいましたしユダヤ人もいましたが、誰も問題を起こすことはなかったです。」
- Q ここ（イスラエル）での両者の関係がモロッコでと違うのは、どうしてだと思いますか？
- A「ここでのアラブ人の目的はアレツ（イスラエル）の一部をもらう（ママ）ことです。エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）の一部を。一方、あそこ（モロッコ）は実際彼等の国です。あそこのユダヤ人はモロッコの一部をもらうことを望んでいるわけではありません。それが違いだと思います。・・ここには利害の対立があるのです。ユダヤ人も国がほしいし、アラブ人も国がほしいという・・」
- Q あなたご自身の場合は、ユダヤ・アイデンティティはどこからきていると思いますか？
- A「・・まず、ユダヤ人に生まれたからで、・・（家族が）伝統をまもっていましたし・・」
- Q あなたご自身も伝統をまもっていると答えられていますが、それは何故だと思いますか？
- A「私が（そういう伝統が）好きだからです（笑）。・・」
- Q あなたはご自身を「シオニストだと思う。」と答えられていますが、どういう意味でそう思われるのかをお聞きしたいのですが。・・
- A「私にとって、・・エレッツ・イスラエルは、全てのユダヤ人のための場所だと思っています。・・」
- Q 「世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思う。」とも答えられていますが、これはどういう意味ですか？
- A「私にとって、アム（民族）はレオム（民族）のようなものです。・・同じレオムに属している人はみな同じアムであり、一つのアムだと思います。」

- Qたとえば、アメリカのユダヤ人で、宗教的にも伝統の上でもユダヤ的なものをなにも続けていない人もハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）に属していると思いますか？
- A「はい。」
- Qあなたは、世界のユダヤ人がみんなイスラエルにやってきて住んだらいいと思いますか？
- A「もし彼等が望むなら。もし彼等がそうしたいなら・・・」
- Qパレスチナ人で、ここにかつて家があり彼等が帰りたいといったら、あなたは どう 思いますか？
- A「・・・わかりません。・・・（苦笑）・・・考えたことがありませんでした。・・・彼等は自分達がイスラエルの一部だとは感じていません。パレスチナの一部だと感じています。・・・これはまた別な問題です。・・・彼等は自分達がエレッツ・イスラエルの一部だとは全く感じていません。・・・」
- Qともあれ、あなたは彼等に帰還する権利があると思いますか？
- A「ユダヤ人とアラブ人がここで一緒に暮らすことができると考えないのなら、ユダヤ人を追い出そうとするのなら、彼等に帰る権利はないと思います。」
- Qここに家があった人でもですか？
- A「ええ。彼等が自分で出ていくことを決めたのです。」
- Q自分で決めた人もいるかもしれませんが、出て行かざるをえなかった人もいるのではないですか？
- A「ええ。・・・（でも）もし国（イスラエル）に敵対することをしようとするなら、彼等には（帰還の）権利はないと思います。」
- Q敵対しようとしなければ？・・・
- A「敵対しようとしなければ、ええ。・・・来てもいいと思います。・・・テロをおこさず、平和に暮らそうとするのなら。・・・」
- Qもしそういう人が帰ることを望んだとして、多くの場合そこにはすでに誰か（ユダヤ人が）住んでいると思いますが、そういう場合どうしたらいいと思いますか？
- A「・・・それは・・・何と言っていいかわかりません。難しいです。・・・」
- Q次の質問ですが、ヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）には誰と行かれたか？
- A「一回目は友達と、二回目はいとこ夫婦とです。」
- Q訪問の前と後とで、意識の上で何か変化したことがありますか？
- A「いいえ。・・・その前に何度もショアの映画を見ていましたから。そこに行って見たものは、映画でみたり雑誌などで読んで知っていたことでした。・・・」
- Qユダヤ・アイデンティティがより強まったということはありますか？
- A「はい。強まりました。・・・訪問した後は、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）には国が必要だと確信するようになりました。」
- Qあなたは、そこに行くことをみんなに勧めたいですか？
- A「そこは、見なければならぬものです。・・・見なければならぬものです。・・・大変辛い場所ですが、・・・見なければならぬところだと思います。・・・」
- Qあなたは、モロッコの学校でショアについて習いましたか？
- A「はい。」
- Qどういう科目の授業で学習したのですか？
- A「歴史です。」
- Q何年生の頃ですか？
- A「16歳か17歳の高校生の時です。」
- Q質問票で幾つかの概念の定義をお聞きしましたが、ユダヤ民族の場合「共通のアイデンティティ」とはどのようなものだと思いますか？
- A「・・・彼等は集団で一緒にいようとしてきました。・・・彼等には共通の要素、例えば、宗教、お互いに助け合おうとする感情、共通の言葉—ヘブライ語—などがあります。」
- Qでも、イスラエル以外ではヘブライ語を話していないのではないですか？
- A「でも、多くのユダヤ人はヘブライ語を知っていると思います。ヘブライ語でお祈りをしますから。・・・それに、ユダヤ民族のいるところにはどこでも、祭日の伝統があります。」
- Q伝統をまもるという点で、あなたは親の世代と比べて強まっていますかそれとも弱まっていますか？
- A「弱まっています。」

Q あなたのご両親はダティム（宗教的）ですか？

A 「極端なダティムではないですが、・・ダティムとっていいと思います。」

Q あなたはダティヤ（宗教的）ですか？

A 「私は違います。」

Q マソロティト（伝統的ユダヤ人）ですか？

A 「はい。」

Q あなたは、お子さんの世代が（伝統をまもるという点で）どうなると思いますか？

A 「（私の世代と）同じだと思います。」

Q 「同じであってほしい」と望まれるということでしょうか？

A 「はい。それを望んでいます。」

Q イスラエルには、それが「ユダヤ人国家」とあるという自己定義がありますが、現実にはイスラエル内にアラブ人が住んでいます。この定義と現実の不一致についてあなたはどのように思いますか？

A 「まず第一に、イスラエル国家は、ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）の国であって、次に、平和にここで暮らそうという人々のための国だということです。つまりそれはアラブ人やキリスト教徒のことですが、もし彼等がイスラエル国家の法律を認める用意があるのなら、彼等もここに住むことができるということです。」

Q あなたは何故ハ・アム・ハ・イエフディ（ユダヤ民族）の国が必要だと思うのでしょうか？

A 「それは、ショアが再びおこらないようにするためです。・・・何かがおこったらユダヤ人が来ることのできる場所がいつもあるように・・それが理由です。」

Q つまりあなたは、・・これはあってはならないことなのですが、・・・ショアの可能性を考えるということですか？

A 「・・・・いいえ。・・・今日、世界はもっと文明化していると思います。ですからまたそういうことがおこるとは思いません。」

Q でも先ほど、そういうときのために国が必要だと言われましたが・・

A 「ええ。でもここに来て住みたいユダヤ人のために、・・・今までユダヤ人に国はありませんでした。ユダヤ人は世界のどこでも‘よそ者’でした。ユダヤ人の国はなかったのです。・・歴史を遡ると、・・ずっと前のことですが、エレッツ・イスラエルはユダヤ人のものでした。今はちょうどそれが連続している状態なのです。」

Q 現代の多くの国では（一つの国に）多くの民族がいるという形態なのですが、あなたは「ユダヤ民族の国」が必要だと思うのですか？

A 「はい。だれでも自分の住みたいところを選ぶのだと思います。」

Q でも、全ての民族が国を持っているわけではないのではないのですか？もし全ての民族がそれぞれ国を持とうとしたらどうなるのでしょうか？

A 「・・何とっていいかわかりません（苦笑）。・・」

Q とにかくあなたは、ユダヤ民族に国家が必要だと思うのですね（笑）？

A 「はい（笑）。・・それが私の感情です。」

Q あなたは、今イスラエルの最大の問題は何だと思いますか？

A 「アラブ人とユダヤ人の問題です。」

Q どういう方向に事態が進むことを望みますか？

A 「正しい平和の方向に。・・望ましい平和です。つまり、アラブ人がユダヤ人に‘領土’、‘領土’、‘領土’と言ってこないこと。・・アラブ人が何も与えようとしないで、多くのことを要求してくるような平和ではないこと。・・」

Q あなたの言われる「アラブ人」はイスラエル内の人々ですか、それとも占領地の・・？

A 「イスラエル内のアラブ人は問題ありません。たいていの場合、彼等は戦争を望んでいません。・・イスラエルの外にいて、イスラエルと平和を結ぼうとしている人達、例えばシリアですが、シリアはキネレット（イスラエル北部のガリラヤ湖）やゴランを要求しています。多くのことを要求して何も与えようとしません。望ましい平和への約束さえ与えようとしていません。・・望ましい平和が実現するように・・シリアにはユダヤ人を殺そうとしている人達がいる以上・・・・わかりますか？・・」

Q 占領地のパレスチナ人との問題はどうか？どういう展望をお持ちですか？

- A「もし彼等がテロを望まないなら、平和にやっけていくことができます。」
- Q 二つの国家に分けてということですか？
- A「ええ。・・・隣同士の国として。・・・彼等には彼等の理想があるし、私達には別の理想があります。彼等は彼等の国を持つとうとしているのですから。」
- Q あなたは、あなたが望む方向に事態が進んでいると思いますか？
- A「・・・えー思いませんね。」
- Q どういうふうにですか？
- A「パレスチナには、過激な人達がたくさんいて、国内でテロを起こしています。・・・それと張り合うのは大変なことです。・・・」
- Q その問題の解決には何が必要でしょうか？
- A「・・・わかりません。・・・座ってよく話しあうこと、問題解決に向かって・・・座って話し合うことです。」
- Q それは政治家のことですか、それとも一般市民の間でのことを言っているのですか？
- A「みんなが座って話し合うというわけにはいきません。みんなが意見を交換するというのも無理ですが・・・でも、何か妥協に至ることが必要です。・・・例えば、パレスチナ人が要求している占領地の中にユダヤ人の入植地があったとしても、私はそこにいる私達を追い出す必要はないと思います。パレスチナ人がその場所を欲しいとしても、そこに住んでいるユダヤ人が何を考えているのかをいうことは許されると思うのです。なぜなら、彼等の家はそこにあって、家を明け渡したくはないですし、それは難しいことです。」
- Q ではどうすればいいと？・・・
- A「パレスチナ人に住む場所を（他に）提供すればいいと思います。・・・すでに存在しているユダヤ人の住居からユダヤ人を追い出さないで・・・。」
- Q もし将来、今のイスラエルの隣に、現在の占領地がパレスチナ国家になったら、今占領地にいるユダヤ人はどうすると思いますか？
- A「それはその人次第です。そこに残って住み続けたいか、住みたくないかは。・・・もし住みたいとすれば、ここエレッツ・イスラエルでアラブ人が私達と暮らしているように、平和にやっけていけるといいます。」
- Q そうなるとそこはエレッツ・イスラエルではないのですが・・・
- A「ええ。・・・アメリカで暮らしている（ユダヤ）人のように。・・・そしてパレスチナ（国家）が（ユダヤ人に）安全に暮らせることを保証してくれればということも当然関わる問題ですが。・・・」
- Q あなたは、占領地に住んでいるわけですが、パレスチナ（国家）が（ユダヤ人に）安全に暮らせることを保証したとして、あなたはそこに住み続けますか？
- A「私は住みません。・・・私が言っているのは、もしその人達が残って住みたいのならそれは彼等の権利だということです。」
- Q あなたは選挙で投票する政党を選ぶとき、どういう点を重視して決めますか？
- A「エレッツ・イスラエル（の土地）をまもること。全部を渡さないことです。」
- Q ウェスト・バンクのことですか？
- A「はい。」
- Q ガザは？
- A「ガザはどうでも構いません。」
- Q どうしてガザはどうでもいいのですか？
- A「ガザはアラブ人がもう住んでいるところで、ガザの中にはユダヤ人が住んでいないからです。・・・そこは彼等のものでいいと思います。でもここには、ゴランにはユダヤ人が住んでいます。そこにはユダヤ人が住んでいる入植地があります。」
- Q 土地をまもることの他に重視することは何ですか？
- A「・・・ただ譲歩するだけの国にならないことです。・・・私は正しい平和が欲しいのです。平和のための平和、・・・平和をくれるなら私達も平和をあげることです。・・・わかりますか？・・・平和対平和・・・領土を渡せば平和をよこすというのではなく、掛け値なしの平和ということです。・・・わかりますか？・・・条件をつけない平和・・・」
- Q では、家を失ったパレスチナ人への賠償金というようなことはどうですか？

A「・・・例えば、ヘブロンのことを考えてください。あそこにはユダヤ人の家がありました。今はそこにアラブ人が住んでいます。ユダヤ人は何もお金を受け取っていません。・・・それは過去に起こったことの一部としてどうしようもないことです。・・・一度起こったことは、もとのには戻れません。・・・それは戦争の一部であり、戦争とはそういうものです。・・・」

I 11

生年月日：1960-8-17生まれ（39歳）

出生地：アルゼンチン ブエノスアイレス

性別：男

移住年：1988年（移住時年齢28歳）

一緒に移住した人：なし

父親出生地：ブラジル サンパウロ

母親出生地：アルゼンチン ブエノスアイレス

父方祖父出生地：ロシア NA

父方祖母出生地：ロシア NA

母方祖父出生地：ポーランド ガリツィア

母方祖母出生地：ポーランド ガリツィア

職業：コンピュータプログラマー

妻の職業：ケレム（寄付団体のマネージャー）

職歴：学生→父の店の手伝い→保険会社→洋服やネクタイなどのセールス→学生

父の職業：自営業

母の職業：自営業

最終学歴：ハダサ短大（3年）

これまでの居住市町村：学生寮→ベエルシェバ→エルサレム学生寮→ベイトシェメシュ→エルサレム

Q1 あなたは、ユダヤ民族に属していると感じますか？

A 「はい。」

SQ1 どのようなときにそう感じますか？

A 「文化の一部、世界の見方、他の人々との違いから。」

Q2 日常生活で、イスラエル人のアイデンティティを感じるのはいつ（どんな時）ですか？

A 「（我々に）敵対的な行為がなされるとき（反ユダヤ主義）。」

Q3 あなたは自分がシオニストだと思いますか？

A 「はい。」

Q4 あなたは、世界の全てのユダヤ民族は一つの民族だと思いますか？

A 「はい。」

Q5 家庭のなかで守っているユダヤ的な伝統がありますか？

A 「はい。」

ペサハ、新年、ハヌカ、スコット

Q6 ホロコスト記念館に行ったことがありますか？

A 「はい。3年前。」

感想：心の痛み、いらだち、怒り、たくさんの質問（何故？）。また、私の子供には起こらないようにということ。

Q7 次の概念を定義して下さい。

A アム（nation）：共通の文化、習慣を持ち、共通の民族的願望を持つ人々の集団。

レオム（nationality）：共通の文化を持つ人々の集団。

エズラフット（citizenship）：人が引き受ける権利と義務の集団。

Q8 イスラエルの軍隊に期待するものは何ですか？

A 「地域の平和がくるまで、強い軍隊でいてくれること。」

Q9 あなたの期待の観点から見て、イスラエルの軍隊をどう評価していますか？

A 「将来の世代のために、今の軍のものの見方を変える必要がある。」

Q10 前回の国会選挙で投票した政党

A メレツ

Q11 これまでの選挙で投票したことのある政党

A メレツ

- Q あなたのご家族、それからあなたご自身が移住を決意された最大の動機は何ですか？
- A 「私は一人で移住したのですが、私より先に弟が移住していました。・・・私はブエノスアイレスで、シオニスト的な教育を受けて育ちました。88年に移住する前、私はアルゼンチン社会の一員になろうと試みていました。しかし、そうはいかないことがわかってきました。というのは、・・・（アルゼンチンの）一員になろうとしても、ユダヤ人は脇においやられるようなことをいろいろみることになったからです。・・・当時は独裁政権の後で、・・・独裁政権は76年に始まり85年に終わりましたが（注）民政移管は83年12月。インフォーマントの記憶違いと思われる。）・・・全てが新しく始まり政治的に混乱していました。・・・私はアルゼンチンにいても仕方がないと思い、弟もここ（イスラエル）にいましたし、その時やっていた仕事（注）洋服などのセールス）も好きじゃなかったので移住することにしたのです。・・・でもその前に、高校卒業後20歳の時、一度イスラエルを訪れています。それは、シオニスト運動のツアーのようなものです。その時は、二ヶ月ほどいてアルゼンチンに帰り、またすぐイスラエルに来ようと思ったのですが、事態が変わってそうはなりませんでした。・・・」
- Q シオニスト運動にはいつ頃から参加していたのですか？
- A 「6歳からです。」
- Q それは、あなたが希望したのですか、それともご両親の勧めがあったからですか？
- A 「それはこういうことです。・・・私はユダヤ人の学校に行っていました。・・・午前中は公立の学校に行き、午後からはユダヤ人の学校に行くのです。そのユダヤ人の学校では毎週金曜日に‘子供クラブ’という活動があり、そこでシオニストの活動をするのです。」
- Q ご両親があなたをそこに送ったのですか、それともあなたが行きたいと頼んだのですか？
- A 「最初は両親がそこに私を入れました。・・・でもサッカーをしたりして遊んだりもするのでずっと行っていました。・・・学年が上になるにつれだんだん政治的なこともやるようになりましたが。」
- Q 6歳から高校までずっとその活動に参加していたのですか？
- A 「ええ。」
- Q 弟さんもですか？
- A 「同じです。」
- Q 最初の質問に戻りますが、・・・
- A 「シオニスト運動のツアー旅行でイスラエルに二ヶ月来て・・・」
- Q その二ヶ月間は何をしたのですか？
- A 「最初の一ヶ月はエルサレムの研修施設でセミナーを受けて、もう一ヶ月はキブツで働きました。」
- Q セミナーでは何をしたのですか？
- A 「歴史とかシオニズムなどについて勉強しました。」
- Q 参加していたのは全員アルゼンチンからの人達ですか、それとも世界各地からの？
- A 「南アメリカからの人達です。ペルー、チリ、ウルグアイ、アルゼンチンからでした。」
- Q みんなユダヤ人ですか？
- A 「はい。」
- Q 全部で何人ぐらいいましたか？
- A 「少なくとも40人ぐらいです。・・・でも、右や左や色々な人がいました。」
- Q どういうことですか？
- A 「社会主義者も資本主義者もいたということです。」
- Q それは先生の中にですか？
- A 「参加している若者、・・・18、9歳の参加者達がです。」
- Q その年齢ですでに、自分を社会主義者や資本主義者と自覚しているのですか？
- A 「はい。」
- Q あなたは、どちらだと思っていましたか？
- A 「私は社会主義運動に参加していました。・・・キブツの運動です。・・・ベタルという名前の左派の運動があって、そこで組織されてそのツアーに参加していました・・・」
- Q なぜあなたのご両親は移住されなかったのですか？
- A 「・・・その前に、私の履歴の話を続けます。・・・（二ヶ月のイスラエルの訪問から）アルゼンチンに帰って、私はすぐイスラエルに来ようと思っていました。ところが、（アルゼンチンの）状況が変わりました。・・・私は一度止めていたシオニスト運動に戻りました。・・・止めていたのは、その運動は自分に合わないと思ったからです。・・・その頃アルゼンチンは民主主義体制になりました。（注）年代の

記憶違いか？）、私は高校の最後の学年を終えてブエノスアイレスの大学に進みました。大学では数学とコンピュータを学んだのですが、大学では政治的な活動が非常に活発でした。軍事政権が終わった後で、政治運動が盛り上がっていました。・・・私もそこに残って運動に参加しようかという気持ちになっていました。・・・そして大学では活動家になり活動していました。

その後仕事について、最初は家具店をやっている父の店で一緒に働いていましたが、それから保険会社や服の販売などの仕事をしていたわけです。・・・二ついやだと思ったことがあって、・・・一つはこれからの人生をセールスマンとして生きたくないということ、もう一つは、・・・当時参加していた政党の活動に嫌気がさしたのです。なぜなら、それは社会主義政党だったのですが、その政党は、諸悪の根元をユダヤ人のせいにしようとしていました。ユダヤ人は特別の目で見られて。・・・それで私はその活動から離れて、・・・弟がここにいたこともあり、移住しようと思ったのです。」

Q あなたの弟さんは、なぜあなたより先にここに移住していたのですか？

A 「・・・弟とは二歳違いですが、・・・彼もシオニスト運動に参加していたのでここに来たのです。」

Q 弟さんはいつ移住したのですか？

A 「86年です。」

Q なぜご両親と一緒に移住されなかったのですか？

A 「・・・（移住のことを）集団単位では考えなかったのです。」

Q どういうことですか？

A 「・・・父は少し病気でした。母方の祖母と一緒に住んでいたのですが、・・・」

Q お祖母さんも病気だったのですか？

A 「いえ。元気でした。でも、・・・父は移住しようとは全く考えない人でした。」

Q それはどうしてだと思えますか？

A 「彼は（アルゼンチンで）仕事をしていて、イスラエルに来ててもここではやることはありません。それに、彼はシオニストではありませんでした。」

Q お母さんは？

A 「母はシオニストでした。祖母も。」

Q お祖父さんは？

A 「祖父もシオニストでしたが、私が8歳の時に亡くなっていました。・・・母と祖母は私の二年後に移住しました。母にはイスラエルにすでに移住している妹が二人いたので、それも（息子が二人とも移住したことに加えて）（彼女の移住の）理由だと思えます。」

Q アルゼンチンの家はどうしたのですか？

A 「売りました。」

Q お祖父さんやお祖母さんはロシアやポーランドのお生まれですが、どうしてアルゼンチンに移住されたのですか？

A 「父方の祖父母はロシアから逃げだしたのです。・・・祖父はロシアの軍隊にいたのですが、ロシアでは軍隊に長くいなければならなかったのも、・・・そこを逃げ出してアメリカに行こうとしました。でもアメリカに入国できる可能性がなかったところへ、アルゼンチンからの移民募集の広告があって移住を決めたようです。」

Q そのころお祖父さんとお祖母さんはおいくつでしたか？

A 「40歳代です。すでに三人子供がいて一私の父はブラジル生まれですが一子供と一緒に移住しました。」

Q それはいつ頃なのですか？

A 「移住した年ですか？・・・父は1921年生まれですから、第一次大戦後だと思います。」

Q お父さんがブラジル生まれということは、まずブラジルに移住したのですか？

A 「はい。その後アルゼンチンに来たのです。」

Q お母さんの方のお祖父さんとお祖母さんの移住については？・・・

A 「母方の祖母は、ポーランドから17歳の時にアルゼンチンに来ました。・・・家族全員で。・・・第一次大戦前です。」

Q どうして移住したのですか？

A 「もっと暮らしやすいところに移りたかったのです。」

Q ポーランドは暮らしにくかったのですか？

A 「よくありませんでした。・・・ヨーロッパは良くなかった。・・・少なくとも、ポーランドはよくありませんでした。」

Q ロシアもよくなかったのでしょうか？

A 「ロシアの問題は、軍の問題でした。・・・（ロシアの）祖母はとてもお金持ちでした。父の母の家庭は、ロシアでとても裕福な暮らしをしていました。彼女はすべてをそこに残してロシアを出ました。その後は、家族との関係が何もありません。」

Q 意味がよくわかりませんが・・・

A 「（父方の）祖母は、家族から逃げたのです。・・・私は彼女は彼女の家族から逃げたのだと思います。・・・彼女の家族は祖父との結婚に反対でしたから。・・・」

Q わかりました。・・・ポーランドのお祖母さんの話を続けてください。

A 「母の両親は・・・祖母は家族全員で、祖父は一人で移住しました。祖父の兄はイスラエルに移住しました。・・・その頃、祖父のやっていた事業が失敗して倒産し、（アルゼンチンへの）移住を決めたようです。」

Q 次にアイデンティティのことについてお聞きしますが、あなたは、ユダヤ・アイデンティティが長い間消滅することなくこれまで続いているのは何故だと思いますか？

A 「・・・私達は他と違っているからだと思います。」

Q でも、みんなそれぞれに違っているのではないのでしょうか？

A 「そうです。どの集団もそれぞれ違っています。・・・私達が他と違っているのは、この場所、アレツ（イスラエル）に帰属意識を持っているということです。もしアレツへの帰属意識を失ったら、ユダヤ人の集団から離脱し、世界のどこかに埋もれてそれで終わりです。私の友人にもそういう人達がいいます。・・・他には、伝統を世代から世代に伝えてきたこともあるでしょう。」

Q でも、伝統をみんながまもっているわけではないと思いますが、でもアイデンティティが続いてきたのは何故なのでしょう？

A 「帰属意識ですよ。私はこの場所に属しているのです。私はこの場所に属しています。・・・私はアルゼンチンの音楽を聴き、タンゴを聴き、・・・モロッコやフランスから来た人とは考え方も違いますが、私はユダヤ人です。・・・」

Q あなたのユダヤ・アイデンティティはどこから来ているのでしょうか？

A 「母や祖母や祖父が私にもたらし、そう私を育てたからだと思います。・・・例えば、私はユダヤ人で、ロシュ・ハ・シャナ（新年の祝い）やペサハ（出エジプトを記念する過ぎ越しの祭）やヨム・キプール（贖罪の日）を祝わなければならないというように・・・」

Q アルゼンチンでもそういう日には何か特別に祝っていたのですか？

A 「ええ。・・・私達の家ではそんなに大々的というわけではないですが、・・・私達はダティーム（宗教的）ではないので。二世代か三世代前まではそうでしたが、私達はもうダティームではありません。でも、・・・私達はシオニスト運動の一環としてそういうことをやっていました。」

Q アルゼンチンのあなたのお家ではメズザ（注）ユダヤ人が入り口の扉の脇の柱に打ちつけるお守り。ユダヤ人の住宅や建物のドアの前にはほとんどつけてある。）をドアの前につけていましたか？

A 「いいえ。」

Q どうしてですか？

A 「私達はダティームではなかったの。・・・」

Q ダティームしかつけないのですか？

A 「・・・それは‘伝統’です。・・・ダティームだけしかつけないというわけではないですが・・・それはこういうことです。・・・私達の一部はナショナリストです。・・・私は、私達は社会主義運動から出発していますが・・・ヒューマニズムの時代に、ユダヤ人にも様々な潮流がありました。・・・その中にユダヤ人は解放されなければならないという考えもあって、そのために、ここアレツ（イスラエル）で、土の上で働らかなければならないということが言われ、・・・その後社会主義やヒューマニズムなどもでてきたのですが、・・・主として大事だったのは、人間であるためにはそこ（イスラエル）で生きなければならないということでした。ヨム・キプールに何をするか、しないかということはたいして問題ではないということで・・・私はそういうナショナリストの考え方でやってきたわけです。」

Q つまり・・・あなたは、伝統や習慣をまもることはやはり大事だと思われるのでしょうか？

- A「もちろん、それは私の生活の一部ですから。キリスト教徒がクリスマスを祝うように、それは私のエズラフット（市民権）の一部だし、レオム（民族性）の一部でもあり、私のアイデンティティです。」
- Q アルゼンチンでは、パール・ミツバ（13歳男子の成人の祝いの儀式）をしましたか？
- A「はい。弟もしました。」
- Q 割礼も？
- A「はい。」
- Q アルゼンチンのユダヤ人の人はたいていパール・ミツバや割礼をしているのですか？
- A「ええ。」
- Q 結婚式はどんな風に？
- A「まず普通の結婚（式）をして、その後でシナゴグ（ユダヤ教会）に行きます。・・・でも、今は少し違っているようです。今の若い世代の人達は、（アルゼンチンの）社会により入り込んでいるようです。」
- Q もう一度お聞きしますが、あなたは（ユダヤ的な）伝統をまもることは重要だと思いますか？
- A「どういう伝統かにもよります。例えば割礼ですが、私は息子に割礼をしようと思っています。」
- Q パール・ミツバはどうですか？
- A「いや。それは息子が決めることです。」
- Q どうして息子さんが決めることだと思われるのですか？
- A「私はこうしろ、ああしろとは言いたくありません。・・・それに、私には娘が三人いるのですが、今日大事なものは、いい仕事に就けるように教育することだと思っています。宗教を勉強するよりもその方が大事です。私は子供たちがダティムになって欲しくありません。・・・私は、彼等が世界を合理的にみるような教育をしようと思っています。まずそれが第一で、その次に、・・・私達はここにいて、・・・ここは私達の国です。私は彼等がユダヤ人と、でもダティ（宗教的）ではない人と結婚してくれればいいと思います。」
- Q ユダヤ人でない人だったらどうですか？
- A「ユダヤ人でない人と結婚することになったら・・・わかりません。ユダヤ人の方がいいですね。・・・私達は、・・・祭日を祝っています。ロシュ・ハ・シャナやペサハなど・・・妻はコシエル（注）ユダヤ教の食事や料理法に関する規則）の食事でもまもっています。・・・私はコシエルは気にしないのですが、家では彼女のためにコシエルをまもります。・・・妻は養女で、彼女の養母はチリ生まれのキリスト教徒でした。でも彼女は改宗したので今はユダヤ人です。・・・（その養母のもとで育った）妻はコシエルをまもろうとしているので、（私はそれに協力しているというわけで）す。」
- Q あなたご自身のパール・ミツバは、あなたが望んでされたのですか？
- A「私はしたくありませんでした。でも私は、宗教的な意味ではしたくなかったのですが、パーティはしたいと思いました。父は、私が長男ということで、することを望んでいました。」途中省略「アルゼンチンから来ているユダヤ人はモロッコから来ているユダヤ人と違うことをあなたはわかると思いますが、私達のところは（アルゼンチンから来ているユダヤ人は）宗教色が少ないといえます。アルゼンチンでは、我々の親たちが学校をつくり、子供たちがそこで勉強したユダヤ・アイデンティティを持ち続けるようにします。・・・モロッコや他では子供たちをシナゴグに送ります。両方ともユダヤ・アイデンティティをまもろうとしています、やり方が違ってきます。・・・一方はより合理的な枠組みでやろうとし、他方は宗教を通してやろうとしています。・・・言い換えると、一方はアイデンティティとかレオムといった問題が重要だと考え、他方は宗教を教えるのです。それが違います。」
- Q イスラエルは国の性格を「ユダヤ人国家」と定義していますが、それについてあなたはどのように思いますか？
- A「・・・イスラエルは‘アラブ人とキリスト教徒とユダヤ人のための国’にもなりうると思います。・・・私はアラブ人を怖がる必要はないと思っています。一緒に何かをできると思います。」
- Q あなたは、世界に「ユダヤ人のための国」というものがいいと思いますか？
- A「・・・まだ必要だと思います。」
- Q どうして「まだ必要」なのですか？
- A「それは、・・・世界は、逆行するからです。・・・70年代以降の世界の動向をみていると、宗教に回帰している現象が世界中に見られます。特にヨーロッパで、ロシアやチェコスロバキア（ママ）など、ナショナリズムの動きが盛んです。ここ（イスラエル）もそうです。アラブ人もまたナショナリズムが強

くなっています。・・‘科学’が世界に光をもたらし、人々が（今と）違うように考えるまでには時間がかかります。・・・私達は産業社会を通過して、ハイテク社会に入っています。たくさんの人が失業して、お金がなく、・・・そういう状況が宗教への逆行をもたらしているのです。・・ダティームはそれを自分達に都合のいいように‘利用’しているのです。」

Q イスラエルの定義では「ユダヤ国家」であるのに、現実にはアラブ人の人もいるわけで、定義との間には違いがありますが、そのことについてあなたはどのように思いますか？

A「・・・・・・私は現実の方を探ります。・・私はみんなと一緒に暮らすことができます。・・・・・・私はその定義を変える必要があると思います。・・・・ユダヤ人でない人々にも、もっと可能性を与えなければならぬと思います。・・つまり、家を買ったり、教育にもっと予算を配分したり、居住地区に電気をひいたり水をひいたり・・・・・・」

Q 家を追われて帰れないパレスチナ人のことについてはどう思われますか？

A「・・・・・・それは大きな問題です。・・私は二つのことを考えています。一つは、私がいい人間なら彼等に帰ってきてもらう、それを認めるということです。でもそうすると、私達に問題もでてきます。もし彼等が帰ってくると、人口の問題があります。・・私は彼等がそこ（占領地）に彼等の国をつくることに賛成です。そのためにお金の面で援助することにも。そして私達はここで（今までどおり暮らし）、分かれて住んで、彼等の生活水準が上がるように援助して、その後で一緒に話し合うということです。」

Q あなたは理論的に、パレスチナ人に帰還の権利があると思いますか？

A「ここにではなく、パレスチナになら。」

Q ここ（イスラエル）に住んでいた人の場合は？

A「・・その場合は、賠償金を払うようにすればいいと・・・・」

Q あなたは、イスラエルはユダヤ人とアラブ人に同じレベルで市民権を与えていると思いますか？

A「いえ。与えていません。」

Q そのことについては、どう思っていますか？

A「それは問題だと思えます。・・・・問題です。・・（でも）我々の国は他の国とは違います。・・我々はここに来る人みんなに市民権を与えることはできないのです。どうしてかということ、もしそうしたらどうなるでしょうか？・・・・市民権をえられる国は他にたくさんあります。・・・・ここはユダヤ人の国です。・・将来それを変えるべきかどうか考える時期が来るかもしれません。でもそれは今の私の世代ではなくて、私の子供の世代です。・・少なくとも今は、（この状態を）維持しなければなりません。・・・・でも、ちょっと待ってください。・・・・もしここに我々と一緒に暮らすことを証明できるのなら、そういう人は市民権を与えられるべきです。第二次大戦中にユダヤ人を助けたアラブ人もいます。そういう人で、ここに住みたいという人は、アラブ人であれ、キリスト教徒であれ、日本人であれ、・・我々を助けようとし、ここにきて住みたいという人には、市民権が与えられなければなりません。・・それからユダヤ人と結婚する（ユダヤ人でない）人にも。・・」

Q 質問票で、あなたはご自分を「シオニストと思う。」と答えられていますが、どういう意味であなたはそう思うのでしょうか？

A「私が自分をシオニストだと思うのは、・・ここ（イスラエル）はユダヤ人がいるべきところだと思うからです。・・ここで家族を育て人間として生きることが必要だと思っています。・・私は、シオニズムとはユダヤ人の人間解放の運動だと思っています。他の民族には他の現象があります。私が人間として生きられるのはここ、この場所だけなのです。・・自分が自分自身でいられるのは・・」

Q どうしてそう思うのですか？

A「それは、・・私はアルゼンチンにいたころ、私はアルゼンチン人かユダヤ人かといつも考えていました。社会から『だめだ。あんたは、ユダヤ人だろ。』と言われると、私にはどうしようもありません。・・私はユダヤ人なのですから。・・私が（アルゼンチン社会の）一員になろうとしても、ユダヤ人ということがついてまわるとなるとどうにもなりません。アルゼンチン人なのかユダヤ人なのか・・・・・・（そしてついに思ったのは）こういう問いは止めようと、私はまず人間であり、ユダヤ人でなければならぬと思ったのです。・・（ですから）ここが自分を伸ばすことのできる唯一の場所なのです。・・」

Q 自分を伸ばすとは？

- A「働くこと、学ぶこと、家族をつくること、・・・そして子供に教育を与えることなどです。」
- Q アルゼンチンでは、ユダヤ人アイデンティティとアルゼンチン人としてのアイデンティティは同じぐらいの重みだったのですか？
- A「・・・いつも同じというのではなく、揺れうごいている感じです。」
- Q ここでのユダヤ人アイデンティティとイスラエル人としてのアイデンティティはどのような関係にありますか？
- A「私はイスラエル人ではありません。私はイスラエルの市民権はありますが、言葉は・・・」
- Q でも、私から見るとあなたはイスラエル人だと思いますが。・・・
- A「・・・いいえ。私は南アメリカ人です。私は南アメリカ出身です。」
- Q どのようにあなたは南アメリカ人なのですか？
- A「私の性格とか、人に対する話し方とか、考え方などが。」
- Q 家ではどのような言葉を話していますか？
- A「スペイン語とヘブライ語です。」
- Q スペイン語は誰と話すときですか？
- A「妻と子供達とです。」
- Q あなたは、お子さんが二つの言語を話せるようにとされているのでしょうか？
- A「はい。」
- Q その方が便利だからですか？
- A「いや。（二つが使えることは）重要だからです。・・・それに二つ話せれば、三つ目を話すのも簡単になるし、五つぐらい話せるようになるかもしれませんから。・・・まず第一に大切なのは頭（知識と教育）です。私の家では、・・・私と妻はそう考えています。」
- Q 質問票で、あなたは「世界の全てのユダヤ人は一つの民族だと思う」と答えていますが、そのことの意味を少し説明していただけますか？
- A「私の理解では、民族とは、・・・似たような習慣を持ち、共通の言語を持っている、・・・そういう人々の集団だと思います。・・・その下に、それぞれのコミュニティがあります。でも我々はみな、ペサハやロシュ・ハ・シャナがあることを知っているし、割礼をやらなければならないことも知っています。みんな、ヘブライ語やイディッシュ語やラディノ語を理解しなければならないことを知っている。・・・みんな、エルサレムが我々の町であること、アレツ（イスラエル）が我々がかつていた場所で、そこに帰らなければならない場所であることを知っています。・・・」
- Q では、ペサハやロシュ・ハ・シャナなどを全く気にしない人で、（ヘブライ語などの）言葉も知らない人でも、ユダヤ民族の一人だと思いますか？
- A「はい。なぜなら、人はそれ（民族性）から逃れられないからです。逃れられません。逃れようとしても、結局はユダヤ人です。かりに（逃れて）社会に入り込んで、その社会の一員になってそこで働いたとします。でも結局はきっと、・・・もしお祖母さんが死んだら、キパ（頭巾）をつけてお墓に行きます。それは一つの例ですが、・・・もしかして、ユダヤ人社会からでて、自由に、ユダヤ的なものをすべてなくしてしまって生きる人がいるかもしれません。でも、お母さんか、お父さんか、お祖母さんかに何かが起これば、彼はお墓に行くのにキパをつけるはずです。」
- Q 私には、ユダヤ人の家族に生まれユダヤ人として移住することを考えていたドイツ人の友人がいます。しかし彼女は移住するのを止め、その後でイスラム教徒に改宗し、今ドイツに住んでいます。あなたは彼女はユダヤ人だと思いますか？
- A「いいえ。」
- Q どうしてですか？
- A「彼女の行動を考えると、・・・『ガマルヌ（もう終わりました。もう何も言うことはありません。）』という感じです。」
- Q もし、彼女が自分はユダヤ人だと言ったらどうでしょうか？
- A「『何故？』と聞きたいですね。・・・そう言うならそれはそれで認めます。誰でも人間は自分のやりたいことをやる権利があるわけですから・・・（でも）バイト（家）に帰るのも人間の権利ですよ。」
- Q 次の質問ですが、あなたはヤド・バ・シェム（ホロコスト記念館）に何度も行かれたか？
- A「五回行きました。」

Q 最初に行かれたのはいつですか？

A 「1980年です。」

Q 訪問の前と後とで、意識の上で何か変化がありましたか？

A 「いいえ。・・・シヨアは、シオニスト運動の中ではとても重要なことでした。・・・」

Q 訪問したことは、ユダヤ・アイデンティティに何か影響を与えましたか？

A 「こういえると思います。・・・いつもそこから出てくると、・・・そこで映画とか色々なものを見た後はいつも、・・・自分の子供には絶対に起こってはならないという気持ちになります。・・・自分の子供にああいうことが起こらないためには戦争も辞さないという気持ちです。・・・とても辛いのは、あそこにある子供（の写真）や子供の靴などを見ることです。それが一番辛いです。・・・」

Q あなたは、ヤド・バ・シェムに行くことをみんなに勧めたいですか？

A 「世界中の人々の義務だと思います。・・・ユダヤ人だけでなく。・・・人を殺すというのは・・・・・・最悪のことです。・・・子供を殺すなんて・・・言葉ありません。・・・世界中の人が、何があったかを知らなければなりません。・・・二度と繰り返さないために。・・・ユダヤ人に起こったことだけでなく・・・南アメリカのインディアンにも起こりました・・・彼等を殺して・・・」

Q あなたにとって、今イスラエルの最大の問題は何ですか？

A 「ダティイムの問題です。・・・私は、宗教（への社会の流れ）をとめるために、教育と雇用にもっとお金を費やすべきだと思います。私達の社会は今非常に暴力的で、・・・常に怒鳴りあっていますよね。・・・もっと別の社会に変えなければなりません。・・・ユダヤ人の目標はこんな暴力的社会をつくることではありません。我々の伝統は、人を助けるという、もっといい社会をつくることにあります。」

Q イスラエルがまずどのような方向に進むことを望みますか？

A 「平和です。」

Q どういう平和ですか？たとえば、パレスチナ問題にはどのような展望をお持ちですか？

A 「・・・ユダヤ人とアラブ人には違いがあります。・・・アラブ社会は閉鎖的で、原始的で、指導者はマッチョなタイプで、彼が何か言うとな他の人はその後についていきます。指導者に『殺せ。』と言われれば、ヨーロッパ（にいる指導者）から金をもらってそれをポケットにしまって、人を殺しても平気という具合です。私は、パレスチナ社会がそういう社会ではなくなることを期待します。彼等が変わったなら、一緒にやっていけます。」

Q あなたは、あなたの望む方向に事態が進んでいると思いますか？

A 「いいえ。・・・いいえ。・・・いいえ。・・・アラブ人は、・・・モスレムはたいていそういう具合です。彼等は非常に疑わしいです（信じられません）。・・・彼等がそうでなくなるのはとても難しいと思います。・・・我々はここで社会を統合しようとしている点が、彼等とは違います。・・・（社会を）変える唯一の方法は、・・・工場や企業を誘致して、雇用の機会を増やし、生活水準を上げることです。・・・そうすればここでも、財布にお金があれば、『宗教は真実ではないかもしれない。』と考えるようになります。・・・働いてお金があれば、攻撃しようとしたり自爆テロをしようとするかわりに、家族について考えたり、子供の教育について考えるようになると思うのです。・・・そうであればいいと思います。」

Q あなたは、選挙で投票する政党を選ぶとき、どういう点を重視されますか？

A 「・・・私はまず第一に、社会主義者です。・・・第二に、・・・私は平和を望みますし、経済を変えることも望んでいます。・・・占領地を返還するかどうかという問題についてはあまり考えません。私が考えるのは、平和の問題と社会的な問題、とくに失業者を減らすという問題です。」

Q でも、占領地返還の問題は平和の問題と関連しているのではないのでしょうか？

A 「いいえ。占領地は私は返還しなければならないと思っています。・・・でも同時に私は政党は我々の社会を変えなければならないと思っています。」

Q どのようにですか？

A 「どのように？・・・お金のある人から貧しい人に（資源の）配分の在り方を変えるということです。・・・彼等（貧しい人）に教育ともっと仕事を与えること、・・・それから宗教色を少なくするように社会を変えることです。」